

マッシュを「先輩」と呼びたいだけの人生だった

あんだるしあ（活動終了）

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※立場逆転ものです。マシユが「先輩」、ぐだ子が「後輩」です。

※ぐだ子の性格が著しく暗いです。

※先輩マシユは敬語でなく女言葉で話します。

あの瓦礫の中。瀕死の傷を負ったのはマシユではなく、マシユをカ
ルデアで唯一「先輩」と呼び慕う女の子だった。マシユは死にゆく女
の子のそばで名を呼び続け、そのまま彼女たちは冬木へ。——そして
少女たちのグラウンドオーダーは始まった。

※イラストは友人のかめやま様 (<https://www.pixiv.net/members/illustrationid67537934>) に依頼してお描きいただいたものを使用しております。

目次

覚醒―人理の礎―

冬木 1 | 1

冬木 2 | 6

冬木 3 | 10

冬木 4 | 15

冬木 5 | 19

冬木 6 | 25

冬木 7 | 30

初陣―今は脆き雪花の壁―

オルレアン 1 | 33

オルレアン 2 | 41

オルレアン 3 | 47

オルレアン 4 | 51

オルレアン 5 | 55

オルレアン 6 | 59

オルレアン 7 | 65

オルレアン 8 | 69

オルレアン 9 | 75

オルレアン 10 | 81

オルレアン 11 | 89

乱世―時に煙る白亜の壁―

セプテム 1 | 95

セプテム 2 | 101

セプテム 3 | 106

セプテム 4

113

セプテム 5

117

セプテム 6

123

セプテム 7

128

セプテム 8

133

セプテム 9

140

セプテム 10

145

セプテム 11

150

航海―誉れ堅き雪花の壁―

オケアノス 1

154

オケアノス 2

159

オケアノス 3

163

オケアノス 4

168

オケアノス 5

175

オケアノス 6

181

オケアノス 7

187

オケアノス 8

193

オケアノス 9

198

オケアノス 10

204

オケアノス 11

208

オケアノス 12

213

オケアノス 13

218

オケアノス 14

224

オケアノス 15

231

オケアノス 16

236

発覚―奮い断つ決意の盾―

ロンドン 1

ロンドン 2

ロンドン 3

ロンドン 4

ロンドン 5

ロンドン 6

ロンドン 7

ロンドン 8

ロンドン 9

ロンドン 10

ロンドン 11

ロンドン 12

ロンドン 13

ロンドン 14

混迷―暖かな木漏れ日の君―

アメリカ 1

アメリカ 2

アメリカ 3

アメリカ 4

アメリカ 5

アメリカ 6

アメリカ 7

アメリカ 8

アメリカ 9

241

248

254

262

268

274

280

286

291

298

304

310

316

324

328

336

343

348

352

358

364

370

376

キヤメロット17	キヤメロット16	キヤメロット15	キヤメロット14	キヤメロット13	キヤメロット12	キヤメロット11	キヤメロット10	キヤメロット9	キヤメロット8	キヤメロット7	キヤメロット6	キヤメロット5	キヤメロット4	キヤメロット3	キヤメロット2	キヤメロット1	真価—いまは遙か理想の城—	アメリカ16	アメリカ15	アメリカ14	アメリカ13	アメリカ12	アメリカ11	アメリカ10
534	525	519	513	507	501	495	489	483	476	466	459	452	446	440	434	426		421	416	409	401	396	387	380

キ ヤ メ ロ ツ ト 2 2	キ ヤ メ ロ ツ ト 2 1	キ ヤ メ ロ ツ ト 2 0	キ ヤ メ ロ ツ ト 1 9	キ ヤ メ ロ ツ ト 1 8
565	558	552	546	540

覚醒―人理の礎―

冬木1

「デインドラン」

ずっと呼んでいる。さびしくて、切なくて、ずっとずっと呼んでいるの。

ここは、人理保障機関カルデア。

今日はオルガマリー・アナムスフィア所長直々の指揮の下、特別な任務が行われる。

――ファーストオーダー。人類史に生まれた微細な特異点へレイシフトし、現地である2004年の冬木市を調査し、これを修復する。参加調査員であるマスター適性者は、わたしも含めて48人という大所帯。

その大事な任務の日に、わたしは体調不良を起こしてしまった。ブリーフィングは無理でもせめて現地への出発に間に合うように。主治医であるドクター・ロマンの医務室でメデイカルチェックを受けて、チーム制服に着替える間も惜しんで急いで中央管制室へ走った。中央管制室のドアが見えた所で、廊下が大きく揺れて弾んだ。わたしは上手く踏み留まらず、廊下でこけた。

「いたた……警報――？」

レッドアラーム
赤色灯が鳴っている。緊急事態だ。

起き上がる前、床を這ってくる白い煙にわたしは気づいた。噴煙の匂い。それに、妙に暑い。

わたしは思い切って中央管制室に飛び入った。

愕然と、した。

管制室は無残な有様だ。床が抉れ、天井が剥がれて瓦礫が散乱している。衝撃で溶液から抜けたコフィンのいくらかはヒビだらけ。

こんなんじや、生存者なんて――

「フオウ、フオウ！」

この声は、カルデアではわたしにしか懐いていないモコモコ生物、フオウさんの鳴き声だ。

鳴き声が聞こえたほうへ進むと――少女がいた。

瓦礫に潰されて上半身しか見えない。押し潰されて逃げられないでいる。

わたしはその彼女に駆け寄って、顔をよく見るためにしゃがんで、愕然とした。

「あ、れ？ マシユ先輩、だ」

このカルデアで唯一わたしを「先輩」と呼ぶマスター適性者。

「リカさん……」

ぼんやりした表情のリカさんと裏腹に、床に広がる血だまりはどうしようもないデッドラインを告げている。

わたしは手をパーカーの袖で覆って瓦礫を持ち上げようとしたけれど、とても、16歳女子に持ち上がる重さじゃない。早々に息切れしてしまった。

「先、輩。いい、から。にげ、ないと、隔壁、が――、あ」

彼女はカルデアスを見上げたので、わたしも釣られて見上げて、二度目の愕然。

カルデアスが、真っ赤に染まる、なんて。

呆然としている間に、中央管制室の隔壁が無慈悲に閉まった。

「せん、ぱい」

弱々しい声がわたしを呼ぶ。

「なまえよんで、ほしいです。さんづけしないで、よびすてで」

この、子は。

生きているだけでも間もなく消えてしまう灯火を、わたしに名を呼ばれたいなんて、ささやかなお願い事に使った。

その心意気に応えないで、何が「先輩」か。

「リカ。大丈夫、リカ。わたしが付いてる」

こんな空返事しか言えない、無力な先輩を、許して。

せめて最期までそばにいるから。名前を呼び続けるから。リカ、リカ――

目を覚ました場所は、廃墟だった。しかもただの廃墟じゃない。街全体が大火災の真っ只中だ。こんな場所に転移してよく無事で――はっとした。あの時一緒にいたリカはどうなった？

幸いにもリカはすぐ近くの道路に倒れていた。安心してリカに手を伸ばして、その腕が普段から見慣れた色をしていないことに違和感を覚えた。

腕だけじゃない。太腿も腹部も背中も肩も。今のわたしは少女用にチューンナップされた甲冑を着ている。右手には、意識するまで気づかなかった、甲冑と同じ色の大盾を握っていた。

「君にあげよう。僕の盾も魂も想いも。だから――」

ああ、そうだった。

10年前。わたしがまだ6歳だった頃。わたしは一つの特異な施術を受けた。

英霊融合。デミ・サーヴァント実験。

6歳のわたしには目覚めなかった力なのに、何故か今になって目覚めた。

しかもサーヴァントとしての契約のパスは、倒れたりリカと繋がっている。確かに感じる。リカはわたしのマスターだ。

「フオウ!!」

っ、殺気!?

霊基が戦い方を知っている。体が自然と動いて、一定方向へ盾を突き出した。

直後、赤く鋭い狙撃が雨あられと振って来て、盾にぶつかった。

事前資料を思い出す。――特異点F、冬木市。2004年。ここで

は聖杯戦争と呼ばれる大魔術儀式が執行された。

七騎の英霊を召喚し、魔術師がサーヴァントとして使役して戦い合わせるバトルロワイアル。勝ち残った一組にのみ、万能の願望器・聖杯が与えられる。

この攻撃はサーヴァントによるものだど、わたしの霊基が告げている。この狙撃は、明らかに、わたしではなくマスターのリカが狙いだ。わたしは攻撃がやんだ隙間を狙って、乱暴にリカの体を肩に担いでビルの陰に隠れた。

ここからどうするか。建物の陰を縫って進むのは簡単かもしれないが、そもそもわたしたちには確固たる目的地がない。どの方向に逃げれば安全かも分からない。

「う……」

「リカ！ 目が覚めた？ 怪我は大丈夫？」

「マシユ、先輩？ あれ、あたし、生きて……」

リカの体を慎重に地面に降ろした。

そう、だ。あんな大怪我をしたはずなのに、リカは無傷だ。制服に血糊一つ付いていない。

フオウさんがリカの膝に飛び乗って、リカの頬にふさふさした毛を擦り寄せた。

「あの、先輩。ここは……？ あたし、管制室にいたんじゃない？」

「そうね。そこから説明しないとね」

完全に余談だが、わたしの口調はリカに対してのみこういうふうに砕ける。リカが、敬語なしで話してほしい、といっただったか言ったからだ。

「落ち着いて聞いて、リカ。ここはわたしたちがレイシフトする予定だった、2004年の日本の冬木市で……」

「フオフオウ!!」

っ、またあの赤い狙撃！

「ごめんね、リカ！ ちょっとだけ待って！」

「え？ ——きやああああ!!」

盾を斜め80度に構えて赤い絨毯爆撃をやり過ごそうとした。

ちらりと見下ろすと、リカは事態に付いて行けてないで、涙目でわたしの背中にしがみついている。

——どこのどいつか知らないが、わたしを「先輩」と呼び慕う女の子を、泣かせた。

ついに、わたしは——キレた。

「わたしの後輩に、手を——出すなああああ!!」

コンクリートを抉る勢いで盾を突き立てた。盾の面積は見た目より広く、降って来る矢の尽くを防いでみせた。

ようやく矢の雨は止んだ。

冬木2

わたしは深く長く息を吐いてから、盾の構えを解いた。

「先、輩……あの」

「もう、大丈夫。どうしたの？」

「腰…抜けて…た、立て、な、くて」

ああ、そうだった。リカはそういう、恐がりな女の子だ。知っている。

わたしは苦笑して、リカの両脇に腕を入れて、ほぼぴったり抱き着いて、リカの体を立ち上がらせた。

「すみません。…」迷惑を……」

「気にしないで。わたしはあなたの『先輩』なんだから。後輩が困ったら助けるのは当たり前」

立ち上がって目線の高さを合わせてから、わたしは改めて事情をリカに説明した。聞く内に、リカは苦しげに、俯く角度を深めていった。

——きやああああああっ!!

女性の、悲鳴？ こんな炎上都市で人を襲うモノなんて、十中八九ろくなものではない。悲鳴の主の身の安全が危うい。助けに行かなければ！

わたしはリカをふり返って、わたしと同じくらいの体格の体を抱き上げた。

「せ、せんぱい？」

「悲鳴があった方向に駆けつけるわ。落ちないようにぎゅっと掴まっ
てて」

リカは返事せず、わたしの首っ玉に両腕をきつく巻いた。軽い。

わたしはリカを抱えて脱兎のごとく国道を駆け出た。

——視えてきた。大量の首のない骸骨が集団で剣を手にして、逃げる女性一人を追い立てている。あれ？ まさか、あの女性は——オル

ガマリー所長!?

所長がコンクリートの亀裂にヒールを引っかけて転んだ。骸骨兵団はそこを逃さず、無慈悲に石の剣や槍を向けて揮った。

「たすけて、レフ……!」

わたしはリカを下ろしてすぐ、オルガマリー所長に武器を向けた骸骨兵一列を、盾の跳弾力を利用して横からぶつかることで一掃した。

まだ骸骨兵団には残党がいる。この場で殲滅しなければ。わたしはがむしやらに盾を振り回した。

骸骨兵の全滅を確認。これでここも、ほんの少しの時間だけど余白ができた。

所長はわたしに、これはどういうことだと尋ねてきた。わたしは、ここが2004年の冬木市であると回答した。それから、わたしがデミ・サーヴァントとして覚醒したことも申告しようとしたが、所長はすでに気づいていた。

「わたしが聞きたいのは、どうして今になって成功したかってことよ!」

オルガマリー所長が立ち上がる。

そこで、リカが目線を下にやっってから、おもむろにしゃがんだ。

「所長。膝、擦り剥いてます。ちよつと失礼、します」

リカがオルガマリー所長の膝に手を当てて、少しして離れた。所長の擦り傷は綺麗に無くなっていった。

「その手の令呪……あなたがマシユのマスターになった子?」

「は、はい。そうみたいです。すみません」

「何で謝るのよ」

「ご、ごめんなさいっ」

「まったく。半分とはいえ英霊を従えているんだから、毅然としなさい。アナタ、名前は」

「リカ……じゃなくてっ、藤丸立香——です」

オルガマリー所長が自身の手首の端末を操作して、データを検索した。所長が開いたのは、リカのプロフィール画面だ。

「藤丸立香……マスター適性者Aチーム、番号は……2番？ 次席じゃない。でも外部採用の一般枠か——ふうん。実力だけでナンバー2を獲ったんだ」

リカは固唾を呑んでオルガマリー所長の反応を窺っている。可哀想なくらい顔色が真っ青だ。こういう時、「先輩」は何と言えいいのか——

不意に、今度はリカの着けた端末にコールがあった。

「ひゃ!? え、ええと、えっと」

リカはもつれる指でどうにかこうにか端末の通信スイッチを押した。

《もしもし!? 聞こえるかい!?》

「ドクター・ロマン?」

わたしは通信の向こう側にいる人を知っている。ロマン、というのは愛称で、本名はロマニ・アーキマン。医療セクションのトップであり、わたしという要経過観察対象の主治医でもある。

《マシユ! キミもレイシフトに巻き込まれたのか。コフィンなしで、よく意味消失に耐えて……》

「何でアナタが仕切っているの、ロマニ!?!」

オルガマリー所長がリカの、端末を着けたほうの手首を掴んで、自身の口元に持って行った。

《うわああ!?! 所長!?! 生きていらしたんですか!?!》

「どういう意味よ! 何故アナタがその席にいるの! レフはどこ!」

《——レフ教授は、あの爆発の中心にいました。生存は絶望的かと……》

「そ、んな」

所長はリカの手首を離して、俯いて肩を震わせ始めた。

《ボクが作戦指揮を任されているのは、ボクより上の階級の生存スタッフがいなかったためです。コフィンに搭乗していたマスター適性者たちも、全員が危篤状態で——》

「ふぎけないでツ! すぐに凍結保存に移行しなさい! 死なせない

のが最優先よ！」

《し、至急手配します！》

通信が切れた。

リカは大きく息を吐いて、所長に掴まれたほうの腕を抱えるようにして下ろした。

冬木3

次の通信もまたリカの通信端末に届いた。

わたしは、リカの端末からドクター・ロマンの声が聞こえてすぐ、リカの手首から端末を外して、オルガマリー所長に差し出した。

「ちよつとロマニ。何で直接私のほうに繋がらないのよ」

「いや、こちらも所長に通信しようとしたんですが、何度試してもエラーでして。仕方なくリカ君のほうに……」

「故障かしら。まあいいわ。それで？ 現状は」

所長がドクターと、カルデアの状況について話し合いを始めた。

わたしは、リカと一緒に一歩引いて、待った。

「先、輩」

リカはわたしと目が合うと、怖じるように顔を逸らして、俯いて、両手を強く握り合わせた。

「さ、さつき。その、ま、守ってくれて、ありがとうございます、ます」

リカはそれだけ言うと、わたしに背を向けた。照れている、のとは違う。この子は怯えている。わたしが気分を害していたらどうしよう、と、本気で怖がっている。

——初めて会った日からこの子はそうだった。自分の何気ない一言や態度が、全てマイナスに働くと思ひ込んでいる。そんなことないのに。見ていて痛々しいよ、リカ——

「ではこれより、藤丸立香、マシユ・キリエライトを探索員として、特異点Fの調査を開始します」

オルガマリー所長は通信を切って、端末をリカに突き出した。返された端末を、リカは恐々と受け取って、自分の手首に着け直した。

「所長。よろしいのですか？ ここで待機して救助を待つという案もありますか？」

「——今回のことで、協会からどれほど抗議があるか。手ぶらでは帰れない。連中を黙らせるだけの成果を持ち帰らないと。悪いけど付

き合ってもらおうわよ、アナタたち」

わたしは了解した旨を答えようとして——全身に走った鋭い予感に、盾を握って踵を返した。もう教えられなくても分かるようになった。

「先輩？」

わたしはリカの手を取った。

「所長。サーヴァントの気配を感知しました。今すぐここから離れましょう！」

リカも所長も顔色を蒼白にした。

わたしはリカの手を引いて走り出した。

この中でサーヴァントの気配が分かるのはわたしだけ。つまり、今まさに迫りくる脅威から、正しく逃げるべき方向が分かるのもわたしだけなんだ。

だったら、本当は足が竦んでいたって、わたしが先頭を走らないと。とにかく急いで、走って。

わたしたちは大きな川に架かる大橋の下へ出た。

そこでわたしたちは足を止めざるをえなかった。まるで逃げるわたしたちを捕らえるように、幾条にも鎖が張り巡らされていたからだ。

何にせよこの鎖をどうにかしないと進めない。

わたしは息を呑んで鎖に触れようとした。

「先輩……」

リカが急にわたしの腹に抱きついた。わたしは後ろに引つ張られて、リカと纏れるように尻餅を突いた。

鎖がうねった。リカが止めていなければ、伸ばした手を鎖に絡め捕られていただろう。

堤防の上から女の声があった。

「残念。新鮮な獲物を逃がしてしまいました」

フック状の刃をした鎌を持った長髪の女。気配で分かった。アレはサーヴァントだ。得物が鎌なら、クラスはランサーだろうか？ いえ、騎乗の逸話がある英霊なら武器が何であっても関係ないから、ラ

ライダーという線もある。

きつと（仮称）ライダーの後ろの石像は、ライダーに石にされた人たちだ。

どうあれこの状況で撤退は難しい。ならば。

「戦うしか、ない」

「戦う、って。アレと？ 先輩、が？」

盾を構えてじりじりと前に出る。

本音を言うのと逃げ出したいくらい怖い。わたし一人だったらきつと逃げ出していただろう。

だけど今は、わたしの後ろに、わたしを先輩と呼び慕った子がいる。「アナタ、サーヴァントとして戦うのは初めて？ なら先輩として教えてあげる。言動には注意しなさい。戦うと宣言した以上——行為はもう始まっているのですから！」

ライダーは一瞬でわたしの懐に潜り込んだ。

幸いにして初撃は盾で防ぐのが間に合った。これがライダーの出力水準なら、この盾は受け流せる。現に次に来たライダーの突きも薙ぎも、防げた。

問題は攻撃手段だ。

剣——出そうと思えば出せる……気がする、何となく。

でもきつと通用しない。わたしと融合した“彼”のクラスはエクストラ、シールド。剣や槍が得意ならセイバーやランサーが基本設定になるはず。そうならなかった時点で攻撃力は見込み薄だ。

無茶でもこの盾を武器に攻めなくちゃ。

「やあああああっ!!」

盾の面に威力を載せての、肩からのボディアタック。

ライダーを下がらせることには成功したが、ライダーはそのまま跳んで鎖の上に着地してしまった。ダメージが入った様子がまるつきり無い。やっぱり盾での攻撃には無理があったか。

「わたしじゃ敵わない——リカ、逃げて!!」

「できませんっ!」

リカ……!?

「先輩、管制室であたしを置いて逃げなかった！ だからあたしも絶対、先輩のこと置いて逃げたりできないよ……！」

あなたは、何て——

「いいガッツだ。小娘は小娘でも、それなりの兵^{つわもの}じゃねえか。ならほっとけねえな」

「何者?！」

「何者って、見れば分かるだろ、ご同輩」

「貴様——キャスター！」

向こうの堤防の上に、またサーヴァントの気配。空色のローブを纏った青毛の男性がいた。助けて、くれるの？

彼は空中にいくつもの文字を描いた。

あれはルーン文字だ。文字そのものが魔術的意味を持つ、攻防一体の神秘。わたしはルーンを学習しなかったから意味までは読めないけど。

キャスターさんのルーンは全てが光弾へと変じてライダーを撃つた。

わたしは反射的に盾を構えて、着弾の余波からリカと所長を庇った。

「オレはキャスターのサーヴァント。故あって奴とは敵対中でね。敵の敵は味方ってわけじゃないが、今は信用してもらっていい。構えな、盾のお嬢ちゃん。腕前はともかく、度胸じゃアンタは負けてねえ」
不思議と、キャスターさんの言葉は腑に落ちて、わたしを奮わせた。

「せんぱい……」

「大丈夫——待ってて」

リカは泣き出しそうな顔を、くしゃりと、精一杯の笑みの形に結んだ。

命令がなくても。指示がなくても。激励がなくても。約束がなくても。わたしには、怖がりなあなたがなけなしの勇気で作った笑顔で、充分だよ。

わたしは盾を手に堤防を駆け上がった。

石像の合間を縫って、ライダーとキャスターさんは戦っている。い

や、あれは。キャスターさんが防戦一方だ。あの猛攻の中では詠唱の隙がない。普通ならそう思うけど。

「お嬢ちゃんッ!!」

わたしは疾駆して、キャスターさんを庇う位置に割り込んで、盾でライダーの鎌を真つ向から受け止めた。

「ルーンに詠唱なんざ要らねえんだよ。学び直してきな!」

再び。キャスターさんがいくつものルーン文字を中に描いて、それらを光弾としてライダーへ放った。

広場の中心に巨大な爆発。

煙が晴れて、果たして、そこにライダーの姿はなかった。

敵はもういない。脅威はひとまず去った。そのことを実感していくにつれて安心感で足元が危うく――

「先輩ッ!!」

まるで見透かしたようなタイミング。いつのまにかリカがわたしの前まで駆けて来ていて、わたしの胸に飛び込んだ。

わたしの背中に回ったリカの両腕は、きつくて、震えていた。

怖がらせてしまったことが申し訳なくて、わたしはそつとりカの両肩に手を置いた。

「もう大丈夫だから。怖いことは終わったから」

「本当、に……? 先輩、どこも怪我してない? どこにも痛いところ、ない?」

わたしは認識違いをしていた。

この子が怖がったのは、目の前でくり広げられた殺し合いではなかった。この子は、わたしが傷つくことを恐れていたんだ。わたしみたいな人間のために、心を不安に切り刻まれて。それでも、一切口出ししないで、わたしの生還を信じて待っていた。

ああ――今、深く、実感した。

リカは、わたしの、本当に大切な「後輩」だ。

冬木4

キャスターさんはわたしたちに教えてくれた。この冬木が今、どんな異常な場所なのか。

聖杯戦争があつた。キャスターさんやさつきさんの鎌の女ランサー（恥ずかしいことに仮称とはいえライダークラスというのはわたしの読み違いだった）、それにあと5騎のサーヴァントが、万能の願望器・聖杯を巡って争つた。

その大前提が、ある時、一夜にして崩れた。

突然の大火災。住人の消失。

聖杯の汚染と、聖杯から湧き出た黒泥に冒されて反転したサーヴァント。

第一の被害者はセイバーのサーヴァントだった。黒化したセイバーは、キャスターさんを除く5騎を屠り、自らと同じくサーヴァントたちを黒泥によって汚染した。

現時点で、泥を浴びず、正気を保っているのはキャスターさんだけ。

「セイバーを退けて、聖杯とやらをどうにかすれば、特異点Fの異常も収まる見込みがあるかもね。それで、居場所は分かつてるの?」

キャスターさんが見上げた先は、民家の集落より遙か向こうの遙か上。連なる山。

「奴は汚染された大聖杯の前に陣取ってる。——この土地の心臓を、守ってやがるのさ」

わたしたちは火の手が弱まった、それでも瓦礫でとても道らしい道ではない地面を歩き出した。

目指すは、キャスターさんが示した山の、地下。

大聖杯はそこに巢食っていて、それを守るため地下空洞の奥にセイバーと、セイバーを守るべくアーチャーのサーヴァントが控えている。

アーチャーはキャスターさんが相手をして引き離すから、わたしは迷わずセイバーのいる大聖杯を目指せ、との頼もしい言質をキャスターさんから頂いた。

「その時代の事情には深く関わらねえ。あくまで兵器に徹する。サーヴァントの鉄則だ。アンタらの目的はこの異常の調査。オレの目的は聖杯戦争の幕引き。利害は一致してるんだ。お互い陽気に手を組もうや」

道路が陥没したせいで段差になった地面。上の無事な道路に登れないオルガマリー所長に、キャスターさんが手を差し出した。

「合理的な判断ね」

キャスターさんは所長の答えに満足行ったらしく、所長の手を掴んで一息に彼女を上へと引つ張り上げた。というか、持ち上げた？

「にしても珍しいな。アンタ、マスター適性がないのか」

頭上から、所長の怒声とキャスターさんの快活な笑い声が聞こえた。

——カルデアに限らず有名な噂話だ。所長、オルガマリー・アニメスフィアは若くして名門ロードの当主となった一流魔術師であるが、サーヴァントを従える才能だけがない、と。それを理由に陰口を叩いていた人たちがいることを、わたしでさえ知っている。

でも、キャスターさんのように、そのことを真つ向から指摘して爽快に笑い飛ばすなんて、わたしにはとても真似できない励まし方だ。気持ちを切り替えよう。せめてわたしも、わたしがやるべきことをこなさないと。

わたしも道路に登って、下に残したりカ(肩にはフォウさん)を、苦戦しつつも引つ張り上げた。

「ありがとうございます、先輩……あ」

不意打ち気味に、リカの指先がわたしの頬に触れた。

「顔色悪い、です。大丈夫です、か？」

そういえばリカは他人の不調にはもっぱら目端が利いたっけ。

「——あのね、リカ。わたし、まだ、宝具の使い方が分からないの」
リカが何かを答えるより先に、オルガマリー所長が大きく溜息をつ

いた。

「そうじゃないかと思っただわ」

「申し訳ありません」

「アナタだけの責任じゃないわ。マスターが優秀であれば、契約したサーヴァントを解析できるはずなんだから」

リカが胸の前で両手を白ばむほど強く握り合わせた。

「……すみません。あたしがマスターとして至らないから、先輩が宝具を使えないんですよね。あたしみたいな能無しが先輩のマスターになつちやっただから……」

「そう決めつけないで。マスターとしての才能があろうがなかろうが、わたしは確かにリカのサーヴァントだよ」

それにそもそも、さつきも所長が言ったけれど、リカは48人のマスターを退けて次席を勝ち取った実力派マスター。能無しわけがない。パスを通じてわたしに流れ込むリカの魔力はこの上なく潤沢なんだから。

「ありがとうございます——マシユ先輩はやっぱ優しいです」

あなたも充分優しい子だよ、と言ってあげたほうがいいだろうか？

「先輩」として。「先輩」らしく。

迷う間に、キャスターさん、それに所長が再び歩き出してしまったので、わたしは何もリカに言えずに進むしかなかった。

「それより、大事なことを聞いていなかったわね。アナタ、セイバーの真名は知っているの？ 何度かやり合ったような口ぶりだったけど」「ああ、知っている。奴の宝具を食らえば誰だってその正体に突き当たるからな。——奴の真名は、アーサー王。騎士の王と誉れ高き聖剣の担い手だ」

——どくん、と。

わたしでない何者かの鼓動が、わたしの内側で、強く打った。

アーサー王。輝けるブリテンの騎士王。あの御方と戦う？ 僕

「が？」

ふと、盾を持っていないほうの腕に、他者の体温を感じた。

リカが両手でわたしの腕に両手を軽く取って、心配げにわたしを見つめていた。

……あれ？　今わたし、何を考えたんだっけ……

「先輩——」

「ごめんなさい。ちょっと考え事して、ぼうつとしちゃっただけだから」

「そう、ですか……痛いとか、悪いとか、あつたら、い、言ってください。あたし、がんばって治しますから」

リカが最も得意とするのは治療魔術だ。特に「外傷を跡形もなく消す」点に関して、この子は、魔術協会から派遣された適性者たちより頭一つ抜きん出ている。

自信を持って、胸を張っていいことなのに。

リカはいつも俯いて、長すぎる亜麻色の髪で顔色を隠して、自分は大それた人間じゃないから見ないで、と態度で語っている。

「ありがとう」

「！　は、はいっ！」

よかった。リカ、笑ってくれた。

よし。わたしもよくよくするのはやめだ。怖がりの後輩ひとり護れないで、「先輩」だなんてただ呼ばれているわけにはいかないものね。

冬木5

鬱蒼とした登山道をどうにか登りきって、わたしたちはついに、大聖杯のある地下空洞へ繋がる洞窟前に辿り着いた。

オルガマリー所長によると、洞窟というよりは地下工房らしい。半分は天然だが、半分は人工。魔術師が長い年月をかけて造り上げた儀式場。

ふいに、リカの肩に乗っていたフォウさんがふり返り、威嚇態勢を取った。

わたしもリカも、オルガマリー所長とキャスターさんも、後方を顧みた。

——岩の上に男性がひとり立っている。くたびれた赤い外套。色素の薄まった髪、黄鉛色の目。分かる。大橋の下で戦った鎌のランサーと同じ、汚染されたサーヴァントなんだ。

わたしは急いでリカを背にして盾を地面に突き立てた。

キャスターさんが泰然と、わたしたちより前に出た。

「相変わらず聖剣使いを守ってやがんのか、アーチャー」

「つまらん来客を追い返す程度の仕事はするさ」

「要は門番じゃねえか。何からあのセイバーを守ってるか知らねえが——ここらで決着つけようや！」

キャスターさんは不可視の速度で宙にルーン文字をいくつも刻んだ。

文字は炎弾へ。全弾がアーチャーのサーヴァントの足場に的中した。

「今の内に行け!!」

わたしは後ろにいたりリカの手を掴んで、洞窟の中へ駆け込んだ。フォウさんも、オルガマリー所長も、もちろん一緒だ。

——奥へと走りながらも、迷いはまだ胸に蟠っている。それでもセイバーのサーヴァントとの戦場に向かって進めたのは、迷いより、リカの前では「先輩」らしく振る舞いたい気持ちが上回ったからだだった。

わたしたちが出たのは、本当に「空洞」だった。

あまりにも広く、高い、果てのない空間。

そびえ立つ絶壁の祭壇からは、ほの明るい魔力が煙のように滲み出していた。あれが大聖杯——

「ほう。面白いサーヴァントがいるな」

——また、わたしでない何者かが、わたしの中で愕然とした。

黒く濁った甲冑。色褪せた金髪、蟬のような肌色、黄鉛色の眼。あれほどに燦然としていた騎士王の、穢された姿。あれがあのアーサー王だなんて……

「盾、か」

アーサー王が大聖杯の頂から跳び下りた。わたしと同じ地平に立った。

「構えるがいい。名も知れぬ娘。その護りが真実か——」

——震えてなんかいられない。怖がつてなんていられない。わたしはデミだけどサーヴァント。サーヴァントならマスターを守らなければ。

「この剣で確かめてやる」

開戦は、わたしが盾を構えたのとほぼ同時だった。

セイバーが聖剣を持ち上げては振り下ろす。その斬撃が、盾を通して両腕に伝わった。

何て、一撃一撃が、重い。まるで鉄柱を絶え間なくぶつけられているみたい。

「くあ——！」

しまった。受け流しそびれた。

盾が手から離れて転がった。わたし自身の体も弾き飛ばされて土

に叩きつけられた。叩きつけられた衝撃ももちろんだけど、体中が砂利で擦り剥けて痛い。

起き上がれないまま、アーサー王を見上げた。

果たしてわたしなんかが本当に、かの王に勝てるのか——

「先輩ッ！」

悲鳴が聞こえた。リカの呼び声だ。

——立て、マシユ・キリエライト。

負けられない。これ以上みつともないとこ、リカには見せられないし、見せたくない。だってわたしはリカの「先輩」なんだから！

ほとんど這いずるようになりながらも、どうにか盾を掴み直して、立ち上がった。

アーサー王が聖剣を大きく掲げた。

聖剣の刀身に集束する、莫大な闇色の極光。栄光も誉れもないその輝きを見て、わたしでない何者かがわたしの中で嘆いている。

「耐えて、マシユ……！」

分かっています、所長。全力で耐えるつもりです。わたしが踏ん張らないで誰が二人を守るんですか。

「エクスカリバー・モルガン約束された勝利の剣——!!!」

斬撃なんてものじゃない。圧倒的な質量を持った黒い光の渦が、わたしを呑み込むべく迫ってくる。

盾。そう、この盾を前に。防いで。護って——

重、い……!!

さつきまでの斬撃のラツシュが可愛く思えてくる重圧と重厚の、反転極光の束。

いくらこの盾が聖剣の光を通さないとしても、盾を支えるわたしの体が保たない。ああ、もう、意識が——、——

……温かい？

誰かがわたしを後ろから抱き締めている。他人の体温が背中に広がっていく。

「先輩。すぐ楽にしてあげますからね」

「リカ……?」

蓄積していた全身の擦り傷の痛みが消えていく。立つのがやっとだった足に活力が戻ってくる。体の重さからさえ解き放たれて、感じるのはリカの体温だけ。安心する。パワーをくれる。

——戦える。わたしは、まだ、戦える!

「頼りないところ見せてごめん。もう大丈夫。——あなたの先輩を、信じて」

「はい……っ」

リカと寄り添っている限り、わたしに敗北の未来は、無い!

盾よ、お願い、開いて。リカを、所長とフオウさんを護るため、人の礎をここに築いて——!

わたしの願いに応えるように、盾を基点に白亜の守護円陣が展開した。

これは壁——城壁? いいえ、この際何でもいい。脆くてもいいから、今はわたしの護りに変わって!

「っはあああああッツ!!」

白亜の壁は黒い極光を反射して、アーサー王へ逆に浴びせられた。

息切れが激しい。酸素が欲しくて二酸化炭素を吐き出したくて、短いスパンで呼吸をくり返した。

「あ——」

「リカ!」

後ろで頰れたリカの体を、わたしはとっさに片手で抱き留めた。

アーサー王が二度目の聖剣解放の態勢に入った。

上等。片腕だろうがこの盾を支えてみせる。もう片方の腕にいるのは、他の誰かならともかくリカなんだ。わたしの後輩、わたしのマスターなんだ。

負けない。絶対負けない——!!

「約束された勝利の——！」

『我が魔術は炎の檻。炎のごとき緑の巨人。因果応報、人事の厄を清める森』

次の瞬間、わたしたちの横を駆け抜けた、空色の人影。

「——よくぞここまで持ち堪えた」

キャスターさんがわたしたちとアーサー王の間に立って、杖を振りかざした。

「倒壊するのは、灼き尽くす炎の檻——」

アーサー王の足元に火が魔方陣となって燃え上がった。

出現したのは、大木でその身を編み上げた巨人。

木の巨人は、足場を崩したアーサー王を片手に掴むと、自らの胴体に当たる部位でもある檻にアーサー王を放り込み、そのまま倒壊。大炎上した。

これが、宝具の真名解放の正しい威力。これが、正しいサーヴァントの実力。

わたしは言葉もなくキャスターさんの背中を見ているしかなかった。

——火と煙が晴れた。

アーサー王は一見して健在だったが、足元から、剣先から、徐々に金の光と化して消滅していつている。

「護る力の勝利か。なるほど。穢れなきあの者らしい——結局私ひとりでは、どう足掻こうと、運命は同じ結末を迎えるというわけか」

「どういう意味だ、そりゃあ。テメエ何を知ってやがる」

「いずれ御身も知ろう。アイルランドの光の御子よ。グランドオーダー——聖杯を巡る戦いは、まだ始まったばかりだということな」

「おい待て！ そりゃどういう——」

キャスターさんに答えるより早く、アーサー王の姿が完全に消失した。

キャスターさんもまたアーサー王のように、指先から光の粒子に

なつて消え始めている。

「ちっ——嬢ちゃん方。あとは任せた。次があるんなら、そんな時やラ
ンサーとして呼んでくれ」

どこまでも悲壮感のない爽やかな別れだった。

——彼ら2騎の消滅をもって、わたしの初めての戦いは、一応の勝
利を収めて終わった。

冬木6

わたしたちの勝利——

実感が湧かずに突っ立っていると、リカの手首の通信端末が鳴った。ドクター・ロマンからだ。

《よくやってくれた！ マシユ、リカ君。どうやらそこは映像が繋がらなくて、喜ぶキミたちを見られず残念だが》

日常の象徴である声を耳にして、ようやく実感した。

わたしもリカも生き延びることができた。これは本当に奇跡的なことなんだ。

《所長。これでようやく安心して……所長？》

オルガマリー所長は離れた場所で苦い顔をしていた。

「グラントオーダー……どうしてあのサーヴァントがその呼称を知って……」

わたしはリカと一緒に所長に歩み寄った。

わたしが所長に呼びかけると同時に、フォウさんがリカの肩に飛び乗った。

「よくやったわ。マシユ、リカ。——マシユ。未熟でもいい。仮のサーヴァントでもいい。そう願って盾を開いたのね」

「はい」

「アナタは真名を得ても、英雄そのものになる欲が微塵もなかった。だからきつと宝具もアナタに応えたのね。あーあ。とんだおとぎ話。

——でも真名なしで宝具を使うのは不便でしょ？ いいスペルを考えてあげる。そうねえ……『ロード・カルデアス』はどう？ カルデアはアナタにも意味のある名前でしょう？」

「はいっ。ありがとうございます、所長」

わたしは盾を撫でた。

——まだわたしはわたしに宿った英霊の名を知らない。この盾の名も知らない。でも、仮にでも名付けたこの盾は、確かにわたしに力をくれるものになったんだ。

わたしはリカを見やった。

リカはわたしの視線に気づくと、困ったように苦笑した。わたしも釣られて笑みが浮かんだ。

そこで――
状況にこれっぽっちもそぐわない、乾いた拍手が大空洞に反響した。

「いやまったく君たちがここまでやるとは。計画の想定外にして、私の寛容さの許容外だ」

大聖杯の頂に誰かが立っている。あれは、あの人、は――

「レフ教授――」

リカが呆然と呟いた。

オルガマリ―所長が感極まったように、一目散にレフ教授めざして走り出した。

「レフ…ああ、レフ！ 生きていたのね！ アナタがいなかったら私……！」

「やあ、オルガ。君も大変だったようだね」

「ええ、そうなの！ 予想外のことばかりで、頭がどうにかなりそうだった！ でも！ アナタがいれば何とかなるわよね!! 今までみたい私を助けてくれるんですよ!」

「もちろんだとも。本当に予想外のことばかりで頭に来る。爆弾は君の足元にセットしたのに、まさか生きているなんて」

「え――?」

所長の足が遅くなって、止まった。何を言っているのか分からない、そんなふうレフ教授を見上げている。

「いや。生きているというのは違うか。君はもう死んでいる。肉体はとっくにね」

――え?

何、を。何を言っているの？ 意味が分からない。レフ教授の言葉を初めて理解できないものだと感じた。

「君は生前、レイシフトの適性がなかっただろう。肉体があつたままでは転移できない。君は死んだことで初めて、あれほど切望した適性を手に入れたのだ。だからカルデアに戻った時点で、君のその意識は

消滅する」

意識。肉体がない。——死者の残留思念？　ここにいるオルガマリー所長が残留思念ってこと？　そんな。だってちゃんと触れた感触もあった。所長自身、魔術も普通に行使していた。なのに。

——ただ、納得いく点が一つだけ。

ドクターからの通信は必ずリカの通信端末に届いた。所長も端末を着けていて、所長と直接連絡をしたほうがドクターも話しやすいはずなのにしなかった。

できなかったんだとしたら？

故障した、と所長は言っていたけど、まさか、そういう意味だったの？

「だが、それではあまりにも憐れだ。生涯をカルデアに捧げた君のために、せめて今、カルデアがどういう状態になっているか見せてあげよう」

レフ教授がかざした手の平に、金の四角錘が吸い寄せられた。

何もない中空が、大きな円形に穿たれた。——あれは、カルデアスだ。リカと冬木に転移してくる前と同じ。真っ赤なまま。

「嘘、よね？　あれ、ただの虚像でしょ!?　レフー！」

「本物だよ。君のために時空を繋げてあげたんだ。聖杯があればこんなこともできるからね。さあ、よく見たまえ。アニムスファイアの末裔。これがお前たちの愚行の末路だ」

レフ教授が腕を一振り。それだけで、オルガマリー所長の体が浮かんで、空間の向こうのカルデアスへと引き寄せられていく。

「最期に君の望みを叶えてあげよう。君の宝物とやらに触れるといい」

「や、やめてッ！　だってカルデアスよ!!」

「ああ、ブラックホールと何も変わらない。それとも太陽か。どちらにせよ人間が触れれば分子レベルで分解される。生きたまま無限の死を味わいたまえ」

反射的に駆け出そうとしたわたしを、後ろからリカが腕を掴んで止めた。リカは涙目で、それでも、行ってはだめと首を何度も横に振っ

ている。

「いや、助けてッ、誰か助けて！ どうして!? どうしてこんなことばっかりなの!? やだ、やめて、いやいやいや!! だってまだ何もしてない! まだ誰にも褒めてさえもらえなかったのに! いやああああああ!!!」

所長がカルデアスの表面に接触した瞬間、悲鳴は断末魔に変わった。

およそ人が上げる声とは思えない絶叫が、鼓膜だけでなく、この胸をも貫く。

——甘い諦観がわたしに囁いてくる。もう手遅れだ、彼女の命を諦めて心を閉ざしてしまえ。そうすればのちに残る傷は何もないぞ、と。

わたしはどつちつかずで。オルガマリー所長がカルデアスに沈んでいく様を見上げているしかできなかった。

わたしの腕を掴んでいたリカの手が離れた。その感触で我に返ったわたしは、急いでリカを背中に庇って盾を構えた。

あの男は今までわたしたちが「レフ教授」と慕った人ではない。そもそも人であるかさえ怪しい。何か、根本的に違う——!

「改めて自己紹介をしよう。私はレフ・ライノール・フラウロス。貴様たち人類を処理するために遣わされた、2016年担当者だ。——聞いているな、ドクター・ロマン? 共に魔道を研究した学友として、最後の忠告をしてやろう。未来は消失したのではない、焼却されたのだ。結末は確定した。貴様たちの時代はもう存在しない」

《——外部との連絡が取れないのは通信の故障ではなく、そもそも受け取る相手が消え去っていたからなのですな》

「……ふん。やはり貴様は賢しいな。真っ先に殺しておけなかったのが悔やまれるよ。まあ、それも虚しい抵抗か。カルデア内の時間が2016年を過ぎれば、そこもこの宇宙から消滅する。貴様らは我らが

王の寵愛を失ったがために、紙クズのように燃え尽きるのだ！」

彼の宣言が合図だったかののように、大空洞が震動し始めた。

「ではさらばだ、ロマニ、マシユ。このままこの時空の崩壊に吞まれるがいい」

レフ・ライノールが聖杯と共にその姿を消した。

とっさにリカの腰に手を回して引き寄せて、盾を瓦礫への傘代わりに傾けた。

「ドクター！ 至急レイシフトを実行してください！」

《分かってる！ でもごめん、そっちの崩壊のが早いかもだ。とにかく意味消失さえしなければ深刻なダメージは……！ ……！》

カルデアとの通信が途絶した。

こうなったらもう、ドクターたちがレイシフト実行を成功させてくれることを祈るしかない。

わたしはリカを改めて抱き寄せた。リカのほうも、わたしにしがみついた。

「リカ。大丈夫、リカ。わたしが付いてる」

それが最後。意識はそこで意味を失った。

冬木7

いつになれば、誰が、あたしのために、あたしに優しくしてくれるの――？

——遠い夢を、見ていたようだ。

白くて四角い部屋。ベッド。白いシーツ。

見慣れた風景。カルデアの医務室だ。

ベッドから下りて、自身の体を見下ろした。

手足、どこも、何ともない。あんな——戦いの、あとなのに。

ようやく意識が明瞭になった。

リカは？ あの時わたしが伸ばした手は、ちゃんとあの子に届いたの？

わたしはベッド脇に掛けてあったパーカーを着て、医務室を飛び出した。

廊下を走る。走る。今この事態で、あの子がいる場所なんて、一つしかない。

中央管制室。

爆発で無残に吹き飛んだ、瓦礫まみれの大きな青い空間。

くすんだカルデアスを見上げる位置に、長い髪の後ろ姿を見つけた。

「リカ」

名前を呼ぶと、リカはふり返って、わたしを見て瞳を輝かせた。

「先輩——」

わたしは瓦礫を避けながらリカへと歩み寄って、わたしと同じくらいの大きさしかないリカを、抱き寄せた。

——この子が無事で、本当によかった。この子を護り通せて、本当に嬉しい。それが嘘偽りない今のわたしの気持ちだ。

わたしの一人きりの後輩。わたしの、「後輩」。

「——オホン」

!!! ド、ドクター・ロマン、いつの間にそちらに!? というか気づかずわたしは後輩と堂々と絆確認ハグなんて行っていたの!?

わたしが小さなパニックを起こしている内に、ドクターは立ち上がった——わたしが見たこともない、険しい表情で。

「まずは生還おめでとう。キミたち二人のおかげで、カルデアは救われた」

「ドクター。オルガマリー所長は……」

ドクターは痛ましげに首を横に振った。

「冬木の特異点は消滅した。しかし、新たに七つの特異点が発見された。冬木とは比べ物にならない時空の乱れだ」

わたしはリカと顔を見合わせてから、カルデアを見上げた。

くすんだカルデアスには、大粒の光点が七つ灯っていた。

「結論を言おう。この七つの特異点にレイシフトし、歴史を正しいカタチに戻す。それが人類を救う唯一の手段だ」

「人類を——」

「救う——」

「けれどボクらにはあまりにも力がない。マスター適性者はリカ君を除いて凍結。所持するサーヴァントはマッシュだけだ。この状況で話すのは強制に近いと理解している。それでもボクはこう言うしかない。——マスター適性者ナンバー2、藤丸立香。キミにカルデアの、人類の未来を背負う覚悟はあるか?」

リカがわたしを窺った。わたしは微笑んで頷いた。もうわたしはリカのサーヴァントだ。リカが決めたなら、わたしは従う。そうでなくたって、がんばる後輩を先輩が放っておくものですか。

「やります。先輩が、一緒なら」

「——ありがとう。その言葉でボクたちの運命は決定した」

無事なコンソールに座っていたスタッフたちが一斉に立ち上がった。

ドクター・ロマンがスタッフたちの前に立った。

「これよりカルデアは、前所長オルガマリー・アニムスファイアが予定した通り、人理継続の尊命を全うする。作戦名はファーストオーダーから改める。これはカルデア最後にして原初の使命。人理守護指定、グランドオーダー。魔術世界における最高位の使命を以て、我々は未来を取り戻す！」

わたしたちの旅の始まり。

わたしたちの、長い長い探索のスタート。

初陣―今は脆き雪花の壁―
オルレアン1

『デインドラン』

誰かがずっとその名を呼んでいる。

誰が呼んでいるのか。誰を呼んでいるのか。わたしには分からないけれど。

――古い夢を、見ていたようだ。

わたしは眠気を振り払って、視界を明瞭にするために何度か瞬きをした。

体はベッドに横たわったまま。目の前にはまだすやすやと眠る後輩の藤丸立香ことリカが――あれ？

込み上げた悲鳴を渾身の意思力で飲み下した。

……そういえば、ゆうべはリカと一緒に寝たんだった。

ここはリカのマイルーム。今日から本格的に始まる任務に向けて、リカが不安がついていないか、怖くて眠れないのではないかと思いついて、わたしのほうから部屋を訪ねた。

リカはわたしに帰ってほしくないのが見え見えだったし、わたし自身、本心では緊張していたから、二人で就寝と相成った。

いや、正確には二人と一匹と表現すべきか。

「フオウ？ キュ、フオウ？」

「フオウさん――おはようございます」

わたしたちの足元で猫のように丸まっていたフオウさんが、起きて、こちらに来了。

フオウさんはわたしとリカの顔の間に入って、リカの頬をぺろりと舐めた。

「ん……あ、せんぱい。おはようございます……」

「おはよう、リカ。ちゃんと眠れた？」

「はい。緊張しましたけど……先輩が暖かかったから」

言い慣れないことを言われたので、とりあえず、リカの頭を撫でた。

——初ブランドオーダーの朝は、こんなふうに平和に始まった。

食堂で、二人してパンのモーニングプレートを食べってから、わたしたちは二人（とフォウさん一匹）で中央管制室へ出勤した。

わたしとリカの入室に一番に気づいたのは、ドクター・ロマン。あれこれスタッフに指示を飛ばしていたのに。意外と切り替えが速いんだと初めて知った。

「おはよう。マシユ。リカ君。よく眠れたかな？」

「はい」

「うん。よろしい。それではさっそくブリーフィングを開始しよう」

まずは、レイシフト先で行う任務内容の確認について。

特異点の調査および修正。——その時代における人類の決定的なターニングポイント。わたしたちは飛び込んだ時代で、それが何かであるかを解明して、修正しなくてはならない。

並行して、聖杯の回収、ないし破壊。特異点の発生には高い確率で聖杯が使われている。それを除去することで、特異点修正の完全に成し遂げたと見えよう。

以上の二点がこのオーダーの大きな目標である、とドクター・ロマンは締め括った。

「二人ともいいかな？ 分からない点があつたら遠慮なく質問していいよ」

「わたしは特にありません。——リカは？」

「ん……ない、と思います」

と、ここで。ドクターでもスタッフさんたちでもない、第三者の掛け声がした。

「おい、そこのお調子者。いつまで私を待たせておく気だ」

このお声は……間違いない。『彼』と顔を合わせるのには実に一ヶ

月ぶりだ。

「おっと、そうだった。気乗りしないからつい忘れていた。——リカ君は初めて会うよね？ 彼……いや、彼女……いや、ソレ、ダレ？ ええい。ともかくそこにいるのは、我がカルデアが誇る技術部のトップ、レオナルド氏だ。見た目から分かる通り、普通の性格じゃない。普通の人間でもない。というか説明したくない」

キャンバスから抜け出したモナ・リザがごときその人物を、リカは見つめた。ノーコメントかつノーリアクションで、ただただ見つめた。

「まあ、普通の人間ではないね。だってサーヴァントだもん。——初めまして、お嬢ちゃん^{シニョリーナ}。私こそルネサンスに誉れの高い、万能の発明家、レオナルド・ダ・ヴィンチその人さ！ 気軽にダ・ヴィンチちゃんと呼ぶように。はい、復唱！」

「だ、ダ・ヴィンチちゃんっ」

「うんうん。で？ 他に聞きたいことがもつとあるんじゃないかな？ ン？ 今なら出血大サービスで割と突っ込んだ質問にも答えてあげるぞ」

ダ・ヴィンチちゃんに迫られた分だけ、リカは上体をのけ反らせて引いた。

「リカ君、素直に言っ方がいいんだよ。何で男じゃないんだ、とか。何で外見がモナ・リザなんだ、とか」

ちなみにわたしはダ・ヴィンチちゃんに初めて会った時、まさにそんな感じのことを問い詰めた。その時の回答を大雑把にまとめると、「モナ・リザが好きだからモナ・リザになることにしたんだ♪」

……この瞬間のわたしの脱力感をお察しいただきたい。

リカは小さな声で「ない、です」と言っただけ、わたしの後ろに隠れてしまった。

やはりこの子には、ダ・ヴィンチちゃんレベルの芸術家は早すぎた。「じゃ、私の紹介はここで終わり。これからはおもに支援物資の提供、開発等でキミたちのバックアップをする。私はマシユのようにそうそうレイシフトはできない。でもリカ君が私と正式に契約できたな

ら、その時はサーヴァントとして力になろう。そうなる運命を楽しみにしているよ、マスター」

言うだけ言って満足したのか、ダ・ヴィンチちゃんは中央管制室から退室していった。本当に自己紹介だけしかなかった。

「話の腰を折られたが本題に戻ろう。——さっそくレイシフトの準備に入るが、いいかな？」

「お願いします」

「がんばりますっ」

わたしたちの返事を合図に、スタッフの皆さんが一斉に計器類の調整に入った。

わたしは指定されたコフィンに向かって歩いて、わたしの斜め後ろからリカが付いて来た。

——世界の命運がわたしたちに託されようとしているのを、否応なく肌を感じる。

弱気になっちゃだめ。リカが見てる。

「リカ。一緒に頑張りましょうね」

「はい先輩っ」

意識を取り戻すと、果てなく続く草原に立っていた。すぐそばにリカもいた。無事にレイシフトできたようだ。

——風の感触、土の匂い。どこまでも広くて青い空。

ふしぎ。映像で何度も見たものなのに、こうして大地に立っているだけで、こんなにも鮮明度が違う。

「先輩。あれ——」

リカが空を見上げていたので、わたしもそうすると。

——空に、光の環が展開されている。あんなもの、見たことも聞いたこともない。

わたしはカルデアに通信回線を開いて、応答したドクター・ロマンに上空の映像を送った。

《これは……衛星軌道上に展開した何らかの魔術式か？ とんでもな

い大きさだ。北米大陸と同サイズ……？ 何にせよ、1431年にこんな現象が起きたという記録はない。間違いなく人理焼却に関わる一端だろう。こちらで解析してみるから、キミたちは現地の調査に専念してくれい》

「了解しました。これより作戦行動に入ります」

リカと頷き合って歩き出そうとした時。わたしの盾の隙間から、白くてモコモコした物体が飛び出して、リカの顔面にアタックした。物体の正体はフオウさんだった。

フオウさんの同行に驚く暇もあらばこそ。フオウさんは草原に下りて駆け出した。放置するわけにもいかないから、わたしたちは追いかけた。

フオウさんが立ち止まったのは、砦らしき建物の前。らしき、というのは、その砦、中がボロボロだったからだ。外壁は体裁を保っていたけれど、もう「砦」とは呼べない域まで損壊している。それに――《意外とすんなり入れたね。兵士たちは……咎める気力がないほど萎えきっているとか？》

わたしは手近な兵士の一人を捕まえて、事情を尋ねてみた。

「シャルル王は休戦条約を結ばなかつたのですか？」

「シャルル王？ 知らんのか、アンタ。王なら死んだよ。魔女の――

“竜の魔女”の炎に焼かれた。蘇ったジャンヌ・ダルクの地獄の炎にな」

その兵士の言葉が堰を切ったのか、兵士たちが次々に声を上げ始めた。

「イングラントに捕えられ、火刑に処されたと聞いた時は、それは憤りに震えたものだったのに」

「彼女は蘇ったんだ。あの悪魔と、邪悪の竜と取引して！」

「イングラントはとうの昔に撤退した。だが、俺たちはどこへ逃げればいっ？」

「ここが故郷なのに、チクショウ、どうすることもできないんだ」

——わたしの知識では、聖女ジャンヌはちようどこの年に没している。歴史上死んだはずの人物が生きていることに——

「フオウ、キヤーウ！」

《マシユ！ キミたちに高速で接近する大型の生体反応あり！》

太陽をバックに空を飛んでくる、あれは——ワイバーン!? 間違っても15世紀のフランスにいい生物じゃない!

わたしは盾を実体化させて、リカとフオウさんを腕の後ろに庇った。

自分の体なのに、モーションが素早いことに驚いた。まるでこの霊基が、あんな幻想種を相手取るのは日常茶飯事だ、とでも言っているみたい。

「兵たちよ、水を被りなさい！ 彼らの炎を一瞬ですが防げます！」

突如として現れた、紫衣しえの女性。

彼女は自らワイバーンの群れの前に出ると、純白の旗でワイバーンの一頭を殴打して退けた。

《おおう、サーヴァントだ！ しかし反応が弱いな》

ドクターの言う通りだ。わたしもこの近さに至ってやっと彼女からサーヴァントの気配を感じ取れた。

けれど、紫衣のサーヴァントが「弱い」のはあくまで存在感であって、戦闘面では冬木で会ったサーヴァントたちに匹敵する膂力を発揮している。だって。

紫衣のサーヴァントに助勢した兵士は一人としていなかったのに、彼女は単騎でワイバーンの群れを撤退まで追い込んだのだから。

《よ、よし、何はともあれやったぞ！ いやあ、手に汗とゴマ饅頭を握って見入っちゃったな》

ここで、ずっと無言だったリカが、おずおずと声を上げた。

「ドクター。そのゴマ饅頭って、管制室にお茶と一緒に置いてあったの、ですか?」

《そうだけだ。あ、もしかしてリカ君が用意してくれたのかい?》

「は、はい。任務から帰ったら、マシユ先輩に召し上がってもらおうと思っ、昨日から用意してあった、のに……」

わたしのために……リカの濃やかな気遣いが心を弾ませる。同時に——それを、勘違いとはいえ横から搔つ攫っていったドクターに敵意が沸き上がった。

「リカ、大丈夫。カルデアに帰るまでに一回分の戦闘リソースを残しておくから。エネミーはもう登録済みよ」

《やめて泣く。リカ君、キミからもマシユを止めて！》

「……………」

《リーカーくーん!?》

はっ。いけない。ついいつものノリで寸劇を演じてしまった。

今は任務中なんだ。真面目にやれ、わたし。

紫衣の女性がサーヴァントなら、事情を聞いて、少しでもこの時代の修正のための手がかりを手に入れなくちゃ。

わたしは紫衣のサーヴァントに声をかけようとした。

フランス兵たちが血相を変えて叫んだ。

「そんな、貴女は——いや、お前は！」

「逃げろ！ 魔女が出たぞー！」

魔女？ さっき言っていた「竜の魔女」を指しているの？ それがこの女性だと？

フランス兵は一斉に逃げて行ってしまった。

兵士たちのその行動に、彼女は一抹の寂しさを浮かべたものの、すぐに凜とした表情に戻った。

「あの、ありがとうございます。失礼ですが、あなたのお名前は——」

「ルーラー。私のサーヴァントクラスは裁定者^{ルーラー}です」

遮るように彼女——ルーラーは告げた。

「先輩、ルーラーって？」

「確か『聖杯戦争』そのものを守るために召喚される、エクストラクラスのサーヴァント。聖杯戦争の正しい運営のために、真名看破や対サーヴァント令呪、あとは10キロ近い範囲でのサーヴァント探知能力を持つ——で、よかったですでしょうか？」

確認の意味でわたしはルーラーのサーヴァントを見た。

「はい。その理解で正しいかと。ただ、私はなぜか、本来与えられるべ

き聖杯戦争の知識を大部分持たないのです。真名看破も対サーヴァント令呪も持っていません。……これ以上込み入った話は、せめて砦から離れて」

ルーラーは手にした旗の実体化を解いて踵を返した。

オルレアン2

——全ては紫衣のサーヴァントに話を聞いてから決める。それが現状で無難な道だ。

ドクター・ロマンにそう言われて、わたしたちは、砦を出て行ったルーラーのサーヴァントを追いかけた。

丘陵地帯の窪みの下。紫衣のルーラーは流れる小川の畔で、わたしたちを待っていた。

わたしはリカを抱えてから、丘陵を滑り降りて砂利に着地した。

「信用してもらい光栄です。まずは自己紹介からですね。私は真名をジャンヌ・ダルクといいます。貴女たちのお名前を聞かせてくださいますか？」

「はい。わたしはマッシュ・キリエライト。デミ・サーヴァントです。この子はわたしのマスターで、藤丸——」

「リカですっ！」

びっくり、した。リカがこんなふうに叫んだのは、わたしが知る限り初めてだ。

「リカって、呼んでください」

「は、はい、リカさん」

リカはわたしの後ろに体を半分ほど隠した。

——そういえば、わたしは知らない。どうしてこの子が「リカ」と呼ばれたがるのか。もっと言うなら、どうして「立香^{リッカ}」と呼ばれるのを拒んでいるのか。「先輩」なのに、後輩のこの子の、本当の意味で知っていなければいけないことを知らないような気がする。

「ええと、貴女はこの聖杯戦争のマスターの一人であるとして、デミ・サーヴァントとは一体——」

「それはわたしから説明します。まず、わたしとこの子は聖杯戦争とは無関係です」

わたしは説明した。カルデアという機関。人理焼却。それを防ぐための、七つの特異点探索と修正。聖杯——

事情を全て打ち明けた末に、ジャンヌさんが浮かべた顔は険しかった

た。

「……よく分かりました。まさか、世界そのものが焼却されているとは。私の悩みなど小さなものでした」

「悩みというのは、やはり、あのワイバーンや、魔女と呼ばれていたことですか?」

ジャンヌさんは頷くと、今度は彼女の事情を打ち明け始めた。

今ここにいるジャンヌとは異なる、*“竜の魔女”*と畏怖されるジャンヌ・ダルクがこのフランスにはいて、ワイバーンを率いて国土を荒らしているという。国王さえ*“竜の魔女”*の凶手にかかって落命して、各地での民の混乱が著しい。

《歴史上、フランスは人間の自由と平等などと謳った最初の国であり、多くの国がそれに追随した。この権利が100年遅れば、それだけ文明は停滞する》

「認めたくありませんが、あの竜たちを操っているのは*“ジャンヌ”*なのでしよう。竜の召喚は最上級の魔術と聞きます。まして、これだけの数ともなれば」

「……………聖杯、とか?」

《リカ君、正解。それなら竜種の大量召喚にも説明がつく》

なるほど。まだ推測の域を出ないけれど、*“竜の魔女”*問題はわたしたちにも関係あるものかもしれない。

「ジャンヌさんはこれからどうするのですか?」

「オルレアンに向かい、都市を奪還する。そのための障害である*“ジャンヌ・ダルク”*を排除する。主からの啓示はなく、その手段は見えませんが、ここで目を背けることはできませんから」

「……………なんていうか、歴史書に書いてるままの人ですね。先輩」

「そうね。リカ、わたしたちとジャンヌさんの目的は一致している。今後の方針として、ジャンヌさんに協力するのはどう、かな?」

リカは、一度ジャンヌさんをじっと見てから、頷いた。イエスのサインだ。

《だね。救国の聖女と共に戦えるなんて、滅多にない荣誉だし!》

「リカのゴマ饅頭おいしかったですか? ドクター」

《そのネタここで引つ張るのかい!?》

引つ張りますとも。第一オーダーの間はこのネタで通そうと思うくらいには、腹に据えかねているのだから。

「改めて。マドモアゼル・ジャンヌ。わたしたちにはわたしたちの目的がありますが、あなたの手助けもしたい。これからあなたの旗の下で戦うことを許してくれますか?」

「そんな。こちらこそお願いします。どれほど感謝しても足りないほどです。ありがとう、マシユ、リカ」

リカは大きく首を横に振って、一拍ためらってから、口を開いた。「魔女って誤解されてるの、ジャンヌさん、は」

「大丈夫です。いえ、フランス軍の兵たちが、もう一人のジャンヌと私を誤認するのは、悲しいですけど。それは仕方のないことです」

「っ、ジャンヌさんはジャンヌさんだけなのにッ! ……あ」

リカは顔色を青くして、「すみません」と小さく言ったきり口を閉ざした。

ジャンヌさんと共闘することになった、翌日。

——情報収集のために赴いたラ・シャリテの街は、わたしたちが到着した時、すでにゴーストタウンと化していた。

火が燻り、立ち昇る煙。瓦礫と煤にまみれた家並み。血が飛び散った壁。どれも直視に堪えない。

大規模な破壊の爪痕は、少し前に反応を検知したサーヴァントによるものだろうと、ドクターが告げた。

「これをやったのは、おそらく『私』なのでしょうね。どれほど人を憎めば、このような所業を行えるのでしょうか? 私にはそれだけが分からない——」

わたしにはジャンヌさんにかける言葉が見つからなかった。

《待った! 先ほど去ったサーヴァントが反転した!》

「数は!?!」

《冗談だろ、数は5騎！ と、ともかく逃げろ！ 数で勝てない以上、逃げるしかない！》

「ですが——！」

《数が同じだったらいい、だが戦力的にキミたちの倍ある相手と戦わせるわけにはいかない！ 即時撤退するんだ！》

わたしは未熟なデミ・サーヴァント。ジャンヌさんはルーラーとしてステータスダウンしている。

「——逃げません」

なのに、聖女の意志は固く。

「せめて真意を問う質さなければ……！」

その一瞬がわたしたちには致命的なロスタイム。

——かくて、〃それら〃は圧倒的な暴威をもつて、わたしたちの眼前に舞い降りた。

「——なんて、こと」

数はドクターが先に告げたように、5騎。その中心に立つ——ジャンヌさんと全く同じ容姿をした、黒い女性。

「ねえ見てよ、ジル、あの哀れな小娘を！ なにあれ、羽虫？ ネズミ

？ ミミズ？ どうあれ同じことね。ちっぽけ過ぎて同情すら浮か

ばない。ああ、本当——こんな小娘わたしに継るしかなかった国とか、ネズ

ミの国にも劣っていたのね。ジル、貴方もそう——つて、そつか。ジ

ルは連れてきていなかったわ」

「貴女は……貴女は誰ですか!?!」

「それはこちらの質問ですが……そうですね。上に立つものとして答えてあげましょう。私はジャンヌ・ダルク。蘇った救国の聖女ですよ。もう一人の〃私〃」

甲冑は黒く、旗は色褪せ、肌も蠟のように白く、黄鉛色の目だけが爛々としている。

神聖さという意味ではゼロ、むしろマイナス。魔女、と畏怖されるに相応しい貫禄を、竜の魔女は持っていた。

「そもそもなぜ救おうと思ったのです、〃私〃？ こんな国を。こんな愚者どもを！ 私はもう騙されない。もう裏切りを許さない。そ

もそも、主の声も聴こえない。主の声が聴こえないということは、主はこの国に愛想を尽かしたということですよ。だから滅ぼします。主の嘆きを私が代行します。まあ、貴女には分からないでしょうけどね。いつまでも聖人気取り。憎しみも喜びも見ないフリをして、人間的成長を全くしなくなつたお奇麗な聖女さまには！」

「いや、サーヴァントに人間的成長つてどうなんだ？ それを言うなら英霊的靈格アップとか……」

ドクター・ロマンのツツコミを初めて有難いと感じた。踏み躪られた廃墟で、禍々しい魔女と向き合うそのプレッシャーを、日常の断片が少しでも遠ざけてくれた。

——だからって、戦いそのものがなくなったわけではない。

「貴女はルーラーでもなければジャンヌ・ダルクでもない。私が捨てた、ただの残り滓に過ぎません。バーサーク・ランサー、ヴラド三世。バーサーク・アサシン、カーミラ。その田舎娘を始末なさい」

号令を受けてバルディッシュを持った男と、刺々しい装飾のドレスを着た女がわたしたちの前に立ちはだかった。

串刺し公ヴラド三世。血の伯爵夫人カーミラ。

どちらも現代の吸血鬼の代名詞として名高い、トップクラスの怪物。

「よろしい。では私は血を頂こう」

「いけませんわ、王様。私は彼女の肉と血、そして臓を頂きたいのだもの」

「強欲だな。では魂は？ 魂はどちらが頂く？」

「魂なんて何の益にもなりません。名誉や誇りで、この美貌が保てると思っただけ？」

ヴラド三世とカーミラは一見して優雅に会話しているけれど、その気になればわたしたちなんて一瞬で刺し貫けるに違いない。ドクターの言う通りだった。逃げに徹しないとわたしたちの誰も生き残れない。

「先輩……」

リカがわたしの背中に寄り添った。背中にリカのぬくもりが広が

ると同時に、小刻みな震えもしかと伝わった。

それでわたしも腹が据わった。わたしはリカの「先輩」だ——！

「行きます！ ジャンヌさん、構えてください、来ます！」

「わ、分かりました！」

ヴラド三世がバルデイツシュを携えて迫ってきた。

わたしはとつさに盾で刺突を受け止めて、勢いに負けて大きく後退を余儀なくされた。でも、無駄ではない。わたしに集中したヴラド三世は背中が空きだ。

「ジャンヌさん!!」

「はああ!!」

かけ声とほぼ同時に、ジャンヌさんは背中からヴラド三世に旗で殴りつけた。やった……!?!

「背中が空きでしてよ、聖女様。私はヴラド公ほど優しくなくてよ。聖女の血、一滴残らず戴くわ。幻想の鉄処女！」
フアントム・メイデン

——そこにそびえ立ち、ジャンヌさんを食らわんとする鋼鉄の処女を、見た。

分かってしまった。あの宝具は「女」を殺すためのものだ。

盾でバルデイツシュを弾き上げて、屈んで前転で抜け出した。そして、ジャンヌさんと背中合わせになった。

わたしは盾で、ジャンヌさんは旗で、左右から閉じようとした棘の棺をそれぞれに食い止めた。

でも、このままでは詰む。どうにか抜け出さないと、このままじゃ二人して棺の中に押し込まれる。

「美しくありませんわ」

高速で飛来した何かが棺に突き立った。鋼鉄の棺は重々しく倒れた。

オルレアン3

「——先輩!!」

リカが走ってきてわたしに正面から抱きついた。

「先輩。よか、った、無事で。あたし、何の手助けもできないで、見るだけで。ごめんなさい、ごめんなさい! いき、生きてて、よかつたよお……!」

「り、リカ、落ち着いて。わたし、ケガしてないから。大丈夫だから」
リカをあやししながら、カーミラの宝具である棺を見やった。

棺には、薔薇を象ったガラス細工が突き刺さっていた。

わたしたちの後ろから、ヒールが石畳を踏む音が聞こえてくる。

「優雅ではありません。この街の有り様も。その戦い方も。思想も主義もよろしくないわ。貴女はそんなに美しいのに、血と憎悪でその身を縛ろうとしている。善であれ悪であれ、人間つてもっと軽やかにあるべきじゃないかしら?」

——それは、紅いドレスを纏った少女のカタチをしていた。

今が戦闘中であることも忘れて見惚れてしまうくらいには、彼女は「少女」の理想形だった。

「我が愛しのフランスを荒らす竜の魔女。無駄でしょうけど質問をしてあげる。貴女はこのわたしの前で、まだ狼藉を働くほど邪悪なのですか? 革命を止められなかったわたしという愚かな王妃以上に、自分は愚かな魔女であると公言するの?」

フランスで、王妃で、革命といったら。わたしの歴史的知識の中に該当する人物が一人しかいない。——ヴェルサイユ宮殿の華、マリー・アントワネット王妃。

竜の魔女が目を眇めてから、微かに瞠目した。——そうか、竜の魔女には真名看破のスキルがある。彼女もこのサーヴァントがマリー王妃だと分かったんだ。

「宮殿で蝶よ花よと愛でられ、何も分からぬままに首を落とされた王妃に、我々の憎しみが理解できると?」

「そうね、それは分からないわ。今のわたしに分かるのは、貴女はただ

八つ当たりしているだけということ。そんな貴女に向ける礼はありません、わたしはその、何もかも分かりやすいジャンヌ・ダルクと共に、意味不明な貴女の心を、その体ごと手に入れるわ！」

ジャンヌさんは困惑しきりに頬を赤らめた。

それはそうだろう。同性とはいえ、体を、なんて言われた日には、わたしだって同じリアクションをする。

《マシユ》

「すみませんドクター、今取り込み中で」

《声は抑えて。逆に考えるんだ。場が混乱している今こそ撤退のチャンスだ。おそらくは、最後の。いいかい？ 街を出る最短ルートを駆け抜けるんだ。下手に隠れようとしなくていい。どうせワイバーンに上空から追いかけられたら丸見えだ》

この窮地を脱する、ラストチャンス。

わたしは、片腕に抱く形になっていたリカに、囁いた。

「……リカ。今から逃げるけど、走れる？」

リカは囁き返した。

「……はい。先輩が行くとこなら、あたし、どこまでも追いかけて走れます」

———こんな殺伐とした局面なのに、不意打ちないじらしい返事に、つい両手でこの後輩をハグしたくなった。

《最短ルート確保。ナビゲートはボクがする。キミたちはとにかく走ればいい。行くぞ。3…2…1…スタート！》

わたしは盾の実体化を解いて、ジャンヌさんとマリー王妃を大声で呼んだ。それからリカと一緒に体の向きを反転、スタートダッシュを切った。

幸いにも意図は正しくジャンヌさんたちに伝わったようで、お二人もわたしたちを追って来てくれた。

必死で逃げるわたしたちの中で、マリー王妃だけが明るく言った。

「お待たせしました、アマデウス！ 鎮魂歌をよろしくね！」

アマデウス？

「任せたまえ。死神のための葬送曲」

天からオーケストラが舞い降りたように、壮麗で重厚な楽器の調べが頭上から聴こえた。

わたしたちを追うはずだったワイバーンは軒並み地に落ちて、地上から追尾してきた竜の魔女の尖兵たちも足を止めている。

「こつちこつち」

「はい？」

瓦礫の陰から出てきた瀟洒な男性は、手にタクトを持っていた。あの演奏はこの彼が？

「安心なさって。わたしの古い知り合いです」

「彼もサーヴァント……ですよ。心配が」

「ウイ、マドモアゼル。でも自己紹介はまたあとで。今はこの街から離れるのが最優先なんだろう？」

「は、はい！——ドクター！」

《分かってる！ ルート変更はなし、そのまま11時方向に全力疾走

——》

「わたしたちも付いて行きましょう、アマデウス」

「キミの好きにするといいさ。マリア」

走った。

街を抜けて草原に出ても、まだ追いつかれやしないかと漠然と恐ろしくて、走り続けた。

「はっ、はあ…っ！ ひっ、ひああ…！」

リカは息を乱して、むしろ喘鳴を上げて、それでもわたしに並走している。

ラ・シヤリテの街が地平線の彼方に消えた所で、わたしは足を止めた。

わたしの斜め後ろを走っていたリカは、立ち止まり方が前のめりだったせいで、その場にべしゃつと座り込んで、荒い呼吸をくり返した。長すぎる亜麻色の髪は草に広がって、一部は汗だくの顔面に貼り

ついている。

「リカ——」

「だい、じょうぶ、ですっ…まだ、走れます、から…っあ」

立ち上がろうとしたリカは物の見事に足をもつれさせてバランスを崩した。わたしは慌ててリカの体をキャッチした。

《もう大丈夫。あちら側の反応は圏外だ。ついでに言うと、そこからすぐ近くの森に霊脈の反応を確認した》

召喚サークルが設置できれば物資補給を受けられる。カルデアからふわふわの毛布でも送ってもらえたら、リカに二度目の野宿はさせずにすむ。霊脈を指すべきだ。

「あの、ジャンヌさん。マリーさん」

「マリーさん、ですって!?!」

「し、失礼しました。アントワネット王妃」

「失礼じゃないわ、とっても嬉しいわ!。いまの呼び方、耳が飛び出るくらい可愛いと思うの!。お願い、素敵な異国のお方、これからもそう呼んでいただけないかしら!」

結局、彼女の呼び方は「マリーさん」になった。

「そんなやりとりを挟みつつ、わたしたちは霊脈のあるポイントへ向かった。」

オルレアン4

召喚サークルの確立後、わたしたちは改めて自己紹介をし合った。助勢に現れた二名のサーヴァントの真名は――

フランス王妃、マリー・アントワネット。

偉大なる音楽家、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト。

戦いの来歴がなくても英霊の座に至れるんだと、また一つ知らなかったことを知った。

互いに、特にトラブルはなく、相手を受け入れた。特にジャンヌさんとマリーさんは、よい友人関係を築けそうだ。

そして、情報の統合から、共闘の流れとなった。

これからの方針として、わたしたちは話し合い、竜の魔女の支配下でないサーヴァントを探すことを採決した。

――聖杯戦争が始まっていないのに、すでに竜の魔女は聖杯を所持している。その因果の逆転に対抗すべく、マリーさんやアマデウスさんのようにカウンターとして召喚された「はぐれ」のサーヴァントがいる可能性が出て来たからである。

今夜は召喚サークルを確立したこの森でキャンプをして、明日には出発する。

「見回りに行つて来ます」

わたしが盾を出して立ち上がると、リカが肩を小さく跳ね上げてから、小走りにわたしのそばに来了。わたしと一緒に行くつもり、らしい。

目線で不安げにわたしを窺うリカに向けて、わたしは微笑んで見せた。上手く笑えていたらいいのだけど。

――二人で暗い獣道を歩き出した。

「リカ、疲れてない？ 休まなくて大丈夫？」

「正直、ちよつと。でもまだ平気です。……それに、その。い、一緒に

いる人たちみんな、偉い人ばかりで、ちょっと、気が引けて」

——納得した。ジャンヌさんたちが頼もしい味方であるのは確かだけど、彼女たちは「知り合って間もない他人」でもある。わたしがあの輪を外れたら、この子はひとり蚊帳の外……は言い過ぎかもしれないが。

わたしはリカの髪を撫でた。なんとなくそうしないといけない気分になった。

「デインドラン」

……呼んでいる。わたしの中の誰かが。大切なひとの名を口ずさむように……

電子的なコールが意識を現実に取り戻した。——今、何を考えてたんだっけ、わたし？

「サーヴァントを探知した！ それに付随して巨大な生体反応がある！ 二人ともキャンプに引き返すんだ！」

「了解しました。リカ、ごめんね」

わたしは盾を霊体化させて両腕にリカを抱え上げて、キャンプへ戻るべく走り出した。急を要するこの事態、二人して走るより、わたしがリカを抱えて全力疾走したほうが速い。

キャンプの火の灯りが見えた。

「皆さん!!」

わたしは焚き火をしていた窪地に駆け込んで、リカを下ろしてから盾を実体化させた。

「ちようどいい所に帰ってきてくれた、マシユ。大物が来るぞ。——気が重いな。耳がいいのも考えものだ」

「この距離で分かるのですか?」

「もちろん。音楽家ってだけでサーヴァントになっただけ？ 大気を震わす波なら正確に聴き分ける。例えばキャンプの時の君たちの寝息とマリアの寝息。どれもきっちり堪能させてもらった。寝息だけじゃない。もつと細かな生体音まで、じっくりたっぷり、

わたしはともかく、「君たち」と言ったからには、リカも？

「こ、の——セクハラサーヴァントおおお!!」

盾を全力で振り上げて、全力でアマデウスさんに振り下ろした。避けられたけど。激昂したせいで狙いが甘くなってしまったようだ。

「ごめんなさい、マシユ。監督役として謝罪します。でも我慢してあげて？ だって彼から耳を取り上げたら、変態性しか残らないのですもの！」

「それはそれでより最低かと！」

「せ、せいばいっ」

「何を言っているんだか。生き物っていうのは活動するだけで汚いものぞ。その真実と向き合って初めて音楽は完成する。人生とはこれ汚濁であり、これを洗浄する行為だ」

生き物は汚い。カルデアでは教わらなかった知識だ。それは確かに、生体活動の中には不潔・不衛生な行為もあるけれど、活動の全てがそうだとは限らないのでは……

「さて。我が耳に届くは巨大飛行物体の襲来する前兆の大气の震えと、聖なる衣の衣擦れ」

アマデウスさんの読みは正しかった。

次の瞬間、嘘みたいに巨大な亀らしき生物が、森の木々を薙ぎ倒して、凄まじい地揺れを起こして着地した。

わたしは揺れにふらついたリカを受け止めて、巨大な亀型生物を見据えた。

わたしの盾でも防げるか怪しいけれど、片腕の中にリカがいる以上は、限界を超えてでも護ってみせる。

巨大亀の肩から、白い人影が舞い降りた。

一目で看破した。この女性はジャンヌさんと同じ「聖女」だ。

「こんばんは、皆様。寂しい夜ね」

ジャンヌさんが旗を油断なく構えて前衛に出た。

「先輩——」

リカがわたしの腕の中から出て、フォウさんを抱えて一步下がっ

た。わたしが動きやすいように配慮してくれたのだと分らないわ
たしではない。

白い聖女は憂いを浮かべて語っている。

「最後に残った理性が、貴女たちを試すべきだと囁いている。貴女た
ちの前に立ちはだかるのは、究極の竜種に騎乗する災厄。私ごときを
乗り越えられなければ、彼女を打ち倒せるはずがない。だから、私を
倒しなさい」

——場違いな所感だが、すごい、と感じてしまった。この聖女は狂
化されているのに、わたしたちに殺戮ではなく正しい試練を与えよう
としている。

「我が名はマルタ。さあ、出番よ。大鉄甲竜タラスク！」

控えていた巨亀が咆哮した。

オルレアン5

戦う前に、ジャンヌさんから申し出があった。

「聖女マルタとは、私に戦わせてください」

ジャンヌさんは旗を聖女マルタに突きつけた。

聖女マルタは、タラスクを呼び出してからアクションを起こしていない。厳しくわたしたちを睨み据えてはいるが、攻撃してこない。

「彼女は自らを竜の魔女に、タラスクを魔女が率いる竜の群団に見立てているものと思われます。あの、私でない黒い“私”を斃すために、私は、彼女に打ち勝たねばならないのです」

言われてみれば、なるほど、ジャンヌさんの推測は筋が通っている。これは竜の魔女たちとの戦いに備えた想定戦なのだ。

ならば聖女マルタの相手はジャンヌさんにお任せするのが順当。

「ジャンヌ。傷の治療が必要になったら遠慮なく声をかけてちょうだいね」

「ありがとう、マリー」

「いいえ。トモダチですもの。このくらい」

ついに聖女マルタがジャンヌさんめがけて力強く踏み込んだ。

杖と旗がぶつかり合って、わたしには不可視の軌道を描いている。

「マリア。ジャンヌに加勢しなくていいのかい？」

「それが必要になる時が来れば、わたしは喜んで彼女と肩を並べます。でも今はその時ではないわ。分かるの。というわけだから——お転

婆でごめんあそばせ。ガラス細工のように、煌びやかに踊るわよ！」

タラスクと戦うのは、わたしと、マリー王妃とアマデウスさん。

全員が攻撃手段を持っていないけど、非力には非力なりの戦い方がある。それをここで実践するんだ。

タラスクがついに重厚かつデタラメなサイズの足を、上げた。わたしたちを軒並みぶちっと潰して終わり、くらいにしか思考してないのかもしれない。

ここでわたしが打つ一手は、**魔力放出ならぬ、魔力防御**。

わたしに力を授けた英霊のスキルを自己流にアレンジしたスキル。

魔力で編んだ防壁で、タラスクが振り下ろした足裏を受け止めて、すぐ横に流した。タラスクはたたらを踏んだものの、態勢を崩す所までは持つて行けなかった。

そう、タラスクの足。特に二足歩行のための後ろ脚。そこにダメージをぶつかって行つて、姿勢を崩す。または不安定にし続けるのが盾役のわたし。

タラスクが前脚を大きく振った。それだけで、木々の表面がブロッコリーの房のように刈られた。その余波を受けてわたしも宙に投げ出される。——上等。

飛んだ木の房で手近なものに着地して、魔力防御を足裏に小さく展開して、房を蹴った。そして、勢いのまま、タラスクの胸部に盾からのボディアタックを見舞ってやった。

タラスクが傾く様はスローモーションみたいだった。簡単な話だ。亀はひっくり返ると起き上がれない。

着地するなり、わたしはマリー王妃とアマデウスさんの名を叫んだ。

「まさかこの宝具をこんな使い方をする日が来ようとはね」

「ジャンヌも言ったけれど、サーヴァントになってみるものだけ」

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの宝具は、天使の楽団が奏でるオーケストラ。

マリー・アントワネットの美声は、王権による力の行使宣言に匹敵し、それは歌声一つで王権への敵対者へダメージを与える域。

——では、この二者の「音楽系」のスキルを結び付けて発動したら、どうなる？

まだ議論段階にあったそれを、タラスクの登板で、こちらもぶっつけ本番で投入を決めた。

「行くよ〜？ 死神のための葬送曲！」

「L a a a ~♪ L a · L a · L a , L a L a L a ~♪」

——荘厳なオーケストラが天上から光臨した。天使のひとりひとりが、アマデウスが楽譜に連ねた音色を奏でるために楽器を吟じた。

今はさらに、王権の象徴たるマリー・アントワネットが、楽団の演

奏をBGMにして、キラキラ、キラキラ、歌っている。

歌声と楽器が絡み合い、虹色のらせんを描き、調和して響き合っている。——視えた。これが、「音楽」の頂。

聞き惚れていて、いつのまにか、仰向けに倒れたタラスクが完全沈黙していたことにも、すぐには気づけなかった。

……やった、の？

「やあああああああ!!」

「くっ——あー!」

とつさに顧みた。

ジャンヌさんと聖女マルタの決着がまさにつかんとしていた。

ジャンヌさんが聖女マルタの杖を手から落とさせ、石附で聖女マルタの胸を抉った。血は流れていないが、今のは霊核まで届く渾身の一撃だった。

聖女マルタはその場に頽れた。

「いい? 最後に一つだけ教えてあげる。竜の魔女が操る『竜』に、貴女たちでは絶対勝てない。だからリヨンに行きなさい。かつてリヨンと呼ばれた都市に。竜を倒すのは聖女ではない、姫でもない。古くから『竜殺し』と相場が決まっているわ」

聖女マルタは、語るべきことは語ったというように晴れがましく、タラスクに凭れて、共に消滅していった。

あんなダイヤモンドのごとき聖性を持つ人ですら、サーヴァントとして、しかも狂化されてしまったら、邪悪な命令に従わざるをえないなんて——

「フオウ!」

「先輩、どうしました……? 難しい顔、してます」

「あ、ううん。ちよつと考え事をね」

リカを護れた。「邪竜を従える聖女」を倒すことができた。次の目的地も定まった。得たものは多い。わたしだけの小さな懸念は仕舞っておこう。

ふいにリカがわたしに身を寄せた。

体がふつと軽くなった。さっきの戦いで、緊張していたせいで感じ

なかつた負傷を、リカが治癒してくれたんだと分かった。

「ありがとう」

リカは嬉しそうに笑った。さっきの懸念が馬鹿馬鹿しく思える、わたしがよく知る笑顔だった。

オルレアン6

明朝。わたしたちはリヨンに進路を取った。

道中で噂話を集めてくれたマリー王妃によると、こうだ。

リヨンはすでに竜の魔女とそのサーヴァント軍団によって壊滅させられた。

しかし、それより前、リヨンには守り神がいたという。大剣を持った異国の剣士で、ワイバーンや怪物を退けてリヨンの住人を守っていたと。

その「守り神」だった異国の剣士がサーヴァント、そして聖女マルタの語った「竜殺し」である可能性は高い。

リヨンに着いてから、わたしたちは二手に分かれて搜索を開始した。

西側はマリー王妃とアマデウスさんが。

東はわたしとリカ、そしてジャンヌさんで。

瓦礫を一つ踏み越え、焼け跡を一つ通り過ぎるごとに、ジャンヌさんの表情は沈鬱なものへ変わっていく。どう慰めていいか分からないのが歯がゆかった。

——マリー王妃がもたらした吉報にも、ジャンヌさんは驚きはしたものの寂しげだったのだ。吉報とは、国中で混乱していた兵を、ジル・ド・レエ元帥がまとめ上げて、オルレアンを奪回しようとしていること。

《マシユ！ 聞こえるかい!?!》

「ひゃっ。ドクター・ロマン?」

《全員撤退を！ そこにサーヴァントが猛烈な速度で向かっている！

加えてサーヴァントを上回る超極大の生命反応だ!》

そ、そんな存在がこの世に実在するのですか!?!

……いえ、いえ。ドクターの観測が正しいなら、ますます「竜殺し」を戦力に加えないと、竜の魔女の勢力に対抗できなくなるらないか。今撤退して、また平穩にリヨンに入れる保証はないんだ。

「——先輩」

「撤退はしましょう。ただし『竜殺し』を見つけてからです。ドクター、街の中にサーヴァント反応はありませんか!？」

《今サーチしてる……! ——よし、その先の城に一騎、弱い反応発見!》

わたしとリカは瞬時かつ同時に、丘の上の城をめざして走り出した。一拍置いてジャンヌさんが追いついた。

さらに道中でマリー王妃とアマデウスさんを拾って、わたしたちは城へ急行した。

薄暗い城を、ドクターがナビするサーヴァント反応を頼りに駆けたわたしたち。

その城の中の一室で、わたしたちはついに見つけた。

苦しげに片膝を突いて、大剣で倒れそうな体を支えている精悍な男性。はだけた胸板の呪刻の仄明るさが、ぼんやりとその剣士の容貌を照らし出していた。

剣士はわたしたちが部屋に踏み込むなり、こちらに斬りかかった。

「きやあ!？」

「このっ」

わたしはリカを背にして盾で斬撃を受けた。——この子には、わたしの「後輩」にだけは、危害を加えさせない。

「待つてください! 私たちは味方です!」

「一緒に来てください! ここに強い竜種が襲ってきます! 留まっていますは全員が危険なんです!」

竜、という名称を聞いて、剣士は得心が行ったらしかった。

「なるほどな。だからこそ俺が召喚され、そして襲撃を受けたわけか」「手を貸します。脱出しましょう」

「すまない、頼む」

剣士を左右から、アマデウスさんと、リカが支えた。けれど剣士は全身を二人に預けきるでなく、自身の足で歩いた。

ようやく城の外、お日様の下に出たわたしたち——の足元に、ふいに影が落ちた。

《先ほどの超極大反応、視認域に接近！　これは……おい、まさか！》
わたしは空を仰いで、愕然とした。

あれは、だめだ。

ワイバーンなど比較にならないほど凶悪な、巨軀、巨翼。これが竜種の頂点。これが聖女マルタの警告した邪竜。

「何を見つけたかと思えば、瀕死のサーヴァント一騎ですか」

邪竜の背に乗っているのは、竜の魔女。

魔女は戦慄くこちらを睥睨している。よりにもよってこれほど凶悪なモノの上に立って。

「いいでしょう。諸共滅びなさい。灼き尽くせ——ファヴニール!!」

ファヴニールの咆哮に空気がびりびりと震えたのを、確かに感じた。

「わたしが出ます!」

「マシユさん、ここは一緒に!」

盾を地面に突き立てた。——やっぱり宝具の真名は分からないまままだ。でも、護らなければ、という思いが確かに胸にある。だから——

——!

「ロード・カルデアス 仮展開／人理の礎!!」

「リュミノジテ・エテルネッル 我が神はここにありて!!」

わたしの盾の守護円陣と、ジャンヌさんの旗が放つ光のボールが重なり合って、ファヴニールの吐く火を押し留めた。

押し留めて、そこで限界だった。

ファヴニールの吐く火に際限がない。永遠に全力展開なんてできない。いずれ詰む。——わたしの後ろにはマリーさんもアマデウスさんもフォウさんも、リカも、いるのに。

もうだめ——そう心が屈しかけた瞬間、わたしたちの横を駆け抜けた人影。

さつき城から連れ出したサーヴァントが、大剣を——
「バルムンク 幻想大剣・天魔失墜!!」

大剣を、ファヴニールの首の付け根を狙って振り抜いた。
傷を、つけてみせたのだ。あの凶悪な邪竜に。

「蒼天の空に聞け！ 我が真名はジークフリート！ 汝をかつて打ち倒した者なり！」

「くっ……ファヴニール、上がりなさい！」

ファヴニールは竜の魔女を乗せて高く空へ飛んで、去った。

ジークフリートさんがその場に膝を突いて、ようやくわたしは我に返った。

「すまないが、これで限界だ……戻って来ない内に、逃げて、くれ……」
それだけ言うと、ジークフリートさんは地面に倒れ込んだ。

わたしたちはマリー王妃のガラスの馬車を足にお借りして、リヨンから大きく距離を開いて、放棄された砦の一つの前で止まった。

兵士は誰もいなかったで、ひとまずの休憩場所として砦を使うことに全員で決めた。

せつかくだから広い部隊長の個室へ。

ジークフリートさんを運んで、そこそこ上等の寝床に横たわらせた。
た。

そのジークフリートさんの横にリカが付いて、治癒魔術をかけ始めた。
た。

——光が溢れるとか、魔力波が広がるとか、見た目に派手な現象はないのがリカの治癒魔術だ。

ただ、怪我人に触れる。患部に直接接触したら効率が上がる。すると不思議、傷は綺麗に消えている。

リカが手を添えてすぐ、ジークフリートさんの裂傷や擦過傷は消えて行った。

「リカさんがこれほどの癒しの秘跡をお持ちだったとは……」

「治癒魔術はリカの最大の武器ですから。あ、いえ、他にリカが武器を持たないというわけではなくて」

武器というか、リカの長所や美点なら、わたしはそこそこ言い挙げられる。わたしは先輩だから、あの子のことは結構知っているのだ——多分。

「その、先輩——ごめんなさい。ジークフリートさんの傷、なんだか治りが悪いんです。あたしの力を受け付けられないように遮断されてるみたいなの……」

「どうやら呪いのたぐいらしいな」

当のジークフリートさんが言うのならそうなのだろう。呪いに邪魔されてリカの治療術式が通らないという所か。

——聞けば、ジークフリートさんは召喚されたのが比較的早いほうだったとか。

マスターもおおらず放浪して、リヨンが襲われるのを目撃して助けに入った。しかし、ワイバーンはまだしも、複数のサーヴァントに同時に襲いかかられては成す術もなかった。

彼はああして城で息を潜めていた。傷は治らず、誰かに助けを求めすることもできず。

リカがジークフリートさんの腕に軽く触れた。

「大変……でしたね」

「そうでもない。こうして君たちが駆けつけてくれた。礼を言う」

リカは大きく首を横に振った。

「呪いについては、洗礼詠唱で解呪できるでしょう。私一人ではどうにもできませんが、せめて聖人があと一人いれば何とかかなります」

《ああ、可能性はあるよ。聖杯を持つのが竜の魔女ならば、その反動で聖人が召喚されているのはありうる話だ。キミたちにサーヴァントの宛てはあるかい?》

わたしが知るのはジャンヌさんたちと、竜の魔女の尖兵だけ。ジークフリートさんも、わたしたちが味方サーヴァントとの初遭遇だと言った。

手がかかりゼロの状態から、フランス国土を巡って、探さなければな

らないなんて……

「先輩？」

リカがわたしを見上げている。

……できっこないなんて口が裂けても言えない。特にこの子の前では。

わたしはリカの「先輩」なんだから。

「手分けして聖人を探しましょう。対象は同じサーヴァントですから、見つけるのは容易です。どう手分けするかは——」

「思いついたわ、わたし！ 今こそくじ引きをしましょう！」

マリー王妃が急にそんな明るい提案をした。

「アマデウス、作ってちょうだいっ」

「くじを引きたいだけだろう、君は。分かったって。それでグループ分けしよう」

「わ、わたしはリカとワンセットでお願いします！ リカはわたしのマスターで、わたしはリカの先輩ですから。離れるわけにはいきません」

「ん。その辺の機微はさすがに僕も承知してるさ。マシユが決まったグループに、自動的にリカも割り振るってことで」

くじの開票結果。

わたし。リカ。アマデウスさん。ジークフリートさん。

ジャンヌさんとマリーさん。

——という2グループに分かれることとなった。

オルレアン7

わたしたちは再び二手に分かれて行動を開始した。

わたしのグループはティエールという街を探索中である。

この街は、刃物の生産と売買が特産らしい。道行く店々では剣や盾をマークにした看板を頻繁に見かけた。

「ティエールには二騎のサーヴァントがいる。さっそくコンタクトしてみて……」

ドクター・ロマンの通信を遮るようなタイミングで、わたしたちの足元に陰が落ちた。

陰が発生するということは、太陽光を遮る何かが頭上にあるということで、上を仰げば——火柱が空を迸って、消えた所だった。

発生源は、おそらくこの先の広場。

「この雑音……イヤだ。イヤだぞう。ああ、救いの手を差し伸べてくれミューズたち！ ろくでもない予感がして震えが止まらない！」

アマデウスさんの予感は置いといて。

こんな現象、サーヴァントぐらいしか原因が思いつかない。きっとドクターが検知した二騎のしわざだ。なら、わたしたちが行かなければ。

「リカ。行ける？」

リカはこくこくと首を縦に振った。

「アマデウスさん、ジークフリートさん、付いて来てください！ 突貫します！」

わたしとリカ（リカは肩にフォウさんに乗せて）、同時に走り出した。怪我人のジークフリートさんがいるから、走りはしても、あまり速くなりすぎないように注意。

ティエールの街へ入ると、ちらほらと血相を変えて走ってくる住民が見て取れた。

もう確定だ。この先には超常の存在がいる。

人波に逆らって広場に出ると、そこにはドクターの解析通り、サーヴァントが二騎、いた。

ローズヘアから角を生やし、硬い尻尾らしきものもある紅い少女。花薄の上等な着物を着た、これも角がある、和な貴族娘らしき白い少女。

二名は罵り合い、攻撃し合っていた。

えーと……

……回れ右して見なかったことにしちゃだめですかね、これ？

「そこまで！　そこまでーっ！　それ以上は許せない、声という声、音という音への冒涇だっ！」

リカが小首を傾げてから。

「……聖人？」

「それこそ僕の怒りの日だ！　あれが聖人だったら世界の宗教はひっくり返る！」

と、ともかく止めないと。

この二名が聖人でなくても、噂話くらいは知ってるかもしれないし。

わたしは勇気を出して制止の声を上げた。

「その、ケンカはよくありませ——」

「引っ込んでなさいよ、子ヅカ！」

「無謀と勇気は違いますわよ。猪武者ですか？」

鹿にも猪にも喩えられたのは人生で初めてだ。

ええ、初めてだったものだから。両者の少女がまた不毛なケンカに突入した時に、つい、割って入って両者の攻撃を同時に盾で受けて、お二人に尻餅を突かせてやりました。

「えー、お二人からお伺いしたいことがあるのですが、よろしいですか？」

「……何よ」

「あなたたちの他にサーヴァントを見たことはありませんか？　竜の魔女やカーミラたち以外に。できれば聖人のサーヴァントの情報が欲しいのですが」

「——この国に広く根付いた教えの聖人ならば、ひとり心当たりがありませんが」

着物の彼女によると、危うく戦闘になりかけたが、相手は彼女が本来のバーサーカーだと気づいて剣を納めたという。彼の名は、ゲオルギウス。

「どこへ行ったか分かりますか？」

「残念。わたくしと逆方向、西側へ向かいました」

西はジャンヌさん・マリーさんペアが行った方角だ。

わたしはリカに説明した。リカは急いで通信機を取り出して、ジャンヌさんにコールした。そして、今しがた得たばかりの情報をジャンヌさんに伝えた。

《こちらでもサーヴァントを確認できました。今からコンタクトします》

「気をつけてくださいいね」

《ありがとうございます。マシユさん。またあとで》

通信が途切れた。

「上手くお話できるといいですね。ジャンヌさんとその聖人さん」

「同じ信仰の下もとに生きた人たちだもの。話は通じやすいはずよ。それまで……そうね。宿を探しましょう。ジークフリートさんの休息も含めて、次の連絡まで、少し気を楽しにして休める場所があったほうがいいと思うの」

「先輩がそう言うなら、いいと思います。休憩大事」

それなら、とアマデウスさんが立ち上がった。多少はフランスの土地勘がある自分が行くのが一番早いとのことだ。それに、この紅白少女たちから離れたいという気持ちもあったのだろうし、そこは汲んで差し上げよう。

わたしはリカと揃って手を振ってアマデウスさんを見送った。

わたしからは反対側に立っていたリカが、ジークフリートさんを不安げに見上げた。

「ジークフリートさん。体の調子はどうですか？」

「不思議だが、リカが触れたあとは楽になる。これは魔術というより、

リカがそういう体質なのかもしれないな」

触れた者から苦痛を取り除く。なるほど。ジークフリートさんの言には一理ある。わたしも、冬木でのアーサー王との戦いで、リカが寄り添って体が楽になった。

「あたしにできるの、この程度ですから」

この程度、であるものか。戦いの中にあつて、迅速かつ確実に負傷を治す力は黄金より価値がある。

つと、あれ？

「リカ。通信機鳴ってる」

「え？ あー！ ほ、本当だつ。すすすすみません、すぐ出ます！ —— はい、リカです！ ……ジャンヌさんっ」

通信の向こう側は、同じ通信機の子備を渡したジャンヌさん・マリーさんペアのどちらかでないから、わたしは驚かなかつた。聖人を味方につけた、という頼もしいニュースが続くことを疑わなかつたし、そこだけは当たつた。

ただ——

《マリーは、街に、残りました。竜の魔女から、街の市民を守るために……マリーは、彼女はもう、魔女のサーヴァントに、倒さ、れ……ツ！》

仲間の訃報まで聞く耳も心も準備できていなかったわたしは、笑顔を貼りつけてその場で立ち尽くした。

オルレアン 8

通信を一度切ってから何十分、煮え湯を飲む思いで待ったか。

ジャンヌさん、そして聖ジョージことゲオルギウスさんが、テイエールの街に合流しに来てくれた。

「マッシュさん！ リカさん！ ご無事でしたか!？」

「はい！ そちらも——」

無事でよかった、とわたしが言う前に、アマデウスさんがジャンヌさんに問うた。

「マリアはどうした?」

——ジャンヌさんがマリー王妃の最期の別れを、聞くわたしたちの耳が痛くなるほど克明に語った。

アマデウスさんはしばらく場を外した。

出発の時に声をかけるつもりだけど、果たして彼は付いて来てくれるだろうか？

しばらくして、ジャンヌさんとゲオルギウスさんによる、ジークフリートさんの解呪が成功した。マリー王妃が魔の手から逃がした星は、確かにわたしたちを助けた。

ありがとうございます、マリー・アントワネット妃殿下。

そして——これがあなたへの最期の黙祷になることをお許しください。

わたしたちは、人理守護の尊命を負ったカルデアの使者。前をまっすぐに向け続けなければいけない身だから。

「——よし、動くようになった。骨を折ってもらい、申し訳ない。マッシュもリカも。いや、マスター……そう呼んだほうが正しいか。貴女たちが骨を折ってくれたこと、心より感謝する。返礼として剣を預けよう。竜を殺す以外には能の無いサーヴァントだが、使ってくれれば光栄だ」

ええと。わたしの名前も込みで呼ばれても。わたしは「元」マスター適性者であって、今はデミ・サーヴァントだから、本当にマスターと呼ぶべきはリカだけなのですが。

ここでエリザベートさんと清姫さんも、協力を申し出てくれた。二人とも主目的は別にあるらしいが、戦力が増えるのは純粋に頼もしい。

《これで可能な限りの戦力が揃ったわけだ》

「はい、ドクター。となれば実行すべきは一つ——皆さん。オルレアンへ攻め上がりましょう」

隣のリカを窺うと、リカも、青い顔色だけど決然と頷いた。

今度はジャンヌさんが声をかけてきた。

「マシユさん。リカさん。今の私は力なきサーヴァントです。それでも、この世界を守りたいと願っています。そして、マリーが——私の初めての友達がその身を挺して守ろうとしたものを、私も守りたい。この時代、この世界、この国。そのために“竜の魔女”を、そして竜を倒しましょう。どうか、共に戦ってください」

「もちろんです、ジャンヌさん」

「ありがとう——」

わたしたちはついにオルレアンへと進路を取った。

昼から夕方、そして日が落ちて夜になる頃に、木の密集地帯を見つけて、そこでキャンプをすることになった。

困った事態はそのすぐあとに起きた。

少しキャンプを離れて小川に水を汲みに来ただけなのに、運悪く骸骨兵と遭遇してしまった。

しかもアマデウスさんと一緒に。

わたしが前に出るから、アマデウスさんは後ろに隠れていてもらうように言ったのだけど、彼は断った。それどころか明日の予行演習だと言って笑って前衛に出た。

不安だ。マリーさんを喪ってヤケになっているんだとしたら、わたしはどういう言葉を彼にかけてあげればいいんだろう？

敵兵を退けて平野に出てからも、その不安を払拭することができな

くて、つい質問形式でアマデウスさんに話しかけた。

「アマデウスさんは言いましたよね？ 『人間は好きなものを自分で選べる』と。その言葉が、わたしには分からなくて。だって、好意を持つべきものは道徳的に正しいもので、否定するべきものは社会的に悪いものです。わたしはそう教わりました。そして、それが正しいと感じるのです」

「ふうん。それじゃ、君が正しいと思うものは何？」

「それは……多くの命を救い、多くの生を認めること、でしょうか」

「じゃあ仮に、リカがそういう人物でなかったら？」

「それ、は」

「すまない。意地の悪い仮定だった。でもね、マシユ、君は多分、自由を得たばかりの人間だろう？」

頷いた。

わたしはカルデアの中でのみ活動を許されていた。しかも、短命の。どんなに自由以外の世界を歩いて、見聞きした何かに好意を抱いても、それらはあつさり死によって水泡に帰す。

「……そもそもわたしに、何かを好きになる資格はないのかもしれない」

好きになっても、どうせわたしはすぐ死んでしまうんだから。

「やれやれ。いいかい、マシユ。君が戦うだけの人形だとしても、何かを好きになる義務はある。自由はないかもしれないけど、義務はあるんだ」

義務？ 権利や資格ではなく？

「人間にはその責務がある。だって、ものを考える知性があるんだから。好き・嫌い、尊い・醜い。それは君が決めることだ。他人の言いなりになることでも、周りに合わせて考えることでもない。そしてどのようなカタチであれ、自分がいた『証』を残すんだ。僕はそうした。残された多くの曲がそれだ」

わたしが、いた、証。

限られた時間しかないわたしに、そんな大層なことができるんだろうか？

胸のもやもやを払拭できないままキャンプに戻ると、リカが泣きそうな顔をしてわたしの前まで小走りでやってきた。え、帰ってこないかと思った？ まさか。リカがいるとこならどこにだって帰ってくるに決まってる。だからほら、涙は拭いて？ ね？

向こうではアマデウスさんが、今度はジャンヌさんと肩を並べて語らっている。話題はきつとマリーさんのことだろうな。よけいな邪魔はすまい。

わたしはリカと並んで体育座り。おのおののサーヴァントが自由気ままに過ごすことしばし。

召喚サークルを通じてカルデアから食糧が送られてきた。

子供向けランチボックス。中には小さなサンドイッチが敷き詰めであった。サンドイッチの上にはメッセージカードがちよこんと添えられていた。

“いつも一緒だ”

“がんばれ”

“負けるな”

“みんな付いてる”

“無事に帰ってきてね”

“信じてる”

——スタッフの皆さんのエールがこんなに。

「いただきます」

リカは平坦に言ってから、ボックスの端からサンドイッチを口に入れては咀嚼して飲み込む、という動作をくり返した。食べている、のではない。ただ食事という運動をしている。そんな印象を抱かせる食べ方だった。

リカの栄養補給が終わってから、わたしたちは具体的にオルレアン

をどう攻略するかという討論に入った。

「この中で軍を率いた経験者は……どうやら俺だけらしいな」

「すみません、ジークフリート。私の生前は仏軍を『率いた』というより単に『陣頭に立っていた』だけです。貴方をお願いします」

「心得た。もつとも俺とて、国を軍で攻め落とす、という絢爛な軍歴があるわけでもないが。ともかく。我々の人数は少なく、そして敵の人数は多い。ただし、敵のほとんどは我々より圧倒的に弱い。こういう場合、取るべき戦法は、正面突破か、密かに背後を突くか。今回は――」

後者については、早い段階で竜の魔女のサーヴァント索敵能力に気づけたおかげで、選んではいけない戦法だと承知している。となれば、取るべき戦法は実質、一つ。

「正面突破」

「ということだ。ファヴニールは俺とマスターたちのグループが受け持とう。他はサーヴァントとワイバーンから俺たちを守ってほしい。俺たちがファヴニールを倒せるか否か。それがこの戦争の分岐点となる」

「了解しました。未熟ですが精一杯戦います」

隣でリカが不安げに俯いたので、わたしはリカの手に手を重ねた。リカはもう片方の手でわたしの手を握り返した。

「あ。アタシ、ちょっと殴り合わなきゃならない奴がいるの。アタシはそいつに専念してもいいかしら？」

――竜の魔女の尖兵には、血の伯爵夫人、もう一人の「エリザベト・バートリー」がいる。つまりはそういうことだろう。わたしたちはエリザベトさんに頷き返した。

「そ、ありがと。ま、暇だったらそのあとも手伝ってあげていいけど」
この布陣だと、必然的にジャンヌさんが竜の魔女を相手取ることになる。

「心配ご無用。彼女が本物の『ジャンヌ・ダルク』であったとしても、私は勝ちます」

アマデウスさんと清姫さんは、支援にワイバーンの攪乱役を買って

出てくれた。

配置と覚悟は全員が問題なし。

——ならば、いざオルレアンへ進軍だ。

それぞれの目的のため、わたしとリカは世界を救う一手のために。

この歪んだ聖杯戦争に、終止符を打つ。

オルレアン9

オルレアンに構えられた敵の牙城に攻め上がるまでもなく、戦端は開かれた。

空に地に。壁役のワイバーンが無数にいて、わたしたちの進撃を阻んでいた。

〈予想できて然る光景だが、実際に見るとゲンナリするな……〉とはいえ手間取ることは許されない。全員、できるだけ迅速に突破を

「了解しました。——リカ、わたしから離れないで。突貫する」

「はい先輩っ」

「フオウっ」

リカとフオウさんがわたしの背中にぴとりと付いたと同時に、ワイバーンの一頭がわたしに突進してきた。

ここでわたしも札を切る。魔力防御を盾の表面に集中させた。盾にぶつかったワイバーンは弾かれたものの、わたしたちも後退を余儀なくされた。

でも、大丈夫。わたしたちのチームには今、ジークフリートさんに加えてもう一人の「竜殺し」がいる。

「汝は竜なり！ 罪あり！ 力屠る祝福の剣！」

一刀両断。ゲオルギウスさんの真一文字の剣閃は、射線上にいたワイバーンをまとめて斬って倒した。

「さあ！ このアスカロンにかかりたい竜から前に出なさい！ ゲオルギウスの名において、汝らを一頭残さず主の御許に送って見せましょう！」

もちろんゲオルギウスさんだけじゃない。元祖「竜殺し」のジークフリートさんの勇壮ぶりも負けてはいないし、ジャンヌさんだつて、初めて会った日のように独力でワイバーン一頭を相手取りながらも決して引けを取ってはいない。

竜種の壁を突破したら、今度はサーヴァント——竜の魔女の尖兵たちが立ち塞がった。

真名は不明の、翠衣の女アーチャー。

ドラグーン
竜騎兵、シユヴァリエ・デオン。

串刺し公、ヴラド三世。

血の伯爵夫人エリザベートの完成形、カーミラ。

そして――

「こんにちは、私の残り滓」

ファヴニールに悠然と跨って地上へ降りてきた、ジャンヌさんの鏡写しの姿をした、黒い聖女――竜の魔女。

「今何を言った所で貴女に届くはずがない。この戦いを突破してから、存分に、言いたいことを言いに行かせてもらいます！」

「ほざくな！ この竜を見よ！」

竜の魔女が高らかに掲げた両腕の後ろには、空を覆い尽くさんばかりの大量のワイバーンが飛び交っている。

悪い冗談みたいな光景だ。背中にしがみつきリカの、手をせめて握ってあげるのが精一杯。

もしこのワイバーンたちを全滅させなければいけないなら、はつきり言って戦う前から負けている。でも今、竜の魔女が乗るファヴニールさえ斃せたなら――ワイバーンの指揮系統は混乱して、敵陣に大ダメージを与えられるはずだ。

「今や我らが故国は竜の巣となった。あらゆるモノを食らい、このフランスを不毛の土地とするだろう！ 無限の戦争、無限の捕食。それこそが真の百年戦争――邪竜百年戦争だ！」

竜の魔女が高らかに宣言した直後だった。魔女が最も恃みとするファヴニールに、大砲兵器から放たれた巨大な弾丸が炸裂した。

ファヴニール直撃の振動で、竜の魔女は小さく舌打ちして地面に飛び降りた。

無謀にも、と言うと失礼だから、勇敢にも。そう、勇敢にもファヴニールを攻撃したのは、フランス軍だった。

――彼らは知っている。わたしたちと一緒にいるジャンヌさんこそが本物の聖女ジャンヌで、黒いほうは偽者だと！

わたしはリカと頷き合った。

「皆さんの敵との決着を！ 全て終わったら合流しましょう！――

総員、散開!!」

エリザベートさんは脇目も振らずにカーミラへ向かって行った。アマデウスさんはというと、どちらかというど敵のほうからアマデウスさんを目指してきたようだった。あれは、輪郭がボヤけていて――敵の正体が分からない。アマデウスさんは心当たりがある節を浮かべたから、任せて大丈夫だろうけれど。

最初の打合せ通り。わたしとリカ、そしてジークフリートさんはファヴニールに集中して戦う。ゲオルギウスさんと清姫さんが露払い役だ。

「ファヴニール！ 俺はここにいる、ジークフリートはここにいるぞ！ 再び貴様を黄昏に叩き込む。我が正義、我が信念に誓って――!!」

大剣を抜いたジークフリートさんに、並んでわたしも盾を構えた。「せ、先輩とジークフリートさんにはっ、あたしが、魔力供給しますっ。絶対切らせませんから、ドカンと使っちゃってください！ 他にも、れ、礼装の機能で、応援、しますっ、から……っ」

「ありがとう、リカ。大丈夫。あなたの先輩を、信じて」

「はいっ！」

「ファウフオーウ！」

と、答えたはいいものの……こうして実物と対峙すると、弱気な自分が顔を出してしまいそう。ワイバーンなんか目じゃない巨大さ、それに凶悪さ。

予定していたアマデウスさんとマリー王妃のコンビネーションアタックができない今は、ジークフリートさんだけが頼りだ。

無論、わたし自身もベストを尽くす。

ファヴニールが前肢を振り上げた。その鋭い鉤爪でわたしたちを裂く気なら、させはしない。わたしは大きく前に盾を構えながら出たが――予想外の地響きによって態勢を崩された。

ファヴニールはただ前肢で大地を叩いただけだった。それだけで

この震度。敵の質量を見誤ったわたしの失策だ。ほら、今にもファヴニールのもう片方の前肢の鉤爪が、立て直せていないわたしに迫って来て――

「緊急回避、付与しますー!」

供給された魔力がサーキットを駆け巡った。魔力には「避ける」という指向性が染み込んでいた。わたしの手足は意思と無関係にその魔力に引つ張られて、わたしの肉体は信じられないアクティブなアクションを起こして、ファヴニールの鉤爪を躲した。

「マシユー!」

「すみません、初手でミスしました! リカバー利きますか!?!」

「この程度ならミスにも入らん」

よかった。まだ挽回のチャンスはあるみたいだ。

それにしても、さっきの回避力アップ。直前にリカの声が聞こえた。礼装の効果とはこれらしい。おかげで助かった、ありがとう、と伝えてあげたいけど、それらの礼はまとめてこの邪竜を討ち倒してからしよう。

次の敵の攻撃は、火炎放射だ。今度こそわたしの盾の出番だ。

スキル「魔力防御」発動。これは魔力放出と同タイプのスキルで、放出する魔力をそのまま防御力に変換する。

ファースト・エンカウントではジャンヌさんの守護結界と合わせて防壁を保たせたけど、今は。

「魔力回路、封鎖した第57ラインから第70ラインまで開通! 全ラインをサーヴァントへのパスに編入し魔力供給率アップ!」

今のわたしには、リカというマスターがいる。

――初めてファヴニールを見た時に怯えていたこの子が、今はわたしと一緒に邪竜に立ち向かおうとしている、けなげな後輩へと成長した。リカがくれる魔力は、「魔力防御」に費やす魔力量を否応なく上げてくれる。

炎を防ぎ――きった!

ここからは想定戦でやったことを実行に移すまで。

ファヴニールの虚を突く一撃、ジークフリートさん、お願いします

よ！

「邪悪なる竜は失墜し、世界は今落陽に至る。撃ち落とす！」

ジークフリートさんの魔剣そのものの剣閃と、翠のシヨックウェーブがファヴニールを襲った。ファヴニールは胸部から血を噴き、もんどり返って悲鳴を叫んだ。

目晦ましのために竜殺しの魔剣を使うなんて贅沢に過ぎるんだから、このあとのわたしの大役に失敗は許されない。

わたしはがら空きのファヴニールの巨軀の下に駆け込み、本日二度目の魔力防御の反動を利用して。

「瞬間強化、付与します！」

また両足にリカの魔力が迸った。わたしは勢いをつけて宙へ跳び上がり、盾からファヴニールに全力でぶつかって魔力を放出した。

「だああああああ——!!!」

——聖女マルタとタラスクとの闘いで大切なポイントを知った。竜が亀の形をしていようが巨体だろうが、一度ひっくり返った竜種は、自力では元の姿勢に戻れない。

わたしはタラスクの時よりさらに全力でファヴニールを逆さまに押し倒した。ファヴニールの動きを封じることが成功したのだ。

けれど、ここでわたしにも限界が来た。肺が新鮮な酸素を求めて、荒い呼吸をくり返した。足が、手が、酷使した反動で震えて使い物にならない。

「先輩、応急手当です！」

ふわっ、と体が軽くなった。

わたしは急いで、ファヴニールの腹部の上から飛び降りて距離を取った。

「再び土に還れ、邪竜——！ 幻想大剣・天魔失墜！」

冬木の地下空洞で見たアーサー王の聖剣とは異なる。竜殺しジークフリートが魔剣より放つ光は、寂滅の裁断だ。眩いものではなく、宙に余韻を残すことのない、ひたすらに竜を殺すために磨き抜かれた刃とでも喩えるべきか。

大威力の剣閃と、「ファヴニールを殺した剣による一撃」という概念

を一刀に束ねて食らったファヴニールは、断末魔を上げて、消滅していった。

《ファヴニールの完全沈黙確認！　すごいな、新たなドラゴンスレイヤーの誕生だ！》

……やった……の？　わたしたち、あの邪竜に勝てた、の？

脱力して尻餅を突きそうだった所に、横からリカとフオウさんがセツトで体当た——もとい抱きついてきた。

「先輩、先輩っ。よかった、元気で……！」

「フオウ、フオウ、フオウ！」

わたしは苦笑してリカの髪を梳いた。それからフオウさんのモコモコの毛並みを撫でた。

戦闘の要所での確に支援してくれたね、リカ。ちゃんと分かっているよ。

「リカ。いいえ、マイ・マスター。たくさんのお支援をありがとう」

「よけいなことじゃ、なかった……ですか？　あたしのしたこと、先輩の邪魔にならなかった、ですか？」

「まさか。全部に助けられたわ。本当にありがとう、リカ」

リカは深い安堵を顔にありありと浮かべた。喜びではない、安堵、だ。それが奇妙な印象を残した。

オルレアン10

わたしたちがファヴニールを撃破したことで、竜種の士気は一気に崩れた。

ジークフリートさんは言った。ここまで来ればあとは自分たちがやってみせるから、先に行ったジャンヌさんを追え、と。

——ジャンヌさんはわたしたちに先んじて、竜の魔女たちの本拠地である監獄城チエイテに、単身乗り込んだ。安否が気遣われる。わたしたちも追うべきだという意見には賛成だ。

「清姫とエリザベートを連れて行け」

「承りましたわ。よろしくお願い致しますね、お若いマスターさん」

「それはいいけど。ねえ、どうしてアタシたちなの？」

ジークフリートさん、それにゲオルギウスさんとアマデウスさんまで苦い顔をしたのは何故でしょう？ 不思議がるエリザベートさんと清姫さんと揃ってわたしも首を傾げた。

わたしとリカ、それにエリザベートさんと清姫さんは、監獄城へ攻め上がった。

ちよつとした疑問は解明されなかったけれど、そこはまあ、のちのちでも構わない。

——突入した監獄城の内装は、語る言葉を持たないほどに最悪だった。清姫さんの言葉を借りるなら、血腥くて、洗浄もせずだらしない。こんな城内を駆け抜けるのかと思うと気が滅入ったが、わたし以上に顔を悪くしているリカを見て、先輩のわたしが崩れるわけにはいかない。

「リカ、走れる？」

「はい先輩っ」

「フォーウー！」

「いい返事よ。さ、ジャンヌさんを追いましよう」

エリザベートさんの案内で（何故彼女が城内を案内できるかは深く

追求しない)廊下を走っていると、前方から会話が聞こえてきた。片方はジャンヌさんの声だ。

《注意して! ジャンヌの他にもう一騎、サーヴァント反応がある!》

「は、はいですっ」

「フオフオウ!」

ここで急停止。ジャンヌさんが旗を構えて敵サーヴァントと対峙していた。

「ジル・ド・レエ。彼女は本当にジャンヌわたしなのですか?」

おどろおどろしい本を片手に持つ黒魔術師が、剥き出しの眼球をさらに剥いた。

「何と……何と何と何と許せぬ暴言! 聖女とて怒りを抱きましよう、聖女とて絶望しましょう! あれはまぎれもないジャンヌ・ダルクだというのに!」

「――、そうですか。ですがいずれにせよ、私は彼女と対決します」

「ジャンヌ。たとえ貴女といえども、我が聖女の邪魔はさせませんぞ!」

ジル・ド・レエ。聖女ジャンヌに付き従ったフランス軍元帥の一人。

その凋落は、現代に『青髭』と語られる通りの怪奇な精神模様を描いていた。

だって彼は、ジャンヌさんを「ジャンヌ・ダルク」だと正しく認識している。その上で竜の魔女を「ジャンヌ・ダルク」だと確信している。こんな救い様のない矛盾をわたしは初めて見た。

ここで清姫さんとエリザベートさんがジャンヌさんより前に出て、おのおの鉄扇と槍を青髭のジルに向けた。

「このサーヴァントは我々が抑えます。貴女たちは先へ!」

「ラスボスとの決着をつけてきなさい!」

ジャンヌさんが戸惑いがちに、わたしとリカをふり返った。わたしは頷いてみせた。

「お二人ともありがとうございます! ——進みます!」

肥大化したヒトデのような怪物がわたしたちの道を遮ったけど、それらは全てジャンヌさんが旗で薙ぎ払った。

わたしたちはジャンヌさんと並んで、青髭の横を大きく迂回して通り抜けた。

「ドクター！ 竜の魔女の反応はサーチできますか!？」

《任せろ！ その城内で最も魔力値が高い、つまり聖杯とワンセットと思しきサーヴァント反応は一騎のみ。ナビに沿って進んでくれたら、ついに竜の魔女とご対面だ！ 心の準備はいいね!？》

「はいー!」

——ドクター・ロマンのナビゲーションに従って走って、おそらくは城内の最も深い部屋の前で、一度立ち止まった。

ジャンヌさんが部屋のドアに両手をかけた。

「行きます」

ごく、と息を呑みながら、頷いた。

開け放たれた扉。

天井の高い大広間の中央に、黒い聖女が佇んでいた。

「とうとうここまで辿り着いてしまったんですね。ジルは——まだ生きていますが足止めされましたか。まあいいでしょう。こちら準備は整っています」

「……貴女に伝えるべきことを伝えろ。これはマリーの言葉です」

「今さら対話など」

「簡単な問いです。貴女の名前は何ですか？」

「——、え？」

ジャンヌさんがどういう意味で、そんな問いを竜の魔女に投げかけたのか、わたしにはさっぱり分からなかった。

調停者然としたジャンヌさんの表情が、綻んだ。懐かしい思い出に心を馳せるように。

「ジャネット。それが故郷のドンレミ村で、両親が、兄弟が、友達が呼んでくれた、『聖女ジャンヌ』でなかった頃の『ただの私』の名前。村を出て、戦場を駆け抜けたのはたった2年。17年間の『ジャネット』の思い出を私は決して忘れたことはありません。貴女も。私だとい

うなら、忘れられないからこそ、裏切りや憎悪に絶望し、嘆き、憤怒したはず」

竜の魔女は明らかに狼狽した。黒い旗は床に落ち、彼女は自身の両手を見下ろして、その両手で頭を抱えた。

「記憶が、ないのですね」

ああ、そうか。

竜の魔女は地獄から蘇ったかつての聖女でもなければ、「ジャンヌ・ダルク」の闇の側面でもない。

記憶が「ない」とジャンヌさんは表現した。記憶を「忘れている」ではない。竜の魔女には「ジャンネット」の時代の記憶が「最初から存在しない」んだと。ならば彼女は――

「そう――これで心が決まりました。竜の魔女。私は怒りではなく憐れみを以て貴女を倒します」

「黙れッ!! ならば勝負だ。お前の憐れみで、私の絶望と殺意を超えられるか。やってみせろ、聖女ジャンヌの光の側面!」

ついに。竜の魔女が自ら旗を構えた。

―― 一分一秒でも早く、彼女の復讐を終わらせてあげよう。わたしにもジャンヌさんにも、できること、彼女にしてあげられることは、それくらいだ。

踏み出したのは、ジャンヌさんと竜の魔女と、同時だった。

気づけばわたしの目の前で二人は距離を詰め合い旗をぶつけ合い

―― 一瞬の間があつて、シヨックウェーブがここまで波及した。

「リカっ、わたしの後ろに――リカ?」

「は、はいっ。すいません、先輩……」

リカが萎縮するのも無理はない。正直に言つて、わたしも圧倒されている。ルーラーの底力を侮っていた。援護するにも、あの二人の戦い、割つて入る隙なんてないんじゃない……

「この憎悪と復讐は私のもの!! あんな末路を迎えながら、怒りすら湧かない壊れた貴様がジャンヌ・ダルクのわけがない!

ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン
吼え立てよ、我が憤怒!」

禍色の槍の雨が降って来た。これは、竜の魔女の宝具!? わたし、

わたしがすべき行動は——そう。盾を傘状に展開して、リカの姿勢を低くさせなければ。

「先輩ッ！ きゃ……!?」

至近距離に落ちて床を抉った槍が1本。その余波でリカが吹き飛ばされて、壁際まで転がった。

「リカツ!! ——こ、のお!!」

わたしは盾に全体重を乗せて、竜の魔女にボディータックをくり出した。真正面からぶつかられた竜の魔女がたたらを踏んだ隙に、わたしは急いでリカのもとへ駆けつけた。

「フォウ、フォーフォウッ」

「リカ、しつかり……!」

「——ちが、う」

「え？」

「せん、ばい。ジャンヌさん、も。ダメです。ちゃんと、向き合わないと。あの人と——あの人を、——」

隣れんじやいけません。

それだけを言うために意識を保っていたかのように、リカは気を失った。

大丈夫。リカは大丈夫だ。こうして気絶はしても、血は流していないし、きつと致命傷は負っていない。だから大丈夫、だから——わたしは自分にそう言い聞かせようとしたけれど。

ぷつり、と。

何かが切れる幻聴がして、頭がクリアになった。

「フォウ……」

「——フォウさん。リカをお願いします」

わたしは盾を持ち直して立ち上がり、竜の魔女を顧みて——突貫した。

盾を衝動に任せて竜の魔女にぶつけた、ぶつけた、ぶつけた。
わたしの中で燃え上がる、二つの気持ち。

——わたしの後輩をよくも痛い目に遭わせてくれたな、って。

——あの子のケガがひどくてあの子が二度と目覚めなかつたらど

うしてくれるんだ、って。

記憶の有無？ 「ジャンヌ・ダルク」の真贋？ どうでもいい。彼女がどういう事情の何者だって、彼女がリカを傷つけた事実が変わりはないんだから。

「この、っ、盾女……！ しつこい！」

竜の魔女が旗で盾を殴りつけた。その威力に、わたしは踏み留まっていられなかったが、上等だ。竜の魔女を苛立たせてやっただけでも、この感情も少しは治まるってもの。

それに、ほら。

わたしに気を取られている竜の魔女に、ジャンヌさんが必殺を期して迫っている。

「しまっ……！」

ジャンヌさんが竜の魔女の腹部を旗の石附で突いた。おそらくはワイバーンを潰す時と同じ威力を込めて。

竜の魔女は大きく吹き飛んで、背中を壁にぶつけて、そこにずり落ちた。胴当ては砕けて、吐血している。

——勝負あった。

「そん、な。嘘だ。だって私は、聖杯を、所有して——」

大広間のドアが激しく開け放たれた。大広間に踏み入ったのは、青髭だった。

わたしは急いで、リカとフオウさんのいる壁際まで下がって、盾を構えて防衛態勢を取った。

「おお、ジャンヌ！ ジャンヌよ！ 何という痛ましいお姿に！」

「ジル……」

「ですが、このジル・ド・レエが参ったからにはもう安心ですぞ。さあ、安心してお眠りなさい。大丈夫。貴女が死ぬはずがない。ただ、少しだけ……少しだけ、疲れただけ。目覚めた時には、私が全て終わらせています」

竜の魔女は弱々しく微笑んだ。

「そう、そうよね、ジル……貴方が戦ってくれるなら、安心、して……」
黄鉛色の目を瞼が閉ざすより早く、竜の魔女の肉体は分解、消滅し

た。

ジルが立ち上がった。掲げた片手に現れた、あれは、金に輝くゴブレットだ。あれが――

「聖杯――！」

「察しのよいお嬢さんだ」

ジルはぞつとするほど人好きのする笑顔を刷いた。

戦う前のジャンヌさんとの問答ではつきりした。竜の魔女は、被造物だ。しかも自然あるいは偶然に発生した存在ではなく、第三者が意図して仕立て上げたものだ。

「ジル。貴方は、『ジャンヌ・ダルク』を造ったのですね。貴方が手に入れた聖杯を炉心として」

「私は貴女を蘇らせようと願ったのです。心から願ったのですよ。当然でしょう？　しかしそれは聖杯に拒絶されました。万能の願望器でありながら、それだけは叶えられないと！　だが、私の願望など貴女以外には無い！　ならば新しく創造する！　私が信じる聖女を、私が焦がれた貴女を！」

「――もし私を蘇らせることができたとしても、私は『竜の魔女』になど、決してなりませんでしたよ」

ジャンヌさんの否定はとても透明で、柔らかかった。

「私が祖国を恨むはずが、憎むはずがない。だって、この国には貴方たちがいちたのですから」

「……お優しい。あまりにお優しいその言葉。しかし、ジャンヌ。その優しさゆえに、貴女は一つ忘れておりますぞ。例え貴女が祖国を憎まずとも、私は！　この国を！　憎んだのだ！　貴女は赦すだろう、しかし私は赦さない！　滅ぼしてみせる、殺してみせる。それが聖杯に託した我が願望！　我が道を阻むな、ジャンヌ・ダルクウウツ！！」
どうして？　ジル・ド・レエの叫びはどれも邪悪なものばかりなのに――胸を、衝いた。

確かなことは一つ。

彼は彼の中の妥協できない何かのために、心底求めているジャンヌさんをも敵に回した。

「……………そう、ですね。貴方が恨むのは道理で、聖杯を得た貴方が国を滅ぼそうとするのも、悲しいくらいに道理だ。そして私は——それを止める。聖杯戦争における裁定者^{ルーラー}として」
今さらになって気づいたことがある。

——ジャンヌさんの瞳が揺らいだことは、結局、出会ってから一度もなかったな。

ああ——心だけじゃない、全身に染み込むように理解した。

これを人は——信念、と呼ぶのですね。

オルレアナー

ジル・ド・レエの宝具「螺煙城教本」ブレラーティーズ・スベルブック発動によって、大広間に大量召喚された、ヒトデ型をした海魔。その群れが四方八方からわたしたちに迫ってくる。

「ジャンヌさん！ わたしが露払いに徹します！ ジャンヌさんはジルとの決着を！」

「ありがとう、マシユ。後顧の憂いなく、ただ前へ——行きます！ ジル！」

粘液の跡を残しつつこちらに迫ってくるのが1:2:2体。わたしは盾の表面に魔力をコーティングして、2体の怪魔を殴り払った。露払いを引き受けたはいいが、正直、リカとフオウさんを護りつつ単騎戦は、わたしにはまだ早すぎる。

ええい、ままよ。ここで、リカの前で、頼もしい姿を見せられないで何が「先輩」だ。

そこで何の前触れもなく、大広間のドアが外から勢いよく開放された。

「見つけた！」

「いきなり逃げ出すとは……っ」

「エリザベートさん、清姫さん！ 来て早々すみませんが手伝ってください！ ジャンヌさんとジル元帥の決闘をこいつらに邪魔させるわけにはいかないんです！」

「え!? アタシがない内メインステージ終わっちゃったの!? クライマックス突入しちゃったの!? 何それ聞いてない! ものすっごい急いで追ってきたのに〜!」

「エリザベートったら。みつともない体たらくを晒すんじゃないもん。それでも竜種の女なの？」

「むう〜」

「……あれ? このお二人、実は仲がよろしい？」

「ま、いいわ。要はコイツらまとめて挽回ちゃえばいいんでしょ？」

清姫! どっちが多く獲ったかで勝負しましょうよ!! アタシたち

みたいのにはお似合いでしょ?」

「粗野な人。ですが趣向としては悪うございませんわ。乗りましよう。——さあ、たかが異界のクリーチャーふぜい。どちらの竜の牙に噛み砕かれとうございまして?」

キュピイイイイイイイイイイイイ!!!

エリザベートさんは巨大槍を、清姫さんは鉄扇を手に、同時に怪魔の群れへと突撃した。

これはわたしも負けていられない。彼女たちのフォローをしないと。ひいてはそれがジャンヌさんの決戦に貢献するはずだ。

考えているそばから、清姫さんの背後に怪魔が迫っているのを、わたしは見咎めた。

わたしは爆ぜるように駆け出し、その怪魔の個体を盾によるボディアタックで遠ざけ、撃破した。続く2体目も、盾をフルスイングして殴って沈黙させた。

もうそれなりの数の海魔を撃破したと思うのだけど、怪魔の肉の壁は未だ健在。

とにかく数が規格外。しかも、中途半端に斬り損じたら、分裂して個体を増やす。これじゃイタチごっこ。

「ロード仮想展開／カルデアス人理の礎!! ——これで怪魔はしばらくしのげます! 皆さん一旦集合、集合でーす!」

エリザベートさん、清姫さん、無事離脱。後ろにいたりカもフォウさんを抱っこしてやって来た。よし、全員集合。

「いいですか? あの怪魔の群れを殲滅するには、一瞬にしてあれら全てを焼き払うだけの火力が必要です。あの群れを焼き尽くし、なお被害はこの城に押さえる。お二人には、そんな宝具はありますか?」
「アタシの宝具は全体攻撃だけど、味方もろともらしいのよね。おかしいなあ。アタシの歌は、敵には強力なソニックウェーブでも、味方には激励ソングに聴こえるはずなのに」

「……………」

「清姫さん?」

「この広間の中のバケモノどもを殲滅すればよろしいのでしょうか?」

でしたらわたくし、できましてよ」

え……ええええええ?!?!?

「お若いマスターさん。小指を出してくださいませ」

リカはおずおずと右手の小指を立てて清姫に差し出した。対し清姫は、彼女自身も左手の小指を上げて、リカと指切りをした。

「ゆーびきーりげんまん。うそついたらはりせんぼんのーます。ゆびきった。——はい。これで仮契約は完了です。改めてマスター。わたくしに魔力をありったけ回してくださいまし。有象無象を間引きます」

「は、い。『清姫さん。ここにいる海魔を全滅させてくださいー!』」

リカの右手の甲から令呪の一画が消えた。

清姫さんが立ち上がって、守護円陣の範囲外に出た。

——その、転身。骨が折れては接着する。肉が盛り上がっては弾けて鱗へ変わる。白い和装束は裂け散って、やんごとなき姫の面影は失せた。そこに出現したのは、ワイバーンの巨軀にも届かんばかりの白い大蛇。

『転身——火生三昧ツツ!!』

大蛇が清姫さんの声で叫び、口から火を噴いた。壁の隅のホコリをこそげ落とすように、蛇の清姫さんの火炎放射で、壁際に追いやられていた海魔は次々と黒炭へと変わって、皆消えていった——

わたしは守護円陣を解除した。

もう海魔の脅威はない。わたしたちにできることは、ジャンヌさんの決戦を見届けるくらいだ。

いえ、一番大事なことがあった。着物を装い直している清姫さんにお礼を言わないと。

「清姫さん。ありがとうございます。あなたのおかげです」

「あ、ありがとうございます……ごさい、ましたー!」

「フオフオウ!」

一呼吸分の、間。

「——あなた方。一つ答えてください。どうかこの質問に嘘はおつきなさいませんよう。——わたくしは、醜いですか?」

「そんなっ。とても頼もしかったです」

「妖怪大戦争みたいでかつこよかったです!」

清姫さんはきよとんとした様子だったが、やがて鉄扇で口元を覆ってコロコロと笑い出した。ご満足頂ける回答だったと思って、いいのかな?

大きな打撃音があった。わたしは急いで奥をふり返った。

——床に大の字に倒れたジル。そのジルに旗の石附を突きつけたジャンヌさん。

「ジル。もういいんです。もう大丈夫です」

ジャンヌさんの瞳に、やはり、迷いや揺らぎはない。

「休みなさい。貴方はよくやってくれた。右も左も分からぬ小娘を信じて、この街の解放まで。私はあの時の貴方を信じている。——大丈夫。私は最後の最後まで決して後悔しません。私の屍が、誰かの道へ繋がっている。ただ……それだけで、よかったです」

「……ジャンヌ。地獄に堕ちるのは、私だけで——」

キヤスター・ジル・ド・レエが粒子化して消滅した。肉体と精神と仮初めの魂の三位が滅ぶ刹那まで、ただジャンヌ・ダルクに幸あれと願いながら——

通信端末のコールが鳴った。

《聖杯の回収を完了した! これより時代の修正が始まるぞ! レイシフト準備は整っている。すぐにでも帰還してくれ》

「はい、ドクター」

「了解しました」

リカが通信端末を切ると、ジャンヌさんが間髪入れずわたしたちに声をかけた。

「もう、行かれるのですか?」

首肯した。この時代この国で、わたしたちカルデアは成すべき任務

を完遂した。

「そうなの？　ふうん……まあ、目的は果たしたし良しとするわ。じゃあね、子ジカに子ウサギ。悪くない戦いぶりだったわよ」

エリザベートさんの肉体が粒子化して消滅し、

「袖振り合うも他生の縁。貴女がたとの共闘は胸ときめくものでしたが——ああ、また安珍様の背中が遠くなってしまうました。寄り道が過ぎましたわ。すぐに追いかけてませんと。わたくし、これにてお暇致しますね」

次に、清姫さんの肉体が同じく粒子化して消失した。

きつと城の外で、ジークフリートさんにゲオルギウスさん、アマデウスさんも『座』に還っていっただろう。

「リカさん。マシユさん。おそろく、こうしてお二人と出逢ったことも、戦ったことも、失った命すら、『無かったこと』になるのでしょうね。私はそれが、少し悲しい。でもいつか、また違う形で巡り会えるなら——さようなら。そして、ありがとう。全てが虚空の彼方に消え去るとしても。残るものが、きつと——」

——意識が引力へ。レイシフトの波が迫っている。

——わたしはリカに手を差し出した。リカは、はにかんでわたしと手を繋いだ。

——意識が意味を消失する——

次に目を開けた時、わたしたちはコフィンの中から青い管制室に戻っているはずだ。

青い中央管制室。

コフィンから出たわたしたちを一番に迎えたのは、ドクター・ロマンだった。

「おかえり、マシユ、リカ君。お疲れ様」

閉鎖的な寒色の広い管制室にあって、今この時、ドクターの笑顔が眩しい。

「初のグラウンドオーダーはキミたちのおかげで無事遂行された。——うん、本当によくやってくれた。補給物資も乏しい、人員もない、そして実験段階のレイシフトという最悪の状況で、キミたちは最高の成果を出してくれた。15世紀フランスの修正は完璧だ！キミたちは七つの内の一つをあるべき人類史に戻したんだ！」

ああ、そうか。

わたしたち、やれたんだ。達成したんだ。ほんの一步だけど、確かに世界を一つ救えたんだ。今さらになって実感が込み上げてきた。

「管制スタッフ、起立！」

コンソールとそれぞれに向き合っていたスタッフさんたちが、一糸乱れぬ動きで立ち上がると、わたしたちを見た。人生初の大注目。

「生き残った全カルデアを代表して、ボクらから感謝を。キミたちはもう一人前の、ボクらカルデアが誇る、新しいマスターとサーヴァントだ！」

拍手が沸いた。スタッフはそれほど多いわけじゃないけれど、きっと、何万人もの人から貰う拍手より、胸に染み込んだ。

隣のリカを見ると、この子も慣れてないみたいで、困った顔でわたしを見上げてきた。

——でも、よかった。上手くやれて、本当によかった。

乱世―時に煙る白亜の壁― セプテム1

体温を確認する。五感を確認する。

客観的にも分かるよう、わたしの名前を口にする。

眠るたびに消えるかもしれないと言われてきた自意識は、今日も、正常に覚醒した。

そつ、と隣ですやすや眠る後輩の顔を覗き込んだ。

――彼女は藤丸立香^{フジマルリツカ}。普段は「リカ」と名乗って、みんながそう呼んでいる。わたしを「先輩」と呼ぶ奇特な女の子で、わたしのマスターでもある。

「フォウフォウ」

フォウさんが起きて、眠るリカの頬を舐めた。そうするとリカの瞼が震えて、覚醒に向かう。リカが開いた目に一番に映すのは、わたし。

「……先輩、おはようございます」

「おはよう、リカ。先にシャワー使う？」

「いいえ。先輩、お先にどうぞ。あたしは次に浴びます」

「じゃあ、お先にお湯頂かね。終わったら」

「朝ごはん食べに食堂。ごはんが終わったら、ブリーフィング……でよかったですっけ」

「満点」

「はいっ」

――わたしたちは順に朝のシャワーを浴びて、それぞれに着替えて身繕いを整えてからマイルームを出た。それから食堂で朝食を頂いて、中央管制室に向かった。

わたしとリカ（肩にフォウさんを乗せている）は朝の管制室に出頭した。

管制室では、フランスの任務出発前と同じく、ドクター・ロマンが

忙しくスタッフの指揮を執っている。今回は、ダ・ヴィンチちゃんはいないようだ。

——ドクターによると、次のレイシフト先は1世紀のローマだった。紀元という暦が始まったばかりの、今や名残だけの古き帝国。どんな世界を旅することになるのか想像もつかない。

「人類史の存続はキミたちの双肩に懸かっている。どうか今回も成功させてほしい。……そして、無事に帰ってくるようにね」

締めるべきは締め、親愛の情を示すことも忘れない。それが今のドクター・ロマンだ。以前は掴み所のない主治医さん、という印象だったのが、グランドオーダーが始まってからずいぶん変わった。

「必ずカルデアに帰還します。リカと一緒に」

リカはわたしの目線を受けて、微笑んでわたしと手を繋いだ。十指を絡め合う、いわゆる恋人繋ぎ。やましい意図はありません。

ドクターの号令を受けて、わたしとリカはコフィンにそれぞれ入った。

レイシフトプログラム——スタート。

………

…

今回の転移も無事成功した。

わたしはリカと並んで、雄大な景色を見渡した。

深呼吸した。薫る風が心地よかった。

「ンキュ、ンキュ」

盾の収納スペースから出てきたのは、置いて来たと思ってばかりだったフォウさんだった。フォウさんは一直線にリカの肩に飛び乗った。

「ご、ごめんなさい……あたしです。また付いて来てもらっちゃいました」

「フォウフォウ、ンキュー！」

フォウさんの言わんとする所は分かる。わたしがリカのそばを離れた時でも、フォウさんが付いてると思えば気が楽になる。そういう

意味ではフォウさんも戦友だ。

「キュウ、キュイ」

フォウさんが空を見上げるように言ったので、わたしたちは言われた通りにした。

……フランスと同じだ。光る環が衛星軌道上にあって、空を覆っていた。

前回は「あれは何？」という疑念で済んだけれど、今は、あの光の環にどこか圧倒される、ような、気分というか。

《おや？　そこは首都ローマではないのかな？》

「あ、はい。現在地は丘陵地帯です。羊がいないのが惜しまれるほどの」

《あれ、おかしいなあ。転送位置は確かに首都に固定したはずなんだけど。先年に皇太后アグリッピナが毒殺されたとはいえ、今はまだ、晩年のネロ危急の時代ではないし。えーと——そこはアツピア街道のようだ。ローマ布教に際し皇帝ネロによる弾圧で追われた聖ペテロが……》

ふいにリカがきよろきよろと周囲を見回し始めた。フォウさんもだ。

「どうかした？」

「いえ、大したことじゃないんですけど……風に乗って、変わった音が聞こえた……気が、ただけです、はい」

「フォウウ、フォウウー」

耳を澄ましてみた。——本当だ。わたしにも聞き取れた。

硬い金属がぶつかり合う音。それに、喧騒。複数だ。

近くで集団の戦闘が行われていると推測される。

ドクターがさつき言ったように、このローマ世界は戦乱の時代ではない。起きるはずのない戦争が起きている。ならそれは「異常」に他ならない。

「リカ。音が聞こえるほうへ行ってみましょう」

「はい先輩っ」

「フォウっ」

喧騒と剣戟に辿り着くまでそう時間はかからなかった。

少しだけ高い丘から、わたしたちが見下ろすそれは、間違いなく戦鬪だ。片方は大部隊で、もう片方は少数部隊。どちらの部隊も、デザインに差はあるけど、真紅と黄金の旗を掲げている。

「陛下!!」

「余を気にするな、ブルツス！ それより、何としても連合帝国の輩に首都の土を踏ませるでないぞ！」

乱戦になっていく兵士たちの中で、そこだけはぽっかりと空白地帯。どちらの部隊の兵士も近づこうとしない。当然だ。空白地帯の中で剣と拳を交える二者。真紅のドレスの女性はともかく、あの真紅のマンントの男は——！

《マシユ、リカ君、サーヴァントの反応だ!》

「感知しています！ ですが、サーヴァントが人間と、しかも特定の個人と執拗に戦うことはありうるのでしょうか!? あの男は他の兵士を全く見ていません!」

《皆無とは言い切れないが、どちらにしろ、生身の人間はサーヴァントに太刀打ちできない! いずれ押し負けるぞ、あの少女!》

わたしは盾を実体化させて、丘を滑り降り——と、いけない。

「リカ。ここで少し待っててくれる?」

リカは一つ頷いた。

「分かりました。待ってます。気をつけて、くださいね?」

「うん。下の兵士に見つかったらまずいかもしれないから、なるべく姿勢は低くしてね。フォウさん、リカをお願いします」

わたしは今度こそ丘を滑り降りて、横から、ドレスの女性に襲いかかるサーヴァントへ体当たりした。

ドレスの女性が目を大きく丸くした。

「な、何者だ、そなた!」

「通りすがりの援軍です。お怪我はありませんか?」

女性が答えるより、サーヴァントがむくりと立ち上がるほうが早

かった。——あの目。フランスで何度も目にした。竜の魔女に狂化されたサーヴァントたちと同じ。いいえ、もつと純度の高い、「本物」の狂気。このサーヴァントのクラスはきつとバーサーカーだ。

わたしは女性を背にして盾を構えた。

「——我が、愛しき、妹の子、よ」

「っ、伯父上……!」

——え？ 今、何て。

《サーヴァントと現地の人間が、血縁!? 同一存在を召喚するより低い確率だぞ!》

彼女は忸怩を隠しもせず、ジグザグした刀身の長剣をバーサーカーに向けた。わたしの護りに甘んじるつもりはないらしい。

「……いや、いや。今はあえてこう呼ぼう。いかなる理由かさまよい出て、連合に与する愚か者、カリギュラ!」

「捧げよ、その、命。捧げよ、その、体。すべてを! 捧げよ!」

来る! この時代で初のサーヴァント戦だ。敵はバーサーカー、カリギュラ。気を引き締めなさい、わたし。

「……なかなかな姿をした少女よ、余の盾役を命じる。伯父上……あの者は、どういう理屈か、兵たちがいくら斬りつけようと傷一つつけられなかった。ゆえに、だ。よいか? そなたがああの者の猛攻を防ぐ隙に、余がこの原初アエストウス・エストウスの火で斬る。征くぞ!」

い、いきなり仕切られましてもですぬ!? って、ああ、すでにあの人は踏み出してしまっている。こうなったらわたしも続くしかない。

カリギュラが獰猛な獣のように爪を立てて女性に襲いかかる、その前に、わたしが女性を追い抜いて、正面から盾をぶつけてカリギュラを弾いた。

女性が真紅の裾を翻して、わたしを跳び越した。

「伯父上! お覚悟! た——あ!」

本当に斬りつけた。カリギュラの脳天から。

でも——浅い。カリギュラは出血すらしていない。見積もって、バールで頭を小突いた程度のダメージか。

わたしは着地した女性の腰に腕を回して、彼女を抱えてカリギユラから距離を空けた。

「な、ぜ……」

カリギユラは殴られた頭を押さえながら、手をこちらに伸ばした。正確にはドレスの女性に。そうだ。カリギユラの光のない目には最初から彼女しか映っていなかった。わたしも、兵士たちも、カリギユラは視界に入れてもない。ひたすら彼女だけを、求めて。

「なぜ、捧げぬ、なぜ、捧げられぬ……我が、我が、我が……」

カリギユラの輪郭が陽炎のように揺らいで、消失した。

セブテム2

わたしたちはどうにか敵サーヴァントを退けることに成功した。

《霊体化して移動したようだ。退散したといった所か。マシユ、お疲れ様。よく頑張った》

「いいえ、ドクター。わたしでも何とかできてよかったです。ところで、先ほどのバーサーカーですが」

《うん。狂戦士が自ら戦線離脱とは考えにくい。もしかしてマスターが存在していて、呼び戻されたとか?》

「先輩っ」

リカが駆け寄ってきていた。少し土汚れがあるのは、丘を降りる時に転びでもしたからか。擦過傷のたぐいを見受けられないのは幸いだけ。

「怪我、ないですか?」

「ないよ。心配してくれてありがとう」

リカは大きく首を横に振った。リカ、頭の上のフォウさんが落ちちやうよ。

リカは次にドレスの女性をふり返って、ごく普通に近づいた。

「陛下。失礼いたします」

「む?」

リカが女性の二の腕に触れること、約10秒。訝しんでいた女性の表情が驚きに変わるまで、さして時間はかからなかった。

「これは……どうしたことかつ。体が軽い。痛みもない。傷が癒えた、のか? 娘よ、これはそなたの仕業か? そなたは魔術師なのか?」

「ええと、ええと、はい。魔術師です、一応。駆け出しのペーパーですけど」

「そうであったか! ということは、そなたの神秘が余を癒したのだな。ならば余の玉体に触れたことは咎めぬ。盾持ちの少女も、だ。余は寛大ゆえな」

「ありがとうございます」

あれ？ 治療をしたのはリカのほうなのに、何でリカがお礼を言う運びになったの？

——そんなわたしの疑問は、女性の名乗り口上によって晴らされることになる。

「氏素性を尋ねる前に、まずは余からだ。余は、真のローマを守護する者、まさしくローマそのものである者。——余こそ、ローマ帝国第5代皇帝、ネロ・クラウディウスである！」

カリギュラの撤退後、わたしたちはネロ陛下の助っ人としてローマの首都に同行を許された。というか、わたしもリカもネロ陛下の勢いに負けて引つ張つて来られた。

「見るがよい、しかして感動に打ち震えるのだ。これが余の都、童女でさえ讃える華の帝政である！」

おー、と一番にリカが拍手した。わたしも続いてとりあえず拍手。都は実際にとても活気があつて、賑わい、笑顔の人々が市を歩き交っている。空気が明るいとはこの場所での形容詞だろう。

「『初めに七つの丘ありし』^{セプテム・モンテス}。全てはそこから始まったのだ。神祖ロムルスと、かの丘と共に、栄光の歴史は幕を開けた」

ネロ陛下は楽しげにローマの歴史を語り始めた。ふるさとを語る人の表情は、民草であれ皇帝であれ大差なく明るいものなのだ、わたしは知った。

道中、ネロ陛下が青果店の屋台からリンゴを一つさらりと取つて行った。店主はもちろん代金など求めず、ネロ陛下に平身低頭していた。

「はぐ——うむ、これは美味しい林檎だな。お前たちもどうだ？ やや行儀が悪かろうと気にするな。戦疲れには甘い果物がよい。やる気だけは回復するぞっ」

そのような無邪気な笑顔で迫ら——もとい勧められると断りにくいと申しますか……

ええい、こうなったら勢いだ。わたしはネロ陛下が齧ったリンゴを

受け取って、一口齧りついた。わ、本当に瑞々しくて甘酸っぱい。そういうえばカルデアには立地的に青果が届くことがあまりなかったから、新鮮な味わいでもあるんだ。

すると、リカの肩にいたフォウさんがわたしの肩に飛び移って、リゴを嗅いでからがぷりと一口。フォウさんも気に入ったんですね。「見事な食べっぷりだ。うむ、改めて、余はそのほうらが気に入った。実の所、言っていることはよく分からぬが、おぬしらが正直者であることは分かるのだ」

《そう言っていたけるとこちらも助かります、ネロ陛下。ボクたちのことは魔術師とその弟子たち、と覚えてさえいただければ結構です》

「あい分かった。それで？ 余を助けるのが目的、そう言っていたな？」

「はい。その認識で間違いありません。陛下。わたしたちの求めるものは、聖杯と呼ばれる、特別な力を持った魔術の品です。現在のローマを蝕んでいるのは、その聖杯である可能性が高いのです」

「ほう。聖なる杯が、余のローマを、か。不思議と違和感がないな。よし、そなたら、余と共に宮廷へ参れ。そこでじっくり話を聞こう」

宮廷に招かれたわたしたちは、セネカさんという文官の案内で豪華な一室に連れて行かれた。部屋には長テーブルがあって、わたしたちはそこに着席して待つようにと言われた。

わたしとリカが座ってからそう間を置かず、ネロ陛下が再びお出ましだ。

変わった点といえば、服装。金の月桂冠と、赤いキャミソールにパレオという、おそらくは彼女の普段着。同性のわたしでさえ目のやり場に困る露出度である。

「大儀であった、セネカ。——そのほうら、楽にせよ」

ネロ陛下は一段高い位置にある瀟洒なイスに腰を下ろした。

「さて。余を助けに来たというそなたたちであれば知っているやもし

れぬが、余のローマは今、危急の時にある。突如として姿を見せた、余ならぬ複数の『皇帝』どもが統べる、連合ローマ帝国。彼奴らめは『皇帝』を自称し、帝国の半分を奪つてみせた。そして、連合の並み居る敵将の一人、カリギユラ。あれは——」

「お亡くなりになつてゐる、ですね」

「……ああ。正直な所、連合帝国はあまりに強大だ。各地で暴虐の戦いを引き起こし、民を苦しめている。口惜しいが、もはや余一人の力では事態を打破することはできまい。ゆえに、だ。貴公たちに命ずる。いや、頼もう！」

ネロ陛下が拳を握つて上座の椅子から立った。

「余の客将となるがよい！ ならば聖杯とやらを入手するその目的、余とローマは後援しよう！」

《願つてもない申し出だ。おそらくボクらの目的は共通ではある》

「はい。陛下、微々たるものですがお力添えさせていただきます」

「そうか、快諾か！ では貴公たちの内一名に総督の座を与えよう。それと、先刻の働きへの報奨もな」

総督、と来たか。

軍を率いて命を預かる地位は、優しいリカには重すぎる。わたしにとつても決して軽い責任ではないけど、ここは「先輩」が意地を見せるべき場面だ。

「では僭越ながらわたしがその任を拝命します」

「うむ。では、それぞれに総督にふさわしい部屋を用意させよう。——と。姿の見えぬ魔術師殿にも必要かな？」

《ボクのことはお構いなく。寢床についてはその二人だけで充分だ。時に陛下。レフ・ライノールという魔術師に覚えはあるかな？》

はつとした。そうだ。仮に連合ローマ帝国の「皇帝」がサーヴァントだった場合、マスター候補はレフ教授が最有力じゃないの。

「いや、とんと聞かぬ名だが。連合には強大な魔術を操る輩がいるとは、兵たちの噂に聞いた。因縁がある者か？」

「彼は、わたしたちの仇敵です。わたしたちカルデアは、何としてでも、彼の行いを清算させなければいけません」

「あい分かった。貴公たちが仇敵を討ち果たすこと、余も、ローマの神々と神祖とに願おう」

「ご厚意、感謝いたします。——」

皇帝陛下、と続けようとしたのに、喉に声がつつかえた。皇帝。その尊称が、妙に舌になじまなかった。僕が声にしたことがある尊称は「王」だけだったから——

ぼんやりしてきた思考を呼び戻すように、手を弱く重ねられた。リカから。

リカは心配そうにわたしを無言で見つめている。

後輩の前で、「先輩」が気弱な顔しちやだめだよね。

わたしが微笑むと、リカは小さく顔を輝かせた。今は、これだけでいい。

セプテム3

翌朝。わたしたちにすれば突然だが、ネロ陛下はガリアという土地への遠征を発表した。

皇帝の勅伐だ。通常、戦乱の時代でない限り、最高権力者の陣頭参戦は大変珍しい。そのくらいの知識はわたしにもある。

ガリアは連合との戦いにおける最前線。聖杯を有したサーヴァントが敵将の可能性もあるし、レフ教授もいるかもしれない、とはドクター・ロマンの推論だ。

レフ教授の名前を聞いてわたしは迷いなく同行を即答した。リカとフォウさんも同じく。

そして、軍備を整えて、正統ローマ軍の遠征は始まったのだが――

メデイオラムの見晴らしの悪い森を行軍中、リカは思い切つて！
というふうになわたしに尋ねた。

「先輩、あの、ずっと歩いてますけど、疲れて……ませんか？」

「フォウ、フォウ」

行軍中は、フォウさんを肩に乗せたリカが横向きに乗馬して、わたしは馬の手綱を引いて徒歩だ。

《リカ君。マシユだつてデミだけどサーヴァントだ。体力の桁が常人とは違うから、そう心配しなくても大丈夫だよ》

「は、はい……すみません」

「怒つてないよ。心配してくれてありがとう」

リカはフォウさんを持ち上げて顔を隠した。久しぶりの照れ隠しだ。

《待った。前方に生体反応。サーヴァントではないけど、敵襲のようだ》

「姿のない魔術師殿は便利だな。余の斥候よりも早いとは。宮廷魔術師に召し抱えることも考えようか」

《謹んで辞退致します》

ドクターがこうもキツパリハツキリ、冗談も交えないで即答するの

は珍しい。

《それより、来るよ！ 左右から挟撃だ。そろそろ戦闘態勢に入りなさい》

「蹴散らしてくれる！ マシユ、左の軍は任せたぞ！」

「了解しました。——リカ、魔力回してくれる？」

「は、はい先輩っ。お願い、します」

わたしは盾を持って、左から迫る部隊に向かって飛び出した。

とはいえ、正史上は「ない」はずの戦乱での、「ない」はずの小競り合い。敵兵の皆さんは、なるべく峰打ちで沈静化しよう。

降伏すれば、ネロ陛下なら新しい戦力に加えることも考慮して下さるはずだ。陛下からは「一度敵であった者でも構わぬ。過去は水に流す」と言質を戴いてあるんだから。

突撃してきた兵士を勢いで叩いて、一人、二人！ おまけに盾でのフルスイングに巻き込む形で3人！

残る兵士は怖じてはいるけど逃がしはしない。

高所を取って、飛び降りて盾を地面に突き立てる余波で、全員吹き飛ばした。

「剣を納めよ、勝負あった！」

ネロ陛下！ もう右側からの部隊を留めたのか。さすがは全盛期の皇帝陛下。

ネロ陛下が何人かの兵士と話しつつ、わたしが倒した部隊に降伏勧告をする所を、わたしはこっそり離れてリカのもとへ戻った。

「リカ、フォウさんも。大丈夫だった？」

「フォウ！」

「あたしたちは特に。陛下と兵隊さんが、すごく強かったですから！ こんな時でも周りを立てるのを、この子は忘れない。」

「先輩？」

わたしは馬上で首を傾げるリカと、手を、繋いだ。

リカにも意図は伝わったようだ。ふんわりと、わたししか知らない顔で微笑む、わたしの後輩。

「お疲れ様でした。手当て、要りますか？」

「ちよつと疲れただけだから。でも、そうね。下ろしていい？」

リカは疑問も浮かべず、わたしの両腕に全身を委ねた。

両足を地面に着けたリカを、わたしはぎゅーと抱き締めた。温かい、柔らかい。ああ、生き返る。

やつぱり戦闘は何度やつても怖いし、終わったあとは心臓の鼓動が鳴りやまない。

そんな弱気を悟られず、英気回復できる手段が、こうしたりカとの強めのハグだったりするのです。

「そなたらは実に仲が良いな。戦場に咲いた二輪の白百合のようだ」

「陛下」

「お、お見苦しいところを、お見せしましたっ」

「よいよい」

真紅のドレスを翻したネロ陛下がわたしたちの前までいらっしやった。

「連合の兵たちは余に恭順を願い出たゆえ、最後尾に組み込んだ。それよりそなただ、マシユ。連合の奴らを雑兵扱いは。ふふふ。初めて会った時よりそるではないか。どうだ、客将と言わず余のものとなるか？」

「申し訳ありませんが、わたしのマスター——主君はリカ一人とすでに決まっていますので」

「何とつ。余はてつきりリカがマシユの従者なのだとはかり」

「……です、よね。普通、そう見えますよ、ね」

わたしが、リカが、ネロ陛下が何かを言うより先に、通信越しにドクターが平坦に道どりを告げた。

《そろそろ目的地が見えてくるはずだよ。リカ君、マシユ、長旅ご苦労様だ》

「フオウフオウ！」

《ごめんごめん。フオウもだったね》

……フオローしてくださいさったんだ。ありがとう、ドクター・ロマン。わたしたちカルデアみんなの頼れるお医者さん。いつか素直にそう口にできる日が来るといいな。

「魔術師殿の言う通りだ。すでにガリアの地へ入っているぞ。遠征軍の野営地とは目と鼻の先。しばらくぶりに、ゆつくりと寝所で休めるぞ」

わたしはリカがフオウさんと馬に乗ったのを確かめてから、改めてその馬の手綱を引いて歩き出した。

ついにわたしたちはガリアの野営地入りを果たした。

野営地、と言うからキャンプみたいな風景をぼんやりイメージしていたが、これはもう「集落」だ。門も壁も道も整備された、宿舎の集まりから成る「基地」と言ってもいい。

乗馬したネロ陛下が石造りの立派な門を潜る様は、まさに帝王の貫禄でした。

わたしたちがネロ陛下に付いてまず向かったのは、閲兵式のための場——小学校のグラウンド程度の広さの平地だった。

わたしたちが到着した時にはすでに、その場に兵士たちが整列していた。

ネロ陛下が馬を下りて、兵士たちの正面にある演台に登った。

わたしとリカの位置は、演台の真横だ。兵士さんの視線が集まるが、ぐっと我慢よ、マシユ・キリエライト！

「皇帝ネロ・クラウディウスである！　これより謹聴を許す！」

兵士たちの間に流れていた空気が清冽に引き締まった。

初めて会った日から見て来た愛くるしいネロさんはそこにおらず、兵士を鼓舞する演説を行うネロさんはまぎれもなく「皇帝」だ。

「余と、愛すべきそなたたちのローマに勝利を！」

兵たちから歓声が上がった。喉よ嗄れよといわんばかりの叫びは、縋り合わさってうねりとなった。

《不思議なものでもある、か。こうまで人心を集めた皇帝が晩年には……、……いや、やめよう。いけないな。過去を生きる人間に未来を知らせない。それが方針だ。——む、この反応。マシユ、そこに——》

ドクターが言い切るより先に、二人の男女——2騎のサーヴァントがわたしとリカの前に現れた。

リカが体の半分をすすすつとわたしの後ろに隠したのは、2騎の片割れ、特に拘束具を全身に装着したマッスルな男のせいだと思われる。

「アンタが噂の客将かな？ 見かけによらず強いんだってね」

赤毛の女性は親愛の深い笑みを刷いた。

「遠路はるばるこんには。あたしはブーディカ。ガリア遠征軍の將軍を務めてる。ブリタニアの『元』女王ってやつ」

「戦場に招かれた闘士がまた一人。喜ぶがいい。此処は無数の圧政者に満ちた戦いの園だ。あまねく強者、圧政者が集う巨大な悪逆が迫っている。叛逆の時だ、さあ共に戦おう。比類無き圧政に抗う者よ」

「やつぱり、お二方ともサーヴァント……！」

「え？ うわあ、珍しいこともあるもんだ。スパルタクスが他人を見て喜んでるのに、襲いかからないなんて、滅多にないわ」

《この時代にもはぐれサーヴァントが存在するのが証明されたか。自由意志を持つて、時代の側に立って戦う者もいる。すでに二つの時代で確認されたからには、きっと全ての特異点でもそうなんだろう》

ドクターの通信を一番に聞き咎めたのは、女王ブーディカだった。

「姿の見えない魔術師つてのは、あんたかな？」

《これは失礼。自己紹介をしておこう。ボクはロマニ。ドクター・ロマンと呼ばれている。彼女たちは、デミ・サーヴァントのマッシュ・クリエライトと、そのマスターである——リカ。フルネームは藤丸立香というんだが、彼女のことは『リカ』と、そう呼んであげてほしい》
無視できない、違和感。ドクターがわたしたちの紹介をするのはいとして、リカを愛称で呼んでほしいなんて念押ししたことなんてあった？

「お気に入りの客将なんだってね、皇帝陛下？」

女王ブーディカに呼びかけられたネロ陛下だが、憂鬱さを隠してもない。——忘れがちだが陛下は生身の人間である。ここまでの行軍、休憩中でさえ兵士の鼓舞に時間を割きもした。疲労の限界が来た

のかもしれない。

「……ん。少し疲れたようだ。ブーディカ、客将たちを頼む。ガリアの戦況について教えてやってくれ。余は頭痛がひどい。少しばかり床につく」

「分かったよ。この子たちはあたしに任せといて」

ネロ陛下は兵卒の案内で、一番瀟洒な宿舎へと向かって行って去った。

えーとですね——

「ずっと不思議って顔してたよ。女王ブーディカがどうしてローマの将に、って」

頷いた。

女王ブーディカは皇帝ネロの軍団に殺された。ローマに蹂躪されたブリタニアの女王。そんな彼女が、何の思惑か、ネロ皇帝に味方して戦っている。疑問を覚えるというのが難しい。

「そりゃあね——、——ケルトの神々に誓いもしたよ。皇帝ネロとローマをあたしは絶対に許さないって。なのに、そんなあたしが現界した。まさか、自分が死んだ直後のこの時代に。復讐の機会かな、とも思ったんだけどねえ。連合に食い荒らされる帝国を見てたら、体が先に動いちゃって。ネロ公のためじゃない、そこに生きる人々のためね」

女王ブーディカはふにやっと相好を崩した。

「あたしは守るために戦う性格なんだと思う。それが一番向いてるっぽいよね」

「——理解しました。あなたは、正しく英霊であるのですね。人々の夢見る英雄の姿。悪逆を制し、多くの人々を救う力の象徴」

《女王ブーディカ、キミの誇りは眩いな》

「そんなに難しい話じゃないんだ。要は、ネロより連合のほうが気に食わない。こっちのスパルタクスにしても、本人は圧政者の群れと戦ってるつもりなんでしょう。物騒な話だけど敵じゃないってだけ」

そういうことですからばこちらも遠慮なく切り出そう。

ガリアの戦況ももちろん把握しなければいけないのだけど、まずは

こちらの事情からだ。

女王ブーデイカ、それに拳闘士スパルタクスに、世界の深刻な危機を知ってもらわなくては。

セプテム4

ガリアの野营地。兵士たちがそれぞれの夕べに入る時刻。

わたしは一人、リカやブーデイカ女王を待って佇んでいた。手に、即席の入浴セットを持って。

これはですね、そのですね。ブーデイカさんが、夕飯をご馳走する前に、女性陣みなでお風呂に入ろうとおっしゃって、わたしもリカも強く反対することができずこういう運びになったからでして。

「マシユ！ お待たせ〜」

ブーデイカさんの元気いっぱいの声に、そちらを見やった。

ブーデイカさんと、後ろには（肩にフォウさんを乗せた）リカが、わたしと似たり寄ったりの入浴セットを持って、わたしと合流した所だった。

……リカのまとうオーラは一目見て分かるほどに昏い。このまま逃げたい、と顔に書いてあるよ、リカ。

「リカってば、夜に一人でこっそり入りたいて言うもんだからさ。使い方が分からないし、灯りもなくて危ないからって言って聞かせるの苦労したよ。ささ、二人とも行こうか」

ブーデイカさんがわたしとリカの背中をぐいぐいと押した。

連れて行かれた先の建物の中に入って、入浴設備を見たわたしたちは、ぽかんと大口を開けてしまった。

上質な石材を削って水漏れの隙なく繋げた大浴場。

湯船に散らされるは真紅の薔薇の花びら。

隅には、香油と髪油の小壺が数種ずつと、櫛とヤスリ。さらにはガラスの酒器が添えられていた。

圧倒されていたわたしを、通信端末のコール音が現実に戻してくれた。

《マシユ。キミたちの入浴中は、こっちの映像・音声共にオフにするから、上がったらそっちから連絡してくれ》

「了解しました。お気遣いありがとうございます、ドクター」

《どういたしましたして。ごゆっくり》

通信が切れた。

わたしは通信端末を腕から外した。

ブーディカさんはすでに浴室の端っこで服を脱いでは、並んだ籠に落としている。脱衣はああいうふうにするらしい。

わたしも真似をして、ブーディカさんの横へ行つて服を脱ぎ始めた。甲冑とはいえ、下地はライダースーツに近いから、あちこち外すのに苦労した。

わたしも裸のブーディカさんに続いて湯船に入った——まではよかつたんだけど。

リカだ。あの子は一向に服を脱ごうとしない。制服の着脱に困つてる、わけはないよね。1年の訓練期間中はずっとそれ着てたんだから。

リカはあちこちに目を泳がせた。

やがて唇をきゅつと結ぶと、リカは強張った手付きで、制服のサスペンダーを外して、上の服を脱いだ。

次に、意を決したように、スカートのファスナーを下ろして脱ぎ落した。

……何だろう。これじゃわたしがリカにひどい辱めを与えているみたいだ。

そんな複雑な心境は、リカがキャミソールとレギンズを脱いで裸体を晒した瞬間、霧散した。

リカの全身は傷だらけだった。

正確には傷痕だらけと言うべきか。細かな裂傷から火傷、打撲痕まで、あちこちに多様な古傷がある。

「……すいません。見苦しい、ですよね」

「そ、んなことは」

「いいんです！ 慣れて、ますから」

リカはぎこちなく笑ってから、湯殿につかった。

リカは湯の中で膝を強く抱えて縮こまった。体をほぐすための入浴で、そんなに体を緊張させて……そんな姿を見せられたら、わたし

も、何かしないではられない。

お湯を掻き分けながら四つん這いでリカのもとへ。わたしは、面食らうリカの横に座って、ぴっとりリカと腕同士をくつつけた。

「せん、ぱい」

「大丈夫だから」

「……醜く、ないんですか？ うえっ、って言って顔逸らしていいんですよ？」

そういうことを言うことは、過去に他人からそういう仕打ちをされたことがあるのね……

ここで「そんなことない。綺麗」と言ってあげるのは簡単だけど、リカはその言葉を素直に受け取るまい。だから、言わない。この子をもっと、わたしの言葉を無条件に信じてくれるくらいになるまでは、その言葉は取っておく。

「先輩、なんだか綺麗で……ドキドキ、します。でも……もうちよつとだけ、このままできて、いい、ですか……？」

よいですとも。少なくとも先輩のほうは大歓迎です。

適温のお湯が剥き出しの素肌を温める。ここまでの旅の垢も流れ出していくさうだ。

道具の見聞をしたり、実際に使ってみたり（さすがに飲酒はブーディカさんに止められたけれど）。

わたしにとって温泉や公共浴場に入るのはこれが初めてだけど、思いがけず贅沢な初体験になった。

ようやく落ち着いた所で、ブーディカさんからガリアの戦況を伺った。

「ガリアは今、大半が連合の支配下だ。あたしたちでも攻めきれない」

ブーディカさんは、下ろした赤毛を水面に泳がせるまま、それに櫛を通して。東ね上げた彼女の赤毛は、そうは見えなかっただけで、実は大変長かった。

「ガリアの支配者、『皇帝』の一人。あいつは強い。精神も肉体も贅肉ひとつない、ちよつと見た目と性能がかけ離れた英傑よ」

——この言葉に対し、わたしはのちに「うそつきー！」と心中で絶叫することとなる。

「ブーディカさん。その偽『皇帝』の正体はすでにご存じなのですか？」

「うん。多分、誰でも一回は聞いたことあるんじゃないかな。奴はセイバーのサーヴァント。真名は——ユリウス・ガイウス・カエサル」

セプテム5

——夜は明けて、太陽が中天にかかった頃。
その戦争は始まった。

武器をぶつけ合う剣戟。雄叫び、または断末魔。濃い血の臭い。古代であっても、これはまぎれもなく「戦争」だ。

「露払いはあたしとスパルタクスでやる！ あんたたちはネロと一緒に本陣へ突っ切れ！ ——ああ、もう、スパルタクス！ そつちじやなくて、こつち！」

「……うむ。頼んだぞ、ブーディカ。色々な意味で頼んだからな」
殊勝になったネロ陛下を初めて見た。

「今こそ『皇帝』の一人を倒す時だ。偽なる『皇帝』に占領されたガリアを取り戻す。征くぞ！ マシユ！ リカ！」

「はい！」
「フォウッ」

わたしたちはネロ陛下の両脇を固めて、不意打ちに対応できる姿勢で走った。

——この時代の正統皇帝であるネロ・クラウディウスに万が一あれば、人理定礎は崩壊する。特異点の修正と同時に、ネロさんの命を守ることも重要任務だ。

闇雲に走っているわけではない。わたしには分かる。この先にいる僭称皇帝は、サーヴァントだ。ブーディカさんの言葉を信じるなら、英霊カエサルのサーヴァントが待ち受けている。

伯父カリギュラとの鬪いにも躊躇していたネロ陛下だ。偉大な先達を前にして、ネロ陛下の心にダメージが出ないか。それだけが心配。

ああ、心配しているのに、敵影へぐんぐん近づいていつている……

！

「来たか。待ちくたびれたぞ」

「貴方が——」

「その様子では我が真名を知っているようだな。我らの愛しきローマを継ぐ子よ。名は何と言ったかな?」

ネロ陛下は押し黙った。

「貴様は名乗りもせず私と刃を交えるのか。それが当代ローマ皇帝の在り様か?」

「ネロ——余は、ローマ帝国第五代皇帝。ネロ・クラウディウスこそが余の名である! 僭称皇帝、貴様を討つ者だ!」

「よい名乗りだ。やはりそうでなくてはいけない」

カエサルの視線がわたしたちのほうに向いた。つい、身構えた。

「その客将よ、貴様も名乗るがいい」

「マシユ・キリエライト。マスター・リカのデミ・サーヴァントです」

「ほう。それがマスターか。私の知るマスターとサーヴァントとは異なる形だが。あるいはそちらのほうが正しいか? 何であれ、私の敵か。面倒なことだがいいだろう」

カエサルが地面に突き立てていた剣を抜いて、順手に持った。

……あの剣から異様な存在感と魔力を感じる。きつとカエサルの宝具はあの剣なんだ。

「ここまで来られた褒美だ。我が黄金剣を味わえ」

「言うな! 黄金は余のものである。黄金劇場を作り上げし、この、ネロの——」

「はは。その意気だ。そのデミ・サーヴァント、よく護れよ。貴様らの求める聖杯とやら、戦いぶりによつては私が教えてやってもよい」
それは、カエサルが聖杯の在り処を知っているということの意味する。その一言で、聖杯が連合ローマ陣営にあることは判明した。

それ以上の精密な情報については、カエサルが本当に明かすならよし。そうでなくなつて、戦いにベストを尽くすのは変わらないんだから。

先に斬りかかったのは、ネロ陛下のほうだった。

「たああああ!!」

「——ふ」

大上段に振り被ってからの直線一閃。連続して左右から二閃。それらを、カエサルは黄金剣で容易く受け止めた。

ネロ陛下は唇を噛んで正眼に長剣を構え直した。

長剣の刀身には刃毀れ一つない。サーヴァントの剣と衝突したのに。

でも、例えばネロ陛下の剣の素材が本当に隕石だとしても、それだけでサーヴァントの武器と鎬を削り続けられると樂觀視はできない。

再びカエサルが振り下ろした黄金剣を、わたしはネロ陛下の前に出て盾で防いだ。さすがに真正面から受け止めると、重い——！

——カエサルの剣捌きは決して速くはない。でも、重い。一撃を防いで腕に伝わったショックから立ち直るまでに、どうしてもタイムラグが生じてしまう。

ネロ陛下が走った。迂回して、カエサルの横の間合いから斬りつけようとしている。

カエサルにネロ陛下の一刀を避けさせない。

わたしはあえて盾ごとカエサルにぶつかった。弾みでバランスを崩す、一瞬。隙。

「はあああああ!!」

ネロ陛下の長剣がカエサルの脇腹を斬った。血が宙に弧を描く。カエサルは反撃しなかった。

わたしとネロ陛下は一旦下がってカエサルから間合いを取った。「仕損じたか……!」

「そう気を張るな。肩の力を抜け。当代の皇帝よ、貴様は美しい。その美しさは、世界の至宝に他ならんだぞ。それにデミ・サーヴァント。貴様もだ。ああ、実に美しい。私は感嘆したぞ。ゆえに一つ教えやろう。聖杯なる物は、我が連合帝国首都の宮廷にある。正確には、宮廷魔術師の男が所有している」

宮廷魔術師——まさか、レフ・ライノール？

あの人は実力確かな魔術師。それに聖杯が手にあれば、狙って「皇帝」の来歴を持つ英霊ばかり召喚するのも不可能じゃない。

——定まった。わたしたちの目的地。

「さて。ネロ。皇帝よ。貴様の苦難は私の望みではないが、聖杯を得るために、私にも戦わねばならない理由がある。次は、本気だ」

うそつ。あの強烈な剣、本気じゃなかったっていうの!?

「陛下は下がって!」

カエサルの兜割りを、盾を斜め上に構えて防いだ。ぐっ、さつきより、もつと重い……! わたしが立っていた地面のほう凹んでるくらい!

「マシユ!!」

「フォーウ!」

負けちゃだめ。負けてたまるか。わたしの後ろには、ネロさんもフォウさんもいて——わたしのたった一人の後輩が、いるんだから。

「先輩! 瞬間強化、付与します!」

腕に熱いエネルギーが奔った。これなら。

「でつやああああああ!!」

「むう——!?!」

わたしは盾を力いっぱい押し返した。黄金剣をカエサルの手から弾き飛ばした。

わたしたちの頭上高く跳ね飛んだ黄金剣が、落下してきて——ちょうどカエサルの心臓部に、突き刺さった。彼の愛剣が、彼自身を殺した。

……正直な所、わたしにも予想外だった。

わたしの想定では、カエサルが剣を手からなくした隙に魔力防御した盾を霊核に叩き込む、そういうつもりだった。

それが、期せずして、偶然が彼にとどめの一撃を与えた。

「やった、のか?」

《ああ。反応が弱くなっているのが観測できている。運も実力の内。キミたちの勝利だ》

「そう、か——」

深紅の長剣が地面に転がった。ネロ陛下がその場に頽れたからだ。

リカが慌てた様子でネロ陛下に駆け寄って、彼女の上体を抱えて支えた。

「——当代の正しき皇帝よ」

っ、カエサル、まだ生きて——！

わたしはリカとネロ陛下を背にして盾を構え直した。

「連合首都で、あの御方が貴様の訪れを待っている。正確には『皇帝』ではない私だが、まあ、死した歴代『皇帝』さえも逆らえん御方だ」
「あの御方——？」

「そうとも。その名と姿を目にした時、貴様がどんな顔をするか楽しみだ。厭味で言っているのではないぞ。貴様は美しい。どんな表情を浮かべても、等しく——」

口から血を吐きながら、胸元を血で真っ赤に染めながら、それでも最後まで威厳を崩さないまま、カエサルは消滅した。

……何なの。この釈然としない気持ち。後味が悪い。

フランスでの任務で、たくさんサーヴァントが敵だった。でも結果的に、わたしはサーヴァントを一騎も殺さなかった。だから、今日の戦いでついにこの手でそうするんだと、腹を括って来たのに。

「陛下、大丈夫ですか？」

「フオフオーウ」

ふり返ると、リカがネロ陛下を支えて立つのを介助していた。

「よもや余ともあろう者が戦場の只中で腰を抜かされるとは……それだけあの方の王気は強烈であった。疑いようなく、あの方は名君カエサルその人であった。余は」

ネロ陛下の視線は、さつきまでカエサルがいた位置に向いた。

「……余は、名君カエサルを、そなたたちの手にかけてさせたのだな」

「陛下？」

「いや、何でもない。うむ。見事に『皇帝』の一人を倒したこと、褒めてつかわす」

ネロ陛下はリカの腕を離れて、長剣を拾うと、それを高々と掲げた。
「敵將、討ち取ったり！ ガリアは名実共に余の下へ戻った！ 余の想いのままに、余の民の願いのままに、神祖と神々に祝福されし口ー

マが、今、戻りつつある！」

帝国ローマ軍の兵士たちが喝采を上げた。

——勝利したのは確かに彼女なのに、その背中は、か弱い少女のよう
うに薄く見えた。

セプテム6

ガリアでの戦いは終わった。

わたしたちはネロさんと、彼女率いるローマ軍に付いて首都ローマへの帰路に就いた。

いえ、出立前にインターバルもあつたけど。おもにブーディカさんからわたしに。

わたし自身の経験談じゃないが、正月に実家に帰省して、久しぶりに会った遠い親戚のお婆……コホン、奥さんに構い倒された年頃の娘というか、うん、終始そんな気分だった。

帰途にこれといった波風はなかった。

——いいえ、もしかしたら、もう少し耳をそばだてていれば、わずかに帰軍ルートが逸れたら、何かが起きたのかもしれない。

けれど、そんな余裕がなかったのがわたしたちの現実だ。

まずは、ネロさん。

彼女はガリアでの戦いが終わってから、ぼんやりすることが増えた。

偉大な先達カエサルを討つたことと思う所があるからだど、わたしは最初思った。しかし、別れる間際のブーティカさんの話だと、ネロさんのその症状は前からあつたもので、しかも最近はその時に決まって微弱な魔力をネロさんから感じるとのことだった。

次に、うちのリカ。

先述の様子のネロさんに寄って行つては、頭痛を和らげるといふ名目で——いえ、名目じゃないわね。本心ね。ネロさんの具合の悪さを絶妙に発見しては、ネロさんのそばへ行つて治癒魔術を施した（制服付与の「応急手当」はあくまでサーヴァントの魔力を回復するもので、生身の人間を癒すものではない）。

その二人の体調不良があつて、海千山千の噂は陛下のお耳まで入れず、帰還ルートは最短で。ここぞと総督権限で兵士の皆さんにお願いした。

遠征軍が地中海沿いの街道に入った所で、休憩のために、行軍は止まった。

——ちなみに説明が遅くなりましたが、帰り道はわたし、マシユ・キリエライトと後輩のリカ（とフオウさん）は、一頭の馬に相乗りした。

リカが「先輩も。一番頑張ったんですから、帰りくらいは楽しんでほしいです」なんて言うものだから、不覚にもときめいてしまったのだ。わたしは一足先に馬を降りて、下から、わたしに体を委ねるリカを抱えて地面に降ろした。

「ありがとうございます」

「フオウ」

「どういたしまして。まだしんどい？」

「今はちよつと楽、です。馬にも慣れた、ですし」

確かに顔色は良さそうね。リカの頬には赤みが射している。

——時は夕暮れ。

進路側面の森を抜けたすぐ先には、白い砂浜と、打ち寄せる白い波涛が覗いていた。

「あ。先輩、あそこ。——ネロ陛下です」

最後は声を潜めて、リカがわたしに告げた。

わたしはリカが指したほうを見やって、込み上げた驚きを慌てて呑み込んだ。

本当に、ネロさんが砂浜にいた。

伴も連れずお一人で。あんな無防備に背中を見せて。兵士も気づいていないってことは、こつそり撒いて出たってことで。

わたしはリカと顔を見合わせ、頷き合った。

わたしたちは地中海を望む砂浜に出て、ネロさんに歩み寄った。

「——。ああ、マシユにリカか。もう体調は良いのか。余か？」

余は……我ながららしくないが、物思いに耽っておった」

普段の凜々しさが嘘のような、儂い微笑。

身の安全について注意するのは簡単だけど、今のネロさんにはそれを言わないほうがいいと判断した。

「どうしたのだ？ 近う寄れ。許す。———そういえば。慌ただしきゆえ聞きそびれたが、そなたら、故郷はどこだ？ マシユは何となくブリタニアの気がするぞ。纏う空気がブーディカに似ているからな」

なんでもないことを、皇帝陛下である少女が楽しげに語っている。ううん。今この時に限り、ネロさんは皇帝じゃなく「ただのネロさん」だった。

もしかしてネロさん、寂しかった？ こんな他愛ない話ができるような相手を待って、ここに一人で佇んでいた？

「フオウフオウ」

「あ、あたしは日本、です。えつと、ここからずーと東に行った先の、極東の島国の、生まれと育ち、です。今はカルデアがおうち、ですけど」

「カルデア？ とんと聞かぬ名よな。どこだ？」

「えつと」

「カルデアは、標高6000メートルの雪山にあります。そうですね。エトナ火山が雪に覆われたような場所だと想像していただけると」

「エトナに雪？ むうう。それこそ天地がひっくり返ってもありえぬが、雪に覆われた山か……うむ！ 雪白のベールに包まれた峻険なる山。悪くない絵面だ。そういう彫刻を作ってみたくなってきた！ 帰ったら白大理石を取り寄せようか」

そういえばネロ皇帝には芸術家としての一面もあると、史実に伝わっていたつけ。特に有名なのが、首都中心に建造された「黄金劇場」。ダ・ヴィンチちゃんの生前でもあるルネサンス美術期に大きな影響を与えた建造物だとか——

わたしとリカの通信端末に、カルデアからの通信が入った。

《憩いのひと時を邪魔してごめん！ サーヴァント反応だ！ 海から来るぞー！》

ドクター・ロマンが言い終わるが早いか。海から、大きな飛沫を上

げて、一人の男が上がってきた。

「余の……！ 振る舞いは、運命、で、ある！」

「伯父上!」

わたしは急いで、リカとネロさんを背にして盾を構えた。

カリギユラ……これは、最初に戦った時より、狂化が強くなっている。ネロさんを見る目。怖い、を通り越して、全身に鳥肌が立つもの。「美しい、な。美しい。お前は美しい……！ 奪いたい、貪りたい、引き裂きたい。女神が如きお前の清らかさ美しさその全て……！ 余は、愛して、いる、ぞ、我が愛しき妹の子——ネロオオオオ!!!」

くっ。咆哮そのものが衝撃波みたい。空気が震えている。

「陛下、その——」

「言わずともよい、リカ。——そうとも。伯父上はすでに死んだのだ。無念の死であつたらうと、今も思わずにはおれぬ。しかし！ 死に迷い、余の前に姿を現すならば、引導を渡してくれる。それが姪として、正しき皇帝としての使命と知れッ！」

迫ってくるカリギユラ。わたしは前に出て、盾でカリギユラの突進を防いだ。

……やっぱり！ 最初の戦いより膂力が増してる！

お願い、保って、わたしの白亜の壁……！

「リカよ！ そなた、魔術師であろう？ 一撃でよい。余の剣でもあの伯父上を斬れるようにまじないをかけることはできるか」
「できません。けど……いいんですか？」

「言ったであろう。余が引導を渡す、と。——余には優しい伯父上だった。これ以上の失墜は見ていられぬ」

「……分かりました」

少しだけふり返った視界の端。ネロさんが差し出した長剣の刀身に、リカが手を置いていた。

——誰もが忘れがちだが、あの子は47名のマスター適性者の中でナンバー2を勝ち取った、実力派魔術使いだ。リカが行使する魔術は治癒に留まらない。あの子はあれでオールラウンダーだ。

ネロさんの紅い長剣に、魔力を通した痕跡であるグリーンのライン

が幾条も浮かび上がった。

ネロさんは強化された長剣を正眼に持つて、まっすぐカリギユラを見据えた。

放っておけば、カリギユラは脇目も振らずネロさんを目指す。

わたしはあえてカリギユラの前から——どいた。

案の定、カリギユラはネロさんにまっしぐらに突進した。

「ネロオオオオオ!!!」

「伯父上——おさらば」

ネロさんは一歩だけ前へ踏み出して、長剣を突き出した。切先は誤ることなく正確に、カリギユラの心臓を貫いた。

その瞬間、ネロさんがどんな顔をしたか、わたしの位置からは見えなかった。

カリギユラの肉体が光る粒子へと変わって、完全に消滅した。

わたしは盾の実体化を解いて、ネロさんのもとに戻った。何て声をかけるかなんて決まりきってる。

「大丈夫ですか?」

「——マシユは優しいな。だが心配は無用だ。余はローマ皇帝なのだから」

その言い方はまるで、皇帝は普通の少女らしい哀惜など感じたりしないのだ、と自分に言い聞かせているみたいで。わたしは胸が沈んだ。

セプテム7

首都ローマに帰参したわたしたちを出迎えたのは、市民一丸となつてのパレードだった。

戦のあとにこんなお祭り騒ぎが待っていると予想だにできなかったわたしは、とにかくリカを一般市民に潰させまいとしながら、宮廷へ急いだ。

「ふう。やっと落ち着いたな」

ネロさんと一緒に玉座の間に入ったわたしは、疲労困憊でその場にぺたんと座り込みそうだった。

「凄まじい人の賑わいでした。危うくもみくちゃにされて潰れる所でした」

《はは。満更でもなかったろう。あれが勝利の美酒の味わってやつさ》

「ほほう。姿なき魔術師殿。まるで味わったことがあるような口ぶりだな」

《ボクは想像力が豊かなほうだからね。おかげで色んな目に遭ったけど》

はい。ドクターはまぎれもなく空想力逞しい方だと思えます。

「マシユは見事にリカを護りきっていたな。さすがは盾の猛将。愛い主君を他人に触らせたくないか？」

だってリカ、パレードを見たとなんに泣きそうな顔をしたもの。だったら「先輩」としては、怖がる「後輩」を護らなくちゃ。

「ともあれ余以外に貞操が堅いのは良いことだ。一層気に入ったぞ」
「あ、ありがとうございます。恐縮です」

リカが頬を赤くしてわたしを見やった。はて？

「失礼致します、皇帝陛下」

「おお、セネカか。どうした」

「恐れながら申し上げます。特別遠征軍、首都ローマへ帰還し、宮廷へ

向かう途にあるとのこと」

「なに？ あの者たちが帰ってきたか！」

「はい。將軍、兩名ともご健在であります」

「うむー。城下に触れを出せ。余の戦士たちの二度目の凱旋だ。祭りはまだ終わらぬぞー！」

セネカさんは丁寧なお返事とお辞儀をして、玉座の間を出て行った。

「陛下。特別遠征軍とは何ですか？」

「そなたらのような客将2名が率いている軍だ。内一名は斥候や偵察に長けておるゆえ、連合ローマ帝国の本拠地の位置を特定すべく何度か派遣していたのだ。さて。此度の遠征こそ吉報を聞ければよいのだが」

客将、というと、ブーディカさんやスパルタクスさんのような。もしかしてサーヴァントだったりするのかな？ そうだとしたら是非協力を仰ぎたい。

わたしはリカを見やった。リカは微笑んで頷いた。

「先輩のいいように」

こういう時に理解ある後輩を持ってわたしは果報者だと思うのです。

わたしとリカとフォウさんもネロさんの前から辞して、特別遠征軍が帰還するという宮廷の門へと向かった。

今夜は久しぶりに、屋根のある部屋のベッドで眠れる。

ガリアの野営地も設備は整っていたけど、ベッドがちよっと狭かった——リカと並んで眠るには、ね。

けど今夜はその心配もなく、リカと二人（とフォウさん一匹）、一つのベッドで眠れるのだ。

わたしは部屋に備え付けの夜着に着替えて、リカが腰かけているベッドの、隣に腰を下ろした。

「先輩。今日も一日、お疲れ様でした」

「フォーウ」

「リカもフォーウさんもお疲れ様。——リカ。荆軻さんと呂布將軍と会って、どうだった？ 怖かったりしなかった？」

——昼間に、わたしたちは特別遠征軍の將軍2名に会いに行った。これが案の定、サーヴァントだった。どちらも中国出身の英霊で、荆軻さんと、呂布さん、といった。

呂布將軍はバーサーカーだったため言語での挨拶は無理だった。

次に、荆軻さん。いくら伝説的暗殺者とはいえ、死後もサーヴァントになってまで皇帝暗殺に精を出すのはいかがなものか。わたしたちとは敵の首級の数で競争なんて言い出すものだから、話を合わせるのに苦労した。

「ちよつと付いてけないところもありましたけど……悪い人には見えなかった、です。それに明日から協力して戦うんだから、あれこれ言ってもしょうがないかな、って」

そう。どちらも同じ陣營の味方であることは変わらない。明日から大いに頼りにさせてもらいましょう。

——だって明日から、連合ローマ帝国の首都攻略に向けて、出征準備の慌ただしさが始まる。

荆軻さんと呂布將軍は見事に（ネロさんからすれば「ようやく」）、敵の首都の位置を突き止めた。これを受けて、次の出陣は連合ローマ帝国首都と決まった。

やることはいくらでもある。武具や食糧の調達。進軍ルートや兵の数を決めるための軍議。その全てにネロさんは携わる。

人手不足の正統ローマ帝国では、些事であっても皇帝ネロ自らが采配を執る仕事がたくさんある。そう、セネカさんから聞いた。わたしたちのようなよそ者へのVIP待遇だって、裏返せばそれだけ兵力が足りていないという証左なのだ。

そんな情勢や多忙を背負うのが彼女の華奢な両肩なのかと思うと、どこか、やりきれない気分させられる。

リカが屈んでわたしを上目遣いに窺った。

「先輩。難しいこと、考えてますか？」

「え？ あつ、うん、ちよつと。大丈夫よ。大したことじゃないから」「そう、ですか……無理、しないでくださいね」

リカは両手でわたしの手を取って、包むように握った。琥珀色の両目が、じつと、わたしだけを見つめている。

わたしは、リカが握る手のさらに上から、もう片方の手を重ねた。絡めた指。包み合う掌。伝わる温度と柔らかさが胸まで届いて、心を暖めてくれる。

失くせない、護りたい、わたしだけの「後輩」。

——そして。

あらゆる軍備を整えて、正統ローマ帝国軍は進撃を開始した。連合帝国首都への侵攻だ。

ガリアから合流したブーディカさんとスパルタクスさん。加えて、呂布將軍と荊軻さん。わたしを数に入れるなら、五騎のサーヴァントを擁した軍勢。通常の兵力では敵うべくもない陣容を前にして、しかし、連合帝国はサーヴァントを投入する気配がない。

——あるいは、すでにサーヴァントの敵将はどこかにいて、こちらに存在を察知させないほどの戦上手なのかもしれない。

正統ローマ軍が破竹の勢いで連合帝国の兵を退ける中、わたしはそんな危惧を捨てきれなかった。

——その危惧はひどく手痛い形で現実となる。

連合帝国首都まで間近という時になって、敵軍との戦闘が勃発した。

怒涛の進撃を受けて、わたしは内心、悲鳴を上げたいくらい必死だった。いっぱいいっぱいだった。

ようやく攻勢が止んだ時になって、自分しか省みる余裕がなかった

のだと思い知らされた。

——ブーディカさんが虜囚となって敵軍の手に落ちた。

セプテム8

——女王ブーディカが虜囚となって敵軍の手に落ちた。

伝令兵からその報せを受けたわたしたちは、急いで本陣のネロさんのもとへ戻った。

ネロさんは、わたしたちよりずっと早くブーディカさんが囚われたことを聞いただろうに、未だ葛藤の渦中にあった。彼女の顔を見れば分かった。

「ネロさん——」

「ん。いや、少し考え事をしていたのだと思う。そして、今こそ余は決断したぞ。余は、ブーディカを助け出す！」

——彼女ならそう言う気がしていた。ブーディカさんが滅ぼされたブリタニア女王だからではない。純粹に、一度自分のものになった者が横から取られるのが許せないから。

「幸いにして、敵拠点の砦を荊軻が発見した。一気呵成に攻め入って、ブーディカを救うぞ」

通信の向こうでドクター・ロマンがごく小さく唸った。

《何か引つかかるな……ブーディカを捕らえたのはサーヴァントのはずだ。ただの人間にできることじゃない。だがなぜ彼らは砦などに立て籠もっている？ 連合首都との距離もそう遠くない。なら、そつちへ戻ったほうが遙かに有利だろうに。ただこちらの軍を殲滅したいただけなら、そのほうがきつとマシなはずだ》

「敵はこちらを誘い込んでいる。そういうことでしょうか」

それも、人間とサーヴァントの決定的な違いを把握した、恐ろしい「敵」が。

わたしはいい。デミだけどサーヴァントだ。リカも……うん、ギリギリで、いい。あの子だつてマスターで魔術師だし、いぎつて時は先輩としてわたしが護る。

でも、ネロさんは？ 彼女は生身の人間で、この時代の人理定礎を大きく担う人物だけ——ここで素直に待っていてくれるような御仁じゃない。

「畏ならば踏み潰すまで！ 共に征くぞ、マシユ、リカ！」

ほら、やっぱり。心配する暇さえ与えてくれなかった。

ネロさんが号令を出して、2台の戦車を呼んだ。戦車の1台にはネロさんが乗って、もう1台にはわたしとリカで乗り込んだ。

「目標は砦一つ。一気呵成に攻め落とす。余の手足たる兵たちよ、心してかかるがよい！」

戦車が荒野を走り出した。

こちらの陣容が向きを変える。その中でも砦に急行するわたしたちの戦車は突出するから、連合帝国兵がこの目に見えて分かりやすい獲物を狙わないわけがない。

こういう使い方、したことはないけど――

「リカ。わたしに掴まって。絶対離しちやだめだからね」

「はい先輩っ」

「フオウ」

わたしは盾を構えた。――スキル「魔力防御」発動。戦車の正面に魔力の防壁を展開。

さあ、どいてもらいましうようか。進行方向にいたら魔力の壁で撥ね飛ばすからね！

「先輩、あれっ」

「ええ、見えてる。きつとあれが砦ね。陛下！ このまま突っ込んでも!?!」

「許す！ 先ほどの何やら怪しげな壁で中に突貫するのだ！ —— 騎士たちよ、停まるな！ マシユ総督が我らを守護し敵陣を粉碎するゆえそのまま砦の門へぶつかれ！」

わたしの体を巡る魔力量が大きく増した。リカが魔力を回してくれたんだ。今でも充分過ぎるくらいだけど、より確実な強度を「魔力防御」に注ぎ込むために。

砦の門はもう目の前に迫っている。ここだ！

「だらああああああああ!!!」

大砲を城門にぶつけたような粉碎音だった。自分がしたことなが

ら、この盾の堅さが末恐ろしい。

いきなり突入してきたわたしたちを見て、砦の兵士たちは面食らっていたが、我に返った者から挑みかかってきた。わたしはリカとフォウさんを背にして、向かってくる連合兵を盾で殴って退けた。

「どこだ、ブーディカ！ 返事をしろ！ よもやまだ死んではいまい！ 分かるぞ、余には分かる。貴様は死なぬ！」

「……それはずいぶんと勝手な物言いじゃないかな」

空気が塗り替わった。——サーヴァントの気配。それも2騎。

わたしは兵士の迎撃をやめて、ネロさんより前に出て、硬く盾を握り直した。

「でも安心していいよ。彼女は無事だ。今は彼の魔術ですやすや眠ってる」

「拘束の魔術だ。すやすや眠る、とは違う」

「でも彼女、寝てたよ？ すやすや」

戦場の只中であって、その2騎の会話は至って和やかだ。なのに動けない。踏み出したら潰される、なんてプレッシャーを否応なく感じさせる。特に紅髪の少年のほうが。

怯むわたしと対照的に、ネロさんは泰然とした姿勢を崩さない。

「兩名共に、この砦の将と見た。許す。自らの名をこの皇帝ネロへと告げてみよ」

「名乗らせてくれるのかい？ うーん、そうだな。どういうふうに言おうかな。僕は名前が複数あるんだ。悩むね。——よし。僕は、アレキサンダー。正確には、アレキサンダー三世という。で、彼が——」
「ロード・エルメロイ二世。縁あって彼の軍師をしている。真つ当な英霊ではない。英霊としては他の名になるのだろう。故に、私の名は忘れてくれて構わんよ」

言われてみれば、確かに。エルメロイ二世と名乗った男性の服装は、現代の紳士服。眼鏡や煙草だつてこの時代ではオーパーツと言っている。英霊の座に時間の概念はない。わたしたちの時代の「エルメロイ二世」という人間が何らかの功績を成して、将来的に座に刻まれて、ここにサーヴァントとして召喚された、って感じかしら。

少年が不意打ちにこちらを——ネロさんをまっすぐ見た。

「そういうわけにも行かないさ。僕たちは、彼女にとつては敵将なんだ。ね、ローマ皇帝さん」

「無論だ。この期に及んで敵対せぬとも言うつもりか？」

「うん」

——はい？

「ここで待っていたんだ。きみが来るのを。ちょっと興味が湧いたからね。あれこれとちよつかいをかけたのはそのためだ。きみと話があったんだ。できれば——こうして、戦いの只中で」

「……わからぬ。てんで分からぬ。少なからず、貴様の軍で余の兵は命を落とした！ 今なお……それを、ただの話一つが目的だと言うのか、貴様！」

「うん。こうするのが一番だと思ったんだ」

大勢の雄叫びが聴こえた。砦の目と鼻の先まで戦線が移動したんだ。闘気と熱気を肌を感じる距離で、ネロさんの兵とアレキサンダーの兵が衝突している。なのにアレキサンダーは、このシチュエーションこそ我が意を得たとばかりに強気に笑んだ。

「ローマ帝国第5代皇帝、ネロ・クラウディウス。きみは——なぜこうやって戦い続けるんだい？ 連なる『皇帝』となることを選べば、無用の争いを生むことなどないだろうに」

——それは、今までのわたしの観点にはない、根幹の問いかけだった。

歴史的に間違っているのは「連合ローマ帝国」の存在そのもの。だからそれを正すこと、正すために戦争という手段を取ることには些かの疑問もなかった。

だめ。こんなIFを描くのはいけないのに。もし皇帝ネロが連合ローマ帝国に恭順していれば、たくさんの兵士が戦って死ぬことはなくてすんだのに——なんて。

「無用……無用と言ったのか。貴様。この戦いを」

「言ったよ。ならばどうするっ？」

「——許さぬ」

ネロ陛下は真紅の長剣を力強く地面に突き立てた。

「死から蘇った血縁であろうと、過去の名君であろうと、古代の猛将であろうと、伝説に名高き大王その人であろうとも。今！ この時に皇帝として立つ者は、ネロ・クラウディウスただひとりである！ 民に愛され、民を愛することを許され、望まれ、そう在るのはただひとり！ ただ一つの王聖だ！ ただひとつだからこそその輝く星。ただひとりだからこそ、全てを背負う傲慢が赦される！」

ついにネロさんが長剣でアレキサンダーに斬りかかった。アレキサンダーは片手剣グラディウスで紅い斬撃を悠々と受け止めた。

「たとえローマの神々全てが降臨せしめて連合へ下れと告げようとも、決して退かぬ！ そう信じて踏破するのが我が人生、我が運命！ 退かず、君臨し、華々しく栄えてみせよう！ 余こそが！ まごうことなきこの世界ローマである！」

「見事！ その答えが、どうしても僕は聞きたかった」
得物のリーチならアレキサンダーに不利があるはずなのに、やはり人間とサーヴァントの膂力の差か、それとも両者の剣技の差か。アレキサンダーは片手剣で長剣を真つ向からふり払った。

「合格だ。きみは霸王になるがいい。いいや、皇帝に！ きみにはその資格があるだろう。魔王にだってなれるよ、きみは！」

「黙れ、黙れ黙れ黙れ!!」

このままネロさん一人に戦わせるわけにはいかない。

わたしはそう思って、盾を前に踏み込もうとしたけれど、わたしが動くより早く、足を阻むように巨大な円柱が正面に落ちてきた。

「先輩?」

「フオーウー」

答える暇がない。円柱は最初のものに加えて8本、わたしを囲んで配置された。さらに上から八卦炉が蓋をした。

決して脱出できない布陣ではないのに。何で？ 膝が勝手に、頰れ、て……

「これぞ大軍師の究極陣地、『石兵八陣』かえらざるのじん。破ってみせろ」

しまった！ アレキサンダーばかりに気を取られて、エルメロイ二

世の妨害を考えていなかった。わたしの注意不足だ。

リカが駆け寄ってきた。でも、陣に手を近づけただけで静電気のよ
うなものが走って、リカは手を押さえて後ろにまろんだ。

それを見てわたしは閃いた。——リカの手の甲には令呪がある。

「リカッ！ 令呪ちようだい！」

あの子にもそれでわたしの意図が伝わった。

「第25ラインから第40ラインまでパスに編入。魔力供給。——先
輩！ 『その陣地を破ってください』 ツ！」

リカ自身の魔力と令呪の魔力リソースが同時に供給された。

わたしは立ち上がって足を一步後ろへ。正面に盾を構えた。

「！ まさか——そんなデタラメを！」

そのままかですとも、ロード・エルメロイ二世。俗に言う「レベル
を上げて物理で殴る」方式で、この陣地を破らせてもらいます！ 全
力防御で——ボディアタック!!

わたしがぶつかかった円柱に亀裂が入った。亀裂は円柱全体に広
がっていつて、ついに折れて崩れた。

わたしは改めてエルメロイ二世と対峙した。

——本当はネロさんの援護をしたいけど、またエルメロイ二世の妨
害が入ったら厄介だ。正直、あの宝具を二度突破する自信はない。

先に彼から、潰す。

エルメロイ二世はいつのまにか煙草ではなく羽毛扇を持っていて、
それを一振り、わたしに突きつけた。

小さな八卦炉から光条がわたしへ発射された。

わたしは魔力で盾の前面をコーティングして突き立てた。

「^{ロー}仮想展開／^{カール}人理の礎!!」

あえて盾に全ての光条を受けて、光条をエルメロイ二世へと跳ね返
した。冬木でアーサー王の聖剣を逆流させたのの応用。わたしに攻
撃手段がないなら、敵の攻撃を利用する。

逆転した光条はエルメロイ二世の胸部、腹部、太股を穿った。エル
メロイ二世は太股の傷を押さえて片膝を突いた。

「先生!」

「よそ見をするでない！ 貴様の相手は余であろう！」

「く——！」

真紅の長剣と片手剣がぶつかり合って火花を散らしている。

エルメロイ二世はというと、ダメージを負ったとはいえ健在だ。なにアレキサンダーを魔術で援護する様子がちつとも見られない。どうして？

「私は、はぐれだ。マスターを持たん。この時代に召喚された意味くらいは知っている。人理の危機なんだろう？」

「はい……」

「人類史の終焉など、私もアレキサンダーも望んではない。ゆえに目的を、ネロ・クラウドイウスとの対面を果たせた暁には——」

甲高い金属音がして、わたしは反射的にふり返った。

ネロさんの剣がアレキサンダーの剣を手から弾き飛ばした所だった。

ネロさんはその隙を取り零さなかった。真紅の長剣を、アレキサンダーの心臓部に、深く刺した。

ネロさんが長剣を引いて正眼に構え直した。息切れを隠してもいない。でも——これ以上、鎬を削る必要はない。今の一突きはアレキサンダーにとって致命傷だったんだから。

「もう一つ、言葉を残しておくよ。可愛い皇帝さん。咲き誇る花のごとき輝きは尊いものだろう。けれどそれは、きっと危険なものでもあるはずだ。どうか……」

彼が何を言おうとしたのかは永遠に分からない。言い切る前にアレキサンダーは消滅を迎えた。

はつとしてふり返ると、まるであとを追うように、エルメロイ二世の姿も消えていた。

「陛下……」

「余は、間違っただけだ。何一つ……余は、ただひとりの……皇帝、だ」

カエサルとの戦いが終わったあとと同じで、わたしにはネロさんに告げるべき言葉が見つからなかった。

セプテム9

決戦の日は来た。

正統ローマ帝国軍はついに、連合ローマ帝国の首都に辿り着き、進軍を開始した。

皇帝であるネロさんさえ剣を執って争乱の巷に降り立った。ネロさんが檄を一つ飛ばすたびに、兵士たちは歓声を上げてネロさんを褒め称えた。

わたしは、敵兵を退けるより、ネロさんを、そしてリカとフオウさんを護る盾役に徹した。防衛戦であれば比較的得意分野だ。あくまで比較的、だけど。

斬りかかってきた敵兵の剣を受け止めて、盾から振動が両腕に伝わる。これはその痺れであって、わたし自身の震えじゃない。震えてなんか、ないんだから。

《サーヴァントの反応を感知した！ 近いぞ、前方に見えるはずだ！》
ドクター・ロマンの管制を受けて、わたしは正面に出て盾を構えた。
「……勇ましい。それでこそ、当代ローマを統べる者である」

「何奴!？」

視認した。王宮の入口に、一騎のサーヴァント。しかも今の声は、魔術による拡声とかじゃない。肉声だ。

「そうか、お前がネロか。何と愛らしく、何と美しく、何と絢爛たることか。その細腕でローマを支えてみせたのも大いに頷ける。さあ、おいで。過去、現在、未来、全てのローマがお前を愛しているとも」

そのサーヴァントが語りかけたあのネロさんは——傍目にもはっきり分かるくらい、愕然としていた。

「ごんな、ことが。あつて、よい、のか……いや、しかし……あれは……一瞥しただけでも分かってしまう……あの御方こそ、ローマだ……」
なおもサーヴァントはネロさんに語りかける。

「ネロよ。私へと帰ってくるがいい、愛し子よ。私こそが、連合帝国なるものの首魁である。お前も連なるがよい。許す。お前の全てを、私は許してみせよう。お前の内なる獣さえ、私は愛そう。そうだ——私

が、ローマだ」

「あ、あつ……あなたは、あなただけはありえぬと……信じていたのだ、信じていたかったのだ。なのに！ あなたは余の前に立ちほだかるのか、神祖ロムルス——！」

神祖ロムルス——ローマ建国王にして、数多の時代の「皇帝」の祖おやとなる偉人。

ネロさんは戦慄している。もう声は聴こえないのに。

けれど、こちらの心情なんて知りもしない敵兵は、容赦なく襲ってくる。

ネロさんを狙って来た相手を、わたしは内心慌てて盾で跳ね返して

「先輩つ。その人、へ、兵士じゃ、ない……つ」

——リカの言う通りだった。わたしがたった今跳ね飛ばしたのは、鎧も槍も持たない一般市民。

よくよく見回せば、戦場の中にはあちこちに市民が混じっている。彼らはまるで連合帝国の兵士であるのように、手に棒きれなんか持つて振り回したり、石を次々と投げたりしている。

こんな力の無い市民と——無辜の民と、この盾で戦えつていうの？
またも、わたしに向かってくるのは兵士ではなく市民。意思とは関係なしに、足が半歩下がった。たじろいだ。

その市民の、うなじに、ブーディカさんが剣の柄頭を容赦なく叩き込んだ。

それでその市民は白目を剥いて倒れたけれど、死んではない。

「戦場で呆けないツ！ 死ぬよ!？」

「は、はい！ すみませんでした！」

「——マシユ。どうしても戦えないなら、死なない程度に殴るよう心掛けるの。ぶつつけ本番だろうが、戦場に立って日が浅かろうが、その甘さを通したいなら、それができなきやだめ。分かる？」

……甘さ、なのよね。これって、やっぱり。兵士と市民。命は等価値のはずなのに。

「あんたもだよ！ ネロ公！ シャキツとしな、皇帝陛下下！」

ネロさんの若草色の目に、微かに光が戻った。

「荊軻が王宮への侵入経路を探りに行った。あたしは、戻ってきたスパルタクスと呂布の面倒を見に行くから。皇帝を頼んだよ、マシユ。リカもね」

ブーディカさんが踵を返して、戦乱の中にまぎれて姿が見えなくなった。

ネロさんは一度、深呼吸して、わたしたちに顔を向けた。

「……情けない姿を見せてしまったな。まさかああまで取り乱すとは」

「いいえ。無理ありません」

カリギユラやカエサルとの戦いでも動揺を隠せなかった彼女だ。今回はその中でも特大のショックだっただろう。

「——もしま、と。確かに思った。神祖の声を聞いた時、あろうことか、余も、神祖に降ればよいのだろうか、と……いや、言おう。言ってしまおう。降りたくて仕方がない。それが余の偽らざる気持ちだ！ 神祖だぞ?! 建国王その人に他ならぬ！ 余の道が誤りだと断ずるのならば、任せてしまいたい。連合の『皇帝』となって！」

ネロさんは大喝と共に地を踏み締めた。

「だがッ!!」

兵士たちが、敵も味方も問わず一斉に、ネロさんをふり返った。

「いかに完璧な統治であろうと、笑い声のない国があつてたまるかッ!!」

戦場が、しん、と静まり返って。

凄まじい喝采が沸いた。

——やつと気づいた。今さらになって。

落ち込んだり寂しげにしたりするネロさんも、ローマ帝国皇帝のネロ陛下も、相反するように見えるけど、どちらもネロ・クラウディウス。

“人”を捨てず “王”で在る、その王道が眩しくて、引き寄せられた。

仕えたいわけじゃない、単に、ほっとけなかった。

「何が相手であつても迷うことなどない。余は、余の成すべきことを成そう」

「はいっ。その意気です、ネロ陛下。進みましょう。荊軻さんが侵入ルートを探ってくれています」

「うむ！ これより連合ローマ帝国の首魁を討ち果たしに行く。最後の戦いになる。余と共に、来てくれるか？」

「もちろんです」

「お邪魔でないなら、っ、っ一緒……します」

ネロさんが笑う。大輪の薔薇のように綻んだ笑顔だった。

わたしたちは、戻ってきた荊軻さんと合流して、彼女の道先案内で王宮に入り込んだ。

——王宮の内装は、首都ローマにある宮廷とそっくり、いいえ、同じだった。あえて似せて建造したとしか思えない。思えば、都市そのものも首都ローマに似た街並みだった。そこに連合ローマ帝国の執念を見た気がして、わたしは薄ら寒いものを感じた。

荊軻さんが突き当たりの大扉を指した。

「あそこが玉座の間だ。神祖ロムルスはあの中にいる」

わたしたちは扉から一定の距離を保って立ち止まった。

わたしはネロさんをちらりと覗き見た。

——まっすぐで、華々しく、眩い横顔。よかった。これならきつとロムルスと対峙しても、彼女は揺らぐまい。

「よし。荊軻、そなたは引き返せ。そして、そなたは先の侵入路から内部に手勢を引き入れよ。ブーディカの軍には王宮正面から攻め上がるよう伝えよ。……神祖は、余たちが討つ」

「よいのか？ 仮にも皇帝御自ら」

「杞憂だ。余は負けぬ」

荊軻さんは元来た道を逆走していった。気配はすぐに消えて察知できなくなった。

強張った面持ちで背後に立つリカと、頷き合う。

わたしは玉座に続く扉を力いっぱい開け放った。

玉座にいたのはただ一人。——神祖ロムルス。

「来たか、愛し子」

「うむ、余は来たぞ！　誉れ高くも建国成し遂げた王、神祖ロムルスよ！」

「……良い輝きだ。ならば、今一度呼びかける必要はあるか、『皇帝』よ」

「いいや、必要ない。過去も、現在も、未来であつても、余こそが！

ローマ帝国第五代皇帝に他ならぬ！　ゆえにこそ余は、余の剣たる強者たちと共に、そなたに相對する！」

ネロ陛下が真紅の長剣を構えたので、わたしも横に立って盾を握った。

「許すぞ、ネロ・クラウディウス。私の愛、お前の愛で見事蹂躪してみせよ。見るがいい。我が槍、すなわち——私^{ローマ}が此処に在ることを！」

セプテム10

烈しい攻防の果て。

ついにネロ陛下が真紅の長剣でロムルスに引導を渡した。迷いも躊躇もない、見事な袈裟斬り。ロムルスの霊核を両断するほどの一斬だった。

とどめの一撃を受けたはずなのに、ロムルスは穏やかに笑った。

「眩い愛だ、ネロ」

わたしは、息を切らすネロ陛下を背に、盾を持って前に出た。

「永遠なりし真紅と黄金の帝国。その全て、お前と、後に続く者たちへ託す。忘れるな。心せよ。ローマは永遠だ。故に世界は永遠でならなければならない」

ロムルスの霊基消滅を確認。——この戦争は、ネロ陛下の、正統ローマ帝国の勝利だ。

これでこの時代の「ローマ帝国」はあるべき形に戻るだろう。あとはわたしたちカルデアが聖杯を回収して、時代を修復して、カルデアに帰還する。それでわたしたちの第二グランドオーダーはやっと完了。

そのためには、まずここの宮廷魔術師を見つけなくちゃ。

「ネロ陛下。わたしとリカは連合帝国の宮廷魔術師を探そうと思えます。首都ローマでは、宮廷魔術師の方の工房がどちらだったかご存じですか？」

この王宮の内装が正統ローマ首都を模して造られたものなら、同じ間取りの部屋にレフ・ライノールがいる可能性が高い。

「私をお探しかい？ マシユ・キリエライト」

耳から、ほかの音が、すべて、消えた。

自分でももどかしいほどにゆっくりと後ろをふり返る。

かくてそこに、*彼*は立っていた。

「貴様、いつのまに背後にー」

ネロ陛下が振り向きざまに構えた剣の切っ先の先には、ああ、間違いない——

レフ教授……いいえ、レフ・ライノール・フラウロス。わたしはカルデアの、そして全人類の裏切り者。

「ロムルスを斃しきるとは。デミ・サーヴァントふぜいがよくやるものだ。多少は力をつけたのか？」

レフが手を握って開いた。掌に浮かぶ金の八面錘は——聖杯だわ。間違いない！

《宮廷魔術師が王の危急をあえて見過ごすとはね。すっかり裏切り者が板に付いたんじゃないか？ というより、それが素なのかな。カルデアにいた頃より活き活きとしているよ、キミ》

——心を堅く持って。いつも穏やかで、わたしの体調を気遣ってくれた「レフ教授」はもうどこにもいない。いないのよ、わたし。

「聖杯は渡してもらいます。その上で、あなたの身柄を拘束し、人理焼却の目的を尋問させていただきます」

「おや。勇ましい口を利くようになったじゃないか、マシユ。聞けばフランスでは大活躍だったとか。まったく——おかげで私は大目玉さ！ 本来ならとつくに神殿に帰還しているというのに、子供の使いさえできないのかと追い返された。結果、こんな時代で後始末さ」

神殿？ 帰還？ 薄々予想はしていたけれど、彼の背後には黒幕がいる？

《だが、神祖ロムルスも他の英霊たちも、人類の滅びなんて望んでいなかった。だからキミ自らが介入するしかなかった。その時代にはキミのような人類の裏切り者はいなかったってわけだ》

「ほざけ、カスども。人間になんぞ初めから期待していない。キミもだよ、マシユ・キリエライト。たまたま難を逃れた凡百のマスターと契約した程度で、このレフ・ライノールを阻めるとでも？」

「阻みます。マスターに、わたしの後輩に誓って」

「先輩——っ」

「クハハハハハ!! よくぞ言ったッ！ ならばお見せしよう。哀れにも消えゆく貴様たちに、我らが王の寵愛を！」

聖杯から莫大な魔力がレフ一人に集束していく。そんな量の魔力、人間じゃオーバードローして内側から弾け飛ぶだけ。レフは、何をし

ようとしてるの!? くっ、眩しくて、前が見えな……!

——地に突き立つ、巨大な、柱。

——ぶよぶよとした剥き出しの肉が混ざり合って形成されている柱。

——剥き出しの眼球が無数にあって、それぞれがギョロギョロと別方向を見ている。

『改めて自己紹介しよう。私はレフ・ライノール・フラウロス! 七十二柱の魔神が一柱! 魔神フラウロス——これが、王の寵愛そのもの!』

これが、レフ教授……? レフ教授、だったモノ……?

「フオーウ!!」

「何だこの怪物は……! 醜い! この世のどんな怪物より醜いぞ、貴様!」

魔神柱の剥き出しの水晶体が、一斉にわたしを睥睨した。それだけで手足に痛みを伴う熱が走った。

手足を見ると、炎を浴びたわけでもないのに、火傷していた。あの怪物、「視る」だけで人を呪うの!?

「フオーウ、フオーウ!」

「先輩っ」

後方援護で離れていたリカがわたしに駆け寄った。リカはわたしの火傷を見ると蒼然としたけれど、すぐに表情を引き締めて、わたしの火傷の一つに手を当てた。

それだけで全ての火傷が跡形もなく綺麗に消え去った。

「ありがとう、リカ」

「いいえ。——先輩の肌、すべてで真っ白で傷一つなくて、すごく綺麗だった。火傷の痕なんて、一つだって許しません」

驚いた。こんな鬼気迫る表情、この子でもするんだ。——そんなにわたしにケガしてほしくないんだって、自惚れているの?!

《情報が足りない。詳細は全て不明。だが、それは危険なものだ。この場で完全に撃破するんだ!》

はい、と答えて、改めて盾を構えようとした。

ピイイイイイイイツ!!!

魔神柱から噴き上がった瘴気が室内を覆うなり、大きな揺れが起きた。

「きや……っ」

「リカー！」

震動でバランスを崩したりカを、わたしは慌ててキャッチした。よかった。リカにケガはないみたい。

「すいません、先輩」

「気にしないで。何てことないわ」

するとリカが小声で何か言った。次の瞬間、わたしの体に流れる魔力が増した。……この子ってば、ほんとに、もう。

『陛下！』

玉座に踏み込んできた、それなりに多い数のローマ兵士。率いているのは荊軻さんだ！

「約定通り手勢を王宮に引き入れたぞ、ネロ・クラウドイウス。それで、これはどういう状況か、と貴殿に尋ねてよいのかな」

「うむ。余にも仔細はてんで分からぬ。確かなことは、この怪物は滅ぼさねばならぬという一点のみ！——余の剣たる兵たちよ。余と余のローマのために、ここに顕現せしレムレースに立ち向かう勇者となれ!!」

ウオオオオオオオオオオオオ!!!

兵たちが一斉に、剣や槍を携えて魔神柱に挑んだ。

……こんな時だけど、肩の力が抜けそう。皇帝ネロ・クラウドイウス。何て人望とカリスマなんだか。

わたしも負けてはいられないよね。

さつきリカが、もつとたくさん魔力のラインを繋いでくれた。魔力供給は満タン。あの子を枯渇させないためにも、迅速に魔神柱を斃そう。

大丈夫。兵士の武器が魔神には通じるんだもの。わたしの盾が負けるはずない。そうでしょう、マシユ・キリエライト？

スキル・魔力防御、発動。魔力で盾をコーティングして、床に盾を押し当てた。スキル発動による反発力を利用して、わたしは魔神柱に向かつて高くジャンプした。この勢いのまま――

やること自体はエルメロイ二世の陣地を破った時と同じ。

魔神柱に盾でボディータック。接面の瞬間にもう一度、魔力防御全開。

「で、っりゃああ!!」

反発力を利用して、魔神柱に貫通ダメージをお見舞いする!

魔神柱が大きくよろめいた。あと一撃と見た。

わたしも跳弾した勢いで壁まで飛ばされた。わたしは壁に両足で垂直に接地して(足にジーンとダメージが来たけど今は我慢!)、もう一度、跳んだ。狙いは、さっきの打撃で凹んだ部位。

「^{ロー}仮想宝具――^{カルデア}人理の礎!!!」

わたしの最大火力で魔神柱へロケットブースト。

めぐり! と、嫌な音がした。

魔神柱は「く」の字に折れて、地べたに倒れた。

セプテムー

大量出血のように、夥しい生肉が溶けて流れ出した。出血と異なるのは、溶けた肉は一定量で蒸発していく点か。

その肉塊の中から、吐血しながらレフ・ライノールが起き上がった。「……馬鹿な……たかが英霊ごときに、我ら御柱が退けられるというのか？ いや、計算違いだ。そうだ、そうだろうとも。何しろ神殿から離れて久しいのだ。少しばかり壊死が始まっていたのさ。しかし、私も未来焼却の一端を任された男だ。万が一の事態を想定しなかったわけでもない」

レフの手の中に聖杯が現れた。まだ何かしようって言うの!? しつこいです!

「さあ、人類の底を抜いてやろう! 七つの定礎、その一つを完全に破壊してやろう! 我らが王の尊き御言葉の……!」

次の瞬間。

レフの左胸から匕首の刀身が生えた。

背後から何者かがレフを奇襲したのだ。この場この局面でそうする人を、わたしは、荊軻さんしか知らない。

「人の姿に戻ったことが仇になったな。我が宝具は対人。サーヴァントとなった今でも徐夫人の匕首は健在なり。塗り込んだ『毒』も『不死殺し』のままだ」

呆気に取られて動けないわたしたちの眼前で、レフ教授がうつ伏せに倒れた。起き上がる気配はない。

荊軻さんがしゃがんでレフ教授の脈を取った。

荊軻さんは達成感を浮かべて、髪の花飾りを外してレフ・ライノールの亡骸に落とした。

「秦王でなかったのが残念だが、生前成し得なかった化物誅伐だけは叶ったようだ」

小さな物がわたしの足元に転がってきた。わたしはそれを拾った。

——聖杯。そうだった。これを回収するためにここまで来たのに。

ふいに、聖杯を持つほうの手を、リカが両手で握った。

「お疲れ様でした。先輩」

リカの言葉と微笑みで——終わったんだ、ってようやく実感した。

——でもそれは同時に寂しいことでもある。

手足が末端から0と1に量子分解されていく。レイシフトが始まった。再構築された時には、カルデアのコフィンの中だ。口が分解される前に、伝えないと。

「ネロ・クラウディウス皇帝陛下。ローマ帝国の皆さん。至らない所ばかりでしたが、今日まで助けてくださってありがとうございました。心から感謝を。おかげでわたしたちの使命も完遂できました」

「お、お世話に、なりましたっ」

「フオウ！」

ネロさんはひとしきり困惑したが、やがて寂しげに笑んだ。

「……なんとなく、そんな気はしていたのだ。余は勘が鋭いほうだからな。伯父上や神祖たちと同じく、お前たちも消えてゆくのだろうと。——荊軻、そなたもそうか？ ブーディカも、呂布やスパルタクスも」

荊軻さんは短く頷きを返した。彼女はわたしたちとは違い、光の微粒子となって体の輪郭を薄めていって——消失した。

「困ったな、これは。正直に言って残念だ。まだ余は何の報奨も与えてはいないというのに。お前たちであれば、きつと、余にとつて臣下ではなく、もつと別の——いや、やめておこう。お前たちの行く先にもきつとローマはあろう。例えその名が忘れられていても、ローマが植えた多くの芽が、かたちを変えて続いているだろう」

わたしはふいに、フランスでジャンヌさんとお別れした時の言葉を思い出した。

「全てが虚空の彼方に消え去るとしても。残るものが、きつと——」

一度発生したモノは、永遠に消えない。か細い糸でも、過去は現在に息づいている。これが——名残、というものなんですな。

「だから別れは言わぬぞ。礼だけを言おう。——ありがとう。そなたたちの働きに、全霊の感謝と薔薇を！」

『『インペラトル！ インペラトル！ インペラトル！』』

ネロさんの笑顔と兵士の喝采を最後に、意識は意味を失った。

…

…

…

覚醒する。今回も無事にカルデアに帰って来られた。その安心を噛み締める。

コフィンから起き上がると、ちょうどリカも体を起こした所だった。

リカはわたしと目が合うと、ちよつと困ったように笑った。照れる。この子はいつまでも初々しいなあ。

「おかえり、二人とも。そしてお疲れ様」

「ただいま帰りました。ドクター」

「た、だいま、です」

「フオウ」

わたしは管制スペースに入つてすぐ、聖杯をドクター・ロマンに渡した。その聖杯は、さらにダ・ヴィンチちゃんを受け取つて、保管庫に封印すべく持つて行つた。

「これで二つ目だ。当初の目的であるレフの追跡も達成できた」

「はい。ですが……彼の目的も意図も何も聞けませんでした」

レフ教授は荊軻さんが殺めた。戦局的には正しい行動だったし、わたしたちがレフ教授を尋問しようとしていたことは彼女に明かしてなかったから、しょうがないことなただけだ。

「ああ。何もかも不明のままだ。けれどまだ五つの特異点は残っている。今のボクらにできることは、一つずつ聖杯を回収し、特異点を修復することだけだ」

「はい。次のオーダーでもベストを尽くします」

「いい返事だ。そんなに時間はあげられないけど、今日はゆつくりと休んでほしい」

では、わたしとリカはマイルームに戻るとしよう。

「えつと。ドクター。その……今回も、サポート、あ、ありがとう、ご

ございました……」

「どういたしまして。——おやすみ。リカ君」

わたしはリカ（肩にフオウさんに乗せている）と並んで、中央管制室を出た。

思い描けば、大輪の薔薇のような彼女の笑顔。

思い馳せるは、風薫る丘。

——あの空と大地を、わたしはずっと忘れない。

航海―誉れ堅き雪花の壁―
オケアノス1

いつになれば、誰が、あたしのために、あたしに優しくしてくれるの？

……

……

…

今日も同じ時間に目を覚ます。

体温を感じる。柔肌を感じる。深呼吸をして、目覚めれば必ず見ると信じられるようになった後輩の寝顔を確認する。

わたしは今日もリカと寄り添って朝を迎えた。

グランドオーダー出発の朝は必ずわたしが先に目を覚ます。そして。

「フォーウ」

「はい。おはよう、フォウさん」

二番目にわたしたちのベッドの足元で寝ているフォウさんが起きて、リカのほっぺたを舐めて起こすのが定着したパターンだ。

「んあ……おはようございます、マシユ先輩」

「おはよう、リカ」

リカとは敬語を使わず話すのにも慣れてきた。

さあ、まずは朝のシャワーと身繕いだ。それが終わったら朝食を頂きに行つて、いつものブリーフィングに出席しよう。

リカと二人で中央管制室に入ると、やっぱり一番にドクター・ロマンが出迎えてくれた。

「おはよう、諸君。昨夜はよく眠れたかな？ うん、実はボク、あんまり眠れてない」

そうでしょうとも。

——わたしたちはレフ・ライノールを倒し、第二の聖杯を回収した。字面はいいけど、疑問は増える一方だ。

あの肉の柱は何なのか？ 七十二柱の魔神を名乗るアレは何なのか？

そこを解析するための時間も設備も足りないのが、一度は大破したカルデア館内の現状である。

ふと、リカがわたしのパーカーを小さく摘まんだ。

「先輩。七十二柱の悪魔って、何ですか？」

「私がお答えしよう！」

突然のダ・ヴィンチちゃんの上機嫌な登場に、リカがびっくりしてわたしの後ろに隠れてしまった。

わたしは役得なのでいいのですが、あまりリカを脅かさなくてください。

「それは古代イスラエルの王にして、魔術世界最大にして最高の召喚術士！ 彼が使役する使い魔こそ、その名も高き七十二柱の魔神たちってワケなのさ！」

ダ・ヴィンチちゃんとドクターが、それぞれ七十二柱の魔神とその主の王について議論を戦わせ始めた。レイシフトまでちよつと待とう。

——すみっこでリカと二人、手持無沙汰に待つこと10分。

「さ、それより今は当面の課題。三つ目の聖杯入手の話をしよう」
戻っておいで、とドクターの手招き。

わたしたちは改めてドクターとダ・ヴィンチちゃんの輪に加わった。

「唐突だがリカ君、キミ、船酔いする？」

リカは首を横に振った。しない、の答え方だ。

そのリカの肩に載っていたフォウさんが意気軒昂な声を上げた。

「おや。今回もフォウは行くつもりなのかい」

「ンキュ」

「だめ、ですか？」

「ふむ。ゲンを担ぐわけじゃないが、フォウがいるとリカ君の精神状

態が安定する。レイシフト先は常に新天地だ。馴染みのものは多いほうがいい。遠慮なく連れて行きなさい」

リカはぱつと顔を輝かせて、フォウさんを抱っこした。

……これはリカをフォウさんに取られたと思うべきか、フォウさんをリカに取られたと思うべきか。実に悩ましい案件だ。

「今回は1573年。場所は、見渡す限りの大海原だ」

「海、ですか」

ドクターの説明によると――

1573年は特異点を中心に地形が変化しているらしい。第一オーダーのフランス、第二オーダーのローマ帝国というふうには、具体的に「ここ」という地域が決まっているわけではない。海域にある陸地は点在している島だけ。

「ドクター。それはつまり、レイシフトの到着点が海のと真ん中ということもありうるのですか?」

「ああ、それは心配ない。こちらでレイシフトの条件を設定しておく」「いざって時は、はいこれ。私が作ったゴム製の浮き輪。万が一の時はこれでピンチを凌ぐといい」

「ど、どうもです」

リカ。恐縮して受け取らなくていいから。そもそもその浮き輪、コフィンの中に入るサイズじゃないから。

――確かにですね。

海の上にレイシフトすることはなかった。無人島に降りてレイシフト・ロビンソンをやるハメにもならなかった。ドクターが配慮してくれたのは分かる。分かるのよ。

「よく分からねえが……野郎ども、やつちまえ!」

わたしたちは現在、海賊船の上にあります。

「やはりドクター・ロマンには何らかのお仕置が必要ですよ!」

《ごめん、悪気はなかったんだよう!》

なるべく壁寄りに陣取って、後ろからの包囲を回避。かつ、フォウ

さんを抱っこしたりリカは背中に庇って、わたしはいつも通り盾を構えて飛び出した。

敵は海賊とはいえ生身の人間。リカの安全を脅かさない限りは、なるべく峰打ちに留めなければ。いたずらに船員を減らして船が動かさなくなったら、わたしたちまで海上で立ち往生だ。

——そんな運びで（わたしにとっては）軽い戦闘後、船員全員がこちらに向かって這いつくばって頭を下げた。

『『すいませんでした』』

おお、これが世界に名立たるジャパニーズDO・GE・ZAですか。うーむ。ちよつと心苦しいし、こういう荒事はあまり好きじゃないんだけど、事態が事態。強引に尋問しよう。

「どなたか。この海がどこで、どういう状況なのか説明していただけますか？」

「いやあ、それが俺たちにもさっぱりですよ。気づいたらこの辺りに漂流してたんでさ。羅針盤も地図もまるつきり役に立たねえし。もう何が何だかわからなくなったら、ほら、目の前の獲物を襲うしかねえだろ？ 海賊の習慣として」

海賊は自分たちの安全が確保されていなくても、場の勢いとノリで他人を襲う人種である。よし、覚えた。

「この近くに海賊島があるって同業に聞いたんで。食糧も水も乏しくなってきたんで、ひとまずそこを当たろうと」

「海賊島っていうと、やっぱり、海賊がたくさんいるんでしょうか……」

《とりあえず手がかりらしい手がかりがない以上、そこへ進むしかないか》

ですよね。このまま海上を漂流するわけにもいかない。

「では皆さん。勝者の権利を行使します。その海賊島に向けて舵を取ってください」

「アイ、アイ、サー！」

「アイ、アイ、マムです！」

わたしの一喝を受けて、海賊たちが慌ただしく船を動かし始めた。

「先輩、かつこいー……」

リカから拍手とキラキラした眼差しをゲット。
当然です。だってわたしはリカの「先輩」なんですから。

オケアノス2

わたしとリカとフォウさんは、当地の海賊船の一団と共に、件くだんの海賊島に上陸した。

陸でも元気な海賊の皆さんと（肉体）言語的に交渉し、成功したわたしは、この島で最も状況を把握しているという人物との面会を先方に取り付けることに成功した。

その人物というのが——フランシス・ドレイクである。

「へっへっへ、テメエたちはもうおしまいさ。ドレイク姐御の手にかかればテメエらなんか……」

《何でいちいち三下口調何だろう、この人？》

《いつの時代でもキャラ立ては重要だつてこと。憧れの美女に体を作り替えるとか普通だつて》

《すまないがダ・ヴィンチちゃんは工房に籠もつててくれないかな!?》
通信の向こうでのドクター・ロマンとダ・ヴィンチちゃんの言い合いは気にしない。

わたしはというと、案内役の海賊の一人がフォウさんをつつこうとしたので、フォウさんをすぐさま確保してリカにパスしたところである。

「ところで、先輩。フランシス・ドレイクってどういう人、なんでしようか？」

「要約すると、世界で初めて世界一周を成し遂げた航海者つてところかな」

「あれ？ マゼランじゃなかったですっけ？」

「ああ、それはね。確かにマゼランも世界一周に出航しているけれど、一周しきる前にマゼラン本人が没したの。世界を回って帰ってきたのは残ったマゼランの部下たち。でもドレイクは違う。ドレイク本人が大英帝国に生還してるから、史上初の、生きたまま世界一周を成し遂げた、に繋がるの」

リカはフォウさんと同じ角度で、首を二度縦に振った。納得した、のジエスチャーだ。

「その活躍で大英帝国は富を得て、世界の海を制覇していた。沈まぬ太陽」スペインを撃破することになる。フランシス・ドレイクなくしてのちの大英帝国の繁栄はないわ。ただ、海賊は海賊。これまで遭遇した海賊の生態から推測するに、大食漢で巨人、樽を片手で掴んで一気飲みするような豪傑だとしても決しておかしくは——」

と、話している内に、そのドレイクがいるというアジトに着いたようだ。わたしはリカより前に出て、いかなる巨漢が出てきてもリカが怯えないように身構えた。さあ、来なさい。わたしも怖いんじゃないの？　なんて、もつともな指摘は面会謝絶です！

「こりやまた……ずいぶん奇天烈なのを連れてきたね、ボンベ」
——どなたですか？　この、ナイスバディな女海賊さんは。

「へえ。でも見所はあるツスよ。アツシらの命を助けたばかりか、憧れの船長に会いたいとか何とか。さつきから船長は偉大な人物だとか、スペイン海軍なんざドレイクの手にかかれば一息だとか、ラム酒をタルごと一気飲みする豪傑だとか、すげえアゲようで」

「はあく!?　なんだいそりや。そこまでの悪事はまだ働いてないよアタシや!？」

まだ、と言わなかったか。この人物、まだ、と。つまり今後は働く予定があるのか。

驚き冷めやらず指摘できなかったが、わたしの後ろにいるリカのほうはあまり驚いていないようだった。

「だってあの人ずっと『姐御』って呼んでたから、女の人なんだなあ、って思っただけです……」

よし。今後はわたしももう少し人の話を耳聴く聞こう。
気を取り直して、と。

「あなたがフランシス・ドレイク船長ですね？　わたしはカルデアという機関に所属するマシユ・キリエライトといいます。こちらはわたしの後輩でマスターの」

「リカ……です。こ、こんにちは、船長さん」

「カルデアあ？　星見屋が何の用だい？　新しい星図でも売りつけに来たとか？」

《うわっ、意外に博識だぞこの酔っ払い！ カルデアの起源を知ってるのか》

「……なーんか薄っぺらい気配がするねえ。アタシが一番嫌いな、弱気で、悲観主義で、根性なしで、そのクセ根っからの善人みたいなチキンの二オイだ」

「先輩。この船長さんの耳と分析、完璧です！」

通信の向こうでドクターがしよぼーんとした気配が伝わったけど、特に気にしない方向で。

「それで？ カルデアとやらはアタシに何の用だい？」

「わたしたちは、この時代の異常事態を修正するため、さる場所から送られた者です。フランシス・ドレイク船長。聡明なあなたなら気づいているのではないですか？ あなたの方が過ごした海と、今広がっている海は別のモノだと」

「……ふうん。海の話がされちゃあ無視できない。確かにアタシもおかしいとは思っていた。だがね、その『おかしい』は異常って意味じゃない。こんなに面白おかしい世界は他にないってことさー！」

酔いどれ海賊の皆さんから拍手喝采が上がった。

「ヒヤッハー！」

「姐さん最高ーっ！」

「無限に湧き出るラム酒うめえー！」

「と、いうワケだ。アタシたち海賊は自由のためならあらゆる悪徳を許容するんでね」

リカと顔を見合わせた。お互いに困惑するしかない。

——世界の異常までも「面白いから」で放置できるドレイク船長の感性がわたしには理解できなくて、理解できないものをどう説得すればいいかなんてもっと分かるはずもない。

「どうしてもアタシと話をしたいってんなら、まずは力試しと行こうじゃないか！ アタシや派手に酔っ払ってるからね、派手な酔い覚ましをしておくれ！」

自由にも程がありませんか!? ああ、本当に拳銃を抜いた、引鉄に指をかけた!?

「う、後ろにいて、リカ！ 流れ弾があるかもしれないから！ できるだけぴったりわたしの背中にくっついててね！」

「はい先輩っ」

「フオウー！」

強かった。一戦交えての、てらいなき所感である。

ドクターは「ドレイク船長から魔力の反応がある」と言って精査に入ったので、その辺は報告待ちである。

銃弾が掠めて擦り傷になった肌をリカが治癒してくれてから、ようやく人心地ついた。本音を言うならこのまましゃがみ込んで深呼吸したい。

それに比べて、ドレイク船長の堂々とした様は崩れていない。勝つたのはわたしなのに、まるで彼女が勝者であるかのように錯覚してしまいそう。

「アタシの負けさね。煮るなり焼くなり好きにしろ。でもまあ、見た感じ、足が欲しいってどこじゃないかい？ アンタらは探し物があるが、この海に不慣れだ。なんで、海賊だろうがアタシを頼るしかないってわけだ」

「大まかにおっしゃる通りですが、あなたが海賊であるかは問題になりません。フランスス・ドレイク、あなたの力が必要なのです」

「……ふーん。へーえ。そうなんだ。で？ 具体的には？ アタシは負けたんだ。命以外は差し出すよ」

その言質があれば充分だ。

わたしは事情の擦り合わせに入るべく、ドレイク船長と質疑応答を開始した。

オケアノス3

黄昏時。

海賊三昧のどんちゃん騒ぎは収まらず、わたしたちの周りで今なお続いている。

祝いの席だからと、わたしもリカもジョッキを渡されたけれど、二人して口を付けてはいない。何せわたしたちは未成年だ。お酒は二十歳になってから。いかに周りで酒盛りをしようと、雰囲気は流されて飲むようなことは断じてしません。

「それじゃあ、野郎ども！ 新たに仲間になったマシユとリカに——あ、逆だ。新たにマシユとリカの仲間になったアタシたちに、乾杯!!」

——意外にも、と言うと失礼だが、ドレイク船長はきちんとこの海の異常さを把握していた。嵐の海でサーヴァントらしき存在と会敵し、あまつさえ戦ったとも言った。

「で、アタシたちは明日にでも新たな船旅に出ようとしてたところさ。海賊が陸に上がったままじゃあ、締まりがない。で、今日はその前夜祭だったんだがねえ。アンタたちが乱入してきたワケ」

言つて、ドレイク船長はジョッキからラム酒を煽った。

「お、お邪魔してすみません」

「なあに、アンタたちはそれこそ吉兆さ！ 見た所、そっちのアンタも砲弾の一発や二発なんかなるんだろ？」

砲弾、砲弾か……試したことはないが、多分、この盾なら防げる。

……あれ？

「あの、それを承知でなぜ襲ってきたのですか？」

「あつはっは！ そりゃあアンタ、面白そうだからに決まってるだろ」
困った。この海賊女王の価値判断基準、さっぱり分からない。

「で、アンタたち二人、どっちがキャプテン？」

リカと顔を見合わせてから、一拍、わたしが低めに拳手せざるをえなかった。

だって、わたしはリカの「先輩」だから。リカもほら、苦笑しながら

らわたしを両手で指し示している。

そんなわたしたちを見て、ドレイク船長は懐から取り出した何かで、わたしのジョッキにラム酒を注いだ。——懐、とはいったが、正確には彼女の豊かな乳房の間からである。

「フオー————ウ!?」

「そら、飲みな! キャプテン同士、仲良くしようじゃないか!」

わたしは呆気に取りられて、ドレイク船長が手にした「それ」を凝視した。

——今までに見た金の四角錘じゃなくて、ちゃんとゴブレットの形状をした、小さな杯。わたしの見間違いじゃない。あれは聖杯だ!

「船長! それはどういった経緯で手に入れた品ですか!」

「お、コイツに目を着けるとはお目が高い。金で出来たジョッキなんて悪趣味だが、コイツは別き。汲めども尽きない酒。テーブルに置けばあら不思議、肉と魚がドカドカ盛りられていきやがる。たまたま拾ったもんだけど、こんなご機嫌なお宝は他にないんじゃないかねえ」

すると、赤ら顔の海賊の何人かが真顔に戻って抗議した。

「何言ってるんですか姐さん、とんでもない大冒険だったつスよ!」

「いつまでも明けない七つの夜。海という海に現れた破滅の大渦。そしてマイルシユトルムの中から現れた、幻の沈没都市アトランティス!」

『時は来た。オリンポス十二神の名の下に、今一度、大洪水を起こし文明を一掃する也』とか騒いでたデカブツを相手に大立ち回りして、お宝を奪った姐さんはこー……」

「何かの間違いに違いねえんですけど、サクツと世界を救った英雄だったんじゃないですかね!」

「さすが我らが姐さん、幸運と悪運にしか縁のない女! こりやもう死ぬまで独身ツス!」

「いやあ、新しい仲間も出来て酒が美味しい! だがボンベはあとで樽に詰めて潜水な!」

信じられないことに、ドレイク船長も海賊さんたちも、誰一人嘘をついていない。

この時代は、わたしたちが来る前に人理定礎が崩壊しかけていたんだ。

それを、何も知らないドレイク船長がノリと気分で解決した。

結果としてあの聖杯は、この時代を救ったドレイク船長を所有者に選んだ。乳房、というか、体に出たり入ったりするのはきつとそのせいだ。正当な持ち主なんだから、収納自在くらい当たり前だ。

「ドクター、ドクター！」

《ああ、はいはい何だい？ ちよつと待ってくれよ。探査プログラムの調子が悪いんだ。なぜかキミたちの目の前に聖杯があることになってる》

「合ってます！ あります、聖杯！ 目の前に！」

《何だどう!?!》

わたしは自分のジョッキを置いて、ドレイク船長に対して身を乗り出し、わたしたちの「探し物」こそその金のジョッキなのだとか訴えた。わたし自身も混乱していたから、説明が前後してしまい、夜まで時間を費やしてしまった。

「するつてえと、何かい？ アンタたちはこの魔法のジョッキを回収しに来たって？ ふーん。まあ、命以外はくれてやるつて言ったしね。ほいよ、受け取りな」

ドレイク船長がポイツと投げた聖杯を、わたしは慌ててキャッチした。

「——ドクター。聖杯が譲渡されました。変化はありますか？」

《特になし。時代のボルトは外れたままだ》

ですよね。

ドクターによると、「これ」が聖杯として機能しているのは確かだとのこと。でも、わたしたちが巡ってきた聖杯とは異なる。つまり、これは聖杯と呼んで差しつかえないものの、わたしたちが知る「聖杯」とはよく似た別物。二つの聖杯が拮抗しているから、この時代は崩れない代わりに、元にも戻らない、と。

「まあ妙な声が聴こえた。こびとでも飼ってんのかい？」

「ドクターは、そうですね……遠く離れた街から話しかけてくる、不思議な妖精さんだと思ってください」

「アンタらに戦わせて、自分は家で寛いでるって寸法かい」

するとここで、ずっと黙っていたリカが口を開いた。

「ドクター、寛いでなんか、ないです」

《——リカ君》

「すいません……」

あ、うん。確かにドクター・ロマンの情報支援あつてこそ、わたしたちがこうして動いているのは知っている。管制の内容が内容だから、忘れがちなだけで。

「で、結局、アンタらの目的は達成された？」

「いえ。もう一つ、この時代にあつてはならない聖杯があります。それを回収しなければ、海は永遠にこのままです」

「……本気かい？」

「はい。ですので」

わたしは両手で黄金のゴブレットをドレイク船長に差し出した。

「こちらはお返しします。これはあなたが持つべき物です」

「こ、こりやご丁寧にどうも……。はあ。お宝をあつさり渡すのも初めてだけど、あつさり返されたのも初めてだねえ……」

さて。ここからどうするべきか。わたしはカルデアのドクターに

助言を求めてみたが、返信したのはダ・ヴィンチちゃんだった。

ダ・ヴィンチちゃんはドレイク船長といくつか問答をした。ドレイク船長に改めて現状の危険がどういうものか伝えて、もう一度、わたしたちへの協力を促した。……ドレイク船長がダ・ヴィンチちゃんことレオナルド・ダ・ヴィンチの名を知らなかったことについては、ご愁傷様ですとしか言いようがなかった。

「となると、財宝も何もあつたもんじゃないのかねえ」

《いや、あるー。あると思うよ、ボクは！》

今度の返信はドクターからだが、ドクター、妙にハイテンション？

《この世界、この時代は『海賊』がいて当たり前のご時世だ。大航海

時代とは世界を一回り大きく広げた不可避の出来事。未知の海、見果てぬ水平線の向こうに、星の開拓者たちは夢を託したんだ。つまり、そういういた思念が、集結している。財宝があったとしても不思議じゃない!」

「要するにあるんだね!? 船に積めないほどの金銀や香辛料が!」

《うむ。ドクター・ロマンが保証しよう。財宝は、間違いなくある!》
「燃えてきた、燃えてきたよ! よーシアホウドも、まずはしこたま呑むよ! 明日からの航海はこれまでにない無理難題だ。生きて帰れる保証はないから、一生分呑んでおきな!」

『『乾杯!!』』』

って、また呑むんですか!? もー、ドクターのせいですからね!

オケアノス4

わたしとリカとフォウさんは、ドレイク船長自慢の黄金の鹿号ゴールデン・ハインドに乗船して、ついに航海へ乗り出した。

わたしはどこまでも広がる大海原を見渡した。

はあ、と感嘆の息が零れる。

見渡す限り海だなんて初めてだ。鮮やかな蒼の水面が太陽の光を受けてキラキラ輝いている。それも一面同じ蒼じゃなくて、反照の具合や深度によって色を変えるから、見ていて飽きない。

「見て見て、フォウくん。ずーっと海だよー」

「フォウ、フォウ」

リカもフォウさんも明るい顔と声で水平線まで続く風景を見ている。

「リカ、楽しい?」

するとリカはきよとんとしてから、ふんわりと微笑んだ。

「あたしが楽しそうに見えるなら、それは先輩が楽しいからです」

「わたし?」

「どんな素敵な場所でも、先輩が楽しくないならあたしも楽しいなんて感じません。逆にどんな過酷な環境でも、先輩が楽しんでるなら、あたしにとつてそこは天国です」

——いま、とんでもない大告白を受けた気がするぞ。

「あ、あの、すいませんでしたっ。やっぱ今の無しで。忘れてくれていいですから」

「やだ。一生忘れない」

「せ、せんぱあい」

「フォウ♪」

でも残念。はしやいではかりじやいられない。今回は、フランスともローマとも勝手違う。リカたちのことは「先輩」のわたしが責任を持って護——あ、カモメ発見! それに海賊船、も……

見てる。リカとフォウさんが、わたしを、じーつと。

「ちよ、ちよつと行ってくるっ」

「お気をつけて！」

「フオウ！」

リカもフオウさんも。敬礼は海賊じゃなくて海軍だよ。嬉しいからいいんだけどね。

わたしはまずドレイク船長のもとへ戻った。

「ドレイク船長！」

「ああ、マシユかい。ちょうどいい、アンタも手伝つとくれ。景気づけに一つ沈めてやろうじゃないか」

「互いに不干渉のまま通り過ぎるといふ選択肢は……」

「ないない。アタシら海賊、あつちも海賊。となれば顔を合わせてやることは決まってるだろう？」

ドクター・ロマンから通信が入った。

《人命の被害なら気にしなくていい。波形を探查するに、それは海賊の概念のようなものだろう。『大航海時代』に刻まれた一種の霊体だ。役割を果たすために動いている。『平均的な海賊』の無限コピーとでも言おうか。おそらくその世界を修正しない限り無限に生まれ続けるバグだろう》

「一言で説明すると、幽霊のようなものですね」

ドレイクさんの目に昏い色が浮かんで来た。これは、もしや、ドレイク船長ってまさか——

「訂正します。実体のある幽霊です」

「あ、あるんだ実体。ならオツケー！ 何の問題もないね」

いや、あえて指摘すまい。ドレイクさんの豪放磊落な笑顔を崩したくない。

幽霊船と黄金の鹿号の距離が縮んでいくにつれて、船内が慌ただしさを増していく。

大砲に弾丸を詰める人たち、武器庫から種々の武器を持ってくる人たち、望遠鏡で幽霊船を観察してドレイクさんに入れ替わり立ち代わり報告する人たち——

「よし、野郎ども——」

接弦した——！

「撃ええ!!」

全大砲が弾丸を幽霊船に向けて発射した。

幽霊船からも弾丸が跳んできたけれど、ゴールデン・ハインド黄金の鹿号に当たることはなかった。わたしが盾を開くまでもなく、船体が弾丸を避けた。

魔術も神秘もない、操舵手の優れた技術によって回避した。

——これが、海賊。

「連中にウチの舟板を踏ませるな！ アタシに続け、アホウドも！」

『オオオオオオオオオオ——!!』

ドレイクさんが一番に幽霊船に飛び移るのに続いて、カトラスを
持った海賊の皆さんが怒涛のように幽霊船に押しかけた。——はっ、
見惚れてる場合じゃなかった。わたしも行かなければ。

わたしは船の棧に上がった。——真下は、海。心臓が絞られた心地
がした。

だめ。立ち竦んでる情けない姿をリカに見せるわけにはいかない。
だってわたしは「先輩」なんだから。

だから、だからわたし、跳お……べえ!!

や、やった。着地成功——と安心する暇はなかった。

幽霊船の海賊がわたしに斬りつけようとしている。わたしは急い
で盾でそれを防いだ。ここからどう反撃するか——

と、急に敵が倒れた。顔を上げると、離れた位置からドレイク船長
が、笑って銃を持つ手をひらひら振っていた。あの人がこの海賊を
撃ったんだ。

幽霊船の上にいるコピー海賊は半数以下に減っている。

わたしは今度、自分から踏み出して、盾を全力で薙いだ。盾の圧で
コピー海賊を5人ほど吹き飛ばせた。

ついに残りのコピー海賊を、ドレイクさんが銃撃で仕留めた。

「さてさて、何かお宝でも——」

「水を差して申し訳ありません、船長。経験則ですが、こういった特殊
な場は制圧すると消滅します。すぐに撤退すべきかと」

「そうなのかい？ ま、そういうことならしようがないさね。野郎ども、撤収だ！」

ドレイクさんも海賊団の皆さんも次々と黄金の鹿号ゴールデン・ハインドに戻っていく。最後にわたしが黄金の鹿号に跳び移ってデツキに着地した所で、ちやうど幽霊船が分解・消失した。

「先輩っ」

「フオフオウ！」

リカがフオウさんを肩に乗せて、わたしに駆け寄ってきた。

「大丈夫でしたか？」

「ええ。どこもケガしてないでしょう？」

「——」

「リカ？」

「っ、いいえ、そうですね。何ともなかったならそれが一番、ですよ、はい」

「あなたこそ大丈夫だったの？」

「それは、はい。何とも。あ！ 隠れないで、ちゃんと先輩が戦ってる
ところ、ずっと見てましたよ!? ね、フオウくん」

「フオウフオウ！」

——自衛手段がない分、わたしより恐怖は強いだろうに。

わたしはリカを抱き寄せて、亜麻色の頭を撫でてあげた。ありがとうの気持ちを込めて。

潮風が吹きつけたので、わたしは顔を上げた。

黄金の鹿号が再び海を進み始めていた。

戦闘後で汗を掻いた体に、風が少しばかり寒かった。でもこんなに
天気がいいんだから、お日様の光ですぐに温まるよね？

「ところでさー」

「はい？」

「結局、この海には『何』があると思う？」

「ドクターの仰ることが正しいなら、財宝はあるかもしれません。た

だ、そうなる……財宝を狙う海賊もまた、ドレイクさんだけではないでしょう」

「あつはつは、滾るねえ！ 早い者勝ちつてのは実に分かりやすい」
そんな話をしていると、物見の方がやって来た。東北東方向に島が見つかったそうだ。

海賊島を出て、初めての陸地。

わたしはドクターに確認した。——島にはサーヴァント反応がある。

わたしはドレイク船長に頼んで、子分の皆さんには船に残ってもらうようにした。この中でサーヴァントと渡り合えるのは、わたしたちと、聖杯を持つドレイクさんだけ。子分さんたちを護りながら戦うだけの力量は、わたしには、まだ、ない。

新しく見つかった島。

わたしと、リカとフォウさん、それにドレイクさんとで、砂浜から上陸した。

慎重に進まなくては。せめてこの島にいるサーヴァントが敵なのか味方なのか分かるまでは。

……む？ ドレイク船長、おもむろに銃を抜いて、どうされ……

「そのあたりかあ？」

撃った。……撃った？

わたしは慌てて盾を実体化させた。敵影らしきものは、わたしの視界にはいないけれど。

「何となく気配がしたから撃ってみた」

『何となく』!? 『撃ってみた』!?」

「悪い予感がしたら銃声で打ち払う。生きるためのコツだよ？」

何て乱暴な。それは無法者の精神構造だ。

リカが、きよと、と小首を傾げた。まるで動揺が窺えない……この子はこんなに肝が据わっていたっけ？

「当たりました？」

「あはは、そんなの見るまで分かるもんか。死んだか殺したか、ちよいと見てくるよ。リカも付いて来るかい？」

リカがわたしをふり返った。目が、ドレイクさんと行つていいかを問うている。

……ええい、ままよ。こうなつたら逃げ隠れしても手遅れだ。リカを一人にはできない。

結局わたしたちは全員で、ドレイクさんが銃弾を撃ち込んだ茂みに割つて入った。

茂みから続く山林地帯に、人や魔物はいなかった。あつたのは、石板が一つ。刻んであるのはルーン文字だった。ドクターに解読を頼んだのだけど、答えたのはダ・ヴィンチちゃん。通信の向こうでドクターが「仕事取らないで」と言っているのが聞こえた。

肝心の石板の内容はというと——「一度は眠りし血斧王、再びここに蘇る」と。

《け、血斧王は9世紀のノルウェーを支配したヴァイキングの王だよ！》

慌てて言うくらいに仕事取られたくないんですね、ドクター……：同情します。

「ヴァイキングね。言うなればアタシたちのご先祖様か。その王様がこの島にいるって？」

「その通りです」

「それじゃあなおさら、そいつに獲られちゃう前にお宝を探し出さないかね。さあ進もうじゃないか」

ドレイクさんは意気揚々と、森をさらに分け入って進んでいく。わたしは、段差や苔むした地面の前でリカの手を引きつつ、ドレイクさんの背中を追いかけた。

「ん、くんくん。財宝のにおいがしないかな」

「船長、財宝は匂いしませんよ」

「あつはつは！　そう思うかい？　だが財宝つてのは匂うもんなんだ

よ」

海賊となると五感まで一般人と違うベクトルを向いていそう、なんて思ってしまったわたしである。

「その目は信じてないな？ それじゃあ賭けと行こうか。アタシの言った通り、ここに財宝があったら……そうだ！ 世界一周の旅に付き合うってのはどうだい？」

「世界一周、ですか」

「この海域を脱出してイングランドに戻ったら、アタシは黄金の鹿号で世界を巡るつもりだったのさ。どうだい？ アンタが協力してくれるなら、どんな状況でもひっくり返せそうんだけどねえ」

——わたしはカルデアの外を知らない。こうして色んな時代にレイシフトして色んな環境に触れただけでも儲けものなのに、これ以上にたくさんの世界を知りに行つて——いいの？

「その代わりアタシが負けたら……うーむ。何か欲しいものでもあるかい？」

「……何も要りません」

リカの答えた通り。強いて言うなら、こうしてドレイクさんに協力してもらっていることが報酬だ。

「——リカ。それってつまり、欲しい物が無いんじゃないやなくて、何も望んでないって意味かい？」

「……そういうことになる、と思います」

「難儀な性格してんだね。アンタ」

？ ドレイクさんの言ってること、両方とも同じに聞こえるのに。二人にしか分からないニュアンスの差があるらしい。——ちよつと、疎外感。

オケアノス5

上陸してすぐに見つけたあの石板が正しいなら、この島には血斧王エイリークのサーヴァントが存在する。

戦闘になった場合、わたしは防御一辺倒だから、攻撃面はどうしてもドレイク船長に頼らざるをえないんだけど――

「ざまあみろ、ヒゲモグラ。ロートルは引っ込んでな」

――どういうわけかこうなった。

エイリークのクラスはバーサーカー。ご多聞に漏れず狂化を付与されていて対話は不可能だったから、わたしたちはエイリークを迎え撃った――のだが。

血染めの巨斧による重撃を受け流すので精一杯だったわたしの眼前。

ドレイク船長が放った銃弾は、筋骨隆々のエイリークの心臓部に風穴を穿った。

それだけ。

たったそれだけのダメージでエイリークは消滅した。

「にしても、嵐の中でしつこく追い回してきた連中に比べたらなーんか薄っぺらかったというか、いまいち覇気に欠けたね。マシユ、サーヴァントってのあこういうもんなのかい？」

いいえ、まさか。聖杯を所持しているにしても、常人は満身創痍でおかしくありません。

《おかしいな。消滅した割にサーヴァントの反応が……あれ、消えた。うーん、この時代に来てからどうも計測機器の調子が悪いな》

「ふーん？ よくわかんないけど、改めてお宝探しと行こうじゃないか」

鼻歌まじりに再び先頭を歩き始めたドレイク船長。わたしもドレイク船長に続いた。

フオウさんを肩に乗せたり力が小走りでわたしの横に来た。

「先輩。宝物があつたら、どんな中身でしょうね」

はにかみがちに言う後輩のかわいいこと！

けれど、ふむ。お宝、お宝か。例えば、幻の鉱石や冒険家の手記なんかがあったら、面白そうだとは思う。

「……あたし、実はちよつと怖いです。本当に宝箱でも見つかったらどうしよう、って」

「こわい？」

「本当に金銀財宝でも見つかったらどうすればいいの、って。もう怖くて怖くて。どんな物があるにせよ、それって手に入れたら自分のほうが宝物のおマケになっちゃうってことだから」

……訂正。こんな笑い方をするリカが、かわいいだなんてとんでもなかった。

わたしは両手でリカのほっぺを、むにゅ、と摘まんだ。

「へんふあい？」

「リカがおマケだなんて、ないから。どんなすごいお宝を見つけたって、わたしにとっては、お宝のほうがリカのおマケだから」

だから、そんな悲しいこと言わないで――

「おーい！ 見つけたぞー！」

わたしとリカは驚くほど機敏にお互いから距離を取った。

どうして？ わたしもリカも悪いことをしていたわけじゃないのに、心臓が妙な律で打っている。言葉が喉につつかえてるの。

それはリカのほうも同じみたいで……

と、いけない。ドレイク船長が呼んでいるんだから、早く行かないと。

わたしは一拍ためらったけど、リカの手を引いて浜辺に急いだ。

ドレイク船長が見つけたのは、砂浜に打ち上げたヴァイキングの大型船だった。ドクターによると、品質は新品同然だけど、様式は9世紀のもの。

ドレイク船長はその大型船から、手垢がついたスケジュール帳サイズの本を持ち帰った。

その本こそ、ヴァイキングの詳細な航海日誌。中にはこの島と周囲

一帯の海図が緻密に書き込まれていた。

ドレイク船長は磊落に笑ってみせた。

「これから海に乗り出すアタシらにとって、これ以上ないお宝だろう？」

——参った。これはドレイクさんへの評価を大きく上書きせざるをえない。

フランシス・ドレイクは一見すると乱暴で無軌道だけど、極めて堅実かつ現実的な「航海者」だ。

「見直したかい？　じゃあ、世界一周に付き合う？」
でも、それとこれとは別問題。

だって——時代が修正されたら、わたしたちの記憶そのものがドレイクさんから消えてしまう。いえ、そもそも「なかったことになる」。約束したって、いずれは泡と消えるものを、簡単に結ばはしないよ。

ふいに、リカがわたしの腕を、抱きつくように組んだ。

「この戦いが終わったら……で、どう、でしょう？」

「そうかいそうかい！　アンタたちがいるなら百人力だ！　さ、船に戻るとするか。食料と水を確保してから出発だ」

ドレイクさんは意気揚々と来た道に戻っていく。

「リカ。今のは——」

「……ごめん、なさい。先輩、困ってるみたいに見えて、その……」

「ううん。その通りよ。フオローありがとう」

それに、満更でもない。そんな奇跡が起こらないのは重々承知しているけど、ドレイク船長との世界一周、行けるものなら行ってみたいって気持ちは胸にあるから、嘘の答えでもない。

わたしは、不安そうな顔をするリカの、頭を撫でた。代弁してくれてありがとうね。

ゴールデン・ハインド
黄金の鹿号に戻ったわたしたちは、ヴァイキングの航海日誌を頼りに、北西にある島を目指した。ドレイク船長によると、その島への到着まで10時間かかるという。

日誌の海図のほうならともかく、文字は古い時代のものなので、ドクターに翻訳を頼んで転送した。

到着までの10時間、どう過ごしたのかしら——ん？ リカは？
近くにいない。

——いた。リカは木箱の隙間に隠れるようにして、レーションで栄養補給中。

そういえば、船に乗り込んでから、リカが「お腹がすいた」「喉が渴いた」と訴えたことは一度もない。

朝一に船を出してもうすぐ半日。まさかこれまでも今みたいに隠れてレーションですませて来たの？

わたしはリカに歩み寄った。

「リカ」

「あ、先輩。何かありました？」

「いいえ。航海は至って順調。それよりリカ、食事はそれだけでいいの？ 栄養は摂取できても、おなか空かない？」

「これだけで平気、です。あたし、小食ですから。それに、船の食糧を分けてもらったら、子分さんのごはんが減っちゃうかなあ、って」

——前回の古代ローマでのオーダー。わたしたちは正規のローマ軍兵士だったから、食事は充実していた。だからあえて召喚サークルから食糧支援を受けなくてもよかった。

——今回の食事情は真逆だ。

次に着く島に霊脈のポイントがあればいい。そしたらドクターに頼んで、味気ないレーションなんかじゃなくて、おにぎりの一つでも転送してもらおう。そうしよう。後輩の食生活に気を配るのも「先輩」の役目、だもんね？

そして、ついに。 ゴールドデン・ハイランド 黄金の鹿号は目的地である島に辿り着いた。

ドクターによると、エイリークがいた島よりも格段な大きな島で、霊脈のポイントもあるそうだ。

カルデアから送られた座標を目指して（もちろんドレイクさんにも

了解を得て、わたしたちは島の探索を始めた。

「広いねえ、こりや。島の上とは思えない」

こういう光景は、思い出す。ローマの風薫る大平原もこんな感じだった。

船の上にならずといて海を眺めているのは楽しい。楽しいけど、こうして陸に上がってほっとするのは、わたしが「陸の人間」だからなんだろうな。

などと、物思いに耽りながら進めば、あっさりと霊脈地に着いてしまった。

わたしはドレイクさんにお時間を頂いて、実体化させた盾をその場に立てた。

召喚サークル形成、レイシフト座標、アンカー！

——、ふう。これでよし、と。

あとはドクターかダ・ヴィンチちゃんにお願いして、リカの分の食事……

あれ？ 何？ 通信が、ノイズがいつぱいで……ドクター・ロマン!? ダ・ヴィンチちゃん!?

わたしが困惑していると、唐突に地面が大きく揺れた。

「じ、地震っ?」

「フオーウー!」

「伏せな、かなり大きいよー!」

わたしは左手をリカの肩を回して、地面に這いずる格好をとった。ドレイクさんもそうしている。

揺れは10秒ほどで鎮まった。

「リカ、大丈夫だった?」

「はい。なんともないです。ありがとうございます、先輩」

「フオーウー!」

「ドレイクさんは——」

「荒れた海に比べりや、そよ風さ。だが船と部下が心配だ。一度戻って構わないかい?」

「はい。わたしたちはここでお待ちしていますので」

砂浜に戻って行って、またわたしたちのところへ来たドレイクさんは、開口一番。

「船が動かなくなった」

すごく大変なことを、いつもより深刻そうに告げた。

「船そのものに異常はなかった。ただ、船体が何かでがっちり固定されちまってね。にっちもさっちも行かない。アンタたち、こういうの専門なんだろ？」

「魔術的な結界じゃないかと、思い、ます……」

リカの予想は多分当たっている。わたしはデミ・サーヴアントだから無理やり脱出できるかもしれない。でも、黄金ゴールデン・ハインドの鹿号はそうはいかない。

「はい。結界を構築した何者かを討たない限り、船は固定されたままでしょう。結界の主を探し出して倒す。でなければ脱出はきつとまなりません」

「アンタらがそう言うんならそうなんだろう。じゃあ一丁、そのヌシとやらをぶっ飛ばしに行こうじゃないか！」

オケアノス6

わたしたちは再び歩き出して、平原を突っ切った。

進めば進むほど平原は荒野の様相に変わっていく。ドレイクさんは「殺風景」と評した。わたしも同意だ。島は島でも、ちよつと進んだだけで、時の流れも空気も全く別の異空間に踏み入ってしまったように錯覚した。

急に、リカの肩からフォウさんが飛び降りて、進路とは別方向に駆け出した。

——フォウさんがこういうことをする時、行く先には事態を動かす何かがあると、二度のオーダーで知っている。

「フォウくん、待ってっ」

「船長、わたしたちもっ」

みんなでフォウさんを追いかけた先には、一人が潜れる程度の穴が開いた岩山があった。

フォウさんは、まるでわたしたち全員が揃ったのを見届けたように、岩山の穴に入って行った。

暗い穴を潜つてすぐ、下続く階段があった。出口らしき光は下に灯っている。

「地下迷宮^{ダンジョン}ってやつかい？ いいねえ、海賊の血が滾る！」

ドレイクさんがまず階段を降りて行った。

ここでわたしたちが追いかけないわけにはいかない。わたしはリカと手を繋いで、地下へ続く階段を慎重に降りて行った。

出口を抜けるなり、フォウさんがリカの顔面にアタックした。フォウさんはそのまま上手いことリカの肩に乗った。

「本当に迷宮です……」

——石詰め^{石詰め}の壁。小さな火を燈した石の柱。何より、似た風景が続くいくつもの分かれ道。

「よーし、揃ったね。じゃあ進むとするか。右か左か……直感、左！」
ドレイクさんは軽やかな足取りで、石造りの閉鎖空間など物ともせ

ず進んでいった。

「……先輩、先輩。いいんですか？」

「よくはないんだけど……ドレイク船長は一流の海賊。その直感も鋭敏でしょう。た、多分？」

うぐ。分かっている。分かっているから、リカ、そんな泣き出しそうな顔しないで。見てるわたしも心苦しい。——そうだ！

わたしはいつものようにリカと手を繋いだ。いつものとちよつと違うのは、十指を絡め合う「恋人繋ぎ」をしたこと。やましい意図はありません。

「これならはぐれても、わたしだけは絶対リカのそばにいるよ」

「——はい」

あ、はにかんだ。かわいい——じゃなくて！ リカが安心してくれてよかった。

ふいに前を行っていたドレイクさんが立ち止まった。彼女の横顔は、険しい。

「ドレイクさん？」

「——血の臭いがする。こういうのは商売上、どうしても嗅ぎ慣れるからね」

本当だ。床に点々と赤い液体が落ちた形跡があった。

ゴールがどこか分からない迷宮の中で見つけた、唯一の手掛かり。わたしたちは血痕を追って歩を進めた。

程なくして床の血痕は途切れた。死体らしきものはないから、この血痕の主は生きてはいるんだろう。ここで患部を止血した？ それとも転移魔術なんかでこの場から消えてみせた？

わたしは前方を見やった。

潇洒な細工で飾られた門の向こうは、暗闇で視えない。

「止まりな、マシユー！」

咆哮。そして、鎖を引きずる重い足音。近づいて、来る、この気配。サーヴァントだ！

「イヤな予感的中だね。何か来るよ！」

わたしは盾を構えてリカとフオウさんを庇う位置に立った。

足音が大きくなっていくにつれて、わたしの心臓も早鐘を打つ。汗が肌に滲む。手が震え出す。

今までに竜種や魔神とまで戦っていたって、恐ろしいものは恐ろしい。

でも、わたしの背中には、わたしの「後輩」がいる。情けない「先輩」を見せたくない。

震えるんじゃないやなくて、奮い立て、マシユ・キリエライト！

暗闇から現れて全容を晒したサーヴァントは、鋼鉄の牛面を被った大男だった。

「デカッ!? 何だい、こいつ！」

仮面越しにくぐもった声が無慈悲に告げた。

「しね」

問答無用、か。撤退しようにも、きつとこの迷宮は彼の領域だ、すぐ追いつかれるのが目に見えている。

牛面のサーヴァントが肉厚の拳を振り下ろした。

「オオオオオオオオオオオ!!!」

わたしは盾を傘のように構えて、敵の拳を防いだ。ぐっ、やっぱり、重い！

続いて牛面のサーヴァントは蹴りをくり出した。彼の足には枷と、それに繋がった鉄球がある。まともに食らったら複雑骨折待ったなし。

わたしは急いで彼の拳を盾で跳ね返して、鉄球付きの蹴りを盾で受けた。よし、防御は間に合った。

銃声が木霊した。

「マシユ！ 下がりな！」

ドレイク船長が牛面のサーヴァントを銃撃している。着弾は全て眉間。急所狙いだ。

わたしは牛面のサーヴァントから距離を取った。

盾の防御力を反発力に応用して吹き飛ばすべき？ でも、これだけ

の巨漢を相手にその技を試したことはない。わたしの小柄さじゃあ逆にわたしが吹き飛ばされかねない。

そこで、敵の牛面に亀裂が入って、真つ二つに割れて床に落ちた。お面の下から出てきたのは、額から血を流す、どことなく童顔の男。

「ま、もる……!」

護る、って言った？ 何を——誰を？

「お待ちなさいツツ!!」

わたしたちの中の誰でもない、少女らしきソプラノボイスが迷宮に響き渡った。

現れたのは、声のイメージに違わぬ、そう、美少女だ。外見年齢はリカより幼く見える。でも、この気配。彼女もサーヴァントだ!

彼女は大男の前に出てヒステリックに叫んだ。

「わかった、わかったわよ! 私が付いて行けばいいんですよ! アステリオスはもう瀕死よ。戦力としては連れて行く価値もないでしょ。さつさと帰りましょうよ、アイツの所へ」

……あれ? ええと。どうしよう。何を言われたかさっぱり分からない。

「あの、少々よろしいでしょうか」

「なに、ダサイ大盾女?」

だ、ださいとは、わたしが?! 失礼な! この甲冑も盾も「僕」にとっては誇らしい、由緒正しい品々で……!

「こら、ガキンちよ。助けられる身分で、そう悪口を言うもんじやないよ」

「はあ? 育ちきった女はお呼びでないんですけど?」

「——、ほう? アンタ、船首の女神像の代役でもしたいわけかい」

「女神? ……よくわからないけど、私は女神エウリュアレよ。なに? そんなことも知らないで追い回してたの!?! 名前くらい知っておきなさいよ。失礼にも程があるわ。アナタ、どこの三流海賊?」

「こ、このガキ……!」

場が、しつちやかめつちやかに、なっついて、止められない。

わたしの後ろにいたリカが、ぼそつと何か呟いた。

わたしには聞き取れなかったのに、エウリュアレと名乗った彼女には内容が聴こえたみたいだ。

「はあ？　じゃあ一体どこの誰よ、あなたたち」

エウリュアレさんはこちらの話を聞く姿勢を見せた。

チャンスだ。わたしは急いで、わたしたちが地下迷宮を偶然見つけたことと、ここにエウリュアレさんがいるとは知らなかったことを説明した。

「な・に・よ・そ・れー！　まぎらわしいのよ、あなたたち！」

ちゃんと説明したのに怒られた。理不尽だ。

「ぐ……」

「ああ、アステリオス！　動かなくていいわよ。あなた頑丈なんだから、じつとしていれば死なないわよ。……死なないわよね？」

アステリオス、というと——ギリシャ神話のミノタウロス!!　迷宮に迷い込んだ生贄の子供たちを殺したミノス島の怪物!?

わたしは慌てて、盾は構えないまでも、リカを背中に庇った。

「結界を張ったのはそちらのアステリオス……ですね？」

「そうよ。でも、あなたたちを閉じ込めたんじゃないわ。外から入ってくる敵を防ぐため。しようがないじゃない。こっちは特別タチの悪い変態に狙われているの。その女と同じ海賊、しかもサーヴァントにね。真名は知らないわ。ただ、世界最強の気持ち悪さなのは確かよ。アイツの前じゃスキュラも自分の体を見直すくらいに」

「そ、それは相当ですね……ですが、解除していただかないとこちらも立ち往生で」

「むう……仕方ないわね」

エウリュアレさんは予想外にあっさり承服した。

「あなたたちが外に出るには、アステリオスが死ぬか、結界を解除するしかないんだから。だったら解除するほうがマシ。……一人になるより、遙かにね」

ここでずっと黙っていたドレイクさんが話題に参加した。

「でもさ、アンタたち、結界？　とやらを張らなきゃいけないほど切羽詰まってるんだろう？」

「そんなのあなたに関係ないでしょ」

「ある！ アタシはね、面白いモノが好きなんだよ。世の中には面白いモノばかりだ！ アタシはアンタが気に入った。だからウチの船に回収する。そっちのアステリオスも一緒にね」

エウリュアレさんが面食らった。当のアステリオスは事の成り行きが分かっていないらしく、首を傾げた。

「あんだけ根性があつて体力があつて、おまけによく見りやいい男だ！ アンタ、アタシの船の用心棒にならないかい？ 給金も弾む。あ、でも福利厚生は期待しないでくれ」

エウリュアレさんはアステリオスをふり返り、恐る恐るどうするかを尋ねた。

「いく。——おまえ、が、いく、なら、ついていく。ひとりは、さびしい」

「……なら、いいわよ。船に乗ってあげる」

思い知った。ドレイク船長と行動を共にするとはこういうことなのだと。

そんなこんなで、ゴールデン・ハインド黄金の鹿号に2名様ご案内です……

オケアノス7

わたしたちは、エウリュアレさんとアステリオスさんを引き連れて砂浜に戻ってきた。

ゴールドデン・ハインド
いぎ黄金の鹿号に乗り込む、その前に。

リカがアステリオスを呼び止めた。

「あの。アステリオスさん。足枷、外させてもらえませんか？」

「これから海に出るんですから、万が一海に落ちたら、鉄球が重くて浮かび上がれないんじゃないかと思っただけです、けど……その、すみませんっ。出過ぎたこと言っつて」

「——いいんじゃない？ せつかくだから外させなさいよ、アステリオス。たかが人間の小娘にできるならね」

アステリオスは無言で頷いた。

リカはほっとした様子で、アステリオスの足元にしゃがんだ。そして、まず左側の足枷に両手を添えた。

リカがわたしまでは聞こえない声量で詠唱すること十秒足らず。

バキン！ と、鉄球付き足枷が開錠した。

「次はこっち、失礼します」

二度目の詠唱。やはりアステリオスの足枷は容易く開錠されて外された。

リカは立ち上がって、アステリオスにぺこんと一礼した。

わたしはリカの頭を撫でた。よしよし。よくできました。

——みんな忘れがちだけど、この子は魔術師としてオールラウンダーですよ？

船に乗り込んでから、引け腰の子分さんたちに、ドレイク船長は一喝するようにエウリュアレさんとアステリオスを紹介した。

さらにエウリュアレさんから「手を出したら殴る」との先制攻撃宣言。こういうのは最初が肝心なんだとしても、エウリュアレさんのそれはどこか過剰というか、本心を隠して強がっている印象が強かつ

た。

——ゴールデン・ハインド黄金の鹿号が出航した。

天気浪々、浪低し。絶好の航海日和だとは、ドレイク船長の言だ。だからってまた酒宴を始めないでください……まったく。

あちらのデツキでは、エウリュアレさんとアステリオスが、余人を寄せ抜けぬ雰囲気を作り上げている。

「アステリオス。ケガはもういいの?」

「ん」

「ふうん、そう。じゃあ私を肩に乗せても問題ないわね?」

「う」

アステリオスはしやがんでから、大きな両手で華奢なエウリュアレさんの腰を掴むと、自身の肩に座らせた。その光景は、有名な童話のタイトルを想起させた。ずばり、美女と野獣。

……ああしてエウリュアレさんと仲睦まじくしていると、本当に彼がああのミノタウロスなのかを疑う。

と、そこに物見の子分さんが走って来た。

「姐御! 前方に船一隻! 例の旗と同じ海賊旗を掲げてます!」

ちやうど同じタイミングでカルデアから通信が入った。

《よかった、やっと通じた! 一体そっちで何が起きている!》

「すみません! 色々な事が一斉に起きたもので、報告をうっかり忘れていました!」

《忘れられてたの!?! みんなの頼れるロマン先生ですよ!?!》

ドクター・ロマンが頼れるお医者さんであるのは知っている。今はそれよりも。

「ドクター! 接敵直前です。コピー海賊とは異なりきちんとして旗を掲げています。あの旗について急いで分析お願いします!」

《そーゆー意味で頼られるのはなんだか悲しいんだけど!?! すぐ照合する! —— つ、そんな、まさか》

「判明しましたか!?!」

「受信した旗の映像が確かなら、それは史上最高の知名度を誇る海賊船だ！ 黒髭ことエドワード・ティーチの海賊団……！ 接敵直前と言ったね。戦闘になったら出し惜しみなしの最大火力で臨むんだ。黒髭は伝説上、無抵抗の相手は見逃したが、少しでも抵抗の素振りを見せたら皆殺しにした残虐な海賊だ」

くつ。護りしか能のないデミ・サーヴァントにはきついオーダーです。すね。

でも、やるしかない。

「あー！ アイツだ！ アタシの船を追い回してた海賊！ ここで会ったが百年目だ。水平線の彼方まで吹き飛ばしてやる！」

ドレイク船長はこのように殺る気満々なのだから。

ふいにエウリュアレさんがアステリオスの肩から降りた。かと思えば、辟易満面で、わたしの背後にやって来て、リカと腕を組んだ。エウリュアレさんもリカと一緒にわたしの盾に隠れる形になった。

二つの船がついに横並びになって停まった。

見えた。あちらの船のデッキには、通り名そのままに黒い髭を蓄えた男が一人。それに、女海賊が二人に、十字槍を持った男が一人。うそ、あの全員がサーヴァントじゃないの……！

「おい！ 聞いてんのか、その髭！」

「はあ？ BBAの声など一向に聞こえませぬが？」

——はい？

「だーかーらー！ BBAはお呼びじゃないんです。何その無駄乳、ふぎけてるの？ まあ傷はいいよ？ イイよね刀傷。そういう属性はアリ。でもね、ちよつと年齢がね、困るよね。せめて半分くらいなら、拙者、許容範囲でござるけどねえ。ドウルフフフ！」

黒髭と思しきサーヴァントの謎言語によって精神をやられるのは、わたしよりドレイクさんのほうが先だった。

子分さんに声をかけられてもドレイクさんはノーリアクション。目が死んだ魚状態。

「あの、先輩？ あの髭おじさん、何なんでしょう……？」

「しっ。見ちゃいけません」

わたしは後ろからリカに目隠しをした。リカはリカで、抱っこしていたフオウさんを目隠し。

当の黒髭はエウリュアレさんを見つけて、とんでもなくよろしくない意味でハツスルしている。

そんなアレが何かと聞かれたら……変態だ。それも時代の最先端を歩き過ぎた変態だ。

その変態の視線がよりによってわたしたちに向いたものだから、わたしはリカを背に庇って、精神衛生的な意味で盾を構えた。

「ん？ んー……んー、んーんー………マル！ ごーかーく！ その鯖、名前を聞かせるでござる！ さもないと——」

さ、さもないと何だ。わたしはより身を強張らせて盾を握り締めた。

「今日は拙者、眠る時にキミの夢を見ちゃうゾ♪」

「マシユ・キリエライトといいます！ デミ・サーヴァントです！」

く、屈辱……！ でも、アレの夢に登場させられるよりよっぽどマシ！（夢に出た時点で絶対ろくな展開に遭わされないだろうし！）

すると、後ろからリカがわたしにぎゅーっと抱きついてすり寄った。あ、これは助かる。全身の鳥肌が波のように引いていった。

「……………撃て」

「あ、姉御？」

「大砲。全部。ありったけ。いいから。撃て。さもないとアンタたちを砲弾代わりに詰めてから撃つ」

石化していた子分さんたちが慌ただしく動き出した。

船が回頭する。ドレイクさんの大喝を受けて、ゴールドデン・ハインド黄金の鹿号の大砲が

黒髭の船へ向けて斉射された。

でも——効いて、ない!?!

確かに砲弾は命中しているのに。黒髭の船の装甲が分厚いのか。

それとも何か別の——って、しまった！ 考えている内にあちらからゴールドデン・ハインド黄金の鹿号に接舷された！

雄叫びを上げて黒髭側の海賊たちがこつちに乗り込んできた。

応じて、海賊と海賊の戦いがあちこちで勃発して、もう船上は混戦状態だ。

とつさに敵味方を見分けるほどの動体視力もないわたしじゃ、リカとフオウさんを背中に庇って、近くで斬り合いになつたら盾で身を守るのが精一杯だ。

「チツ！ 撤退するしかないか……！」

「この混戦状態で！」

「やるしかないだろ！ —— 砲弾、再装填！ 煙玉を使う、煙幕張りな！」

こちらは必死だというのに、敵船から黒髭が余裕綽々に声をかけてきた。

「おい、無理すんなBBAA。大人しく聖杯を渡せばこっちも見逃してやるよ〜」

黒髭が聖杯の在り処を知っている——？ サーヴァントなら付与された知識で聖杯を知っておかしくないけど、ドレイク船長が所持者だとこの海で知るのはわたしたちだけのはずなのに。

「ギギギギギ！ コロス！ コンドコソ、コロスゾオオ！」

血斧王エイリーク……!!? どうして！

《こ、こいつは倒したはずだろ!? 消滅も確認して——》そ、そうだ！
あの時、サーヴァントを形成する魔力の大幅な乱れがあった。あれが転移だとしたら……もともと黒髭が召喚したサーヴァントってことか！》

サーヴァントがサーヴァントを召喚する。つまり黒髭は聖杯、もしくは聖杯に近い何かを持っているということ？

思案に費やす暇はない。エイリークは問答無用で、血塗れた斧を振り回した。

「きや……！」

エウリユアレさんの悲鳴に反応したアステリオスが、エイリークの斧の柄を掴んで、競り合いに持ち込んだ。

傷口が開くという心配は無用だった。何故ならリカが後ろからアステリオスにタッチして、瞬く間にアステリオスの傷を治癒したから

だ。これならエイリークの相手をアステリオスに任せられる。

「マシユ！ 上よー！」

エウリュアレさんの叫びに反射的に顔を上げると、弾丸じみた速度で一本の十字槍が飛んできていた。狙いはわたし——じゃない！
リカだ！ わたしは迷わず盾を開いた。

「ロー仮想展開／カルデアス人理の礎!!」

飛来した十字槍を魔力防壁で受け止めた。ぐ……！ 今まで受けたどの攻撃より重くて、両腕が軋んだ。

「先輩！」

「フオウ！」

「来ちゃだめー！」

わたしの前に跳び移ってきたのは、苔色の戦装束の男。十字槍がオートで男の手に戻った。

「手っ取り早くマスターを始末すれば、どうにでもなると思ったんだけどねエ。いやはや傑物だ。一体どんな英霊なのやら」

わたしは男に言い返そうとしたけれど、急に船全体が揺らいでできなかった。

揺れの原因は、あちらの女海賊がマスケツト銃でゴールデン・ハインド黄金の鹿号の船底を撃ち抜いたから。

「精々頑張りな、お嬢さん。ここで船もろとも海の藻屑じゃ恰好がつかないぜ」

男はこちらに來た時と同じ軽快さで、黒髭の船に跳んで戻って行った。

「先輩……」

リカがわたしのすぐそばに来て、わたしの左手を両手で包んでくれた。

——どんな英霊か、なんて——

——わたしが一番知りたい。

オケアノス8

ゴールデン・ハインド
黄金の鹿号は無事、近くの島に漂着した。船体も船員も損傷が激しいけど、みんな生きています。

——あの時。

船底に大穴を空けられて、もう沈没するしかないと思っただけなのに、誰も思った。わたしも思った。

でも、一人だけ、アステリオスは諦めなかった。

彼はその場で海に飛び込むと、何と黄金の鹿号ゴールデン・ハインドを担ぎ上げて泳ぎ出したのだ！

アステリオスさんの奮闘のおかげで、わたしたちは生き延びたし、船を修繕する目途も立った。彼にはどんなに感謝しても足りない。

それはわたしに限った話ではない。アステリオスさんは一躍ヒーロー。子分さんみんなが口々にアステリオスさんを褒め称えた。アステリオスさんは戸惑いながらも照れていた。

当面の課題は、黒髭の攻略法である。

わたしは通信でドクター・ロマンに頼んで黒髭の略歴を教えてくださいました。うう、字面だけなら大海賊なのに……まさかのアレ。

ドレイクさんの表情が徐々に鬱蒼としていく。

「みんな、すまない。同じ海賊として本当にすまない」

ああ、ドレイクさんの目がまたも死んだ魚のように。あとその台詞回しは何故か、とある竜殺しを思い起こさせます。

ここは話題を変えてドレイクさんの気を逸らそう。

わたしはドクターに、黒髭の宝具として可能性があるエピソードの有無を尋ねた。

ドクターの答えは、やはりあの船そのものが宝具ではないかというもの。カルデアが戦闘中に計測していた魔力の波動は、あのクイーン・アンス・リベンジ「女王アンの復讐号」が最も大きかった。

状況を照らし合わせての結論は、あの船は「乗せている部下が強ければ強いほど船体の強度が上がる」特性の宝具だということ。

あの時点で黒髭の船には5騎のサーヴァントが乗っていた。黒髭、

二人組の女海賊、エイリーク、それに——十字槍の男。
ぞく、と。

あの十字槍の男とのたった一合を思い出して、背筋が粟立った。
……だめ。弱気にならないで、マシユ・キリエライト。リカがわたしを見つめてる限り、わたしは頼れる先輩でいなくちや。

黒髭にリベンジするには、まず、そう、まずは黄金の鹿号ゴールドデン・ハインドを直さないと。でも船底に空いた穴を塞ぐ材料がない。ということは、島の木なんかを切り出して——

考えて俯きがちになつていたわたしは、急に足下の影が濃くなつたことに気づいて、空を見上げた。

ワイバーンが空を飛んでいた。

——その姿を見た時、天啓が閃いた。

「あれ！ あれですよ！ ワイバーンの体表の鱗を船の補修に使うんです！」

ワイバーンの硬さは、フランスで食傷になるまで戦つたから思い知っている。だからこそ逆に、あの硬さを利用できれば頼もしいことこの上ない。

「あら、いいわね。竜種の鱗は加工すれば鋼より頑丈よ。加工は——アステリオス、やれる？」

「う」

よおし。そうと決まれば、レッツ・ハンティング！ まずはあれなるワイバーンの注意を地上に引いて、わたしたちのもともまで下りて来てもらいましょうか。

わたしたちは島を奥へと進み、ワイバーンを見敵必殺。ワイバーンの骸から鱗をみんな力で合わせて剥がして溜めては、船に持って帰る。そういう作業をくり返した。（鱗を収納する風呂敷はドレイクさんの聖杯提供）

これが意外に時間を費やした。ワイバーン一頭分だけでも、鱗を剥がすだけで一苦勞。しかも大きさや重さの問題で一度に多くは持ち

帰れないと来た。

この調子じゃあ、目標の30頭を狩るまで何日かかるやら。わたしはすでに気が重かった。

ようやく3頭目のワイバーンから鱗を全て回収したところで——わたしたちに数奇な出会いがあった。

文字通り降って湧いたクマのぬいぐるみと、それを追いかけてきた弓使いの女性。

二名との遭遇のあれこれ話し出すと全力で話が前に進まないの割愛させていただくが——

こちら。女性は、世界に名立たるギリシヤ神話の月女神アルテミス。ぬいぐるみは、その恋人の狩人オリオンだったのです！

ドクター・ロマンによると、英霊のランクダウンによる代理召喚だとか。とにかくアルテミスさんは「オリオン」の枠に収まることでサーヴァント化し、本物のオリオンさんはなぜかぬいぐるみの姿でくつついてきた、と。

それでも、両名、実力確かなサーヴァントであることは間違いない。言動は横に置いて。言動は横に置いて。(大切なことなので2回以下略)

「では、オリオンさんとアルテミスさんは、我々にご協力いただけるという認識でいいんですね？」

「するする。超手伝う。永遠の世界で生きるくらいなら、地獄で死んだほうがナンボかマシ」

アルテミスさんのほうは、オリオンさんがするなら自分もそうする、という感じだったけれど。神様目線だとそういうふうになるのはしかたないわよね。

わたしは早速お二人に、一緒に竜の鱗を集めることをお願いした。オリオンさんは、さすが女神アルテミスを射止めた狩人だけあって、竜種の狩りにも精通していた。ワイバーンの巣がある地形から、竜種の生態、鱗を剥がすコツまで(その都度、当のオリオンさんを頭に乗せたアルテミスさんが我が事のように喜んだ)。

おかげさまで予定よりずっとスムーズに鱗が集まった。

——島に上陸してから3日目。

ワイバーンの鱗の加工をアステリオスさんが張り切って進めてく
ださったおかげで、船の補修が完了した。船底の穴は完全に埋めて水
漏れもなし。余った鱗はドレイク船長発案で衝角ラムに装備させた。

ここまで来たら、旅は道連れ世は情け。オリオンさんアルテミスさ
んにも黄金の鹿号にご同乗いただくのはごく自然な流れだった。

エウリュアレさんとアステリオスさんに続く珍客に、子分さんたち
は恐々としていた。アルテミスさんとオリオンさんの乗船について
ドレイク船長に尋ねた。

「無害な生き物だから放置しておきな。アタシはフォウのほうが可愛
いけど」

「フォウフォウ！ フウー！」

「あの、船長さん。フォウくんが『一緒にすんな』って言って……ます」
「あらあら、ごめんよ、フォウ。確かにアンタのほうが品と華がある」
船が復活したとなれば、アステリオスさんにまた一働きしていただ
く。

アステリオスさんは黄金の鹿号を持ち上げて、航行可能な水深地点
に降ろした。

このアステリオスさんの怪力無双っぷりに、子分さんも沸いた沸い
た。アステリオスさんたらまた照れて。ふふ。

「出航するよ！ 鐘を鳴らしな！」

——わたしたちが煮詰めた戦略は、こうだ。

オリオンさんとアルテミスさんが、先んじて女王アンクイーン・アンズ・リベンジの復讐号に侵
入した。『英霊オリオン』には「水の上を歩ける」という恩恵がある
から、敵に気取られずに近寄れるという強みを活かした人選だ。

女王アンクイーン・アンズ・リベンジの復讐号に乗り込んだら、アルテミスさんは甲板で陽動。

——おお。派手に暴れていらっしやる。こちらの船まで喧騒が聞こ

えてきます。

この隙に、オリオンさんは弾薬庫に忍び入り、導火線に火を点けて離脱。

弾薬庫の爆発を合図に、黄金の鹿号は取舵一杯、鱗で強化した衝角^{ラム}を敵船の側面に、抉るように——アタック!!!

「さあて、略奪開始だ。乗り込むよ、アタシの頼れるアホウども！」

混戦の再開。でも今度は前のようにには行かない。今日までのワイバーン狩りは、わたしに、前回には足りなかった動体視力を開花させた。あの敗走はわたしにとって無駄なんかじゃなかった。

「リカはわたしの後ろにいて。絶対離れないでね」

「はい先輩っ」

「フオウ！」

さあ、リベンジマッチと行こうじゃないの！

オケアノス9

——なにが、おこって、いるの？

目の前。満身創痍の黒髭が、胸を、十字槍の穂先で貫かれて、血をボタボタと甲板に落としている。

——まって。ねえ、どうして、こんなことになったんだっけ——
？

わたし、は……リカとフオウさんと一緒にクイーン・アンズ・リベンジ女王アンの復讐号に乗り込んだ。

最初にあの十字槍の男と戦おうとしたんだけど、アン・ボニーとメアリー・リードのコンビに阻まれて、辛くもこれを退けた。そして、あれよあれよと黒髭本人との決着へ。

わたしやドレイク船長も、黒髭も、死力を尽くして戦い、そして——ああ、そして！

黒髭の胸を、あの男が背後から十字槍で貫いた。
顔色一つ変えずに、あの男は、キャプテンを裏切った。

「ティーチ!? クソ、テメエ仲間を……!」

わたしの理解が追いつくのを待っていたかのように、世界に音が溢れ返った。

「道理で、裏が読めぬ相手、だと……しかし、この状況で裏切るとか、アホでござるか、ヘクトール氏は」

ヘクトールって……あのヘクトール!? トロイア戦争で、勇者アキレウスと数年も鎬を削り続けた、拠点防衛に特化した大英雄——!?!
「いや何、オッサンもそれなりに勝算があつてやっていることだね。それじゃ、船長。アンタの聖杯を頂こうか!」

ヘクトールが黒髭から抜いた十字槍の穂先には、金の光。ヘクトー

ルが光を握って開くと、それは見慣れた金の六面錘を結んだ。わたしたちにとつての聖杯に違いなかった。

するとヘクトールはひらりと黄金の鹿号ゴールデン・ハインドに跳び移り、上手いことエウリュアレさんのすぐ目の前で着地してみせた。

ヘクトールはエウリュアレさんの両手を後ろに捻り上げると、十字槍の刃を彼女の首筋に添えた。

——完全にエウリュアレさんを人質に取られた。

「はな、せえええええええええ!!!」

アステリオスさんがヘクトールめがけて突進した。ヘクトールもこれには面食らったようで、エウリュアレさんを盾にすることもせずその場から飛びのいた。

「能無しのバーサーカー程度に後れをとるほど落ちぶれちゃ——いねえよッ！」

ヘクトールはエウリュアレさんを掴んだまま、十字槍でアステリオスの下腹部を穿った。

アステリオスさんは血がどンドン溢れる患部を片手で押さえながら、それでも立ったままにいる。

早くアステリオスさんを助けに戻らなくちゃ——!

わたしは急いで船の棧に足をかけて、あちらの船に戻ろうとした。

「目的は達した。悪いな、海賊諸君！」

「きやあ!？」

ヘクトールはエウリュアレさんを担ぎ上げると、海に身を投げた。ちがう。いつのまに用意してあったのか、小型船があつて、ヘクトールはその船に着地した。

視界の端を。

亜麻色の髪が掠めた。

船から跳び下りたのはわたしではなかった。——リカが、それをやらかした。

あ、あの子、ヘクトールの小型船に飛び移るつもりだ!

音はここまで聞こえない。ただ、あの着地、というか落下態勢は絶対に痛い。

なのにリカはすぐ立ち上がって、エウリュアレさんを引つ張り寄せ、諸共に海に飛び込もうとした。

でも、ヘクトールの十字槍のほうが、リカより速かった。

ヘクトールは十字槍の石附でリカだけを小型船から突き落として、エウリュアレさんを再び確保した。

——何だよ。

何でこんな時こそ「先輩」を呼ばないのよ、あの後輩は——！

わたしは盾を消して、デツキから海へ身を投げた。

冷たくて塩っ辛い水を掻き分けてしやにむに泳いだ。

——見つけた。リカがさっき突かれたお腹を抱えるようにして水中を漂っている。

わたしはリカめざして海水に逆らって、リカの体をようやく確保した。

「ぷはっ！ リカ…っ、立香！！^{リツカ} しっかりしなさい！」
「ッ、っ…あ…せん、ぱ…い…：…？」

上から縄が垂らされた。見上げると、黄金の鹿号からボンベさんを始めとするドレイク海賊団の皆さんが、わたしたちを引き揚げようとしていた。

掴まれ、と言われたので、わたしは縄で自分とリカの体をぐるぐる巻きにした。

どうにかこうにか、わたしたちは黄金の鹿号のデツキに生還した。
わたしもリカもびしょ濡れで息も絶え絶えだ。

「滅茶苦茶間に合ってるわ、このボケエツ！！ さっさとおつちね！」
顔を上げると、崩れゆくアン女王の復讐号の上で、ドレイクさんと黒髭が最後の言い合いをしていた。

「は、いいさ、いいさ、いいってことさ！ 黒髭が誰より尊敬した女が！ 誰より焦がれた海賊が！ 黒髭の死を看取ってくれる上に、この

首をそのまま残してくれるなんてな！　さらばだ人類、さらばだ海賊！　黒髭は死ぬぞ！　くっ、はははははははははははは！！」

黒髭の霊基消滅、および女王アンクイーン・アンス・リベンジの復讐号の崩落を目視で確認。ひとまずは一歩前進、で、いいのかな……？

ドレイクさんとアステリオスさんがこちらの船にジャンプして戻って来た。

「——先に逝ってな、エドワード。どうせアンタもアタシも地獄行きだ。海賊らしく無様にみつともなく、悪行の報いとやらを受けようじゃないか」

一応は敵を撃破したんだ。となれば、今のわたしがやるべきことはただ一つ。

わたしはリカの両の二の腕を掴んで、まっすぐリカと顔を合わせた。

「リカ！　何であんな無茶したの！」

「……ごめんなさい」

「謝ってほしいんじゃない！　どうしてなのかを聞いてるの！　答えて、立香！！」

——その、瞬間。

リカの両目の焦点が現実から外れた。

「……じゃない、立香じゃない、立香なんかじゃない。あたし、立香って名前じゃない！　お兄ちゃんじゃないッ！　リカだもん！　お兄ちゃんじゃ、ないもん!!」

わたしが呆気に取りられている間に、リカは蒼白な顔色のまま、船倉へと駆け降りて行った。フオウさんがそれを追いかけて行った。

リカが、わたしから、逃げた。怒鳴ったから怖がらせた？　ううん。それじゃああの叫びの意味が分からない。

そもそもわたし、リカにあんな大声で言い返されたの、初めてだ。《あっちゃ……今のは良くなかったな。そうか。マシユ相手だとあんな

なふうになるのか。油断した》

「——何か、知っているんですか。ドクター」

《リカ君があんなに本名で呼ばれるのを嫌がる理由について?》

「……はい。理由が、あるのですね」

わたしが知らないリカのこと。

《あるよ。本当はボクの口から話すべきことじゃないんだけど》

胸が、つきん、と小さく痛んだ。

《きつとあの子は、自分からは話さない。何も言わないのに理解して、なんて甘えなのにな》

ドクター・ロマン? 声にどこか哀愁が感じられるような。気のせい??

《彼女のお祖母さんはね、認知症を患って、彼女を彼女のお兄さんだと誤認したまま亡くなったそう。大好きな祖母の目の前にいるのは彼女なのに、当のお祖母さんには笑って兄の名で呼ばれ続けた——お祖母さんが息を引き取る瞬間まで、ずっと。彼女が『リカ』と呼ばれることに拘る原点はそこだよ。マシユだって、例えば融合した英霊の名で呼ばれて、第三者がマシユをその英霊であるかのように扱ったら、寂しいだろう?》

「それは……はい。きつと身を切るような想いに囚われると思います」

わたしの個体名はあくまで識別のために付けられたものだけど、ドクター・ロマンやダ・ヴィンチちゃん、オルガマリー所長、スタッフの皆さん、たくさんの人が今日までわたしを「マシユ」と呼んでくれた。それが突然、撤回されたら。

——リカは過去にそんな辛さを味わったんだ。

「もしかしてリカがカルデアに来たのは、お祖母さんの死でお兄さんと諍いがあつて——」

《それはない。そもそも彼女の兄は、彼女が産まれた日と同じ日に亡くなった。交通事故だそう。享年5歳。彼女とは会ったこともない。お兄さんの名前も、藤丸立香^{フジマルリツカ}。さつきのエピソードを成立させる、もう一つの大きなフアクターだ》

リカとリカの亡くなったお兄さんが、同じ、名前？

リカは最初からお兄さんの名前をつけられた子供だった？

《ただし、リカ君が本名を呼ばれて錯乱するなんて、マシユが初めてだ。ある意味、リカ君はマシユに一番心を許してるんだよ》

オケアノス10

船倉に降りたわたしは、その一番奥で、汚れたシーツを頭から被って壁向きに蹲るリカを発見した。

——お兄さんと同じ名前。

——大好きだったお祖母さんにお兄さんと誤認されたまま。

「リカ」

リカは無言で大きく肩を跳ねさせた。

わたしはリカのすぐ後ろに立って——リカを目いっぱい抱きしめた。

「リカ」

わたしの両腕の中でリカは硬直している。ふれあいを拒まれている。それがわたしの胸を痛ませた。

わたしはリカのほうから何かを言い出すまで辛抱強く待った。

「あたしは諦めが悪いから、何度希望を裏切られても、期待するのをやめられなくて——期待してはまた傷ついた。別に大層なことを期待したわけじゃないんですよ？ 明日は雨が降るといいなあ、とか。家庭科で作ったクツキーが焦げないといいなあ、とか。おはようを言っても無視されないといいなあ、とか。傷が痛くて蹲ってる時に誰か声かけてくれたらいいなあ、とか。おばあちゃんが今日こそ『りつちゃん』じゃなくて『リカちゃん』って呼んでくれないかなあ、とか。何もかも分不相応。あたしなんかこれっぽっちも叶うわけがないのにね——」

わたしが何かを言う前に、リカはわたしの腕に抱きついた。

「でももう大丈夫ですっ。今は何も望んでませんから。あたしはずっとこのままでいいです。先輩のおそばで、このままずっと」

心からの笑顔だと、分からないわたしではない。

わたしにはリカにかける言葉がない。だってリカ自身がそれで良いとしている。それを頭ごなしに怒鳴りつけるなんて、もうできない。

リカはわたしのたった一人の「後輩」なんだもの。

「あのね。わたしにとって、リカはリカよ。わたしのマスターで後輩のリカは、こうしてそばにいるあなたただけだから」

この子がいつか「立香」と呼ばれても辛くならなくなるまで、わたしだけはこの子を「リカ」と呼び続けよう。

「……先輩」

「ん？」

「さつきは、ごめん……なさい」

「うん。次からは無茶する前に先輩に言ってからにしてね」

「はい」

素直でよろしい。ならばこの件はこれにて落着としよう。

海に飛び込んで濡れたリカの体を早く乾かさないといけない。風邪をひくだけならまだしも、ここは海賊船、不衛生な環境からリカが悪い病気を併発したら大変だ。

などと、わたしが考えていると、シーツを被ったままのリカを、不意の暖かな微風が包んだ。この子、魔術で服を乾かしたんだ。

「戻る？」

リカは頷いてその場で立ち上がった。

——甲板に戻ればそこは過酷な現場だ。目下の課題は、ヘクトールに攫われたエウリュアレさんの救出と、聖杯の奪還。

だからこそリカの「先輩」であるわたしが頑張らなくてはいけない。

わたしは気を引き締めて、船倉から上がる梯子へ歩いた。

後ろから付いてくるリカに見えるわたしの背中、しゃんとして映っていたらしいな。

甲板に出るなり、慌ただしい船上に出くわした。叶うならもっかいリカとフォウさんと一緒に船倉にリターンしたいくらいには慌ただしかった。

もちろん出ますけどね。はい。任務に私情は持ち込みません。（多分？）

操船に忙しいドレイク船長や子分さんたちより先に、わたしたちは

マストにもたれて座り込むアステリオスさんのもとへ向かった。

リカが無言でアステリオスさんの傍らにしゃがんで、アステリオスさんがヘクトールから食らった傷に手を当てた。治癒魔術を始めたのだと分かった。

「えう、りゅあれ、を、たすけに、いく」

やっぱりアステリオスさんの胸はその気持ちでいっぱいよね。

「……今は傷を癒すことに専念してください」

「また会った時にアステリオスさんがケガしたままだと、エウリュアレさんが悲しむ……と思い、ます……」

「大丈夫です。わたしたちも力を貸します。ドレイクさんも、海賊のみんながそう願えばこそ船を進めています。絶対エウリュアレさんを助けます」

アステリオスさんはわたしとリカを交互に見た。

「やく、そく、する、か？」

「もちろんです。ね、リカ？」

「は、はいっ。だ、だからそれまでに、アステリオスさんもっ。元気になあって……ください」

「……う」

甲板に戻ってきたわたしたちを、ドレイク船長は見逃さなかった。こっち来て作戦会議に加わりやがれ、なんて言われた日には、さすがごと出頭するほかありません。

議題はヘクトールがエウリュアレさんを誘拐した理由。

大雑把な結論だけど、エウリュアレさんはあんな混戦で危険を冒してまで攫うほど強力なサーヴァントではない。

だからヘクトールの狙いが読めない。聖杯までなら分かるとして、なぜエウリュアレさんまで？

「ま、だからと言って助けない理由にはならないけどねえ。アイツ、歌、上手いしね」

「歌、ですか」

「歌が上手い奴は好きなんだ、アタシ。船乗りにとって重要なステー

タスだよ。なあ、お前ら!?」

「ういーす! やさぐれがちなオレらの心が癒されるっスー!」

子分さんたちから次々に上がるシュプレヒコール。

ドレイク船長は満足げに口の端を吊り上げて、アステリオスさんの腕を力強く叩いた。

「てなワケだ。安心しな。この船であの娘を助けない奴はいないさ」

アステリオスさんもまた、ぎこちなさげだけど笑って、頷きを返した。

……こういう所を見せられると、ドレイクさんがただの「肝の据わった頼れる姐御肌の女性」にしか思えなくなる。彼女はまぎれもない悪人であると承知していても、だ。

その矛盾をわたしが上手く消化できなかつたら、船は止まることなく、海を進む。

オケアノスー

わたしたちの船はついにヘクトールの小船を捕捉した。

ここに来るまでに嵐に遭ったりもしたが、竜種の鱗で船体を補修したのが吉と出た。

ドレイク船長は、ヘクトールの小船に問答無用で衝角を^{ラム}ブチ当ててやれと、子分さんに檣を飛ばしている。

その間にわたしは盾を実体化。船の棧に片足をかけて、いつでも小船に飛び移れる態勢を――

「アステリオス！ 抑えろ、抑えろー！ 鎮まり給えー！」

「えうりゆあれ……!!」

「いま飛び出したら槍的になりに行くようなもんだぞ！ はいし、どうどう。はいどうどう」

わたしは――そつと棧から足を下ろして、アステリオスさんを引き留めるべく奮闘しているオリオンさんに加勢に行った。

「アステリオスさん！ 気持ちは分かりますが我慢して！ あなたが傷ついたらエウリュアレさんが悲しみます！」

「分かった！ あと10秒待て！」

1、2、3…つ、く、重、い…！ とてもわたしとオリオンさんだけじゃ引き留めておけない。

3カウントまで粘った末、ついにアステリオスさんはわたしとオリオンさんを振り解いて、咆哮して小船に飛び移って行った。

あの巨軀で何て身軽さなのか。つて、そういえば、アステリオスさんは船に乗り込む前に、リカに足枷を外してもらっていた。俊敏で当たり前だった。

「リカ！ ともかくわたしたちも行きましょう！ わたしから離れないで！」

「はい先輩っ」

「フオウ！」

リカとフオウさんがわたしにしかと抱きついたので確認。わたしは今度こそヘクトールの小船に突貫した。

アステリオスさんがヘクトールに殴りかかって、ヘクトールはそれを飄々と躲している所に出くわした。

「つたく、めんどくさいねえ。やれやれ。だけど、オジサンはねえ——」

小船には乗組員が一人もない。魔力での自動操縦？ いえ、ヘクトールはあくまで槍のサーヴァントであって魔術の素養はないはず。別所から何者かが魔術で牽引していると考えるのが妥当だ。つまり——ヘクトールには援軍の宛てがある。

「守るのだけは、嫌になるほど得意なんだよなあ！」

ヘクトールの貌が戦士のそれへと変わった。

——守るのだけは得意？ そんなこと言われたら、わたしだって闘志に火が点くこともある。

わたしと「彼」のクラスはシールドだ。この霊基に懸けて、「護り」で負けるわけにはいかない！

わたしは盾を構えて前に出た。

ヘクトールが十字槍で、真つ向から盾を突いた。ただの刺突——なのに、横に逸らせない!? 軸の固定が堅実すぎる。わたしのほうが捉えられた。

十字槍による斬撃のラッシュが始まった。

わたしが踏み出して盾でボディアタックに出ようとしても、ヘクトールは正確にわたしの予備動作を予期して、態勢を崩すポイントを狙った。結果としてわたしはそれを防ぐしかなく、攻めを封じられる。

——離れて仕切り直したい。

「先輩！ 緊急回避、付与します！」

「避ける」という指向性が染み込んだ魔力が、わたしの両腕を巡った。

ひと瞬の間だけ、わたしの盾捌きがヘクトールの槍捌きを追い抜く。わたしは盾をあえて十字槍とぶつけ合わせて、反動でヘクトール

から距離を取った。

「フオウフオウ！」

「先輩っ、だ、大丈夫、でしたっ？」

「ええ。ありがとう、リカ。助かった」

わたしと入れ替わりに、アステリオスさんがまたヘクトールに殴りかかった。ヘクトールはアステリオスさんの拳を十字槍の柄でいなしている。今なら……！

「リカ。強化をお願い」

「はいっ。瞬間強化、付与します」

リカの魔力が全身を巡る感覚を確かめてから、わたしは——爆ぜた。

魔力防御の反発力を利用して加速、ヘクトールの斜め下まで瞬時に移動。防御がお留守のヘクトールの足を盾で思いきり殴った。

「チツ……！」

ちょうどその時、船室のドアが開いた。中から出てきたのは、エウリュアレさんを連れたアルテミスさんとオリオンさん。お二人にはまたも水の上を歩いてこっそり回り込んでいただいた。

——形勢逆転だ。

「英雄ヘクトール。誰に仕え、何を目的としているか、説明していただきます！」

「これだから盾持ちの英雄ってやつは——ま、今回はオジサンの粘り勝ちだ。時間切れだぜ、お嬢さん」

「——、あ」

この船の運航が魔術による牽引だとしたら。わたしが仮定したのに、わたし自身が戦いに気を取られて仮説を忘れていた。この船はわたしたちが戦っている間にも「本陣」に向かって進んでいたんだ——！

「はい、その表情頂きましたっ！ あの船にいるのが、今の俺の上司でね」

わたしはとっさにヘクトールが指さした方向を見てしまい、そして愕然とした。

ガレオン船ではない。ヴァイキングの船でもない。それこそ、神話の絵本でしか見たことないような形をした船——神話の、絵本？

「ふうん。あれってもしかして、アルゴ号？」

「アルテミス、さん」

「ご名答だこんちくしょう！　ありや正真正銘『アルゴノーツ』だ！」

——アルゴ号。金羊の毛皮を求めて旅立った冒険者たちの船。

ゴールデン・ハインド黄金の鹿号から砲弾がアルゴ号に撃ち出された。だが、アルゴ号は砲弾を全て弾き返した。

純粹に装甲が硬かった黒髭の船とは違う。あれは船体そのものが神秘を宿している。聖杯の加護のある黄金の鹿号ゴールデン・ハインドだろうと、力比べではアルゴ号に勝てない。

アルゴ号は黄金の鹿号の反対側から小船に接弦した。

直後、砲弾や銃弾ではなく、岩が、豪速でこちらに投げ込まれた。

「ど、け……い、ぬ、おおおお!!」

アステリオスさんが全身で、剛速球ならぬ剛速岩を受け止めて、勢いに押されながらも岩を海へ投げ捨てた。

エウリュアレさんがアステリオスさんに駆け寄った。

「あっはっは！　ギリギリで受け止めたか！」

わたしは盾を構え直してアルゴ号を見上げた。

二人、いる。全身をまんべんなく金で飾った男と、あじさい色のドレスの少女。

「あそこにいる蛮人は……何だアレ？　獣人か？」

「まあ。あの方、おそらくアステリオスさまですわ。またの名をミノタウロスと申します。神牛と人の狭間に生まれた、悲劇の子です」

「何だ、人間の出来損ないか！　英雄に斃される宿命を背負った滑稽な生物！　向こうの人材不足も深刻だなあ！　あっはっはっはっはっはっは！」

——わたしの中から、混乱とか不安とか弱気とかが消えて、ひどい

静寂がわたしをつんざいた。

「マシユちゃん、イアソンの言動に振り回されんな。あいつはケジラミのほうがマシって人格だから、いちいち相手してたらキリがねえぞ」

わたしは改めてその男を見上げた。——イアソン。アルゴノーツのリーダーで船長。

「い、あそ、ん……い！」

「——不敬だな、ミノタウロス。私の名前は、畏怖と崇拜と共に呼称されるべきだ。だが、退治される醜い獣である君には、特別に許してあげよう」

ここで唐突に、ドクター・ロマンから通信が入った。

《撤退を推奨する。あれは、無理だ。エウリュアレを確保したのなら、すぐにでも引き上げるんだ。アルゴノーツにはヘラクレスがいる》

「——」

「先輩……？」

“それ”はむくりと立ち上がると、足音を轟かせ、こちらの船に跳び移って来た。

■■■■■■■■■■——!!!」

わたしの目の前に大英雄ヘラクレスがいる。

なのに——わたし、こんなにも平然としている。

「さて、君たち。そのアーチャー、エウリュアレを引き渡せ。そうすればヘラクレスをけしかけることだけはやめて——」

わたしは産まれて初めて、心から、

「黙ってくださいか、成金ヤロー」

——人を、罵倒した。

オケアノス12

「黙ってくれますか、成金ヤロー」

——ああ、やっと、すつきりした。

「ヒューッ！ カッコイー！ ——つたく。塵屑風情が生意気な。マスター諸共、今すぐ消えてくれよ」

すつきりした……代わりに、現実感が戻って来た。

胸を襲うのは猛烈な後悔。軽率だった。イアソンに心の底からあ言いたい気持ちは嘘ではなかった。だがそれは味方を加速度的に窮地に追い込んだ。ごめんなさい、ごめんなさい、ああ、どうしよう……！

「メディア！ 私の愛しいメディア！」

「はい。お呼びですか、マスター」

マスターって、イアソンが!? 聖杯を持たないあの男がどうやってサーヴァントを召喚できたというのか。

「私の願いは分かるよね？ あいつらを粉微塵に殺してほしいんだ。君が弟をバラバラにした時みたいだね！」

「弟をバラバラ、ですか？ マスターは時々妙なことをおっしゃるのですね。でもそうでした。イアソンさまはそうでした。今はそういうふうなのですよね。だから細かいことは気にしません」

「そして、ヘラクレス！ お前もやれ。私はここで、お前たちを見守ろう」

妻を前線に駆り出して自分は戦わず安全圏から高みの見物。このイアソンはまごうことなき——

「この世にオレ以下の層がいるとはなー。世界広いなー。そしてギリシヤ狭いなー」

オリオンさんの言うそれ、そう、男の層！

だというのにメディアは盲目で忠実に、悠々と飛翔して、わたしたちの前に舞い降りた。

メディアが杖を一振りすると、デツキが竜牙兵で溢れ返った。多勢に無勢だ。なのにメディアは「まだまだ材料はありますよ」なんて厭

味な念押しを笑顔でしてきた。

「私は全てを捧げ、全てを捨て、全てを擲ちます。見返りがなくとも、益がなくとも。だってそれが、私が島を出た理由なのですもの」

「全てを——」

わたしはすぐさまリカを背に庇って盾を構えた。

竜牙兵が襲来する。

わたしは真正面に来た一体の雑な剣を盾で防いでから、盾でその竜牙兵を薙ぎ払った。あえて砕くほどの威力にできなかったのは、吹き飛ばした竜牙兵をぶつけて第二波のいくらかを転倒させるためだ。

メディアは分かっている。人海戦術は広い戦場でやるべきもので、こんな小さな船を竜牙兵で溢れさせたら、互いに身動きが取れなくなる。共倒れさせる隙は万と生まれる。魔術が人一倍でも、実戦にはわたしに一日の長があるんだから。

でも、メディアは自分の失策には聡かった。

「ごめんなさい、私では押し切れないわ。ヘラクレス、やっぱりアナタの出番ね」

ヘラクレスが咆哮した。それだけで全身が竦んだ。

「はな、れる、な……!!」

「何言ってるの。迷わず逃げるのが当然でしょ。あんなの、災害みたいなもの。雪崩に立ち向かう人間は勇者じゃない、ただの無能よ。そんな無能を、私……何人も見てきたもの」

「でも、だれかが、やらなきゃ。それなら、おれ、がいい。だって、おれ、かいぶつ。なんにんも、こどもを、ころした。なんにんも、なんにんも、なんにんも……! だから、おれが、たたかう!!」

猛進してきたヘラクレスを、アステリオスさんががっしりと受け止めて、押し合いが始まった。進ませまいとするアステリオスさんと、エウリュアレさんを狙って進もうとするヘラクレスの間で均衡が生じた。

「■■■■■■■■■■——!!!!!!」

「かのじよ、は、わたし、ない! う、う、あああああああ!!!」

アステリオスさんの肉厚の張り手がヘラクレスの左胸を全力で叩いた。あれなら、筋肉の向こうの心臓までダメージが届いている。わたしは勝利を半ば確信した。

だが、またも、聞くだけで不快な気分になるイアソンの嘲笑が聞こえた。

「おー、頑張るねえ！　そこで君たちにとっておきの情報だ。ヘラクレスはね、死なないんだよ。神から与えられた十二の試練を踏破したソイツには、それだけの命が報酬として与えられている。ま、つまりあと11回倒さなきゃいけないということ。ま、頑張ってくれ」

《ふ、不可能だ。イカサマ過ぎるぞこんなの……!》

黄金の鹿号に残ったドレイク船長から、撤退の号令が届いた。船に戻って来い、とドレイク船長はわたしたちに叫んでいる。最初からエウリュアレさんだと言っていたじゃないか。ヘラクレスは災害みたいなもの、迷わず逃げるのが当然の選択だって。

「ははははは！　いいね、最高だ！　圧倒的な暴力で敵を駆逐する。これが正義の醍醐味だ！　聖杯は手に入れた。あとはエウリュアレと、アーク。それで全てが揃う」

《アーク……だって!?!》

ドクター・ロマンが本気で啞然としている？

ヘラクレスがまたも突進してくる。今度はアステリオスさんも受け止めきれなかった。

弾き飛ばされたアステリオスさんの後ろにいたエウリュアレさんに、ヘラクレスの剛腕が、届いてしまう――

「う、お、おおおおツツ!!!」

アステリオスさんが後ろからヘラクレスの胴に腕を回して、ヘラクレスの猛進を阻止した。

「ダメよ、敵わない、私たちでは敵わないのに……どうして!?!　アステリオス!!」

「……ころ、した。ころした、ころした、ころした!　なにもしらない、こどもを、ころした!　ちちうえが、そうしろって。ちちうえが、おまえはかいぶつだから、つて。でもぜんぶ、じぶんのせい、だ。きつ

とはじめから、ぼくのこころは、かいぶつだった。でも」

泣き出しそうに穏やかなアステリオスさんまなざしの先には、エウリュアレさんがいた。

「なまえを、よんでくれた」

わたしのそばにいたリカが息を呑んだ気配が伝わった。

「みんながわすれた、ぼくの、なまえ……！　なら、もどらなくつ、ちや。ゆるされなくても、みにくいままでも、ぼくは、にんげんに、もどらなくちや！」

——わたしは叫びたい気持ちを噛み殺して、エウリュアレさんに駆け寄った。

アステリオスさんは振り解かれようと何度だって立ち上がる。だからわたしも、この盾に懸けて、エウリュアレさんには指一本触れさせない。

後ろに控えていたメディアが浮かび上がって宙に魔方陣を展開、そこから魔力弾を幾重にも発射した。わたしはその全てを、守護円陣を疑似展開して防いだ。同じく空を飛べるアルテミスさんに助力願いたくても、彼女たちは竜牙兵の掃討で手一杯。わたしがやるしかないんだ。

メディアへの防御に集中していたわたしにとっては唐突に、オリオンさんが叫んだ。

「アステリオス、避けるッ！」

「……いや。あれは、だめ、だ」

視えた。ヘクトールがアルゴ号の棧に立って槍を投げようとしている。莫大な魔力の集束を感じる。ヘクトールは宝具を撃つ気だ！

「止めたければアキレウスかアイアスの盾を持ってくるんだな！　――

——標的確認、方位角固定。吹き飛びな！　不毀の極槍！」

ヘクトールが投げた十字槍は、ロケットランチャー並みの推力でアステリオスさんへ向かっている。

——させない。

だって、盾ならここにある！

アステリオスさんに駆け寄ろうとしたわたしの、手首を、リカが両手で掴んで、首を横に振った。行っちゃだめ、とリカの涙目は雄弁に訴えていた。

リカに引き留められたわたしは、間に合わない。

十字槍が、アステリオスさんとヘラクレスを貫いた。

——アステリオスさんは避けなかった。

「ありがとう、リカ」

ああ、そんな——そういうことだったなんて。

アステリオスさんはわざとヘクトールの槍を受けたんだ。そうすれば槍が楔になってヘラクレスを縫い止める。アステリオスさんがヘラクレスを抑えている間に、わたしたちは黄金の鹿号へ撤退する。

リカはわたしより速くアステリオスさんの覚悟を全部理解したから、わたしを行かせまいとした。

「うまれて、はじめて、たのしかった……ぼくは、うまれて、うれしかった！ ぜんぶ、えうりゆあれのおかげ、で……ぼくは、えうりゆあれが、だいすき、だ！」

怪物だった己への罰を厳かに受け入れるかのように。

アステリオスさんは十字槍に貫かれたまま、ヘラクレスを抱えて海へ飛び込んだ——

オケアノス13

撤退、戦域離脱したわたしたちの課題は二つ。

アークをどうするべきか、ヘラクレスをどう斃すか、である。

ドクター・ロマン曰く、アークとは、古代イスラエルの指導者モーセが神から授かった十戒を封じた、神と人の間の「契約の箱」だとう。

特異点の核がイアソンと思しき現状、イアソンがアークを手にしてろくでもないことをするのは間違いない。結論としてわたしたちはイアソン率いるアルゴノーツと戦わなければならない。

アルゴノーツにはヘクトールやメデシア、そして、過去最強の敵、ヘラクレスがいる。残り11ないし10の命を持つヘラクレスとどう戦えばいいというのか――

そんな堂々巡りの議論を止めて、ドレイク船長は言った。

船を進める。どの課題にせよ出たとこ勝負でいいんだ、と。

その明朗で快活な言い分は、わたしたちはいつも通りの行動をすればいいのだと、わたしに思い出させてくれた。

かくて、アークを探し出すための航海が始まった。

島影が見えれば船を寄せ、ドクターが魔力反応を探查する。地味で、地道な作業を、ドレイク海賊団もカルデアのスタッフも愚痴一つ零さずこなしてくれている。

今まで発見した島は三つ。どれもハズレだった。次に接近中の島で四つ目。

てくてこ、とオリオンさんがわたしのそばへ来た。

「なあ、マシユちゃんや。次の島はアタリかハズレか賭けない？」

「アタリ……だと、思いたいです」

「じゃあ俺は……ぶぎゅる!？」

オリオンさんの後頭部に矢が突き刺さった。……矢が？ 敵襲!?

わたしは急いでリカとフォウさんのもとへ行き、盾を実体化させ

た。

精密な狙撃だったけれど、だからこそ分からない。射手はどこから矢を射たのか。ここは海洋で足場になる場所なんてどこにもないのに。

「ダーリン、ね、ね、痛い？ やっぱり痛い？」

「めっちゃ痛えはボケえ！ と、とにかく抜かなくては……あ、今気づいたけど、俺、自分の頭に手が届かないわ！」

オリオンさんの頭に刺さった矢はアルテミスさんが（何故かもったいぶって）抜いた。

矢には厚く畳んだ紙が結び付けてあった。矢文、というやつだ。本で読んだことがある。

アルテミスさんが矢文を開封したのだが、読むなり、アルテミスさんは破顔一笑した。

矢文を射て寄越した射手に会うべく、わたしたちは4つ目に発見した島に上陸した。

——射手の名を、アタランテ。月女神アルテミスを信奉する、俊足に名高き女狩人である。

そう、今わたしの前を鼻歌まじりに進むアルテミスさんを。

頭にぬいぐるみのオリオンさんに乗つけて獣道をルンルン歩く、この、アルテミスさんを。

「止まれ!!」

強い声が森の樹々に反響した。

わたしは盾を実体化して、リカとフオウさんを庇って身構えた。

「汝らはアルゴノーツを敵とする者か!? それともすでに諦め、屈した者か!？」

「諦めてませんッ！」

え、リカ？

「あたしは諦めが悪いから、何度希望を裏切られても、期待するのをやめられないんです！」

すると、茂みが擦れ合う音がして、一組の男女がわたしたちの正面に現れた。

「試すような問いかけをしてすまなかったな。分かっただけはいたのだが、念のためだ。何しろ吾々はこの海における最後の希望だ」

黒い弓、翠衣、獣のような耳を備えた女性。事前にアルテミスさんから聞いた特徴と合致する。彼女がアタランテさんなのだろう。だとすると、一緒にいる、クルークを持った男性は何者？ という疑問も生じるが。

まずは自己紹介から。……そこが難関だからできれば飛ばしたいのが本心ではあったが。

案の定、アルテミスさんを紹介する段になると、アタランテさんは

「……………、……………、……………え、本当？」

立ち眩みを起こしたものの、弓を杖代わりにどうにか保ち直した。

「だ、大丈夫だ、この大海で私の精神も鍛えられた……い、今さら信仰する女神が恋愛脳スライツだからって頼れたりしない……！」

「やあ、麗しの君。今度こそ手を握ろうか？」

「ここぞとばかりに好色を発揮するな、ダビデ！」

——ダビデ？

わたしはクルークの男性を見やった。

「ああ。古代イスラエルの王、ダビデさんだよ？ 僕の顔に何か付いてるかい？」

顔というか、全体像というか。デジャヴを禁じえない。よく知った誰かの面影がダビデ王からは見出される気がしてならない。

「先輩？ どうか、しました？」

「フオーウ？」

はっ。いけない。まさに核心に至る話が切り出されようとしている気配なのだ。わたし個人の所感も横に置いて、今はダビデ王とアタランテさんのお話を伺おう。

——要点を掻い摘むところだ。

アークとはイスラエル王ダビデの宝具（霊体化不可）で、効果は「触れると死ぬ」。

エウリュアレさんのような低級な神霊であれ、アークに生贄として捧げた場合、神の死と共に世界も死ぬ。滅ぶ。

こちらの効果について、アタランテさんは、イアソンは知らないものとして推測していた。ただ、王たる資格だと勘違いしている、その程度だろう、と。

アルゴノーツがアークを狙う理由と、それを阻止しなければならぬ理由は分かった。

あとは実際に対峙して、アルゴノーツをどう撃退するかだ。

協議が始まった。あーでもないこーでもない。むしろ戦力を比較・分析するほどわたしたちの敗色が濃厚になっていくのがじれったい。

「アークに触れてくれたなら、一発で昇華できるかもしれないけどね」
ダビデ王が何気なく口にしたであろう手段の一つを耳にして。

わたしは——ひらめいた。

「あの、先輩？」

「——できるかもしれない」

わたしは掴んだインスピレーションを逃すまいと早口で「作戦」を言い挙げた。

全てを話し終えた所で、ドレイクさんがわたしの背中を強めに叩いた。

「いいね、いいね、いいじゃないか！ さっすがアタシが見込んだ女だ！」

ちよっぴり背中が痛いですが、船長。

エウリュアレさんもアタランテさんもダビデ王も、この壮大なギャンブルに乗ってくださいました。

「でもそれ、一番辛いのはマシユちゃんだよ？ 前線で体張るんだし。この作戦で行くとして、マシユちゃんは本当にいいの？」

決定権がわたしにあるなら、答えは一つきりだ。

「この作戦、必ず成功させてみせます。もちろん、ドクターの協力あってこそですが。ドクター・ロマン？ 先ほどから沈黙されています

が、聞いていましたか？」

《ああ、もちろん聞いていたとも。危険な作戦だが、今は時間もない。ボクも賛成だ。最大限バックアップするよ》

むう。ドクターの声から挙動不審なイメージを受けるけれど、まあ、いつものこと、よね？ 変な兆しじゃない——よね？

わたしは最後の確認としてリカを見やった。リカは小さく微笑んだ。

「先輩のいいように」

ありがとう。リカなら絶対そう言ってくれると信じていた。

「では戦支度だ。まずはダビデ。アークを所定の場所に運べ」

「あれ結構重いんだけど、誰か手伝ってくれたりは」

「持ち主のアナタ以外が触ったら死ぬ品を誰が好き好んで運ぶのよ！」

「それもそうか。やれやれ」

「マシユとドレイクは私と来てくれ。島を案内するから、ヘラクレスを誘導する道を決めよう」

「はい、アタランテさん」

おのおのが必要な戦支度をしに行くために散会した時だった。

「あ、待っておくれ、マシユ」

ダビデ王がわたしを呼び止めた。何のご用事だろう？

ダビデ王がわたしに差し出したのは、鞆に収まった一振りの長剣だった。

「これ、きみにあげる」

「わたしにですか？ 急にどうして」

「この剣、特に僕の宝具やスキルによる物じゃないんだよね。それが何でか今回召喚にくっついてきた。弓兵の僕には要らない武器だ。そこに現れた、剣を持たない騎士。これはもう主の御心かなあ？ っ てね。とりあえず鞆から抜いてごらんよ。抜けなかったら返品は受け付けるよ」

ダビデ王の剣——わたしは言われた通りモノを確かめるべく、鞆から剣を抜いた。

うん。どう見ても普通の、細身のロングソードですね。

「抜剣できたね」

「? ええ、それは、剣ですから」

「——さて、僕はちよつくら地下墓地カタコソンベに行ってくるよ。上のほうはよろしく」

「あ、はい。ありがとうございました」

とはいえ、盾一つでやってきたんだ。簡単に戦闘スタイルを変えられない。

剣技については、このオーダーが終わってカルデアに帰ってから、シミュレーターで本格的に練習を始めよう。

わたしは剣を盾の奥の収納スペースに入れた。

オケアノス14

水平線から迫るアルゴー号の船影が徐々に大きくなっていく。

——決行の日は来た。

海岸には、アルテミスさん、アタランテさん、ダビデ王が並んでいる。

鎗矢を放ったのはアタランテさん。矢文を送った時と同じ精密さと、それ以上の魔力が込められた矢が、アルゴー号へと翔ける。

「手応え有り。意図は伝わったようだ。ここからは宝具の大盤振る舞いと行くぞ。ポイボス・カタストロフエ 訴状の矢文!!」

「さあ、ダーリン！ 愛を放つわよ！ トライスター！アモレレ・ミオ 月女神の愛矢恋矢!!」

「モテモテで羨ましいなイアソン君。羨ましいのでお裾分けだ。ハメシユ・アヴァニム 五つの石！」

矢と投石の雨がアルゴー号を——イアソンだけを間断なく襲う。Aランクの攻撃も混ざっているんだ。あちら側は防御に専念するしかない。アタランテさんの分析が確かなら、イアソンは我が身可愛さに、護衛としてヘクトールとメディアを傍らに残し、ヘラクレスだけをこちらに上陸させる。

アルゴー号のそばで水飛沫が上がった。泳いで海岸に迫ってくる巨体。

——来る。

「来たわよ、リカ。しっかりと私の身を守りなさい」

わたしの後ろで待機していたリカは、頷き、エウリュアレさんと手を繋いだ。

《経路はボクがナビする。リカ君はとにかくエウリュアレと一緒に走ればいい》

「はい!!」

ヘラクレスがついに上陸した。狂い濁った眼は、それでもしかとエウリュアレさんを見据えている。

そのヘラクレスと、リカとエウリュアレさんの間に、わたしとドレイク船長が割って入って立ち塞がった。

「まずはここで抑えます！」

「とことんまで援護するよ！ マシユ、この作戦はアンタに懸かっている！」

「はい！ マシユ・キリエライト、行きます！」

後ろでリカがエウリュアレさんと一緒に駆け出した足音が聞こえた。これで後ろに憚ることなく思いきりやれる。

——作戦はこうだ。

上陸するヘラクレスの前に、狙いであるエウリュアレさんをあえて立たせる。ヘラクレスがエウリュアレさんを認識した瞬間が号砲。

わたしの盾で何が何でもヘラクレスを押し留め、その間にリカはエウリュアレさんと一緒に「目的地」へ走る。

ヘラクレスに突破されたら、わたしは俊足に名高いアタランテさんに担がれて、次のポイントで再びヘラクレスを足止めする。その間にまたリカたちが走って逃げる。このくり返し。

第一、第二、第三、問題なくポイント通過！ 次からは地下墓地^{カタコンベ}が戦場だ。

わたしは皆さんと一緒に地下に潜って、すぐさま走り出した。ヘラクレスがリカたちを追い詰めてしまう前に合流しなければ。

「リカツツ!!!」

「先輩っ」

リカとエウリュアレさんは、何と、アークを設置した場を越えてさらに奥で座り込んでいた。まさか、アークを飛び越えたの!? 何て無茶なことを……!

「そこまでだ、ヘラクレス！」

アタランテさんの声で我に返った。いけない、気を引き締めなくちゃ。ここからが大一番だ。

「ヘラクレス。あなたの目の前にあるのが、イアソンが求めていた宝具です。触れれば死をもたらすアーク。今だ十の命を持つあなたを倒すには、これしかない」

ヘラクレスをここで仕留める。そのためにみんなが頑張ったんだ

から。

「リカ。もうちよつとだけ我慢してくれる?」

「はい先輩」

「いい子」

見ていてね、リカ。あなたの先輩の勇姿を。リカの「先輩」として、サーヴァントとして、決してあなたに恥じる戦いはしないから。

わたしは盾を突き出してヘラクレスと正面から向き合った。

静寂は一拍。

ヘラクレスが突進し、わたしはそのヘラクレスを最大出力の魔力防御で受け止めた。

ただの一合で、わたしたちの足元は軽く陥没した。このままヘラクレスと競り合っているのは、地下道が崩落しかねない。わたしは即座にヘラクレスの斧剣の軌道を盾でずらして、ふり払った。

——狭い地下道では、ヘラクレスの巨体と大きなモーションは枷となる。しかし、(自分で言うのも何だけど)ちよこまかしたわたしには絶好のロケーション。

ヘラクレスもまた地形の不利を悟ったようで、二撃目は初撃よりずっと浅い剣閃。

対しこちらは一点突破のアーチャークラスと、拳銃が主武装のドレイクさんだ。鋭い矢が、石が、弾丸が、数十センチずつヘラクレスを後退させていく手応えがある。

「これで——倒れてー!」

わたしは、低い位置に来たヘラクレスの斧剣に上から飛び乗った。瞬き一つ分だけヘラクレスを縫い留めた。

ここからヘラクレスに体当たりして、一気にアークまで後退させる。ヘラクレスがアークに少しでも触れさえすればチェックメイト——!

わたしは盾を両手で握り締めて、全身でヘラクレスにぶつかった。「押し込めえええええええ!!」

「はあああああああ——!!!!」

ヘラクレスの巨体を、石床を粉碎しながら押す。前へ、前へ!

アークまで！

鈍い音がして、わたしの前進もまた止まった。——ヘラクレスがアークにぶつかっていたからだ。

閃光で視界が塗り潰されて、直後、ヘラクレスの姿は地下道になかった。

……信じられない。わたし、本当にヘラクレスを倒せた。倒してしまった。

茫然としていたわたしと、アークの後ろに座り込んでいたリカが目があった。

わたしは我に返って、急いでリカたちに駆け寄った。

「リカ！ 大丈夫!？」

「は、はい先輩っ。どこもケガしてないのです」

「フオウフオウ」

——危うく思い違いをする所だった。強敵を斃せたって、難関を退けたって、それでリカに何かあったんじや意味がない。勝利の余韻も達成感も、この後輩の無事には替えられない。わたしはそんなものためではなく、護るために戦っているのだから。

「さあ、残るはあのいけ好かないイアソンだ。この海を解放しに行くよ、マシユ！ リカ！」

「はい！」

わたしたちはついに第三特異点の最終行程に——いいや、この大草原での最後の航海に乗り出した。

わたしはまっすぐアルゴー号の船体を見据えた。不思議と怯んだり疎んだりする気持ちはなかった。

そのわたしの隣に、自然な足取りでリカが並んだ。

わたしはリカと一度だけ見つめ合った。わたしたちはどちらともなく手を繋いだ。

「ゴールデン・ハインド黄金の鹿号！　これが最後の航海、最後の海賊だ！　目標はアルゴー号！　連中が持っている財宝はアタシたちの自由の海だ！　全部まとめて取り返すよ！　鐘を鳴らしな、兄弟！」

「ゴールデン・ハインド黄金の鹿号は最速でアルゴー号に迫っていく。」

船からの大砲の斉射。加えて、エウリュアレさんを除くアーチャー3騎による射と投石。攻撃の全てがアルゴー号の船体を傷つけはしないにしても、アルゴノーツの戦力を削っていく。

この事態に慌てふためいているのは、アルゴー号デッキで喚いているイアソンだけ。

メディアは残念そうに、ヘクトールは溜息をついて、それでもわたしたちの決戦に即応する態勢であるのが見て取れた。

「ゴールデン・ハインド黄金の鹿号がアルゴー号に、接弦した——！」

わたしはリカとフォウさんを抱えてアルゴー号に跳び移った。この航海で仲間となったサーヴァント総員、さらにはドレイク船長も一緒に。

デッキに着地して、わたしは即座に盾を実体化してエウリュアレさんの前に立った。

「図ったように飛来した十字槍。どうにか防ぐのが間に合った……！」

盾で弾いた十字槍は宙を舞って、持ち主であるヘクトールの手に戻った。

「フランス、ローマと来て今度はここ。遠路はるばるご苦労さん。オジサン、そういう根気は評価するなあ」

ヘクトールの後ろに居るのはメディアとイアソンだけ。この三名がアルゴノーツの最後の戦力と見て間違いない。

「……エウリュアレさん」

「今さら変な遠慮しないの、マシユ。あなたたちはさつさとあのナチュラルにハイな魔女を退けに行きなさい」

——船に乗り込む前。厄介極まりない残存戦力のヘクトールとメディア、特にヘクトールとどう戦うか、わたしたちは話し合った。その時にエウリュアレさんが名乗りを挙げたのだ。ヘクトールは自分

が引きつける、と。

ヘクトールはまだアークにエウリュアレさんを生贄に捧げる企みを諦めていない。だからエウリュアレさんを生け捕りにしようとする。

言い換えれば、ヘクトールはエウリュアレさんだけは殺せない。そこに付け込む隙がある。女神のエウリュアレさんだけではあまりにか弱いので、ダビデ王を除く全員が彼女と共にヘクトールの対処に当たる編成となった。

「武運をお祈り申し上げます、女神エウリュアレ」

「……ステンノと一緒に数多の勇者を送り出してきた私がそう言われる日が来るなんてね。まったく。サーヴァントになんてなるものじゃないわね」

エウリュアレさんの手に小型の金の弓矢が顕れた。か弱い女神の、か細い武器。アステリオスさんを殺した仇への、小さくも鋭い闘志のカタチ。

「ドレイク船長、エウリュアレさんをお願いします」

「任せな、兄弟。コイツはアタシらのお宝だ。あんな奴らに髪の毛一本だって——くれてやるもんか!」

ドレイク船長が銃を抜いてヘクトールへ撃った。それが開戦の狼煙。

わたしはリカとフォウさんと、そしてダビデ王と一緒に、メディアとイアソンへ向けて走った。

「イアソンさま、どうなさいますか？ 降伏も撤退も不可能。私は治療と防衛しか能の無い魔術師。さあ、いかがいたしましたしょう?」

「うるさい、黙れッ! 妻なら妻らしく、夫の身を守ることを考えろ!」

「ええ。もちろん考えています、マスター。だってそれがサーヴァントですものね」

二の腕に悪寒が走った。メディアの目の、怖気のするほどの無垢に。

その怖気の意味を突き止めるより先に、ダビデ王がイアソンに呼び

かけた。

「戦う前に、イアソン君に一つ質問がある。エウリュアレをアークに捧げるなんて馬鹿な考え、誰に吹き込まれたんだい？ あの箱は死を定め、死をもたらし物だ。それに神霊を捧げたりしたら、ただでさえ不安定なこの時代そのものが滅んでいた」

「――馬鹿な。嘘だろう、そんなはずは……メデИА？ 今の話は、嘘だよな？」

その言葉で充分だった。神霊を捧げれば無限の力を得られますよ、なんて大法螺をイアソンに吹き込んだのは、メデИАなんだ。

「神霊をアークに捧げれば、無敵の力が得られるのだろう……？」
だって、あの御方はそう言ってる」

「はい、嘘ではありません」

メデИАの間髪入れない答えに、イアソンの顔に笑みが戻りかけ――

「だって、時代が死ねば世界が滅ぶ。世界が滅ぶということは、敵が存在しなくなる。ほら、無敵でしょう？」

妻の宣告によって、彼の夢想は木っ端微塵にされた。

オケアノス15

——アークによる儀式は、イアソンの望んだ無敵の力を与えるものではない。

メディアの宣告に、誰より一番に激昂したのは、当のイアソンだ。「それじゃあ何の意味もない！ オレは今度こそ理想の国を作るんだ！ 誰もがオレを敬い！ 誰もが満ち足りて、争いのない、本当の理想郷を！ これはそのための試練じゃなかったのか!? オレに与えられた、二度目のチャンスじゃなかったのか!？」

「……それは叶わない夢なのです、イアソンさま。だってアナタには為しえない。アナタは理想の王にはなれない。人々の平和を願う心が本物でも、それを動かす魂が絶望的にねじれている。アナタは永遠に、国りくに帰ってはいけなかったの！」

「魔女め……い！ 鄙びた神殿に籠もっていただけの女に何が分かる！ オレは自分の国を取り戻したかっただけだ！ 自分だけの国が欲しかっただけだ！ それの何が悪いと言うのだ、この裏切り者があ！」

メディアはイアソンなんかよりずっと大人らしい顔に、ありありと諦念を浮かべた。

「わたしは裏切られる前の王女メディア。外に連れ出してくれた人を盲信的に信じる魔女。だから、かの王に選ばれてしまったアナタを、こうしてお守りしてきました。全て本当、全て真実です。多少の誤解は、あつたかもしれないけど」

さつきから、「あの御方」とか「かの王」とか。二人とも誰の話をしているの？

メディアが手を握って、開いた。手にしているのは——聖杯!?

メディアはまるで悲恋ドラマのヒロインが恋人にしなだれかかるかのように、聖杯ごと、手を、イアソンの胸にねじ込んだ。

ぐちゃ、と肉が抉れて、デツキに大量の血が落ちた。

イアソンが絶叫している。愛する夫が怪物に変容していく様を、メディアはやはり、笑って見つめている。

「顕現せよ。牢記せよ。これに至るは七十二柱の魔神なり。——共に、滅びるために戦いましょう？ さあ、序列三十。海魔フォルネウス。その力を以て、アナタの旅を終わらせなさい！」

——この光景を、わたし、知っている。

挽肉を限界まで詰めたパックに裂け目を入れたように、肉が気味の悪い動きをしながら溢れ出て、連なり、柱を形成した。

肉柱がぎよろ、ぎよろ、ぎよると赤黒い眼球を剥いた。こちらに向けられるのは千にも万にも及ぶその邪悪な視線。

《二体目の魔神……！ 本当にそんなモノがいるっていうのか!?!》

「序列三十、フォルネウスだって？ それはソロモンの魔神のことじゃないか！」

アルゴー号の足場が突然傾き、デッキが裂けた。魔神柱の重量に耐えられなかったのか。

——どうすればいいの？ 古代ローマで魔神柱と戦った時には、ネロ陛下とローマ軍が総力を挙げて援護してくださいました。でもこの海にそんな援軍が駆けつける宛ては——

そんなわたしのネガティブ思考を、魔神柱ごと、一発の銃声が撃ち貫いた。

「ドレイク、船長？」

硝煙を上げる拳銃を握って不敵に笑う、我らがキャプテン・ドレイク。

ヘクトールは船上にいない。自分で編成を打ち合わせておいて何だが、女性陣チームは本当にヘクトールを撃退したと思われる。啞然だ。

次いで、砲弾やタル爆弾や銛の斉射が始まった。個々はデタラメに、しかしどれも確実に魔神柱に当たっている。黄金の鹿号ゴールドデンハインドの海賊さんたちがありつたけの武器を魔神柱に投げ放っていた。

「ボサツと突っ立ってんじやないよ、マシユ！ シャンと胸を張りな。こいつはアンタのための大一番だ。不敵に笑ってこう言い返してやんな。『バケモノなんかには用はありません。いいから素敵な王冠を渡してちょうだいな』ってな！」

ドレイク海賊団の皆さんが一斉にどよめいた。ドレイク船長の女性らしい言葉遣いはそれほど珍しかったようだ。ドレイク船長自身、自覚はあるのか、頬を微かに紅潮させながら援護射撃の続行を命令し返した。

「い、いいからやるよ、マシユ、リカ。モタモタしてるとアタシが二つ目の聖杯を頂いちゃうからねっ」

——援軍の宛てがない？ とんでもなかった。わたしは最初から、この海で独りで戦った時など一度もなかった。初めて会った日から、ドレイク船長も子分さんたちも、ずうつとわたしの「仲間」だったじゃないか。

「先輩——」

「フオウフオウっ」

「みつともないとこ見せてごめんね、リカ。あなたの先輩を、信じてくれる？」

「信じます。いっだって、先輩を信じなかった時なんてない」

——この特異点、最後の敵と会敵。第三オーダー、最終工程を開始する！

鎗矢はアタランテさんが放った。

魔神柱を狙ったその矢は、しかし、浮遊するメディアが魔術防壁を展開して弾いてしまった。アルテミスさんの矢もダビデ王の投石もドレイク船長の銃弾も、同じくメディアは防いでみせた。

エウリュアレさんは——ヘクトールにくれてやったトドメの宝具の消耗から回復していかないから攻撃できない、とのことだ。

メディアが魔神柱の守りに専念する限り、こちら側の攻撃は魔神柱に届かない。

現状、微細にでも魔神柱にダメージを与えているのは、ゴールドデンハインド黄金の鹿号からくり出す子分さんたちの背面攻撃だけ。さすがのメディアも、全方位に防壁を張り巡らせることはできないのか、魔神柱の正面以外はから空きだ。そういえばメディアは自分を「防御と回復しか能がな

い」とか言つてなかつたつけ。

魔神柱が、ガラスを爪で引つ搔くような咆哮を上げて、剥き出しの眼球の全てをわたしたちに向けた。

しまった！ 邪視による呪詛……！

今回は火傷こそしなかつたが、発熱したように悪寒がせり上がった。

デツキの裂け目がさらに大きくなった。このままだと本当にアルゴー号が真つ二つに割れて沈没してしまう。

この中で最も船と海に慣れたドレイク船長が一度離脱して、備え付けの脱出艇の縄をありつたけほどいて海面に蹴り落とした。

わたしは心得て、リカとフォウさんを抱えて、脱出艇の一つへ跳び下りた。次いでわたしたちの脱出艇にドレイク船長が着地した。

エウリュアレさんはアタランテさんが抱えて、ダビデ王は単身で、それぞれに脱出していた。アルテミスさんとオリオンさんは、スキルでそのまま水上を歩いている。

ドレイク船長がオールで波を掻き分けて、脱出艇はゴールドデンハインドの鹿号を目標とする。

「やっぱアレかい。デカイ敵を燃やすにやあ、船ごと燃やしてぶつけるくらいの気概が要るってコトかい!？」

するとリカの肩からフォウさんが飛び降りて、舳先の下でしきりに飛び跳ねた。——舳先。大型船において最も突き出た部位。

——そうか！ フォウさん、名案です！

「船長！ ゴールドデンハインドの鹿号を全速力であの怪物に向かわせてください！ 船を燃やす必要はありません、わたしが火になりますッ！」

「——策があるのかい?」

「はこ」

破れかぶれの神風ではない。多少の無茶はするが、ヘラクレスとの戦いほど命がけではない。ゴールドデンハインドの黄金の鹿号への被害は最小限に留めてみせる。初めてこの時代に来た日からずっと乗ってきたあの船は、わたしにとつてもはや「城」も同然なのだから。

わたしはこの戦局で打とうとしている一手をドレイク船長に説明

した。

「く——あはははははは！ アンタって女はもー、豪胆なのか繊細なのか分かりやしない！ けど気に入ったよ！ その方法でケリを付けようじゃないか！」

わたしはエウリユアレさん、アタランテさんとダビデ王、それにアルテミスさんとオリオンさんに向けて叫んだ。少しの間だけメディアアを今の向きのまま足止めしてくれ、と。——今ばかりは全員がアーチャークラスで助かったと心底思う。遠距離攻撃をする彼らならば余波に巻き込む心配がない。

脱出艇が黄金の鹿号に辿り着いた。

ドレイク船長はデツキに上がってすぐ、子分さんたちに、総員を操舵に回すよう号令を出した。

わたしは舳先に登って、盾を両手で構えた。

ふいにわたしの全身を巡る魔力が増した。——リカからの魔力供給だ。

——やつぱりどんな時も、あなたはわたしの後ろにいてくれるね。

「面舵いっばああい!!」

船体が回頭する。ちょうどわたしの正面にアルゴ号が来た所で、黄金の鹿号は前進を開始した。

スキル「魔力防御」発動。黄金の鹿号の船体を覆うような形状——俯瞰するなら錐状に魔力障壁を正面展開。

アルゴ号が凄まじい速さで迫ってくる。このまま、魔神柱の無防備な横つ面まで！

「進めええええええええええ!!!!」

「やあああああああああ!!!!」

黄金の鹿号の推力をブースターとして、錐状の魔力防壁は抉るように魔神柱に激突した。

効果は靦面だった。鋭く形成した防壁先端は魔神柱を貫き、根元からへし折った。

倒れゆく魔神柱は空中分解して、ほとんどの肉片を海へ夥しく降らせた。アルゴ号に残った肉塊も煙を上げて蒸発していった。

オケアノス16

「先輩っ」

「フオウー」

わたしは舐先から下りて、すぐそこにいたリカに抱きついた。

もしも上手く行っていなかったら。そんな弱気が今さら込み上げて、平静を保つために誰かの体温が欲しくなった。

リカの両手がおずおずと背中に回った感触があった。

前言撤回。誰の体温でもいいわけではない。わたしは、こうして密に触れ合うなら、リカがいい。

崩れゆくアルゴ号の上。メディアはこちらを顧みておらず、肉塊に倒れ伏すイアソンだけをひたすらに見下ろしていた。

「……めでいあ、なおしてくれ、ぼくのめでいあ……いたいんだ、いたいんだ、いたいんだよう……」

「——できません。ごめんなさい、イアソン」

よく見ればメディアのドレスは所々が裂けて血が滲んでいた。メディアはそこまで我が身を張って、イアソンを守るべく戦ったのだ。

だというのに、イアソンは——

「まじよ、め……うらぎりの、まじよめ！ しね、しね、くたばれ！

ちくしよう、ちくしよう、畜生——!!」

メディアの献身に対して、一言の労わりも感謝も口にせず消滅した。

まるでイアソンを追うように、メディアも指先爪先から輪郭がほどけ始めた。

「ごめんなさい。彼からアナタを守りたかったけど、私には手段がなかった。せめて最期の瞬間まで、楽しい夢が見られたらいいのだけ」

メディアが消える。それでは第二特異点のくり返しだ。わたしは彼女に問い質さないといけないことがある。

「待つてください、王女メディア！ あなたもレフ・ライノールの仲間だったのですか!? 『彼』とは誰のことなんですか!？」

「それを口にする自由を私は剥奪されています。私は魔術師として彼に敗北していますから」

「コルキスの魔女と畏敬されたメディアが、魔術の実力で、負けた——？」

「どうか覚悟を決めておきなさい。遠い時代の、最新にして最後の魔術師たち。アナタたちでは彼に敵わない。あの方には絶対に及ばないのです。だから——星を集めなさい」

星——？

「どんな人間の欲望にも、どんな人々の獣性にも負けない、嵐の中でさえ消えない、宙を照らす輝く星を」

その言葉の意味を問い質すより早く、メディアは消滅した。

彼女が消えた場所には、黄金の六面錘——聖杯だけが残された。

わたしはその聖杯を掌で包み持って、急いで撤退した。

直後にアルゴ号は崩れて沈没していった。

これでこの時代は修正される。わたしたちの第三の旅が、終わる。

「オオ——ー！ これがこのトンチキな海ともお別れだ——！」

「やったな野郎ども！ でもちよつと寂しいぜ！ こっちの海は浪漫に満ちていたからな！」

「おお、バンバン消えてくじやねえかオレら！ やっぱり下っ端から退場するのが世の常か——！」

ドレイク海賊団の子分さんたちが、次々と姿を消していく。誰も彼もが快哉を上げて、後悔も未練もこれっぽっちも言い残さないものだから、わたしの涙腺は今にも決壊しそうだ。

「じゃあな、マシユにリカ！ 船長を助けてくれてありがとうよ！ オレらはいずれ縛り首だが、アンタらはまともな人間だ。これに懲りたら海賊なんぞに関わるなよ——！」

最後にボンベさんが笑顔でエールを贈って去った。

サーヴァントの皆さんもそれぞれに言葉を残して英霊の座へ退去していく。

やがて黄金の鹿号ゴールドデンハインドの上には、わたしとリカとフオウさんと、ドレイク船長だけしかいなくなつた。

《さて、フランシス・ドレイク船長》

「ん？」

《本当にありがとう。今回は特例だらけでボクは何もできなかった。でも現地にキミという頼りになる航海者がいてくれた。おかげでこの歴史も無事修正されそうだ》

「いいってことさね。結局アタシは大したことはできなかつたしさ。で、やつぱり修正されると、アンタたちのことは記憶から消えるのかい？」

「あ……」

「――」

ドレイク船長は軽く笑つた。

「答えなくてもそのツラを見ればわかるってもんだけどさ。そつかあ。アンタたちと世界一周は無理か。残念」

――行きたかつた。

――わたしも、ドレイク船長の船で、世界をどこまでも旅したかつた。

「さ、行きな。海の人間にとつちや、別れはいつだつて唐突だ。砲弾でふつ飛ばされて、浪に掻つ攫われて、拳銃に行き先を見失つて死んでいく。だからアタシたちは、そんな恐怖を、いつでも笑つてごまかすのさ」

「――はい。さようなら、自由の海を渡り歩くキャプテン」

「あばよ、マシユ。ああそれと、リカ」

「は、はいっ？」

「いつぞやのアレを覚えてるか？ アンタは欲しい物が無いんじゃないやなくて、何も望んでないってヤツ」

「……覚えてます。これからも一生、あたしは何も望みません」

「いいや。アンタが真正銘の無欲なら、『あたしは諦めが悪い』なんて台詞は出ちや来ない。望んでいいんだよ。その意味が分かつた時、アタシとの旅を思い出して笑つておくれ。時代を救つた報酬はそれ

でいいさ！」

レイシフトの波が、わたしたちをこの時代から攫って、カルデアへと寄せて返す—— ……

………

……

…

意識を取り戻したわたしがいたのは、見慣れた青の中央管制室。リカとフオウさんも無事に帰還していた。

これで三つ目の特異点は修正された。人類史を護る、なんて遠大な題目も現実味を帯びてきた。

次で特異点は四つ目。いよいよ折り返しだ。

回を増すごとにイレギュラーが増える旅。第四特異点にどんな魔境が待ち受けているか分からない。

魔神柱についてはドクター・ロマンが調査すると言ってくくださったので、ドクターの勧めに甘えて第四特異点への出勤までは休息を取ろう。

わたしたちはドクターとスタッフの皆さんに今回のサポートのお礼を言ってから、中央管制室を出た。

「お疲れ様でした、先輩」

「リカもお疲れ様。フオウさんも。頑張りましたね」

フオウさんがリカの肩からわたしの肩に飛び移って、わたしの頬に毛並みを擦り寄せた。くすぐったい。でも、心地いい。

「……先輩。ドレイクさんの世界一周の旅、付いて行きたかったですか？」

リカの問いは淡々としていた。

「本当に行けるんだとしたら、行きたかったな」

ドレイクさんをキャプテンに、海の彼方へ。どこまでも。うん、憧れるだけで眩しいユメだ。

カルデアから出られないマシユ・キリエライトが、叶わない前提だとしても、外の世界をもっと見たいと望んだ。——望めるわたしに変えてくれたのは、間違いなくドレイクさんだ。

フランシス・ドレイクが開拓するのはきつと海だけではない。世界中の人たちの心の眼を、新世界へ向けさせるんだ。

そう考えると、ドレイクさんと航海を共にできたことがとても誇らしかった。

「……………」

「リカ？」

「……すみません。何でも、ないです。おやすみなさい、先輩。フォウくんも。揺れないベッドでぐっすり休んでくださいね。久しぶりに地面の上ですから」

リカは小さくお辞儀して、わたしに背中を向けて、マスター適性者のマイルーム区画へ歩いて去った。リカ、今日はわたしの部屋に泊まりに来ないんだ。残念。

「フォオフォウ？」

「あ。そうですね、フォウさん。聞きそびれてしまいました」

IFの話に過ぎないとしても、世界一周の旅が叶うとしたら——リカは、わたしと一緒に来てくれる？　って。

発覚―奮い断つ決意の盾―

ロンドン1

今朝も目を覚ませば、可愛い後輩の寝顔が目の前にある。

翌日にグランドオーダーを控えていなくても、わたしとリカが同衾するのは日常茶飯事になりつつある。これでわたしかりカのどちらかが男なら問題なのだろうけど、幸いわたしたちは女同士だ。

静かに起き上がって、リカの顔にかかった髪をどけた。

あどけない寝顔が、綿菓子をはどくように、覚醒へと向かう。

「おはようございます、先輩……」

「おはよう、リカ」

顔を、角度も高さも同じにして、ふたり、笑い合う。

「お先にお湯頂いていい？」

「先輩ならどうぞどうぞ。あたしは今日持っていく荷物、チェックしますね」

二人してベッドを下りた。

わたしは着替えとバスタオルを持って簡易シャワー室へ。

リカはネグリジエのまま、ハンガーから、真新しい制服礼装を取った。

今朝の食堂の朝食は、英国式フル・ブレックファーストだった。―ベーコンエッグに、塩ソテーしたトマトのスライス。マーマレードが添えられたトーストとスコーン。

食後には、本格的な紅茶一式を給仕された。食堂スタッフが恭しく、香り立つ一杯を淹れて、わたしとリカの前に置いてくれた。そして、「今回も頑張ってください」という激励をくれた。

朝からおなかに幸せ気分を詰め込んで、わたしはリカと手を繋いで、中央管制室に入った。

管制室で一番に出迎えてくれるのは、やはり、我らがDr. ロマン

ことロマンニ・アーキマン。

「おはよう、諸君。いいタイミングだ。ちょうど準備も整った」

まずは前回得た情報の解析結果から、ブリーフィングは始まった。

——七十二柱の魔神を操るソロモン王。この解析をしたドクターははつきり答えた。ソロモン王の時代、紀元前10世紀頃に特異点は発生していない。つまり——ソロモン王と彼らは無関係。

「もつとも、ソロモン王がサーヴァントとして誰かに使役されていた場合は別だけどね」

「ダ・ヴィンチちゃんっ。お、おはようございますー！」

「おはようございます」

「ん、おはよう。気持ちのいい挨拶だよ、二人とも」

ダ・ヴィンチちゃんはリカの頭をなでなで。わたしは？

「大体、ソロモン王がそんな悪事に荷担できるとはボクには思えない」

「お言葉ですがドクター。サーヴァントはマスターには従うものです。マスターが命令すれば、ソロモン王も従うしかないのでは？」

「そんな悪人にソロモンは呼べないよ。冬木の聖杯戦争じやあるまいし——」

ドクター？。なぜそこで複雑な表情をするのでしょうか。

「カルデアの召喚システムはマスターと英霊、双方の合意があつて初めて成立するものだ」

「私も同意したからカルデアに来たのだしね」

「そうなのですか？」

「当時の所長が魔術師としては優秀だね。彼くらいの腕利きならまあいいかなー、と軽い気持ちで召喚に応じたんだ。私はカルデアにおける、記念すべき召喚成功例第三号だよ」

第二号は10年前にわたしと融合した「彼」。真名はまだ分からないまま。

そういえば、第一号に当たる英霊は誰だったんだろう？ 確か機密

事項扱いで、詳細はオルガマリ―所長の父、カルデア前所長、マリスビリー・アニメスフィア氏しか知らなかったのだったか。

そこでドクター・ロマンが手を打ち鳴らした。

「さて。どうあれ残り四つの特異点、このいずれかの時代に黒幕が潜んでいる可能性は高い。何しろ他の時代に異常はないんだ。特異点を潰していけば必ず黒幕に遭遇するさ」

ドクターは第四特異点の説明を始めた。

——時は、産業革命。決定的な人類史のターニングポイントの一つ。消費文明への足がかり。転移先は、絢爛にして華やかなる大英帝国。その首都、霧の都ロンドン。

大英帝国。ロンディニウム。ブリテンの系譜の都市。懐かしい――

「さあ、準備はできた。世界はまだ焼却なんてされない。未来を取り戻せ！」

「はいっ」

……

……

…

レイシフトから意識を覚醒させたわたしたちは、灰色の霧に覆い尽くされた街に立っていた。

空を埋め尽くすほどの濃い霧と煙。それ自体は産業革命時代には珍しくはないけれど。

「霧が魔力を含んでいる。まるで大気に魔力が充満しているようだ。生体に対して有毒なレベルだよ、これは……通常の人間が深く吸い込めば命に関わる。マシユ、リカ君、体調は大丈夫？」

「わたしは問題ありません。——リカはどう？　様子は、普段とそう変わらなく見えるけど」

「あたしも平気、みたいです」

「うーん。もしかしてマシユと融合した英霊の恩恵なのかもしれない。強い毒耐性や祝福があつて、その加護がマスターにも与えられているのかもだ。とりあえず、耐毒スキル（仮）とでも呼ぼうか」

わたしはストリートを見回して、壁時計を見つけた。時計の時刻は午後2時。真っ昼間なのに、馬車も歩行者もいない。道々、犠牲者が倒れているよりはよほどマシな光景だ。

対する屋内は、昼日中なのにどこも灯りを燈している。霧のせいであつと曇り空だからだろうけれど、家の中まで魔力の霧が入っていないかが心配だ。

「……………何だ、お前ら？」

重い金属がぶつかる音。わたしは急いで盾を実体化して、声がした方向へと向き直った。

少女だ。しかも騎士だ。金のポニーテールと、凜猛な翠の両目。纏う刺々しい鎧は銀と赤。

わたしはこの少女の顔立ちにデジャヴを覚えた。

「先輩？」

「キユ？」

彼女によく似た面差しをどこかで見たような気がする。思い出せない。いつだったっけ——？

わたしが黙っていたからか、少女のほうが先に口を開いた。

「来るのが遅えぞ盾公！」

そして開口一番、わたしを怒鳴りつけた。

「そ、その盾公というのはわたしのことでしょうか!？」

「他に誰がいんだよ。手前のシンボルマークも忘れたか? ……まあ、いいか。オレのが先に駆けつけたんだ。それで良しとしてやる。

——あばよ、盾公。ここらは霧が濃い。連れが心配なら、さつさと移動したほうが身のためだぞ」

彼女が踵を返して、より深い霧の地帯へと踏み入って、見えなくなっていく。

「ま、待ちなさい! モードレッド! ……え?」

どうしてわたし、彼女の名前を知っているの?!

それにモードレッドといえば、アーサー王伝説に名高い、父王アーサーに叛逆した騎士。そんな人物が産業革命真っ盛りのロンドンにいるなんて、そぐわないことこの上ない。

「先輩っ。もしかしてあの人、先輩と、じゃなくて、先輩と融合した英霊と知り合いなんじゃ」

そうか。そういう可能性も無くはない。よくよく思い返せば、わた

しに宿った英霊がブリテンに縁があるらしき節はあった。

——もうここらで観念して、自分の正体と向き合うべきなのかもしれない。

「リカ、走るわよー！」

「はい先輩っ」

「フオウ！」

少女は北の方角へ進んだので、わたしたちも進路をそちらへ取った。整地された大通りは途中で終わったが、道は細く路地裏へ続いていた。進もうと思えばさらに進める。わたしたちであれ、あの少女であれ。

路地裏の霧は大通りより濃い。そして、彼女は霧の濃い方角へ向かっていった。

霧でお互いを見失わないために、わたしはリカとしつかり手を繋いで路地裏へ足を踏み入れた。

《霧が含む魔力のせいで、こちらの魔力系統の反応感知は完全に混乱状態だ。せいぜい動体感知のみ。二人とも、目と耳を研ぎ澄まして、異常を感じたらすぐにその場を離れるよう心がけて。こちらも追える限りの反応を逐一知らせるから》

「了解しました」

「あ……ありがとう、ごさい、ます」

「フオウっ」

《どういたしましたし——って、待った。大型の動体反応を感知した。分かりやすいな、人間ではありえないサイズだ！ マシユ、何か感じるかい？》

わたしは耳に神経を集中した。聴こえてきたのは、機械の駆動音。多分だけど、大型だ。

《英国の特務機関が用意した特殊車両なり、当時の魔術協会による機械式ゴーレムなりが、ロンドン市民を救うために現れた——って話だったら、とてもロマンチックなんだけど、そういうわけでもないだろうなあ！ 敵性反応と判断。キミたちの前方だ！》

わたしは盾を実体化させて踏み出した。この路地裏は一本道。前

から来ると分かっているれば、先手を打って迎え撃てる！

「リカ！ 魔力回して！」

「はいっ。霊子譲渡します。いつもより気持ち多めの魔力消費も大丈夫ですっ」

霧の向こうに巨躯のシルエットを視認した瞬間、わたしは盾に全身を乗せてシルエットに問答無用でボディアタック。盾が接した面に魔力防御を発動して、その巨躯を弾き飛ばした。

路地裏の奥で、大きな金属物体が落ちてひしゃげる音がした。

わたしはリカと一緒に正体を確かめに行った。

「何、これ……ゴレム？ 機械人形？」

「ロボット、とか」

そういうふうに見えない……こともない？ わたしには寸胴にしか思えないんだけど。

《二人とも少しその場から動かないで。露出した内部構造の静止画を保存したい。合間を見てこちらで分析してみるよ》

「了解。バラしますか？」

《いや、今見えてる部分だけで大丈夫》

露出した金属装甲を覗き込んでみた。大半の部分は何ともないけれど、鉄の部位だけが腐食している。排煙のせい？ この時代では、亜硫酸ガスが冷たい霧に阻まれて、滞留して濃縮されて硫酸の霧になるのが社会問題だった、と資料にあった。

《うーん、これは……まさかボクたちは幻の蒸気機関技術にでも出会ったのか？》

ドクターの返事が来てから、わたしたちは一度、見晴らしのいい大通りに戻った。

戻ってすぐ、わたしは面食らった。先ほどわたしを「盾公」呼ばわりした少女騎士、モードレッドと鉢合わせたからである。

「っ、あなた——」

「観てたぜ。『連中』をぶち壊すってことは、少なくともオレの敵ってわけじゃあなさそうだ。それに、悪くない戦いぶりだった。状況の詳細もロクに分かんねえだろうに、よくやる。いいね。そういうバカ

は嫌いじゃない」

冷静に、冷静に。

「あなたの言う通り、きつとわたしたちはあなたの敵ではありません」
なるべく彼女の心を掴んで、今後の関係構築を円滑に運ぶために。

「ですからどうか、お話を聞かせてはいただけないでしょうか？」

——この霧の都市で、何が起きてしまっているのか。

「いいぜ。その前にハッキリさせとこう。お前、デミ・サーヴァントつてヤツだろう？」

「は、はい。真名こそ分かりませんが、盾を用いて戦う、おそらくはブリテンゆかりの英霊と推察されます」

「ふーん……、……そういうことなら納得せざるをえねーか」

「あなたのお名前を尋ねても？」

「さつき呼んでたじゃねえか」

「いえ、あれはその、口から勝手に出たといえますか。確認も含めてお名前を教えてくださいのです」

「ったく。オレはモードレッド。父上の愛したブリテンの都市、ロンディニウムの危機に馳せ参じた円卓の騎士だ」

ロンドン2

モードレッドがわたしたちを案内したのは、大きなストリートに面した、そこそこ豪華なアパート^{集住宅}メントだった。

モードレッドが部屋のドアを乱暴に叩いた。

「おい、ジキルう。帰ったぞ〜」

「はいはい、セイバー。鍵を開けるから、またドアを蹴破ったりしないでくれよ」

かちやん、ぎい……

ドアを内側から開けて現れたのは、いかにも英国紳士らしいスーツ姿の男性。

「モードレッドさん、の、マスター?」

「ちーがーうー。利害の一致で一時共闘中つてとこだ」

「……ああ、もう。セイバー。見知らぬ人にすぐ真名を明かしちゃうんだ、君は」

モードレッドはどこ吹く風とばかりに、男性の横を通り抜けて部屋に入っていく。

「話したじゃないか。名乗るならばせいぜいクラスにしておこう、つて。それなのに、君というひとは」

「いいだろ、別に。とつくにこれは、お前の言う“聖杯戦争”なんかじゃないんだし。なあ、シールドないか? のど渴いた」

モードレッドは一人掛けのソファアームにどかっと座り、足を投げ出しながら武装解除した。

男性は溜息をつきながらも冷蔵庫からデカンタを取り出して、グラスと一緒にモードレッドに渡した。

モードレッドはソファアームの上にあぐらを掻くと、しゅわしゅわした中身の液体をグラスに注いで、それを一気飲みした。

「君たちも中へどうぞ。自己紹介がまだだったね。僕はヘンリー・ジキルという。ロンドンで碩学——科学者をしている。正式な魔術師ではないが、霊薬調合の心得があつてね」

ヘンリー・ジキル? 小説『ジキルとハイド』の主人公と同姓同名

だ。偶然なのかな。

「失礼しました。マシユ・キリエライトです。デミ・サーヴァントです。おじやまいたします」

「り、リカです。いちおー先輩のマスター……です。おじやまします……」

「うん。よろしく。君たちは僕らとは少し違うようだね」

わたしたちはグランドオーダーの概要をジキル氏と、モードレッドにも、説明した。特異点。時代に打ち込まれた七つのボルト。聖杯探索――

「モードレッド、さん。わたしからも一つ尋ねさせてください」

「何だ？ 改まって」

「あなたはわたしと融合した英霊の真名をご存じですね？」

「――へえ。どうしてそう思うんだ？」

「最初に会った時です。あなたはわたしに『来るのが遅い』と言いました。それは、ここロンドンに来て当然の誰かを想定した発言です。ですが、わたしとあなたの間には個人的な接点はありません。あなたがわたし個人にかける言葉はないはずです。それでも、まるでよく知る誰かにするようにあ言ったからには、あなたには、*彼*を知っている――いいえ、顔見知りで、それも近い仲だったのではありませんか？

少なくとも、『盾公』なんて愛称で、*彼*を呼ぶくらいには」

モードレッドは愉快げに目を眇め、口の端を吊り上げた。

「だって盾公だろ、お前。盾で守って、盾でぶん殴ってるんだから。それとも盾オンナのほうがいいか？」

「はぐらかさないでください！」

わたしは切実にわたしの正体を知りたいのに。

「本当にいいんだな？ オレの口から言っちゃっても。自分で探さなくとも後悔しねえな？」

「はい。わたしは逃げも隠れもしません」

――ずっと呼んでいる。寂しくて切なくて、ずっと誰かの名を呼んでいるの。

――わたしが知りたいのは、きつと、*彼*の強さや戦歴ではなく、

その澄んだ想いを溢れさせる心の持ち主が誰なのかということ。

「ギヤラハッド」

何の抑揚も感動も浪漫もなく、それはもう呆気なく、告げられた。

ギヤラハッド。

最後にキヤメロットに辿り着き、円卓の呪われし席に自ら座った騎士。

聖杯探索に失敗した多くの円卓の騎士の中で、ただひとり聖杯を手に入れ、そして天に返した聖者。

それが、わたしに宿った英霊の正体……

「盾公・リカ！ 気を抜くなよ。ここからは連中の縄張りだ」

「はい。ご忠告ありがとうございます。モードレッドさん」

うん、大丈夫。いつも通りにしゃべれてる、わたし。

——現在。わたしとリカ（とフォウさん）はモードレッドの案内で、ある人物の屋敷へ向かう途上にある。

ヴィクター・フランケンシュタイン。

ジキル氏の協力者であり、スイス出身の老碩学。

ジキル氏とは普段から連絡を取り合っていた仲だったが、今朝からヴィクター博士と無線が繋がらないという。そのヴィクター博士の安否確認と、可能なら保護を。ジキル氏にそう頼まれて、道を知るモードレッドが先頭を行って、今に至る。

ジキル氏は、自分が道案内できれば話は早かったが、生身の人間である自分は外に出られないと言ってすまなさそうにした。

——三日前から都市に発生した有毒魔力の濃霧、通称「魔霧」の中では、一般人は一時間で死んでしまうというのがジキル氏の分析だ。生身のリカが平気なのは、わたしとの契約を通じて加護が働いているから。——正確には、わたしの中のギヤラハッドと。

わたしはリカをふり返った。リカは小首を傾げてわたしを見つめ

返す。

長くて綺麗な亜麻色の髪。思い起す。遠い昔に「僕」の胸を打つた乙女の面影――

「フオーウ!!」

我に返ったわたしは、実体化した盾を、フオーウさんが吼えたほうへ向けて突き出した。直後に盾から伝わった振動は、奇襲を受けたことを如実に教えた。

わたしは盾をずらして敵影を視認して、え、と一拍の隙を生じた。

敵は、あのロボットではなかった。無理やり諭えるなら、マネキンに本物の筋や骨を足したオートマタ。

「ひ……っ」

「リカ、下手に動くな！ 盾公も動くな！」

わたしの横を赤が駆け抜けた時、目の前のオートマタに赤雷の一閃が炸裂した。

オートマタが分解して地面に落ちるのが早いか。モードレッドがオートマタを斬り捨てた王剣を払い、霊体化させた。

「ったく。だらしねえぞ。先に気を抜くなつつつといたろうが」

確かに言われた。確かに前もって注意を受けていた。フオーウさんが敵に気づいてくれなければ、少なからずわたしかりカがダメージを受けていた。完全にわたしの落ち度だ。

「申し訳ありませんでした……」

「手前の女くらい手前で護るんだな。オレは知らん。分かったらとつとと行くぞ」

小さな声で返事をしたわたしを、モードレッドは一瞥したものの何も言わず、また先頭を歩き出した。

「フオーウ……」

「ありがとう、フオーウさん。フオーウさんのおかげで奇襲に対処できました」

「先輩。あの、だ、大丈夫……ですか？」

「ええ、リカ。どこも怪我してないわよ」

「あ、いえ、そっち、じゃ、なくて……え、と……」

もしかしてリカは、モードレッドの物言いにわたしが傷ついたんじゃないかって、心配してくれてる？

それは確かに、傷つきはしたけれど、わたしの注意不足が招いたことだったのだから、肅々と受け止めないと。

「大丈夫だから。ほら、行こう？　ね？」

わたしが手を差し出すと、リカはほんのり笑んでわたしに手を預けた。リカはこういう所が危なっかしいけれど可愛らしくもある。

屋敷の建ち並ぶ区画に入ってしまった。モードレッドが屋敷の一つの前で足を止めた。

「このでかい建物がヴィクターじいさんの屋敷だ」

ほあー、とリカと揃って屋敷を見上げた。広いし大きい。ヴィクター博士は中流階級ブルジョアズでしようか。

「ジキルみたいな半端な奴と違って、正真正銘の魔術師だから気をつけろよ。あれこれと結界やらなにやら仕掛けてやがって……知らずにあちこち触ると、サーヴァントでも多少痛い」

そうなのか。ならわたし自身はともかく、リカの身の安全に気を配らねば。

「まずは入口の扉だ。ほら見ろよ、でかい扉の——」

「モードレッドさん？」

「——クソ、遅かった」

モードレッドがまとう空気が静電気を帯びたように尖っていく。わたしも気づいた。

屋敷の格子門の前に、長身のピエロが立っている。

ロンドンの現状でサーカスの興業など催されているはずもない。あの異様な存在感と外観の男は——サーヴァントに他ならない。

「おい、その力カシ。それともリビングスタチューか？　お前さ、アホみたいに匂うぞ。血と臓物と火の匂いだ。あと、じいさんの好きだった元素魔術の触媒。ここまでぶんぶん匂ってくる。——殺したな？　ヴィクター・フランケンシュタインを」

「確かに、確かに」

ケタケタとピエロは語り始めた。

「かの老爺は二度と口を開かず、歯を磨かず物を食べず、息をしないでしようけれど。ええ、ええ。有体に言えば絶命しているのです。残念なことです。彼は『計画』に参加することを最後まで拒んだ。しかししかし。だが、けれどもしかし。誰がヴィクター・フランケンシュタインを殺したか？ それはとても難しい質問かもしれません。何故なら彼は、ひとりでに爆発したのですからね！」

ピエロが頭と腕に巻いた時計が、チクタクチクタク、不協和音を奏でている。

「御託はいい。そのニヤけた口元を今すぐにやめろ」

「はい？」

「ニヤニヤニヤニヤと！ 鬱陶しいんだよ！ ジジイを殺るのがそんなに楽しかったのか！ 移民だろうがああジジイもブリテンの民だ。いいか、それをテメエは、無断でオレのものに手を出した。あとは分かるな？ テメエを殺す！」

モードレッドがついに王剣を実体化させて、ピエロに向けた。

「いやはやなかなか！ 殺しますか私を！ 殺せますか私を！ いいでしょう。我が宝具はすでに設置済み。我が真名メフィストフェレスの名に懸けて！ 皆様を面白おかしく絶望に叩き込んでくれましょう！」

メフィストフェレスの宣言に合わせて、地面にいくつもの懐中時計が浮かび上がった。

さつき奴はヴィクター博士が「爆発」したと言った。まさかこの時計は、地雷!?

「リカ、時計のある範囲を出て!! ここでの敵性サーヴァントを撃破する!!」

「はい先輩っ」

「フオウっ」

ロンドン3

——リカとの始まりは本当にありふれたものだった。

初めて来館した外部採用のマスターとの顔合わせ。多分そんな理由だったと思う。

レフ教授だったかドクター・ロマンだったか、とにかくわたしは第三者によってリカと引き合わされた。

初めて会ったあの子は、声の小さな人見知りの女の子だった。とても長い亜麻色の髪で沈鬱な顔を隠した——

“よ、よろしくお願い、します……キリエライト先輩……”

——先輩、とわたしを呼んだ。

先輩、という呼ばれ方に戸惑った。いずれはわたしこそが誰かを「先輩」と呼ぶんだらうと漠然と思い込んでいたから、よけいに。

あとから聞いたが、理由は単に成績がわたしの次だったから。わたしが首席、あの子は次席。それだけ。

やめてほしいと言えバリカは先輩呼びをやめたと思う。

ただ、それは、やつと宿を見つけた捨て犬を雨の中に放つように残酷な気がして、言えなかった。

それからは何かにつけて、リカと会って話す機会が多かった。

リカに「先輩」と呼びかけられるごとに、不思議な使命感が灯った。

この子にとって頼れる先輩でありたい。この子を護れる先輩になりたい。

この子がいつか心からの笑顔で「先輩」と呼びかけてくれるわたしになりたい——と。

……

……

……

はあっ、はあ……っ

わたしとモードレッドは辛くもメフィストフェレスを撃退した。

奴の宝具「微睡む爆弾」^{チクタク・ボム}の効果が、わたしの、というかギヤラハツドの聖性と相性がよかったおかげだ。呪いへの対抗手段を保有していなければ、わたしはもちろんリカも、いつメフィストフェレスに爆破されてもおかしくなかった。奴の宝具はそんなデタラメ性能だった。

「今回の召喚では、それほど愉しめませんでしたね。やはりマスターは必要なのでしょう。どうこう、ではなくて。ええ、そうではなくて。切なる願いを叶えると決めたマスターに、子供一人くらいは手にかけてさせなくては、聖杯戦争の醍醐味を味わえないというもの。ああ、貴女様が妬ましい、盾のサーヴァント！ 貴女はこれから先、何度でも、マスターを裏切り、絶望へ落とす機会がある！ 何と、妬ましい……！」

おぞましい。その一言に尽きた。メフィストフェレスはそんな空恐ろしい理由で、本気でわたしを妬んでいる。

モードレッドが王剣をメフィストフェレスに片手で振り下ろした。片手での剣閃であれ、メフィストフェレスにトドメを刺すには充分だった。メフィストフェレスはそれで呆気なく消滅した。

「中に入るぞ」

「あ、あの、でも、仕掛け……」

「家主のじいさんが死んだんだ。もう機能停止してんだろ。行くぞ」

ヴィクター博士の屋敷は、それはもう広がった。モードレッドが先導してくれたからこそ、わたしたちは無事、書齋に辿り着くことができた。

「……あう」

「凄惨だな、こりゃ」

べつとりと血がこびりついている。天井まで続く書棚にある本の背表紙に。文机に突っ伏した、おそらく老人らしき、遺体に。

わたしはごくりと生唾を呑んでから、慎重に、血だまりを踏まないように進んだ。

遺体が突つ伏す文机の上を覗き込むと、幸いにして血に濡れていなかった、一枚のメモを見つけられた。

「私は一つの計画の存在を突き止めた。名は「魔霧計画」。実態は未だ不明なままだが。計画主導者は「P」「B」「M」の三名。いずれもおそらくは英霊だ」

そこで部屋の奥まったスペースからモードレッドの声がした。

「おーい。面白いもん見つけたぞー」

本棚の置いていない小さなデッドスペースに、無骨な棺が一つ。棺はすでにモードレッドによって開け放たれたあとだった。

棺に敷き詰められた造花を寝床に、一人の少女が眠っていた。

「我が祖父、初代ヴィクター・フランケンシュタインの製作した一体目の人造人間——だとさ」

《フランケンシュタインの怪物、だね。でも小説によれば最後は燃え尽きていたような？ フランケンシュタイン、と呼ぶのが正しいんだろうけど、ちよつと小説のイメージに合わないね。何をコンセプトに設計されたんだろう。略式の花嫁衣裳？》

「……ア……」

彼女の開かれた瞼の下から現れる、樹海の湖のように澄んだ両目。その両目が、わたしたちを鏡のように映した。

彼女は棺から上体を起こして、不思議そうにわたしたちを見回した。

「かわいいっ！」

「……ウ」

リカの無邪気な感想で、彼女は照れたようだ。

「あつ、ぐ、ぐめんなさい、つい。気に障りましたか？」

彼女は首を横に振った。そうだよ。かわいい、と言われて嬉しくない女子はいない。わたし？ いえ、わたしは外見も中身も特筆するほど可愛げはないので、そう言われる機会はないでしょうから、ノーコメントで。

「よ、よかった。えつと、ふ、ふらんけんしゅたいんさん……で、合ってます?」

「舌噛みそうになってるぞ。まどろっこしいから、縮めて『フラン』って呼ぼうぜ」

若干押しつけがましいモードレッドの提案だったが、彼女は微笑んで受け入れた。

「ここに置いていても何だし、とりあえずジキルのところに連れて帰ろうぜ」

さすがに家主の許可を取らない同居人の増員はいかなものか、モードレッド卿。サーヴァントになって鷹揚になったが、雑な面までは変わらなかつたようだ。

というわけで、フランさんを連れて館を出る道すがら、わたしは無線機なりの通信機を探した。ジキル氏と連絡を取り合っていたヴィクター博士の館ならあるはずだ。

案の定、廊下に、古式ゆかしい電話機らしき機械が置いてあった。わたしはドクターに操作法を聞きながら無線機をいじって、ジキル氏のアパルトメントへ発信した。

《ヴィクター!?!》

「あ……すみません、ミスター・ジキル。わたしです。マシユです。我々が館に着いた時には、ヴィクター博士はもう……」

《そう、か……うん、そうか。——何があつたんだい?》

わたしは館の中で発見したフランさんの件と、彼女をアパルトメントに滞在させていいかを尋ねた。

ジキル氏は快諾してくれた。

《帰ってくる前に一つ、新しく入った情報を伝えておくよ》

「えー? まだあんのかよお。——ああフラン、お前じゃねえよ。館に入る前にピエロがいたんだ。そんだけ」

《ソーホーエリアに妙なものが現れた。何でも、屋内にまで入り込んで市民を襲う、人間くらいの大きさの本らしい。仮にこれを『魔本』と呼ぶことにした。対処をお願いしていいかい?》

わたしたちは一旦アパルトメントに戻って、ジキル氏にフランさんを託して、ソーホーエリアへの道を一路歩いていった。

「でかい本、ねえ。ドラゴン、巨人と色々相手にしてきたが、書物の怪物なんていなかったな」

特に知識はないはずなのに、わたしは同意できた。

深い森や険しい山、突風の絶えない断崖。いわゆる人の立ち入らない領域は、幻想種の恰好の巣となる。

「ああ、あとアレだ。ピクト人。北の蛮族。当世風に言うと、SF映画？ とかに出て来そうな感じだった。エイリアンな」

「き、騎士のお仕事って、エイリアンと戦うのもアリ、なんですか!?!」
「いや、本来ならナシなんだが。並の兵士や騎士じゃ勝てねえんだから、円卓の騎士が迎撃しなきゃどうしようもねえだろ」

「キヤメロット……過酷な職場、だったのですね……」

「フオウ、フオウ……」

そこでフオウさんがしんみりと同意するのは何故に？

唐突にモードレッドがわたしを振り返ったので、わたしはつい肩を強張らせた。

「東洋じゃ何て言うんだっけ。縁^エ、だったか。確かにその使い方なら英霊召喚の難易度は下がる。正直オレとしちゃ妙な気分だが」

使い方とは、わたしの盾のこと？

そういえば、今さらの疑問だけど、どうしてわたしはシールドなんてエクストラクラスを割り当てられたんだろう？ この盾はわたしの肉体に埋め込まれた召喚触媒とやらと関係あるのかしら？

「あの、モードレッド……さんは、英霊召喚に詳しいのですか？ 魔術の素養があるとか？」

「何言ってやがる、盾公。オレに魔術の素養があるとか、今さら厭味かテメエ……ってそうか。んく——よし。めんどくさい！ お前めんどくさいぞ、マシユー！」

「すみません！ 何故叱られているかは不明ですがすみません！」

「叱ってねえよ、ただの愚痴だよ！ そういうところも似てるな、お前ら

！」

お前『ら』？ わたしとギャラハツドの言動はそんなに似ているの？

「我慢できないんで戦おう。盾を構えろ。叩きのめしてやる」

モードレッドの言った意味がすぐに分からなくて、わたしは立ち止まった。

そのわたしとモードレッドの間に、リカが割り込んだ。

「ま、待って、くだ、さい！ 今は仲間なのに、戦うなんて、何で……！」

「へえ。マスターらしいところあるじゃねえか。全身が震えてなきやもつとカツコよかったけどな」

「はう……」

「弱者は弱者らしく引つ込んでいればいいものを。そうやって出しやばるから、真っ先に死ぬんだぜ」

モードレッドが王剣を揮った。

わたしは我に返って、リカを庇って盾で王剣を防いだ。

「先輩っ」

「リカは下がって！ モードレッドは本気よ！」

「生意気にもオレの初撃を受けやがったか。ようやく『らしい』使い方しやがったな。それでいい。行くな、盾公！ 先輩騎士として、徹底的に鍛えてやる！」

「言われなくても!!」

わたしをこき下ろすのはいい。でも、*「僕」*のリカを馬鹿にするのは許さない。

先攻はモードレッド。赤雷を帯びた王剣を、まっすぐわたしの盾にぶつけた。重、い……!!

でも、下がれない。わたしの後ろにはリカがいる。

って、きやあ!?

モードレッドに足払いをかけられて、わたしは地べたに横ざまに叩

きつけられた。しまった、剣に注意を割きすぎた。

王剣を大上段から振り下ろそうとしたモードレッドに向けて、わたしは街路の砂を投げた。一時的に視界を失ったモードレッドから逃れて、わたしは間合いを保って構えた。

「——先輩」

ふいに背中に寄り添った、体温。小さな擦過傷が消えた。リカの治癒魔術だ。

リカが離れられない間にも、モードレッドは再びわたしに王剣を向けて迫ってくる。

どうしよう。どうしよう、どうしよう、どうすれば——

わたしは盾を地面に突き立てた。もうこの手にも慣れた。モードレッドと接敵の瞬間を狙って、仮想宝具を疑似展開して吹っ飛ばす。モードレッドの王剣を受けて盾が平気なのかなんて弱気、今は考えない。

だって、それ以上に。こんなに強く叫んでいる。

彼女を護れと。あの子を護りたいと。わたしの盾が、わたしの鎧が、わたしの胸が——！

その時、わたしの全身がフラッシュした。

鎧にはより騎士らしいアーマーパーツが増えた。右の腰に射してあるのは、ダビデ王に頂いた細身のロングソード。

……霊基が変わった。より強い力を引き出せるようになったんだと自覚できる。

「リカ、フォウさん！ わたしから離れないで！」

モードレッドの王剣が横一閃に盾を斬った。——今だ。

「ロー仮想宝具／カルデア人理の礎！」

魔力でコーティングした上でスキル「自陣防御」発動。

モードレッドは見事に宙を舞い、見事にストリートに着地した。

「おっし。予想以上だ。どうだ？ その霊基からだの動かし方、少しは分かったか？」

「はい。何かこう、心の枷が一つ外れた気が……、……って、もしかしてあなたは、そのために——」

「荒療治だよ、荒療治。ショックで凹んで盾筋が鈍ってんのが見え見えだったからよ。……まあ、何だ。お前に宿ったアイツの真名を教えたいのはオレだ。そこだけは責任持つてやる。そこだけはな」

次にモードレッド卿が向き直ったのは、リカだ。

「それと、リカ。無礼を詫びる。お前は弱いが、心は堅い。それなりに担ぎ甲斐のあるマスターだ」

「そんな、こと……あたしは先輩に護られてるだけのお荷物マスターで……」

「もうっ、またそんなこと言つて。リカは護られてていいの」

「はいはい、ゴチソウサマ。糖分多くて胃もたれどころか吐きそうだぜ。——んじゃ先を急ぐぞ。マシユ、その盾をしっかりと構えて付いて来な」

「はい！ ありがとうございます、親切なモードレッド卿！」

前を行くモードレッド卿が足をもつれさせて転びかけた。

いいじゃない。このくらいのささやかな仕返しはお目溢しいたできた。

ロンドン4

わたしたちは、ジキル氏に指定された、情報提供者がいるという古本屋に着いた。

わたしが盾を構えて先頭、次にリカとフオウさん、しんがり殿はモードレッド卿という今のメンバーでのベスト布陣で、わたしたちは古本屋に入った。

やっぱり客は誰もいなかったけれど、カウンターまで行って一人の人間を見つけた。

子供だった。毛色といい服装といい、全体的に青い。

「ようやくか。待ちくたびれたぞ。おかげで読みたいくもない小説を1シリーズ20冊近く読み潰すハメになった」

それと、外見に似合わず声が渋い。変声期？

「お前たちがジキル氏の言っていた救援だな。ではさっそくこちらの状況を伝えよう。まず、この古書店の老主人は、すでに魔本に襲われた」

え——ええええ!?

「ソーホーエリアの半数近くが同じ状況だ。醒めない眠りへと落ち、今も仲良く夢の中というわけさ」

《いま魔本がどこにいるか分かるかい？ それと、キミは何故襲われなかったんだ?》

「あん？ 馬鹿かお前は。声だけでなく頭まで花畑か？ そんなもの、逃げたからに決まっているだろう」

《え、あ、ご、ごめん。そうだね、それはそうだよね………すみません》

ドクター・ロマンに合掌。この年頃の子供は直截に物を言うことが多いものだから。

「魔本がどこにいるか、だったな。ここだ」

……はい？

「奴はこの古書店二階住居、つまりまだこの上にいる」

屋内戦闘は危険だ。リカはもちろん、少年にも危害が及んでしまう。魔本をせめて外へ誘導しなくちゃ。

そういうことで、わたしたちは足音を忍ばせて2階へ上がって、書斎に突入した。

——本当に、巨人サイズのハードカバー製本がぶかぶか浮かんでいたので、すぐには立ち直した。

わたしが盾で体当たりして、窓から魔本を路地へと弾き落とした。落ちゆく魔本を追って、モードレッド卿が窓から大通りに飛び降りて、魔本と斬り結び始めた。

わたしも大通りへ跳び下りて加勢した。

モードレッド卿は王剣で目いっぱい魔本に斬りつけたし、わたしも渾身の力で魔本を盾で殴った。なのに——効いて、ない!?

「くそ、当たってるはずなのに! 何だよこの本!」

「わたしにも不明です。確かに攻撃は命中しているのに、倒れません!」

《幻覚のたぐいではないね? 確かにキミたちの攻撃は届いていると》

魔本からステータス異常を発生させる攻撃もスキルも受けていない。なのに——どうして!

「先輩!」

リカ!? 古本屋から飛び出して……だめよ! ここは危ない!

「せ、先輩、あ、あの、今っ。いえ、さつきから、ずっと」

「ごめんリカ、またあとで聞いてあげるから!」

「待て、盾公。——おいリカ! 言いたいことがあるならまず言え! 言葉を呑み込むのは口を利いてからにしろ!」

「う……さつき、魔本から! 女の子の悲鳴が聞こえました!」

女の子の悲鳴が魔本から……、……悲鳴!? 本から!?

「その子、痛がってます! 魔本は、ただのオバケじゃありません!」

「よし。お前も、やればできるじゃねえか。——攻撃が通らねえのは、その悲鳴とやらと関係してんのか? 魔本! テメエも声が出るな

「らりかみてえに何か言え！」

「魔本は語らない。人語を発しない。うん、そうよね、本なんだからこれが正しい。」

「馬鹿者。本から声が出るものか。本が語るのは文字だけだ。そこのお嬢さんは、たまたまそれを少女の悲鳴に錯覚したに過ぎん。……錯覚でないなら、まあ、骨董屋か鑑定士でもやってみる。当たるぞ」「さっきの子……い。あ、危ないよつ。お店の中にいなきや」

リカが少年の肩に手を置いて——目を瞠った。

「サーヴァント?」

「ご明察。俺もあいつらと同じ英霊だ。というか、このタイミングで悠々と稀覯本を読み漁っている子供がマトモだとも思ったか?」

「あう……そ、そうですよね。その、すみませんでした……」

リカ。そこ、絶対謝らなくてもいい場面だと、先輩思うの。

「テメエ何様だ! いちいち言い方が癪に障るんだよ!」

「俺か? 俺はアンデルセン。ハンス・クリスチャン・アンデルセンだ。クラスはキャスター。詳しく知りたいのなら俺の本を一冊でも読め」

え——ええええええええええ?!?! あ、アンデルセンって今言った? アンデルセンって! 世界三大童話作家の一角だ。

「童話は好きだけど、わたしの特に好きな『人魚姫』、その作者。こんな嬉しいサプライズに出会えるなんて!」

《架空とされた小説の登場人物たちの次は作家本人か! そして敵は本と来た! ようし、今回もまた訳の分からない状況になってきたな! それで、Mr. アンデルセンはサーヴァントとしてすごいのかな!?!》

「はあ? 俺は作家だ。クソ弱いに決まってるだろう」

え、でも、フランスで会った音楽家のサーヴァントはものすごい実戦派でしたが。

「そこで肉体労働に適したサーヴァントが来るのを待っていたというわけさ。さあ戦うがいい、セイバー、盾のお嬢さん。その一部始終、零さずメモにとつてやろう!」

「ソー、キュウ！ キャーウ！」

「よし黙れ、頼む黙れ！ 魔本より先にテメエに斬りかかっちゃまいぞうだ！」

モードレッド卿のイライラ、分かります。わたしだって、これが憧れのアンデルセン先生だと思おうと胸がチクチクしますもん。

「え、えっと、あ、アンデルセンさんは、魔本がどんなオバケなのか知ってるってこと、ですか？ 自分で戦わなかったってことは、敵の性質が分かかって、勝てないって判断できる材料があったから、なんですよね？」

「マスターのほうは読み手の資質アリだな。では答え合わせも兼ねてレクチャーしてやろう。あれは本ではない。存在そのものが固有結界だ。無敵に等しい耐久性はそのためだ」

モードレッド卿が王剣で再び魔本に斬りつけた。しかしやはり、魔本には傷一つない。

「結論を言え、結論を！」

「結論というか見たまんまの問題だよ。こいつは、はぐれだ。マスターがいらない。だからこそ、こいつはソーホーの人々を襲った。眠りに落として夢を見させた。要はマスター探しさ。夢の顕現として、こいつは疑似サヴァントとしての実体を得ようとしている」

《そうか！ この魔本の姿は、まだ実体ではないのか！》

「ご名答！ こいつはサヴァントですらない、サヴァントになリたがっている魔力の塊だ。放っておけばいずれ実体化するだろう。代わりに、ソーホー市民全てが眠りの中へ落ちる。眠ったまま衰弱死する人間もいるかもしれない」

「——マスターが見つければ止まるんですか？」

リカの声は努めて感情を乗せまいとしたものに聞こえた。

マスターが見つつかれば。確かに、アンデルセンさんの言い方だとそうなる。誰かが、魔本のマスターになりさえすれば。

「リカ、あなた、まさか……」

「っ、何でもありません！ 聞いてみただけですから！ 何も変なこと考えてないですから……っ」

「痴話喧嘩はそこそこにしろ。そろそろあのセイバー単騎では厳しくなってきたぞ。まあ、そうだろうな。魔本はノーダメージだが、セイバーは消耗する。そら、どうするんだ、ご両名!」

「う……」

わたしは困り果ててリカと顔を見合わせた。

リカはためらっている。わたしの顔色を窺っている。

わたしがゴーサインを出せば、リカはすぐにでも魔本と契約するに違いない。

「先輩……」

……ずるい。そんな潤んだ目と声で言われたら、NOなんて言えないよ。

「リカ、お願い」

「! はいー!」

話はまとまった。

アンデルセンさんがリカに、魔本を鎮静化する方法を教えた。

リカはそれに硬く頷いて、魔本へと歩き出した。

触れるか触れないかの至近距離へ至ったりリカは、令呪のあるほうの手を、魔本に差し出した。

「あなたに名前をつけてあげる。あなたの題名は、なまえ誰かの為の物語」

魔本が光った。

光の中で魔本は普通サイズのハードカバー本へと形状を変えて、リカの手に納まった。

「あれで魔本はリカのサーヴァントになったのですか?」

「結果的にはな。あとはまあ、あの娘の魔術触媒として、高速詠唱の助けくらいにはなるだろうさ」

触媒になる? ならキャスタークラスであるアンデルセンさんご自身がマスターとなって、魔本を鎮静化することもできたのでは?

「俺がアレを『呼んだ』らヒト型で実体化しかねなかったんだ。言つとくが殴り合いなら弱いぞ俺は。お前たちという肉体労働者が来るまで、息を潜めて読書しているしかなかったと言っただろう。とにかくこれで一件落着だ」

一件落着……してません。少なくともわたしの中では。

「何だ？ 文句があるのか、盾のお嬢さん？」

「――」

「盾公。この手の人種には手え出したほうが負けだぞ」

「はっ!? は、はい、いえ、分かっていきます！ 分かっていきますとも！

作品と作者のパーソナリティは別物、ですよね！」

「あ、いや、そこまで言っちゃいねえんだが……いいのか？」

どことなくアンデルセンさんの表情が鬱蒼としている。

は！ わ、わたしつてばあのアンデルセン大先生を前に何てことをー!!

《あー……ウチのマシユが失礼を言っすまないんだけど、君にも協力を仰ぎたい。サーヴァントの仲間が増えるのは心強い》

「ぜひ同行しよう。協力する気なんぞ全くなかったが、先ほどの発言で気が変わった」

はは、やっぱりわたしの失言のせいですよね。3分前のわたしの頭にチョップしたいです。はは、あはははは……ぐすん。

ロンドン5

わたしたちがジキル氏のアパルトメントに帰り着くなり、アンデルセンさんは勝手に自室を書斎に定めて、そこに籠もってしまった。だけど、わたしたちに彼を咎める時間は与えられなかった。

「そのまま聞いてくれ。スコットランドヤードの電信を傍受した。――切り裂きジャックがヤードを襲撃している」

「あいつか！ やつと出て来やがったか、あの野郎！」

「切り裂きジャックというと……」

「この時代の人間じゃない。サーヴァントだ。クラスはアサシン。霧の中で何度かやり合ったんだが、何度やっても逃げられちまう。おまけに顔も姿も具体的能力も思い出せやしねえ。あーもう、苛つくぜ！ 切り裂きジャック、つて名前を聞けば、ああそうかあのアサシンか、と思うので精一杯だ！」

隠蔽、いえ、記憶の書き換えスキル？ 「切り裂きジャック」の来歴にそういうスキルか宝具に昇華できるエピソードはあったっけ。

「盾公！ リカ！ 出るぞ！」

「あ、はい、すぐに！ リカ、行ける？」

「がんばり、ます」

「フオウっ」

すると、わたしたちの話が書斎まで届いたのか、アンデルセンさんが居間に顔を出した。

「外出か？ ならそう言え。土産は……そうだな。スコーンあたりが欲しいな」

「お・ま・え・は・来・な・い・の・か・よ!! いや来られても役に立たねえけどさー！」

「作家が戦場で役に立たないのは当たり前だろうが」

アンデルセンさんの開き直りっぷりといったら、それはもう堂々としていらいした。彼が口を開くたびに、一読者として大事にしていたものが音を立てて崩れ去る。やるせない。

「オレが馬鹿だった。行くぞ！」

「了解！」

「は、はいっ」

モードレッド卿は部屋を出しな、ぶ厚い甲冑を纏った。

……今さら気づいた。よくよく考えたらこれはすごいことなんじゃない？　アーサー王や円卓の騎士たちの前でも、甲冑どころか兜さえ脱がなかった「あの」モードレッド卿が、ジキル氏の部屋にいる時はあんな無防備な格好でいるなんて。

「全速力で行くぞ。マシユ、リカを抱え上げろ。人間の足に合わせる暇が惜しい。サーヴァントの全力疾走でヤードを目指すんだ」

「分かりました。——リカ、ちよつとごめんね」

わたしはリカの脇と膝裏にそれぞれ手を回して、リカの体を抱き上げた。そして態勢が横になったリカも、当たり前のようにわたしに強くしがみつく。

《デインドラン》

——誰かがリカに呼びかけた。

たった一度しか聴いたことがない、懐かしい声。今のは。

「盾公！　ぼさつと突っ立ってんじゃねえ！　足を動かせ！」

「す、すみません！」

いつの間にかモードレッド卿との間に空白が生じていたことに気づかなかった。

彼女の言う通りだ。戦場で気を抜いてる暇なんてない。

わたしはリカをしっかりと抱えてから、先に行くモードレッド卿の背中を追いかけて走り出した。

薄暗い空がとっぷりと闇色になった時刻。わたしたちはようやくスコットランドヤードに到着した。

わたしはリカを腕から下ろして、盾を実体化させて臨戦態勢。

だってこんなひどい血臭がする。魔霧とは別の、腐食の霧が頭に

忍び込んでくる心地がする。ぺちやぺちや、と。きつと赤い色をした水溜まりを踏んで、何かが歩いてくるのが聞こえる！

血まみれのナイフを逆手に持った少女が、現れた。

「あれ？ そつちから来てくれたんだ。それじゃあ……ふふ。わたし、どうしようかな。わたし、おなかが空いてるの。ぺこぺこ。だから、ありがとう。あなたたちの魔力を食べておなかいっぱいにする」「ドクター、ヤードの内部は……」

《……動体反応は、キミたち以外には2つだけだ。そこにいるジャックと、もう一騎》

ゆらり、と霧が流れて、そのもう一騎の姿も露わとなった。

女性と見紛うほど秀麗な面立ちと、線の細い体を包む白衣の、男。

「あなたもサーヴァントですね？」

「はい。私はキャスターのサーヴァント。貴女たちの知る『計画』を主導する者の一人です。ああ、私のことは『P』とでもお呼びください」

「P」と名乗ったキャスターは、わたしたちに対して敵意も害意も浮かべていない。

「残念ながら、スコットランドヤードは全滅しました。全てが惨たらしい死に様でした。しかし、必要なことでした。やむなき犠牲。そう表現することがせめてもの手向け」

「P」が掲げた掌の上に数枚の紙が現れた。暗くて文字までは判別できない。

「スコットランドヤードには、私たちの必要とする品が、嚴重に保管されています。ですので、残念ですが、彼らは皆、大義の障害となつてしまったのです。私はどうしようもないほどに哀しみを禁じえない」

「P」が掌を握ると、紙束はさっぱり消えてしまった。

わたしの口から、言葉が溢れて突いて出た。

「……矛盾、している。あなたの語ることは破綻している。自ら悪を名乗り、犠牲にした人々を憂えてみせながら、あなたの声には全く血が通っていない。仮にあなたが本当に哀しんでいるのだとしても、その哀しみに誠意が伴っていないのなら、それは全く哀しまないのと同

じくらしいに質が悪い！」

「ええ、そうかもしれないですね、凜々しい少女騎士。だから今も、あどけない少女にこう言うのです。——ジャック。彼女たちを任せます。あの中の誰かはあなたたちの母かもしれないですよ」

「P」の言葉をスイッチに。

殺人鬼が、無垢な少女へと変貌した。

「そう、なの？ ……何だ、そうなの。ふうん。それじゃあ、おかあさんにしてみたいに、するね。帰らせてくれる？ わたしを、おかあさんの中へ」

切り裂きジャックが抱いている何らかの切望を——モードレッド卿が言葉で切って捨てた。

「だめだ。お前は座へ直行だ。ここで殺す」

この時ばかりはわたしもモードレッド卿に全力で同意した。

切り裂きジャックを放置してはだめ。「P」の手駒に使われて殺人を重ねるのは、ロンドン市民のためにも、あの子自身のためにも、いけない。モードレッド卿の言う通り、切り裂きジャックはここで止めるんだ。

霧が立ち込めてきた。魔霧とは肌を刺す感触が異なる。

切り裂きジャックは薄く笑って霧に紛れて姿を消した。アサシンだけあって不意打ちの何たるかを心得ているようだ。

「リカ、吸うな！ 毒の霧だ！」

リカは急いだ様子でフォウさんをローブの中に隠してから、袖を寄せて自身の口と鼻を塞いだ。

切り裂きジャックはどこへ行ったの？

辺りは魔霧に満ちていて様相が把握できない。彼女がどこから奇襲をかけるか分からない。その緊張に、冷たい汗がうなじを伝った。

鈍い光がいくつも飛来した。医療用メスだ。狙いは——わたしとモードレッド卿ではない。リカだ！ くっ、間に合うか……！

「や……ッ！」

その時、リカのリュックサックから例の魔本が一人で飛び出した。

魔本はリカの頭上でページを開いて回転した。すると、リカを守るように風が渦巻いて、飛来したメスを全て弾き返した。

魔本がリカの手に落ちた。

「守って、くれたの？ ……ありがとう」

リカが無事で安心した。でも、その気持ちと同時に湧き上がった、この、黒くて粘っこい感情は何だろう——？ いやだ。胸が、燻る。

わたしはリカのもとへ今度こそ駆けつけた。

「リカ、大丈夫？」

「はい先輩っ」

「フオウ！」

またメスが霧の中から投擲された。わたしは構えた盾でメスを防いだ。——何て合理的なシリアルキラー。わたしたちの中で一番非力な者から確実に始末しようとしていつる。

「チツ、罫が明かねえ。盾公！ オレが一瞬だけ霧を晴らす。テメエが奴を見つけて動きを封じるんだ。できるな？」

モードレッド卿の言う通り、勝ち筋は今の所そのくらいだ。わたしは堅く領いた。

モードレッド卿が王剣を高く掲げた。

「赤雷よっ!!」

赤い稲妻が周囲一帯に落ちるや、霧が吹き飛んだ。

見つけた。キョトンと立ち尽くしている切り裂きジャック。ヤード正門の真ん前。

わたしは盾を握り締めて、切り裂きジャックへ走り迫った。

——奮い立て、わたしの体。罪深きを断て、わたしの盾。

「此よりは地獄。わたしたちは炎、雨、力——殺戮をここに」

「ロード仮想展開／カルデアス人理の礎!!」

「マリア・ザ・リッツバー解体聖母!!」

ナイフと盾が真つ向からぶつかり合った。

力で押し勝ったのはわたしのほうだ。ありったけの魔力で宝具を疑似展開した。

結果として切り裂きジャックはナイフごと弾かれて、ヤードの格子

戸を超えて玄関まで転がった。

でも、あんなモノ、二度は、受け止められない。

——切り裂きジャックの宝具のエネルギー源は、強烈で膨大な怨念だった。

何をどれだけ呪い、恨めば、あれほどの絶望が生まれるのか。狭くて清潔な世界で育ったわたしには想像さえつかなかった。

盾に縫るように頹れたわたしの横を、モードレッド卿が通り過ぎた。

モードレッド卿は地べたに転がる切り裂きジャックに淀みなく歩み寄った。

「おかあ、さん。やだ、やだやだやだ。いたい、よ。どうして、なの？

ねえ、ねえ」

モードレッド卿は無言で切り裂きジャックの霊核に王剣を突き立てた。

——月は中天。

長い一夜は、まだ終わらない。

ロンドン6

ジキル氏のアパルトメントの部屋に戻ると、わたしたちを一番に迎えたのは、意外にもアンデルセンさんだった。

「よく帰って来たと言っておこう。ヤードの警官たちについては残念だったな。少しは休んでおけ。聞けば、こちらへ来てから休みなしなんだろう？ 根を詰めても良いモノが仕上がるとは限らない。執筆であれ聖杯探索であれ、適度な休息が必要だ」

アンデルセンさんのご厚意は有難い。でも、状況は予断を許さない。メフィストフェレス、魔本、切り裂きジャックと連続して異変が起きたからには、また次の異変が起きて飛び出すかもしれない。コンデーションは切り替えられない。

「バカめ。貴様もワーカーホリックか。荷物の重さを忘れられないとはな。では退屈しのぎに一つ語ってやろう。俺やナーサリー・ライムがどうやって現界したのかを」

アンデルセンさんがソファアーの一つに腰を下ろした。一度失言をしたわたしとしては、言われるがまま肅々と彼の正面ソファアーに座るしかなかった。

「話す機会がなかったが、俺もナーサリー・ライムも共に魔霧から現界した。マスターの存在もなく、召喚の手順も踏まれずに、な」

ここでモードレッド卿がポンと手を叩いた。

「そういや、オレもそんな感じだったな。ジキルはマスターでもないし、召喚の儀式もなかった。気づけば霧の中にいた。何だ？ サーヴァントってのは自然に湧くのか？」

《いやいやいや！ そんなことは絶対にありえないから！ 召喚されず単独顕現するモノがいるなら、それはもうサーヴァントを越えた『何か』だよ》

「——サーヴァントは霧から現界するものではない、か。なら帰結は一つだろうな。霧は聖杯が生み出している。もしくは、霧を生み出す何かが聖杯の影響下にある」

アンデルセンさんの言葉を咀嚼していたわたしに、ジキル氏が差し

出した物がある。ソーサーに乗ったティーカップ。中身は香りのよい紅茶。

わたしは反射でカップを受け取ってしまった。これでわたしはすぐに席を立つことができなくなった。アンデルセンさんの言うように、休息を取るしかない。大人しく座っていよう。うん。

「現実の多くには必ず理屈が付くものだ。理屈が通用しないのは恋ぐらいだろうよ。想像力を働かせろ。それで大抵の物事は予想できるし、時には予測へ至る。例えば、そうだな。今この時。どこからともなく食欲を刺激する匂いがする。スコーンかマフィンが焼ける香ばしい匂いだ。しかし外は魔霧が充満していて、とてもそんな匂いがこの部屋に入ってくる余地はない。すると匂いの源はどこか、という疑問が生じる」

「外からではないのでしたら……部屋の中から、でしょうか？」

「部屋の中でそんな匂いがする訳を想像してみろ」

「そりゃあスコーンだかマフィンだかを部屋の中で焼いてるからだろ。簡単だ」

「ふむ。誰が？」

わたしはテーブルを囲む面々を見回した。モードレッド卿と、隣の床に座ったフランさん。ジキル氏。アンデルセンさん——

足りない。——リカは？

まさかという思いでキッチンのほうへ顔を向けると——

「ああ」

——まさかのその通り。リカが、スコーンを並べた大皿を持って、フオウさんと一緒に居間に入ったとこだった。

「とまあ、こんな具合に、だ。理屈が付いただろうか？」

アンデルセンさんは、にやりと笑った。

し、知ってた。この人、リカがこっそりキッチンでスコーンを焼いてたって絶対知ってた！

リカの顔はみるみる真っ赤に染まってく。このまま何も言わなかったらリカはキッチンに戻って隠れてしまいうに違いない。わたしだって長いことあの子の「先輩」をやってきたんだから、分かること

だつてあるんだからね。

「リ、リカっ。それ、わたしたちに作ってくれたの？」

「えと、あ、はい！」

間一髪。引き留め成功。

「本当はちゃんとしたお店で買って来たかつたんですけど、霧でどのお店も閉まってましたから。ジキルさんに材料分けてもらって、焼いてみたんです。スコーン。アンデルセンさん、あたしたちがヤードに行く前に、お土産はスコーンがいいって、言ってた、から………なんか、ごめんなさい」

謝ることなんて一つもない。律儀？ まめ？ ええい、とにかくわたしの後輩がすばらしくて言葉にならない！ 先輩は我が事のように嬉しいです！

わたしはソファアートを立ってリカの前まで行った。

「ありがとう、リカ。みんなで頂くからね」

「あ………はいっ」

よかった。リカ、笑ってくれた。

わたしはリカから大皿を受け取って、取って返してテーブルの中心に置いた。並んだスコーンの一つ一つがミニサイズなのは、子供体型のアンデルセンさんへの気遣いでしょうね。

アンデルセンさんがスコーンを一つ取って、一口齧った。

「これを食べながら夜のティータイムと洒落込むなら俺はもう口出しせん。ベッドで惰眠を貪ろうが、深夜の哨戒に出ようが、お前たちの好きにしろ」

アンデルセンさんの言う所の「夜のティータイム」はそれなりに長く続いた。

その大きな要因として、アンデルセンさんとモードレッド卿がリカにスコーンのおかわりを注文したことが挙げられる。リカ手作りのスコーン、お二人ともお気に召したようで何よりです。

ただし、モードレッド卿が途中からシールドを持ち出したものだけ

ら、危うくお茶会が飲み会に一転する所だった。

それを阻止する口実として、わたしは夜明け前の哨戒をモードレッド卿に提案した。

「あー、そうだな。『P』あたりを押さえて吐かせれば全部解決だ。じゃ、シテイエリアを端までぐるつと回ってみるか」

モードレッド卿は足取り軽く部屋を出た。

わたしたちもモードレッド卿を追って、アパルトメントを出発した。

霧の深いロンドンの街は、家々の灯りやガス燈の光と反比例して静まり返っている。魔霧に沈没した都市ではそれが自然なのに、そのちぐはぐさが妙にわたしの胸をざわつかせた。

哨戒中にオートマタと遭遇もしたが、それ以外は特筆すべき異常のない道のりだった。

これでもう何回目か。

オートマタを斬り捨てたモードレッド卿に、リカが治癒魔術を施している。

「お疲れ様でした。休憩されますか？」

「いいって。ただ量が多いだけだ。ヘルタースケルターがいたら話は別だけどな。あいつ強いからな。今回の現界で楽しみながら戦えるのはあいつだけだ」

「わたしたちがヘルタースケルターと遭遇したのは一度きりですが、確かに手ごわい相手でした」

「フオウフオウっ」

《そういえばあちこち移動したが見かけないね。数はそう多くないのかい？》

「んー、言われてみりゃ、アレが大量にいるとこは見たことねえな。せっかくだから今夜あたり出て来ねえかなー」

「あの、それってフラグ……」

しーっ。リカ、それ以上は言わぬが花よ。

わたしたちは哨戒を再開した。

霧から出没するのはオートマタやヘルタースケルターだけでなく、サーヴァントもだ。リカを護るためにも気を引き締めて行こう。

シテイの端の路地裏を回っている時だった。

——魔力による大気の震え。強い存在感を放つ何者かの出現を、わたしは肌で感じ取った。

それはモードレッド卿も同じだったようで、彼女は手に王剣を實體化した。

わたしも盾を構えて、リカを背中に庇った。

かくしてわたしたちの前に現れたものは——

「さあ、吾輩を召喚せしめたのはどなたか！ キヤスター、ウイリアム・シエイクスピア、霧の都へ馳せ参じました！ と、言いたい所なのですが、これは聖杯戦争による召喚ではない模様。神よ、吾輩が傍観すべき物語は何処にありや？」

「……………ハズレだ。次」

モードレッド卿は王剣を消して路地裏から去ろうとした——が、逃げられなかった。

「おお、これは。異様の霧の中にて貴方とこうしてまみえようとは。此度は貴方の物語を紡ぐとしましょう。噂に違わぬ活躍を期待していますよ」

「あ……………」

キヤスター・シエイクスピアは明らかにモードレッド卿に知り合いへの態度で話している。生前の知り合いはありえないから、うーん、同じ聖杯戦争に召喚されたことがある、とか？

「敵ってわけでもなさそうだが。しかし、いよいよそうになると奇妙ではあるよな」

そこはわたしも気になった点だ。メフィストフェレスやジャック・ザ・リッパーとシエイクスピアさんの違いが分からない。どのサーヴァントも魔霧から現界したのに、敵味方に分かれる基準が不明だ。ふと、モードレッド卿のまとう空気が静電気を帯びたように尖った。

「何だよ、夜の見回りは大当たりだったか？」

はい？

「おい！一度逃げ帰った割には度胸があるな！」

「……新たに現界したサーヴァントはそちらに確保されてしまったようですね。残念です」

な……「P」!?! いつのまにこんな至近距離に！

《そうか！魔霧から現界したサーヴァントを確保し、自分たちの仲間にしていったんだな。だが、言うほど容易いことではない。英霊を操るなんて、それは聖杯でもなければ不可能だ》

「正解、とまずはお答えしましょう。我々は、我々にとって必要な者がこのロンドンへ現れるのを待ち続けているのです。ですから、魔霧から現界した英霊を順次確保し、魔霧拡大のため働くよう『調整』しています。貴女たちを確保できなかったこと、私には残念でなりません。きつと良い友人になれたでしょう。私たちは、お互いに」
冗談じゃない。切り裂きジャックにあれだけ人を殺させておいて、どのツラ下げて、と言つてやりたい。

わたしは騙されない。「P」が綺麗なのは外見と言葉の上辺だけ。

モードレッド卿が王剣を再び実体化して、「P」に切っ先を向けた。

「今度は逃がさん！斬り捨てられる前に名乗ってみろ、魔術師！」

「——いいでしょう。今回は移送すべき触媒もない。私は、ヴァン・ホーエンハイム・パラケルスス。ここで貴女たちを確保します」

ロンドン7

開戦の狼煙はパラケルススが上げた。

パラケルススが口にしたのはたった三音節。

「風よ」

わたしは最前線に出て魔力防御を発動した。なのに、わたしの露出した肌は擦過傷を負った。ふり返ればモードレッド卿も、頬を擦り剥いた痕がある。まるで不可視の刃を幾重にも放たれたような……いや、「ような」ではない。パラケルススは実際に風を圧縮して弾幕にしたんだ。

だが、こちらもやられっぱなしではすまさない。おもにモードレッド卿が。

モードレッド卿は瞬きの間にパラケルススと距離を詰め、真つ向から王剣で斬りかかった。

パラケルススは瞬時に生成した氷塊を防具にして後退することで深手を免れたものの、下がれば追い続けるモードレッド卿に押し負けるのは時間の問題だ。

わたしもモードレッド卿に加勢しようと思いついて追いかける、その前に、リカが後ろからわたしに抱きついた。

肌の擦り傷が綺麗に消えた。リカが治してくれたんだと分かった。やっぱりわたしの後輩は最高だ。

リカが離れてすぐ、わたしはモードレッド卿とパラケルススを追いかけた。

——まずいな。パラケルススを追えば追うほど、民家の多い地帯に入り込んでしまっている。仮にここで宝具勝負になったら大きな人的被害を免れない。まさか——パラケルススはそれを狙って？

「モードレッド卿、深追いしていますー！ 一旦離れて……！」

大きく下がったモードレッド卿。わたしは彼女の横に並んだ。

互いが負った手傷だけを見れば、パラケルススが完全に形勢不利だ。

でも、パラケルススの貌は勝利を諦めた者のそれではない。

「水よ」

気づけばわたしとモードレッド卿は水球の中に閉じ込められていた。

わたしは盾で水を掻いたが、何度やっても水球は破れない。まずい。このままだとわたしもモードレッド卿も溺れ死ぬ——！

「ナーサリーちゃん!!」

リカの悲鳴がくぐもって聞こえた。

追いつけたリカのリュックサックから魔本が飛び出て、リカの手に落ちた。リカは開いた魔本片手に、わたしたちにもう片方の手を向けて、何らかの詠唱をした。

すると、わたしとモードレッド卿を捕らえていた水球が爆ぜ散った。

「つけほ！ カハ……ッ！」

突然戻った呼吸につい咳き込み、肩で息をした。

リカとフォウさんが、膝を突くわたしたちに駆け寄ってきた。

「先輩！ モードレッドさん！ 大丈夫ですか!？」

「フォフオーウ！」

「なん、とか……リカのおかげで助かったよ」

リカはぶんぶんと首を横に振った。

「あたしだけじゃ無理、でした。この本、あつた、から」

魔本———そういえばアンデルセンさんは「高速詠唱の助けにはなる」と言っていなかったか。本の姿をしてもキャスターのサーヴァント。リカの魔術に威力を上乗せしてくれたのか。

リカは魔本を地面にそつと置くと、わたしとモードレッド卿にそれぞれ両手を置いた。それでわたしたちの濡れた衣服や髪は乾いた。———そうか。モードレッド卿の帯びる魔力は雷寄りだから、濡れたままだと感電して自爆しかねなかった。

「クソツタレ。円卓の泳ぎ達者はケイだけだったんだ」

実に同感。ケイ卿のあれは変態的だった。

モードレッド卿が王剣を杖にして立ち上がると、両手で王剣を構えた。

わたしも急いで立って、リカを背に庇って盾を握り直した。

パラケルススの視線はわたしたちを通り越して、リカに向かっている。

「——無礼を詫びます、カルデアのマスター。私は貴女を見くびっていました。貴女は未熟だが、稀なる将来性がある。ゆえにこそ、私は悲しみを禁じえません。前途ある若き芽を、この手で摘み取らねばならないことに——」

パラケルススの手に短剣が現れた。あれは、アゾット剣だ。魔術師が一人前になる時に師から弟子に与えられる証の杖。魔術礼装としては初級品なのに、かのヴァン・ホーエンハイムの主武装だというのか。

「魔術師ふぜいが、剣士の真似事か？ 構えがちつとも成ってねえぜ、錬金術師！」

モードレッド卿の野次にも、パラケルススは眉一つ動かさず、静かにアゾット剣の切っ先をわたしたちに据えた。

その刀身の輝きに、わたしの二の腕をぞわりとしたものが駆け巡った。

あれを解放させてはいけない。

アゾット剣の刀身が淡く光を放ち始める。

パラケルススはさらにそこに、赤、青、緑、黄色の宝石を添えた。

宝石が刀身を囲んで回るごとに、魔力が集束していくのが分かる。解放させたらこの路地裏に添った家々は焼尽する。

——やらせない。

わたしは盾を地面に突き立てた。

「ソード・オブ三元素使いの——」

——守るだけの武器はいびつだ、と古代ローマで会った女王は苦笑いしていた。いびつでもいいじゃないか。わたしは、剣と盾なら、盾を選びたい。遠き日の我が故国の、勝利の女王。

「パラケルスス——魔剣！」

放たれた虹色の怒濤を、わたしは盾で受け止めた。

超高密度の光の螺旋が盾にぶつかった瞬間、不覚にもわたしは一步の後退を許してしまった。

冬木でアーサー王の聖剣を受けた時と同じだ。盾が耐えられても、聖剣レベルの威力でなくても、こんな小さな体では踏ん張りが効かない。効か、ない——？

そんなことない。どうして？ たったさっきまであんなにも重く感じられた虹色が、今なら押し返せると、四肢がそう叫んでいる！

わたしは肺の底から盾を開くスペルを吼えた。

「ロード仮想展開／カルデアス人理の礎!!」

光の怒涛が治まっていく。

視界が戻ってからふり返っても、立ち並ぶ民家に破壊の余波は及んでいない。

よかった。護れたんだ、わたし。ロンディニウムの人たちを護りきれたんだ。

ずしや、と尻餅を突いたのは、わたし——ではなく、リカだった。わたしは慌ててリカの肩を抱き支えた。

「リカ!? 大丈夫!」

「ごめ、なき……礼装の新しい、効果で……霊子譲渡……あたしのありったけ、先輩に……」

——さっき急に力が増したように感じたのは、だから。わたしじゃない。リカがくれた力だったんだ。

わたしは感極まってリカを抱き寄せた。

モードレッド卿が王剣を手にパラケルススへと歩み寄っていく。

問答はなく、呵責もなく、ひとひらの慈悲もなく。

モードレッド卿はパラケルススを一刀の下に、斬った。

「……………それでこそ、剣を持つ英雄です」

与えられた最期を、パラケルススは飲んで受け入れたように見えた。だって、彼は仮初めの肉体が崩壊していく中であって、笑っていたのだ。

「この世全ての悪を斃して、この世全ての欲に抗って、この世全ての明日を拓いてみせる者たちよ。貴女たちの行く手に、どうか……真な

る、光、を……」

パラケルススの全身が光にほどけるように消失した。

「何が『明日を拓いてみせる者』だ。オレはそんなんじゃないやねえぞ、ったく」

モードレッド卿は言い捨てながら王剣を霊体化させた。

満更でもないのでは？ とか口が裂けても言わない。言おうものならわたしが斬られる。

——剣を持つ者が明日を拓くのなら、盾を選んだわたしは今日の営みを維持するので精一杯だろうな。

霊基が再臨したわたしは右の腰に剣を装備している。抜こうと思えばいつでも抜ける。でも、ここまで一度も抜剣しようという気にならなかった。人を直接傷つける武器を握る勇気がなかったただけかもしれないけれど。

『『人生は歩く影が如く、哀れな役者に過ぎぬ』——悪くないものを見せていただけました』

あ。

シエイクスピア……さん。パラケルススとの戦闘に必死で、彼の存在が頭からすっかり抜け落ちていた。というか、よく付いて来られましたね？

「吾輩が目にしたのは一端だけですが、かの魔術師殿、なかなか良い結末に見えました」

「バカ言ってるな。気のせいだよ、それは。——盾公、一度ジキルのアパルトメントへ戻るぞ。どうせリカはもう歩けねえ。負ぶさつてやれ。夜明けも近い。哨戒はここまでだ」

「あ……すみ、ません」

リカはしゅんとした。そんなに落ち込まないでいいのに。あなたがくれた力のおかげで、わたしはパラケルススに押し負けずにすんだんだから。

目の前ではモードレッド卿とシエイクスピアさんが、付いて来るないやいや行きますと侃々諤々。まあ、きつと、またジキル氏に同居人増員のお伺いを立てねばならなくなるだろう。

よいせ、つと。わたしはリカをおんぶして立ち上がった。

ロンドン8

わたしたちはモードレッド卿の提案通り、ジキル氏のアパルトメントに帰還した。

「立て続けに走り回らせてすまない。みんな、ありがとう。お疲れ様。しばらくは休息に専念してくれ」

「それがそもいかなかった。ジキル。ヘルタースケルターが群れで襲ってきた」

——帰途でわたしたちはヘルタースケルターに遭遇した。

襲ってきたヘルタースケルターは一機ではなく複数。連戦だった。ヘルタースケルターは量産が効かないと思つて動いていただけに、ちよつとしたショックを受けた。

わたしたちの報告を聞いてジキル氏も険しい顔をした。

「おそらくは魔霧計画の主導者の一人、『P』ことパラケルススを斃したためだろう。敵は君たちを脅威であると認識し、魔霧から現界した英霊を確実に手にすべく戦力を増強した。そう考えるべきだろうね。でも、そこまでして彼らが求める英霊とは一体……」

「知らん。考えるのはお前の仕事だ」

モードレッド卿は甲冑を消してインナー姿になるなり、一人掛けのソファアーに体をどかっと投げ出した。まさに投げやり。………こほん、失礼しました。

「……そーだ。考えるっていやあ、それしか能の無い穀潰しが二人に増えたんだっけか」

モードレッド卿、そうやってソファアーに丸まって足だけパタパタさせていると、まるで猫のようですよ。

「呼んだか?」

「お呼びですかな!?!」

「……オレとしたことが手前でアークを開けちゃった。盾公、パスだ」「レシーブします。ドクター・ロマンへ」

《人生でこれほど無茶振りなレシーブは初めてだなあ。しかもこれ、ルールに則るならパス返し許されないよなあ。——いいとも。見事

アタックを決めてみせよう。そこな物書きキャスター二名。モードレッドの言ったアークだが、ウチのマシユはつい先だつての特異点でまさにアークの実物を拜んできたばかりだ》

ちよ!? それはアタックではなくデッドボールでは!? しかも味方へ!

ああ、アンデルセン先生が無言で紅茶とスコーンを持ち出されて、完全に取材態勢ですつ。もうわたし、先生が満足するまでネタを吐くしかなくなつてしまいました!

《リカ君はこつち。一晩中、外にいたからね。魔霧の影響がないかバイタルチェックしようね》

「は、はいです、ドクター……先輩。あたし、ちよつと外し、ます」「フオーウ、フオーウ」

最後の砦をも奪われたく〜!

——徹夜で歩き回つて戦つたのに、拠点に帰つてからは、憧れの作家先生が拜聴する前で有名な劇作家さんからの質問攻めに遭い、休憩は取れず、一睡もできず。デミ・サーヴァントなので健康に害はないのが唯一の救いだ。

……いや、唯一、ではないか。少なくとも、わたしが話している間、リカは眠れた。

あの子は生身の人間だから、睡眠は欠かせない。ドクターの行為は、リカの体調を慮つてのことだった。

さて。わたしたちが外を哨戒中、居残りのアンデルセンさんは、ある考察をしていたという。

曰く、『聖杯戦争』という魔術儀式に引つかかるものがある、とか。しかし、資料が足りないため判断がつかず、思考実験は行き詰まっている。

行き詰まっているというなら、わたしたち実働部隊も変わらない有様だ。ヘルタースケルターが大量発生した現状、外での長時間活動と戦闘はいたずらに魔力をすり減らすだけだ。幸い、敵が注力している

のは魔霧の発生だけで、建物を破壊して回ったりはしていない。正直に言つて、手詰まりだ。

「では、こういうのはどうだ。ヘルタースケルター的大量発生中ではあるが、俺の考察を裏付けるための資料を集めるといのは。要はお使いだな。体力のあるお前たちには持つて来いの仕事じゃないか？」
《あれだけ大量のヘルタースケルターの間を縫つて移動するのは大変そうだけど……》

アパルトメントに籠城しても事態は好転しない。目下の事態への対応ではないが、できることがあるならやるほうが建設的だ。うっかりひよっこり、現状への対策のヒントくらい出てくるかもしれないし。

「行き先は——魔術協会、『時計塔』かな」

《あ!! つと、ええと、そう! 魔術協会が健在なら、当然、ジキル氏が連絡を取り合つてると思つてただけ》

「話す必要がなかったからね」

「リージェントパークからウエストミンスターにかけての地下にあるとかいうのか。オレが現界して、ジキルと会つてすぐに始めたのがこの現場確認だ」

——モードレッド卿とジキル氏は、大英博物館にある魔術協会への入口へ赴いたが、入口が瓦礫で塞がるほどに、大英博物館は完膚なきまでに破壊されていたという。今にして思えば、魔霧計画の首謀者たちが反抗の芽を潰したのかもしれない。

しかし。瓦礫であれ廃墟であれ、資料は魔術師たちが強固な守りを施しているはずだから、大英博物館へ行つてみるという方針は変わらなかった。

魔術協会の魔術師たち……せめて協会内に籠城して魔霧の被害を逃れた人が、一人でもいいのだけだ。

「ウ……ウ?」

「ごめんなさい、フランさん。せつかく教えてくれたのに。ちょっと先輩たちとお出かけしなくちゃ。魔術協会から帰ったら試してみましよう? いい……かな?」

「ウ、ウ」

フランさんはごくごく頷いた。

「セイバー。よくよく俺たち、ひ弱なキャスターを守るように」

「そういうのはその盾公に言っとけ」

「え？ ええと……」

「よし、僕も行くからね！ 出発だ！」

——あれ？

今一人、名乗りを挙げてはいけない人物が混じっていたような……つてジキルさん!?

「何いきなりトンデモ抜かしてやがる teme だ!？」

「魔術協会跡地の探索だよ？ 碩学たる者、知的好奇心が疼かないわけないじゃないか」

「おーまーえーなー！ そもそも生身の人間のお前は、魔霧が充満してる外には出られねえだろうが!」

「それがそうでもないんだな、これが。ね、リカ？」

どうしてジキル氏はここでリカの名を挙げるのか。

たくさんの人とサーヴァントに注目されたリカはというと、フランさんとお話し中だった。

リカ自身は注目されるのが何故か分からないようで、首を傾げている。

「リカが魔本を用いて、防護魔術をかけた外套を貸してくれるそうさ。その外套を着ていけば、短時間だが僕でも魔霧の中で動き回れるようになる。これまでセイバーには外を散々駆けずり回ってもらったんだ。これくらいの手伝いで帳尻が合うとは思われないけれど、手伝えることがあるならやらせてほしいんだ。だめかな？」

「あー、もう！ 分かった。オレはもう一切口出ししねえ。仮に魔霧に当てられてぶっ倒れても拾ってやらねえからな！ そこら辺は弁えて付いて来いよ」

「もちろんさ。それに、僕だっていざという時には役に立つさ。『奥の手』もあるからね。それに、きつと君たちが守ってくれるだろう？

頼りにしているよ、セイバー」

モードレッド卿が顔を赤くした。照れていらっしやるようだ。まあ、確かにそういう方面には疎いからなあ、彼女。

ロンドン9

……戦果報告。

ヘルタースケルターの襲来を切り抜け、廃墟と化した大英博物館へ辿り着き、地下の魔術協会跡地に潜ったわたしたち。

大当たり。それはもう大当たりだった。アンデルセン先生ご所望の資料はしっかり現存していた。

資料本そのものは結界のせいで持ち出せなかったが、アンデルセンさんがその場で読んで暗記した。

アンデルセンさんの速読中、書齋の外にいたわたしたちは、魔本に似たエネミーやヘルタースケルターとの防衛戦を強いられ、しかもジキル氏のとんでもない変貌を目撃したが、うん、収穫はあった。

と、いうわけで——ここはアパルトメントのジキル氏の部屋。

「諸君らの尽力である疑問が解消された。改めて礼を言う。マシユ、そしてサー・モードレッド」

「お、おう」

モードレッド卿、顔、赤いですよ。卿の性別には触れませんが、そういう初心な表情は殿方に見せないほうが身のためかと思えます。現に、ほら。

「懐が寂しいので一ペンスの謝礼も出せないが、そこはこの考察で相殺してほしい」

「うん、楽しみだよ、ミスター・アンデルセン。体中の筋肉痛も気にならないくらい」

見よ、ジキル氏のあの目が笑っていない笑顔を。モードレッド卿に厚意的だと思っただけ、まさか、「その意味」でアンデルセンさんに敵意を飛ばしているんじゃないよね？

「では。一刻も早く安静になるべきジキル氏の容態を考慮して本題に入ろう」

そしてアンデルセン先生も確信犯でジキル氏を煽り返した。

「結果は読み通りだった。降霊儀式・英霊召喚とは、もともと七つの力

を一つにぶつける儀式らしい。決して呼び出した英霊同士で競い合わせるものじゃない。聖杯戦争の元になった『英霊召喚』は“一つの巨大な敵”に対して、“人類最強の七騎”を投入する用途の儀式だった”

アンデルセンさんは少し長い話をした。

——英霊とサーヴァントの相違点。召喚儀式の難易度と、その難易度を補い後押しする人外の“何か”。「英霊召喚」と「聖杯戦争」はハッキリと別物の儀式であり、今までの特異点で召喚されてきたサーヴァントは、後者寄りのシステムによるもの。聖杯戦争という儀式への根本的な疑問——

「ええと、つまり?」

「儀式“聖杯戦争”には手本になったものがあるということだ。今はそれだけでいい」

さすがは世界三大童話作家、ハンス・クリスチャン・アンデルセン先生。実に研ぎ澄まされた観察眼だ。

「俺は英霊召喚のシステムに引っかけかかりを覚えたただけだ。仮に我々が一つのシステムによって呼び出された通常の^{クラス}霊基だとしたら——
—このシステムの元になった原典の七つは、一体どれほどの霊基を与えられていたのか、とな」

しん、と部屋が静まり返ったのは一呼吸の間のみ。

「この辺りの情報が、散逸して然るべき部分まで、ご丁寧に一か所に集めてあったのは偶然とは思えん。我々の訪れを予期して、そうしておいた『何者か』がいるんだろう」

アンデルセンさんは語り終えたようで、カップを取って紅茶を飲んだ。

「まー、そりゃいいんだが、なんつーかさ」

ソファーにあぐらを掻いていたモードレッド卿が、カラになったシールドのグラスを傾けた。グラスの中の氷が、からん、とぶつかった。

「ヘルタースケルターの多量発生って問題には、さして影響ないよな。それって」

「そ、それは……」

《ま、まあそうなんだけど……んん？ いや待てよ、待ってくれ。アレがこうしてこうなって、だからつまり……》

「ドクター？」

「フオウ？」

《そうだよ！ ヘルタースケルターはボくらには不明の技術で造られた機械だ。でも問題視すべきは技術体系じゃなかった。あれが、魔力で形成された機械だという点だ！》

ど、どういふことなのか、わたしにはさっぱりなのですが。この方面に明るそうなジキル氏も困り顔だ。

《要は、あれは宝具なんだ。魔力によって編み上げられた、力あるカタチ。ヘルタースケルターはそれそのものが宝具で、宝具の所有者が生産、稼働させている。いわばリモコンで動くロボット軍団さ。リモコンの持ち主、つまり宝具の所有者であるサーヴァントを叩けば、ヘルタースケルターは一斉に停止する》

「何だ、一気に話が見えてきたじゃねえかつ。あとは件のサーヴァントがどこにいるかだな」

リモコンの持ち主に該当するサーヴァントの探し方。魔力の痕跡を辿ることは、魔霧の影響でできない、とドクターは告げた。ジキル氏もお手上げ。うーん、どうしたものか……

「——先輩」

ん？ って、ひゃあ?! り、リカと、フランさん？ 二人してキツチンから顔の半分を出して、こつちをじゅつと見つめて。まるでわたしたちの誰かが気づくのを待っていたような目。絵面がホラーだよ……

「ヘルタースケルターのリモコンがどこにあるのか、分かりますよ」

——今、何と？

「正確には、フランさんが分かるそうです。辿れるそうですよ、魔力の痕跡」

「そ、そうなの？」

リカはフランさんと揃って、こつくり、頷いた。

「それ知ってたんなら先に言えよ!!」

「……………」

「ウ。ア、ア、ウア」

ぐ。確かに、フランさんの言う通り。リカかフランさんがそのことを申告する前に、魔術協会行きを決めたのはわたしたちだけでもっ。

とはいえ、そうと分かれば行動開始。

帰ってきたばかりだけど、さっそく外に出てリモコンを潰しに行こう!

…………と、元気いっぱいにアパルトメントを出発したのはいいのですが。

「どうした、盾公。浮かない顔して」

「——モードレッド卿。わたしに宿った英霊はギヤラハッドなのでよね」

「ああ。そこは間違いねえよ」

「彼の宝具になりうるエピソードを、何かご存じないですか?」

「いや、知らねえな。てかアイツ、円卓に来てさして経たずにキヤメロットを出てったからな。例の聖杯探索で」

「ああ……そういえばそうでしたね」

「何だ。宝具の真名までオレから聞き出そうとしたのか?」

「…………はい」

恥を知らない? 承知の上。だって、せつかく彼の真名が分かったのに、わたしはそこで二の足を踏んでいる。

このままでいるわけにはいかない。もっと強くないといけない。わたしはあの子の「先輩」だから。「先輩」として、「後輩」を護れるだけの力を備えないと。

「ばーか。きつとお前のほうが盾公より強いぞ」

「え…………?」

「マシユはギヤラハッドよりめっちゃくちゃ強い。オレが言うんだから間違いない。宝具でハンドつけられてるだけで、他の部分は負けてな

い。——そうだよな!? リカ!

フランさんと一緒に前を歩いていたりカが、素っ頓狂な悲鳴を上げた。

「え? えっと、その……あ! 先輩はかっこいいですよ。あたしにはもつたいたないくらい魅力的な人だと、思います」

か、かっこいい。かっこいいと来たか。いや不快ではないんだけど、あの子に言われると、照れる。

「先輩は最初からかっこよかったですけど、真名を知ってから、もつともつとかっこよくなってる。きつと今の先輩なら、あたしがいなくても困りません。だから、先輩、あたしが——」

続く言葉を聞くことはできなかった。

駆動音だ。わたしたちみたいな騎士が走る弾みで甲冑がぶつける不協和音とは違う。完成された機械の足音、とでも言うのか。力強い前進。近づいてきている。

ついに霧から出た「それ」の全容が明らかとなった。

「聞け。聞け。我が名は蒸気王、チャールズ・バベツジ。有り得た未来を掴むこと叶わず、仮初めとして消え果てた、儚き空想世界の王である。貴様たちには魔術師『B』として知られる者である。この都市を覆う『魔霧計画』の首魁が一人である」

「……本当に宝具の所有者まで一直線に案内してくれたわけだ。敵の親玉とは予想してなかったぞ、くそ」

それぞれに王剣と盾を構えたわたしたち——に先んじて、フランさんが前へ出たかと思うと、わたしたちからバベツジを守るように両腕を広げた。

フランさんは言っている。「戦わないで」「彼はこんなことをする人じゃない」「何かの間違い」——

決定打だ。フランさんはバベツジを知っている。彼の人格を把握している。だから、彼女はバベツジを庇おうとしている。

「これでもあたしだって、フランさんと色々お話してたんですよ?」

リカは自嘲めいた笑みを刷いてこちらをふり返った。あなたでも、そんな顔すること、あるんだ——

「フランさん、ヘルタースケルターの由来をとつくに知ってたんです。もし自分が案内した先に、本当にチャールズ・バベツジがいたら？ 本当に敵に回っていたら？ 私はどうすればいいの——って、かわいそうなくらい不安がつて。だから、あたし提案したんです。一直線に会いに行こうって。会わないと、話もできませんから。フランさんの気持ちが決まるまで、あたしはヘルタースケルターの正体を知った上で黙っていました。——先輩。怒りますか？」

——怒れるわけないじゃない。

わたしはフランさんの悩みに気づかなかった。誰も彼も気づいてあげられなかった。そんな中で、リカだけが、ずっと言い出せないでいたフランさんの不安を見抜いた。

それに引き換え、わたしがフランさんにしたことは何？ ヴィクター博士の屋敷から無責任に連れ出して、それから何もしてあげなかった！

わたしは、盾を霊体化させた。

「怒らないんですね。……ごめんなさい、先輩。卑怯な後輩で」

フランさんはバベツジと相對している。バベツジと戦う前に、せめてフランさんとの對話の時間を。そのくらいしかわたしにはできなかった。

「Interlude」

チャールズ・バベツジ。私はあなたを知っている。あなたは私を覚えていますか？

「おお——おお。忘れるはずもなきヴィクターの娘。そこにいるのか、お前は。可憐なる人造人間よ」

あなたはこのような所業をする人ではなかったはず。それが、どうしてこんなことをしているのですか？ 人の世に発展と幸福をもたらすために硯学を追い求めたあなたが、どうして？

「そう、だ——私は、我らは、硯学たる務めを果たさねば。我らは人々と文明のためにこそ在るはずだ」

もしあなたにこの非道を強いている者がいるのなら、どうか教えてください。私とその者を誅しますから――

「ゆえに……グツ!？」

バベツジ!？」

「これ、は……アングルホダ、の、介入か……! 組み込んだつ、聖杯……『M』が、この私、さえも……!! ヴィクターの娘……逃げ、ろ……!」

いいえ、いいえ! しっかりして、バベツジ――!

「――もういい、フラン」

「Interlude out……」

モードレッド卿は、フランさんに重々しく告げた。

「お前は言うべきことを言ったし、あいつはあいつで応えた。よくやった。だが、こういうこともある。想いが届かず、刃で決着をつけざるをえない。そういうことも、な。あるんだよ」

――彼女は笑いながら、どんな切なさを言葉に込めたのだろうか?

モードレッド卿が王剣を手に実体化させた。わたしも盾を実体化させて地面に突き立てた。

バベツジ氏との対話はもう不可能だ。今の彼はわたしたちを襲うだけの大型機械。

組み込んだ聖杯の影響、とバベツジ氏は言った。聖杯から直接の執行命令を解呪なんてできない。戦って止めるしかない。

わたしはフランさんを窺った。

フランさんは両手でドレスの裳裾をきつく握り締めて――頷いた。

ロンドン10

わたしとモードレッド卿はバベツジ氏との戦闘を開始した。

《二人とも！ 魔力波形を解析するに、彼の鋼鉄の鎧はおそらく宝具かスキルによるものだ。様子見なしで全力で叩くんだ。でないとかダメージが中まで通らないものと思ってくれ！》

「了解……!!」

落ち着いて。落ち着くのよ、わたし。

敵はサーヴァントとはいえヘルタースケルターの大版型。戦い方の要領はとつくに掴んでいる。

——ヘルタースケルターは人間が操縦するロボではなかった。宝具の担い手であるバベツジ氏にもこの法則が適応されるから、あの鋼鉄鎧のヒトガタがそのままチャールズ・バベツジ本人と思われる。

「リカー！ フランさんを連れて先に行つて！」

「はい先輩つ。——フランさん、こつちです」

ヘルタースケルターより精密に設計された巨大な腕を、バベツジ氏は振り上げた。

わたしは巨腕によるチョップを盾で防いだ。モーションが大きい分だけ次のアクションが予測しやすい。

防いだ分だけ、あえて下がる。少しずつ方向を変えて、バベツジ氏の攻撃を受け流す。

このまま広い表通りまで誘導するのだ。路地裏では狭すぎて、モードレッド卿が宝具を解放することになった時に余波が出てしまう。

バベツジ氏が振るったドリルみたいなハンマーを受け止める一瞬、わたしはあえて軽くジャンプした。

わたしはハンマーを防ぎながらわざと吹き飛ばされて——よし！ 表通りまで誘導成功！ 着地！

待つてましたと言わんばかりに、モードレッド卿がわたしを越えて高く跳び出た。

「ドタマがち割つてや、らア！」

モードレッド卿は落ちる勢いも併せての斬撃をバベツジ氏に見

舞った。山高帽子じみた頭部鋼殻は、王剣の兜割りでリサイクルの空
き缶みたくひしゃげた。

スチームパンクでロボットじみた外見でも、頭部へのダメージはそ
れなりに痛手のはずだ。

そう、思ったのに。

「——デイファレンス・エンジン、起動」

バベツジ氏は呆気なく普通に立ち上がった。そして、あろうこと
か、蒸気をロケットのように噴射して——

「飛んだあああああ?!?!?」

わたしとモードレッド卿はパニックになりつつもそれぞれ反对方
向に離脱した。

ずどん！ と、ハンマーが、彼自身の鋼鉄が、地面を陥没させた。

二の腕がぞわつとした。あれをまともに食らったら、盾が平気でも
構えるわたしが圧壊しかねない。

「盾公！ 防げ！」

反対側のモードレッド卿が王剣を大上段に振り被っている。王剣
の刀身からはすでに禍々しい魔力が噴き上がっている。

防げって、まさか、卿のクラレントを防御しろと!? 無茶振りにも

程がある！

「我が麗しき——！」

ええい、ままよ。

わたしはリカとフランさんに駆け寄った。二人とも、意地でもわた
しが護るんだから。

冬木のキャスターさんに言われたことを意識するのよ。外敵を阻
むのではなく、背中にいる大切な誰かを護ることを意識する。

盾よ、開け！ 是は誉れ堅き我が雪花の壁——！

「——父への叛逆!!」

迸る赤雷がバベツジ氏を飲み込んだ。

赤黒い血色の奔流はそれだけでは止まらない。わたしたちをも食
らわんとして迫ってくる。

「や、あ、ああああああッ！」

わたしは盾をありつただけの魔力でコーティングして、クラレントの赤雷を受け止め、弾き返した。

わたしが反射した赤雷と、モードレッド卿が王剣から放つ赤雷が、ちようどバベツジ氏を中心点としてぶつかり合い、空高く駆け上がった。

——そう、か。モードレッド卿が「防げ」と言ったのはこうするためだったんだ。

わたしの盾と彼女の剣による相殺で、二重にバベツジ氏に王剣の燦光を浴びせてオーバークイル。さらには光線を上に反らして周囲一帯への被害を出さない。

——戦いのさなかにあつて、この一瞬のシチュエーションを編み上げる発想力。そして、実行に移す決断力。

今さらながらにわたしは、モードレッド卿こそがこのロンディニウムを守護するために召喚された騎士なのだと思ひ知った。

「……シテイの地下へ、行くがいい」
バベツジ、さん……

蒸気機関の鎧は一欠けらずつ剥げていく。蒸気機関による世界躍進を望んだ夢の住人が、消えていく。

「地下鉄のさらに深い、奥底……そこに魔霧計画の首魁が在る、だろう……都市に満ちる霧の、発生源、我が発明……巨大蒸気機関「アングルボダ」……聖杯は、動力源として、設置……」

フランさんが無言でバベツジさんに歩み寄った。

「……すまぬ、ヴィクターの娘。お前の声は、聴こえていたが……」
フランさんは首を横に振って、再びバベツジさんを見上げた。

「……私の夢を叶えなかつた世界であつても……隣人^{あなた}たちの世界を、終わらせよう、とは、思わ、な……」

バベツジさんの仮初の肉体がエーテルへとほどけて、消失した。
……もし、わたしがバベツジさんの立場であつたら。

わたしは未来の世界を恨むだろうか？ それとも、この世界もまた善し、と受け止めるだろうか？

そんな、益体もない疑問が、浮かんだ。

地下へ潜ったのは、わたしとリカとフォウさん、それにモードレッツ
ド卿だ。フランさんは事前にアパルトメントに送り届けた。

迷宮の様相を呈する隧道を、わたしたちは手探りで降りていった。
広くて複雑な地下道。国家の秘密事業の痕跡か、魔術協会のしわざ
か。とにかく厄介な不動産物件があったものだ。

「地面の下に地下鉄つてのがあるとは知ってたが、まさかさらに『下』
があるとはな」

それに加えて魔霧の濃度。一階層下へ行くほどに濃くなっている
気がする。今の所、リカとフォウさんに不調は見られないけれど。

この地下通路だが、カルデアのライブラリにはデータがないため、
ドクター・ロマンにナビゲートしてもらおうことができない。

わたしたちの足で探索して、マップを埋めていくしかない。

この地下空間のどこかに、魔霧の発生源がある。聖杯を炉心にした
という巨大蒸気機関アングルボダがあるはず。

ゾンビやスケルトンといったエネミーが発生する時は、事前にモー
ドレッド卿が気づく（そのたびに探知速度で負けたとドクターが悔し
がる）。おかげで暗い中でもある程度は先手を取れる。

それに、いよいよ視界が利かなくなれば、リカが魔本を用いて火を
熾して、通路一帯を照らしてくれた。

「……今、何層目だ？」

「四層目です。さつき階段を降りましたから」

「深くまで来たなあ。これ、上がるの相当面倒じゃないか？」

そうだなあ。サーヴァントのわたしたちはいいとして、リカは
（フォウさんを抱っこして）ここまで休憩なしで（文句一つなく）歩い
て来たから、体力の消耗が大きい。

よしっ、帰りはわたしがリカを負ぶさって登ろう！

それから何層降りたのか――

わたしたちはついに地底に着き、巨大な空洞に出た。

冬木の大聖杯があった地下空洞に極めて似ている。地形も、それに空気の魔力の濃さも。

この大空洞のずっと奥で、蒸気を大量に噴出しているドーム、あれがきつとアングルボダだ。巨大、という一点においては名が体を表している。

あの機械から動力源である聖杯を取り外せば、魔霧は止められる。わたしたちは全員でアングルボダに向かって歩き出した。

近づいて――わたしは、アングルボダの前に一人の男が立っているのに気づいて、立ち止まった。

男がわたしたちをふり返った。

「奇しくもパラケルススの言葉通りとなったか」

わたしは盾を構えてその男と対峙した。こんな場所に平静で立っているんだから、真つ当な人間ではない。きつとあの男こそが、バベツジさんが最期に言い残した計画の首魁――！

「これは我らの悪逆の形ではあるが、希望でもある。ここでお前たちの道行きは終わりだ。善は今、我が悪逆によって駆逐されるだろう」「ほとほと御託が好きだな連中だ。語るな。ここで終わるのはお前の命だ」

「――あなたが『M』ですか？」

「そうだ。我が名はマキリ・ゾオルケン。魔霧計画における最初の主導者である。この第四の特異点を完全破壊するため、魔霧による英国全土の浸食を目指す、一人の魔術師だ」

魔術師？ 何かのクラスのサーヴァント、ではなく。まさかこの男、生身の人間!?! バベツジさんを従えていたマスターなの!?!

「この時代を完全に破壊し、人理定礎を消去する。それこそが、我らが王の望みであり、我らが諦念の果てに掴むしかなかった行動でもある」

また、だ。レフ・ライノールも、イアソンと王女メデИАもちらつかせていた存在。

彼らの黒幕。多くの英雄に聖杯を与えて命運を狂わせた何者か。

同じ黒幕が、マキリの背後にいる？

「アングルボダはすでに暴走状態へと移行した。都市に充満させた魔霧を真に活性化させるに足る、強力な英霊が、これより現界するだろう」

「させるかよ。お前を殺して、アングルボダを叩き壊す。オレでないくせにブリテンを蹂躪するお前を、オレは決して許さない」

モードレッド卿は王剣を実体化してマキリに突きつけた。

「ならば最後の英霊を目にすることなく死ぬがよい。破滅の空より来たれ、我らが魔神——」

大空洞の濃密な魔力大気が、竜巻のようにマキリに一点集束していく。人体に納まりきれない膨大な魔力が、内側から肉色に弾け飛んだ。

この、光景——知ってる。わたしは知っている。

挽肉が際限なく湧き出て、柱となって天を目指して屹立する。

魔神柱の顕現——！

『七十二柱の魔神が一柱。魔神バルバトス。これが、我が悪逆のかたちである。我が醜悪の極みを以てして——消え去れ！ 善を敷かんとする、かつての私の似姿たち！』

ロンドン11

魔神柱を見るのはこれで三度目だ。もう驚くものか。最大限に警戒はするけどね！

そして、つい先ほどの地上での戦闘経験が、この魔神柱バルバトスをワンターン・キルする必勝法を教えてください。

「モードレッド卿、向かいに回ってください！ もう一度アレをやりましょう！」

「おっしや！ タイミングはそつちで上手く合わせろよ！」

わたしとモードレッド卿は背を向け合って駆け出した。

わたしたちが盾を、剣を、手にして構える位置は対角線上。魔神柱を中心に挟んで反対側。——バベツジさんとの戦いではぶつつけ本番だったけれど、今は心の準備も仮想道具の準備も万端だ。

「カツ飛ばすぞ盾公！ 我が父を滅ぼす邪剣の雷、見事受け切ってみせろ！ 我が麗しき父への叛逆ツ!!」

迫る赤雷の奔流。それは魔神柱を焼き尽くすことを目的としない。貫通してわたしの盾にぶつけるまで保てばいい。だからわたしはこの盾で受け止めて、弾き返して、ぶつけ合って高め合う!!

「仮想道具／人理の礎!!!」

展開した守護円陣が王剣の赤雷を真正面へ反射した。

相反する方向からぶつかり合った赤雷は、中心点に在る魔神柱の根元でぶつかり合い、螺旋を描いて魔神柱を縦に貫通した。

肉柱を構成していたピンクのぶよぶよした物質が、煙を上げながら融けて崩れていく。

その上に仰向けで倒れているのは、マキリだ。——魔神柱に与えたダメージは核となった人間にも伝わることは、今までの戦いで判明していた。だとしても、何度見ても胸が痛む光景だ。

「先輩っ」

「フオウー！」

フオウさんを肩に乗せたり力がわたしに駆け寄ってきた。

「先輩、お疲れ様……でした」

「うん。リカたちは大丈夫だった？ 何ともない？」

「はい」

「フオウ」

「よかった。じゃあ——」

残る仕事は、あの巨大蒸気機関アングルボダから聖杯を取り出すだけ。それで第四の聖杯探索は完了だ。

わたしはリカたちと一緒にモードレッド卿に合流しようとした。

「……もう、遅い……ロンドンに充ちた魔霧の量は、すでに、十分に……」

っ、マキリ!? 何てしぶといのか。まだ息があるのは分かるとして、明瞭に意識を保って、肘で体を起こそうとするだけの余力があるなんて。

「さあ来たれ、我らが最後の英霊よ……汝、狂乱の檻に囚われし者、我はその鎖を手繰る者——三大の言霊を纏う七天！ 抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ!!!」

モードレッド卿が駆けつけて、マキリの背中に王剣を突き立てた。マキリは一度だけ血を吐いて、うつ伏せに沈黙した。今度こそ彼も終わり……だと思いたい。

《マシユ、リカ君！ サーヴァントが来るぞ！ 魔霧が召喚陣や残りの呪文を代替したと思われる。サーヴァント反応が、魔霧の発生地点にいながら明確に探知できるほどだ。魔力反応、極めて増大！ 来るぞ!》

アングルボダの前に烈しい紫電が落ちて、弾けた。文字通り落雷が爆発した。

魔力が爆ぜた余波でリカがフオウさんを抱えたまま吹き飛ばされた。

「きやああああああ!!」

「フオウフオウ!!」

わたしは急いでリカの体をキャッチしたが、それでも足りず、わたしはリカを抱えたまま岩壁にぶつかって頽れた。

見れば、反対側ではモードレッド卿さえも同じ有様だった。

背中を強く打って咳き込んだわたしに、リカが抱きついた。それで背中の痛みが引いて呼吸が楽になった。リカ、治癒してくれたんだ。わたしは紫電が落ちた地点を見やった。あそこに立つのが、マキリが最期に召喚した——いいや、魔霧計画の関係者全員が求めたサーヴァント。

男だ。ファー付きのマントを羽織ったスーツの、壮年の男。近代寄りの英霊かもしれないが、上半身を半機械化しているから即断はできない。正体の考察は難しい。

確かなのは、男は強靱な意思力を宿した眼光を、微かな狂気に曇らせていることだけだ。

「私を、呼んだな。天才にして雷電たるこの身を呼び寄せたものは、何だ？ 叫びか、願いか。善か悪か。なるほど——今こそ、それらの全てが私を呼びつけたか。このニコラ・テスラを！ なかなか面白。碩学たちが揃いも揃って私を呼ぶか！ ならば良かろう！ お前たちの願いのままに、天才にして雷電たる我が身は地上へと赴こう！」

ニコラ・テスラは高らかに哄笑してから、地上への道へ悠然と歩み出し、そして去った。

リカが立ち上がり、モードレッド卿へと走った。リカはモードレッド卿に断り、彼女の背中に手を添えた。——あれでモードレッド卿は、わたしのように背中に負った衝撃はもちろん、ここまでの戦いで蓄積した微細な傷も癒えただろう。リカならそこまで完治させられる。

わたしは盾を杖に立ち上がり、遅ればせながらモードレッド卿とリカのいるほうへ向かった。

合流するなり、リカが潤んだ瞳でわたしとモードレッド卿に告げた。

「先輩。モードレッドさん。お二人でテスラを追いかけてください。あたしが一緒だと足手まといです。だからお二人だけで……」

リカの言い分は——間違つては、いない。
サーヴァントのわたしただけのほうがテスラに追い上げる確率は高い。

でもそれはここにリカを置き去りにするという意味でもある。

わたしはリカを見つめ返した。

琥珀色の両目は「行つてください」と言葉より雄弁に訴えてくる。

——リカはリカなりにできることをしようとしている。そこには、自分が邪魔だからという卑屈さも含まれているけれど、同じだけ冴えた足し引きがある。

「盾公。行くぞ」

「——はい」

わたしはモードレッド卿と元来た道へ走り出した。

『Interlude』

我ながらこの身の生き汚さには感心する。

魔神柱の依代となり、敵セイバーに斬られ、ニコラ・テスラ召喚の余波で落盤に巻き込まれ、なお、マキリ・ゾオルケンは健在だった。

……いや、健在、と言うには語弊がある。せいぜいが「存命」だ。魔力はもちろんだが、自ら起き上がって歩くだけの活力さえ残っていない。

ここで朽ちることを半ば受け容れた時——その少女は現れた。

少女はサーヴァントたちを先にテスラ追跡に向かわせ、自身は私の傍らにしゃがんだ。何だ？ 引導でも渡すつもりか？

少女は私の傷口に手を当てた。

徐々に歪みゆく少女の顔色。驚かずにはおれなかった。少女はこんなデタラメな魔術で私の傷を治癒し始めたのだ。

「何故——助ける？」

「お願いしたいことがあります」

少女は私の手を両手で持ち上げて握り包んだ。

「テスラを召喚したのはあなたですよね？ お願いです。あのサー

ヴァントを令呪で止めてください」

「……不可能だ。彼を呼んだのは魔霧そのもの。私の詠唱はきつかけに過ぎない。その証拠に、この通り、私には令呪が宿っていない」
「そ、んな」

「事実だ。分かったならその魔術を止めるがいい。骨折り損で死に体になりたくはないだろう」

少女は一度だけ目線を横に流し、再び私を見据えて治療を再開した。

分からない。私を治した所で少女には見返りも報酬もない。少女の行為は徒労だ、無為だ。何故やめないのかが私には理解できなかった。

すると少女は苦笑した。

「傷ついた人に優しくするのは当たり前のこと、ですから」

私の体が完全に修復されてから、少女は立ち上がった。

へリカ君。少しそのまま。回復術式のスクロールを流し込むから。キミ、自己回復はできないだろう?」

「すみません、ドクター。お手間を取らせます」

少女の肉体を外側からの魔術が補強してから、少女は踵を返した。

「まあ。マスターさんたら、その汚れた服のままマシユたちを追いかけるの?」

「え? あ、ナーサリーちゃん」

『マスターさん。本を開いてちょうだいな。頁をめぐってちょうだいな』

少女はリュックサックから出したハードカバー製本を開いて、ただどしく紙面をめくった。

『読み上げて』

「えつと……」『くるくるくるくる回るドア。行き着く先は鍋の中』——あ——

『はい! これでアナタはいつも通りの元通りなのだわ』

「ごめんね、ナーサリーちゃん」

『ダメよ、マスターさん。こういう時に、ごめんなさいは要らないのよ』

？』

「ごめ……あ、き、気をつけます。ありが、とう」

『どういたしました、マスターさん』

今度こそ走り出そうとした少女を、私は、呼び止めた。

戻ってきた少女に、私は、魔霧計画の賛同者が使用していたルートを教えた。地下隧道を追いかけて上がるよりはずっと早く地上へ戻れるだろう。

少女は私に無言で一礼して、肩に白い使い魔を乗せて、走り去った。

——さあ。せつかく拾った命だ。私も逃げる算段をすらしよう。

[Interlude out:]

ロンドン12

わたしとモードレッド卿はサーヴァントとして出せる全速力で、テスラを追って隧道を駆けていた。

——ニコラ・テスラが自動的に周囲にもたらす強力な雷電は、瞬時に魔霧を活性化させる性質がある、とドクター・ロマンは解析した。つまり、テスラが地上へ至れば、ロンドンの魔霧は爆発的に拡大してしまう。被害はロンドンに留まらず、ブリテン島全域に及ぶ。

幸いにしてテスラは徒歩で移動している。この地下の天井の壁を破るか、今のわたしたちみたいに全速力で地上を目指すかされていれば、詰んでいた。その点を鑑みるに、テスラにかけられた狂化は完全ではないらしい。

でも——戦いが避けられるかといえ、そう甘くは行かないのが現実だ。

「来たか！ 未来へ手を伸ばす希望の勇者たち」

前方を歩いてきたテスラが立ち止まり、わたしたちを悠然と顧み

た。「残念ながら私は君たちと戦わねばならん。何せ今の私という存在はそういうふうに出てくる。それに、だ。せつかくの力ある現界だ。前々よりの構想を実行に移そう」

すると急に、隧道の空気が肌をチリチリと刺すようなそれへと変じた。

《まづい！ 魔霧が、人間ならゆうに死に至る電気を帯びている！》

「曰く、これが魔霧の活性というものだ。サーヴァントの魔力さえ際限なく吸い込もう。無論私は例外だ。接近すれば、活性魔霧は君たちの魔力も吸収する！ 霊核ごと取り込まれることもありうるが、さて、それでも近づくかね？」

な……なんつって厭らしい手を打ってくるの！ 本人と渡り合う前には、まず魔霧をどうにかしないといけないなんて。

「要は霧を吹き飛ばせばいいんだろ。簡単だ」

「モードレッド卿？」

「魔力を吸収するって話なら、ま、全力でやってもどうにかなるだろ。……てか今さらだが、マスターなしにこうもバンバン連発して、よく平気でいられるよなオレ」

モードレッド卿の手に王剣が実体化した。モードレッド卿は王剣を大きく振り被つて――

「我が麗しき父への叛逆!!」

王剣の真名解放による赤雷は、隧道を一直線に駆け抜けた。肌を刺していた刺々しい空気が変わった。

そう、か！ モードレッド卿はあえて王剣を解放することで、その魔力を活性魔霧に食わせたんだ。

とはいえ、永遠に魔霧が消えたまままでいてくれるとは考えにくい。迅速にテスラを仕留めなければ！

「埒は明けた！ ブツ飛ばせ、ギャラハツド！」

「はい!!」

――この瞬間。

――呼んだ側にも呼ばれた側にも、違和感ひとひらは、一片もなかった。

わたしは盾の表面に魔力を集中して、テスラにぶつかつた瞬間に解き放つた。

これまでに何度も頼つた荒技。スキル「魔力防御」を応用した瞬間的な反発力で、対象を吹き飛ばす戦い方。

テスラにも通用した。テスラは大きく後方へ吹き飛び、幾度か地面を転がってから止まつた。やった――！

完全に油断しきつていたわたしを、モードレッド卿を、紫電が襲つた。

「ガハッ!？」

「きやああつ!!」

感電したわたしたちは、その場に片膝を突いてしまった。

――しまった。ニコラ・テスラといえば電気文明のパイオニア。雷電を身に纏うだけでなく、操ることもできたのか！ これは勝利を

焦ったわたしたちのミスだ……！

テスラは威風堂々に立ち上がった。

「分かるぞ。実際に目にしたことはなくとも感得した！ 今の力、紛うことなきクラレント。ならばそこなる騎士はモードレッド、“地”に属する旧き英霊か！ ——ははははははッ！ 哀れなりし旧き英霊たち！」

……押し殺している弱気が顔を出しそうだ。

さっきの一撃はわたしにとって結構な全力だった。それを、テスラはああして何もなかったかのように佇んでいる。

テスラが機械化した右手から雷電を放とうと——

「先輩！ モードレッドさん！」

「フォーウ！」

リカとフォーウさん……？ 追いかけてきたの？ あの険しい隧道を独力で？

すると、テスラが左手の雷電を自ら握り潰した。

「では此度の余興はここまで！ この天才は改めてロンドンの空へ向かうでしょう。ああ、うむ。しかし本来、私は人類を愛する英霊でもある。ゆえに——そこなる人間よ、君には伝えておこう。地上へ出たのちにこの雷電が向かう咲は、魔霧の集束地帯、およそバッキンガム宮殿の上空だ。そこで私が一撃を加えることで、ロンドンの魔霧は活性状態となる。もしも君たちが諦めないのであれば、私を止めてみせろ！」

「言いましたね？ ……あたしは、自分でもイヤになるほど、諦めが悪いんですから。そう、だから……何度希望を裏切られても、期待するのをやめられないの——」

「ふ——ならば私を追うがいい！ か弱くも歩みを止めぬ勇者よ！」

テスラはスーツを翻して、魔霧に紛れるようにして去った。

くっ——すぐにでも追いかけたいのに、感電のショックがまだ体に残っていて、わたしもモードレッド卿も立ち上がれない。

リカがわたしに触れようとした。治癒するつもりだと分からないほど、わたしもにぶくない。

《待った！ 地上に新しく二騎のサーヴァント反応を確認した！ すごいな。このタイミングで、魔霧を触媒にカウンター^のサーヴァントが召喚されたようだ。マキリたちが斃れた今、彼らが敵対することもない。増援だ！》

「……………まさか」

モードレッド卿が傍目にも分かるほど顔色を蒼くした。

彼女が「まさか」と言うからには、我々が騎士王の推参に思い至ったからとしか考えられない。

「ドクター。その二騎のクラス判定は？」

《ごめん。そこまでの探査は、魔霧の影響がまだ強くて無理だった》

モードレッド卿が無言で立ち上がった。

「モードレッド卿……………」

「何て顔してんだよ、盾公。らしくねえぞ。——安心しな。オレは逃げない。もしオレの想像がビンゴなら、オレのやることは一つ。あの時の兜を被って『あの人』に挑むだけだ！」

——想いが届かず、刃で決着をつけざるをえないこともある。モードレッド卿自身が告げた言葉。

分かりました。卿が二度もそう言うのでしたら、『僕』は止めません。

わたしも盾を杖にして立ち上がった。

「先輩。あつちにマキリたちが使ってた道があります。あたし、その道を通ったんです。元来た道よりずっと短くて登りやすく造られますから、あつちで地上へ上がれば……………」

考えてみればそれは充分に想定しうる話だった。マキリもパラケルススもバベツジさんも一角^{ひとかと}の魔術師^{キャスター}で、おまけに聖杯を所有していた。そんな彼らだから、地上と地下直通の近道くらい作っていたっておかしくない。

「よっしゃ。上手く行けばテスラに先回りできる」

「リカ、案内してくれる？」

「はいっ。こつちです」

地上へ出るなり、顎を外しかねない光景を目にしてみました。

紫電が天へ向かって大階段を形成している。

バッキンガム宮殿の上空なんて簡単に到達できるわけがない、このわたしの目算は呆気なく崩された。い、いくら電気使いとはいえここまでやっていいのか、ニコラ・テスラ！

でも、驚いたのはそれだけではない。電気の階段の近くにいた、二騎のサーヴァントに対してもである。

男女一組。片や、斧を持つ、サンングラスをかけた金髪マッチョな男性。もう片方の女性は、アタランテさんのように獣の耳と尻尾を備えている。その形状は狐そのものだ。

「ドクター。あのお二人は？」

「ああ。彼らが例の二騎だろう。クラスはキャスターと……え、バーサーカー？」

わたしたちに気づいて声をかけたのは、男性のほうが先だった。

「おう。アンタらか。奴が言っていた勇者だ何だったのは」

「勇者かどうかはどうでもいい。それよりお前、奴と一戦交えたみたいだな」

テスラと、一戦交えた!? わたしたちは活性魔霧を剥がして一撃がようやくだったのに。そこなバーサーカーさん、手練れのハイサーヴァントとお見受けしました。

「とりあえず、厄介な霧は全部引き剥がしておいたぜ。あとは丸投げっつーか、オイシイところは譲るっつーか……オレは、休む。ふー……」

狐耳のキャスターさんが呆れたように溜息。

「そりゃあ、あれだけ魔力を吸収されながら戦っていたら、疲労困憊、天人五衰は当たり前です。ですがお見事と耳を掻きましよう。さすがの頼光四天王。胆力まさに天を衝く、でございました」

「そつちも援護、感謝な！」

サングラスの彼は、狐耳のキャスターさんの前でどかつと腰を下ろした。

「あとは追いついて叩き斬るだけか。よっし、このまま奴を追うぞ盾公、リカ！」

ふとそこで、顔をこちらに向けた狐耳のキャスターさんと、リカの、目が合った。

狐のキャスターさんは信じられないものを見る目でリカを凝視した。

「？ あの……」

「——、いいえ失礼。よく似た顔立ちの者を知っていたので、ついまじまじと見つめてしまいました。どうぞ、お忘れください」

気にはなるけど、今はそうしている暇も惜しい。サングラスの彼が言うことが本当なら、今のテスラには、活性魔霧の鎧はない。わたしやモードレッド卿でもまともに戦える！

闇と霧にまぎれてテスラの姿は視認できないけれど、階段を登って行けば会敵するはず。

途中で階段を構成する魔術が途切れたら、とか思っちゃだめよ、わたし。ぞつとしてとても進めなくなっちゃうから。

わたしは紫電の階段に足をかけて、一呼吸、ダツシユで駆け上がった。モードレッド卿も、リカ（とフォウさん）もそうした。

テスラは——、——いた！ バツキングダム宮殿上空へ徒歩で移動している。

彼が帯びていた活性魔霧は確かに無かった。だったら、このまま追い上げる！

「来たか。やはり君たちは新たな神話を築かんとするか。だが哀しいかな不可能だ。活性魔霧がなくとも私の操る雷電はあまりに強力だ。新たな電気文明、消費文明を導きしエネルギー！ 旧き時代と神話に決定的な別れを告げる、我が雷電！ さあ、君たちにもご覧に入れよう。——人類^{システム}神話・雷電^{ケラウノス}降臨！！」

ロンドン13

テスラ撃破後、わたしたちは地上へ戻った。すると、まるで図ったように紫電の大階段は消失した。

わたしたちは再び地下に潜って、どうにかアングルボダから炉心として埋め込まれた聖杯を取り外した。わたしは取り外した聖杯を受け取って、それをリカとフオウさんに見せて、ひとしきり喜びを交わした。

これで第四特異点はじきに修正されるだろう。

ジキル氏とフランさんにはドクター・ロマンから成功の連絡を入れてもらった。お二人はわたしたちを忘れるとしても、直接お世話になつたお礼を言いに行けないのはそれにて許していただく。

「お疲れさんだ、盾公、リカ。お前たちのおかげであれこれ助かったぜ。ロンディニウムは救われた。オレ以外の誰かに蹂躪されることはなかった。めでたしめでたし、だ。じゃあな」

「はい。ご協力ありがとうございました、モードレッド卿。あなたの指南を忘れません」

あとはレイシフトを実行してもらって、カルデアに帰還すればミッシヨン・コンプリート。

何だかんだと、アパルトメントから駆けつけたアンデルセンさんとシェイクスピアさん。そして、こちらに加勢すべく地下まで降りてきてくださった、坂田金時さんと玉藻の前さん。くす、今回は賑やかな終わりになりそう。——そんなふうな気を緩め切った時だった。

《みんな気をつけろ！ 地下空間の一部が歪んでいる！ 『何か』がそこへ出現するぞ！ サーヴァントの現界とも異なる謎の現象だ！》

え……どう、したの？ 何の異常もないのに、このひどい寒気は何なの!?

「フオウ！ フォーウ！」

「先輩……？」

リカがわたしを支えようと腕を回した。わたしは堪らず、リカを片腕で抱き寄せた。杖にしてごめんね、リカ。でも、そうしないと立つ

ていられないの。

莫大な圧力を惜しみなく撒き散らす「何か」が、出てきた。

「下らない。実に下らない。やはり人間は、世代を重ねるごとに劣化する」

《ああくそ、シバが安定しない、音声しか拾えない！ どうした!? 何が起きたんだ、マシユ!》

「わ、分かりませんっ。人影……らしきものが、ゆっくりと歩いてきて」

金時さんが斧を担いで前線に出た。

「下がってな、レディs。ありやあヤクいぜ。真つ当な娘っ子が直視していいモンじゃねえ」

「オイ、何だこのふざけた魔力は。竜種どころの話じゃねえぞ。これはまるで——」

「無尽蔵の魔力。存在するだけで領域を押し潰す支配力。まさに神に等しい！ というか神そのもののような気さえます！ そうだな、我が友アンデルセン？ 我々そろそろお暇したほうがよろしいかと！」

「貴様はどうしてそう大袈裟なんだ。俺が怖いのは編集の神だけだ。……まあ、逃げの一手には賛成だが。まさか『本命』がこの段階でやって来るとはな」

「無様にも、無惨にも、無益にも生き延び、決定した滅びの歴史を受け入れない——カルデア。私の事業に唯一残った、私に逆らう愚者の名か」

ついに——そう、ついに。 “それ” はわたしに視認できる域に入ってしまった。

赤と白の典礼服。浅黒い肌。水銀色の髪。実体として目に見えるほどに放射される、どす赤い魔力。

震えている——場合じゃないでしょう、マシユ・キリエライト！

わたしは「先輩」なんだから、リカの前に立って奴からリカを護らな

いとだめでしよう！ だから、お願い——動いてよ！ わたしの足！
「あなたが、今までの人たちが言っていた『王』……なのですね」
わたしが使い物にならないから、じゃないだろうけど、一番にリカ
が口火を切るほどには異常事態だった。

「——よからう。その浅知恵に免じて聞かせてやろう。我は七十二柱
の魔神を従え、玉座より人類を滅ぼすもの。名をソロモン。数多無象
の英霊ども、その頂点に立つ七つの冠位の一角と知れ」

ソロモン、と名乗った。

紀元前10世紀に存在した、古代イスラエルの王こそ己であると、
宣告した。

《ソロモン、だって……？ こんな、こんな馬鹿なことが——！》

リカが地下空洞のあちこちを見やる。

「小娘、私の召喚者を探しているならば、それもまた浅知恵だ。私は人
間に召喚されない。私は死後、自らの力で蘇り、英霊に昇華した。英
霊でありながら生者である。ゆえに私の上に立つマスターなどいな
い」

リカは言葉にならない小さな喘ぎを上げて、口元を両手で押さえ
た。

「私は私のまま、私の意思でこの事業を開始した。この宇宙で唯一に
して最大の無駄である、お前たち人類を一掃するために。私にはその
手段があり、その意志があり、その事実がある。すでにお前たちの時
代は、時間を超える七十二柱の魔神によって滅び去った」

《いや、待て、でも！ あれらはボクの知識とはあまりにも違う！ ソ
ロモン王の使い魔はあんな醜悪な肉の化け物じゃ……！》

「哀れだな。時代の最先端にいなから、貴様らの解釈はあまりに古い。
魔神は受肉し、新生した。だからこそあらゆる時代に投锚する。我が
真価たる宝具は、天に渦巻く光帯。あれこそは我が第三宝具
『誕生アの時スきたれりア、其デは全ルてを修サめるもの』。即ち、対人理宝具であ
る」

そ、んな。そんな途方もないスケールで、ソロモンは人類を焼き
払ったの？

「そちらの質問には答えた。次はこちらの番だ、カルデアの生き残りよ」

ソロモンの眼光がわたしたちに向いた。

わたし、こんなのと戦うの？ 戦って——勝てるの？

《マシユ、しつかりするんだ！ 心を保って、しつかり敵を見る。どんな相手であれ、敵はサーヴァントだ。なら勝機は必ずある！ キミに宿った英霊は聖杯に選ばれた聖者だ。英霊の格は決してソロモンに引けを取らない！》

「——ハ。英霊の格だと？ そんなものが基準になると本気で思っているのか、貴様らの司令官は」

ソロモンが邪悪な笑みを刷いて、両腕をローブの下から出した。両手の十指には、指輪。ソロモン王の伝承に曰く、神より与えられた全知全能の天恵。

「もはや私が気に留めるのは、娘、その盾を持つ貴様のみだ。さあ、楽しい対話を始めよう」

殺しに来る。逃げられない——戦わなければ生き延びられない。わたしも、リカもフォウさんも、ここにいるサーヴァントみんなが！ 盾よ、開いて。わたしは死にたくないし、リカや皆さんを死なせたくない。だから。

シールドエフェクト、発揮。スキル「自陣防御」を最大火力で展開。わたしの味方の陣営を護る！

「薄いな」

ソロモンがわたしに向けて気だるげに手を向けた。それだけだ。たったそれだけの所作で、わたしが展開した防壁は砕け散り、同時に、サーヴァントたちの霊核が爆ぜた。

わたしはその場に膝から崩れ落ちた。

シェイクスピアさん、金時さん、玉藻の前さん。わたしの力不足で死なせてしまった！

「先輩……！ しつかりしてくださいっ、先輩！」

モードレッド卿がわたしたちの前に駆け込んで王剣を構えた。こんなにも緊張したモードレッド卿の背中を「僕」は見たことがない。

「テメエ、一体どうなつてやがる！ 英霊としての格より、出力そのものが違う——！」

「貴様が今口にした通りだよ。英霊としての格ではない。霊基の格が違うのだ。——王殺しの英霊モードレッド。貴様は特に念入りに燃やすとしようか」

「またもソロモンが気怠げに腕を上げる——あ、ああ——！」

メルヒエン・マイネスレーベンス
「貴方のための物語!!」

モードレッド卿の輪郭を黄金色の光が隈なくなぞつた。けれどその黄金色はソロモンが一手を指しただけで弾けて蛍火となつて消えた。でも、殺されたサーヴァントたちとは違って、モードレッド卿は生きている！

「ふざけているな。一度防いだけでこれか」

歩み出たのはアンデルセンさんだ。彼は渋い顔で、小さな手に余るサイズの本を閉じた。

「ふん。肉体労働は嫌いだな。——だが、おかげさまで読めたぞ、ソロモン。貴様の正体、その特例の真実をな」

「ほう？ いいぞ。語ってみよ、即興詩人。聞き心地のいい賞賛ならば楽に殺してやろう」

「ああ。とくと聞くがいい、俗物め」

アンデルセンさんの行動は時間稼ぎか。それとも、わたしたちにもソロモンの真実を聞かせるためのものか。

——どちらであっても、この場からの逃亡なんて許されないし、不可能だ。なら——わたしだけは一言一句逃がさず聞き届けないと。作家アンデルセンが命をかなぐり捨てて綴る遺稿を。わたしは彼の愛読者だから。

「我らが個人に対する兵器なら、貴様は世界に対する兵器。霊長の世を救う決戦魔術にて、霊長の世への大災害を討つべく呼ばれるはずの存在。その属性の英霊たちの頂点、グランド冠位の器を持つサーヴァント——」

「そうだ。よくぞその真実に辿り着いた！ 我こそはキャスターの中のキャスター！ ゆえにこう讚えるがよい——グランドキャス

ター、魔術王ソロモンと！」

グラウンドキャスター
冠位の魔術王は高らかに、己の正体を宣言した。

「さて——では褒美だ。受け取れ、即興詩人。五体を百に分け、念入りに燃やしてやろう」

思い返せば、この時が初めてだったかもしれない。ソロモンが明確な意思で標的を定めて魔術を行使したのは。

そう、思考が現実逃避するくらいには、アンデルセン先生の死に様と叫びは凄惨だった。

「凡百のサーヴァントよ。所詮、貴様らは生者に呼ばれなければ何もできぬ道具。私のように真の自由性は持ち得ていない。どう足掻こうと及ばない壁を理解したか？」

「っ——……、は。ここまで四つも聖杯を奪われて、何を偉そうに。どうせ、もう半分もこいつらにやられて、慌てて出て来たんだろう？」

負け惜しみにしちやあ、みつともないぜ……!?!」

「人類最高峰の馬鹿か、貴様？ 一つも六つも私には取るに足りぬ些事である。全てを獲得してようやく、なのだ。——では帰るか」

へ——帰る——って、言った？ わたしたちを殺しに来たわけじゃなかった、の？

「はあ!? テメエ、一体何しに来やがった！」

「単なる気まぐれだが？」

わたしもモードレッド卿も絶句するしかなかった。こいつは最初からわたしたちを見てもいない。ただ通りすがった、本当にそれだけなのだ。

ソロモンが踵を返した。

見逃された。生かされた。その現実には、心から安堵している自分がある。屈辱やみじめさを上回るほどに、生存できてよかったと——

「そうして燃やした人類を、あたしたちあなたは何に使うのですか？」

ちよ、リカ、何を言って……! せっかく脅威が去るっていうその寸前で!

「——意外な反応をしたな、人間。問いを投げるのか？ この私に、貴様らをどう利用するかを一から十まで解説しろと。ハッ、その問いに

答える義務が私にあるとでも?」

「答えが、つ、得られなくても……問うこと自体が、人としての義務だからッ!」

「小娘。人の分際で生を語るな。死を前提にする時点で、その視点に価値はない。オマエたちはこの3000年何をしていた? ひたすらに死に続け、ひたすらに無為だった。死を克服できないのであれば、死への恐怖は捨てるべきだったというのに。死を恐ろしいものだと認識するのなら、その知性は捨てるべきだったのに!」

ソロモンは本気で怒っている。でも、奴の怒りが人間の何に由来するものかが、わたしには分からない。

だって、死ぬのが怖いならそう知覚する脳と心を捨てて、ただの肉塊になれっことでしよう? そんな言い分、理性的にも本能的にも許容できるわけない。

「あまりにも無様だ。それはお前たちも同様だ。カルデアのマスターとサーヴァント。何故まだ生き続けようと継る。お前たちの未来には、何一つ救いがないと知りながら」

見くびらないで、と叫びたい。わたしは短命のものとして産まれたけど、この「わたし」を捨てたくはない。今日も生きている奇跡に感謝して、生きてきてよかったと想いながら「わたし」のまま死にたい。そういう生き方をしたいんだ。

「あまりに幼い人間よ。人類最後のマスターよ。これは私からの唯一の忠告だ」

「え……」

「お前はここで全てを放棄することが、最も楽な生き方だと知るがいい」

ソロモンは今度こそ大空洞から去った。

——見つけた。あたしの運命のひと。

その選択肢をあたしに堂々と提示した、初めてのひと。

あたしだけが楽になる方法を教えてくれた、優しいひと。

あたし、決めました。あたしはグラントオーダーを超えて、もう一度、あなたに会いにいきます。その時を思えば、この先に待つ三つの特異点なんて怖くありません。

どうか会いに行かせてくださいね——あたしの運命の、あなた。

ロンドン14

わたしとリカとフォウさん、それにモードレッド卿で、ロンドンの地上に出た。地下空洞に下りる時にはこの倍のサーヴァントがいたのに、と感傷的になりながら。

「ここまでだな」

モードレッド卿が唐突に立ち止まった。理由は明白。彼女の全身が光へとほどけて消失を始めたからだった。

「ナーサリー。お前も来い」

リカのリュックサックからひとりでに魔本が飛び出て、モードレッド卿の手に納まった。

「……………めんなきい」

「ばか、お前が謝るなよ。情けないのはオレだけだ。——でもまあ、ロンドンに救えたんだ。オレにしちやあ上出来だ」

——イギリスには揺るぎない神話がある。国の危機にアーサー王は蘇り、再び国を統べて災いを打ち破る。でも、実際に駆けつけたロンドンにウムの騎士は、叛逆のモードレッド。

「無念なのはここで終わりってことだな。本音を言えばお前たちに付いて行きたいが、この通り限界だ。元々、聖杯の霧で呼ばれたんだ。今回は消えるしかない。……悔しいが奴の言う通りだよ。オレたちと呼ばれなければ戦えない。それがサーヴァントの限界だ。時代を築くのは、いつだってその時代に、最先端の未来に生きている人間だからな」

最先端の、未来——

「だから、お前らが辿り着くんだった。二人で。オレたちでは辿り着けない場所へ。七つの聖杯を乗り越えて、時代の果てに乗り込んで。魔術王を名乗る、あのいけすかねえ野郎をぶっ飛ばす。それはお前ら二人にしかできない仕事だよ」

モードレッド卿……………わたしは、*「僕」*は……………！

「いつかまた会える。だから、またな！ マシユ、リカ！」

「はい……………」

「お世話に、なりました、モードレッドさん。——ナーサリーちゃん、ばいばい」

「フォーウー！」

モードレッド卿は魔本と共に笑顔で消滅した。

全サーヴァントがこの時代から退去した。第四特異点での任務が、終わった。こんな、物悲しい形で……

《あー、テスト。よし、やっと映像が繋がった。二人とも無事だね？ やり残したことはない？ ないね。ではレイシフト！ 任務達成、お疲れ様々》

意識が、存在が、この時代におけるわたしたちが、意味を失って、輪郭がほどけて——

……

……

…

意識を取り戻したわたしは、コフィンの中に横たわっていた。

コフィンから起きて外へ出ると、一番にダ・ヴィンチちゃんが出迎えた。

「お帰り。今回は無事とは言い難いけど、とにかく帰ってきてくれたよかった」

わたしと同じくコフィンから起き上がったリカが、頭を右へ、左へ。それからダ・ヴィンチちゃんを見上げ直して、小首を傾げた。

「ドクターは？」

「ああ。ロマニなら、あそこでへたれてる」

見れば確かに。管制席にいるドクターは、頭を片手で抱えて無言。

——あの人と付き合いの長いわたしは知っている。アレは相当にまずい落ち込み方だ。

実はあの人、弱音を吐いていればまだいいほうなのだ。ドクターが

無言レベルまで凹んだ時は一人にしてあげるのが、わたしの経験則なんだけど……

リカがコフィンから出て、小走りで管制スペースに入った。

「ドクター。ただいまなのです」

「うええ!? あわわっ、リカ君いつの間——って、そうか。レオナルドがやってくれたのか……ごめん。ピンチだったのはキミたちなのに。なんていうか、あまりのショックで……判断が遅れてしまって、本当にすまなかった……」

リカは穏やかに首を横に振った。さらさら、亜麻色の長髪が揺れた。

「ラスボスの正体が分かりました。色んな情報を持ち帰りました。強制レイシフトであそこからとつと逃げていたら、何も得るものは無かったですよ。——あなたの失敗には意味があったのですよ。ドクター・ロマン」

——わたしも、管制スタッフの皆さんも、開いた口が塞がらなかった。

原因は諸々あるが、わたしが一番度肝を抜かれたのは、リカがハキハキと物を言ったことだ。躊躇いがちで、自信がなくて、つつかえつつかえに口を利くのが、わたしの知る「いつものリカ」なのに。

「です。落ち込みたいだけ落ち込んで、自分を責めたいだけ責めてからで、いいです。いつまでかかってもいいです。それからいいです。また笑ってほしいのですよ」

——でも、そうか、何でもないことだった。

思ったことがあるなら、まず言え。わたしもあなたもモードレッド卿にそう叱られた。リカはそれを実践できるようになるのが早かっただけだった。

「——他でもないキミにそこまで言わせて、落ち込んでいるわけにはいかないな」

わたしとフォウさんも遅ればせながら管制スペースに入った。

ドクターは、とてもぎこちないけれど笑顔で。立ち上がって顔を上げた時には、司令官の貌をしていた。

「引き続きボクらは作戦を続けよう。残る特異点を修正して、世界と未来を焼却させない。——ブランドキャスター、魔術王ソロモンを名乗ったあの男が何をしようともだ」

『『はい！』』

スタッフさんたち全員が力強く了解した。

士気が高揚する中で、蟠りを胸に抱えているのは、きつとわたし一人だけ。

ロンドンで“彼”の真名を知ってから、どんなに思っても言葉にはできない猜疑心を持ち帰ってしまった。

——ねえ、ギヤラハッド。

あなた、まだここにいろなの？

混沌―暖かな木漏れ日の君― アメリカ1

情報が強制的に大脑に焼きつけられていく。文字の羅列がシナプスと同化しようとしているかのよう。

いいえ、同化なんて生易しいモノじゃない。これは、侵食だ。

■■の城■■■■■■の中心、■■■の騎士たちが座る■■■を盾として用いた究極の護り。

その強度は使用者の精神力に比例し、心が折れなければその城壁も決して崩れはしない。

かの護りの真名こそ、『■■■は■■■』――

やめて。お願いだから、これ以上、わたしを塗り潰さないで。

「出て来ないで――ギャラハッド!!」

…

…

………

飛び起きた。

――悪い夢を、見ていたようだ。

全身がじつとりと汗を掻いている。

力を抜いて、ぼふり、ベッドに寝転び直す。汗ばんだうなじに色素の薄い髪が貼りついた。

胸の谷間に両手を当てると、まだ治まらない動悸が伝わった。

「せんばい……?」

今ので、隣で寝ていたリカを起こしてしまったみたい。ごめんないね。

リカは心配げにわたしを見つめている。何でもないと答えないといけないのに、あの感覚をまだ覚えていたわたしはすぐに言葉を発せなくて。

先んじてリカがわたしの胸の谷間に顔をうずめた。

わたしも亜麻色の髪にすり寄った。シャンプーの香りが鼻をくすぐる。

わたしたち、このまま溶け合えてしまえばいいのにね。そうしたら、わたしもあなたも、不安なんて欠片も感じなくなれるのにね――

――デインドラン。またの名を「聖杯のヒロイン」。

詳しいエピソードが現代に伝わることにはなかったが、ギヤラハッドと融合したわたしは、聖杯探索における彼女の助力の大きさを知っている。

ギヤラハッドがアーサー王とは異なる意味で我が主と認めた、ただ一人の乙女。

――わたしに融けたはずのギヤラハッドが、それでもずっと呼び続けた名前。

――そして、わたしの顔色を心配げに窺う後輩に、あまりに似た長髪の面影。

「先輩」

リカがわたしに、バスタオルと着替えを差し出した。どれも丁寧に畳んである。

「汗がひどいです。このままじゃ冷えて風邪ひいちゃいます。シャワー、お先にどうぞ」

「……ありがとうございます」

わたしはタオル類を受け取って、個室に備え付きの小さなバスルームに入った。

服を全て脱ぎ捨てて浴室へ。シャワーのコックを最大にひねって、頭から冷水を浴びた。

――わたしはギヤラハッドじゃない。リカもデインドランじゃない。でも、もしかしたら。

どうしても思考はそこに引きずり込まれた。

わたしがリカを大切に想うのは、融合したギアラハッドがディンドランによく似たあの子を求めているからなの？

この温かい気持ちは、わたしから生じたものじゃなく、ギアラハッドの影響を受けているからに過ぎないの？

自分のことなのに、どれ一つとして否定できない。

こんなに、大好きなのに——！

中央管制室へ出頭してから、わたしの顔色を見咎める人はいなかった。わたし自身、あんなに冷水を浴びたのに、特に体が寒いとは感じないのだから、デミ・サーヴァント様々だ。

もつともそれは、今もわたしと手を繋いでいるリカの手のあつたかさのおかげもあるのだろうけど。

などと考えていると、ドクター・ロマンがブリーフィングを始めた。ドクターはロンドン探索で明らかになった事実を改めて確認した。

今回は管制スタッフのみならず、カルデア館内の残り少ないスタッフ全員が集合して聞いている。そのほうが組織全体で危機感を共有できるからだとか。

「引き続き、特異点を探索して人類史を修復するという方針は変わらない。問題は——」

「魔術王の対処、だろ？ グランドキャスター、魔術師の中の魔術師ときた。同じ天才として認めざるをえない。現状、探す手段も斃す手段も見当たらないなあ」

「頭を抱えたいのはみんな同じだよ。けど、やるべきことは分かっている。魔神の除去については、それを終わらせてから考えることにしよう」

話題は第五特異点へ切り替わった。

——今回の任務は、北米大陸。アメリカ合衆国、と呼ばれる超大陸だ。

魔術的には大して気に懸ける国ではないものの、人類史においてアメリカを外すことはできない。

「私的には、いつの間にか暗号を仕込んでいたことにされた国だな。描いている時にそんな余裕ないっつーの。あるとしたら、クライアントへの愚痴くらいだっつーの」

……ダ・ヴィンチちゃんからすれば、下手すると1000年くらい先には「無辜の怪物」スキルを付与されかねない種を撒かれたんですものね。目の仇にするのも領ける。

そんなアメリカにも独自の魔術体系があり、英霊たりうる偉人も実在する。

「ではレイシフトを開始する。マシユ、リカ君。準備を」

「はい」

わたしとリカ（と、フォウさんはリカに抱っこされて）は、一緒に専用のコフィンに入って身を横たえた。

次に目を覚ました時に目に映るのは、夜明けを迎えたばかりのアメリカ——…、…

………

……

…

意識を取り戻すと、のどかな森に立っていた。すぐそばに、フォウさんを抱っこしたりカがいる。うん、レイシフト無事完了。

「ここが1783年のアメリカ大陸——」

「正確には、『アメリカ合衆国』はまだ生まれていないんだけどね」

「そうなんですか？」

「ええ。歴史上は、この1783年に終結する大英帝国との独立戦争を経て、アメリカは国家として成立するの。その功罪はどうあれ、世界史において絶対に欠かせない国家であることは間違いなし。となると」

「独立戦争でアメリカが勝てなくて、アメリカが独立できなくなるようにする、とか」

「そういう可能性はあり」

ただ、アメリカが独立の意思表明をした以上、独立戦争の勝敗程度で歴史の流れは変わらない。30〜50年のタイムラグが生じるくらいだ。

「すまない、着いた早々、緊急事態だ！ その先の荒野で、大規模な戦闘が発生している！ これはちよつと普通の戦いじゃないぞ!?!」

大丈夫です、ドクター。慣れたとは言えませんが、ここまでの旅を経て腹は据わっています。

「リカ、行ける?」

リカは首を縦に二度振った。

わたしたちはドクターのナビに従って走って、森を抜けた。

なるほど、荒野だ。ウエスタン映画でよく観た荒涼の背景がそのまま現実として目の前にある。サボテンやら朽ちた馬車やらがいかにもそれらしい。

戦っているのは、兵士らしき格好の人たちと――

「先輩、あっち！ バベツジさんがいます！ いっぱい！」

「落ち着いてリカ、バベツジさんはあんな信号トリコロールのカラフルボデイじゃなかったわ！」

《二人ともが落ち着こうね》

「フオウウ……」

すいません。悪ノリしました。

もう片方の勢力に目を凝らす。ずばり、ステレオタイプのレトロチック。世間一般に浸透したドワーフのイメージ像に武器を持たせたような外観の兵団だ。

――ふいに、風切り音がした。近づいてきている。

「ミサイル!?! ……ほどじゃないけど、危険な飛来物であるのは間違いない。デミ・サーヴァントのわたしが平気でも、生身のリカは――

“僕のデインドラン。ただ一人認めた我が主人”

こんな時なのに、いや、こんな時だからか。頭の中にギヤラハツドの想いが響いた。

護らないと。

「仮想展開／ロード人理の礎!!」

盾を中心に守護円陣を疑似展開した。

降って来た砲弾と榴弾は円陣に当たって空中で爆発した。わたしにもリカにも届かなかった。

「大丈夫だった?」

「はいっ。ありがとうございます、先輩」

「当たり前よ。だってわたしはリカの先輩なんだから」

そう。これはわたしの意思。わたしの中に融けたギヤラハツドは関係ない。ない、はず、なのよ。

《マシユ、リカ君! 東からサーヴァントの反応だ。数は2騎。共にランサー判定!》

わたしは気を引き締めて盾を構え直した。

そのわたしたちの前に現れたのは、赤と黄の双槍を持った精悍な男と、同じく槍を片手に持ったゴージャスな金髪の男。どちらもサーヴァントだと分かった。

「王よ。見つけましたぞ。彼女がサーヴァントのようです。戦線が停滞するのも無理はない」

「さすが我が配下デイルムツド・オディナ。君の目はアレだな。そう、諭えるなら隼のようだ」

「滅相ありません。我が君……フィン・マツクルの知恵に比べれば、私など」

デイルムツド・オディナにフィン・マツクル。どちらもケルトのフィニアン・サイクル第二神話時代に頭角を表した絶世の槍使いじゃないの。

「では戦おうか。我らフィオナ騎士団の力を示し、この豊穡たる大地に永遠の帝国を!」

「——リカ。何があってもわたしの後ろにいて。離れちゃだめだからね」

「フオウウ……」

「分かりました。先輩がケガしたら全部あたしが治します。思いきり前に出てください」

「ありがとう。先輩、頑張るから」

深呼吸一つ。わたしは盾を強く握って飛び出した。

苦戦はしたが、負けることもなかった。

わたしだつてここまで四度の探索で強くなってるんだから。デイルムツドの双槍の効果が少ない厄介だったことを除けば、それなりに奮戦したと自分でも言つていいと思う。

現に、フィンとデイルムツドは撤退を表明したのだから。

敵が完全に戦域を離脱するまではと、気合を緩めず盾を構えていたわたし——を素通りして、フィンはわたしの後ろにいたり力に目を向けた。

「ああ、その前に大事を忘れていた。けなげな少女マスターよ」

「あたしですか？」

「君はこれからもさういうふう^に戦うことを決めているのかな？」

「——戦います。先輩と一緒に、いつか世界を救います」

「よい眼差しだ。今にも折れんばかりなのに気品高い。王に刃を向ける不心得はその眼に免じて流そう。その代わり、君が敗北したら、君の心を戴こう！ うん。要するに君を嫁にする」

……ぶっちん、と。

堪忍袋の緒的なものが、わたしの中で大きな音を立てて切れた。

「この……」

ああ、フランス以来だな、これ。

「セクハラサーヴァントおおお!!!」

大上段からの盾振り下ろし——を、フィンはむかつくくらい華麗に避けた。

「実に気持ちのいい約束だ！ ではさらば、さらばなり！」

フィンは意気揚々と、デイルムツドは気苦労をありありと滲ませて、一目散に東へ駆け去った。わたしの脚力では追いつけない迅速な

撤退だった。

「リカ!! 大丈夫!?!」

「は、はい! どころも何ともありませんのですつ。さっきの変な約束も特に何も感じてませんのです! ……だって」

リカは恥じらいを浮かべながらも、わたしを、まっすぐ見た。

「あんなチャラチャラした槍使いに先輩が負けるとか、ありえませんか」

——そうよ。誰があんなチャラ男サーヴァントに可愛い後輩を渡すものですか。この子の伴侶は、この子一人だけを誠実に愛し抜いて、この子をどんな危難からも守れる男じゃないと、このマシユ・キリエライトが許さないんだから。

「それじゃあこれからの進路だけ——ドクター。この近辺はどういう状況にあるのでしょうか?」

《さっきのサーヴァントたちが撤退した方角に陣営があるなら、反対側にも同じような軍隊が駐留しているはずだ。生命反応……が、かなり多くその座標に集まっている。大まかな進路はキミたちから西》

「了解です。西へ向かってみます。道中のナビをお願いします」

《ああ。任された。そう遠くはないから、日が暮れる前には到着できるだろう》

「リカ、歩ける?」

「足は元気です」

「じゃあ、二人で歩いて行こうか」

「フオウっ、フオフオウっ!」

「ごめんなさい。二人と一匹で歩きましょう」

アメリカ2

斜陽の谷間——中規模の軍事キャンプに、わたしたちは辿り着いた。

「ここ、アメリカ軍、でしょうか」

「うーん」

それにしても武器や弾薬のたぐいが見受けられない。代わりに、寄せ集められた背囊の中には、びっしりと未使用の包帯が詰まっていた。別の背囊にはガーゼやテープ。色んなラベルを貼った瓶。クツシヨン材の上に綺麗に並べられた注射器の束。鋏によく似た、けれど少しずつ形状が異なる、何に使うのかよく分からない道具類——

「もしかして、医療キャンプ？」

外にせよテントの中にせよ、負傷兵が多すぎるのだ。あのレトロチックな戦士たちにやられたんだとしても、異常な負傷者数だ。仮にここをピンポイントで敵軍に襲われたら一溜りもない。

すると、布の色が異なる大きなテントから、初老の男性が出て来て、負傷兵たちに番号を割り振り始めた。番号を告げられた負傷兵は、いくつも構えられたテントの中のそれぞれに向かっていった。怪我をした兵士はお互い支え合いながら。

男性の目が、ふと、わたしに留まった。

「おや、お嬢ちゃんみたいなのも新兵に駆り出されたのかい？」

そうではない。誤解されないためにも、初対面の人には挨拶が欠かせない。

「いえ、わたしはこの兵士ではありません。名をマシユ・キリエライトと申します」

「り、リカですつ。こんばんは」

「これはご丁寧に。私はラツシュ。ベンジャミン・ラツシュという。このキャンプの軍医をしていたんだが……」

ベンジャミン・ラツシュといえば、独立戦争にも軍医として従軍した大物だ。そんな人物がいるということは、こちらはアメリカ独立軍なのかもしれない。

「——『していた』？ 過去形？」

「ああ。ある日突然、赤い軍服の看護師が現れて、お鉢を取られてしまった。このキャンプの救護体制を一から十まで徹底的に組み直して、自身も負傷兵の看病をしているんだ。彼女が現れてから、キャンプの死亡者は劇的に減った。さぞ名のある衛生兵なのだろうが……今はあそこの重傷者用テントで一睡もせず兵士の治療を続けている」
妙に引つかかる物言いだ。赤い軍服の女性衛生兵。覚えておきましよう。

「あの、他のテントに行つた兵士さんたち、は？」

「ああ。怪我人が絶えないんだが、彼女一人では一気に全員治すこともできないからね。いわば待合室みたいなものだ」

「——行つてもいいですか？ あたし、ちよこつと医療の知識があるんです。何かお役に立てるかも、しれ、ないです」

何となく、リカはそう言い出す気がしていた。

リカの最も得意とする魔術は、治癒。知識どころではない。本来なら魔術は秘匿すべきもののだが、特異点探索で秘匿なんてしていたらキリがない。

「構わんが……割とスプラッタだ。大丈夫かい？」

「慣れてますから。でも、あんまり重傷だと、あたしじゃどうにもできないから、その、一番軽傷の方がいるテント、教えてほしい、です」

ラッシュ医師は、キャンプの一番隅のテントが比較的軽傷の兵士が休む所だと教えてくれた。そして何故か、衛生面にはくれぐれもくれぐれも！ 注意するようにと、真剣にリカに言い含めた。

リカが目的のテントに向かった。わたしもリカを追おうとしたが、そこでドクター・ロマンから通信が入った。

「どうしました？」

《サーヴァント反応をキミたちの直近に観測した。今度は一騎だけだ。マシユ、近くにそれらしき存在はいない？》

わたしは神経を研ぎ澄まして、ぐるりと負傷者キャンプを見回した。——捉えた。ラッシュ医師が重傷者処置用と言っていたテントの中から、サーヴァントの気配を感じる。

わたしは意を決してそのテントに向かった。

布をめくって中に一步入った——と同時、爪先1センチの地面に銃弾が炸裂した。

「——、へ？」

「治療中に不衛生な状態で割り込まないでください」

撃ったのは、血が飛び散ったエプロンを着た、赤い軍服の女性だ。だってその手に拳銃を握っている。

「清潔にしていれば感染症は防げます。そのためには衛生観念を正すことが必要なのです。ですので、そこを一步でも踏み込めば撃ちます」

二度目の銃撃。弾丸はわたしの耳をストレスに飛んでいった。さー、と遅れて血が引いたわたしである。

「ふ、踏み込んでいません！」

「踏み込みそうな目をしました」

理不尽だ。

「あの、あなたはサーヴァント、ですよ？」

「そんなことは関係ありません。召喚された以上、私は私の力が求められていると考えます。私の力とはすなわち治療。サーヴァントであるうがなかるうが、ここで全力を尽くすのみです。分かったならどきなさい。次の患者が来ます」

困った。会話が成立しない。

わたしが立ち尽くす間にも、彼女は負傷兵を（やや強引に）治療した。

負傷兵が、うわ言のように、「あなたは天使ですか？」と口にした。「天使とは美しい花を撒く者ではなく、苦悩する誰かのために戦う者。貴方が苦悶し、それでも戦いを選ぶ限り、私は此処にいます」

——その格言、知ってる！ 看護師という職種の祖、またの名を「クリミアの天使」。

「フロレンス・ナイチンゲール……！」

「人の名を用もないのに呼ばないでください」

「わたしたちに協力してください。特異点を修正しなければ——」

「愚かなことを仰らないでください。目の前に患者がいます。私が動く理由はそれだけです」

やっぱり通じない。でも粘れ。がんばれ、わたし。

「彼ら全てを治療する手段がある、と言ったら？」

「……今、何と？」

よし、食いついた。

「よろしいですか、婦長。通常の戦争であれば、犠牲者の数はどこかで歯止めが利きます。しかしこれは通常の戦争ではありません。敵は最後の一人が死ぬまで戦い続けるでしょう」

「患者は増え続ける、と言うのですか」

「はい、残念ながら。だからこそ根幹を断つべきなのです」

意味は正しく伝わったようだ。ナイチンゲールさんは反論しないで考え込んでいる。

やがてナイチンゲールさんは、エプロンと三角巾を外した。

「少々お待ちください。ドクター・ラッシュに患者への対処法を引き継ぎして参ります」

や、やった！ 説得成功だ。

コミュニケーションに大いに問題があるサーヴァントでも、仲間を一人増やして戦力をちよつとだけでも上げられた。

「フオウ、フオフオウ」

足元にフオウさんがいつの間にか来ていた。リカと一緒にじゃなかったんですか？

噛み癖のないフオウさんには珍しく、わたしの踵を噛んで、どこかへ引つ張ろうとしている。

もしかして——リカに何かあった？

全身の血の気が引いた。

わたしは、先に駆け出したフオウさんを追いかけて走った。

何が起きたかは知らないけど、まずあの子を一人にするんじゃないかった。わたしはリカの先輩でサーヴァントなのに、リカから離れ過ぎた。

到着したテント。わたしは入口の布を勢いよくめくった。

「リカツ!!」

「あ、先輩」

負傷兵が大勢横たえられたテントの中。リカは顔を輝かせてわたしをふり返った。

リカは普通に元気そうだ。

わたしは肩透かしを食らった。我ながらとんだ取り越し苦労をしてしまった。

「ちよつと待つてくださいいね。——はい、終わりましたよ。もう痛みませんか?」

「はい…ありがとうございます……」

リカが治療した兵士の傍らから立ち上がって、わたしの前に小走りにやって来た。

「先輩はどこか具合悪いところありませんか?」

「ええ。元気よ」

「よかったです」

「そう言うあなたは大丈夫なの? こんなに大勢の人に一気に治癒魔術を使うのなんて初めてでしょう。反動で疲れたりしてない?」

「倒れない程度には加減して使いましたから。それに今回はこれ。アトラス院の礼装だったんで、普段よりむしろ楽なほうでした。すごいですねこの礼装! 色んな回復効果が付与されて」

リカは明るくしゃべっているけれど、顔に疲労が滲んでいる。負ぶさってあげたほうがいいのかな——

考えていると、銃声が一発、キャンプに鳴り渡った。

何事もなかったかのようにナイチンゲールさんが合流した。

「お待たせしました。行きましょう」

「……今、発砲しませんでしたか?」

「気のせいです」

「でも」

「峰撃ちです」

「言語変換が絶妙に間違っている気がします……」

「治療現場での私語は控えるように。行きましょう」

ナイチンゲールさんが踵を返した。リカが特に警戒心もなく付いて歩き出したので、わたしは周囲を警戒しつつリカに続いた。

そのわたしたちの行く手を遮って、例の三色ロボが壁になるように整列した。

「お待ちなさいな、フローレンス」

三色ロボの中央、その肩の部位から、一人の少女が飛び降りた。

「どこに行くつもりなの？ 軍隊において勝手な行動はそれだけで銃殺ものって知っていて？ 今すぐ治療に戻りなさい。さもないと、痛い懲罰が待つてるかもよ？」

「私は、ここの兵士たちの根幹治療の手段が見つかるとのことなので、それを探りに行くだけです」

「バーサーカーのあなたに行かせるわけにはいかないでしょ」

「……バーサーカー？ え？ フローレンス・ナイチンゲールがバーサーカー!？」

「戦線が混乱したらどうするのよ。王様は認めないわよ、絶対に」

「そんな人物に私を止める権利などありません」

「うわお。やっぱバーサーカーは話通じないわね。これまで何度も思想的に衝突してきたし、いい機会だから片付けてしまおうかしら」

「その発想はエレガントではありませんが、同感です。この先の無駄話が省けます」

少女とナイチンゲールさんの間に不可視の青い火花が散った。

「この一触即発の空気の中で口火を切れるのはわたしくらいだろう。」

「お、お話し中すみませんっ！ あなたもサーヴァントなのですか？」「あなたも？ って、まあ。あなたもサーヴァントなのね！ よくつ

てよ！ ケルトの連中を撃退したと聞いて、まあたフローレンスが一人で暴れたのかと思ったけど。どうやらそうでもなかったようね。

これは王様にとってグッドニュースかしら」

「先輩。アメリカって、王様いましたっけ？」

「いいえ、アメリカ合衆国は大統領制だから、いないはずなんだけど。」

——あの、失礼ですがレディ、あなたのお名前は？」

「レディ！ いいわね、あなた、とてもいい。礼節つてものを分かって

る。あなたに免じて真名を明かすわ。あたしはエレナ・ペトロヴナ・ブラヴァツキー。世間ではブラヴァツキー夫人、が有名なのかしら」
ブラヴァツキー夫人。19世紀を代表する女性オカルティストだ。魔術協会とはあまり関わらず、独自のスタンスで、独力で神秘学を編纂した才女だとか。

《サーヴァントとしてここにいるということは、協会側のエージェン
トだったりするのかい?》

「無いわよ、この世界には。そもそもアメリカ以外の主要国家は滅んで
いるし。でもあたしたちには『王様』がいる。彼が世界を制覇すれ
ば、それはそれで問題ないわ。どこの次元からも切り離されたレムリ
アとなって、さまよい続けるのでしよう」

「そんなもの、治療とは認めません。悪い部分を切断してそれで済ま
そうなど、言語道断です」

オマエが言うな、という電波^{ツッコミ}を全方位から受信した。はて?・

「あなたたちは? フローレンスを連れてどこへ行くの? 場合に
よっては、あなたたち、あたしの敵ということになるかしら」

「違います。そうと決まったわけではありません。ナイチンゲールさ
んは、味方としてこの場を離れるだけなのです」

「ふーん。ちゃんとフローレンスの意図を汲める子なんだ。そこは
ちよつと安心したけど」

「話は終わりましたね。では出発しましょう、ミス・マシユ、ミス・藤
丸。一刻も早く、一秒でも早く、この戦争を治療するのです」

ブラヴァツキー女史はとても残念そうにわたしたちを見た。

「仕方ないか。じゃ、よろしくね、カルナ。捕まえちゃって。一応ほ
ら、敵に回るみたいだし」

直後、空から、錫杖みたいな槍を持った男が降って湧いて、わたし
たちとブラヴァツキー女史の間に着地を決めた。

カルナ、って、え、彼が?

「心得た。その不誠実な憶測に従おう。——異邦からの客人よ、手荒
い歓迎だが悪く思うな。梵天^{ブラフマ}よ、地^{マーストラ}を覆え!」

アメリカ3

——インドラの施しの英雄カルナ。まさか敵として立ちはだかるなんて。最悪の展開だった。

あの医療キャンプで——

カルナの放った火炎系宝具を、わたしは盾の疑似展開で防いだ。ナイチンゲールさんもキャンプの負傷兵に被害が出ないよう回復宝具を解放した。

結果として怪我人は出なかったものの、カルナの宝具の余波だけでわたしたちは全員が失神。

そうしてわたしたちは、ブラヴァツキー女史が率いる機械化歩兵の手の上に乗せられて、アメリカ「西部」合衆国の砦へ護送された。

「まず、こちらの『王様』に会ってもらおう。その上で、どちらの味方につくか決めなさい」

——星条旗を掲げた城塞に着いて、わたしたちはやっと機械化歩兵の手から地面に下ろされた。

ナイチンゲールさんだけは地面に下りるなり拳銃を抜いた。これには肝を冷やした。カルナの機先を制した説得がなければ、ナイチンゲールさんは所構わず相手構わず発砲していただろう。

リカが不安げにわたしの横に寄ってきたので、わたしはリカと手を繋いだ。

“大丈夫。僕が護る——今度こそ”

ちがう。わたしがリカを護るのよ。リカはディンドランじゃないし、わたしだってギヤラハッドじゃない。ない、はず、なのよ。

「まあ、そう緊張しないで。王様、面白いから」

「おもしろい……？」

「この究極の民主主義国家で『王』を名乗る以上、面白いのは当然でしょ？ さ、いらつしやいな」

ブラヴァツキー女史の案内で、わたしたちは城塞の中に招き入れられた。

「こちんまりとした謁見の間で、待つこと一分。

「おおおおおお！ ついにあの天使と対面する時が来たのだな！」
空気をびりびりと震わせる咆哮で、わたしもリカも肩を跳ね上げた。

「この瞬間をどれほど焦がれたことか！ ケルトどもを駆逐したのちに招く予定だったが、早まったのならそれはそれで良し！ うむ、予定が早まるのはいいことだ！ 納期の延期に比べれば大変良い！」

ドラ声とはこういうことを言うんだろう。

ブラヴァツキー女史とカルナは慣れたものとばかりに溜息をついていた。

蝶番を壊さん勢いで上座のドアが開いた。

わたしは身構えた。大統領、いかなる人物か英雄か――

「率直に言っただ儀である！ みんな、初めまして、おめでとう！」

ことばが、出ない。

ブラヴァツキー女史がイタズラを成功させた少女のように囁し立ててくるが、それに答えることさえできない。

だって、ライオンだ。

二足歩行の巨大なライオンだ。

「あ、あのう、西部の王様……ですか？」

第一声を発したりカを心から尊敬した。

「うむ。我こそはこのアメリカを統べる王、大統領、トーマス・アルバ・エジソンである！」

あ、王様って、発明「王」エジソンだから「王様」――ではなく！

エジソンと言ったのか。このライオン、エジソンと名乗ったのか。「貴女がフロレンス・ナイチンゲール嬢ですな。不幸にも生前に知り合う機会はありませんでしたが、今この瞬間こそエネルギーの、いや、魂の奇蹟でしょう。ぜひ力を貸していただきたい。医療の発展はもちろん、兵士の士気向上、広告塔としての効果は計り知れないのだから！」

ツッコミを入れる隙がなく話が進んでいく。

ちなみにエジソン氏自身の語る所によれば、彼本人は全き人間であり、サーヴァントとして召喚されていたらライオン頭になっていたとのことだ。無辜の怪物のオモシロ版とでも思えというのか。無理がある。

「さて、キミの名前はリカ……だったな。この世界において、唯一のマスター」

わたしはとつさに、盾は出さないまま、リカを隠す位置に立った。

「単刀直入に言おう。四つの時代を修正したその力を活かして、我々と共にケルトを駆逐せぬか？」

リカがわたしを窺った。わたしは、頷いた。リカが決めた方針なら構わない。

「んと、協力するのはやぶさかじゃないんですけど……人類史修正は、先輩や現地のサーヴァントたちが助けてくれたから成し遂げられたんです。今は先輩だけですけど。あたしは何もしませんでした。先輩がいいよつて言うなら、考えます。考えて、でも、それでも無理！つて結論になったら、諦めて、くれますか……？」

「奥ゆかしい——だが、人類最後のマスターよ。今こそ謙遜のベールを脱ぎ捨てる時だ。私はこの国よりケルトを駆逐し、聖杯を手に入れ改良してこの時代の焼却を防ぐ。手を携え合うには充分な理由ではないかね？」

聖杯を、改良？ それに「この」時代って、他の時代は？

——嫌な予感がしてきた。

「ミスタ・プレジデント。時代焼却を防ぐとは、具体的にどのような？」

「よい点に気づいたね、盾のお嬢さん。何も修正するだけが特異点ではない。私は他の時代とは全く異なる時間軸に、この「アメリカ」という世界を誕生させようと計画している。ただ増え続け、戦い続ける野蛮なケルトどもに示してくれる。私の発明こそが、人類の光なのだとな！」

理解した。このライオン、ここではない他の時代を救うつもりがな

いんだ。

「そのために戦線を広げるのですか。戦いで命を落とす兵士たちを切り捨てて」

「いいかね、ナイチンゲール嬢。今の私にとってはこの国が全てだ。王たる者、まず何より自国を愛し、自国を守護する責務がある」

「そうですか。であれば——私のすべきことは一つ！」

ナイチンゲールさんが拳銃を抜いた——その手を、カルナが掴んでひねり上げた。

そんな、速すぎる。全く動きが視えなかった。

「離しなさいッ！ 私には知っている。こういう目をした最高権力者は、必ず全てを破滅に導く。そうして最後に無責任にものたまうのです！ こんなはずではなかった、と！」

「——マスターよ。君はどう思う？ 3分の時間を与えよう。それまでに選ぶがいい」

指名されたリカが目に見えて蒼白になった。繋いだ手を通してリカの震えがわたしにも伝わる。

リカがどちらに付きたいのかは分からない。この子はその手前の段階、二つあるものの内から片方を選ぶという行為に怯えている。

《……ここは一つ、手を組むというのもアリじゃないだろうか》

「何を言うんですか、ドクター！ エジソンは人理修復を良しとしていないんですよ！」

《でも今はその過ちと対決する時間がないし、歴史的考察として、自分の正しさを信じて国を動かす者は最後に必ず報いを受ける。だからひとまず協力して聖杯を手に入れてケルト神話を撃退、その後のことは落ち着いて考えればいい》

ドクターの言うことももつともだけど……

リカがわたしの手を強く握った。リカは泣き出しそうな顔をして——首を横に振った。

わたしはエジソンを見上げ直した。

「あなたには協力できません」

「——意外といえば意外な答えだ。裏で何を策すにせよ、共闘は承知

すと思うっていたが。その誠実さ、真摯さ。個人としては評価すべきだが——残念だ。大統領としての私は、お前たちをここで断罪せねばならん」

ドアが激しく開いて、機械化歩兵が雪崩れ込んできた。

わたしは盾を実体化させて構えた。

「リカー！ わたしから離れないで！」

「はい先輩っ」

「フオウ！」

カルナから逃れたナイチンゲールさんが、わたしたちのすぐそばまで下がって臨戦態勢。

多勢に無勢だけど、なんとかしないと——！

アメリカ4

奮戦虚しく、わたしたちは大統領王府の地下牢に放り込まれた。

機械化歩兵のあの数は反則だ……

特に武器や所持品を取り上げられたりはしなかったけど、この牢、外部からの魔力供給を遮断する効果があるみたい。盾が実体化できないし、牢を破りたくても体に力が入らない。

この牢の術式を構築したのはブラヴァツキー女史らしい。

「19世紀のキャスターも捨てたもんじゃないでしょう？ 恭順を申し出るなら言っっちゃようだい。すぐに出してあげるから」

ブラヴァツキー女史は、わたしたちとは別の、リカとフォウさんの牢に歩み寄った。

「ねえ、リカ？ あの時、協力しないと云ったのはマシユだけど、意思表示したのはあなたよね。どうして？ カルデアの優男が言うように、途中で裏切る手だつてあつたでしょうに」

「う……」

「怒らないから言っっちゃらん？」

「……………ないから」

「ん？」

「勝てないと思つたから、です。このままのやり方じゃ、今はよくても、きつと、最後にはケルトに負ける」

「——そう。あなた、人を、いえ大局を見る目はあるのね。ちよつと見直したわ。だつたら改めて、お願い。あまりエジソンを嫌わないであげて。発明王としての彼は、本当にコドモみたいで面白い人なのよ。

——安心なさい。すぐに救いの手は来る。それまで待っていてちようだいな」

ブラヴァツキー女史は地下牢を出て行つた。

間髪入れず、銃声が一発。

「ナイチンゲールさん、銃で牢を破壊するのは無茶ではないかと！」

「いいえ、少しだけ削れた気がします。さあ、張り切つて削りましよう！」

ああ、跳弾が牢の中でトビウオのように！ どの角度から襲ってくるか分からないから、壁を背にして身を守るしかない。うう、せめてリカとフォウさんがこっちの牢じゃなくてよかった。

「まあ、無茶ではあるな」

……え、誰？

「だが、銃声がよく響いたおかげで迅速に見つけることができた」

シャーマンらしき出で立ちの男性がいた。闇にまぎれて潜り込んだのではない。本当に、何も無い空間から姿を現したとしか形容できなかった。いえ、そもそも、この気配は――

「サーヴァント!?!」

《待て待て待て！ 反応は全く無かったぞ!?!》

「あるアーチャーから借り受けた宝具のおかげだ。少し待て。牢を開ける」

男性は、まずわたしたちの牢の鍵を外から開けて、格子戸を開いた。次にリカとフォウさんが入った牢を解放した。

外に出ると、リカが涙目でわたしの胸に飛び込んだ。

「先輩……!」

「怖かったね。もう大丈夫」

わたしはリカを抱き締め返した。リカはわたしの腕の中で何度も頷いた。

わたしはリカの肩を抱いたまま、救出者である男性に向き直った。

「失礼ですが、あなたは何者ですか？」

「……そうだな。名を明かさねば信用もされまい。とはいえ、私の真名はおいそれと明かすものではない。その名を伝えた所で知る者もない。ゆえにこう呼んでくれたほうがいいだろう。ジェロニモ――我が名はジェロニモだ」

ジェロニモ――アパツチ族の精霊使い^{シャーマン}。メキシコ軍に家族を虐殺されたのを機に、対白人抵抗戦へ身を投じた戦士。

なるほど、「アメリカ合衆国」に最後まで抵抗した彼が、確かにエジソンに従うはずもない。

「マシユ・キリエライトです。デミ・サーヴァントです。助けてくだ

さつてありがとうございます」

「いいや。こちらでも打算あつてのことだね。君たちが我々の側に加わってくれれば、思い切った行動をとれる。今は見張りがいない。道々説明するから、まずは脱出しよう」

ジエロニモさんを先頭に、わたしたちは地下道を進んだ。

ジエロニモさんは教えてくれた。

現時点で彼と共闘しているサーヴァントは3騎。

各地にカウンターとして召喚されたサーヴァントはいるものの、ケルト勢力に各個撃破されているのが現状。

彼の仲間の一人も、ケルトに倒されかけた所を、ジエロニモさんたちが助ける形で仲間に加えたそうだと。

隧道を抜けて地上に出た時には、すでに夕日が沈む時刻になっていた。

フォウさんを背中にひつつかせたりかを、わたしは両腕を掴んで持ち上げた。

「カルナは出てこない、か。あのインドラの大英雄であれば帰りは見逃すまいと思つたが……何を考えている？」

カルナの思惑がどうあれ、出て来ないことにわたしは内心で安堵した。

わたしは一度、カルナの宝具を防ぎきれなかった。次の戦いで挽回できるとは考えにくい。戦わずにすむならそれに越したことはない。

「リカ。疲れてない？」

「ちよつと、だけ……でもまだ歩けます。大丈夫です」

嘘。悟られないように小さく、でも呼吸の間隔を短くしているのがバレバレよ。

「少し休んだほうがいいわ。リカ一人くらい、わたしが抱えてくから」
「……すみません」

そうと決まれば、よいしょつと。リカを負ぶさつて立ち上がった。

「Interlude」

脱走していくマスター一人とサーヴァント数騎。

大統王府の上に立つカルナは、それを肉眼で捉えていたが、彼らの逃亡を邪魔することはしなかった。

これが健全なマスターとサーヴァントたちなら、二度目を見逃すほど甘きには徹しない。

しかし――

とつくにズタズタの傷だらけで、ふとした弾みで限界を迎える人間に追い打ちをかける趣味を、カルナは持ち合わせていなかった。

「Interlude out」

アメリカ5

一夜の強行軍を経て。

わたしたちは、ジェロニモさんたちの拠点であるという、アメリカ西部の町に入った。

わたしの背に負ぶさっていたリカが身じろぎした。

「せんぱい——」

「起きた？ リカ。具合は大丈夫？」

「はい。おかげさまで。……すみませんでした、先輩。重かったですよね」

「まさか。こんなに細いんだもの」

リカはわたしのうなじにすり寄った。くすぐったいよ。

「実は3騎目をここに匿っていてね」

「サーヴァントがいるのですか？」

「ああ。君たちを助けたのは、協力してほしいのも無論だが、何より彼を治療したいからだ」

ナイチンゲールさんが話題に食いついた。

「つまり私の出番ということですね。いえ、出番であろうがなかろうが、治療を求める患者がいるならば私は出向きます」

「頼む。君の治療があれば何とかなるかもしれない」

ジェロニモさんは、その傷ついたサーヴァントがいるという酒宿に、ナイチンゲールさんを連れて行った。

「あの、先輩。あたしも行っていい、ですか？ ちょっとは手伝いできる、かも」

リカの治癒魔術の練度は、ちょっと、そこらの魔術師では比べ物にならないくらい高い。人手は多いほうがナイチンゲールさんの治療も捗るはず。

わたしは「分かった」と答えを返して、リカを負ぶさったままジェロニモさんたちが入って行った酒宿に向かった。

宿の部屋のベッドに横たわるのは、太陽色の少年だった。

鬘のような緋色の髪も、装束も、彼の心臓部に空いた穴から絶えず漏れる血液でどす赤く汚れている。

酷い……心臓が半ば抉られてる……！

「手伝いますっ」

止める暇もあらばこそ。リカはわたしの背から下りると、ベッドの横に膝を突いて、少年の手を握った。

「ごめんなさい。傷そのものは……大きすぎてあたしじゃ治せない、けど、痛みを減らすくらいなら」

「いや、このままで、いい。痛みがないと意識が保てない。それに、これは余が甘んじて受けねばならない罰なのだ」

「罰？」

「余を救うために、たくさん人間が、犠牲になったのだ。ゆえにこの痛みは罰だ」

「——でも、それで気持ちが悪くなるの、あなただけですよ」

リカが他人の意見に真っ向から反論した。明日は雪でも降るんじゃないだろうか。

「そんなの、体を苛めて楽になろうとしてるだけ。そのほうが、自分のために死んだ人たちへの後ろめたさをごまかせるから。心が痛いよ、体が痛いほうが楽だから、あなたはそっちへ逃げているのです」
「……言ってくれるな」

「どんなに痛いかなんて、他人には絶対理解できませんもん。自己満足以外の何でもない」

リカの言い分に、意外にもナイチンゲールさんが賛同した。

「彼女の言う通りです。貴方には意識を保てる程度で鎮痛剤を打たせていただきます。ミス・藤丸、貴女の『治療』はお控えください。彼は私の患者です」

「は、い。ごめんなさい……」

リカは立ち上がってわたしの隣に戻って来た。

「——ところでジェロニモさん。彼は何者なのですか？」

「彼は、インド叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公、コサラの王ラーマ。」

現在召喚されているサーヴァント中、疑い様もなく最強だ。万全であればカルナが相手でも五分の戦いができるだろう」

ナイチンゲールさんはラーマさんの胸部の穴に両手を突っ込んでいる。ラーマさんの崩れゆく心臓を両手で掻き集めて押し留めているのだ。両者共にこんな力技が通用するのはサーヴァントゆえであろう。

白い手袋を血に汚しているナイチンゲールさんが、目尻から雫を散らして頷れた。

「……悔しい。悔しい、悔しい、悔しい……!! 追いかける死の速度を鈍くはできても、止めることはできないの……!?!」

彼女は己の力不足ではなく、目の前の少年を完治させられないという現実からこそ、泣いていた。

——しかし、悲嘆に暮れて放棄しないのがフローレンス・ナイチンゲールだと、ここまでの旅路で知っている。

「貴女たちに伺いたいことが一つあります。現在、彼の治療は叶いません。先ほど修復したはずの心臓が、すでに10パーセント以上損壊しています。絶えず治療し続けなければ、すぐに死に至るでしょう。

——教えてください。彼を治療する方法を。私には知らない、その技術を！」

「……ドクター。ラーマさんの傷の分析、お願いします」

《二目で分かる。それはもう呪いの域だ。治療より解呪が先だよ。一番手っ取り早いのは、傷を負わせた本人を倒すこと》

やっぱり呪いだっただか。ジークフリートさんの時と同じ。リカの治療が効かないのも当然だった。呪いや治療阻害の魔術をかけられた対象には、リカの力は届きにくい。

《あるいは、ラーマ君の存在力を強化すれば、心臓必中の因果が解消されるか、それに近い状態に戻るはずだ。一番いいのは、生前の彼を知っているサーヴァントと接触することだ。『生前のラーマ』という設計図を知っているなら、ミス・ナイチンゲールの治療も効果が上がると思う》

「……一人、いる。この世界のどこかに囚われた……余の妻、シータ。

はは、改まって言うとは照れくさいな……」

「ふむ……アメリカ、ケルト、どちらに対抗するにせよ、ラーマの戦力があるかないかは大きい。彼を治療するために、彼の妻シータを探す。そのためにはナイチンゲールにご同行願わなければならぬのだが——」

「は？ 地の果てだろうと同行しますが、何か？」

言うと思った。彼女は絶対そう言うと思ったの。

「そのためには、もう少し効率のいい看護形態を模索すべきですね。ラーマ君、失礼します。暴れないように」

「な、なんとお!？」

ラーマさんが驚くのも無理はない。ナイチンゲールさんはラーマさんを、世に言う「お姫様抱っこ」したのである。

……見ているわたしのほうが照れちゃった。リカを抱き上げたことは何度もあるくせに。

暴れる代わりに喚くラーマさんを、ナイチンゲールさんは抱えたまま階段を下りて行った。専用のベルトを用意するとか。

《……………》

ん？ 通信の向こうでドクターが意気消沈しているような——ああ。

「特に引け目を感じなくても。ドクターだって一度は結婚してたじやありませんか」

《はあ!? な、何でそんなこと言い出すんだい!?!》

何でも何も、ドクター、左手に指輪してた時期があつたじゃないですか。昔わたしがそのことをドクターに指摘したら、常時手袋を着けるようになったから、今は分からないのだが。

そこでジエロニモさんが大きめな咳払い。

「すまないが話を戻していいかな？」

「し、失礼しました。続けてください」

「——エジソンとケルトの戦士たちにどう対処すべきか。彼方の世界にいる魔術師殿。何か腹案はあるだろうか？」

ドクターは、おそらくほぼ正解の仮説を語った。

——無限の怪物、数千失つても困らない。これらのキーワードから、ケルトの戦士は無限増殖すると考えられる。エジソンが大量生産戦略で対抗したのは、ケルトには数でしか対抗できないと分かっていたからだろう。

無限湧きする敵に真つ向から戦争を吹っ掛けても勝てるはずがない。こちらが消耗するだけ。最終的に、策は一つに帰結する。

《暗殺。サーヴァントたちで、一気に王と女王を討ち取る以外に方法はない》

「——その通りだ。よくぞ言ってくれた、ドクター。貴方はさぞや名のある魔術師殿なのだろう。声だけ聞くと頼りないが、その頭は頼りになる」

ついにジエロニモさんにさえダメ出しされてしまったドクター・ロマン。

フオウさんでさえ、「強く生きろ」と励ます側に回った始末だった。

ジエロニモさんは、暗殺の成功率を上げるために、各地に散ったサーヴァントを集結させようと言った。わたしもそれには大いに頷いた。

何せ、いま戦力に数えられるサーヴァントは、わたしとジエロニモさんのみ。これじゃあまりに頼りない。

まず、ケルト侵攻へのレジスタンス活動をしているという二騎のアーチャーと、合流する。

彼らは最初から「こちら側」。どちらもゲリラ戦に特化していて、よほどの強敵と遭わない限り負けはないとの、ジエロニモさんのお墨付きだ。

その道中であつて、どうしても無視できないモノが一つ。

——ラーマさんだ。おんぶ紐の要領でベルトに固定されて、ナイチンゲールさんに背負われている。ボディバッグならぬラーマバッグ。

「……なあ、マシユかりカ。何とかしてほしいのだが」

「えつと……、……、……ごめんなさい」

「信念が強すぎて妥協できない、という狂化もあるんだと思い知りま
した」

「サーヴァントになったからこうなったのか、生前からこうだったの
か、考えると恐ろしいが」

「味方がいない…だと…!? ——とお、な、何だあ!?」

ナイチンゲールさんが前触れもなく全力疾走して行った。止める
隙もなかった。

《て、敵性反応およびサーヴァント反応が複数確認されたっ。前方の
町を包囲している。というか今さら思い出したけど、あの脈絡の無さ
こそバーサーカーだよ。今までそこそこ意思疎通可能なバーサー
カーばかりだったから忘れてたけど!》

「り、リカ、走るわよ」

「はい先輩っ」

「フオウ!」

わたしはリカを抱き上げた。お姫様抱っこ…うぐ。ナイチン
ゲールさんとラーマさんのアレを見たあとだと、妙に照れる。わたし
たちも第三者からはああいうふうに見えてたんだと思うと、よけい
に。

アメリカ6

街に着くなりケルトの戦士、加えて新型キメラとの戦闘が勃発したが、どうにか切り抜けた。

全員が無傷……では、なかったが。

ラーマさんがナイチンゲールさんの背中で顔を青くして目を回している。ナイチンゲールさんに負ぶさられたまま戦われたら、ええ、ジェットコースター級でしようとも。

当のナイチンゲールさんというと――

サーヴァントとはいえ彼女は生前、看護師が主務だったのだ。わたしたちほど戦闘慣れしていないナイチンゲールさんは、当然、勢い任せの戦い方をして負傷もした。それでも「殺菌!」「消毒!」で突っ込むのだから、バーサーカークラスへの認識を改めたというか、これが本来は正しいんだと思ひ直したというか。

流血沙汰の負傷をしたナイチンゲールさんに、リカがおずおずと歩み寄った。

「あの……傷の手当て……」

「結構です」

ナイチンゲールさんはリカの申し出をびしやりと断った。

「自分の体は看護師である自分がよく理解しています。まだ動けますし、自然治癒で収まる範囲です」

「でも、血が出て……」

「結構だと言っています。この際だから忠告しますが、ミス・藤丸、あなたの『治療』は根本的に履き違えています。今後は私に限らず、どのような傷病人を見ても、その魔術を行使しないことを推奨します」
な……んですって!?

いくらクリミアの天使だからって、今の「忠告」は聞き捨てならない。

リカは精一杯、自分にできることに真摯に取り組んでいる。その成果が高度な治癒魔術だ。それを、使うな、なんて。

怒鳴りかかろうとしたわたしの、肩を、いささか強めに何者かが叩

いた。

いつのまにか後ろに回っていた緑衣のサーヴァントの仕業だった。「オタクらがジエロニモのオツサンの言つてた援軍かい?」

……ナイチンゲールさんに抗議するタイミングを逃してしまった。「あなた方が、ジエロニモさんの言つていた——」

「そ、孤軍奮闘の二人ですよ。もうめんどくさいから言つちまうか。オレはロビンフッド」

「あつさり真名明かしちゃうんだ。ズルイなあ。それじゃあ僕も明かさないわけにはいかないか。僕は人呼んで、ビリー・ザ・キッド! この国を守るために、この国のサーヴァントである僕が選ばれたみたいだね。クラスはもちろんアーチャー。よろしくっ」

「カルデアのマッシュ・キリエライトです。デミ・サーヴァントです。よろしくお願いします」

「カルデアの、いちおーマスター……の、リカです。よろしく、お願いします……」

現存戦力が集結した所で、さて、次にすべき行動は何か?

わたしはケルト勢力の王と女王の暗殺計画について、お二人に説明した。ロビンフッドさんもビリーさんも計画に異議は唱えなかった。

「クラスの偏りを考慮すると、こちらの仲間にセイバーかランサーが欲しい所だ」

ごもつともです。アーチャー2騎、キャスター1騎、そしてわたしはエクストラクラスのシールダー。近接戦で本領を發揮するサーヴァントはこちらにいない。

ドクター・ロマンの索敵だと、付近にサーヴァント反応は見つからないとのことだ。

これはもうサーヴァントと運よく出くわすまで辛抱強く歩くしかないか、と思いついた所で——

「あのさ、その、何っ?か……ビリーと合流する前にさ、会ったんだわ。セイバーとランサーのサーヴァントに。うん、まあ……一応、セイバーとランサーだけだね? ウルトラな問題児なだけだね? だがありやあなんっ?か……」

とりあえず会ってみれば分かる。

ロビンフッドさんがそう言ったので、さっそくそのセイバーとランサーに会いに行くことにした。

「……あー、憂鬱だわ。マジで会いに行くのかよ……」

どうしてロビンフッドさんはそこまで嫌がるのだろうか？

「ま、腐れ縁というか。関係ありそうでやっぱりない世界の話っつか」

「元カノだったりして」

「おお、そういう理由でしたか。ロビンさんも隅に置けないのです」

「おいビリー!? オタク、想像するだけでおっそろしいこと言うなよ！」

「だって言い方がそれっぽかったからさー。ね、みんな？」

リカが頭を二度上下させた。今のは「大いに納得できる」のサインだ。

「お、リカは分かってくれるんだね。話題が合う人を見つけると安心するなー」

「分かります。これでも学生時代に付き合ってた男子、いないでもなかったですから。そこはかとなく？」

……付き合っていた異性がいた？

学生時代というとりカがまだ日本にいた頃よね。そんな話、わたし今初めて聞くんだけれど!?

「大した男じゃなかったんで。ラブホで服脱いだ時、あたしの体が古傷だらけなの見て、『ごめん無理』って言ってポイ捨てされました。その程度の付き合いです」

——グラウンドオーダーが終わって地球が無事復活したら、わたしは日本に渡って、何が何でもリカの元カレを見つけてとっちめよう。そうしよう。

戦果だけ述べると、わたしたちはランサーとセイバーのサーヴァントを仲間に引き入れることに成功した。

思い返すと色々と泣きたくなる経緯なので、そこは割愛する。

ランサーは、エリザベート・バートリーさん。

セイバーは、白いドレスに身を包んだネロ・クラウディウス皇帝。

……察してください。ほんとに。

でも、戦力だけでなく、有益な情報も手に入った。

ラーマさんの奥さんであるシータさんは、アルカトラズ島に囚われている——という証言。

わたしたちは戦力を二手に分けることにした。シータさんの救出、そして、ケルト勢力の『王』クー・フリーンの暗殺を目的とした、二つの部隊。

明日にでもそれぞれに出立する予定だ。今夜はそれぞれに向けてのささやかな休息。

……星が、綺麗だなあ。

これは最初の風景。人が生きるには厳しく、獣だけが生きること許される大地。

人類はここに、途方もない歳月と労力を尽くして、一つの国家を誕生させた。その行為は開拓であり……蹂躪、だったんだろう。

「先輩」

「——リカ。……どうかした？」

わたしにはリカが悄然としているように見えた。

「自主避難してきちやい、ました。ラーマさんに痛みの軽減だけでも、つて言つても、ナイチンゲールさんがさせてくれなくて……あつ。ただ逃げ出しては、いないのですよ？　ちゃんとこれ、先輩に差し入れに、つて……」

リカは両手に、湯気を立てるステンレスカップを二つ持っていた。

わたしは軽く隣の地面を叩いて示した。

「おいで」

リカはぱつと顔を輝かせて、わたしの隣に腰を下ろしてから、お行儀よく両手でステンレスカップの一つをわたしに差し出した。

わたしはカップを受け取って口をつけた。コーヒーだと思って飲んだら、甘く口の中で蕩けた。これ、ホットチョコレートだ。

「おいしい……リカが作ったの？」

「はい。ベリーさんが持ってたコーヒーを分けてもらって、カルデアからも材料を少し送ってもらいました、ちよちよいと」

ちよちよいと、じゃないでしょう。ホットチョコのレシピはそれなりに手間がかかるってことくらい、わたしでも知っている。リカの労わりが込められてるんから、こんなに甘くて、あったかい。

隣で、同じくホットチョコをちびちびと飲むリカに、確認の意味で問うた。

「治癒魔術を禁止されて、辛い？」

「——ちよつと……ううん、かなり。あたしが人様の役に立てることなんて、この魔術しかないのに。禁止されたこと以前に、あたしのしてきたことは間違っている、ってはっきり全否定されたのが、シヨック、で……でも、本当に間違ってたとしても、やめようって気には、ならなくて……」

リカは今にも泣き出しそうな笑みを刷いて、わたしを向いた。

「死んだおばあちゃんの受け売りです。『傷ついた人に優しくしてあげるのは、当たり前のことなんだよ』っていうのが、おばあちゃんの口癖でした。あたしにこの魔術が目覚めたのは運命だったんです。だからあたし、やめません。ナイチンゲールさんに何て言われようが。あたしにはそれくらいしかできないから」

『それくらい』じゃ、ない。リカの魔術にはすごく助けられてる」

あなたの魔術も心も優しすぎて、交わす言葉を一つ重ねるごとに惹かれるほど。

……ただ、この気持ちの正体が分からない。

わたしが後輩のリカを可愛く思っているのか。

わたしの中のギアラハッドがディンドランに似たりリカを求めているのか。

ロンドンで“彼”の真名を知ってから、分からないまま放置した。わたしは、リカの肩を引き寄せて、そのまま華奢な体を抱き締めた。

「先輩？」

「護るからね。あなたのことは、何があってもわたしが護るから——」
だから、この不誠実なもどかしさを、もう少しだけ、許して。

アメリカ7

夜が明けた。

ケルト暗殺班と、シータさん救出部隊。わたしたちはそれぞれの任務のために二手に分かれて出立した。

わたしはシータさん救出部隊。リカとフォウさんと、他にもナイチンゲールさん、ラーマさん、エリザベートさんがこちらの隊員だ。

このメンバーで、わたしたちはシータさんが囚われていると思しきアルカトラズ島を目指す。

荒野を歩いて進む。それだけの微震でも、心臓が抉れたラーマさんには辛いみたいで、彼の延命措置のため、行軍は足踏みを余儀なくされた。

何度目かの処置で、ラーマさんは、ご自身がどうしてこうも無残な有様になっても延命を望むのかの理由を零した。

「妻と会うまで、余は死ぬわけにはいかん」

——『ラーマーマヤナ』に曰く。コサラの王ラーマは妻の不貞を疑い、二度に渡って妻を試した。ラーマさん自身はシータさんを疑ったりはしなかったとのコメントだが、結果として生前の彼はシータさんを追放した。

「そんなの疑ったのと変わらないじゃない！ サイテー、サイテー、サイテー！」

「あ、あの、エリザベートさん。相手は怪我人ですから」

「いや、全くその通り。余は最低である。余が小僧の姿で召喚されるのも自明の理だ。この頃は、ただシータだけが愛おしかった。ただそれだけでよかった時代が、余の全盛期というわけだ」

「でしたら」

ナイチンゲールさんがいささか強めに、ラーマさんの胸部の包帯を留め直した。

「愛しい女性に会うまで辛抱なさい。言葉で伝えない限り、伝わらないこともあります」

その時、砂を含んだ風が吹いて、小さな眩きを掻き消した。

「リカ、今何か言った？」

「いいえ、何も——なんでもありません。急がないとなつて思つただけ、です」

「賛成。何はなくとも、シータという女性は一発この男を平手打ちにするべきだし」

「う、うむ。会えれば、な」

「何よー。こおんな精鋭たちに運んでもらつといて、アタシたちがしくじるかもとか疑つてたりするの？」

「断じてそういう意味ではない！ 余が戦えぬばかりに、そなたたちに迷惑をかけるという申し訳なきがだな……いや、言い繕うのはやめよう。やはり余は、シータと巡り会えるかを一番に気に懸けている」

ナイチンゲールさんがラーマさんの体を特製ベルトで固定して、再び彼を担いで立ち上がった。ラーマさんは痛みに顔を歪めたが、苦悶の声は噛み殺したようだ。

夫婦だから当然のことだと思つていたけれど、心臓が抉れても意思だけで死から逃れ続けるのは自然なことではないし、容易でもない。

——こんなふうになつてでも会いたい、ただ会いたくて堪らない、大切な人。

一歩先に歩き出したリカの、手を、わたしはとつさに掴んでいた。

「先輩？」

「フオウ？」

リカと繋いだ手の感触に、わたしは密かに安堵した。大丈夫。リカはちゃんと「僕」の手の届く位置にいる。誰にだって離れ離れになんかせやしない。誰もわたしたちを引き裂けやしないの。だから大丈夫。不安になる材料なんて一つもないんだから。

「ミス・マシユ、ミス・藤丸、お急ぎください。血を流すことを恐れてはいけません。行きましょう」

「は、はいっ。すいません、すぐにっ」

慌てて歩調を速めたリカに合わせて、わたしも早歩き。リカに手を振り解かれて先に行かれたらと想像すると、どうしようもなく切な

かったからというのは、わたしだけの秘密だ。

道中、ケルトの戦士やワイバーンに襲撃されつつもこれを撃退し、わたしたちはついにアルカトラス刑務所まで無事に辿り着いた。

監獄の正門前には、鍛え上げかつ古傷だらけの上半身を堂々と曝した偉丈夫が一人——いや、一騎と数えるべきか。ドクター・ロマンの観測を待つまでもない。あの男の気配はサーヴァントのそれだ。

「おう。アルカトラス刑務所にようこそ。入監か？ 襲撃か？ 脱獄の手引きか？ とりあえず希望を言っておきな。殺したあとで、どうするか考えてやるからよ」

あのサーヴァントは飄々と言っているが、きつと言葉そのものに嘘はない。わたしたちを気持ちよく全滅させてから、さてどうするか、と思案する気なのが見て取れた。真つ当とは言い難い思考系統からするに、彼のクラスはきつとバーサーカーだ。

けれど、バーサーカーという一点でならどの狂戦士にも負けない看護師が、こちらにはいる。

「こちらの患者の奥方がここに監禁されているそうで。治療に必要なので、身柄をお引き渡し願います」

「面会かよ。おいおい、戦いに来たんじゃないのか？」

「看護師が戦うのは、病気と負傷、そして治療の障害となる存在です」

「——ははあ、読めたぜ。背中にいるのが奥方のダンナってわけか。しかし残念だが、俺はその奥方とやらを解放するつもりはない」

「では、貴方は患者の治療の障害ですね。障害は排除させていただきます」

わたしは盾を握った。この流れなら直後に戦闘にもつれ込んでおかしくない。エリザベートさんだつて、敵意を隠すことなく武器のほうの槍を実体化して構えた。

「そう焦んなよ、嬢ちゃんたち。俺たちが敵同士なのは明白だがな、それでも交わすべき仁義つてもんがある」

「仁義、ですか」

「敵であれ強い者には敬服する。死は恐れずとも驕りを恐れ、敬いを忘れない。なあに、要はまず戦って証を立てろってことさ。お前たちの生きる価値を証明しろ。我が真名（な）は『竜殺し』ベオウルフ。さあ、かかってくるな！」

「ぐぬぬっ、ツノ的にイヤな気分になるタイプだけど……！　いいわ、このエリザベート・バートリーが、極上のナンバーでイカせてあげるッ！」

エリザベートさんが大槍を振って、文字通りの一番槍を行った。

わたしも続いて名乗りを挙げようとして、返答に詰まった。

——わたしが告げるべき名前はマシユ・キリエライトでいいの？

円卓の騎士ギヤラハッドでなくていいの？　だって、盾も鎧も戦い方も、命さえ、『彼』から授かったものばかりだ。そもそも、わたしは今まで、一度でも、マシユ・キリエライトとして戦ったことがあった？

「ま、あ、まつ、て……待って、くださいッ！」

リカの必死の声で我に返った。

「せめてラーマさんをお、下ろしてあげ、て……！　戦いの振動で傷が悪化し、したら……！」

あ……そ、そうだった。道中ずっとこの格好だったから、変なふうに慣れてしまっていた。

その通りよ、リカ。ラーマさんを負ぶさったままナイチンゲールさんを戦わせるなんて以ての外だわ。

「その要請は聞けません、ミス・藤丸。戦闘中に彼の容態が悪化した場合、私は常に彼の傍らで治療を行わなければいけません。仮に私が離れたとして、悪化した彼を他に治療できる人間はいません」

治療魔術ならリカが施せるのに、どうしてそれを頑なに許さないのか、このクリミアの天使は！　何様ですかあなた？　バーサーカーでしたねすみませんッ!!

「婦長。あなたの戦闘スタイルこそが、より患者に負担を与えていると、わたしは意見します。草の上に横になつて安静にしているほう

が、よほど容態は急変しないでしょう。ですのでわたしからも、ラーマさんを下ろすことを提案します」

ナイチンゲールさんはそれなりに長く悩んでから、無言で固定ベルトを外して、慎重にラーマさんを地面に降ろした。

「ミス・藤丸。あくまで彼の安静のためです。あなたの治療行為を私は推奨しません。今は特に、ラーマ君に直接触れないでください。この処方が守れるのでしたら、そばにいて患者の容態を見守っていてください。いいですね？」

「……分かりました」

何はともあれ、これで後顧の憂いなくベオウルフに挑める。エリザベートさん、加勢しま……！

「——イシスの雨」

「……感謝する、リカ！ —— ブラフマー・ストラ 羅刹を穿つ不滅!!」

直後。灼熱に燃え盛る法輪が飛んできてベオウルフに直撃した。

けほっ……衝撃の余波で上がった土埃と煙でよく見えない。

分かるのは、あの燃える法輪が宝具級の攻撃だったという一点。わたしでもナイチンゲールさんでもエリザベートさんでもない。

法輪に見えていた物の正体は鉈剣だった。鉈剣は徐々に緩やかに旋回していつて、わたしたちのさらに後方、ラーマさんの手に戻った。

さっきの攻撃は、ラーマさんの宝具の真名解放？

「なんだテメエ、育ちのいい顔しやがって不意打ちか！ 面白いじゃねえかチクショウー！」

「うるさい邪魔だそこをどけッ!! 妻が待っているのだ、手段なんぞ選んでいられるかッ!!」

「いいぜ、かかってきな優男！ その成りで俺をブチのめせたんなら正義の勝ちだ！」

ラーマさんは心臓の傷なんて無いかのように、気焰を吐いてベオウルフに斬りかかった。赤い振じり槍と緋色の刃が、ぶつかっては火花を散らしている。

「——ミス・藤丸？」

「触ってませんよ。あれはアトラス院の礼装の付与効果で、短時間だ

けの魔術的ドーピングです。せいぜい三合交えて限界でしょうが」

激しい金属音がしてふり返ると、ベオウルフの手から振り槍が叩き落とされていて、ラーマさんが息を荒げながらも鉈剣の切っ先をベオウルフの喉笛に突きつけていた。

「三合あれば充分だと思いましたが」

リカは晴れ晴れしく笑った。

この子つたらもう。^{ウイット}とんちじやないんだから。でも結果良ければ全てよしということ。ナイチンゲールさんが非難したってわたしはリカを弁護しよう。

ベオウルフは両手を上げて降参のポーズ。

「半病人相手にこの始末か。こりゃあ誰が見ても俺の負けだな。降参だ。人の恋路を邪魔するほど野暮じゃねえ。ああ、囚人には指一本触れちやいねえ。華奢すぎて、触っただけで折れそうだったんでな」

ベオウルフは気負いもせず、落とした振り槍を拾ってわたしたちに背を向けて歩き去った。こんな捨て台詞を残して。

「さっさと行けよ、優男。華奢な奥方が待つてるぜ」

「ああ……そうさせて、もらう……！」

ラーマさんは鉈剣を杖代わりに、自身の足で監獄に踏み込んでいった。

——はっ。呆気にとられていたが、わたしたちもラーマさんを追わないと。あの重傷で、監獄の中で倒れでもしたらそれこそ一大事だ。

アメリカ8

岩壁を荒く削っただけの隧道にある、牢の一つ。そこに、太陽色の少女が囚われていた。

彼女がシータさん？ ラーマさんと夫婦というよりは、まるで双子の兄妹のような、容姿の酷似。

わたしは先駆けて、シータさんが囚われた牢の鍵を壊して、彼女を外へ連れ出した。

「ラーマ様!」

「シータか？ 迎えに来たぞ。迎えに、来たんだ……どこだ？ どこにいる……?」

「シータはここにおります、ラーマ様」

「会いたかった、会いたかった……本当に本当に、会いたかったんだ……僕は、君がいれば、それだけでよかった……!!」

ラーマさんが焦点を結ばない目で、腕を上げる。シータさんが手を伸ばす。

ふたりの指先が重なる——寸前、ラーマさんが前のめりに倒れた。気を失ったのだ。

すかさずナイチンゲールさんがラーマさんに駆け寄って、ラーマさんを仰向けに横たえた。

「申し訳ありません。本来ならばこんな不衛生な場所で治療を行うべきではないのですが、特例です。奥方、遠慮なく彼の手を握り締めてください」

シータさんは戸惑いがちに歩み寄って、気絶したラーマさんの手を両手で包むように握った。

ラーマさんの胸部の包帯を、ナイチンゲールさんは乱暴に破り捨て、どす赤い出血を続ける心臓の縫合作業を始めた。

施す治療は今までの道行きと変わらないのに、出血量は減って、縫合もほつれにくくなったように見える。シータさんがそばにいることが確かに効果を上げている!

「ラーマ様に一体何が……それに、あなた方は?」

シータさんにはわたしから、これまでにあった出来事を説明した。ラーマさんを救うにはシータさんの存在が必要だったのだと語ると、シータさんは「お役に立ててうれしい」とラーマさんの手をもつとしつかりと握り包んだ。それから、ぽつ、と口にした。

「——ラーマ様にかけてられた呪いはご存じですか？」

《バーリという猿を殺した際、背中から騙し討ちにしたことによる、猿の妻からの呪いだね》

「はい。その呪いは英霊の身となつてなお、私たちを引き裂いています。サーヴァントとして聖杯戦争に参加する場合、私か、あるいは彼が『ラーマ』として召喚されます。同時に召喚されることは決してなく、私たちは出会えない。彼が目覚めれば、きっと私は何処かに消えるでしょう」

……そんなのつて、ない。そんな理不尽な呪いが罷り通るなんてあんまりじゃない。確かに夫を殺された猿がラーマさんを恨んでもおかしくないのだとしても、死後の愛まで束縛することはないじゃない。

「いいのです。ラーマ様は私を見ることが叶いませんでしたが、私は手を握ることさえできました。それだけで……幸福です」

「それだけでいいの？ 心からの謝罪は？ 全霊を込めた愛の誓いは？ そういうものが欲しいとは思わないの？」

シータさんは穏やかに首を横に振った。

「私は、あの恋と愛を、覚えているから」

ナイチンゲールさんがようやくラーマさんの心臓部から手を離れた。

「修復はだいぶ終わりましたが、巣食った病巣のろいが厄介です。元氣になつたとしても、戦力としては見込めないでしょう。……残念ですが」

「ならば私がこの身を捧げましょう」

シータさんはそれがごく自然であるかのように微笑んだ。

「私の身を以て呪いを解きます。私がこの呪いを背負い、消滅すればいい。幸い、私とラーマ様は“同じもの”。呪いを肩代わりするの

容易なはずです」

「待つてください、シータさん！ そんな、自分を犠牲にするやり方は——」

ラーマさんはシータさんに会うためにここまで来たのに、という真つ当な主張をしたいのではない。わたしを衝き動かしたのは焦りだった。

だって『僕』が覚えている。デインドランが病を患った老婦人のために自らの血を捧げ果てて、命尽きた時の、喪失感。わたしだって今なお思い出せるんだ。

……いや、おかしい。ちがうでしょう？ わたしはギャラハツドじゃないはず。乙女デインドランが死んだ瞬間なんてこの目で見てはいない。なのにどうしてわたし、ギャラハツドの感情を自分のものみたいに……！

「ラーマ様は私を求めてここまで来てくれた。その気持ちだけで、私は満たされました。それに、いま必要なのは強き戦士なのでしょう？ それなら、私の夫は世界で一番強いお方です」

止められない。シータさんのためでなく、自分のためだけしか考えないわたしに、シータさんを止めるだけの言葉があるはずもない。

「では、病巢のろいを貴女に転写します。——私は生涯独身でしたが、誰かのために尽くす想いは理解しています。貴女と語らえて光栄でした。さようなら、ミセス・シータ」

シータさんは頷いた。彼女の目尻には涙が光っているけれど、それが悲しみからではないことはわたしにも分かってしまった。シータさんは、会えない寂しさ以上に、ラーマさんのためにできることがある喜びから泣いていた。

「ラーマ様……ラーマ。少しだけ、あなたの戦いに役に立てるね。私、それだけで幸せなの」

シータさんはゆっくりと屈んで、くちびるを、ラーマさんの唇に近づけていく。

ふたりの距離が縮まるほどに、シータさんの姿が透けていく。

「大好きよ。本当に、本当に、大好きなの」

口づけが叶ったのか、それは見守っていたわたしにも分からなかった。

重なり合った瞬間に、シータさんは完全に消失していたから。

——例えば、この時。わたしは後ろをふり返るべきだった。

ふり返って、リカ表情をちゃんと見るべきだった。

この瞬間にリカが浮かべていた——歪んだ笑みを。

ラーマさんの全快が確認できてすぐ、わたしたちはアルカトラズ刑務所の外へ出た。

すると、待ちかねたとばかりに二騎のサーヴァントが立ち塞がった。

このアメリカ特異点で最初に遭遇したランサーたち、フィン・マツクールとデイルムツド・オディナだ。

「やあ、リカ殿。前回の約束は覚えているかな？」

「覚えてます。その上で、ごめんなさい。お断りします。あたしには心に決めた人がいるので、あなたの求婚はお受けできません」

リカがこんなにハキハキと物を言うのは珍しい。物凄く珍しい。戦場なのに呆気にと取られてしまったくらいには。……ん？

今リカは「心に決めた人がいる」って言ったわよね？ い、いつのまに!?! 誰と!?!

「え、子ウサギってばあの男にプロポーズされてたの!?! ちょっとマシユ、アンタのマスター、意外とやるわね!」

やめてください心が折れそうです。

「人数の多寡は量で平均化するでしょう。なに、君たちのほうにも一人、一騎当千のサーヴァントが蘇ったのだろう?」

「その通りだとも!」

復活したラーマさんは意気軒昂だ。ただ元気もりもりになっただけではない。

「我が宝具は梵天から預かりし神の刃。数を集めた所で敵にはなら

ぬ。まして、余はいまシータと共に在る！」

「——はいっ！　お願いします、ラーマさん！」

リカの弾んだ声援を受けて、ラーマさんが一番槍。

ラーマさんは鉈剣の一閃でケルト兵士を5人まとめて仕留め、返す刀でゴブリン2体を「V」の字を描くように斬り伏せた。

より強い戦士——シータさんの言葉は正しかった。ラーマさんの剣筋は無駄がないのに圧倒的だ。

わたしも盾を手に、ケルト兵士と怪物が群れる戦場に飛び込んだ。ラーマさんに後れを取ってはいられない。リカを敵から護らなくては。特にフィンから。それに、数が話にならないというのはラーマさんに限った話ではない、わたしだってリカが後ろにいればそれくらいの心意気でいるんだと示さなければ。

負けられない。敵にも、味方にも。こと、リカを大切に想うという点において、わたしは世界の誰よりも勝っていたい。

……この時代に来てからこんな動機で戦ってばかりいるな、わたし。どうして……

「僕のデインドラン。ただ一人認めた我が主人」

ああ、何だ。答えはシンプルだった。

わたし——マシユ・キリエライトは、ギヤラハッドじゃない。

それを証明し続けなければ、せめて、我を張らなければマシユ・キリエライトが消えてしまう気がして、怖かったから。

後輩のリカのため？　ちがう。わたしが、リカだけはギヤラハッドに奪われるのが嫌だったから。

わたしは、絶好調で鉈剣を揮うラーマさんの背後へ走って、ケルト側のドルイドが束ねて発射したガンドを盾で防いだ。ラーマさんには——うん、余波はないみたい。

「かたじけない、マシユ！　このまま背中を任せてよいか!？」

「任されました。マシユ・キリエライト、行きます！」

やるせなさ、自分への情けなさ、ふがいなさは、この戦場に置いて

いく。

わたしがわたしをマシユ・キリエライトであると認識していられる限り、リカを護るのはギャラハッドにだって譲れないポジシヨンなんだから！

アメリカ9

ケルト兵と怪物の混成兵団を、わたしは真つ先に突破した。

露払いにはラーマさんとエリザベートさんが徹してくれている。

よつてわたし、加えてナイチンゲールさんが相手取るのはこの場の首魁たち。すなわち、フィン・マックールとデイルムツド・オディナ

――

「捉えました！ 今度は撤退を許しません！」

「いいとも。いよいよ決戦だ。君のマスターを娶るか否か、戦いが始まるぞー！」

娶らせませんし、あげません！

「フィオナ騎士団が一番槍、デイルム――」

デイルムツドの名乗り口上を遮る形で、ナイチンゲールさんが拳銃を撃った。これにデイルムツドは面食らったが、そこはさすがのケルトの戦士、弾丸そのものは危うげなく避けた。

「待て待て待て！ お前はサーヴァントだが看護師だろう!？」

「ええ、看護師ですよ。ですから貴方たちを殺すのです。貴方たちは熱病に浮かされている患者のようなもの。ならば私は殺してでも貴方たちを治す！」

……デタラメな理屈だけれど、これがフローレンス・ナイチンゲールなのだ。ここまでの付き合いでイヤってほど知ってる。だって彼女の「命を救う」ことへの信念は本物なのだから。

デイルムツドにもその一点だけは伝わったようで、彼の双槍の構えはより堅固なものへ転じ、ノーモーションでナイチンゲールさん突きにきた。

わたしは両者の間に入って盾で紅槍の刺突を防いだ。

デイルムツドの紅槍が盾の面に接した瞬間を逃さず、スキル・魔力防御、発動！ 盾の跳弾力でデイルムツドを下がらせた。

だけでも敵とてただでは下がらない。デイルムツドはもう片方の槍でわたしの脇腹を薙ぎにきた。

わたしはとっさに左手で剣を鞘ごとずらして、黄槍を受け止めた。

受け止めたものの、少しだけ穂先が掠めて肌が切れた。

大丈夫。デミ・サーヴァントの肉体にとつては、こんなものは掠り傷——の、はずなのに。

この傷、自然治癒する気配がない？

「悪いがその傷は諦める。我が必滅ゲイ・ボウの黄薔薇ヒトタビは一度穿てば治らない傷を与える呪いの槍。傷を消したくば槍を折るか俺自身を倒すか。ともあれ解呪は不可能だ」

拳銃の連射でフィンを牽制していたナイチンゲールさんが、それを、聞き咎めた。

「治らない傷を与える、ですって？」

あの、婦長？　なんだかお顔がいつもの三倍増しで険しいような……あ。

気づいた時にはすでに遅し。ナイチンゲールさんはわたしが止めるより豪速でデイルムツドに突貫をかけていた。

デイルムツドもナイチンゲールさんのただならぬ殺意を感じ取つたらしく、双槍を交差させてナイチンゲールさんが突つ張つた手の平を防いだ。

——アルカトラズまでの道中で、いつだったか彼女が言った。

この世で二番目に嫌いなものは、治せない病気。ニュアンスを汲むに、「病気」には「傷」も含まれている。だから——

「そのふざけた兵器を撲滅しますッ!!　この世に治らない傷などあつてはならないのだからッ!!」

まさにそんな効果の宝具を、ナイチンゲールさんの前で揮つたデイルムツドは、本当に運がなかった。

「こ、この膂力……ぐっ……かつて対峙した魔猪に匹敵して……!?　貴様、まさか!?!」

「はあああああああああ!!!」

ナイチンゲールさんの手がついに黄槍を掴み、そして、握力だけで黄の槍身を砕き折つた……!!

「飛びのけ、デイルムツド!　無敗マク・ア・ル・インの紫韃草!」

横ざまから放たれた水の奔流。フィンの宝具の真名解放。

わたしははつとして、ナイチンゲールさんにぶつからんと迫る奔流の前に立ちふさがって、盾を前へ。

「ロード仮想宝具／カルデアス人理の礎！」

盾に真つ向からぶつかった水圧に腕が軋んだ。けれど好都合だ。直線状の攻撃であれば、盾でフィンにこの水流を反射して叩き返す。

魔力防御、最大出力！

弾いた水流は一条に束ねられ、見事フィンにぶち当たり、彼を吹き飛ばした。

「我が君?！」

主君を案じたデイルムツドの見せた大きな隙。そこに——真正面から駆け込んだのは、ラーマさんだった。

「羅刹王すら屈した不滅の刃、その身で受けよッ!!」

ラーマさんがわたしとすれ違った直後、すぐそばで刃が肉を裂いた音が上がった。ラーマさんがデイルムツドを一刀両断したのだ。

フィンはわたしの前方で昏倒。デイルムツドは血を流す傷口を押しさえて膝を屈した。

両者共に、退去が始まる。……わたしたちの勝ち、だ。

「先輩っ」

「フォーウー！」

つと。後ろからリカとフォウさんに、ぶつかるみたいに抱き着かれた。すると、体の節々の痛みが引いていった。リカ、治療してくれたのね。ありがとう。

「王……くっ」

「はは……まあ、仕方あるまい。いや、存分に戦った。戦い尽くした」
フィンは、光へ崩れていく自身の肉体を気にかける様子もなく、槍を杖代わりに立ち上がると、デイルムツドのほうへ歩いていく。

「私は満足だが、デイルムツド、お前は不満か？」

「はい……此度こそ勝利を、と思っていたので……」

「正直な話、勝敗はどうでもよかったのだ、私は」

フィンは飛び散った水の溜まった一面から両手でそれを掬うと、もう消えゆくばかりのデイルムツドの傷口に水を、癒しの両手から施し

た。

「共に戦えた。ただ純朴に、貪欲に、勝利を求めた。だから、未練がましくしがみつかず、逝くとするさ。供回りを頼めるか？」

「——はい。王よ」

フィン・マツクールとデイルムツド・オデyna、彼らの霊基の消滅を、わたしはこの目で見届けた。

最期まで鮮やかで軽やかで、痛快な戦士たちだった。今この時だけは、フィンがリカに懸想したことを忘れてあげます。

通信機が鳴った。

わたしは通信機の音声スピーカーモードにして応答した。

向こう側の相手は……あれ？ ジェロニモさんじゃなくて、ロビンさん？

通信越しにロビンさんが告げたのは、たった二言。

《悪い。しくじった》

されど、二言——この上なく絶望的な。

アメリカ10

ロビンさんが合流地点として指定した野営地跡に着くなり、エリザベートさんが一番に前のめりになった。エリザベートさんは、先に到着していたロビンさんのマントを掴み上げて迫った。

「一体何があつたって言うの!？」

「……そうだな。要点だけ報告する。——女王メイヴの暗殺は失敗。返り討ちでジェロニモのオッサンとビリー、それにネロがやられた。オレ一人命からがら逃げてきた。道中、アルジュナの追撃に遭ったが、ま、どうにか」

……通信があつてからこの野営地跡に向かう道すがら、覚悟はしたつもりだったけれど……実際に聞くとショックを隠せない。

同時に、切迫感がこみ上げる。あんなに頼もしい皆さんだったのに、クー・フリーンは一度で三騎も薙ぎ払ってしまった。そんな相手にわたしたちだけで戦えるの？

ロビンさんから悄然と離れて歩き去ったエリザベートさんと入れ替わりに、リカがロビンさんの前に立った。

「ロビンさん。怪我とかされては……」

「ありはしたが、そこはそれ、頼もしい救援がどうかしてくれてな。オレの逃亡を有利に運んでくださったのもその救援様様っつーわけ」
「救援、ですか」

「呼んだか?」

わ!?! び、びつくりした。この女性がロビンさんの言っていた救援かしら? 槍をお持ちの所から察するにランサーのサーヴァントなのだろうけれど……ん? その朱色の槍、は……ゲイボルク!?
クー・フリーンの宝具をどうしてこの女性が手にして!?

「まずは自己紹介だ。私はスカサハ。影の国の門番にして、過去にある阿呆な弟子の師範であった身だ。ああ、言うまでもないが私は他のケルト連中とは違い、奴らの保持する聖杯の支配は受けておらぬ」

クー・フリーンの師。つまりはクー・フリーンを超える力量の持ち主。彼女の登場は、暗雲立ち込めていた今後に一筋の光明をもたらす

……かに思われた。

「私はお前たちに手を貸すが、共闘はできぬ。加えて、あの「グー・フリーン」に私は勝てぬだろう。……メイヴめが聖杯に願ったのだろうよ。彼奴を己に比肩する邪悪な王にしろ、と。結果、誕生したのは、王になるために不要なものを削ぎ落とした呪いの戦士というわけだ」

「哀れな。それは強いではありません。人生を檻に封じ込めたに過ぎません」

スカサハさんは教えてくださった。

全体の被害を考慮するなら、むしろ女王メイヴから優先して対処し、聖杯を無事奪取しなければならぬ。スカサハさん単騎で女王メイヴに挑めば、メイヴごと聖杯も斬り捨てかねないとか。聖杯が壊れてしまえば、人理定礎の修復そのものが困難になる。スカサハさんの登板は最後の手段で、やっぱりわたしたちが事に当たらなければならぬのは変わらない。

でも、スカサハさんほどの女傑がバックに控えているというだけで安心感が段違いだ。これまでみたいに、一度しくじったらジリ貧だなんて常を感じながら戦わなくてもいい。モチベーションも保てるっものだけわ。

《では早速だが、スカサハ殿に尋ねたい。ケルト勢力の詳細について知っていることはあるかな?》

「女王メイヴは分かりやすい。己の欲望に忠実な女だ。今は国盗りに夢中のようなが。加えて、アルジュナ」

《アルジュナ、というと——マハーバーラタに登場する大英雄!? ケルト側に!?!》

リカが横から「誰ですか?」と囁いてきたので、わたしは知る範囲で、インドラの射手アルジュナの伝説を教えた。

「そういやジエロニモが言ってたな。アルジュナは正気を保ったままあえてケルト陣営に付いた、みてえなこと」

これにラーマさんが異論を唱えた。

「待て。それはおかしい。来歴を鑑みるに、アルジュナは正義……い

や、少なくとも善や秩序の側に立つ戦士クシャトリヤのはずだ。そんなアルジュナが自発的にケルト勢力に加わったとは考えにくい。余のように人質を取られている可能性も——」

「ちよつとアンタたち!!」

ひゃっ?!? ……え、エリザベートさん? しばらくは戻って来ないと思つたのに——まさか、敵襲!?

「向こうでシャドウサーヴァントがいっぱい出たんだけど、ランサーっぽいサーヴァントが片っ端からそいつらをブツ刺してつてんのよ! アレなに!?! 敵の新手!?!」

「シャドウサーヴァントはメイヴが聖杯で召喚した代物だとして、これと戦っているとなると、いよいよ第三勢力か。面白い。ちと見物しに行こうではないか」

「賛成。私いま滅茶苦茶ムカつてるの。ちよつと全員縊り殺しに行くとわ!」

エリザベートさんが自前のマイク仕込みの槍に腰掛けると、槍が魔法の筈のようにロケットスタートを切った。こう、ばびゅーんと。

って、呆けている暇はない。謎のランサーの正体を確認すべく、わたしたちもエリザベートさんを追いかけた。

開けた荒野に出ると、なるほど確かに、大槍を持った、朱の唐服の男性がいた。

男性は大槍をスプーンかフォークのような軽やかさで揮いながらも、重量感のある一撃のみでシャドウサーヴァントを次々と屠っていく。

「見事な技の冴えよ。天賦の才と地獄のような修練を潜り抜け、肉体に技を浸透させねば、ああはいくまい。——その者! 名は何と申す!」

「ランサー、李書文! よくぞ現れてくれたな、二つ槍のサーヴァントよ! 貴様を見た時から我が心中は嵐の如し。もはや斃さねば収ま

らん。いぎ、立ち合いを所望する！」

い、いつの間にか敵認定されてますよ、スカサハさん!?

「儂が召喚された理由は知っている。しかし、自分はどうしようもなく我欲に満ちた存在でな。己の槍が神に通じるかどうか、試したくて堪らんのだ」

スカサハさんが壮絶な笑みを刷いた。それはまぎれもなく戦士の貌だ。

「李書文よ。ここが影の国であれば真つ先に稽古をつける所だが、生憎、私はもうこの少女らの専属になった。順番がある。ゆえに、マシユとリカの両名と戦い、勝利してみせろ。であればこのスカサハが直々に相手をしよう」

ちよ!?! いきなり何て無理難題を押しつけてくださるのか、この影の国の女王!

「敗北したなら、貴様は疾く立ち去るがいい」

「……道理ではある。ではマシユとやら。立ち合い願おう」

「せ、先輩にもあたしにも、戦う動機がありませんっ」

「ならば儂はケルト側のサーヴァントだと思え。儂はお前たちの敵。さもなくば、死ぬぞ?」

李書文は本気で言っている。スカサハさんと槍を交えるためなら、彼は誰が敵対者であつても殺すんだらう。

そんなこと、許すもんか。

仮にリカの意向に沿わないことだとしても、『僕』はどんな時だつてリカを護っていたいんだ。

わたしは自ら李書文の正面に立ちはだかった。

「先輩……」

「任せて。わたしはあなたのサーヴァントだから」

「あ……はい。じゃあ、先輩をお願いします」

わたしはリカを背にして盾を構えて李書文を見据えた。
李書文もまた大槍をわたしへ突きつけるように構えた。

一拍の静寂。

「始めッ!!」

スカサハさんの合図を受けて、先手を取ったのはわたしでなく李書文のほうだった。気が付いた時にはとづくに間合いを詰められたあと。とつさに盾ごと前のめりになったおかげで、あちらの攻撃がくり出される前に盾で穂先を弾くことができた。

あ、危なかった……！ 頭より速く体が反射的に動かなかつたら、ただの一突きでわたしが終わっていた。

弱気になるな、マシユ・キリエライト。背中にはリカがいるんだから。

そうだ。こと、あの子を護る戦いで、「先輩」が負けていいわけない。今度は李書文の予備動作が視えた。大上段からの兜割り狙い！

わたしは膝を軽く曲げつつ盾の角度を上向けて、読み通りに振り下ろされた大槍を防いだ。防げた、はずなのに、重厚な鉄としなる鞭で同時に叩かれたような手応えが、両手を震わした。

怯んでいる暇はない。間髪入れず李書文が槍の高速ラツシユをくり出した。牽制やフェイントの刺突も混ざった攻撃だと見切れているのに、それらでさえ当たれば必殺の威力だと分かってしまう。防戦一方にならざるをえない。

盾でやつとこさ逸らした穂先が、余波で肌を傷つけていく。全身の至る所が切れて痛みが蓄積する。

——こちらが攻勢に転じるためには、彼の槍を上回る速さで動かなければならない。

——ここでできなくちゃ、同じ槍使いであるクー・フリーンを打倒するなんてできっこない。

李書文の動きを視て、読む。次は足払いが来る。その時に回避のジャンプで高度を得て、落下の勢いを足して盾でボディータックだ！

「先輩、『高く跳んでください』!!」

想定よりずっと高い位置に飛び上がったわたしの体。この感覚——リカ、令呪を使ったの？ わたしが仕掛けようとした一手をリカも分かって？

落下し始めたと同時に、今度は別の指向性がわたしの魔術回路を駆け巡った。

「合わせて——『メジエドの眼』!!」

眼下で李書文が大槍を天に向けた。

矛盾、という故事成語が頭をよぎる。——なら大丈夫。『僕』の盾は誤りなく最強の盾だ。

「ロイド仮想宝具／カルデアス人理の礎!!」

——ぶつかり合った音は、鈍いのに澄んでいた。

直後、頭上からわたしの仮想宝具を受けた李書文の足元に、クレーターが生じた。

わたしは盾の反発力を利用して、大きく下がってリカたちの前へ戻った。

「——儂にここまで食い下がるとは。見上げた娘だ。本気で戦えば天秤がどちらに傾くか分からぬ、か……」

李書文は大槍を回してから肩に担いだ。文字通り矛を収めて見せた。もう彼に戦意はない。

わたしの中で緊張の糸が切れて、どっと疲労が押し寄せた。わたしは大きく溜息をついた。

「先輩っ」

「フオーウー」

後ろから慣れた呼びかけと足音。けれど、わたしの胸に飛び込んだのはフォウさんだけだった。リカは、駆け出す前にナイチンゲールさんが前に立ちはだかって止めていた。

「ミス・マシユ。今の手合わせで負った傷を治療しますので、甲冑を消してください。インナーはそのまま結構です」

そんなの、ちまちまやらなくなたって、リカの治癒魔術なら一瞬で全快するのに……

と、文句をつけたかったけれど、ナイチンゲールさん相手に通じるはずもないので、わたしは大人しく盾とアーマールパーツを消した。

ナイチンゲールさんは一つ頷き、医療バッグから絆創膏やらガーゼやらを取り出して、わたしの切り傷を手当てし始めた。

向こうではスカサハさんが李書文と話を進めている。

「スカサハよ、立ち合いの件は先送りしてもらいたい。矛を交える

のは、世界が救われる救われなないに關係なく、最後に、というのはどうか？」

「よかろう。その時まで、私が生きていればな」

「お前が死ぬような存在には見えぬが」

同感です。影の国、つまり死後の世界を治める女主人である彼女が、そこらのサーヴァントに殺されるなんて想像もできない。

「そうそう。ついでに一つ教えておこう。西部を仕切るライオン頭だが、あれは何かに憑かれています。いっそのこと一発ぶん殴ってやれば、醒めない夢から醒めるやもしれんぞ」

——わたしは李書文さんに共闘を求めてみたが、やはりというか、断られた。曰く、同行したらわたしたちに襲い掛からない自信がない、と。えーと、槍の話ですよね？

李書文さんはカラツと別れを告げて去った。

そこでナイチンゲールさんから意見が出た。

「私、患者に会わねばならないと思います——発明家エジソンに。あれはトーマス・アルバ・エジソン本人と言うには、あまりに異質です。であれば、彼の言った通り、病気です。もう一度、エジソンに会いに行きましょう」

無茶苦茶な展開になる予感、今から大である。

アメリカ

エジソンのいる大統領府へ向かう道すがら、ロビンさんがケルトの戦士を捕虜にしてくれと言い出した。ノンストップで、消耗なしに、大統領府まで進むためだとか。

ロビンさんの策の効き目は劇的だった。

各地の関所に立つ機械化歩兵に対して、ロビンさんがアメリカ西部軍兵士のフリをして、捕虜を輸送中だと虚偽の報告をする。機械化歩兵はわたしたちの同行さえも詮索しないで道を譲った。合言葉は「インダストリー&ドミネーション！」

でも、そのカモフラージュも、大統領府の正門に来てからはさすがに通用しなかった。

機械化歩兵が城塞の中から次々に出て来て列を成した。

やっぱり数に物を言わせるのね。いいえ、一度は物量差で負けたけど、今度はそうはいかないんだからっ。

いざ、という時だった。スピーカーから、エジソンの怒声が響き渡ったのは。

《おのれ貴様ら、まさかケルトに屈するとは！ それでも英雄か！何よりクリミアの天使よ、貴女ほどの信念の人が、私の信念を解さないとは！》

ちよ、これ、音割れがひどい！ 耳にきーんて、きーんて！

「いいえ、まだ望みはありますとも。私たちは貴方を裏切つてなどいない。ましてケルトに与するなど、冗談にも程があります」

《攻め込んできて何を言ってるんだか》

今度はブラヴァツキー女史の声。

《情報によると、あなたたちはメイヴ暗殺に失敗した。それで生きているのは不自然なのよ。敵に寝返つて命乞いをした、というのが真つ当な見解じゃなくて？ フローレンス》

この失礼甚だしい見解に、エリザベートさんが激しく反論した。

「ふざけんじゃないわよ！ アイツがそんなタマかつてえの！」

《あら、竜の尻尾を踏んじやったみたい。気に障ったなら……いえ、失礼をしたわ。ごめんなさい。——エジソン。どうやらあの子たちはただの負け犬みたい。ケルトに与したって線はなさそうよ》

《ぬ？ つまり敗軍だと？ 我々の庇護を求めに来たというわけか？ だが、それにしても殺気に充ち満ちている！》

「——エジソン。こうして対面してみても理解できませんでした。貴方は病んでいます。即刻治療を受けなさい」

それなりに長い空白を置いて、ようやくエジソンの発声器官が復活した。

《……無礼な。私のどこが病んでいると言うのだ。強靱な四肢。はち切れんばかりの健康。研ぎ澄まされた知性。どこを取ってもスタンダードではないか！》

J A R O 通報レベルの発言である。

「世界を救う力を持ちながら、理性を保ったまま世界を破滅に追いやるうとしていいる。それが病以外の何なのです。今そちらに向かいます。大人しくベッドで休んでいなさい」

ナイチンゲールさんは拳銃を連射してスピーカーを破壊した。

「銃を撃つと演説が終わる……覚えましたが、先輩っ」

「忘れなさい」

「は、はい。先輩が言うなら、忘れます……」

リカは、しよぼんとした。そんなリカに、肩に乗っていたフォウさんが擦り寄った。フォウさん、ありがとうございます。……このところ、リカとのスキンシップを図るとナイチンゲールさんに阻まれることが多かったから。わたしの分もリカを和ませてあげてください。

「無駄話をしている暇はありません。さあ、踏み込みましょう」

すると、大統王府の城門を守っていた機械化歩兵が一斉に引き上げて、代わりに一騎のサーヴァントが現れた。——カルナだ。

「やはり来たか」

「はい。来ましたよ。大英雄カルナ！」

カルナの手にはすでに錫杖が握られている。初手から獲りに来る気んでいるんだ。

わたしは盾を実体化した。皆さんも武器を出して身構えた。

「ここを通すわけにはいかない。……、……助けを乞われたのだ。オレのような益体もない男に、跪いて。先に乞うたのがエジソンだった。お前たちに敵対する理由としては充分だろう」

カルナの顔には微笑が浮かんでいる。その笑みは、なんだかとても、彼を親しみやすい人物であるかのように見せた。

「オレは一言足りないらしいので、余計だが付け足させてもらった。一度目は目を瞑った。此度は二度目。あれからどれほど腕を上げたか、見せてもらおう——！」

カルナが錫杖を突き出すより、迅速に、わたしは盾を前面に構えて飛び出した。

——槍使いが獲物から刺突をくり出す前の小さな小さな前動作が、視えた。これは李書文さんとの立ち合いを経験したから掴めた勘だ。

カルナとの闘いは短期決戦を狙う。長く盾と矛を交えたって、それこそ永遠の矛盾で決着がつかない泥仕合になる。

錫杖の軌道を盾で逸らしながら、カルナの懐に入った。

仮想宝具の展開は必要ない。スキル・魔力防御で盾をフルコーティング。そのまま全体重を預けてのボディアタック！

わたしの攻撃を真正面から食らったカルナが大きく後退した。あくまで後退しただけ。ダメージは負っていない。でもいい。デミ・サーヴァントのわたしが、大英雄カルナに傷を負わせられるとは思っていないかった。

わたしの役目はここまで。カルナを大統王府の敷地内に押し戻すだけでいい。

「ラーマさんッ！」

「引き受けた！ 中へ進め、マシユ！ リカ！」

敷地内でインドラの英雄が二騎も衝突しては余波による建物への被害が免れない。必然、カルナは手加減せざるをえなくなる。そして、全快したラーマさんの実力はカルナと五分だとジェロニモさんが言っていた。

わたしは、フオウさんを抱いたり力を抱き上げて、脇目も振らずに

大統王府の中へと走った。ナイチンゲールさん、ロビンさん、エリザベートさん、スカサハさんがわたしたちに続いた。

「ドクター！ エジソンのいる部屋までナビをお願いします！」

《ルート算出済みだ！ 東側の最上階まで駆け上がってくれ！ そのエリアに部屋は一つしかない。そしてサーヴァント反応が二騎。間違はなくエジソンとブラヴァツキーだ！》

緊急時はめきめき頼れるようになってきたドクター・ロマン。そういうところ、嫌いじゃありません！

機械化歩兵と道中やり合いつつも全機撃破して、わたしたちは大統王府の最上階へ上り詰めた。

ドクターが言った通り、階段を上がって向こうに見える部屋のドアは一つきり。

「リカ。わたしの後ろに」

「はい先輩っ」

「フオーウ！」

このやりとり、久しぶりな気がする。うん。やっぱりしっくり来るや。

「突入します！」

「フオーウ！」

わたしたちはドアを蹴破って、全員で執務室に雪崩れ込んだ。

部屋の中には、鼻息荒く仁王立ちするエジソンと、傍らにブラヴァツキー女史。畏の気配は一見して感じない。

「よくも来たな、嘆かわしき裏切り者たちよ！ 何故私の正しさを信じられないのだ！ さては陰謀説に浸かっているのか!? エジソンは資本主義の権化だ、とか！ 真の天才は商売などに傾倒しない、とか！」

陰謀説に振り回されているのはご自身ではないでしょうか？ あと、「真の天才」というフレーズに屈折した何かを感じたのですが、特定の比較相手がいらっしやるんでしょうか？

ナイチンゲールさんが溜息をついた。

「ミス・マシユ。ミス・藤丸。オペの準備を。まずは安静にさせてから、話を聞かせるほかありません」

やっぱりそうなりますよね。

「強気ね、フロレンス。それはもしかして、あたしたちと戦って勝つということかしら」

「ええ。戦って、殴って、勝ちますが」

「分かりやすく好きよ、そういうの」

ブラヴァツキー女史が腕を一振りすると、おとぎ話に出てくる魔法みたいに一冊のハードカバー製本が現れた。しかもその本は宙に浮いている。

「ミスタ・エジソン、準備はいい？」

「う、うむ!?! ああ、できているとも。最大電力で迎え撃つて……!」

「あ。それはダメよ。あなたの宝具は窮地に立たされない限りは温存して。あたしが十全に力を発揮できなくなってしまうわ」

「そ、そうだったな。失念していた……すまない、ブラヴァツキー」

エジソンの宝具が解放されるとブラヴァツキー女史が力を出せない? それはどういう意味の……つと、とと!?

わたしは、電撃が炸裂する寸で、リカとフォウさんを抱えてその場を飛びのいた。電撃はエジソンの攻撃だ。ロンドンで会敵したニコラ・テスラと同じで、エジソンも電気を主武装としているということか。

加えて隣のブラヴァツキー女史は極めて魔術師らしいキャスター。今は攻勢に転じる気配がないが、いつ魔弾やらが飛び交うか分からない。い。

慎重に攻めなくちゃ——って、ナイチンゲールさん!? 急に飛び出して、エジソンの懐に入って……アツパーカット!?

「ぐふう!?!」

「ドフォーウー!」

これにはわたしも、リカとフォウさんも、ロビンフッドさんもエリザベートさんも呆気にとられた。最後尾に控えているスカサハさん

だけが爆笑している。

吹っ飛んだエジソン氏の胸倉を、ナイチンゲールさんは掴み上げて往復ビンタ。からの、一本背負い。さらに殴った。

な、殴ってる。クリミアの天使が素手で天才発明家をこれでもかと殴ってしばき倒している。歴史評論家が見たら号泣しかねない一幕だ……

と、そうじゃなくて！

押しているのは意外にもナイチンゲールさんのほうだ。看護師という職業ゆえか、彼女は的確に人体（エジソンの見た目はライオンだけど）の急所を理解して、そこに拳を叩き込んでいる。

「がふっ！ まだ敗北しない！ 私は、ゲホオツ、屈さない！」

……一方向的にいじめている気分になってきた。しかも動物虐待だ。どうすればいいのかしら、これ……

「第一の光！」

ブラヴァツキー女史の本から光線が放たれて、ナイチンゲールさんに直撃した。ナイチンゲールさんがエジソン氏のマウントから吹っ飛ばされたことで、わたしたち全員が我に返った。

「か、かたじけない、ブラヴァツキー……っ」

「あんなの、どんなサーヴァントでもさすがに見かねるわよ。大丈夫？」

わたしたちの前に転がったナイチンゲールさん。わたしとリカは慌てて彼女に駆け寄って、わたしのほうで彼女を支え起こした。

「大丈夫ですか!?!」

「フオウフオウ！」

リカがナイチンゲールさんに手を伸ばした。治癒魔術をかけようとしている。なのに、ナイチンゲールさんはリカの手の平を叩き返した。

「その『治療』は履き違えていると前にも言ったはずですよ」

「っ、だ、って、あたしにできるの、このくらいしかないのに……っ、ど、して」

リカの瞳が潤んでいく。

本当に意味が分からない。バーサーカーだから、で済む話ではない。なぜナイチンゲールさんはこうも頑なにリカの治癒魔術を拒むの？

「戦士として及ばないのであれば、この身を科学に捧げるまで！ トーマス大変身・大改造の時である！」

エジソン氏がどこからかフラスコを取り出した。——毒々しさにドン引きせずにはおれない、そんな毒物丸出しの液体がなみなみと注がれたフラスコだ。

「今こそ、今こそ獣のぶとき雷音強化！ トーマス・マズダ・エジソンに変貌してくれ」

ビシィツ!! と、エジソンの手をチョップした者がいた。エジソンが手に持っていたフラスコはそれで床に落ちて割れた。

「な、何をするのだ、カルナ君！」

カルナのほうが戻ってきた？ じゃあカルナと戦っていたラーマさんは!?

「すまん、マシユ、リカ！ カルナの撤退を許してしま……どうした？」

ちよつと怪奇的な混戦模様だっただけです。ケガが見て取れますがご無事で何よりです、ラーマさん。

「悪いがエジソン、ここまでだ。それ以上、滅びの道を歩ませるわけにはいかん。それに第一、間違いなく体に悪いぞ、その薬は」

うんうん。わたしとリカとフォウさんで、全く同じ角度で頷いた。

「ノー！ 良薬は舌に苦いものだ。心臓が爆発するぐらい耐えてみせるとも。ここで私が踏み留まらなければ、誰がこの国を守るといった！」

「守る、ですか。その割にはずいぶんと非合理的な戦いぶりですね、エジソン」

しかしこういう時でも事の真理を呵責なく突きつけるのがフローレンス・ナイチンゲールであると、ここまでの旅でイヤってほど思い知ってる。

非合理的と言われて呆然としているエジソン氏に、ナイチンゲール

さんはインフォームドコンセントを開始した。

ケルトの戦士とアメリカ兵の力の差。大量生産による戦略の陥穽。そういう筋を立てた説明で、それこそ極めて合理的に。あの発明王エジソンさえ、彼女の舌鋒に唸っている。

「我々にはアメリカだけではない。この世界を癒し、救わなければならない使命オーダーがある。イ・プルーリバス・ウナム。多数の民族から成立した国家であるあなた方は、あらゆる国家の子に等しい。ならば貴方がたには世界を救う義務がある」

「ぬ…………ぐ…………」

「そんな自己欺瞞から目を逸らす有様だから、貴方は同じ天才発明家として、ニコラ・テスラに敗北するのです」

「GAoooooooooooooooooooooooooo!!?」

絶叫。そして、エジソン氏がひっくり返った。

《だ、大丈夫かな? エジソン氏、生きてる?》

「はい。倒れてはいますが痙攣していますので、命に別状はないと思われませす」

《普通の人間だったらそれ瀕死のサイン! マシユ! ナイチンゲールに感化されてアタリ判定厳しくなってない!?》

「ドクター、すみません……………さすがにあたしも、今のエジソンさんは治せそうにない、です」

《リカ君も! それ治せたらダメなやつ!》

しばらく時を置いて、四つん這いながら、エジソン氏は辛うじて復活した。

「…………認めよう。私は歴代の大統領たちから力を託され、それでも勝利できないという事実を導き出し、自らの道をちよつとだけ踏み間違えた…………」

ちよつとだけ、という部分を復唱しようとしたリカのお口を空かさずガード。

「…………まで市民に犠牲を強いておきながら……………私はこれからどうすればいいのか…………」

「簡単よ。あなたはいつも通りにやればいい。何度失敗してもへこた

れず、周りにさんざん苦勞をかけておいて、自分だけはちやつかり立ち上がる。あなたの長所って、詰まる所そういうところだったでしょ？」

ブラヴァツキー女史は無邪気な少女の貌でエジソン氏に笑いかけた。

「エジソン。お前は道に迷ったが、お前が目指していた場所は正しいものだ。何かを打倒することではしか誰かを救えぬ英雄と異なり、お前の発明はあらゆる人間を救ってきた。その成果を糧に立ち上がれ。そろそろ目を覚ます時だ、偉大なる発明王よ。お前の頭脳にはまだ、多くの資源たからが眠っている」

頭脳。資源。発明という概念さえないインドラの大英雄が、それらの価値を正しく認め、讃えた。これはすごいことなんじゃないだろうか？

「ブラヴァツキー嬢、カルナ君……うむ、うむ！ 大統王は死なぬ、何度でも立ち上がらねば！ 迷惑をかけたな、二人とも！」

「いいのよ、友達でしょ？」

「そうだな。差し出がましいが、友人だな、ここまで来ると」

「——ふ。私はいつも、いい友人に恵まれる。こればかりは、あのすつとんきようも及ぶまい」

すつとんきよう？ どなた？

「そしてカルデアのマスターとサーヴァントたちよ。謝罪し、感謝する。私は今度こそ、世界を救う大発明を成し遂げたい！ 君たちに続くサーヴァントの一員として、だ。どうか共に世界を救ってもらいたい。我がマスター・リカ、我が戦友マシユ・キリエライト」

わたしはリカと顔を見合わせて。

「喜んで!!」

アメリカ12

……百家争鳴して、で始まる日本の諺は何だったっけ？

全サーヴァントによるケルト攻略会議が始まって約1時間。

わたしは複雑な気分で、紛糾する議場を見回したのだった。

現状をまとめると、以下のようなになる。

ケルトは北米大陸の東の半分を占領している。最終的にあちらは南北の2ルートから攻め入ると予想される。こちらから攻め込むとなれば、南北のどちらかが手薄になる。結果、押し負けてわたしたちは敗北。

ドクター・ロマンによると、この「戦争」の敗北条件は「一定以上の領土が占有されること」。ただでさえ脆弱な時代との繋がり、ケルトが支配領域を広げるほどに切れていく。攻めながら、かつ、これ以上の領土を決して明け渡さないように立ち回らないといけないってこと。

ケルト側のサーヴァントは、クー・フリーン・オルタ、女王メイヴ、ベオウルフ、アルジュナ。厄介なのしかない。

あれこれ議論して、成功率の低い手段を消していくと、やはり、「正面からぶつかる」が最後の選択肢に残った。

「南北それぞれに、機械化歩兵とサーヴァントを割り当てる。二軍の内、一軍は拮抗を維持するだけで構わない。本命の軍で一気に首都への突破を図る。そんな所だろうか？ スカサハ」

「そうだ。今ここには複数のサーヴァントがいる。しかし『二軍が拮抗』では押し負ける。かといって一軍に戦力を集中すれば、残り一軍が崩壊し、アメリカが占領される。あらゆるバランスを考慮して、南北両軍の編成を決めなければならぬ」

「それなら簡単じゃない。ほら、子ウサギ！ ボケっとしてないで、アスタが組み合わせを決めなさい」

リカに、決戦の部隊編成を、任せる？

そんなの、リカにはとんでもないプレッシャーだ。最悪倒れかねない。

「色んな時代でサーヴァントと共闘してきたんでしょ。アンタは今までで一番サーヴァントを知っているマスター。アンタが選ぶんなら、アタシはそれを信じられるわ」

リカのリアクションはわたしの予想を裏切った。

「信じ、る？ あたしのこと——本当に——？」

こんな大任を受けたら、泣きそうな顔で震え出すのがわたしの知っているリカだ。けれども今、リカは驚いてはいるけど、恐がってはいない。

「明日までに南北両軍のサーヴァントたちの編成を決める。リカよ、できるか？」

「——やってみます」

こんなリカ、わたし、知らない。

わたしはすっかり狼狽えて、何一つ口を挟めなかった。

「Interlude」

夜がとつぷりと更けた時間帯。私はカルデアのマスターを偶然見つけた。

彼女は忙しなく周囲を見回してから、廊下を忍び足で進む、そんな挙動をくり返した。

「こんな夜中に散歩ですか？」

「——つつ!!」

彼女は大きく飛びずさって、自分の足を自分でもつれさせてその場に尻餅を突いた。

「あ……こ、こんばんは。ナイチンゲール、さん」

「こんばんは、ミス・藤丸。明日の編制はいいのですか？」

「もう決まりましたから。て、適当に割り振ってはない、ですよ？」

「分かっています。貴女はそういう不真面目なことには向かない人間でしょうから」

「えへへ……」

む。そこで照れるのは文脈がおかしいのでは？

ですが、部隊編制が決まっているのなら、気兼ねなく夜の散歩に誘えます。二人で話したいこともありましたし。

「おさんぽ? ……はい。いいですよ」

私は彼女と連れ立って、大統王府の砦へ登った。

眼下には灯りを消した町並みが広がっていた。この国の病は残り一つ。それで全てが癒されるといいのですが。

「何かあたしに話があったんじゃないんですか?」

気づけば私とミス・藤丸の間には距離が空けられていた。

——出会った最初から、彼女の私への視線は感じていた。まるで私に別人の面影を見ているような、そうでないと分かって残念がるような。

でもそれは些事だ。彼女という個人が抱える病は認識違いとはまた別にある。

「ミス・藤丸。私は殺してでも貴女を救いたい。初めて会った時からその気持ちは変わりません。ですが、私はアルカトラズで致命的に間違えた。ラーマ君の治療の場面を貴女に見せてはいけなかったのに、それをその場で思いつけなかった」

彼女は微笑んでいるが、無言だ。

「藤丸立香。あなたは病気です」

彼女の笑みが途絶えた。親しみが消え失せ、表情は単なる口角の筋肉運動に。

「ラーマ君の命を救ったことに後悔はありません。彼は患者、救われべき者でした。ですが同時に、貴女という新しい患者を生んでしまいました。その点において私は猛省しています」

「ちなみに、あたしのどの辺が病気なんでしょうか?」

「——自己犠牲。愛する人を救うために命を擲ったミセス・シータを見て、貴女はあれが最適解だと誤認してしまった。考え直さない。その答えは病んでいる。命と引き換えに救われて喜ぶ人間など一人もいません」

「でも、それであたしが死んでも、困る人も一人もいませんよね?」
「いい加減にしなさいッ! あなたは自分の命を何だと思っているの

です！」

「何って、

ですけど、それが？」

その返答を以て、私は決心した。彼女を治療しないまま帰すわけにはいかない。

私が医療バッグからメスを取り出したと同時に。ふふ、と彼女は囁くように笑った。

「監獄塔にいた時、メルセデスはあんなに優しくしてくれたのにね。ちよつと残念」

知らない名前だった。私が気に留める必要性はない。ないはずなのに、どうしてか、今はすでにない、遠くに在るものを想うような気持ちになった。

囁りは止まらない。

もどかしい。患者は手の届く所にいるのに、患部に触れられない。

「あたしが救われる日が来るとしたら、それは運命のひとつの手でがいい。それまでこの心は痛いままで。誰にも触れさせない。大事に取っておく。これはあたしの誓いの証。他の何を暴いても、この想いだけは覗かないで」

「Interlude out…」

宛がわれた客室のドアが外からノックされた。

ソファアで微睡んでいたわたしの意識はすぐさま覚醒した。

わたしは横で丸まっていたフォウさんを落とす勢いで立ち上がり、ドアを開けに行った。

——やっぱり、訪ねてきたのはリカだった。

「こんばんは、先輩……今日……今夜も、一緒にしても……」

いつもの任務前夜と同じだ。一つのベッドで寝て、ふたりで朝を迎える。わたしとリカには自然な夜の明かし方。

「いいよ。どつどつ」

リカはぱつと顔を輝かせて、客室に入ってきた。その拍子に浮いた長い髪からいい匂いがした。シャワーはもう済ませてきたらしい。

……本当は尋ねないほうがいいのだろうけど、どうしても気になることがあった。

「明日の部隊編制は、できたの？」

「はい。なんとか、それらしくまとめられました」

よかつた、と安心する一方で、置き去りにされたかのような寂しさが胸に湧いた。

わたしはリカの頭を撫でた。大きな決断をしたリカを褒めるためではない。そうすることで、後輩の成長を喜ぶ「先輩」としての気持ちが強いのだと、自分に言い聞かせる意味合いが強かった。

だと、いうのに――

リカはわたしに頭を撫でられながら、じわじわと、琥珀色の両目を潤ませていき、ついにはわたしの胸に飛び込んだ。急なことでわたしはしたたか面食らった。

「リ、カ？」

「――ねえ、先輩。明日、あたしが決めた編制に反対の人がいたらどうしましょう？ あたしの決めたこと、おかしいところがあったら、間違ってたなら、ダメって言われたら……怖いです。こんなに勇気振り絞ったの、人生で初めてで、でも上手く行かなかつたら……あたしきつと、二度と立ち上がれない。本当はすごく怖いです……っ」

わたしは堪らず、リカを抱き締めた。わたしの腕の中でリカは嗚咽を上げ続けている。

――わたしは何て馬鹿な勘違いをしていたの。

リカは何一つ変わっていなかった。怖がりで人見知り、自分に自信がなくて、声一つ上げるだけでも怯える、ただの女の子。それがリカ。わたしのたった一人の後輩じゃないの。

「大丈夫。大丈夫だから。わたしが付いてる」

「せん、ばい……っ」

やっと泣くことを覚えてくれた、この子を、大事にしよう。わたしが護り通そう。いつまでも、どこまでも――わたしの命が枯れ果てるまで。

アメリカ13

リカの決めた編成は以下の通りだ。

北軍には、エリザベートさん、ロビンフッドさん、エジソン氏、ブラヴァツキー女史。

南軍には、カルナさん、ラーマさん、ナイチンゲールさん、スカサハさん、わたし。加えて、率いる機械化歩兵には、サーヴァントに追随可能なよう、エジソン氏がブラスターを組み込んでくれた。

ただ、若干の変動はあった。スカサハさんの単独離脱と、カルナさんの先陣を切りたいという要請である。

どちらの希望にも、リカは平静に頷いた——震えを隠して。

スカサハさんの見立てだと、全面衝突は南北共に3日後。

北軍はただちに発つべきとのことだったので、エリザベートさんとロビンさん、エジソン氏とブラヴァツキー女史は早々に大統領府を後にした。スカサハさんもまた、遊撃手として別ルートで出発した。

「あの、先輩？　なんだか心配そうな顔してるような……」

「フオウフオウ……」

「その指摘は当たっているぞ、リカ。敵の首魁はクー・フリーン。あれが敵に回っている以上、我々に確実な勝利というものはない。それでも勝利を得るために、我らは死力を尽くすのだ。マスター、さあ、号令を」

リカは一度俯いたものの、決然と顔を上げて、普段のリカからは想像もつかない大声を張った。

「これが最後の戦いです！　敵はホワイトハウスにあり！」

「アメリカ合衆国をお前たちの手に取り戻せ！　そのために我らも力を貸そう！」

「全軍、進撃——開始！」

西部合衆国の全兵士が、応えて大きな鬨の声を上げた。

南軍の進軍は極めてスムーズだったと言える。先遣隊のカルナさ

んとその兵士たちが、ほとんどのケルト兵士を先もって討ち破つてくれたおかげだ。わたしたちはカルナさんたちが討ち漏らしたケルト兵士やワイバーンを討った。

「本格的な激突まではあと僅かだ。総員、気を抜くなよ！」

兵士たちが応えて怒号を上げ、それぞれ銃を再装填し始めた。

《さすがコサラの王。どんな年齢すがたであれ、絶大なカリスマ性だね》

ラーマさんは複雑そうな表情を浮かべたものの、すぐにそれを引き締めた。

しばらくして、兵士から報告があつた。

20キロ先で敵軍を視認。敵軍を率いているのは、褐色の肌をした白衣の弓使い。

「カルナには伝えたか？——そうか。ならいい。戦闘になつても、その弓使いにだけは近寄るなど総員に到達してくれ」

兵士が了解して下がった所で、ドクター・ロマンが通信をオープンにした。

《……アルジュナだね》

「ちよつとした悪夢のようだな。アルジュナはマハーバーラタの主人公とも言える大英雄だぞ。あらゆる戦場で勝利を掴み、カルナですら一敗地に塗れた。果たして勝てるものか……」

答えたのは、リカだ。

「そこは、勝ってください。今はシータさんと一緒、なんでしよう？」

「——そうだったな。余の命の隅々に渡るまで、妻シータは共に在る。思い出させてくれて感謝する、マスター」

「いいえ。ラーマさんがそう思ってくれる分だけ、あたしも希望が持てますから」

リカは穏やかに笑んで胸に両手を当てた。そのしぐさは、可憐というより、敬虔だった。

行軍を進めて、ついにわたしたちは激戦区へと踏み入った。

戦場の中央で対峙している二名。純白の射手アルジュナ。黄金の

槍使いカルナ。彼らの激突は、わたしたちが割って入っていいものではない。そんなの自殺しに行くようなものだ。

わたしたちの敵は、ケルト軍の兵士と怪物ども。

ラーマさんが兵士たちに号令を発す。

「ワイバーンなどを含めた敵への対処は、行軍中に叩き込んだ通りだ！ 奴らは強いが、ただそれだけだ！ 恐れる必要はない！ —— お前たちにはこの土地を守る義務がある。それは所有者だからではない。奪ったからには、最後まで責任を果たせということだ！ 幾千幾億もの命が、お前たち一人一人に懸かっている。この戦争は、お前たち一人一人が勝たなければ意味がない。勝利を掴め！ さあ、行くぞ！」

カルナさんとアルジュナの戦いからあぶれたケルト兵士軍団が向かってくる。わたしは先んじて実体化させた盾を握り直した。

両軍が、激突した。

スキル・自陣防御を最大値で発動。アメリカ軍の兵士たちの護りを少しでも堅牢にして、死傷者を増やさないように。

そうしてわたしが防衛領域を築いても、敵がケルトの戦士となれば、どうしてもこちら側に負傷兵が出るのをまぬがれない。けれどこちらには最強の看護師——ナイチンゲールさんがいる。彼女は戦場を縦横に駆け、負傷兵を手当てして回った。

こちらはどうにか持ち堪えている。

アルジュナと邂逅したカルナさんは無事だろうか？ わたしは通

信回線を開いてドクター・ロマンに尋ねてみた。

《……すごいぞ。まさに神話の再現だ！ さすがはトップサーヴァント。色々と針が降り切れてるな！ とにかく映像をこちらに回すから見てくれ！》

通信端末に青い光学スクリーンが展開した。

映っているのは、カルナさんとアルジュナの——死闘と表現するのもおこがましい、ヒトの域を凌駕した激突だ。

崖は槍の一閃で焼失する。

荒野は矢の一本でクレーターを生じる。

わたしたちが駆けつけても、せいぜい観戦しかできない。

だとしても、ただ安全圏で映像鑑賞しているよりはよっぽどマシ！

「リカ、行こう！」

「はい先輩っ」

「フォーウー！」

わたしはリカと手を繋いで駆け出した。

到着した現場では、もはや「戦い」という形容すら生々しい光景が広がっていた。

アルジュナは弓兵。カルナさんに懐に入られれば、自慢の矢も射られない。そのわずかな差がカルナさんに優勢をもたらしている。このまま押し切れば、カルナさんが勝て……！

「——抉り穿つ塵殺の槍」

——え？

カルナさんの胸から槍が生えた——訂正。カルナさんの心臓を、背後からゲイボルクが貫いた。

「悪く思うな、施しの英雄。こいつぁルール無用の殺し合いでね」

クー・フリーン・オルタは邪悪な笑みを刷いて、カルナさんから紅槍を抜いた。

「カルナさんッ!!」

わたしもリカも弾かれたようにカルナさんに駆け寄った。

片膝を突いたカルナさんの左胸には、ラーマさんと同じ陥没。そこからどんだん血が溢れて地面に落ちていく。

「さあて。そいつが例のマスターか」

わたしは立ち上がって、リカとカルナさんを背にして盾を構えた。

「何だよ、震えてるじゃねえか。歴戦の勇者つてのはこっちの思い込みだったか」

——容姿は確かに冬木で一緒に戦ってくれたキャスターさんだ。でも目に惑わされてはだめ。あの「クー・フリーン」はキャスターさんとは別人で、わたしが戦うべき敵。

「ナイチンゲールさん。リカとカルナさんを下がらせてください。カルナさんに治療措置を」

「言われるまでもありません。ミス・藤丸、彼の反対側の肩を担いでください」

「は、はいっ」

リカたちは後方へ。入れ替わるように、ラーマさんがわたしと並んだ。

「スカサハはどうした!?!」

「ん? ああ、斃した」

クー・フリーン・オルタのあまりにも軽快な回答に、立ち眩みに見舞われかけた。

斃し、た……スカサハさんが、死んだ……?

「弔いの言葉なら必要ねえぞ。オマエたちもここで死ぬんだ。傷の舐め合いは冥土で勝手にやってろ。——蠢動せよ、死棘の魔槍」

クー・フリーン・オルタの宝具が来る!

あの朱槍は因果を超えて心臓を穿つ。いくらギヤラハツドの盾でも、真名解放できないわたしじゃ、呪いの槍は防げない。全速離脱したくても、もう間に合わない……!!

「先輩ツ!!」

反射的にふり返ると、リカがわたしのほうへ駆け戻ろうとしていた。わたしを助けようとしている。

だめだと叫ぶ暇さえない。よしんば間に合っても、リカの治癒魔術じゃゲイボルクの呪いの傷を治せないのは、ラーマさんで証明済み。

わたしはこの時初めて、カミサマというものに全力で祈った。

何でもいいから奇跡を起こして。わたしにリカを護る力をちょうだい……!!

——カミサマは応えなかったけれど、祈りは、確かに届いていた。誰もいなかったはずの場所に、白いローブの男性が現れた。

それだけなのに、ゲイボルクは発動を止めていた。呪いの槍はわたしたちの誰も傷つけていない。

「ちよつとうたた寝しながら歩いていたら、そこは見知らぬ荒野の国。

これは夢の続きか幻か。おはよう、そしてこんにちは、諸君。みんなの頼れる相談役のお兄さんの登場だよ」

ギヤラハツドの霊基が大きく鼓動した。——「僕」は彼を知っている。

「——テメエはどこのボンクラだ？ こいつは白昼夢ってヤツか？」

「もちろん。私の十八番、相手を煙に巻いて何とかする戦法さ」

「夢魔のたぐい……そうか。テメエが星見か。反則級の邪魔をしやがって。テメエの矜持が崩れるぞ？」

「そこはそれ、私に誇りとか決まりとか、そういうの無いからね」

あなたは——ここにいるはずのないヒトだ。それだけは確かだ。あなたは最果ての島より世界を見晴るかす御仁。見ているだけで、^{ぶたい}世界そのものには上がれないはず。そんなあなたがなぜこの場に——

——いいえ。わたし、何でそんなことが分かるの？ ギヤラハツドの記憶の残滓がまた？ やめて！ これじゃわたしがギヤラハツド本人みたいじゃない！

「つと、本当にうたた寝から覚めそうだ。申し訳ないけど、私にできる手助けはここまでだ。あとはキミたちの手であるの狂王を倒すしかない。それが果たされた先の未来で再会と行こう。それでは失敬。キヤスパリーグをよろしくしてやってくれ」

「——『オシリスの塵』」

はつと、我に返った。

クー・フリーンが舌打ちして大きく身を翻した。奴の背後にいたのは、血まみれのカルナさん。

「灼き尽くせ……日輪よ、^{ヴァササヴァイ・シヤクテイ}死に随え!!」

満身創痍のカルナさんがその槍その身に膨大な炎を集わせ、解放した。

神をも殺す火焰の槍を、神なきこの大地を侵さんとする狂王を滅ぼすために、惜しげもなく、命さえ惜しみもせず使った。

爆発した。

比喩でもなんでもなく、カルナが爆心地となってクー・フリーン・オルタに劫火を浴びせた。

でも、威力があと一歩届かなかった。クー・フリーン・オルタは火傷まみれだけど健在だ。カルナさん自身、そうと分かったからか、無念を顔に浮かべて、消滅した。

「最後の最期で足掻きやがって。これだから槍使いの生き死には信用ならねえ」

どの口で……！

茫然自失はここまで。わたしは盾を握り締めた。目の前には手傷を負ったクー・フリーン。今ならラーマさんと総がかりで奴を倒せるかもしれない。

「こちとら今ので全身大火傷だ。帰って涼ませてもらうぜ」

「逃げても無駄ですよ。クー・フリーン、貴方は病氣です」

え、とわたしはついクー・フリーン・オルタを見やった。

傷を負っているというのならわかる。カルナさんの決死の一撃でクー・フリーン・オルタは全身に火傷を負った。けれど、ナイチンゲールさんの指摘は火傷ではない。

「……ハ。お前の言う通りだ、血まみれの天使。オレが癒される日なんぞ、永遠に来ねえだろうよ。倒れて朽ち果てるその日まで、オレは王で在り続けるだけだ。——来るなら来い。ワシントンで戦ってやる」

クー・フリーン・オルタの姿が掻き消えた。女王メイヴが聖杯で呼び戻したのかもしれない。

この機を逃さず、ラーマさんは全軍に進撃を命じた。アメリカ軍兵士たちはケルト戦士やワイバーンに向かって、それぞれの全力を尽くして戦い始めた。

空白地帯になったここに立つのは、わたしとリカ（とフォウさん）、ナイチンゲールさん——そして、アルジュナだけ。

その場に立ち尽くすアルジュナに対し、ナイチンゲールさんが呼びかけた。

「アルジュナ。治療を受ける気はありますか？」

「……私が何を、病んでいると言うのです」

「貴方は、『第二の生を享けた英雄』で在ろうとしても、『サーヴァント』で在ろうとはしていない。狂おしいほどにやり直しを願い、叶わなかった願いを求め、それでも最後の一線を引くのが、サーヴァント。貴方はその一線を理解しようとしなかった」

「……私、は……」

アルジュナは深く項垂れて、それきり言葉を発しなかった。銀の弓を握る手から、ぽつ、ぽつ、と血が零れたのは、よほど強く拳を握り固めたせいだろう。

そんな彼を葛藤と苦悩から解放する言葉を、わたしはこれしか持たなかった。

「アルジュナ——さん。その、よければわたしたちに力を貸してくださいませんか？」

「……残念ながら、そういうわけにはいきません。そうしたいのは山々なのですが。私のしたことへの償いは必ずします。信じていただけますか？」

わたしはリカと顔を見合わせた。リカは、一度アルジュナさんを見てから、またわたしに顔を向けて、頷いた。

「待っています」

「貴女の言葉は、虚ろな心にもよく響きますね。——さようなら」

アメリカ14

アルジュナがカルナに射た最後の矢を、終生の後悔というなら。

「僕」にとっては、デインドランが死ぬと分かっていたながら止められなかった瞬間が、それなんだ。

……

……

……

アルジュナさんという将を失って統率を失ったケルト軍を、わたしたちは幸いにも難なく破ることができた。

ここからは速度が勝負を決める。指揮官であるラーマさんの怒号を受け、わたしたちと西部合衆国軍は昼夜を問わずワシントンを目指した。

ラーマさん、焦りがオーラに滲み出ている。わたしも彼とそう変わらない体たらくなのだろうけれど。

だって、誰が予想できた？

スカサハさんがクー・フリーン・オルタに負ける、なんて……

昼夜を問わず、と言っても限度はある。食事、睡眠、武器の補充、etc……それらのためにラーマさんは一度、軍を止めた。

ナイチンゲールさんは負傷兵の往診のため、兵士たちの間を駆けずり回っている。例によってリカの手伝いの申し出は却下された。今は余裕がないから、この戦いが終わってから、先輩として抗議に行かねば。

この戦い……終わる、よね？ その時には、わたしもリカもナイチンゲールさんも、みんな生き残っている、よね？

「先輩」

呼びかけと同時に、横からわたしの腕に寄り添った体温が二つ。言うまでもなくリカとフォウさんだ。

わたしたちは体を寄せ合って、地べたに並んで腰を下ろした。

リカは何も言わない。わたしも何を切り出すべきか分からない。

それなりに長時間、静寂を挟んだと思う。先に口火を切ったのは、

リカだ。

「先輩。今からあたしが言うこと、かなりヒドイことですけど、いいですか？」

「——どんなこと？」

「もうこれで、代わりに責任を取ってくれる人、誰もいなくなっちゃったなあ、って」

——ああ、そうか。

スカサハさんに勝てるサーヴァントなんているわけがない。わたしたちが失敗したって、スカサハさんが何とかしてくれる。心のどこかでそんな甘えがあった。今だってその甘えを払拭できずにいる。もうあとはないぞ、もう勝つしかなくなったぞ、と絶えず囁かれている気分。——そう。あなたも同じ気持ちだったのね、リカ。

わたしは黙ってリカの頭を肩にコツンと押しつけた。

うん、ひどい。どっちもヒドイ子だね、わたしたち。だからわたしには怒れないよ。

星空を見上げた。このまま永遠に夜明けが来なければいいのに——

「何を弱気になっておるか！ 力を結集すれば勝てない相手ではない！」

わっ。び、びつくりした。ラーマさん？ 今のは、激励なのでしょうか？

「いや、まあ、正直、勝てるかどうかは確約しかねるのが本音だ。しかし、な、勝てる気がするのだ。魔王ラーヴァナを相手にした時もこんな心地であった。なあ、二人とも？ 余は、マシユもリカも好きだ。ナイチンゲールも、小僧っ子にしか見えぬ余の命令をきちんと守ってくれる兵たちも好きだ。そして、余に新たな命を与えてくれたシータが、心の底から好きだ。好きだから守りたいし、好きだから恐怖に屈せぬ。単純だろう？ だが突き詰めれば、英雄とは、そんな小さな想いから出発するものなのだ」

好きだから、負けない。

そんな肩の力を抜いた気持ちで戦いに臨んでいいの？

ラーマさんは夜闇に在って眩いと感じるほどの笑顔で、わたしたちに手を差し出した。

「さあ、行こう！ 立って歩けぬならば、今度は余が、ナイチンゲールがしたように二人を背中に担いでしまおうぞ？」

「フォーウ……」

「……それは、ちよつと……」

「さすがに、ご勘弁ください」

わたしは苦笑してラーマさんの伸べる手に手を預けた。リカも同時にそうしたから、わたしとリカの手は上下に重なった。ラーマさんは嬉しげに笑い、わたしとリカの手をそれぞれ両手で持ち直して、わたしたちを引っ張り起こした。

立ち上がってみれば、意外と、自分の体は軽いんだと再発見。こんなに軽いなら、もっと早くに立ち上がればよかった。

隣のリカを見た。戸惑いがちなリカに、わたしは笑いかけた。

——わたしはこの後輩が好き。 “彼” もデインドランを思わせるこの子が好き。

マシユ・キリエライトはギャラハツドの想いを確かに “在る” ものとして認める。わたしは一人の相手を二人分、好きでいるんだ。

“ありがとう”

きつとこの幻聴は二度と聴こえない。最後だろうから、特別だ。

わたしこそありがとう、ギャラハツド。わたしに誰かを護る力をくれて。

ワシントンはまだ目と鼻の先。

ここからはラーマさんが軍の指揮官を外れる。わたしを含むサーヴァントたちとリカ（とフォウさん）だけでなくては、女王メイヴとクー・フリーンに挑む時に無用な犠牲者を出してしまうからだ。

ラーマさんは西部アメリカ軍を鼓舞する最後の訓示を行った。

「以前にも言ったが、お前たちにはこの土地を守る義務がある。所有者だからではない。奪ったからには、最後まで責任を果たすべきだからだ。この国はイ・プルーリバス・ウナム。あらゆる地より来てこの大陸に根付いた民は、あらゆる国家の子に等しく、つまりこの国と民たるお前たちの親は世界そのものである。迷いを生じたなら高らかにこう叫べ！『我が名は世界中の国家の血を継ぐ子、アメリカ人である』と！」

消耗していた兵士さえも奮い立たせる立派な姿だった。騎士王とは違う次元で、ラーマさんは確かに王者なのだとよくよく身に染みる演説だった。

距離を取っていたわたしたちに、ラーマさんが合流した。

「待たせた。それとナイチンゲール、いくらかそなたの言ったことを脚色させてもらった。イ・プルーリバス・ウナム——よい言葉だと思っただけ」

「特段気にしません。大事なのは誰が言ったかではなく、聞いた人が発言そのものをどう受け止めるかです」

わたしたちは、ホワイトハウスを目指すことにした。——前にジェロニモさんが言っていた。敵に打撃を与えるなら首都を狙う。その理屈と同じだ。アメリカ合衆国首都の心臓部はホワイトハウス。ならケルト勢力がそこを占拠しないわけがない。

急行したホワイトハウスは——異界化していた。

《何だコレ!? まさかホワイトハウスって言い張る気なのか!?!》

ちよつと、筆舌に尽くしがたい変貌だ。インド出身のラーマさんが「本来のホワイトハウスのほうが美しかろう」と零すほどであると言えればお察しいただけるだろうか。

「ドクター・ロマン。北部戦線のほうはいかがですか？」

《あ、ああ。大健闘だ。これならなんとか——》

「やはりそうですか。無限といっても、時間をかければ、というだけ。

ここまで来れば減数の速さが勝る。追い詰めているのはこちら、と思いたいところですが……」

「何か不安があるのか、ナイチンゲール？」

ナイチンゲールさんが言わんとする所はわたしにも分かった。快調な戦運びではかえって敵の罠などを勘繰りたくなる。わたしの中のギヤラハツドの経験則がそう教えてくれる。

「来ちゃったのね。私の可愛い戦士ぼっやたちには荷が勝ちすぎたってことか。あーあ」

頭上から女の声がした。すわ奇襲かと盾を上方に構えたわたしだったが――

「フオウ!!」

「先輩、前です!」

顔を水平に戻すと、ちょうど正面にチャリオットが降り立った所だった。

チャリオットから降りてきたのは、二名。

異界化したこの空間においては発光しているようにさえ見える、白いティアラとストロベリーブロンドの美女。

そして、見紛うこともできない、クー・フリーン・オルタ!

「あのヒトが、女王メイヴ――」

「気安くてよ、そのマスター。気分が悪いから殺しても構わないかしら?」

小さく息を呑んだりカを、わたしはすぐさま背中に庇った。フオウさんもリカの肩の上で、毛並みを逆立てて威嚇態勢だ。

「どきなさい。あなたの邪悪は病ではなく生まれついているもの。健康優良児そのものです」

「はあ?」

「どけ、メイヴ。その看護師はオレに用があるらしい。……看護師であろうが敵は敵。ならばオレは殺すだけだ」

「どうぞ自由。私は貴方を治療し、貴方は私を殺害する。矛盾ですが妥当です。では戦う前に一言。あなたは病気です」

言った。この看護師の祖、ケルトの狂王を相手に病気告知をした。

呆氣に取られるとはこのことだ。ご覧ください、当のクー・フリーンでさえ辟易満面です。

そしてわたしたちは嫌ってほど知っている。ここから始まるのはナイチンゲールさんによる容赦・呵責・遠慮なしのインフォームドコンセントであると。

「愉悦を抱かない。王になったことで愉悦を封じた。自らを檻に閉じ込め、王というシステムに体を譲り渡す。ゆえに自動的、機械的に戦える。そうしなければ王で在り続けられない」

あ——そう、か。いくらオルタ化したといっても、わたしはこのクー・フリーンが愉しそうにしている所を見たことがない。冬木のキャスターさんはあの壊滅的状况でもカラッと笑っていたのに。

「黙りなさい、看護師！」

メイヴが怒鳴つても、ナイチンゲールさんは全く聞く耳を持たない。

「生前の私自身がそういう在り方でした。私は己の人間らしさを投げ棄て、目的のために邁進した。無論それは歪んだ生き方であることも否めません。でも構わない。私は世界に広めたかっただけ。痛みを誰かに治してもらえるんだという希望を。病から快癒する歓びを。だから、私は後悔していない。——問いましょう、蛮族の王。この支配に必要性はあるのですか？ 行き着く果てを、どこに見定めているのです？ 無いでしょうとも。それは病です。私に治療させなさい、クー・フリーン」

「……話はそれで終わりか」

クー・フリーンの返答は、ナイチンゲールさんの診断を認めながらも、彼女の「治療」を受ける気なんぞ真っ平ないと、言外に告げていた。

「病、ね。言い得て妙だ。この体を癒し、この血を清らかにすれば、正気とやらに戻るのがかもしれん。だが、アンタもよくご存じだと思うがね。世の中には、不治の病つてもんがあるだろう？」

ナイチンゲールさんが——絶句した。

——対話は、ここで終わりだ。

クー・フリーンが朱槍を両手で握った。

応じて、わたしとラーマさんもそれぞれ盾と鈍剣を構えた。

「余はコサラの王ラーマ。これは、志半ばにして斃れた者たちから与えられた命である。我が妻シータの名に懸けて。信奉する神の名に誓って。汝らに鉄槌を下すッ!!」

アメリカ15

わたしとラーマさんと並んでクー・フリーン・オルタへと駆け出す。手分けしてとか二手に分かれてではなく、二人で同じサーヴァントを標的に定めて攻撃に出た。

当然、その蛮行を女王メイヴが許すわけがない。メイヴはわたしたちの射線上に正面から立ち上がった。

「私がいる限りクーちゃんやんの懐に入れるなんて思わないことね。初手から出血大サービスしてさしあげる！ 来なさい、チャリオット・マイラブ『愛しき私の鉄戦車』!!」

メイヴのかけ声を受けてさっきのチャリオットが再び現れた。すでに爆走する牛たちが引く戦車の御者台に、メイヴがひらりと飛び乗った。

——ここまではこちらでも想定できていた。

——恋多き女王、現代のイルランドにおいてさえ永遠の貴婦人として息づく、頂点の女。逆説的に、色と恋にまつわる強い信仰を集めるメイヴが、異性の魅了スキルを備えていないわけがない。

これに加えて、ロビンフッドさんから聞いた、暗殺作戦でのメイヴの指揮。彼女は自身がジェロニモさんに狙われていながら、アルジュナさんを自身ではなくクー・フリーン・オルタの援護に回した。

以上をまとめて、結論。

わたしとラーマさんがクー・フリーン・オルタを狙って攻めに行つたなら、メイヴは異性であるラーマさんのほうに特効のスキルか宝具を展開する。

だから、わたしたちは——

「マシユ、頼む！」

「はい！ 行きます——！」

ジャンプしたラーマさんの足裏に盾の角度を合わせて、スキル・魔力防御、発動。盾の反発力を利用して、ラーマさんを高く飛ばしてメイヴの宝具射程外へ、さらにはクー・フリーン・オルタの前まで。

そしてわたし自身はすぐさま盾を構え直してメイヴのチャリオツ

トを真つ向から防御する。

「^{ロー}仮想展開／^{トド}人理の礎!!」

激突する、守護円陣と鉄戦車。

わたしは一步だつて引きやしない。わたしの、[〃]彼[〃]の雪花の盾は、どんなサーヴァントにだつて破れない——!

「——そう。あなた、魂の半分は[〃]そっち[〃]なんじゃない。だったら、ふふっ……油断したわね、デミ・サーヴァント!!」

「え……っ?」

次の瞬間、わたしは天鷲絨の天蓋に隠された大きなベッドの上に横たわっていた。

いつの間に。どうやって。盾は破られなかったのに。ここはどこ? どうしてわたしの体、この寝台から起き上がれないの?

どうにか四肢を動かそうと力んでいたわたしの、顎を、つつう、となめらかな指先がなぞった。

「女王メイヴ——!」

「ようこそ、私の愛しき寝台^{その}へ。ここに女を寝かせたのはあなたが初めてよ。光栄に思いなさい、小娘。今からコノートの女王メイヴが手取り足取り、あなたの知らない喜びを教えてあげる♡ ここは[〃]そう[〃]いう[〃]固有結界[〃]だもの。事が終わるまでは出してあげない」

固有結界でしかも宝具を何て破廉恥なものに仕立て上げたのか、この淫蕩女王ツ!

迫ってくるメイヴに、わたしは抵抗を試みるが、まるで力が出ない。非武装状態の時ほどの弱々しさに、泣きたくなる。デミ・サーヴァントとして戦つて経験を積んだつて、内側の[〃]彼[〃]と和解して精神面が向上したつて、マシユ・キリエライトは結局ただの非力な少女に過ぎないんだと思ひ知らされているかのようで。

『先輩!! 帰つて来て!!』

ただ一人の後輩の声が、耳ではなく全身を叩くように響いたかと思うと、わたしは硬い地べたに体を投げ出されていた。

……ここは、ホワイトハウス前?

「先輩! 大丈夫ですかっ?」

「フオフオウ！」

血相を変えたりカがわたしを支え起こした。その時に見えたりカの手の手甲からは、令呪が一画消失していた。そうか。令呪を用いた強制転移で、わたしをメイヴの固有結界から退去させたんだ。

——リカはどんどん頼もしくなっていく。リカの「先輩」であるわたしも負けてはいられない。

少し離れた位置ではラーマさんがクー・フリーン・オルタと刃をぶつけ合い、ナイチンゲールさんがラーマさんを援護している。

わたしの眼の前には、屈辱に頬を紅潮させる女王メイヴしかいない。メイヴは一度宝具を開放した。次の宝具展開まではタイムラグがあるはずだ。それまでに決着をつけなければ。

わたしは周囲を見回して、ゲイボルクの意匠の巨大オブジェに目を留めた。あれならもしかして。

わたしは走って行って、ゲイボルクのオブジェに盾ごと体当たりした。好都合なことに、砕けたオブジェは細長い棒の形で落ちてきた。これなら、行ける。私は棒きれを槍のように両手で握り締めた。

——盾を執った「彼」だけど、剣も槍も決して使いこなせないわけではない。

「この一撃に、全てを——!!」

「——賭けるッ!! やあああああつっ!!」

今この四肢を駆動させるのは、わたしの魂に融けたギヤラハツドの戦技。操られているわけではない。わたしは「彼」を信じて、託したのだ。

メイヴの鞭を搔い潜り、懐に入ったわたしは、棒切れの槍でメイヴの胸を一突きに貫いた。

「ず、るい……よりに、よって、クーちゃん最大の武器を使う、なんて……」

私が棒きれ槍を抜くと、メイヴは胸から血を流してその場に倒れた。霊核を貫いた手応えだった。

向こう側でクー・フリーン・オルタが舌打ちすると、ラーマさんとナイチンゲールさんの猛攻を掻い潜り、そのせいで血まみれになつても知らんとはかりに、倒れたメイヴの傍らにしゃがんだ。

「ひでえ有様だな、メイヴ」

「ええ、クーちゃん。私、今にも死にそうよ。でも役割は果たしたの。本当よ？ ……褒めてくれる？」

「そうだな。お前さんにしてはよくやった。女王として自国を守る。やればできる女だよ、お前は」

「うれ、しい……！ 私、その一言が聞きたかつたの。それだけで救われたの。私の願いは、叶った。やっど、貴方は、私のものに、なつてくれた——！」

「——死ぬか？」

「ええ、死ぬわ。聖杯は貴方に託します」

メイヴは両手で、金の八面錘を捧げ持った。クー・フリーンはメイヴの両手ごと聖杯を受け取った。

そんなふたりの光景は、一枚の絵画のよう。

メイヴは、クー・フリーンに握られたままの自身の両手を、恍惚と見つめながら消滅した。

クー・フリーンは聖杯を片手に握り込んで、再び立ち上がつてわたしたちと対峙した。

「うし。それじゃあ殺し合うとするか」

とつさに、わたし、ラーマさん、ナイチンゲールさんで三方からクー・フリーン・オルタを包囲した。

「……狂王よ。聖杯を渡す気は？」

「欠片もねえ。これはゲツシュだ。メイヴって女はどうしようもない悪女だが、時代を支配できる願望器を、俺一人の心を奪うためだけに躊躇なく使いやがった」

意中の男をふり向かせる。万能の願望器にくべた女王メイヴの願いは、世間にありふれた女子学生の恋心と大差ない、他愛のないもの

「あれにとつちや飽きれば捨てる玩具だろうが、心意気だけは買って

やらねえとな。なんで、一切の愉悦を捨てて戦い続ける。これまでも、そしてこれからもだ」

聖杯に願えば恋の一つや二つは叶う？ とんでもない。無から有が生まれないように、最初から無い恋心なんて聖杯の刷り込み程度で芽吹きやしない。メイヴの、世界より恋を取るといふ行為は、確かにこのクー・フリーンの胸を打ったんだ。

——分かる。そういう女性特有の躊躇の無さに、「彼」も胸打たれたことがあった、と感じている。

「大体なあ、テメエら。今さら散々オレの邪魔をしやがった奴らを、生かして帰す道理はねえだろうが。来な、小僧に小娘ども。アルスターの戦士にケチをつければどうなるか、その身を八つ裂きにして、骨の髄まで叩き込んでやるからよオ！」

アメリカ16

はあっ、はあ………！

クー・フリーリン・オルタの強さはでたらめに上がる一方だ。ここまでには、わたしとラーマさんで一度ずつ致命傷を負わせたはずなのに、そのたびに棘器官を禍々しく進化させてまた向かってくる。追いつめているはずのわたしたちのほう氣息を切らしている。

《い、急いでくれ！ もう北部戦線が保たない！ 彼らの敗北はアメリカの敗北だ。その時点で時代が崩壊する可能性が極めて高い！》

分かってます、ドクター・ロマン。でもこのままじゃ、わたしたちに勝ち目は……

「我は^ナ全^イての害^チあるもの、^ゲ毒^ルあるものを断^ツつ！」

春のそよ風に似た癒しの魔力がわたしたちを包んだ。体が軽い。体中に負っていた傷が完璧に治癒されている。

「ミス・藤丸。これが私の治療、そして正しい治療です。独りが痛みを肩代わりするのではなく、他者に傷を押し付け合うのでもない。理不尽を踏み躪りなさい。絶望を踏破しなさい。何度でも何度でも何度でも。あなたがこれからも、癒す側で在りたいのならば……」

「っ………！」

全快したなら多少の無茶は利く。押し通してやる。ナイチンゲールさんが立ち上がる力を何度でもくれるなら、わたしは何度でも目の前の敵へ走っていく。

「ラーマさんッ!!」

「心得た！ —— 終わらせるぞ、狂王！ ^ブ羅^ラ刹^フを穿^マつ不^マ滅^ス！」

ラーマさんの鉈剣が回転して法輪を描いて翔ける。わたしは熱線を放つ法輪の軌道そのものをわたしへの壁にして追走した。

ラーマさんの宝具の原型は「矢」。よって矢避けの加護を持つクー・フリーリンには通用しない。だから決め手はわたしが担う。さっきのナイチンゲールさんの治療宝具で魔力も回復したから、遠慮なく！

クー・フリーリン・オルタが法輪を弾いたモーシヨンの、一瞬のさら

に何百分の1かの隙を突いて、懐に潜り込んだ。

「^{ロイド}仮想宝具／^{カルデアアス}人理の礎！」

盾の反発力で吹き飛ばすのではなく、クー・フリーン・オルタの体は捕捉したまま、石畳を抉って前進し、その体を広場の柱の一つにぶつけた。ぶつかったクー・フリーン・オルタの背中で白い柱が粉々に砕けた。

ここで止まらない。わたしは最後の魔力を盾に流し込み、盾を傾けてクー・フリーン・オルタを石畳に組み敷いた。陥没する地面。一波、二波、三波、クレーターが波紋のように広がっていく。このままマントルまで埋没させてやるくらいの気概で、わたしは盾でクー・フリーン・オルタを押しさえ込み続けた。

やがて。

ばきん、と、彼の霊核が真つ二つに割れたような手応えが、あった。「やれやれ。オレもヤキが回ったか」

まるでどうでもいいことのような言葉を吐いて、クー・フリーン・オルタの霊基が消滅した。

わたしは、それこそ地下と呼んで差し支えない深度の穴から上がって、ラーマさんやナイチンゲールさんと合流した。

「どうやら治療は終わったようですね。一人ではなく、この国全体の大きな傷が」

最後までこの看護師の祖はブレないようだ。でも、ブレない彼女だから、ここまでやって来られたのだとも、よく知っている。

そこで、どこか浮かない顔でぽつんと立っていたリカが、わたしのそばへ来た。

そういえば、ずっといつもどこかでと思っていたのに、リカの治癒魔術を禁止したナイチンゲールさんに抗議できないままだった。しかしここでその話題を出して別れを後味の悪いものにしたくはないし。うーん、どうするべきか。

するとリカはナイチンゲールさんに一礼して、いつもよりフラツツな声で言った。

「色々勉強させてくださってありがとうございます」

「感謝は無用です。無用ですが、その代わりに」

ナイチンゲールさんは手袋を外して右手をリカに差し出した。

「どうか握手を、ミス・藤丸。連れ添った患者が退院する時、こうやって手を握り合うのが、私の密かな楽しみだったのです」

「——はい」

リカがナイチンゲールさんと握手を交わした。

「マスター。厳しいことばかり言いましたが、重ねて言います。貴女はもつと自分に優しくなりなさい。私は私の目的のために戦った。貴女は貴女のために戦っている。ですからこれは差し出がましい祈り。——いつか貴女の神秘と貴女の心が結びつき、真の奇跡となりますように。そうでなければ何もかも救われません」

「……ありがとうございます、婦長」

ナイチンゲールさんの別れの微笑みは、当人は何度も否定したが、それこそ天使のようだった。

「こほん、最後は余だな。マシユ。リカ。余は、今回の戦いで誇れることがいくつもある。最短記録でシータを救出することができたのはもちろん、おぬしたちと出会えたことだ。リカの正しきサーヴァントとなり、マシユと肩を並べて戦うことができれば、それは最上の喜びとなる。ゆえに、別れは告げぬ。また会おう！ マシユ！ リカ！」

ラーマさんが退去した。

ドクターから入った通信によると、北部戦線のサーヴァントたちは全員が先ほど退去しという。これで残ったのはわたしとリカとフォウさんだけ。

いつもながら名残惜しい、第五の旅の終わり。あとはわたしたちがカルデアヘレイシフトするだけ。

……ナイチンゲールさんは退去したんだし、もう、いいよね？

わたしは、久しぶりでつい照れくさくなりつつ、リカと手を繋いだ。

リカはこてんとわたしの二の腕に頭を預けた。何だろう、このむずがゆき。

カルデアの青い管制室に無事帰り着いたわたしたち。

ドクターの勧めもあって、わたしとリカは休息を取るべく早々にマイルームに向かうことにした。

廊下に出て少しして、リカが唐突に言った。

「先輩、いいことでもありました?」

「わたしが?」

「笑ってるから」

「……そうね。ねえ、リカ。今回の旅も、悲しい出来事がたくさんあったね」

「はい」

「だからこんなことを言うのは、その、不謹慎なんだけど——楽しいんだ、わたし。リカと二人で世界と時代を駆け巡って、色々な人や英雄と出会う。すごいよね。きつとどんな魔術師でも体験できなかった旅。記録には残らなくても、この思い出を、ずっとずっと大切にしたい……そう思う」

「——」

「それじゃあ、シャワーを浴びて、ちよつと眠りましょうか。それとも何か食べるに……リカ?」

「——せん、ぱ——ごめん、なさ……」

ぱたつ、と。

ひどく呆気なく、前触れなく、リカが廊下に、倒れた。

「——リカツツ!!!」

苦しい。苦しい。それでも、生きてる。

安らかに眠れなくてもいい。

あなたの命の終わりを知った時から、あたしは、生まれ落ちた。

真価——いまは遙か理想の城——
キヤメロット1

——では、藤丸立香の話をしよう。

全ては彼女の中に目覚めた特異な魔術に端を発した。

転嫁魔術。

「他者が受けた傷を自分自身の体に「転嫁」することで、対象の傷を治癒する力。

転嫁した傷は彼女自身の傷となる。

彼女は他者の傷を引き受けるたびに同じ苦痛を感じ、その体は古傷だらけだ。

——それでも彼女が転嫁魔術を使い続けた動機は一つきり。

「傷ついた人に優しくするのは当たり前のこと」だから。

——しかしこの力を使った彼女の善意は尽く否定された。

親からは金儲けの道具扱いで、テレビにも出演。有名になった弊害として、世間からペテン師の烙印を押されて家に嫌がらせを受けることもあれば、逆に新興宗教から奇跡の子だと担ぎ上げられて連日勧誘されることもあった。

生活がメチャクチャになった。お前のせいだと、彼女の両親は毎日なじった。

厄介娘の扱いに辟易した両親にとって、カルデアからのスカウトは渡りに船だった。

両親は嬉々としてカルデアに彼女を厄介払いし、今日もどこかで、娘を売った金で遊び呆けているだろう。

かくて藤丸立香はカルデアでマスター適性者として見出され、ついには人類最後のマスターとなった。

「——以上が、ボクの知る範囲での、藤丸立香君の身の上だ」

わたしはドクター・ロマンの胸倉を掴み上げたい衝動に駆られたが、どうにか思い留まった。

ドクターに非はない。非があるとしたら、わたしにこそある。

わたしは気づかなかった。リカの「先輩」なのに、あの子が陰でどれだけ痛い思いをしてきたかちつとも分かろうとしなかつた。

思い返せば気づくためのサインはいくつもあつた。それを、わたしは自分のことばかりで。

「ドクターは、知っていたのですか？ リカの魔術の正体を」

「知っていたとも。マスターの適性審査には、魔術系統の解析も含まれるからね。他者から己への、受身かつ一方通行の、献身と自己犠牲の癒し。それが彼女だけの神秘だ」

ドクターがこれほど憂えた目をしたのは、いつぶりか。

「過去は変えられない。そして、リカ君は誰に強制されたのでもなく、自分自身の意思で転嫁魔術を行使してきた。それ自体は罪じゃない。あえて指摘するならただ一点。隠したことが罪だつた」

ドクターの言いたいことは分かる。ドクターは遠回しに、わたしは悪くないと、わたしが自分を責める必要はないのだと言ってくれている。

「でも、そうだとしても……わたしは」

わたしは、気づきたかつたんです。

わたしを「先輩」と呼ぶあの子のことだからこそ。

「あの子は目覚めたらすぐこの中央管制室に来るだろう。その前に頼みたい。マシユ、リカ君には何も知らないフリをして接してやってほしい。本名と同じで、あの子にとつて転嫁魔術は地雷原だ。一番心を許した『先輩』に同情の目で見られたら、ショックでリカ君が何をしでかすか」

「あの子の苦痛の上にあぐらを掻いて旅を続けろと言うんですか!？」

「そうだ。忘れてはいけないよ、マシユ。藤丸立香は、人類最後のマスターだ。あの子の心の問題に、全人類を巻き込むわけにはいかない」

ドクター・ロマンの言うことは途方もなく正しくて、わたしは泣きたくなつた。

中央管制室のドアがスライドした。

駆け込んできたのは、フォウさんと――

「遅れてごめんなさい!」

――いつも通りに見える、わたしの後輩。

「リカ! そんなに走って、体は大丈夫なの!？」

わたしはついリカに詰め寄って、リカの両の二の腕を掴んだ。

「あ……はい。ごめんなさい。ご心配をおかけしました。長丁場だったので体が参っちゃったみたいです。でももう大丈夫ですから。次こそは頑張ります」

本当に? 重ねてそう問い詰めたかったけど、そうしたらわたしの本心を見抜かれそうで、言えなかった。

……待つて。次?

「スタッフもちよつと緩んでるなあ。箝口令でも敷かないとダメなこりゃ」

ドクターが表情を引き締めてわたしとリカを見た。

「マスター・リカ。マシユ・キリエライト。第六特異点の割り出しが終了した。引き続きキミたちには聖杯探索を行ってもらおう。異論はあるかい?」

「あたしには、ありません。先輩は?」

「無いに決まってるわ。マスターが赴くのであれば、どんな死地へも付いて行く」

「ありがとうございます、先輩」

次の特異点について、ドクターが説明を始めた。

――時代は13世紀。西暦1273年。場所は、聖地エルサレム。第9回十字軍が終了し、エルサレム王国が地上から姿を消した直後の時代。西洋諸国がエルサレムから撤退したことは、人類史に多大な影響を与えた。

「実の所、第六特異点の予測はアメリカより早く出ていたんだ。けれどシバから返ってくる観測結果があまりにも安定しなかった。観測の光そのものが消えてしまう時があったんだ。つまり――」

「第六特異点は、カルデアスの表面に存在しない……その部分だけ、空

洞になりつつある?」

「そうだ。第六特異点は人理から外れようとしている。『あつてはならない歴史』になりつつあるんだ。これを放置しておけば、ソロモンの人理焼却をリセットできようと、人類史は大きな被害を負うだろう。今回もカルデアからできるバックアップは少ない。それでもマシユと共に行ってくれるかい、リカ君?」

「行きます。先輩が一緒なら」

ふわり、とドクターが表情を緩めた。

ドクターからコフィンに入るよう指示を受けたわたしたちは、いつも通りコフィンへ二人（+フオウさん）で向かったのだが。

「つて、レオナルドなにやってんの!? 何で予備機のコフィンに入ろうとしてんだい!」

「何つて、私も同伴するんだけど。そういう流れだったでしょ?」

ドクターの怒鳴り声での訴えを、ダ・ヴィンチちゃんは見事に全却下して、コフィンに搭乗した。

……こうなったら止められないのがダ・ヴィンチちゃんだ。実際、大きな助けになってくれるだろう。

——リカの転嫁魔術について知った今、フオローの人手は一人でも多いほうがいい。

隣のコフィンで、リカがフオウさんを抱えて横たわるのを、わたしは見つめた。リカのほうもわたしの視線に気づいて、小首を傾げる。わたしは「なんでもない」と笑い返した。

——もう二度と、この子に転嫁魔術まじは使おわせない。

意識が戻った瞬間、砂と暴風がわたしの全身を叩いた。な、なにつ、砂嵐!?

「リカ、無事!? そばにいる?」

「は、はい! ここです、せんぱー!」

「フオウ!」

声のしたほうへ、盾を錨の代わりに砂に突き立てながら進んで、ようやく見えたリカをためらわず手繰り寄せた。わたしの胸に飛び込む形になったリカとフォウさんが、わたしにきつくしがみついた。

「ちよつとロマーニ——ッ！ この一面の砂漠、どう見ても13世紀のエルサレムじゃないんだけど——!?!」

駄目だ。カルデアとの通信が安定しない。わたしたちだけでどうにかしないと。

まずはこの砂嵐を抜け出そう。でないと戦闘どころか立っているだけで命懸けの状態がいつまでも続く。

ダ・ヴィンチちゃん杖で周囲をスキャンし始めた。その杖、そういう使い方もできたんですね。

「西に水源を発見した。あつちに水場があるようだ。というか、都市がある」

「ではすぐにでも西に向かいましょう。わたしやダ・ヴィンチちゃんはよくても、リカは生身の人間なんだから」

「あたし、まだ平気です」

「だめ。唇がカサカサで顔色も真っ青なんだから」

「はい……」

「フォフォウ」

リカの肩に乗っていたフォウさんが、リカのほっぺを肉球で押した。リカは苦笑してフォウさんを撫でた。

わたしたちは砂漠を歩き出した。

——いつになれば、どのくらいの距離を歩けば目的地に辿り着くかが分からない、というのは、それなりに精神に負荷をかける。前回の北米大陸横断は、馬もあつたし、地理と距離を数字と図として常に見られたからこそ楽だったんだと思ひ知った。

10キロを踏破した頃、わたしはそんな益体もないことを考えていた。

「リカ、大丈夫？ 足は痛くない？」

「痛くない、です。先輩、こそ……」

「わたしはデミ・サーヴァントだから」

「なら、よかったです」

そう言うリカの呼吸は荒い。今のところわたしもダ・ヴィンチちゃんも負傷はしていないから、転嫁魔術のせいではない、はず。ならリカの不規則な呼吸は何が原因？

するとダ・ヴィンチちゃんが酸素ボンベらしき物をリカに渡した。

「リカ君、はいこれ。着けて」

リカは素直にその器具を口に装着した。

「魔力の濃度が濃すぎるんだ。それは急ごしらえで作った魔力遮断マスクだよ。ここの大気は人間にはちよつときつい」

「あ……すみません。お手数をかけました」

「それほどでも。さあ、あと少しで水源だ」

見れば、砂嵐の向こうに大きな建物が見えた。神殿の様式に見えるが、聖地に神殿なんてあるわけ——

「ごめん。ここまで来てアレだけど、引き返そう」

なぜ、と詰め寄ったわたしに、ダ・ヴィンチちゃんは正面を見るよう促した。

何か、四足歩行の生き物が、神殿を中心に徘徊している。数は20匹を軽く超えていた。

「計測器が振り切ってる。人面獅子という外見的特徴からするに、あれらは竜種をも上回る最強の幻想種、スフィンクスだ」

「……………なぜなぞ？」

「を、解けば通してくれるほど生易しくないだろうね。とにかく、ここを進むのは自殺行為だ。別ルートを探そう。いざとなったら私の秘蔵の万能コテージを提供するから——む？」

神殿のある方向から凄まじい速さでこちらへ走ってくる影は——生身の人間！ 数は10人。内一人は手足を縛られた女性を抱えている。

穏やかならざる集団だと判断したわたしは、前衛に出て盾を構えた。

「先回りされたか——！ 兵士を差し向けているとは、さすがは太陽王よ」

相手が人間なら、峰打ちで無力化する。ただし流血沙汰にならないように注意する。怪我人を見たりカが敵味方の区別なく転嫁を使っ
てしまわないように。

「時間がない、片付けよ！ ただし一人は生かせ、貴重な情報源になる
！」

「マシユ・キリエライト、行きます！ ダ・ヴィンチちゃんはりカの
ガードを！」

わたしは向かってきた人間を片っ端から盾で殴って返り討ちにし
てから、指示を飛ばしたリーダー格らしき人物へ肉薄した。

魔力防御スキルを発動するまでもない。全力を盾に載せて、ボディ
アタック！

「つあ!? 私の仮面が……！」

わたしがぶつかつた衝撃で髑髏面を落とした相手は、筋骨隆々とし
た女性だった。

女性の髑髏面が外れて初めて感知できた。彼女はサーヴァントだ
！ 気づけなかったのは多分、気配遮断スキルかそれに類するスキル
を持つためと推測できる。

「申し訳ありません、百貌様！ こやつら、真つ当な兵士ではありません
ぬ！ あの娘の紋様、おそらくは聖都の——」

「貴様たちは下がっている！ 敵はサーヴァントだ、貴様らでは容易
く殺され……ては、いないな。余裕のつもりか？ 我ら山の民など殺
すに値しないと？」

わたしは答えず臨戦態勢を維持した。

ちなみにわたしの後ろでは、戦いの隙に囚われた女性を救出した
ダ・ヴィンチちゃんが女性の拘束を解いていたりする。

「貴様ら……何者だ！ オジマンディアスの手の者か!？」

「オジマン……え、え？ どなたでしょう……？」

「いや、どなたでしょう、と言われてもな……貴様、ただの阿呆なのか
？」

む。わたしの前でリカをアホ呼ばわりしたわね？　峰打ち、もう一発ほど叩き込んでいいかしら。

「ええい、今回も失敗だ！　撤退せよ！　奪取した食糧は落とすなよ！」

「あ、ま、待って、つくださ……せめてお話だけでもっ」

「ははは、待てと言われて待つハサンがいるか！　さらばだ、ノロマども！」

百貌でハサンと呼ばれたサーヴァントは、髑髏面を着け直すと、砂嵐など意に介さない速度で走り去った。他の人間たちも同様に。

キヤメロツト2

ひとまず危険は去ったと見ていいだろう。わたしは盾を霊体化させた。

「先輩。ケガ、してませんか？」

今までなら気遣われて嬉しかったその確認が、今は空恐ろしい。

もしここでわたしが傷を負ったら、この子は迷いなく自分へ転嫁しただろう。

これからの戦い、リカの前では絶対に負傷できない——！

「キミ、起きたまえよー？ 稀代の天才が目の前にいるのだよー？」

はっ。そうだった。攫われかけていた女性。

今はダ・ヴィンチちゃん、女性のほつぺたを杖で小突いているが、彼女に目覚める気配は——

「——は!？」

あ、起きた。

彼女は事態を把握しかねたのかしばらく無言だったが、立ち直るなり気焰を吐いた。

「おのれ無礼者！ 私をファラオ・ニトクリスと知っての狼藉ですか——！」

ニトクリスというと、紀元前2000年前の古代エジプトの魔術女王だ。天空神ホルスの化身にして、冥界を統べるとも語られる、邪鏡「ニトクリスの鏡」の持ち主。

「私を薬で眠らせ、神殿の外にまで連れ出すなど、もはや温情はかけられません！ ファラオから預かりしこの神獣を以て、その手足が砕けるまで試すことにします！」

「待つてください、女王ニトクリス！ わたしたちは、暗殺者に捕まっていた貴女を助けただけなんです！」

「その証拠がどこにあるというのです！ なぜ貴方たちは私を助けられたと言うのです？ 偶然ここに居合わせたのですか？ そして、名前も知らない私をわざわざ助けたと？ それこそありえない話です！ この終末の地において、無償で他人を助けるなど！」

「その通りだと言っています!! レイシフトしたのが偶然この地帯で！ 名前も素性も知れないあなたを！ 誘拐しようとした悪漢を退け！ あなたを救出しました！」

「ぐ……っ」

悪い人ではなさそうだが、何て融通が利かない人。今はリカを休ませるためにも一分一秒が惜しいのに。

「その鎧は聖都の騎士たちのもの！ 信用はできません！」

わたしの、鎧？

この鎧はギャラハツドの甲冑をベースにしてある。この鎧と同じ騎士たちなんて、ギャラハツドと同じ円卓の騎士くらい。ならば、円卓の騎士が集う「聖都」とは一体――

「行きなさい、スフィンクス！」

しまった。思案に気を取られ過ぎた。

「先輩――！」

リカがわたしに手を伸ばしている。まずい。あの子は、わたしのダメージを自身に転嫁するつもりだ。

――決めたでしょう、マシュ・キリエライト。二度とあの子に転嫁魔術は使わせないと。

そのためには、目の前の神獣が邪魔だ。

「こ、のおおおお!!」

前に踏み出して、盾をフルスイング。スフィンクスの横っ面に叩きつけた。

「――お見事。それでいいのです。神獣の罅などその盾は容易く上回る」

「あ――――あなた、は」

持っていた盾を取り落してしまいかけるほど、驚いた。

ベデイヴィエール卿。アーサー王の近衛。王の最期を唯一看取った、夢守の騎士。その彼が目の前にいる。

「藤丸立香、という名の方はそちらのレディですね。私はルキウス。主のいないサーヴァントです。私でよければ助太刀を致します。我が銀腕、存分にお使いくだされば」

ルキウス？ 他人の空似？ わたしの勘違い？ いえ、いえ、わたしの中のギヤラハッドが覚えている。この人はベデイヴィエール卿で間違いない。

でも、そうか。あくまでわたしはギヤラハッドと融合しただけで本人ではない。ベデイヴィエール卿がわたしたちを警戒して真名を明かさないとしても順当な判断だ。

「せ、先輩」

「大丈夫よ、リカ。この人は信頼できる。——サー・ルキウス、助太刀、ぜひお願いします！ わたしと一緒に、あの神獣を退けてください！」

ノーダメージで勝つためには一騎でも多くの戦力が欲しい。その点で、実力も性向も確かなベデイヴィエール卿と出会えたのは至上の幸運だ。

隣へ来たベデイヴィエール卿と領き合い、先にわたしがスフィンクスに突撃した。

スフィンクスが前肢の鉤爪を振り下ろした。わたしは盾で鉤爪を弾いた。

スフィンクスが上半身を持ち上げた瞬間、わたしはスフィンクスの巨軀の下に滑り込んだ。

今まで戦った竜種と同じ。この手の生命体は、背中からひっくり返ると起き上がれない！ というわけで、下からスフィンクスの腹部に盾を当て、スキル・魔力防御を発動。盾の反発力でスフィンクスを吹っ飛ばして、ひっくり返してやった。

「サー・ルキウス！」

「承知！」

ベデイヴィエール卿がわたしと入れ替わりで前衛へ。

銀色の義手が淡く光った。その義手を、ベデイヴィエール卿は手刀の形にして、ひっくり返ったスフィンクスへと振り下ろした。

「御免！」

手刀の一閃をもって、スフィンクスの巨軀が消失した。復元や再生の様子は見られない。

頼みの綱のスフィンクスを完全消滅させられて、女王ニトクリスは顔色が真っ青だ。

「あわ、あわわっ。オジマンディアス様から預かった貴い神獣が！な、何だというのです——！」

「ですので御免、と。こうでもしなければ収まらないと判断しましたので。そして話を聞きなさい、寝起きのファラオ。彼女たちが貴女を助けたのは本当です。何しろ私が見ていました。彼女らは、山の翁たちに連れ去られようとしていた貴女を見かけ、義をもつてこれを救った」

「でもですね、エジプトの民でもない者たちが、私を助ける理由がですね、」

「では逆に問います。聖都の騎士が貴女を攫う理由がある？」

女王ニトクリスがしゅんとしていく。ようやく冷静になってくれた。畳みかけるなら今がチャンス！

「信じてもらえたようですね！ 女王ニトクリス！」

「きやつ?! な、何ですか急に」

「あなたを助けた者ですが何か！」

「そ、それは、はい……感謝します、旅の方」

「と、ここで水が飲みたいのですが！ 果物とかも食べたいです！」

あ、この要求はわたしではなく、おもにリカのために。砂漠越えをしたんだから、水分と糖分の摂取は欠かせない。

「そうだー！ 水浴びもしたいし、休憩もしたいぞー！」

「フォーウ！」

ふてぶてしい？ 承知の上ですとも。

「い、いいでしょう！ 特例中の特例として、貴女たちを私の客人とします。もてなしを受けたいのですね？ であれば、私を神殿まで護衛しなさい。スフィンクスの問いに答えた者のみが招かれる、太陽王の複合神殿、ラムセウム・テンテイリス光輝の大複合神殿に立ち入る名誉を与えましょう！」

女王ニトクリスが天に片腕を掲げると、砂嵐が徐々に止んでいった。澄み渡る青空が視認できるようになった。

「空が——！ 澄み渡るような一面の青色です！」

「佳い笑顔です。私も見栄を張った甲斐があります」

女王ニトクリスが初めてわたしたちに無邪気な笑顔を見せた。

「あとはこのまま西に進みなさい。二時間ほどで大神殿に辿り着くでしょう」

いざ踏み出したわたしたち——に、ベデイヴィエル卿は付いて来ようとしなない。

「あの、サー・ルキウスは——」

「私は大神殿に用はありません。また、皆さんが行かれるというのなら止める理由も」

そんな。せつかく頼もしい味方に巡り会えたと思ったのに、一緒に行けないの？

ベデイヴィエル卿は申し訳なさに常盤色の瞳を伏せてから、わたしたちに背を向けて去ってしまった。

ダ・ヴィンチちゃんがベデイヴィエル卿の義手について羨ましがっていると、女王ニトクリスから叱責が飛んで来た。

「すみません、女王。つい貴女の存在を忘れていました」

「丁寧なようで辛辣ですね！ 貴女、名前は！」

「あ、そちらも失礼しました。マシユ・キリエライトと申します。こちらはダ・ヴィンチちゃん。そしてこの子がわたしたちのマスターである、リカこと藤丸立香です」

「よろしい。遅きに過ぎましたが許します。皆、罪人名簿にない名前ですね。では改めて、私の護衛の任を与えます。大神殿まで私を守るように」

——そこからは、途中で海魔が出た以外は、穏やかな行軍が続いた。

女王ニトクリスによると、この時代には「王の中の王」オジマンディアスと謳われたラムセス2世が先に召喚されていて、しかもエジプトの土地と臣民を引っ提げて現界した。オジマンディアス王はそれをエジプト領と称し、統治した。しかし、反抗勢力であるサラセンの山の民と、聖地ならぬ「聖都」エルサレムの民だ。

女王ニトクリスは大神殿まで懇切丁寧に案内する気ではなかったらしく、途中で先に行ってしまった。

わたしたちは最後の丘を越えて——顎を外しかねない光景を目の当たりにした。

まるで砂の海に浮かんだ海上都市！

とんでもない巨大建造物。ピラミッドへ至るまでの道は研磨された石床で整地されている。道左右には神像を象った柱に加えて巨大な粘土板。知識がないわたしでも、素晴らしい建造技術だと分かる。

これが太陽王にして建説王オジマンディアスの居城、ラムセウム・テンテイス光輝の大複合神殿なんだ！

「入る前に確認だ。計測器によると、エジプト内部に一か所、さらに時空のおかしな所があるようだ」

「太極図の陽中の陰、みたいなの？」

「うん、リカ君上手だね、そんな感じ」

中は涼しいだろうから、これまで暑い行軍を強いたリカの体も休まるはず。さっそく中にお邪魔しましょう。

キヤメロット3

わたしたちは、神殿に入るなり、VIP待遇で玉座まで連れて行かれた。これはいい。

困ったのは、玉座の間に入ってからだ。

玉座に座る、エジプト系の外見特徴を備えた男性——おそらく彼がオジマンディアス王なのだろうけど、何故にあんなに眠そうなのか。こつちを見てもないじゃない。

「やつと来ましたね、怪しき旅の者ども！　ちよつと遅かったのは気にしていません！」

あ、女王ニトクリスもいらした。先ほどはお世話になりました。

「珍しいな、ニトクリス。そなたは大鳥とはいえ、そのように大声を上げる気性ではなかった。よほどその者たちが気に入ったと見える。はは、それは喜ばしい。実に、実に」

「も、申し訳ありません、ファラオっ」

ここで初めてオジマンディアス王はわたしたちを見た。睥睨した。

「お前たちが異邦からの旅人か。我が名はオジマンディアス。神であり太陽であり、地上を支配するファラオである。ライダーなどと呼ばれるのは些か飽きもした。そして、そしてだ。——うむ。余は眠い。老人が死の淵から目覚めたばかりのように、だ」

オジマンディアス王は気だるげに言葉を紡ぐ。

彼は、わたしたちがカルデアの使者であり、これまで五つの特異点を修復したこと、そしてついにこの第六特異点に赴いたことを承知していた。

「何故なら。お前たちの探す聖杯は、この通り、余が手にしているからだ」

オジマンディアス王が握って開いた手の上にある、金の八面錘。確かに、今までに何度も見て来た聖杯だ！

すわ魔神柱かと、わたしは盾を実体化して身構えたのだが。

「誰が魔術王なぞに与するか。これは余がこの地に降臨した際、十字軍めから——」

ずるっ。

手品ショーの断頭マジックのように、とても綺麗な直線軌道で、オジマンディアス王の頭が首からズレた。

わたしは慌ててリカの両目を後ろから手で隠した。あんなグロッキーな光景をこの子には見せられない。ごめんねリカ、ちよつとだけ我慢して。

「——十字軍めから没収したものだ。真の王たる余に相応しいものとしてな」

平然とお続けなさった!?

「そして、聖杯を手に入れたことにより余は——おっと」

二度目——!?

リカの目を塞いだ手をどけられないまま、心の中でつい絶叫。

「——」

わたしはなにもみてません。この子もなにもみてません。

固唾を呑んでオジマンディアス王の次の出方を窺った。

オジマンディアス王の視線がリカに固定された。舐めるようにリカの全身をくまなく見ている。

「……ふん。正直、第四あたりで息絶えたものと思ったがな。余の憶測も笑えぬわ」

——もしかしてこのファラオ、リカの体の傷を見抜いている?

「まったく——遅すぎる!。遅い遅い、遅きにも程がある!。カルデアのマスターとサーヴァントたちよ!。貴様らが訪れる前に、この時代の人理はとつくに崩壊したわ!」

この時代を特例の特異点とし、人理を完膚無きまでに破壊した者は、エルサレムの残骸、絶望の聖都に座している。

通り名を、純白の獅子王。

大神殿で饗宴を受けたわたしたちは、ご馳走を有難く頂いてから、大神殿から追い出された。嵐のような展開だった……

「何の不满があるのです!。王は貴女たちに貴重な水と食料まで与え

たというのに」

見送りに出てきてくださった女王ニトクリスに怒られた。

確かにその通り。水と食料と、他にも資材をいくらか分けていただいた。でもね、わたしはもつとリカを快適に休息させたかったのです。

「ですが王の寛大は一度きりです。次に出会う時が貴女がたの死の運命。それを決して忘れないように」

「はい。お世話になりました、女王ニトクリス」

「……………」

「あの、女王？ わたしが何か」

「……………いいえ。覚悟がないのは私も同じでした。マシユ、貴女も戦いは怖いのでしょうか？ それは誇れることだと私は感じました。怖くとも、それをごまかさずに奮い立っている。———それでは私もここで。エジプト領から出れば終末の地。気をつけて、お行きなさい」
ニトクリスさんはスフィンクスに乗って、大神殿へと去っていった。

ちなみに——

わたしたちの談話の間に、ダ・ヴィンチちゃんは木材のみでバギーを作成・完成させていたというね！

原理は自転車と同じでガソリンは魔力だそうだから、運転免許は要らないとか。これで徒歩での移動とはおさらば。ならばよしです。さあ一秒でも早く乗り込んで発進！ です！

ダ・ヴィンチちゃん製バギー、その名もオーニソプター・スピックスを運転して、わたしたちはついに砂嵐地帯を抜けた。

ハンドルはわたしが握っている。

後部座席では、ダ・ヴィンチちゃんがリカに冷たいジュースを勧め、リカがジュースをちびちびと飲んでる所……………って、あれ？ リカ、どうして急に座席に倒れて？

「二服盛っちゃった☆」

「ダ・ヴィンチちゃん……うーん?」

「ドフォー……ウ!!」

「だってほら、休める時に休んどいてもらわないと。この子は生身の人間だ。デミ・サーヴァントになったキミや、私みたいなサーヴァントと違ってね。それに休めと言って休めるような器用な子じゃないから、もう即物的手段に頼るしかない。大丈夫。効き目は調節してある。聖地に入ったらこの子も目を覚ますさ」

それは、そうなのですが……リカと一緒にドライブを楽しみたかったって言ったら、きつと不謹慎なんだろうーなー。

……………。

「ダ・ヴィンチちゃん。なぜわたしにだけ、転嫁魔術について教えなかったんですか?」

「リカ君に口止めされたから。正確にはロマニがね。私自身はグランドオーダーが始まるまでリカ君と面と向かって話したことがなかったけれど、空気を読めば隠し事をしているのは分かった。それに付き合うことにしたんだ。私がリカ君の『治癒魔術』の正体を知ったのはそのあとだ。動機が知りたいなら、マシユがリカ君本人に直接聞きなさい」

ぐ。確かにそれが筋だ。第三者経由で秘密を暴くなんて、後ろ暗いと思ってるも同然だ。

そんなことはない。わたしはリカの「先輩」なんだから、堂々と尋ねていい……はず。

けれど、と。思い出すのはオケアノスでの出来事。勢いで「立香^{リツカ}」と呼んだわたしを、あの子は突き放して逃げた。

リカに転嫁魔術を隠した真意を問い質して、またあの時みたいに拒絶されたら。

そう想像すると、どうしても、口を噤みたくなってしまう。

「と、潮時かな。マシユ、砂丘を越えれば今度こそ聖地エルサレムのはずだ。リカ君は私が責任を持って押さえしておくから、遠慮なく大ジャンプをかましてやりなさい!」

「は、はい! アクセル全開、飛びます!」

わたしは力いっぱいアクセルを踏み込んだ。オーニソプターが砂丘から飛んで宙に浮き、聖地に着地した。……聖地、に？

目の前に広がる光景に、わたしは唾然とした。

そこは、果ての見えない荒野。

乾いた大地は干上がった池か沼のようにひび割れて、チロチロと炎を燻ぶらせている。

オジマンディアス王の「絶望の聖地」という言葉を思い出した。こんな有様の環境で、とても人間が生きているとは思えない。

「……オジマンディアス王が聖杯を使うまでもないな。この大地は、じき燃え尽きる。もっと端的に言う、滅び去る」

聖地に何が起きたのか。その疑問を口にする間はなかった。

わたしたちはいつの間にか、眼を濁らせた人間たちに包囲されていた。痩せてこけた顔面、ボロボロの身なり。ほとんどの人が骨と皮だけの手に武器さえ握っていない。

「食べ物……食べ物だ……」

「水もあるぞ……うまそうな女もいるぞ……」

「ヒヒ、太陽王の人食い獣どもから逃げてきたんだろなあ……ヒヒ、ヒヒヒヒ！　ありがてえ、ありがてえ、オレのために生き延びてくれてありがてえ……！　殺せ！　肉だ、肉だ——！」

包囲網を徐々に狭められる。彼らはわたしたちを殺して物資を奪おうとしている。

「半ばグール化している。ああなってしまったらヒトはもうダメだよ。憎み、妬み、傷つけることでしか生きられない。生きてたってそう長くはない」

心が定まるまではたった1秒。わたしは彼らを撃退することを決めた。

この、心も体も餓えて渴ききった可哀想な人々を——わたしは、暴力的に無慈悲に追い返すのだ。

わあ、と迫ってくる人々を、わたしは魔力でコーティングした盾を横にフルスイングして、徹底的に吹き飛ばした。致命傷に至らないダメージになるよう調節はした。

その囲いを抜けて一名がバギーに迫ったものだから、わたしは慌ててその人物を背後から殴る形で吹き飛ばした。だって、バギーにはまだ眠るリカがいる。リカに手を出すなら、身の上がどうであろうが関係ない。全部全部、吹き飛ばすんだから！

痛みで逃げ出した人が大半、それでも襲ってきたものが一割。

一段落ついた所で、わたしは盾を霊体化させた。

リカは……よかった。まだ起きてない。

「恐れ入ったよ、マシユ。死者はゼロだ」

「……結果論です」

「なに。そういった心の余裕があるのなら、それは大きなことだ。叱ることじゃない。でもすぐに移動しないとね。他に仲間がいるとも限らないし」

ん…、とバギーから小さな声があった。わたしの心臓が大きく跳ね上がった。

リカが目を覚まして、上半身を起こしていた。

「おはよーございます……あれ？ ああ、え？ 一体何が……」

「まずい。非常にまずい。」

不幸にもこの場に倒れる人々には息があり、怪我をしている。ならばリカが転嫁魔術に訴える可能性は高い。早くリカの意識を彼らから逸らさなければ。

「ダ・ヴィンチちゃん！ オジマンディアス王から頂いた食糧や水にはまだ余裕がありましたよね！」

「まあ、あるにはあるが。ふむ……では、ほんつとーに単なる気休めだが、たった一口の水が人生の光になることもある！ 持って行きたまえ、心を喪った諸君！」

水と食糧は浮浪者全体に行き渡った。あとはバギーに乗って離脱あるのみ。

おろおろしているリカの注意が浮浪者の負傷に向く前に。

わたしはバギーの運転席に乗り込んでアクセルを全開にしてバギーを走らせた。

キヤメロット4

荒野に夕焼け色のお日様が近づいてきた頃合い。

やっとカルデアのドクター・ロマンから連絡が入った。

《よかったやつと繋がった！ 大丈夫かみんな!? 今回も何か予想外のアクシデントがあったのかい!?!》

「先輩。いつものドクター、です」

そうね。これでこそドクター・ロマンという芸風だ。

「アクシデントはありましたが、こうして窮地は脱しました。ご心配には及びません。みんな健在ですし、元気です」

元気で間違いはない。リカはここまで一度も転嫁魔術を行使していない、傷も痛みも負っていない。だから、これでいい。

《そ、そうか……丸二日も支援ができなくてすまない。そちらはどういった状況だったんだい?》

わたしはレイシフトしてからエジプト領で遭遇した全ての出来事を、なるべく冗長にならないように、要点を整理してドクターに報告した。

報告を聞いたドクターは、エジプトに入ると通信が安定しないから、今後はエジプト領に近づかないようにとわたしに言った。わたしはリカとフォウさんと同じ角度で、こつくり、領いた。

《オジマンディアスは、聖地にいるのは獅子王と言ったんだったね。なら間違いなくそれはリチャード一世だ。獅子心王さえいれば太陽王も何とかなる。キミたちは十字軍と合流して、上手くリチャード一世に――》

「あの、ドクター……獅子心王じゃなくて、獅子王って……」

《? だから、その獅子王は獅子心王ことリチャード一世のことだろう?》

「じゃなくて、えっと……」

リカが言いたいことはよく分かる。同じ獅子でも「心」と付くか付かないかで、わたしたちにとっては意味が大きく異なるのだ。

「ではダ・ヴィンチちゃんがリカ君の言葉の真意を教えてあげよう。」

ロマニ、予想外のアクシデントを聞きながっていたね。喜びたまえ。十字軍はとつくに敗退している！獅子心王リチャード一世はこの特異点には不在ってことさ！」

《何だって——っ!?》

控えめに言ってハウリングした。

《その特異点をマツピングしたけど、中心には大きな都がある！間違ひなく十字軍が占拠した都だ！それがあつる以上、聖地は騎士たちの手で陥落しているはずなんだ!》

騎士。そのワードに胸が鈍痛を訴えた。これは、彼の？

やるせないじれつたさが、わたしにも手に取るように分かつた。もちろんわたし自身の感情ではないと識別できるが、いくらかわたしの中に残されたギヤラハツドの魂の断片を、こうして感じることはまゝある……

その時。

ぞわり、と悪寒が背中を這い降りた。

わたしはバギーのブレーキを力いっぱい踏んだ。

リカは不安げに眉尻を下げてフオウさんを抱き締め、ダ・ヴィンチちゃんは訝しんだが、ドクターはこの先にサーヴァント反応を捉えたことであつたの突飛な行動を理解してくれた。

デミ・サーヴァントになつた恩恵で、それが500メートル離れた位置であつてもわたしには鮮明に状況が視えた。

わたしは状況を見て、彼の魂の断片が疼いた理由を知り、脱力するしかなかつた。

だつて、え、こんなの。うそ。だれか、うそつていつて。

「マシユ?」

ダ・ヴィンチちゃんの呼びかけに応える余裕はない。

わたしはバギーから身を乗り出して、目元を手でこすつて、また見て——嘆息した。

何で? 何であんな所に——トリス・タン・卿が居るの!?

“不覚、そして無念なり。万事ここに休した”

トリスタン卿が追い詰めていたほうの、大勢の民を背中に庇った細身の男性が零した。あの男性はサーヴァントだ。

“私は悲しい、山の翁よ。貴方一人であれば窮地を脱するは容易い。しかし、あなたの背後で怯える聖地の難民を守るために、貴方は残り続けるのですね。価値なきものを守らんと、価値あるものが失われる。私には、それが悲しい”

サーヴァントの後ろには集団がいる。40人ほどだ。彼は、その人々を守って先導してきたのだろうか？ それを、トリスタン卿が追ってきた？ あのトリスタン卿が？

「フオウ……」

「先輩、だいじょうぶ、ですか？ 辛そうです……」

リカにそう言われるということは、今のわたしは相当“彼”の感情に引きずられた顔をしているらしい。

“……、彼らより私のほうが価値がある、と言ったな？ では取引だ。貴様の騎士道とやらが真のものであるのなら、我が命をここで差し出す。その代償として民たちを逃がしてほしい”

「な——!？」

“逃がすと言っても具体的には？ 私は撤退を許されてはいません。申し訳ありませんが……”

“では、右腕と足だ。我が首の代わりに、これより一日、足を動かさず、また右腕を封じられよ”

“な……なんという。いけません。それでは貴方は……”

“承諾と受け取った。しからば——御免!”

肉が裂ける嫌な音が耳に生々しく届いた。思わず耳を塞ぎたく

なつた。

“走れ、同胞たちよ……！ 東の呪腕であればそなたらを受け入れよう！”

大勢の人たちが、わつと夜の荒野へ駆け出した。

トリスタン卿はとても不憫なものを見る目で、首が裂けたアサシンの骸を見下ろしてから、逃げる人々を見やった。

“ああ、私は悲しい……それではいけない、と言ったのに”

逃げ出した難民の内一人の、首が、鋭利なテグスを巻かれたかのように、刎ね飛んだ。

——知っていた。 “僕” はトリスタン卿の最大の武器を知っていたのに、何もできなかった。まさかあの彼がそんな真似をするはずがないと、わたしの中のギヤラハッドは心の底から思っていたから。妖弦フェイルノート。爪弾く旋律が対象を断つ “音の刃”。その真価は、弦を爪弾く指の一本あれば攻撃として成立すること——！

“愚かなる山の翁。貴方はこう言うべきだった。『どうか、指の一本も動かすな』と”

「え？ な、何？ 何が」

わたしは身を乗り出そうとしたリカの、目を、後ろから手で隠した。
「見ないで」

「先、輩？」

——あんな凄惨なシーン、リカには見せられない。この子は絶対に駆け出してしまう。一人でも即死でない難民がいれば、転嫁魔術で治そうとする。そんなこと許したら、リカが過負荷で死んでしまう。

「見ちゃ、だめ」

だからわたしは、震える声で、ただ「だめ」と言い続けた——

——一夜明けて、トリスタン卿が去ってから、わたしたちはようやく現場へ向かった。

断たれ方は様々だが、生存者ゼロであることだけは確かだ。リカが転嫁魔術で救うべき生者はどこにもいない。そのことに安心し、同時に、これだけの死体を前にして悲しみや義憤が浮かばない自分に、心底から吐き気がした。

わたしたちは聖都を目指す道すがら、聖都へ移民すべく村を捨ててきたという難民に出くわした。より具体的に言うと、その難民の旅団が野盗に襲われているところに。

わたしはダ・ヴィンちゃんと力を合わせて野盗を追い返した。

難民の皆さんは聖都への正確なルートをご存じだったので、野盗撃退のお礼に道を教えていただいた。ただし同行はしなかった。難民の中には怪我人や弱った人もいたからだ。リカが転嫁魔術に踏み切るシチュエーションは極力避けたい。

難民の旅団を見送ってすぐ、ドクター・ロマンから通信が入った。

《情報収集、ご苦勞様。同行は避けて正解だったよ。今は敵味方の区別がつかない状態だ。いま明らかになっている勢力は、エジプト領の太陽王、聖都の獅子王、それに鬮體面のサーヴァントたち。砂漠ではハサンと名乗ったんだったね？ この時代と土地でハサンといったら、《山の翁》アサシン教団で確定だ》

「三すくみ、に、なってる?」

「フオウ?」

「ううん、リカ。今回はそうじゃないかもしれない。砂漠でサー・ルキウスが『聖都の騎士が女王ニトクリスを攫う理由がない』って言うってたでしょう?」

「言っていました。山の民ならいざ知らず……あ。じゃあ同盟関係……不可侵条約とか?」

「私もリカ君の推測に同意だ。この地は獅子王が治め、エジプト領は太陽王のもの。敵対しているものの正面切って戦わない。つまり冷

戦中。それを看過できずにレジスタンス活動をしているのが山の民なんじゃないかな」

「筋の通った推測だが、あくまで推測の域を出ない。全ては聖都で明らかにするしかない。」

「十字軍を壊滅させた『騎士』とは何者か。——この胸が、今なおギヤラハツドの断片が訴える痛みに苛まれていたとしても。」

キヤメロット5

バギーを走らせること半日。わたしたちはついに聖都と呼ばれる場所に辿り着いた。

それは夜の闇に沈んでいてなお威容を誇る、白亜の城塞都市。

聖都の正門前には、たくさんの難民が集まって野営をしていて、小さなキャンプが出来上がっていた。ダ・ヴィンチちゃんの目測で、1000人近く。

わたしたちは難民のキャンプにお邪魔することにした。

オジマンディアス王から分けて頂いた資材の中には、砂避けのマントもあつたので、それを着込むことにした。お粗末な変装だが、ないよりはマシだ。

リカには特に長いマントを着せた。先ほどのような不埒者がまたわたしたちを狙わないとも限らない。——はい。難民から追い剥ぎなんてする不届き者を先ほど成敗したばかりなのです。惜しくも逃げられてしまいました。

そうしてわたしと、リカと、ダ・ヴィンチちゃんと三人、正門から一番遠い難民の中に紛れ込んだ。

《気づいていると思うけど、報告しておくよ。キミたちの周囲には高濃度の魔力反応がある》

「はい。聖都から出て来た騎士のようです。難民たちをずらりと囲んで守っています」

言葉を続ける前に、突如として空が朝になった。

「せ、先輩」

「大丈夫」

わたしのマントを弱々しく摘まむリカの、肩に腕を回して、抱き寄せた。

大丈夫だという保証は、本当は何もない。どんなカラクリがあつたって、わたしはリカを護るだけだ。

ざわめく難民たち。その彼らを、聖都の正門から出てきた騎士が窘めた。

あ——ああ、ああ！ そんな。こんな、ことが。

ベデイヴィエール卿とトリスタン卿で尽きたと思った愕然が、またわたしを襲った。

……ガウエイン卿まで、この時代にいるなんて……

分かる。わたしの中のギアラハッドが胸を痛めている。

「聖抜が始まるぞ！ 聖都に入れるぞー！」

難民が上げる喝采さえ、どこか遠い出来事のように。

「……最悪だ。ありえない。こんなことが起こりえるのか」

《レオナルド？ どうした、キミらしくないぞ！ なにが起きているんだ!》

「リカ君、マシユ。すぐにここから離れるんだ。今ならまだ間に合う。

何が『聖抜』だ。文字が違うじゃないか。奴らは——」

ギアラハッドの断片が告げる。今すぐ彼を止めろとわたしに警告している。トリスタン卿の時の二の舞を踏んではいけない、と。

「もはや地上のいかなる土地にも、人の住まう余地はありません。この聖都キャメロットを除いて、どこにも。我々が聖都は完璧なる純白の千年王国。この正門を抜けた先には、理想の世界が待っています。我が王はあらゆる民を受け入れます。異民族であっても異教徒であっても例外なく。——我が王から赦しが与えられれば」

前触れのないホワイトアウト。

強い白光。なのに眩しくない。人々のシルエットは視認できる。中でも、一面が白に染まった世界で、金の輝きを放つごく少数の人は、特に目についた。

「……皆さん。誠に残念です。王は貴方がたの粛清を望まれました。では、これより聖罰を始めます」

え？ と。呆気に取られた一瞬が、致命的なロスタイム。

難民たちを囲んでいた騎士の一人が、そばにいた女性を斬り捨てた。

悲鳴を上げたのは一人か大勢か。

錯乱が人から人へと伝染し波及し、誰もが身一つで逃げようとした。

だがそれは叶わない相談だ。粛清騎士はすでに難民を囲むように布陣している。逃げ出そうと突出した者があれば、粛清騎士はモグラ叩きのように機械的にそれを斬った。

なおも逃げようと難民は惑い走るのだから、正門前のパニックは筆舌に尽くしがたかった。

たくさんの人間が目の前で殺されていく。たくさんの命がわたしの前で死んでいく。

「う、あ——わあああああ!!!」

盾を実体化させて、手近な粛清騎士を力いっぱい殴りつけた。倒れた粛清騎士はサーヴァントが消える時のように消えていったけど、気に留めていられない。

こんなのはイヤ。人ってこんなに簡単に死んでいいものじゃない。命ってこんなに簡単に奪われていいものじゃない。

そんな「当たり前」がこの場のどの騎士にも通じないなら、わたしが、護らなくちゃ。

わたしは正門を目指して走り出した。

粛清騎士たちを指揮しているのはガウエイン卿だ。彼を叩かないことには、騎士たちの狼藉は止められない。

「……を覚まして、ルシユド！ 子供を殴るなんて、何て酷いことを！」

正門前のあの女性——確か、あのホワイトアウトの中で金色に光っていた一人じゃ？

「これからは獅子王様にお祈りを捧げるように言いつけますから！ どうかこの子も一緒に！」

「いいや。貴方がたは己が神を捨てはしない。それは幼子であってもだ」

見えた。粛清騎士が、地面に倒れた少年から女性を引き剥がして連行しようとしている。

「せめて、その篤き信仰と共に眠れ。貴女の息子は、貴方がたの神に選ばれた」

粛清騎士が剣を少年に振り下ろす。あの子を殺そうとしている。

だめ、そんな、間に合って——！

剣を受けたのは少年じゃなくて、母親の女性だった。

「ああ、ルシュド……よかった……私の希望、私の人生……いのち健やかに、善き毎日が送れます、よう……」

女性が頷れる。息絶えたんだと分からないほど、わたしだって馬鹿じゃない。

叫んだのか、泣いたのか、わたし自身も分からないまま。わたしはあの女性を殺した粛清騎士を、盾で、全力で殴っていた。

こんな悲劇が許されていいはずがない。このまま息子さんまで死なせるわけには行かない。せめてこの子だけでも助け、ない、と……

——助けて連れて戻ったら、リカはどうする？

リカのことだから、この子の傷を自分に転嫁して治そうとするのでは？

「第四あたりで息絶えたかと——」

オジマンディアス王の指摘が正しいとしたら。すでにリカの肉体が他人の傷を引き受ける限界を迎えているとしたら。

——この子を助ける代わりに、リカが死んでしまうかもしれない。

結論を弾き出した瞬間、四肢が、鉛を詰めたように重くて、動けなくなつた。

俯いて見ていた地面に影が射した。

「躊躇いましたね？ 戦うことではなく、命を救うことに」

顔を上げるまでもない。このプレッシャー。間違えられるはずがない。——ガウエイン卿に間合いに入り込まれた。

「難民たちを逃がすために血路を開き、今また、幼子を助けんがため敵陣に踏み込んだ。だのにその幼子に貴女は手を伸ばさない。助けてしまったことを後悔さえしている」

ガウエイン卿の言葉は全て真実だ。

聖罰と何ら変わらない。わたしはわたしの都合で命の選別をした。この少年とリカを天秤にかけて、リカを選んだ。

「穢れも曇りもなかったかの騎士も、己が魂を預ける相手だけは見誤つたようですね——少女騎士よ。その盾、貴女には宝の持ち腐

れ。せめて同胞として我が聖剣を手向けよう！」

ついにガウエイン卿が聖剣をわたしへと振り下ろした。

避けられない、防御が間に合わない。斬られる——！

「やめて!!」

聖剣が止まる。

中途半端に構えようとした盾が止まる。

リカが、わたしとガウエイン卿の間に割って入って、両手を広げてわたしを庇って立っていた。

「リカ、何てこと……!」

あなたを傷つけたくなくて、ここまで迷って戦ってきたのに。

あなたが斬られでもしていたら、何の意味もないじゃない!

「己が騎士を守るために主君が身を危険に晒すのですか」

「主君なんて知りません! 確かにあたしはマスターだけど、先輩は先輩で、しもべなんかじゃないんです!」

「なるほど。——異邦のマスター。貴女の名は?」

「リカ」

「ありがとうございます、リカ。確かに覚えました。ですので——お覚悟を。貴女と貴女の騎士は、獅子王とその円卓の騎士を敵に回した。ここで私に討たれるか、私以外の円卓の騎士に討たれるか。どうあれ運命は決まりました。苦しませるのは本意ではありません。どうか、速やかに運命を受け入れますよう」

そんなこと、させない!

「リカはその子をお願い!」

「はい!」

リカが少年を抱き上げてスタートダッシュを切った。

わたしは、抜剣した。

——無意味な行為だと分かっている。ギャラハツドの霊基を以てしても、剣で、日中のガウエイン卿に挑もうなんて発想からして間違っている。

でも、ガウエイン卿はリカに対して剣を止めた。彼の騎士道はまだ完全に地に堕ちてはいない。

だからわたしは——そこに付け込んででも、この人たちの過ちと対決するんだ。

静寂の、一拍。

「ガウエイン卿が聖剣を揮った。

同じタイミングで剣を振ったわたしより、速度も威力も段違いに上。それでも——！

「それでも、その一刀は無意味ではない」

ギイイ……ンツ!!!

その剣戟は、わたしとガウエイン卿が斬り結んだ音じゃない。

——わたしたちの間に割り込んだ灰色の人影。聖剣を素手で受け止めた銀の右手。

「サー・ルキウス？」

つい砂漠で会った時の呼び方をしてしまったけど、助けてくれたのは、ベデイヴィエール卿で間違いない。

「レディ。貴女が勇気を奮い起こして抜いた剣、確かに見届けました。……私もどうかしていた。強きを挫き、弱きを助ける。その決断は常に、何より正しいものであったのに」

「サー・ベデイヴィエール!? 円卓の騎士である貴公が、王に叛逆するというのはですか!」

ベデイヴィエール卿は答えず、握っていた聖剣の刀身を振り払った。

ガウエイン卿のガラティーンを素手で払いのけるなんて。あの銀の右手は一体……、……待って。この、焦げ臭さ。まさか。

「ベデイヴィエール卿! まさか、その腕ごと体内が焼けているのですか!」

あれほどの宝具を行使する代償が無いわけなかったのに、楽観していた! あの腕は人間が担うには熱すぎるんだ!

「ツ……気になさらず! それより急いで! 今なら撤退できます!」

撤退。ええ、させてもらうとも。でもここにベデイヴィエール卿を置いて行くつもりは微塵もありません!

「ダ・ヴィンチちゃん!!」

「——はいはいはいはい！ 呼ばれたらナイスタイミングで来るとも天才だからね！ 後ろの敵は蹴散らしておいたよ！」

バギーがドリフトしてすぐそばで急停止。さすがです、ダ・ヴィンチちゃん！ 頼れる万能サーヴァント！

「ベデイヴィエール卿も一緒に来て！ 昼間のガウエイン卿なんか相手にしてらんない！ 失礼！」

「わ、ひゃ!?!」

乱暴は承知でベデイヴィエール卿をバギーに押し込んで、わたしも続いて乗車。

バギーの助手席には、さっきの少年を膝に乗せたりカとフオウさんがいた。

「先輩！ すみません、この子のケガ、まだ治療できてなくて……！」

「それもまたあとで。諸君、対閃光、衝撃防御だ。具体的に言うとうちを開けて目と耳を塞ぎたまえ」

わたしは言われた通り目をきつく閉じて耳を両手で塞いだ。

直後に体に振動が伝わって、閉じた瞼の裏にまで閃光が焼き付いた。

キヤメロット6

聖都から距離を取り、安全圏に至ったわたしたち。

“彼”の懐かしのキヤメロットより、乾いて焼けている荒野の風景に安心するなんて、どんな皮肉か。

「お疲れ様でした。貴女たちの協力なくして脱出はできなかつたでしょう」

オーニソプターを降りたベデイヴィエル卿の足取りはしつかりしたもので、表情にも苦痛は窺えない。何も知らなければ、逃走中に体調を持ち直したのだと勘違いしただろう。

今もそう。逃げ延びた難民たちの代表として話をしに来た男性に、ベデイヴィエル卿は柔和な笑顔で対応している。

「先輩、先輩。あの人、怪我されてるんじゃない？」

「……うん。多分、あの右の義手の宝具の反動で、体の内側は途方もないダメージだと思う」

リカは悲しげに俯いて、意を決したように顔を上げてベデイヴィエル卿に小走りで近寄った。ちやうど難民の代表が交渉を終えて、ベデイヴィエル卿から離れた所だ。

「リカさん？ あ、いえ、すみません、勝手な真似でしたか!？」

リカは答えず、ベデイヴィエル卿に掌を伸ばした。わたしは今さらになって気づいた。あの子、ベデイヴィエル卿の体内の火傷を自分に転嫁する気だ！

とつさにわたしは追いかけて手を伸ばして、リカの手を、叩いた。

「——え?」

「あ——」

取り返しがつかないことをしてしまった。その思いがわたしの思考を攪拌する。謝る? ちがうの、と否定する? どうしよう。どうしていいか分からない。

「っ、ごめんな、さい……!」

リカは一目散に走って逃げて行った。——泣いて、いた。

フォウさんが追いかけたけど、わたしの足は地面に縫い止められた

ように動かなかった。

もう——限界だった。

わたしはその場にぺたんと座り込んだ。視界がじわじわと滲んでいって、溜めきれなかつた涙がボロリと流れ落ちた。

「レ、レディ!? どうされたんですか? どこか怪我を?」

答える声さえ出せない。せめて首を横に振って、そしたらまた涙、涙。自分の感情なのにコントロールが効かない。しゃくり上げて、しまいには地面に突っ伏して泣き喚いた。

難民の旅団が出発する。

わたしたちカルデア一行はその中にまぎれて、一緒に行進した。布で頭から外見を隠して。いつでも難民の護衛に出られる位置に陣取って。

わたしのそばには、絶えずベディヴィエール卿がいてくれている。何があつたかを尋ねず、ただ隣に立つてくれている。

だから、甘えが口を突かせる。

「最初はただ、リカに死んでほしくないだけでした」

水分が足りずカサカサに乾いた声だと、なんだかわたしの声じゃないみたい。

「なのに、気持ちはどうどん濁っていったって……リカさえ無事なら他は死んでもいいと思ってるみたいで、自分で自分が信じられなくなっていくって——」

ルシユド君を見捨てようとした。助けに割って入ったのはわたし自身のくせに。

荒野でさまよっていた人たちに物資を分け与えたのだから、リカに転嫁魔法を使う隙を与えないため、善意からじゃなかった。

次はどんな恐ろしいことをするんだろう、考えるんだろう?」

想像できないほど自分自身が怖くて、叫んで逃げ出してしまったかった。

「マシユはリカさんが好きですか?」

ベデイヴィエール卿はお天気の話でもするような軽やかさで問いかけてきた。

「はい。あの子は、わたしが巻き込む形でサーヴァントの契約をしたのに、その責務から逃げ出さなかった。それに、初めて会った時、わたしみたいな未熟者を『先輩』と呼んでくれた。わたしはあの子のことが、ずっと……」

ずっと——なに？ どう続けられいいんだろう？ ううん。悩む必要なんてないはず。ずっと「大切に想ってきた」でいいはずなのに。リカへの気持ちも「大切」の一言ですませたくない。

わたしが護ってきた。わたしが手を引いてきた。世界で一人きりの、わたしを「先輩」と呼ぶ少女。

「——マシユ・キリエライト」

「は、はいっ？」

「貴女が名乗られた姓名でしたね。不躰を承知で尋ねさせてください。その名は英霊としての真名ですか？」

……正直、ベデイヴィエール卿が話題を変えてくれて助かった。これ以上考えたら、何か、恐ろしい一線を踏み越えそうだったから。

「わたしは……正しいサーヴァントではありません。デミ・サーヴァントといって、正確には、人間と英霊が融合した存在です。マシユ・キリエライトはわたしの名。わたしという人間に宿った英霊こそが、ギアラハッド。サー・ベデイヴィエールと同じ、円卓の騎士です」

「……そうだったのですか。話して頂き、ありがとうございます。ずっと貴女に感じていた懐かしさの正体がようやく分かりました。ギアラハッドが共に在ったからだったのですね」

「あの、水を差すようで申し訳ないのですが、わたしはギアラハッドのような立派な方ではありません。みつともなく泣いたり、悩んだり、頭の中ではすごく悪いことを考えたり……」

「もちろんです。貴女は貴女。ギアラハッドではないのですから。似ていると感じることはあっても、混同はしません」

ベデイヴィエール卿の言葉は、すとん、と胸に落ちて来た。

——そっか。

わたしは誰かにそう言っただけでほしかったんだ。

あなたはギャラハッドじゃない、マッシュだよ、って。

たった一言で楽になれるならもっと早く——、——いいえ、そうじゃないのよね。わたしは誰にでもそう言っただけでほしかったんじゃない。ベデイヴィエール卿みたいに、ギャラハッドとわたしの両方の個を尊重してくれる人にこそ、告げてほしかったんだ。

何て有様なのか。アメリカでの任務でギャラハッドとの関係は吹っ切ったつもりだったのに。

「ですから、あなたがリカさんを大切に想うなら、それはまぎれもなくマッシュという一人の人間から生じた真心です。ギャラハッドに遠慮する必要はありません」

でも、リカを大事にしすぎて何度も暴走したわたしが、リカへの気持ちに開き直ってしまったら、もっと大変なことをしでかしやしないだろうか。

「す、すみませんっ、不安がらせるようなことを言っただけで済ませましたか？」

「いいえ、そんな！ 全てわたしを思いやってくださっての言葉です。不安に見えたのでしたら、単にわたし自身が未熟なサーヴァントだからであってですね。それに、不安というか、わたしよりずっとお辛いのはベデイヴィエール卿のほうじゃないですか」

「？ ああ、アガートラムのことですか。ご心配なく。短時間の真名解放であれば、聖都の門でのような失態は晒しませんとも」

心強く言い切る時こそ内実は真逆であるのが貴方だろうが、とわたしの中のギャラハッドの断片が抗議したがっているのを感じた。

そこでカルデアのドクター・ロマンから通信が入った。

《ベデイヴィエール卿。キミのその右腕、今、アガートラムと言ったかい？》

「はい、ロマン殿。もっともこれはマーリンから授けられた義手であって、ケルトの戦神、ヌアザの銀腕を模した、贗作宝具です」

《ふむ、すごい技術だ。神霊の腕を再現するなんて、どんな素材を使っただろう？ ダ・ヴィンチちゃんなんか内心、プライド刺激されま

くりだろうねえ。『私のガントレットのがすごいんだぞー!』って感じに》

わたしは苦笑し、すぐ、ダ・ヴィンチちゃんのガントレットでも円卓の騎士たちには及ばないことに気づいて、中途半端に口の端を下げた。

——ギフト。真正の聖杯が授けた祝福。破れるのはおそらくベデイヴィエル卿のアガートラムのみ。

けれどアガートラムを真名解放すれば、ベデイヴィエル卿はまた体内を焼かれる。そんな痛々しいペナルティを承知の上で、彼にほい頼むことはしたくない。

せめて人心地ついてから、ダ・ヴィンチちゃんが工房を構えてギフトを解析すれば、突破口を見出せるかもしれないのだけど。

当のダ・ヴィンチちゃんはどういうと、リカのアガートラム……いや、ごまかすまい。リカのカウンセリングのために、わたしたちとは物理的距離を置いている。少なくともこの通信が聞こえない程度には離れている。

思考がまた、ベデイヴィエル卿と話し始めた所に逆戻りしそうになった時に、通信越しのドクターの声色が変わった。

《いや、待て——後方から猛スピードで接近する魔力反応! 数は、粛清騎士40体と……サーヴァント反応! 円卓の騎士がもう! くらそ、あと少しで山岳地帯に入れたのにつ》

そんな、速すぎる。まだわたしたちの準備は何も整っていないのに。

難民の皆さんがそれぞれに荷を捨てて山へと走り出した。おそらくはダ・ヴィンチちゃんの指示だ。なりふり構うな、とあのダ・ヴィンチちゃんが判断した。

数が多いだけの敵なら今までに何度も相手をしてきた。しかし粛清騎士の強さは通常の兵士を遥かに上回るし、加えて円卓の騎士が率いているならば、こちらの活路は無いに等しい。上手く迎撃できたとしても、少なからず難民の方々から落伍者を出す。どうしよう。最適解が、突破口が見出せない……!

「っ……やはり私も……！」

ベデイヴィエール卿が銀の右手で細剣を抜こうとする寸で、わたしたちの近くにオーニソプターがドリフトして急停車した。

「あの数はベデイヴィエール卿じゃ無理でしょ。あーあ、円卓の騎士が一人だけなら任せただけどなあ」

運転席にはダ・ヴィンチちゃん。後部座席には、両手でフォウさんを抱いたリカがいる。

リカがオーニソプターから降りてから、ダ・ヴィンチちゃんはオーニソプターの戦首を、向かってくる敵部隊に向かせた。迎撃に出るならわたしも。そう思っただけで乗り込もうとしたわたしだったが。

「あ、マシユはダメ。というか誰も乗らないで。私一人で突っ込むから。キミたちは難民たちと行きなさい」

「あの、それはどうい——」

「いわゆる、ここは私に任せて先に行け！ ってやつね。様式的に言う。オーニソプターの心臓部にマナ収束機構を取り付けた。要は私の杖と魔術回路を利用した自爆自走車さ。これで連中を爆散一掃する」

《馬鹿かキミは!! そんな戦法は却下だ!!》

「まあまあ。これはもうしょうがない。連中に捕まったら、これぐらいしか逃げる手段はなかったんだよ。最初から。だからまあ私としては、ついに自分の番が来たか、ぐらいの感慨しかない。ロマニ、あとはキミが上手くやりましたまえ。チキンのクセに、ここまで頑張ってきただろ」

《……ま、ダ・ヴィンチちゃんのことだし。一人で行ってくれれば?》

話ほとんどん拍子で、気づけばダ・ヴィンチちゃん自爆で対策が固まっていた。

わたしはとっさにリカを見て、悟った。リカは合流前にダ・ヴィンチちゃんからこの作戦を聞いて、納得して、受け入れていた。でなきやこんな悲痛な表情をこの後輩がするわけない。

「大丈夫、天才は不滅だ！ 生きていたら必ず会おう！」

リカは無言で深く頭を下げた。

オーニソプターが発進する。向かってくる粛清騎士の部隊へ正面から迫り、接触——大規模な爆発が起きた。粛清騎士は消えて、開けた視野がある限りだった。

わたしはそこへ至ってようやく事の重さを実感し、悲鳴を上げかけた。

「しっかりと、マシユ！ 彼は信じて後を託したのです！ 今の内に我々も山岳地帯へ——！」

ベデイヴィエール卿の叱咤がわたしに悲鳴を呑み込ませてくれた。

行かなくちや。走らなくちや、わたし。

ここで立ち止まっては、それこそダ・ヴィンチちゃんがああした意味が潰えてしまう。

わたしは、先に走り出したベデイヴィエール卿やリカとフオウさんに追いついて、一緒に山へ駆け出した。

キヤメロツト7

山に入って後顧の憂いがなくなってから、難民の代表者がわたしたちにお礼を言いに来てくださった。

「まさか我々のために、あの女性が犠牲になつてくれるなんて……」

わたしはいいえ、とだけ答えた。

ダ・ヴィンチちゃんは万能の天才だもの。きつと生きているもの。もともとオーニソプターは飛行機だというから、爆発の直前に空に飛んで逃げているはずなんだもん。

《山岳地帯に入ったわけだが、村まではあとどれくらいなんだい？》

「ああ。これならあと一日で辿り着ける。ただ、問題があつて……」

何だろうか？ 村に結界的な守りがあつて簡単には入れない、とか？

答えて、難民の代表者は、水と食糧が問題だと言った。

今までは少ないながらもダ・ヴィンチちゃんが何とか配分していた。水の錬成、怪我人の手当て、食糧の調達、何もかもダ・ヴィンチちゃんがしてくれていた。万能の天才に、わたしたちの誰もが気づかない内に頼りきりになっていた。自分の無頓着さに恥じ入るばかりだ。

ここからは水も食糧も調達できない。怪我人の治療をリカにさせたりもしない。難民の皆さんには飲まず食わずで一日、村へ強行軍を強いることに――

「いえ、食糧だけなら何とかかなりそうです。このような時に不謹慎ですが、私、旅には慣れていきますので。人体に害なく食べられる動物の目利きには自信があるのです。凄いです」

「フオウウウウ……」

「あ……あつちの空。ワイバーン来てます、ね」

「あの種であれば大丈夫。食べられます。というところで、いぎ勝負！」
幸いベディヴィエール卿が細剣を抜いたのは左手。アガートラムを行使する気でないのは大変よろしいのですが、本当にワイバーン食べるんですか!? あ、待つて、突撃するならわたしもご一緒させてください……!!

かくてワイバーンの肉という珍味が食卓に並ぶ——ことにはならなかったから驚きである。

これもひとえにリカが料理に秀でていたからだ。

リカはオケアノスでの任務中、いつの間にかオリオンさんにワイバーンの捌き方や血抜き、そして調理法を教わっていたのだ。

「腹に入れば皆同じ？ 腹に入るまでが違います」

据わった目で見上げる後輩に、かのベデイヴィエル卿でさえタジタジだった。

ベデイヴィエル卿と難民の男性陣にお手伝いいただいて、血抜きをして食べられる部位を捌いてからは、リカの独壇場。平らな岩を魔術で熱してフライパン代わりにして、脂身を溶かした焼き石の上でじゅわーと焼けるワイバーンの肉の香ばしさたるや。味付けは、過日オジマンディアス王に頂いた物資である岩塩と香辛料を削った塩コショウ。そうして食欲をテロに等しく刺激するドラゴンステーキの出来上がりである。

難民の皆さんは老若男女問わず威勢よくドラゴンステーキを掻っ込まれた。おかわりのオーダーにもリカは応えた。

もちろんわたしも、久しぶりのまともな献立に舌鼓を打ち、感動に打ちひしがれた。

しかし最も感動していたのはベデイヴィエル卿だろう。

「今までは肉をくり抜いて焼くだけでしたが、的確な調理をすることでこれほどに美味になるなんて……！ まるで食材の魔術師、いえ、魔法使いと言って過言ではありませんよ、リカさん！」

「お口に合ってよかった。オリオンさんにダメ元で習っておいて正解でした」

ロンドンでのスコーン作りで、てつきりリカの得意分野はお菓子に特化していると思っていたが、これは認識を大きく書き換えざるをえない。この子は料理百般なんでもござれだった。

——満腹になると、ちよつとだけ、前向きになろうと思えてきた。

難民の案内で、もう山を三つは越えた。もうすぐ村に着く、とルシユド君はきつぱり言ったので、わたしも重い足を叱咤して歩を進めた。

「お母さんが前に連れてきてくれたんだ。『困ったらここに来なさい』って」

「山で暮らす者たちは、様々な事情から聖地を後にした人々だった。それでも彼らは聖地に祈りを捧げるため、できるだけ聖地に近い山間に村を作った。それが今から行く東の村だ。彼らが我々を受け入れてくれるといいんだが……」

《サラセンの人たちの中だけでも、聖地にまつわる事情があるんだね》
「信仰の拠り所を目の前で奪われる……失われているのは命だけではない、ということですね……」

「——知ったような口を。聖地を穢した騎士が何を言う」

サーヴァント反応！

わたしはすぐさま盾を実体化して身構えた。わたしの臨戦態勢を受けて、ベデイヴィエル卿が細剣の柄を握りつつリカを背に庇った。

どこからともなく髑髏面を着けた黒ずくめの男が現れた。

「我らの村に何用だ、異邦人。これ見よがしに騎士など連れてきおつて。最後の希望すら摘みに来たか？」

「誤解です！ ベデイヴィエル卿は円卓の騎士ではありません！」

「フォウ、フォウ！」

ベデイヴィエル卿が地味に凹んでらっしゃる。しまった。言葉選びを間違えた。そう気づけないほどわたしも他人の機微に気づくはないつもりだ。

《そうそう、誤解！ 話せば長くなるけどボクたちは》

「だまらっしゃい！ 声だけの臆病者め、出る幕などないわ！」

《あわわ、ごめんなさい、ごめんなさい!!?》

難民の代表者が事情を説明してくれたおかげで、彼らを村に受け入

れてもらえる運びにはなった。そのことは心から助かったと思った。
ダ・ヴィンチちゃんを欠いた今、わたしたちにこの数の命は荷が勝ち過ぎている。

オルガマリー所長の心境が今になって分かった。一人で大勢の命に責任を持たなければいけないというのは、こんなにも苦しいことだったんですね、所長……

「だが、その異邦人たちは別だ。貴様らを村に入れるわけには行かぬ」

な!!

「そして、帰すこともできぬ。追り返した貴様らが、騎士どもにこの村を売らぬとも限らぬからな」

「先輩は!! ……そんなこと、しない、です」

リカ——

わたしはあなたにひどい仕打ちをした。なのに、まだわたしを信じてくれるの？

それならわたしは、リカの「先輩」として在りたい。

「立ち去れと言われるのなら、我々はこのまま立ち去ります」

「……生憎、今の私は村を任された者。確証のない言葉を信じていい立場にはない。——構えるがよい。これは暗殺ではない。戦いだ。死にたくなければ私を先に仕留めるのだな!」

く、この時代に来てから、どうしてこうも、悪人でないのに融通の利かない人にばかり当たるの!」

こうなつたらわたしとベデイヴィエール卿でこの分からず屋のアサシンを無力化して……!

「まあ待ちなよ、呪腕殿。お前さんの心情も分かるが、難民たちを助けてもらったのは事実だろ?」

っ、新手!?

いつからいたのか全く気配を感じなかった。サーヴァント。弓をお持ちということはアーチャー……だと思いたいけれど、得物とクラスが一致しないサーヴァントにたくさん会ってきたから何とも言えない。

「お前さんだつて昨日は我が事のように喜んでいたじゃないか。『素晴らしい！ 感謝の言葉が見当たらぬ！ これほどの快事が他にあらうか！』ってな」

「それはこの者どもの素性が分からなかったゆえ！ 円卓に連なる者と知っていれば感謝など致しません！」

「ああ、それ。この兄さんたち、円卓じゃないようだぜ？ なら『感謝の抱擁をしなくてはいけませんな！』を実行してもいいんじゃないか？」

あの骨と筋がバリバリのアサシンさんと、ハグ。いえ、光栄なのだけど、うん、何というか。

「ぬううう！ この呪腕のハサンともあろう者が、まさに半年に一度の失言！」

《ははは。割と頻繁だよね、半年に一度なら。凡ミス多いんじゃないかな、あのアサシン》

「……………半年と書いて一生と読む？」

《リカ君。ルビ文化旺盛の日本語でもそれは厳しい》

「フオウっ」

「ごめんなさい……………」

「いや、半年後など生きているかも分からぬゆえ一生と読んでも差し支え……………ゴホン！ まあよい。名を聞こう。そのマスター」

「——藤丸立香です」

——リカにとって「立香^{リッカ}」は忌み名。同じ名前の亡きお兄さん、そしてその名を正しく呼んでくれないまま逝ったお祖母さんのトラウマを蘇らせる。だからずっとあの子は自分を「リカ」で通してきた。そのフルネームを、わたしたちの身の潔白を証明するために、名乗った。

「偽りなく真名のようだな。そして、そのような名の者は円卓には存在しない。円卓ではないという言葉は信じよう。だが、村に入れるかどうかは」

「ドクロのおじちゃん、リカ姉ちゃんたちはボクたちを助けてくれたんだよ」

ルシユド君?! てつきり難民の皆さんと一緒に行ったとばかり……

「なんと、ルシユドではないか! 母親は? サリアは一緒にではないのか?」

「うん、はぐれちゃった。お母さんはこつちにはいないんだって」

——胸に鋭い痛みが走った。思い出す。ルシユド君を庇って殺されたお母さんの、赤い血と、穏やかだった今際の声。

「……皮肉なものだ。英霊となつてからは関わりのない話であつたというのに。よもや、自分が生きていた時代に召喚されるとは。これはきつい……未熟者にはきつ過ぎるわ」

「あの、あたしたちっ」

何かを言おうとしたリカの、肩に手を置いて、首を横に振って見せた。何も言つてはだめ。わたしたちなんかには言えることは一つもない。

「よかろう。恩には礼で返す。村に入ることは許そう。——アーラシユ殿、案内をお頼み申す」

呪腕のハサンさんはルシユド君を連れて去った。彼の背中、サーヴァントとして、英霊としては、ひどく頼りなく見えた。まるで人生に疲れた老人のようで。

「ま、嘆いてもしょうがない。——待たせたな、嬢ちゃん方に騎士の兄さん!」

アーチャーさんの元気な声は、悲壮感を吹き飛ばすには充分なものだった。

「俺はアーラシユ・カマンガ。長旅でヘトヘトだろう? 村に案内するぜ。貧しい暮らしなんで、まずは祝杯とはいかないがね」

——東の山の民の村に滞在して、早一週間。

村でのライフサイクルには慣れてきた。

アーラシユさんと山に入って食糧調達のための狩りや、盗賊のたぐ

いの撃退。

村へ帰れば、リカとルシユド君が「おかえりなさい」を言いに来てくれる。そして、一日で何があったかを、お互いに教え合う。

その挨拶と食事の支度の中に、わたしは隙を見てドクター・ロマンと通信をする。

リカがその日一日、傷の転嫁を行っていないかを知るために。……知った所で何ができるわけでもないのに、知らないでいるのも耐えがたい。

少なくともこの一週間は、リカは転嫁を使っていない。

動機は——わたしにとっては痛いことだが、「また先輩に怒られるのが怖いから」だと聞いた。

もどかしい。あの子に傷ついてほしくないだけなのに、わたしが一番あの子を傷つけてしまっている。

そのことをベデイヴィエール卿に打ち明けると、こう言われた。

「弱った心は細い梢のようにそよ風にも折れてしまいます。だから時には、隠してしまってもいいのですよ」

彼は優しいから、わたしはつい甘えてしまう。

——でも、甘えてばかりもいられなくなってきた。

聖都の円卓の騎士は敵に回してしまった。この村は困窮している。守りに入ってはいずれ詰む。

決めなくちゃ、わたし。

獅子王と会う。なぜあの聖抜のような非道をしているかを問い質す。そのために、円卓の騎士たちと戦う。

この霊基が覚えている。あの人たちがどれだけ強く猛く雄々しかったか。それを敵に回すなんて、想像するだけで全身が震えた。

「マシユ」

「ベデイヴィエール卿？」

びっくりした。震えているのに気づかれたかと。

「お休みになる前に、少しだけよろしいでしょうか？　個人的な話ですので、できれば二人きりで」

ちら、とりかを窺った。アーラシユさんとルシユド君に囲まれて談

笑している。フオウさんもいる。アーラシユさんなら、上手いことリカを止めてくれる、よね？

わたしは頷き返して、ベデイヴィエール卿と一緒に民家群を離れた。

草花一つ生えていない丘を登ってすぐ、ベデイヴィエール卿は本題を切り出した。

「単刀直入に尋ねます。今この時は、同じ円卓の騎士としての、貴女に。マシユ、かつて席を同じくした騎士たちと戦う覚悟が、貴女にはありますか？」

「それは……」

聖都の壁を見た時も、ガウエイン卿と戦った時も、わたしに融けたギヤラハツドは叫んでいた。「これは違う」「こんなものはアーサー王の所業ではない」って。

「私は何を犠牲にしても獅子王を……アーサー王を斃す。そのためにここまで生きてきたのです。ですが、貴女は？ 貴女とリカさんの目的が時代の修復であるなら、獅子王と対決する必要はないかもしれない。それでも——戦いますか？」

わたし個人は、デミ・サーヴァントになっても感性はただの女子で、人並みに死にたくないと感じる。

リカの「先輩」のわたしは、リカが大事で傷つけたくなくて、リカが自ら傷つきに行くような戦場になんて行きたくないと思っている。

戦えない。そう答えても、ベデイヴィエール卿はわたしを責めないだろう。そういう騎士だ、彼は。

——だけど。

「夜明けまで答えを待ってくださいますか？ わたしはサーヴァント。マスターのリカに相談もしないで大きな方針を決めるわけにはいきません」

「——、分かりました。では明朝。私がハサン殿のもとへ向かう前に貴女かりカさんが来ないのでしたら、その時は——袂を別ったものと

考えます」

「すみません……」

「謝ることなどありません。貴女の信念と私の誓いは別のものなのですから。——おやすみなさい、マシユ。どうか、悔いのない夜を」

わたしたちに宛がわれた家に戻ると、フオウさんが目を覚まして、特に鳴かずに足下に移動した。空気が、読んでくれてありがとう。

わたしは、すやすや眠るリカの隣に寝そべった。

「ねえ、リカ。さつきね、ベディヴィエル卿とこれからの話をしたの。リカは、わたしが聖都と戦いたって言ったら、賛成……するよね。リカはどんなに怖くても、わたしの気持ちをいつも一番に思いやってくれてたもんね」

無意識に手がリカの頭に。ほどいた髪を毛筋に沿って梳く。何度も。

……とても長い髪。デインドランもそうだった。色は違うけど、見事な長髪で、それを「僕」のために切り落として剣帯を編んでくれた

「先輩のいいように」

髪を撫でていた腕が大きく跳び上がった。この子、いつから起きて——はいないのかな。目の焦点が合っていない。夢だと思っている？

「先輩はあたしみたいなお荷物のマスターを、それでも捨てないで、ここまで引っ張ってきてくれました。だから、あたしは誰より先輩を信じてます。その先輩が戦うって決めたなら、あたしは間違った決意だなんて思わない。ただがむしやらに、先輩の後ろを付いて走っていきます。怖いのも痛いのも平気、です、から……」

リカが瞼を閉じた。

わたしはそつとりカの頭を自分の胸に抱き寄せた。

——わたしは幸せ者だ。こんな素敵な後輩、世界のどこを探したって居やしない。

わたしのことを、信じるに足る先輩でサーヴァントだと——

放任されているんじゃない。お互いを案じていないわけもない。不安だって恐怖だって、どちらの胸にもある。でも、わたしたちは信じ合っている。

「おやすみなさい。リカ、よい夢を」

眠ったリカのこめかみに小さくキスして、民家を出た。

山からじきにお日様が顔を出す。

わたしは薄暗がりの中を、ベディヴィエール卿に宛てがわれた民家に向けて走った。

確かな覚悟と、揺らがない意志を携えて。

キヤメロット8

「我々と共闘したい？ はっはっは。これは異なことを。我々は日々生き延びることで精一杯な難民ですぞ？ そんな我々が、獅子王の軍勢と戦うとでも思っているのですかな？」

言われてみればその通りだった——！！

「えっと、じゃあハサンさんは……山の民は聖都とは戦わない方針でこと、でしょうか？ 先輩、ベデイヴィエルさん、どうしましよ
う……？」

「……失礼。悪ふざけが過ぎたようだ。確かに我々は獅子王への反撃の機を狙っている」

よっし！ ならまだ交渉の余地ありだ！

「そのために戦力が欲しいのは事実。だが、貴殿たちを容易く迎え入れるわけにはいかぬ。叛逆者といえど、円卓が二人もいるのなら尚更よ」

「せ、先輩が円卓の騎士つて、気づいて？」

「フツ、当然よ。我らほどの歴戦のサーヴァントとなれば。そうであるろう？ アーラシユ殿」

「え、マジか!? マシユも円卓だったのかよ！」

「アーラシユどの——っっ!!」

……何かが色々と台無しになった。

「あ、いや、悪い。俺としちゃあこいつらが村に来た時から仲間になったんだとてつきり」

「ともかく!! どうあっても貴殿らを仲間とは認められぬ！ これは信仰上の問題である！ だが！ 頼らざるをえないほどの実力者であれば話は別なり！ 今それを証明していただく！ 行くぞ、アーラシユ殿！」

「いいぜ、その段取りに付き合った！」

そういうことなら戦闘準備だ。わたしたちの力を証明して、ハサンさんに堂々と仲間と認めていただくこうじゃないの。

「リカ、魔力回して！」

「はい先輩つ。魔術回路、全励起！ および瞬間強化、付与します！」
「ありがとつ。だりやあああああ!!!」

スキル・魔力防御、発動。盾の表面を魔力でコーティングして、真正面からハサンさんにボディアタックを仕掛けた。

ハサンさんは防御で構えたものの、わたしの勢いに負けて軽々と後退していく。

ベデイヴィエル卿は細剣を抜くなりアラシユさんに肉迫した。距離を詰めて戦うことで、弓使いの本分を発揮させる前にケリをつけようとしている。

「さらに概念礼装『イマジナリ・アラウンド』『スプリンター』を消費し、加速と弱体耐性を両サーヴアントに付与します！」

桜色と黄昏色の魔力がわたしとベデイヴィエル卿を吹き抜けた。体が軽い。まるで自身が駿馬か風になったかのように。今ならどんな早業だつてできそうだ。だから。

「ふ——っ」

「ぬ!?!」

わたしはあえて大きくしゃがんで、ハサンさんの斜め下に移動し、ハサンさんの脇腹を下から狙って。

「これで、倒します!!」

一瞬のみスキル・魔力防御に費やす魔力を増加。ハサンさんを盾で殴って宙へと吹っ飛ばしてみせた。

「ぬおおおおおお!!?!」

「あちゃー」

「よそ見厳禁ですよ、アラシユ殿！ 私だつて！」

ベデイヴィエル卿は細剣で乱れ突きをアラシユさんに見舞う。アラシユさんも巧みに躲してはいるものの、いくらか躲せず弓を防具代わりに始めた。

ついに、突きが眉間にくり出された瞬間、アラシユさんは大きく仰け反って避けることでバランスを崩してその場に尻餅を突いた。

そのアラシユさんに、ベデイヴィエル卿は息を切らして細剣の切っ先を突きつけた。

「ははは。こりや返す手が無い。降参だ」

地べたに落ちて動かなかったハサンさんが起き上がった。

「ふー……いやあ、これは参った。参ったな実に。これほどの戦力、見逃してはそれこそ初代様に首を落とされよう。マシユ殿、リカ殿、そしてベデイヴィエル卿。こちらからお願ひしたい。どうか我々と共に戦ってはもらえぬか。報酬は何も約束できぬが、『山の翁』の名に懸けて、必ずや貴殿らを獅子王のもとに送り届けよう」

「それこそが値千金の報酬です、ハサンさん。わたしたちこそ、改めてよろしく願ひします」

「感謝します、ハサン殿。私のような者を信用していただいて」

「いや、私こそ意固地でした。ベデイヴィエル卿は聖都正門にて我らの民のために立ち上がったくれた。獅子王に肉薄するという己の目的を捨ててまで。その徳を信じずして何を信じましょう」

「——ありがとう、ハサン・サツバーハ。義に篤い山の翁よ。私にはあまりにもつたいない言葉です」

ハサンさんは彼らの作戦本部にわたしたちを案内すると言ってくださった。聖都奪還には数が足りないものの、少数精鋭だという。ベデイヴィエル卿は彼我の戦力差を案じたが、わたしからすれば、あの強大な聖都に立ち向かおうという闘志がある人々というだけで心強い味方に思える。

と、そこで切羽詰まった感じにハサンさんと呼ぶ声があった。走ってくるのは、物見の村人だ。

「頭目！ 呪腕の頭目！ 大変だ！ 西の村から狼煙が上がっている！」

アーラシユさんが目を眇めて西の方角を見据えた。

「……ちっ、敵襲だぜありゃあ！ 西の村が敵に見つかっちゃったらしいー」

「敵の旗は見えぬか、アーラシユ殿！」

「赤い竜と、その首を断ち斬る赤い稲妻。この紋章に覚えはあるか、呪腕殿」

「おお、おおおお——まずい、皆殺しにされるぞ！ 王の首を狙うと公

言する旗はただ一つ！ 円卓の騎士、遊撃騎士モードレッド……！」
——モードレッド卿？ ロンドンであんなにも頼もしくわたしたちを引つ張ってくれた彼女が、敵？

酷い巡り会わせにめまいがして、一拍。

気づけばわたしの肩をベデイヴィエル卿が支えていた。

「大丈夫ですか？ マシユ」

「すい、ません。ちよつと、シヨックで……一度、味方として戦ったことが、あつたから……」

情けない体たらくを見せてしまった。

「あのあのつ、遊撃騎士って何ですか？」

「ああ。円卓の騎士の中でも、都詰めじゃなく外の砦に領地を与えられた連中だ」

「ええと、聖都の中におうちがない？」

「そんな感じだ。円卓としちゃあ聖都から追い出されるのは罰以外の何でもない。何らかの理由で獅子王に嫌われたんだろ。あちこちを走り回っては敵対勢力を潰す猟犬さ」

「モードレッドさんが、その遊撃騎士……？ え？ でもモードレッドさんって、アーサー王の実の子なのにな？」

——目から鱗。リカが今言ったのはものすごく「普通のこと」だ。
《しかし放つてもおけない。キミたちの仲間ということは、貴重な戦力じゃないのかい？》

「無論。しかし、ここから西の村までは、どう急ごうと二日はかかる」「じゃ、じゃあ逆に、助けに行くんじゃないかって、こつちに避難してもらうのはどうでしょう？」

「……それが今できる限界でしょうな」

だけどその案は、ベデイヴィエル卿が快刀乱麻に否定した。

「それでは行き詰まりです。この村には備蓄がない。これ以上、人を増やしては共倒れになるでしょう。西の村は守りきるしかないのでは？」

「あう……ち、近道とか、秘密の抜け穴的なのか——あ！ アーラシユさん、ここから西の村が視えるんですね！ 狙撃できません

か、狙撃！ あたしと契約して令呪でバックアップしたら届く、かも」
ふと、アーラシユさんが何かに気づいて、考え込むようなそぶりを
見せた。ほ、本当にリカの言ったやり方で狙撃できる、とか!?

「——間に合うかもしれん」
はい？

「二度だけ、かつ片道でいいのなら、西の村まで俺が届けてやれる！
それなりのリスクはあるし、即西の村とは行かないが、それでもいい
か？」

わたしはリカと顔を見合わせた。

「お願いします!!」

強襲するメンバーを決める。わたしとリカ（とフオウさん）は当然
として、送り届ける役のアーラシユさんと、道案内のハサンさん。
……ベデイヴィエール卿は。

「お気遣いは無用です。私は、獅子王の騎士ではありません」

——わたしたちはアーラシユさんの誘導に従って移動した。

アーラシユさんがわたしたちを連れて来たのは、山麓を見晴らす高
い丘だった。

潰れた家の屋根を粘土で補強したらしき土台がある。担架、にして
は補強する意味が分からない。それにこの取っ手と、踵まで入る穴の
用途も分からなかった。

アーラシユさんは取っ手を両手で掴んで、穴に足を入れて四つん這
いみたいな態勢になるように言ったので、言われた通りにした。

「しっかり掴んでろ。リカはマシユの隣だ。マシユ、リカを離すなよ。
時速300キロ以上は出るからな」

「え……あの、アーラシユ・カマンガー。何を、しているのですか？」
わたしには、土台に縄を張って固定、そのまま特大の矢に繋いでい
るように見えるのですが。

「よし、準備できた。角度はこんなところか。今日は追い風だ。西の村
の手前までは飛ばせるぞ」

「まさか、そんな……」

「ええ、そうですね。笑い話ではありませんし。そんな、まさか」
「阿呆、笑い話ですまされるか！ 命懸けの、酒盛りの時の定番ネタだぞ！ 真面目にやれ、舌を噛むぞ！」

信じられない！ このアーチャー、本気で特大の矢で土台ごとわたしたちを西の村まで発射する気にいる！

とにかくわたしはリカを確保。天地がひっくり返ろうとリカだけは落とさない。万が一にでもリカが落ちたらわたしも追いかけて、この体をクツションにしても護るんだから。

アーラシユ・カマンガー、ついに砲台から矢を放つ。

「ひっ——きやあああああああ！」

「きやあああああああ——！！」

わたしとリカのW悲鳴。

「だだだだだだだだだいじょうぶですか、マママママママシユ！」

ベデイヴィエールさん、気流でほっぺたぶるぶる状態なのにわたしたちを氣遣つてくださるなんて……！

「そろそろか。総員、着地の衝撃に備えろ！ 各々いい感じで受け身を取れ！ マシユ、リカは俺が面倒を見る！ お前さんは自分の面倒を見るだけでいい！」

ううっ、わたしにもっと敏捷スキルがあれば、自分でリカを抱えて華麗に着地するのに！

「ぶーっ——カーリーまーすー！ に、いち、ゼロ——！！」

「ひいやあああああああ！」

墜落した瞬間に土台は木っ端微塵になった。

反動で投げ出される体をどうにかひねって、背中から地面に落ちた。受け身、これで正しかったかしら……？

「ベデイヴィエール卿は——！！」

「無事ですとも！ まだ若干頬はぶるぶるしていますが！」

よ、よかった。本当によかった。

アーラシユさんの腕の中には、目を回したリカががちりと抱えられている。ちよつとばかり、むっ。

「おーし、下ろすぞリカ」

「は、はひいいい……ふや!?!」

未だ震えるリカがまつすぐ立てるはずもなく、リカはやっぱり足をもつれさせて傾いた。わたしは急いでリカに駆け寄って、傾いたリカをキヤツチ。

「せんぱあい」

「よしよし。よく頑張ったね」

リカの頭をなでなで。

「ところで、何でこれが一度きりかと言うとだな。大抵の奴は一度これをやると——」

「二度と御免です!」

「——と、嫌がるからなんだ」

上手いこと言ったとか言わせませんからね、カマンガ―殿? (怒)

キヤメロット9

ともあれ西の村の近くに辿り着いたのだ。一刻だって無駄にできない。

わたしたちはハサンさんの案内に従って脇目も振らずに村を目指して走った。

《強力な魔力反応を前方に確認！ 間違いない、円卓の騎士だ！》

「真正面からぶつかれば勝機は薄い！ このまま奇襲をかけましょう！ アーラシユ殿とハサン殿は我々が敵の虚を突いた隙に村へ——！」

「承知！ この場を頼みます……！」

接敵まであと5秒——4、3、2、1……！

「リカ、お願いっ！」

「はい先輩！ 魔力回路サーキット、全励起イクニッション!! および瞬間強化、付与しますー！」
「やつ——あああああああッツ!!」

わたしは斜面を駆け降りる勢いをそのままに地面を蹴って、落下の推力を乗せて、魔力防御のスキルでフルコーティングした盾ごと、その騎士に全力のボディアタックを仕掛けた。

しかし、というか、やはり、真つ向から防がれたが。

「よく来たなクスども、歓迎するぜ！ 手前から来るとは見所あるじゃねえか！」

王剣が盾を受け止めて、鏢迫り合いに持ち込まれた。

覚悟、していたつもりだったけど……ロンドンで何度もわたしたちを助けて戦ってくれたモードレッド卿を、思い出さずにはいられない。

でも、違和感がある。彼女はこんなにも禍々しいモノを背負っていたのだろうか？

「テメエは……父上の招集に応えないと思っただら何してんだよ、え？

盾公。まさか叛逆者つてのはテメエだったのか？ ……。……そ

うか。テメエなら、まあ、アリだな。ちつ。また遅刻しやがって。遅すぎたっつーの。もう盾公から遅刻魔に呼び変えるぞ」

「わたしの名は盾公でも遅刻魔でもなく、マシユ・キリエライトです！」

「言うじゃねえか」

モードレッド卿は可憐な顔に似合わない獰猛さで、盾ごとわたしを王剣の一振りでも振り払った。

「後ろでびくびくしてんのが例のマスターだな？ アグラヴェインの頼みだ。念入りに殺してやるよ」

《マシユ。彼女はロンドンで会った赤雷の騎士じゃない。情けをかけていたらリカ君が殺される。全力で、ひとりの敵として戦うんだ》

リカが殺される。その言葉はわたしの中の何か大事なスイッチを、かちん、と他愛なく切り替えた。

スキル・魔力防御、再発動。リカがくれた魔力をありつけたけ、盾の反発力と硬さを高めるために回す。

「戦いになればいいけどなあ？ オレに与えられたギフトは『暴走』だ。オレの魂が燃え尽きるまで聖剣をぶっ放し続ける。たかだかマスター一人とサーヴァント二騎じゃあ相手にもならね——、——待て。何でテメエが居る？ 居るはずのねえ三流騎士が反逆者に混じってるなんざ最悪の冗談だろうが!? ベディヴェイエル!!」

モードレッド卿が、わたしの隣にいたベディヴェイエル卿に斬りかかった。速い。瞬きも間に合わないスピードで懐に入られた上に、予備動作が全く視えなかった。

けれど、ベディヴェイエル卿は腰の細剣を抜くことさえなく、銀に光る右腕だけでクラレントの一撃を防いでみせた。神造宝具の模造品とはいえ、何てデタラメな強度と耐久性。

飛びずさって王剣を構え直したモードレッド卿。わたしは、はっとして急いで盾を構えたのだが、ベディヴェイエル卿がわたしを小さく制して自ら前に出た。

「貴方に恨み言があるのは私も同じです。叛逆の騎士、アーサー王の理想を踏み躪った不忠者。その汚れた聖剣こそ、見るに堪えぬ最悪の冗談だ」

「——思い上がるなよ。テメエはただ余った席に座っただけの、軟弱

騎士だ。アグラヴェインが早死にしなければ、テメエが王のお付きになるなんてこともなかった。テメエは、ただ！アーサー王の覚えがよかつただけの！オレ以下の騎士じゃねえか！」

「ええ、その通りです。私は他の騎士たちに遠く及ばない。精霊や太陽の加護もなく、天賦の才も持ち合わせぬ、一介の騎士に過ぎなかつた。そんな私を、王は頼ってくださいました。その恩に報いるために、私はこのヌアザの腕を賜ったのです」

「ははあ？大口叩いた自信はその義手か。チキン野郎、そんなもんどこで手に入れやがった？オレたちの記憶にねえぞ、んなシロモン」

——そう、いえば。

あ、れ？ どうしてわたし、疑問に思わなかったの？ ベデイヴィエール卿は隻腕の騎士だった。ギアラハツドの霊基が覚えている彼の姿は、砂嵐がかかったように不鮮明なデジャヴで、特に右手の画像がどうしても再生できなくて——

「記憶にない？ それはどうかな。貴方の鳥頭では思い出せないだけかも、ですよ？」

不機嫌に着火した形相のモードレッド卿にも、ベデイヴィエール卿は一步たりとて怯まない。

「リカさん。どうか約束してください。これから私が負う傷の一切を治さないで。この痛みが、私の『証』だから」

「痛みが、証——」

「——我が魂を燃やして走れ、銀の光」

スペルによつて輝きを増したベデイヴィエール卿の右腕が、ついに細剣に伸びた。

——ベデイヴィエール卿だけに任せるなんてできない。信頼していないのではない。ただ、わたしが、助けてくれたこの人を今度は自分が助けたいという思いで、盾を構えた。お節介な先輩騎士の顔をした敵への迷いを捨てきれないままでも、それ以上にわたし自身の強い気持ちがあるから。

開戦に合図はなく。

勢い任せに突っ込んできたモードレッド卿を、わたしは盾で阻んだ。

二度目の王剣と盾の鏝迫り合いに持ち込んだ所で、二度目の、反発力を使った弾き飛ばし。ただし威力は弱めて。モードレッド卿を吹き飛ばすのではなく、よろめかせる程度に留める。

姿勢が崩れたモードレッド卿にベデイヴィエル卿が迫って細剣をくり出した。——彼の生前から変わらないスタイル。鎧を重厚に纏う騎士に対して、甲冑の隙間から細い刃を滑り込ませてダメージを与える。精密な技巧と観察眼を持つベデイヴィエル卿でなければ不可能な戦い方である。

ここでもやはりそれは活きた。細剣はモードレッド卿の甲冑の胸部の隙間に入り込み、確実に急所を捉えた。

「剣を握れ、銀色の腕!!」

「ガッ!? かは……!!」

細剣を通してヌアザの銀腕が生じた灼熱がモードレッド卿を穿ち、焼いた。

モードレッド卿はベデイヴィエル卿を蹴り飛ばして離脱し、前屈みの姿勢でダメージを食らった胸元を押さえた。

「ちくしょう……!! 何やってんだオレは! ギフトまで受けて押し負けてんじゃねえ!」

モードレッド卿は憤怒の形相で王剣を正眼に構えた。王剣に魔力が集束していく。まずい、宝具を開放するつもりだ!

「煮え滾れ、星の怒り。我が麗しき父への——!!」

わたしは急いで前に出て、盾を仮想展開する準備に入った。けれど、それより早く、流星のごとく矢が飛来した。

モードレッド卿は矢を王剣で叩き落とさざるをえず、宝具解放のタイミングを逃した。

「どこのどいつだ!? しつこく腕の腱を狙いやがって、殺されてえのか!」

「そりゃあ戦いだ。どっちかは死ぬだろ。特に、自分の限界を無視して前が出る奴とかな」

アーラシユさん！ ハサンさんも！

「いい働きだったぜ。お前さんたちのおかげで、その騎士さま以外の兵士は残らず片付けた。村は無事だ。ただ……なんだかなあ。そのお嬢……いや、兄さん。いま自爆しようとしていたよな。暴走のギフトを全開放して聖剣ごとこの山を吹き飛ばす算段なんだろうさ」

「……何だそれ。お前、分かるのか、そういうの」

「たまたまだよ。英霊といえど魔力を暴走させても、宝具の威力が増すくらい。だがお前さんのギフトは別だ。そりやあただのメルトダウンド。分かってんのか？ そのギフトを与えた奴はお前をそういうもんとして扱ったんだぞ？」

リカが顔を青ざめさせた。

「な、何ですか、それっ……非道い——」

「っ、ひでえもんかよ！ オレは猟犬だ。獲物を殺して殺して、最後には野垂れ死ねば満足だからな！ テメエらはその道連れだ。オレと一緒に死にやが……っ」

アーラシユさんは最後まで言わせなかった。

モードレッド卿が言葉を終えるより速く矢を射た。モードレッド卿は悔しさを呈して王剣で矢を弾き落とした。

「敵であつてもそういうことなら俺は怒る！ 剣の勝負に負けたから自爆してチャラだと？ 勇士の誇りがまるでない！ お前さんそれでも円卓の騎士か？ 勇ましいのは最初だけか？」

モードレッド卿はアーラシユさんが未知の言語をしゃべっているかのように、あたふたしている。

驚くことに、アーラシユさんはモードレッド卿の性根を本心から親身になって叱っているのだ。敵対者の態度ではないし、何より彼女は自分を思いやるゆえに怒る相手と会うこと自体初めてだろうからな。なんて、現実逃避しないと、わたしも展開に付いて行けない。

「いいか？ 命を使うべきであれば、自らの誇りと、護るべきもののために使え！ 自暴自棄のわがままに俺たちを巻き込むな！ 子供の世話は好きだが、ガキの面倒は願ひ下げだ！」

「ガキっ——オレのどきがガキだつてんだ！」

「……すまん。ちよつとタイム。——おいマシユ、あいつ何歳なんだ？ 見た目が若いんで、てつきりお前さんより年下かと」
「年上だよ！ オレは外見が16歳で止まつてるだけだ！」
「そうか。なら立派な大人だな。であればなおさらだ。悔しいのなら再戦に全てを賭けて出直して来い。今回は引き分けにしておいてやる」

モードレッド卿は乱暴な手つきで金のポニーテールを掻き毟った。「いいだろう、口車に乗ってやる。今回はオレの負けだ。部隊も全滅してるしな。この村も見逃してやる。そのチキン野郎が獅子王に謁見するってんなら、どうあってもオレたちは聖都でご対面だ。勝負はそれまで預けた」

モードレッド卿は何の気負いもてらいもなく王剣を鞘に納め、背中を向けて山を下りていった。

どつと肩の力が抜けた。

味方に回れば心強いが、敵であるなら最凶。それがあの騎士だ。ハサンさんも言っている。負けを引き分けにしただけでも僥倖、と。

今のはロンドンでずっとわたしたちのサポートをしてくれたモードレッド卿とは、違う。目に惑わされなくて、現実を受け止めないと。

——遊撃騎士モードレッド。わたしたちの敵の一人。

声にはせず唱えて、胸に刻んだ。

「ベディヴィエールさん!？」

リカの悲鳴じみた呼び声で、わたしもふり返った。

ベディヴィエール卿は右の義手を抱えて頰れていた。

「だい、じよ、ぶ……、……」

「大丈夫くないです！ 待って、今」

リカが義手に伸ばした手を、ベディヴィエール卿は左手で制した。

「治さない約束、でしょう？ ——マシユ……すみませんが、少し、迷惑を、かけ……」

「ベディヴィエール卿!？」

キヤメロツト10

山道での戦闘で倒れたベデイヴィエール卿を、アーラシユさんが担いで、わたしたちは西の村に降りた。そして、ハサンさんが村人に事情説明して、空き家を一軒お借りした。ベデイヴィエール卿にはそこで休んでもらっている。

わたしたちが離れる前、気絶したベデイヴィエール卿は呻くようにくり返していた。

「王よ、お許しを」
心が、痛い。

ギアラハッドと融合しただけのわたしでさえ葛藤に苦しんでいるのに、ベデイヴィエール卿は眠りの中でさえ、もつと苦しんでいる。「こつちに治療専門のサーヴァントがいれば……もがつ!!」

片手でアーラシユさんの左右の顎関節を掴んで塞ぐ。アーラシユさんはもがもが言っていますがノーシンキングで。

この子の、前で、そういう話は、許しません!

「ぶはっ。あー、まあ、その話はまたあとで、な。見ろよ、マシユ、リカ。ここはまぎれもなく、お前たちが護った場所だ。特にリカ」

「は、はい!?!」

「あの時、お前さんが試行錯誤するのをやめなかったから、今この村に灯りが燈っている。令呪でバックアップするから狙撃しろ、はさすがに無茶だったけどな」

「で、ですよね……です、よね。すみませんでした」

「ぼっか。無茶でも言っつてよかったんだよ。今回はそれがひらめきの源泉になったんだから」

リカは、ひどく衝撃を受けたように目を大きく睜って、自分の口元に手をやった。

……まあでも、リカを悪く言うつもりはないが、ひらめきの結果がああ「アーラシユ空を飛ぶ事件」だ（わたしの中では事件扱いです）。カルデアの歴史に長く語り継ごう。アーラシユさんが矢に縄を結んだら注意しろ、つてね。

「おお、こちらでしたか。皆様」

村の様子を見回っていたハサンさんが戻ってきた。

「よい機会ゆえ、この村の頭目と引き合わせましょう。我らはすでに協力関係。こちらの新しい戦力として、皆様を紹介致します。ははは、今なら話も円滑に進むでしょう。あやつも皆様には感謝していましたからな。——こちらだ、百貌の。この者たちが先ほど話した、我らの新たな同胞だ」

……あれ？ これによく似た流れを、何日か前に実体験したような。何だっけ？

何も知らなかった時点では万歳、あとから正体を知ってがっかり、あまつさえ敵に回る——そう、確か。

「この度の助力、感謝の言葉しかありません。私は西の村を預かる山の翁、百貌のハサ——んんんん!!」

——東の村に入る前のハサンさんがそうじゃなかった？

髑髏の白面を着けたムキムキなお姉さんを見て、はた、と思い出した。

「貴様らはあの時の——!!!」

——これにて百貌のハサンさんの態度は180度急転した。

「断る。こやつらは信頼できぬ。共闘なぞ以ての外だ」

髑髏面まで外して、凄まじい眼光で睨まれた。ど、どうしろと？

「貴様もどうかしているぞ呪腕！ よりにもよって円卓の騎士どもを信頼するなぞー！」

「ははは。まるで昔の自分を見ているようですなあ。これは説得は難し」

呪腕のハサンさんはお茶を一服。こっちが彼の素なんだろうなあ。

「うむ。それはそれとして、百貌の。例の件はどうなっている？」

「……進展はない。このままでは死を待つだけであろう」

「それは困った。実に困った。どこかに我々以上に強く、単独行動に向いており、力になってくれる、そんな御仁がいればいいのだが」

「馬鹿も休み休み言え。そんな都合のいい助っ人が——」

おりますよ。百貌のハサンさん、あなたの目の前にこの通り。

「ぐ……ぐぐぐ……！」

「どういう事情かお尋ねしても？」

「はい。率直に言いますと、山の翁の一人が敵に捕らわれているのです」

呪腕さんの話によると――

――ハサンさんたちは聖都に対して一斉蜂起する計画を立てていた。捕らわれた山の翁もその参戦者の一人。彼女（女性だという）が計画を漏らせば反撃の機会は消える。

その……嫌な話だけど、これが別のハサンたちであれば自決して死人に口無しを選ぶらしいが、彼女は自決ができない事情があるという。

総合すると、彼女を救い出さない限り、機密漏洩のリスクが回避できない。

今までに救出を試みたが、帰った者は誰一人いない。

その収監場所は、円卓の砦。

「お話しいただいてありがとうございます。そこまで聞いてしまつては放っておけません。喜んで助太刀します」

「おお、それは頼もしい。そう言ってくださると、この呪腕、確信していましたぞ。――どうだ、百貌の？ 我らの窮地を二度も救えば文句はなからう」

「……助ける、と言って逃げる輩も多い。となれば――」

「あの!!」

リカが大声を上げた。声は震えていた。

「だったら、あたしが村に残つて人質になります。そしたら先輩たちはここに戻つて来ざるをえないし、急な方針変更で逃亡つてこともない……と、思うんですけど。どうでしょう？」

どうでしょう、って。

確かに、ここにリカが残るなら、わたしは死んでもその山の翁を救い出して村に帰ってくるけども。そうじゃなくて。

「大丈夫です。ちよつと思ふところがあつて、治癒魔術は少し控えようかなつて思つてたんで」

……え？

リカは、笑顔だ。わたしに怒られるのが怖いからって消極的な理由じゃなくて、この子自身の意思で転嫁魔術を控えると言っている。

「だから、先輩たちは行ってください。帰ってきたら、あたし、話しますから。先輩に隠してたこと、思ったこと、全部」

「——約束ね？」

「約束します」

こうまでハッキリキツパリ言われては、却下したくてもできない。

「……分かった。行ってくる」

「Interlude」

リカは、何度もこつちをふり返るマシユに、何度も笑顔で手を振った。マシユと呪腕の旦那と百貌の姐さんの姿が見えなくなるまで、ずっと。

俺もリカやベデイヴィエールとは違う意味で、西の村に居残りだ。モードレッドが戻って来ないとも限らないし、百貌の姐さんの不在中、代わりに村人の食い扶持を狩ってくる奴が要るからな。

「アーラシユさん」

俺を呼んだリカの声は、マシユが発つ前から一変していた。具体的には、声のトーンが平坦になった。語り聞かせるためではなく、相手を意識しない独り言のそれだ。

「昼間にアーラシユさん、言いましたよね。命は護るべきものと己の誇りのために使え、って」

「ああ、言ったな」

「あたしの『命の使い方』、間違ってたんでしょか？」

——ああ、気づいていたさ。リカが治癒と称する魔術は癒しの秘跡なんかじゃない。自分に傷を移し替える、身代わりの呪いに過ぎない。リカが痛みを表に出さないから、傍目には治したように見えるだけの手品だ。

そして、俺がそれに気づいていることも、リカにはお見通しなんだ

ろう。だからわざわざ居残りを志願した。マシユには聞かれたくない話を、俺とするために。

「死んだおばあちゃんのお癖だったんです。『傷ついた人に優しくしてあげるのは当たり前のこと』って。だからあたしにできる範囲で『優しく』してきたつもりです。それであたしの体が傷だらけになっただって、気味悪がったりする人はいても、困る人なんていないし、実際誰も困ったことないし、別にいいかなって。痛いのだって、一瞬なんだから、あたし一人が我慢すれば済むし。ずうっとそういうふうに思いながら、力を使ってきました。今でもこの考え方は破綻してません。でも、アーラシユさんがあ言ってから、初めて、自分の転嫁魔術の使い方に疑問を持ちました。この魔術を使うのをやめる気になったとかじゃなくて、もつと、使う相手を選ぶべきだったのかも知れない——」

「じゃあさ、リカ。お前さん、マシユと俺が同時に大怪我したら、真っ先にどっちの傷を引き受ける?」

「それは……先輩、です」

「そら即答だ。お前の力は、使うべき人っていうより、使うべき『時』を考えたほうがいいと思うぜ?」

「時——」

夜風が吹いた。少女の長い亜麻色の髪が吹き上げられ、表情を隠した。

「……ベディヴィエールさんは、この火傷だけは治さないでって言ったけど、やせ我慢してるごときくらいあたしにだって分かります。それに、彼はきつと戦いたい。円卓の仲間の過ちにきちんと向き合いたいと思ってる。そのために邪魔な痛みなら、あたしが引き受けてあげればいい。本当に、心から、思うのに」

リカは両手で顔を覆った。

「何で、あたし、動けないの——」

千里眼を利かす必要はない。ここまで聞けば、リカが言わんとする所くらい察することができる。

“あたしが行かなきゃいけない”

“ベディヴィエールさんの傷を引き受けに行かなきゃいけない”

“あたしが傷だらけになっても、誰も困らない。だからあたしがやらなきゃいけない”

声は言霊となつて、口にした者を縛る。これ以上をリカに言わせ
ちやならない。

せつかくこいつはスタートラインに立ったんだ。ここでベディ
ヴィエールの傷を治しに行かせたんじゃ水の泡だ。

「リカ、ちよいとすまん」

「はい？」

俺は腕を、向き合うリカの首の後ろに回して、うなじに手刀を叩き
入れた。

気を失つて傾いてきた少女の体を、受け止めた。どいつもこいつ
も、と溜息をつきながら。

「Interlude out…」

キヤメロット11

——長い一夜だった。

山の民の西の村に帰ってきて、わたしは疲労と共に回想した。玄奘三蔵さんと俵藤太さんという二騎のサーヴァントが、なりゆきで仲間入りしたこと。

地下牢での、助け出した静謐のハサンさんとの、その……キスのアクシデント。

そして——アグラヴェイン卿との遭遇。

鉄のアグラヴェイン。誰からも嫌われていた、されど、アーサー王の統治には欠かせなかつた文官にして円卓の騎士。

彼がアーサー王のそばにすることに、ギャラハッドは安心して、同時に疑問にも感じている。アグラヴェイン卿がいるのに、なぜ王は獅子王なんて暴君になってしまったのか——

「おう、お疲れさん。よくやったな！ 吉報届いてるぜ、マシユ」

思案が吹き飛んだ。

「アーラシユさん……はい、ありがとうございます。あの」

リカはどうしてるか。それをアーラシユさんに尋ねるより早く——

「フオフオウ！」

「先輩っ。おかえりなさい」

「リカ！」

迎えに出てきたリカに合わせて前進、わたしと同じくらいの大きさの体をぎゅーっと抱き締めた。ああ、温かい。生き返る。

「先輩と約束しましたから。あたし、誰にも治癒魔術、使ってないですよ」

うん、ならよかつた。酷薄だとしても、そう思う気持ちは止められない。どんな形であれリカが傷ついていないのなら、この子の先輩であるわたしにはそれが最上なのだ。

「はは、リカは素直だな。そら、ベデイヴェイエル卿も、リカを見習って、ちゃんと出迎えてやれよ」

近くの民家の陰から、人目、というか、わたしたちの視線を憚るように、ベデイヴィエル卿は出て来た。

「分かっているのですが……私は大事な時に倒れていた、情けない騎士ですので……」

そうだったそうだった、とわたしの中のギヤラハッドが大いに頷いている。ベデイヴィエル卿はこういう奥ゆかしい騎士だった、と。

「サー・ベデイヴィエル！ マシユ・キリエライト、ただ今帰還しました！」

「お、お帰りなさいませ！ サー・キリエライト！ ……あ」

アラシユさんが爆笑した。——いいもん。今回のこれは進んで言ったことだから。

「……本当に、よくご無事で。アグラヴェイン卿と鉢合わせた、と聞いた時は肝を冷やしましたが。あの『鉄のアグラヴェイン』を撤退させるとは、さすがのご活躍。私も同席したかった」

ベデイヴィエル卿、笑ってる……よかった。円卓の騎士と戦ったと言ったら彼にはよけいに心労になるかと心配したけど。

「それで、そっちの二人が増員かい？ これまた珍しい出で立ちだが」「ええ、あたしは玄奘三蔵。御仏の加護を届けに来たわ」

「拙者は俵藤太。見ての通り、巻き込まれた通行人だ」
ふいにリカがわたしに隠れるような位置で腕にしがみついた。怖

がっている。誰を？

リカの視線の先にいるのは、玄奘三蔵法師。

「ごめん、なさい。あの人が悪い人だからじゃ、ないです。ただあたしが、仏教系の人、だめなんです。日本にいた頃、あたしの力を知って誘拐しようとしたカルト教団が仏式で……それ以来、だめ、なんです」

奇跡は時に消費娯楽に貶められる。一見しただけではリカの魔術は癒しの御手だ。

きっとリカが苦しんだのは、亡くなったお兄さんの名前だけじゃない。力ある者ゆえの多くの悪意を、この子は長いことずっと一人で抱え込んできたんだ。

絡めた腕で、リカと手を繋いだ。

藤太さんが担いでいた米俵を地面に下ろした。

「なるほど。これが西の村か。ここに来るまでで村の様子はよく聞いていた。であれば——長話も挨拶も後回しだ。まずはコイツをお見舞いしてやらねばなア！」

藤太さんが口上を述べ始めた。韻を踏んでいる。宝具解放の兆し？ でも、こんな、敵もいないし、ただ餓えて傷ついて疲れた人しかいない西の村に、何の宝具を？

「さあ、行くぞう！ 对宴宝具——美味しいお米が、ドーン、ドーン！ ぎっぱーん、と。」

白いお米がビックウエーブ。百貌さんが思わずお面を外してしまふほどの白米が、こんなに！

これが宝具!? ドクターが興味深いよ、って言っていた藤太さんの宝具って、これのことだったの!?

「せんぱーい」

「リカ!? きゃーっ、お米で溺れてるー!?!」

「フォーウー！」

とりあえずリカを、白米の山から、フォーウさんと力を合わせて引っこ抜いた。よ、よかった、無事で……

「これ込みで御仏の加護よ? だからトータとあたしは出会ったんだからね」

——西の村はもう上を下にの大はしやぎ。

《何だい、この盛り上がり?! 一体何が起きているんだ、マシユ?!》
「宴会が、始まってしまったのです——」

三蔵さんが災害時の配給所にも勝る早業でおむすびを次々と握っていては、集まった村の子供たちに渡す。

保護者として手綱を握ってくれそうなアラシユさんと藤太さんは酒盛り真っ最中。あ、百貌さんも出来上がっている。

「はい次、詰め物いくわ詰め物! あたしはお肉ダメだけど子供たちにはご馳走だものね。モツを抜いて、お米を詰める。あとは焼き上が

るまでお楽しみ。その間に炒飯作るわよー！」

これはもう止められない……あ、子供の一人がおにぎりを持って来てくれた。あはは、ありがとうございます。すみません。隅っこまで届けにきてくれて。

おにぎりを頬張った。うん、文句なしにおいしい。

「マシユ殿。こちらにおられましたか」

「呪腕さん？」

「このような状況で油断が過ぎる、と叱りたい所ですが、この半年、毎日が節制の連続でしたからなあ。今ぐらいは村の者たちにも良い思いをさせてやりたい」

「はい。そうですね。今夜ぐらいなら」

これが一夜のユメで、明日からはまた節制の生活を送らねばならないからこそ。

「ところで呪腕さん。うちのリカを見ませんでしたか？」

「リカ殿でしたら静謐と一緒に何やらさまっているようですが。――

おお、噂をすれば」

静謐のハサンさんが、藤太さんをお願いして、素焼きの壺の満杯まで白米を注いでいる。静謐さんは一礼し、その米壺を抱えてどこかへ向かっているようだ。

わたしは呪腕さんに挨拶して、静謐さんを追いかけた。

「あ――マシユさま」

「呼び捨てで構いませんよ、静謐さん。ところでその瓶いっぱいのお米は？」

「これは、リカさまに頼まれたものです。自分は手が離せないから、代わりに藤太殿に分けてもらいに行つてほしい、と」

何でまた。おにぎりや炒飯は今も配られている。それに、あえて生米を貰つてどうするの？

わたしの疑問が顔に出たからか、静謐さんはわたしに付いて来るように言った。百聞は一見に如かずというやつですね。

そうして歩いて行った先で、わたしは――ちよつとしたショックを受けた。

リカが片手に器を持って、スプーンで器の中身を掬っては息を吹きかけて、差し出している。相手は、片腕を三角巾で吊った男性——怪我人。

「食べられなかったら無理しないで言うてくださいね。はい、あーん」
ぎこちない笑顔とは裏腹の慣れた手つきで、食事の介護をしているリカ。

「——ああして、傷病人や赤ん坊を抱えた母親の間を回っては、重湯を振る舞っているのです。普通の食事が喉を通らない人もいるだろうから、と仰つて。手が使えない村人には、あのよう直接」

何も言えない。わたしは俯いて、両の拳をきつく握り固めた。
やがて静謐さんが去った時も、わたしはその場から動けなかった。

リカが傷病人の看護を一通りすませた頃合いを見計らって、わたしはリカに声をかけた。

前置きはしない。あの光景を見せられたあとだと、そんな気にもなれなかった。

「あ、先輩……」

「約束したよね。帰ってきたら話すって」

「はい」

——リカからの話は、やっぱり、転嫁魔術についての種明かしだった。隠していたことへの謝罪。それに、リカ自身が、どういう相手と局面であれば転嫁を使うのに正しいか、迷い始めていること。

「藤太さんの宝具を見て、もつと分からなくなりました。先輩みたいに攻撃や暴力から護ってくれるんじゃない、剣や槍を持って敵を斃してくれるんじゃない。戦う宝具じゃないのに、藤太さんの宝具で、村の人たちみんな、幸せそうでした」

リカは星空に向けて手をかざした。その袖の中が古傷だらけだと、実際に見た人間は、もうわたしを残すのみだろう。

「何ですか？ あたしの何が間違ってたんですか？」

リカは理不尽を言い募るでなく責めるでもなく、純粹な疑問を音と

して羅列した。

……リカの行いはいつだって間違っていないかった。いや、訂正しよう。この子の行いの根底にある、他者への優しさ。それは賛美されるべき徳だ。リカの優しさが間違いであるはずない。そこだけは自信を持っていい、変えなくていい一点だ。

ただ、この子の魔術の性質が問題なのだ。

転嫁魔術。他人の傷を自分の体に移し替えるなんて、物騒で厄介な癒し。他人が楽になる分、リカの体は傷ついていく。それを知ってしまつては、手放して褒められない。認められない。

どうしよう。どう答えていいか分からな……

“隠したことが罪だった”

はっと、出発前のドクター・ロマンの言葉を思い出した。

「——リカが、どうしても転嫁魔術を使い続けたいって言うなら、わたしに止める資格はないわ。だから、ね。一つだけお願い。リカ。これから誰かの傷を引き受けて痛いつて感じたら、わたしには隠さないで。痛くないフリなんてしないで」

答えはない。静寂が耳に痛い。

ふいに、一筋。

リカの琥珀色の両目から、ぼろり、と涙が溢れた。

「っ——リカー！」

わたしはぶつかるみたいに駆け寄ってリカの体を抱き締めた。冷えきっていた。

リカは何も言わないで、わたしに縋ってただ嗚咽した。

何でリカが泣いたかは分からない。安心か、落胆か。

どんな意味の涙でも、これはこの子がわたしだけに曝け出してくれた心の痛みだから、受け止められればいいと、それだけ思った。

キヤメロット12

とても大きな変化があった一夜が明けて——朝。西の村。

藤太さんのお米宴会のおかげで、わたしの体のバイタルは上がって英気は万全。

そんなわたしたちを、呪腕さんは呼び出して百貌のハサンさんと改めて対面させた。百貌さんから大事な話があるとのことだ。

百貌さんは、わたしとリカとベデイヴェイエル卿が獅子王と敵対している者であることを信じ、静謐のハサンさんの救出へのお礼を前置きして、何かを——言わなかったんですねえ、これが。

挙句、百貌さんは正々堂々戦って勝って、彼女自身から協力の言葉を引き出せろとの無茶な要求を一方的に突きつけてきた。静謐さんを巻き込んで。静謐さんは静謐さんで、ズレた方向に受け止めて百貌さんの味方について挑んできた。

協力を正式に承諾してもらうためには致し方なし、と腹を括ったわたしは、ベデイヴェイエル卿と力を合わせて、全力でお二方を撃退させていただきました。

「ええい、子供か貴様は！ 静謐の素直さを見習わんか！」

「山の翁の誇りを忘れていないだけだ！ そう簡単に異教徒を受け入れられるか！」

そこでリカがわたしに耳打ちした。「何教に改宗すれば許してくれるでしょうか？」って……こちら。デリケートな問題をその場の空気ですぐ決めちゃいけません。

「だが、それもここまでだな。確かに大人げなかった。童たちの手前もある。——マシユ。リカ。我らは近々、軍勢をもって聖都を攻略する。聖地を奪われ、家族を奪われた者たちによる連合軍だ。その時、お前たちの助力が欲しい。どうか我々に、お前たちの力を貸してほしい」

わたしたちの目的は獅子王との対面。山の民の目的は獅子王との対決。その目的に至る手段は全面戦争しかないという点で一致している。むしろこちらが力をお借りしたい。

わたしはリカをふり返った。リカは少し強張った面持ちで、それでも一つ首肯した。

百貌さんが現在の味方の戦力を丁寧に解説した。

——現在、聖都への攻撃に賛成している山の民の村は半分。前線に出られる戦士は7000ほど。数だけなら聖都の兵士と並びうるが、粛清騎士たちは強く、一人に対してこちらが三人がかりでようやく勝ち目があるという。円卓の騎士が出てきてしまえば一貫の終わり。「……それでも、これ以上は待てぬのだ。我らは疲弊する一方なのでから」

わたしは昨夜の光景を思い出した。リカが世話して回っていた、暗がりになっていた傷病人たち。例えばここにナイチンゲールさんがいたら彼らに的確な治療を施せただろうけれど、そこまでだ。英気を養おうにも水も食糧もかつかつで、体を休めるための寝床さえ満足にないし、看病する人手は軒並み兵力。疲弊していく一方。なるほど、その通りだ。

「しかしサーヴァントの数ならこちらが上だろう。十字軍との戦いを生き延びた円卓の騎士は五騎。対してこちらは八人だ。いや、戦場になると三蔵は役に立たぬゆえ七人か。それでも一人一騎で数は合う。であれば、もう我々だけで聖都に攻め入ってしまえばいいのでは？」
「それは違う、トータ殿。これは聖地を取り戻す戦いだ。俺たちが戦って円卓を倒せばいい、という話じゃない」

「無論、兵力については最後まで呼びかけを続ける。円卓どもも各個撃破すればよい。問題はガウエインだ。奴が正門にいる限り我らに勝ち目はない」

ガウエイン卿は日中であれば聖者の数字によって力を三倍に増す。ならば太陽の加護のない夜に戦いを挑むのがベターだ。しかし、獅子王のギフトによって彼は常にその場を「日中の時間帯」にしてしまえるようになった。

三蔵さんが、いつそ一度はガウエイン卿に勝ったランスロット卿を味方につければ、と明るく提案したが、藤太さんに拳骨で却下された。《悪いが、この状況では聖都攻めは反対だ。加えて、敵というのなら他

にもいるんだ。エジプト領のオジマンディアス。彼が何を企んでいるのかまるで分からない。不安材料が多すぎる。カルデアの司令官として、マスター・リカおよびマシユの参戦は認められない」

そこで、ずっと黙っていた静謐さんが、待ったをかけた。

「マシユさまとリカさまを繋ぎ止めるには、もう一つ、大きな戦力があればいいのですね？ それなら我らにも秘中の秘があります。私が捕らわれ尋問されていた理由の一つでもあります」

「静謐！ 貴様、まさか——！」

「お許しください、百貌さま。ですが我々も禁忌を破る時ではないでしょうか？ 私たちだけでは力が足りないなら、あの御方の力を借りるしか……」

暗雲を漂わせる呪腕さんと百貌さんに代わるように、ベデイヴィエール卿がその答えを伝えてくれた。

「アズライールの廟。アサシン教団始まりの寺院に眠るといふ、初代『山の翁』のことですね。ここに来る前に魔術師に言われたのです。

『アーサー王に対抗するのなら、歴代ではなく、最初にして最後の山の翁を訪ねなさい』と」

確かに、と呪腕さんが生唾を飲み下すように賛同した。

「あの御方であれば、ガウエインなど恐れるに足りぬ……」

「静謐、貴様には言っていないかったな。呪腕めは、この時代に生きた暗殺者だ」

「っ、そんな……ごめんさい。私、知らなくて——」

意味深な——おそらくはハサンの彼らにとってはきつとデメリツトが大きい話が、わたしたちを蚊帳の外に置いて進んでいる気がしてならない。

だというのに、わたしが意見や質問を挟む隙もなく、呪腕さんがドクターに言った。

「ロマン殿。マシユ殿とリカ殿を今一度、我が村に遣わしていただきたい。そこで我らの秘密を明かしましょう」

聖都攻略の準備に出かける百貌さんと一旦別れて、わたしたちは東の村へ戻った。徒歩で。二日かけて。

「アーラシユ殿のあの破天荒から丸一週間ですか。まさに夢のような出来事に思えますね」

「なに？　なんか楽しそうな話、してる？」

三蔵さんがひよっこり話題に入ってきた。微かに、本当に微かに、リカが息を呑んで、わたしの腕にしがみついた。寄り添ったりリカの体は小刻みに震えている。

三蔵さんに返答したのは、最後尾に行くアーラシユさんだ。

「楽しいぞう？　大声上がるの待ったなしだ！　しかし、帰り道もどうかと提案したが却下された。無念だ」

三蔵さんは事の詳細をアーラシユさんから聞くべく、アーラシユさんに歩調を合わせたので、こちらと三蔵さんの列に空白が生じた。それによってリカは、くたつとわたしの二の腕にもたれかかった。……今さらな感想だが、リカにこのトラウマを植え付けた仏式カルト教団とやら、人理修復後も健在なら叩き潰しに行ってもいいだろうか？

「まあまあ、アーラシユ殿。慎重を期せば敵に遭うこともなし。さあ、我らの村が見えてきましたぞ」

——村へ入ると、村人さんたちが集まってきて「頭目とアーラシユさんがお帰りだ！」と歓迎モード全開。

よくよく考えれば、呪腕さんとアーラシユさんはこの村の守りの要であり、その二角が揃って留守にした日々、村人さんたちは気が気でなかっただろう。どれもこれも大事なことだったとはいえ、お二人を連れ回したことを反省し——

「おかえり、マシユ姉ちゃん！　リカお姉ちゃん！」

「ひゃ……！」

「きゃああああ！」

び、びつくりした。後ろからわたしとリカに飛びついたルシユド君に、ではなく、リカの悲鳴の音量に。

「はっはっは。これルシユド、気持ちは分かるが今のは良くない。これで相手が静謐や三蔵殿であつたら、おぬし、一日は物が通らぬ体だったぞ」

「そこは大丈夫！ 人を選んでやってるからね」

——こら。

藤太さんの宝具で白米を東の村人にたっぷり配給してから、呪腕さんがついに物々しく告げた。

「我らが目指すのはこの村よりさらに奥、深き幽谷。山の民でさえ近寄れぬ、アズライールの廟。皆様には、かの廟までご同行願いたい」
《アズライールというのは、死告天使アズライールのことかい？》

ドクター・ロマンの問いに頷いたのは静謐さんで、呪腕さんの説明を継いで教えてくれた。

——天命の下、諸人に死を告げに現れる大天使。本人が望まずともその名を冠した暗殺者。その人物が、彼女たち「山の翁」の初代。アサシン教団の守護者。

《うーん……山の翁の初代っていつでも、やっぱりアサシンのサーヴァントだろう？ 対人特化はしているだろうけど、今の円卓の騎士やアーサー王に対抗できるのか……》

「いいえ、魔術師殿。アズライールの廟にいるサーヴァントは特別な存在。彼にとってあらゆる命は平等に「一つの命」であり、彼に相対した者は刃ではなく「自らの運命」に殺されるのだと聞きました」

「……ベデイヴィエール殿。我らが初代を敬っていただけは喜ばしいが、ますますもって貴方が分からなくなってきた。円卓の騎士である貴方が、何故そのことを？」

「全て花の魔術師からの受け売りです。私自身は……未熟な、円卓に居ただけの騎士ですから」

常盤色の両目を逸らすベデイヴィエール卿を見て、呪腕さんの表情（？）が綻んだ。

「——貴公、嘘が下手ですなあ」

「はい、申し訳ありません……い、いえ！　嘘ではありませんとも！　初代殿の伝説はフランスでじかに聞いたのですから間違いありません！」
ベデイヴィエール卿、それ、自白です。

とはいえ、わたしにも、わたしの中のギヤラハッドにも共通した疑問が生じた。

ベデイヴィエール卿がフランスに行ったことなんてあった？

生前にアーサー王が大陸に軍を進めると決定した時期には、
「彼は」は聖杯に召されて昇天したあと。

わたしが史料から得た知識が正しければ、サー・ベデイヴィエールは確か、ローマ帝国皇帝ルキウス・ヒベリウスとの決戦まで、ブリテン軍の先陣にいた。そしてスワシイの谷で、彼は——、——だめだ。この先が思い出せない。わたしにも、
「彼」にも、やはり不鮮明なデジャヴで行き詰まる。

「と、とにかく、アズライールの廟に案内していただくことには、私も賛成です。
「山の翁」の実力が伝説通りであれば良し。そうでなくとも、戦力が一つ増えるのですから」

はっとした。わたしは相当深く思考に没頭していたらしい。

「本当にあたしたち、その初代さんをお願いしに行つて大丈夫、でしようか……？」

「はい。リカさまであれば、初代様もお力を貸してくださいませ。必ず」

「——静謐」

「あ……申し訳ございません、百貌さま」

あちこちに隠れた思惑でがんじがらめにされたような心地のまま、初代「山の翁」の廟を目指すことが決定した。

キヤメロット13

「登山は自らの足で進むもの。これが慣れていないと恐ろしいのですよ」

これは登山というよりウォールクライミングなのでは!?

わたしの腕はリカに貸し出した。盾は移動に邪魔なので霊体化させた。

静謐さんが、前を行っているので手を引こうか、と提案してくれたけど、丁重にお断りした。すみません、わたしにはリカだけで手一杯です。

「ではリカさまの背中にぴったり付いて後方を警戒しますね」

「ちよつと待つて！ リカの背中はあたし、あたしの！」

「ふえ!？」

「さ、三蔵さん！ 背中はわたしが貸し出しますのでリカにはご遠慮ください！」

「やった！ ありがたくー！」

「あの廟への礼拝がこれほど賑やかになる時が来ようとは。まったく、運命とは分からねぬものだ」

——そんな珍道中があつて、巡礼用の小屋で一泊したのち、我々はついにアズライールの廟に辿り着いた。

《ここがアズライールの廟か。特に変わった反応はないが》

「いえ、ドクター……これは現場にいないと分からない重圧です」

魔力反応も、サーヴァント反応も、物音も、生命の気配も皆無だ。なのに、全身の震えが止まらない。精神ではなく魂が、この寺院に留まることを全力で拒否している！

呪腕さんがわたしとリカに奥へ進むよう促した。呪腕さんが、何が起きてもおかしくないから警戒は最大に、と言い終える前に。

剣閃が横一直線に奔った。

わたしはリカを庇って剣閃を盾で防いだ。

確かに攻撃を受けたのに、敵影が発見できない。

「ドクター！　サーヴァント反応は!？」

《何もない！　そこにキミたち以外の動体反応はない！　いや、そもそも、いま一瞬、リカ君の反応が消失したぞ!?　　どういうことだ!?　こちらの観測では、リカ君は死んだことになっている!!》

——“それ”がトリガーだと、誰にも気づけるわけがなかった。

リカはぼかんとした顔でわたしを見た。

「先輩。あたし、殺されちゃったんですか?」

「リカ!?　気をしっかり持って！　ちゃんと生きてる！　リカは生きてわたしの目の前にいるから——!」

「ほんとうですか?　あたしにつごうがいいユメとかじゃなくて?」

「フオフオウ、フオウ、フオーウ!!」

フオウさんがリカの頬に噛みついた。

「痛つ……!?!　——え、あれ?」

正気に戻った……よかったあ。乱暴なやり方だったけどありがとう、フオウさん。

「あ、たし……っ!　ご、ごめん、なさ、ごめんなさい!　へ、変なこと言つて……も、二度と、しませんから……怒らないで、捨てないで……許して……っ」

わたしは錯乱するリカを落ち着かせるために、盾を持たないほうの腕でリカを強く抱き寄せて、頭を何度も撫でた。

——怒りが沸点を突破するとかえって思考がクリアになると聞か、本当らしい。

初代「山の翁」だか知らないが、リカをこんなに怯えさせた代償はきちんと払わせてやる。

『魔術の徒よ』

荘厳な声がるや、呪腕さんと静謐さんがその場で五体投地した。

「どういうこと!?　まだ何も出てないわよ!?!」

「——いえ、静かに、三蔵殿。すでに我らの目の前に何者かがいるようです」

「——うむ。黙っている三蔵。できれば息も吸うな。この御仁に襲われては一溜りもない。今の拙者があと四十、齢を重ねてようやく一射

届くか、という武の極みだぞ、これは」

ベデイヴェイエル卿と藤太さんにそこまで言わせるのか。

『魔術の徒よ。盾の騎士よ。そして、人ならざるモノたちよ。汝らの声は届いている。時代を救わんとする意義を、我が剣は認めている。だが、我が廟に踏み入る者は、悉く死なねばならない。死者として戦い、生をもぎ取るべし。その儀を以て、我が姿を晒す魔を赦す。——静謐の翁よ、これに。汝に祭祀を委ねる』

途端、静謐さんの全身を闇色の霧が染め上げ、彼女の両目から光を奪った。意識を初代ハサンに乗っ取られた。

『静謐の翁の首、この者たちの供物とせん。天秤は一方のみを召し上げよう。過程は問わぬ。結果のみを見定める。どちらの首が晩鐘に選ばれるか。それは汝らが決めることだ。——死の舞踏を初めよ、静謐の翁』

静謐さんは手にストールを持つと、それをたなびかせて踊り始めた。

死の舞踊。ダンス・マカブル 激しく踊ることで汗を流し、彼女の毒性の汗を揮発させて知らず敵に毒を盛る、静謐さんの得意とする戦法だ。

わたしとリカには、ギヤラハツドの加護のおかげで静謐さんの毒は通じない。けれど、呪腕さん、ベデイヴェイエル卿、三蔵さんと藤太さんは確実にダメージを蓄積する。

するとリカは制服の袖を軽く振って、一枚の概念礼装を手中にスライドさせた。

「概念礼装『聖者の依代』を消費し、この場のサーヴァント全騎に弱体無効を付与します。これで静謐さんの毒は中和できます。でも長くは保ちません。皆さん、速攻で片を付けてください」

「でもリカ、静謐さんを殺すか、わたしたちが全滅するかしないと、初代『山の翁』は出てこないって——」

「織り込み済みです。先輩と皆さんは、いつも通り全力で、静謐さんを完全撃破するつもりで戦ってください。最後にはちゃんとひっくり返します、から。だから……」

——あたしを信じて。どうか、戦って。

わたしは盾を強く握って、一番に静謐さんに向き直った。

踊りさえ止めれば、静謐さんの攻撃手段は無きに等しい。うん、だから頑張らなくちゃ、わたし。後ろで「後輩」が見ているんだから。まずは藤太さんが矢を射て静謐さんを牽制した。あえて逸れるように射た矢は、静謐さんの四肢に微かな切り傷を与えたに過ぎず、静謐さんは平然と踊り続けている。——まずかったかもしれない。出血した分も空気中に悲惨される毒素を強める。

次はベデイヴィエール卿。ベデイヴィエール卿は静謐さんまで一息に迫ると、アガートラムの右腕で静謐さんの首を掴み、ステップを止めた。そうか。アガートラムといえば癒しの義手でもある。あの腕だけは毒を弾ける。

ここまでお膳立てしてくださったんだ。最後はわたしの番。

「ベデイヴィエール卿！」

「頼みます、マッシュ！」

ベデイヴィエール卿が静謐さんをこちらに投げるように押し出した。

わたしは本気で静謐さんに致命傷を与えるつもりで、全力で盾を横に薙いで静謐さんを殴り飛ばした。

「概念礼装『三重結界』を消費。対象、アサシン・静謐のハサン。静謐さんがたつた今受けたダメージは、霊核に至る前に全カットされました。——静謐のハサンは致命傷を負ってあたしたちに敗れましたが、敗者が生存してはいけないと、初代さんは明言しませんでした」

薄く意識が戻った静謐さんは、自分が何をしたのかを覚えているように、ごめんなさい、と零して床に倒れ伏した。

わたしは急いで静謐さんに駆け寄って、静謐さんを抱き起こした。——気絶しているだけみたい。

『生をもぎ取れ、とは言ったが、どちらも取るとは、気の多い娘よ。だが結果だけを見ると言ったのはこちらだ。過程の良し悪しは問わぬ。』

——解なりや』

サーヴァントの実体化とはまるで異なる気配がした。空気から滲むように、髑髏面の剣士が現れた。

「よくぞ我が廟に参った。山の翁、ハサン・サツバーハである」
《こ、このアサシンの霊基パターン、まさか、グラランド——!》

初代さんが剣を一閃。すると、カルデアとの通信回線が断ち切られた。生き物だけじゃなく、電子情報みたいな形而上のモノまで、彼の剣は「斬れる」の？

呪腕さんが初代さんに改めてひれ伏した。

「初代様。恥を承知でこの廟を訪れたこと、お許しいただきたい。この者たちは獅子王と戦う者。されど獅子王に届く牙が、あと一つ足りませぬ。どうか、どうかお力をお貸しいただきたい。全ては我らが山の民の未来のために」

「……二つ、間違えているな。生前と変わらぬ浅慮さだ、呪腕」

呪腕さんが滲ませる焦りをよそに、初代さんはわたしとリカを見下ろした。

「魔術の徒と盾の騎士に問う。獅子王と戦う者、これは真か？ 汝らは神に堕ちた獅子王の首を求めている。その言に間違いはないか？」

王の首——命を？ いいや、それは、どこか、違う。わたしはただ獅子王の真意が知りたいだけ。聖抜の意味。暴虐の理由。知ったつてそれで許せはしないけれど、それでも、血を流さずに王を止めたって気持ち捨て切れない。

「牙が一つ足りぬ、とも申したな。果たして、あと一つで良いのか？」
——今日まで奮闘してくれたハサンさんたちには悪いけど、純粋な戦力ではこちらがあまりに脆い。

「魔術の徒よ。盾の騎士よ。汝らは知らねばならぬ。全ての始まりを。それが叶った時、我が剣は戦の先陣を切ろう。太陽の騎士、ガウエインと聞いたか。我が剣は猛禽となってかの者の目玉を啄もう。我が黒衣は夜となって聖都を？み込もう」

「ごめんなさい、ガイコツの偉い人！ 言ってる意味が全然分かりません！ もっと分かりやすく言って、分かりやすく！」

「さ、三蔵さん!! そこは失礼のないように、普通に初代さんとか呼びましょう!」

「それ呼びやすくして助かるわ、マシユ！ それで、えっと、何かを調べ

ないと初代ハサンは力を貸してくれないってことよね？ 手がかりはあるの？」

「砂漠の只中に異界あり。汝らが求めるもの、全てはその中に。——砂に埋もれし知識の蔵、名を、アトラス院」

アトラス院——魔術教会三大部門の一角だが、アトラス院に属する者は錬金術に特化している。魔術の祖、世界の理を解明することを目的とする錬金術師の集まり。カルデアのトリスメギストスのオリジナル、トライヘルメスを保有する組織でもある。

——次に目指すべき地は定まった。

「では、呪腕の翁よ。首を出せい」

「……は。呪腕のハサン、己が咎を受け入れまする」

呪腕さんが初代ハサンさんの前で、項垂れた？

「お待ちください！ なぜハサン殿の首を貴方が断ち切ろうというのです!？」

「我は山の翁にとつての山の翁。即ち——ハサンを殺すハサンなり。山の翁が濃み、墮落し、道を違えた時、我はその前に現れる。分かるか。その時代のハサンが我に救いを求めるといふことは、『己に翁の資格なし』と宣言するに等しい。翁の面を、剥奪されるのだ」

それ、つて。呪腕のハサンさんは、自分が初代さんに殺されるのを承知で、わたしたちをここまで連れて来てくれたってこと？

「い……いけません、呪腕さん！ それは、何かが違います！ 今すぐ初代さんへの協力要請を取り下げてください！」

「——呪腕よ。一時の同胞とはいえ、己が運命を明かさなかつたのか。やはり貴様は何も変わってはおらぬな。——面を上げよ。すでに恥を晒した貴様に上積みは赦されぬ。この者たちと共に責務を果たせ。それが成った時、貴様の首を断ち切ってやろう」

「……有難きお言葉。山の翁の名に懸けて、必ず」

処分を保留にしてくれた……？ 今すぐ呪腕さんが殺されることは、ない？

安心したら気が抜けて、危うくその場に座り込む所だった。

キヤメロツト14

廟から出て開口一番、三蔵さんが日の下に出られて気分が晴れたと快哉を上げた。

一番我々をハラハラさせてくれた呪腕さんかというと、まだ首が繋がっていることを冗談めかして語っている。空元気だとよく分かった。

祭祀に使われた静謐さんだけど、こちらはリカ（とフオウさん）が静謐さんのとこまで行って、平謝りを続ける静謐さんを一生懸命に励ましていた。耐毒スキル（仮）があるリカだからできる芸当だ。

わたしはというと、カルデアとの通信が回復したので、ドクター・ロマンに廟の中での一部始終を報告した。アトラス院を目指すことにしたのは、ドクターには反対されると思ったが、これがむしろアトラス院行きを強く勧めてきた。

《危ないけど、特異点で危険じゃない所はないんだし。……でも心配なのは本心だ。アトラス院といえば『世界を七回滅ぼせる』と言われるほどの魔術兵器の廃棄場だ。そんな場所にキミたちだけを送り込むなんて、ダ・ヴィンチちゃんが何て言うか……》

「そうですね……ダ・ヴィンチちゃんが生きていれば……」

《レオナルドは生きている。あの凶太い天才が、そう簡単にやられるもんか》

ドクターの言葉が強がりか信頼か、わたしの耳では区別がつかなかった。

ひとまずの目的を果たしたので、わたしたちはみんなで東の村への下山の途に就いた。

もう少し歩けば、真夜中になるが村に帰り着く。夜ならばすぐに寝床に入っても誰も文句は言うまい。今夜は一晩眠ってしつかり休んで、明日にはアトラス院に発つのだから――

「何だあれは、どうなっている!?!」

「藤太殿? 何かおかしなものでも?」

「そうか、おぬしらではまだ見えぬか……! 火だ! 村の方角に火の手が見える! 無数の篝火が忙しなく移動しておる。あれは——聖都の兵士たちだぞ?!」

これを聞いて一番に呪腕さんが村へと先発で駆け出した。去り際、わたしたちに、村人の救助を請うてから。

呪腕さんの言葉を受けて、次に三蔵さんと藤太さんが村の東に回るべく走って行った。

わたしたちも行かなくちゃ!

わたしはリカに断ってからリカの体を横抱きに持ち上げた。そのリカの腹にフオウさんが登ってきてしがみついた。

静謐さんの先導でわたしたちも燃える村へ急行した。

——実際に村に着いて目にした光景は、無惨に過ぎた。民家という民家から火が上がり、道々には倒れている村人。どれもが死体だとい目で分かってしまった。

わたしがリカを腕から下ろすと、リカは火災の村の様相を見て呆然とした。

呪腕さんは聖都の兵士の狼藉に憤怒を叫んでいる。三蔵さんは生存者を探して声を張り上げて駆け回っている。

「——アーラシユさん、は」

そうだ、彼は村の守りのために残った。なのにこの惨状。まさか、アーラシユさんほどの英雄が——負けた?

「お待ちを! 倒れた村人は男ばかり——お二方、村人たちの半数は避難しています! この村には避難用の洞窟があると聞きました。おそらくはそこかと!」

さすがはアーラシユさん。明断だ。となると、残る心配はアーラシユさん自身がどこでどんな状態なのかだけ。

「偉大なる弓兵であれば、既にこの世に亡く」

わたしは盾を実体化して、リカと静謐さんを背中に庇う位置に立つた。

「本当に、悲しくて笑ってしまおう。運命はようやく貴女がたに追いついた」

——そんな、な。

「円卓の騎士、トリスタン。貴女がたの首を頂戴しに参りました」

トリスタン卿、だ。『僕』が見間違えることなどできやしない。ならば、この村に火をかけたのも、村人を殺したのも、アーラシユさんを襲ったのも、全て彼が——？

「村に残った男たちは処理しました。貴女たちを済ませたあとは、洞窟に逃げた村人たちです」

「皆殺しにするつもりか。何故そこまで！」

トリスタン卿はフェイルノートの弦を弾いた。ただの一音で、静謐さんの髑髏面が砕けて地面に落ちた。

「貴女ですよ、毒の娘。貴女が全ての原因です。我が弦は貴女の足跡のみを追跡したのです。貴女が独りで逃げていれば、この事態は起きなかった」

「——わたし、し？ 私のせい、で——？」

「貴女はあの牢屋で全てを語り、独り寂しく死んでいくべきでした。虫は虫らしく、身の程を弁えればよかったのに」

——違う。

——『僕』の知るサー・トリスタンは、ここにいる悪鬼なんかじゃない！

「ふぎけないでツ!!」

「マシユ……?」

「騙されないで、静謐さん。あの場にいた誰もが追跡された。責任はわたしたち全員にある。わたしたちがこの村を台無しにして……だからっ、わたしたち全員に、この騎士を討つ義務があるのよツ!!」

「……この気配……まさか、あの男がいるというのですか。獅子王の召喚に応じなかった円卓の英霊、ただひとり聖杯に選ばれたあの男が

……」

トリスタン卿はわたしたちを目で視ていない。目が視えていないんだとようやく気づいた。ああ、だから——生前のあなたであれば一般人の虐殺なんてできなかった。戦で恐怖に震える人々を直視したあなたは、いつだって追撃の手を止めていた。

「いいでしょう。それが運命だというのなら、この弓で真偽を確かめるまで。胸を貸しましょう、未熟なサーヴァント。貴女が何者なのか、その悲鳴で語っていただく！」

「マシユ・キリエライト、行きますッ!!」

先手はトリスタン。彼の指が滑らかに妖弦を爪弾いた。音という視えない刃を避ける術は確かにないが、その刃でトリスタンが肉体のどこを裂こうと意図しているかさえ読めたなら、この盾で防ぐことができる。

——この靈基^{からだ}が覚えている。サー・トリスタンの奏でる弦がどの音階であればどこからどう裂きに来るのかを。

だが、それだけではない。この切れ味は彼だけの力に依らない。獅子王のギフトだ。盾がトリスタン卿の真空の矢に耐えられても、わたし自身が詰んでは意味がない。いっそ抜剣して攻めに転じるべきか……っ！

「そこまでだ!! トリスタン!!」

——銀色が、夜の闇に閃いた。

「ベデイヴィエール卿っ」

「遅くなって申し訳ない、マシユ。ご安心を。リカさんには静謐殿が付いて、今も獅子奮迅の活躍です」

「……何と。貴公までこの戦場に現れ、我らに敵対するとは。ああ、私は悲しい。あと一步で、全て焼き尽くせたというものを。無念です。それはとても悲しむべきこと」

「悲しむべき？ それは貴公の行動の全てに他ならない。トリスタン卿ともあろう者が、無抵抗の村人を手にかけ、村に火を放つなど。円卓の誇りは地に落ちたのか。それとも、それが今の王の考えなのか——」

「サー・ベデイヴィエール。それは大いに誤りです。ブリテンにおいて、慈悲深き我が王は、確かに深追いを諫めはしましたが、決して、禁じてはおられなかったでしょう?」

火災の只中において悪寒を感じるほどには、トリスタンの笑顔がおぞましかった。

及び腰になったわたしとは裏腹に、ベデイヴィエール卿は再び右手に持った細剣でトリスタンに斬りかかった。

わたしはそこで気づいた。銀腕の光がさつきより増している。アガートラムは開放すればするほどベデイヴィエール卿の体内を焼くというのに!

「落ち着いてください、サー・ベデイヴィエール! 卿の体が保ちません!」

それでもベデイヴィエール卿はトリスタンと斬り結ぶのをやめない。

「私たちは友だった。友だからこそ許せない! 貴公の振る舞いを獅子王が許したとしても、私が、貴方を赦さない!!」

「これは、肉と骨の焼ける音……なんと。見苦しいことこの上ない。いかなる経緯でそのような銀腕を手に入れたのかは知りませんが、貴方には過ぎた力——」

「Gander!!!」

不意打ち。その一言に尽きた。誰にとつても。

トリスタンの背後から、リカが、質量を伴うほどの魔力を込めた一発のガンドを放ち、さらには命中させたのだ。

「この一帯の騎士どもは私たちで蹴散らした。間もなく呪腕さまたちも駆けつける」

静謐さんの勧告に対し、トリスタンは無言で妖弦を弾いた。リカを狙って。けれどリカ(と肩のフォウさん)を静謐さんが空かさず抱えて大きく飛びのいたのが功を奏してか、二人の負傷は衣類のほつれに留まった。

「先輩っ。大丈夫ですか? けがしてないですか?」

「なんとかね。リカこそ、よく頑張ったね」

わたしはリカの頭を撫でた。

——静謐さんはさつき「私たち」と複数形で言った。つまりリカも
粛清騎士の掃討戦で静謐さんを大きく支援したのだ。いいえ、静謐さ
んが言うまでもなく、リカが働かなかったなんてわたしが思うわけも
ないのだが。

リカは顔を真っ赤にして、俯いた。えーと、そんなリアクションを
されるとわたしまで照れくさくなってしまふ。心臓に大変よろしく
ない。

かと思えば、リカはぷるぷると頭を横に振って、わたしとベディ
ヴィエール卿に、直接触れない位置で手をかざした。直後に消える、
蓄積した傷と疲労。制服礼装付与の「応急手当」のスキルだ。転嫁
魔術のほうでなくてよかった。これでわたしのコンディションは持
ち直したし、きつとベディヴィエール卿も少しは楽になったはずだ。

わたしはベディヴィエール卿と頷き合って、二人で再びトリスタン
と対峙した。

キヤメロット15

わたしたちにとっては義憤を以てして挑んだ戦いは、トリスタンの宣告で唐突に幕を引いた。

「時が来ました。見上げなさい、西の空を。王を邪魔立てした報い、無念と共に受け入れる時です」

西の空が光った。光は柱の形となって落ちて——西の村を、飲み込んだ。

わたしはここが戦場であることも忘れて呆然と立ち尽くした。わたしと一緒に剣を搦ったベディヴェイエル卿でさえそうだ。

「これが獅子王の裁き。聖槍ロンゴミニアドによる浄化の柱。ご覧の通り、ちつぽけな山の民たちの村は消え去りました。そして言うまでもなく、次はこの村です。一切の痕跡なく浄化致しましょう」

ことばを失うわたしたちの中、一人だけが絶叫した。——リカが。「ひ……い、や……ああああああああっつ!!!」

皮肉にもわたしは、後輩の悲鳴と泣き崩れる姿で、我に返ることができた。

わたしは盾を消してリカを抱き留めて、どうにかリカを宥めようと何度も呼びかけた。けれどリカはぐずる幼子のように叫ぶのをやめなかった。どうしよう、どうすれば……!?!

リカとわたしの有様を見て、トリスタンは呆れたのか憐れんだのか、音断ちの弓を霊体化させて踵を返した。

「これより五分ののち、王の裁きはこの山に落ちる。さらばです、ベディヴェイエル卿。もう会うこともないでしょう」

トリスタンが悠々と去っていく。

待て、と吠え立てたくてもできなかった。こんなリカを放って戦いに戻るなんてできっこない。「先輩」がしていいことではない。

《直上、魔力観測値300万オーバー! えーと、最高級の宝具か力が1000から3000だから——ええい、比較するのも馬鹿らしい熱量だ! 急いで退避を! 消し炭になるぞ!》

「——いや、どちらも無理だ。逃げるのも、助けるのみな」

この声！ アーラシユさんだ。無事だったのね。よかつ、た……、
……え？

アーラシユさん？ どうしてそんなに血まみれなんですか？ 内臓が見えそうなほどに深い全身の刀傷は何なんですか？ どうしてそんな死に体で、戻って来たんですかッ!?

「リカ、もういいぞ。トリスタンは山を下りた。引き返しちや来ない」
ぴたり、と。わたしの腕の中で、リカがしゃくり上げるのをやめて、くしゃくしゃに歪んだ顔をアーラシユさんに向けた。

「あなた、まさか——」

「……ごめんなさい。ウソ泣き、でした」

開いた口へ牡丹餅——じゃない。間違えた。開いた口が塞がらない。
い。

「トリスタンは耳を頼りにしてる分、お前さんの迫真の叫びには面食らっただろう。もうこのマスターの心は折れた、自分が手を下すまでもない、と騙されるくらいにはな」

リカは返答しないで、アーラシユさんに駆け寄って傷口に手を伸べた。けれど、わたしが止めるより早く、アーラシユさん自身がリカの手を避けた。

「治さなくて——いや、移さなくていいんだ。お前さんには耐えられない。というか、こんなバカでかい怪我をお前さんがしてみろ。出血より先に痛みでショック死するぞ。俺はサーヴァントだから平気なだけだ」

「嘘、です……それは！ 嘘です！ サーヴァントだって怪我したら痛いでしょう!?! あたし、知ってるんですから!」

「そこを踏ん張るのが英霊の意地ってやつだ。それとリカ、『命の使い方』をこれから考えるんだろ？ 今から俺の『命の使い方』を見せてやる。ま、反面教師だと思ってくれ。せつかく芽生えた気持ちを無駄にするな。お前の迷いは正しいものだ」

「何で……? 何で最後まで、そんなに——他人に優しく、できるんですか……?」

「——、呪腕殿に詫びを伝えてくれ。あんたの大事な村で多くの犠牲

を出してしまつて、本当にすまなかつた、つてな。お前たちは洞窟まで下がつてろ。一度ばかり本気を出す」

アールシユ・カマンガアの、一度きりの、「本気」。まさか、命と引き換えに放つと言われる特攻宝具!？」

「アールシユ——貴方までそのようなことを……」

「なあ、ベデイヴィエール。お前さんはもう休んでいい。いや、とつくの昔に休むべきだった。そんなモンまで持ち出して、残つた最後の幸福すら切り捨てやがつて」

「知つていたのですね。私の目的を……私の、あらゆる罪を」

「これでも千里眼持ちなんぞな。察しの良さなら誰にも負けんさ。さあ、行け!!」

ベデイヴィエール卿は一度だけ面を伏せてから、右手で静謐さんの腕を掴んで走り出した。

わたしは条件反射で、リカとフオウさんを抱き上げてベデイヴィエール卿たちを追いかけた。

途中からは洞窟までの道案内のため静謐さんが先頭に出てわたしたちをリードしてくださつた。

わたしたちは、こぢんまりとした洞窟に辿り着いた。

避難した村人たちの中には三蔵さんもいて、わたしたちの直後の夕イミングで呪腕さんが洞窟に来た。

呪腕さんの顔を見たわたしは、アールシユさんとの別れが今さら胸に詰まされて、すぐにアールシユさんの「お詫び」を伝えられなかつた。でも、わたしの様子から、呪腕さんは事を察したようだった。

ふいに、黙つてしやがんでじつとしていたリカが、洞窟を出た。

——夜天から落ちる白光を、阻むのは、祈りの矢。

大地から天空へ、逆しまに墜ちる流星。

リカは泣くこともなく、表情さえ無く、その輝きを見上げていた。

——朝が来た。

白日の下に晒された村の荒廃を見て、ひたすらやるせなかつた。裁きの光が落ちた西の村はもう面影もない、と呪腕さんが言っていた。せめてもの救いは、前のモードレッドの襲撃を教訓に、百貌のハサンさんがいち早く村人たちの大半を別の集落に避難させていたことか。

——わたしのせいだ。

東の村に裁きの光が落ちる瞬間、わたしが宝具を真名解放できていれば、アーラシユさんはきつと死なずに済んだ。

わたしは、わたしに宿ったギヤラハツドの盾の宝具としての使い方が分からない。

何度意識しても、宝具の真名が出て来ない。

わたしのサーヴァント・マトリクスをリカに読んでもらいもしたが、ステータスが所々滲んでいて読めないとリカは困ったように答えた。

悔しさと後ろめたさで、胸が塞いだ。

民家の隅で蹲っていたわたしに、声がかかった。

「マシユ」

「静謐さん……?」

「村人たちの葬儀が始まります。せめて祈りだけでも一緒に」

「そうですね……」

鎮魂と追悼。今のわたしに手向けられるものなんてそんなものくらいだ。

静謐さんと一緒に広場に向かって歩いてみると、正面からリカ（肩にはフオウさん）が走って来た。

「先輩！」

「リカ? よかった。これから村の人たちの葬儀だっていうから、一緒に」

リカは首を横に振った。

「さつき、呪腕さんに言われたんです。早々に出発して、アトラス院の砂漠へ向かえって。円卓の追撃が来る前に急げ、って」

こんな惨状にある村に背を向けて、悠々と旅立ってって？ そんなの、あんまり不義理じゃなからうか。

カルデアからの通信が端末に入った。ドクター・ロマンからだ。

《初代ハサンの言いつけもあるけど、今は聖都を攻略するための情報が欲しい。裁きの光を目の当たりにした今、一刻の猶予もない。あれに対抗する手段を見つけないと》

心がぶく痛む。リカやドクターの言う通り、わたしが村に残ってできることはない。

きついしんどいけれど、今は目の前の課題を一つ一つ片付けていかないと。

「了解しました。砂漠へ向かいます」

砂漠を歩くメンバーは、わたし、リカ、フォウさん、三蔵さんに藤太さん、そしてベデイヴィエール卿である。

「相変わらず物凄い風です！ 皆さん、吹き飛ばされないよう……！」
わたしはリカと手をがっちり繋いでいる。最悪、吹き飛ばされても、リカと離れないならまだマシだ。

「だいじょうぶ、バッチリよ！ なんとたって一度踏破しているしね！

度一切苦厄。舍利子。色不異空。空不異色。色即是空。空即是色……」

あ、リカがわたしの横に隠れた。苦手な仏式の中でも「読経」は特に苦しいらしい。頭の中にメモメモ、と。

「この辺りだという話だが影も形も見えん！ 目安になる建物すらない！」

「距離、方角、共に間違いありません！ 旅の方向感覚だけは円卓一！ 負けませんとも！ それが私、ベデイヴィエールの自信ですの……！」

——わたしたちがこの進路を取っているのは、百貌のハサンさんからの情報を頼りにしてのことだ。

百貌さんからの伝令によると、アトラス院は砂漠の中でも、オジマインディアス王お気に入りだが調査の手が出せない遺跡にあるという。しかもその遺跡の周りにはスフィンクスが徘徊していると来た。

おまけに、近頃は遺跡の周りでおかしな人物がよく目撃されているとか。ターバンを頭に巻いて、黒いマントみたいな服を着た西洋人。わたしの知識には該当する英雄偉人がない——

「きやあああ！　ちよ、やだ、来ないでよお！　獅子の体にヘンな顔とか怖すぎるわ！　開明獣といい勝負ね！　って何で目からビーム出るの!?　飛び道具やめて！　あたしキャスターなんだから肉弾戦で来なさいよ〜！」

……………。

心底申し訳なきような藤太さん。

わたしは盾を実体化。ベデイヴィエール卿もどこか渋みほとばしった顔をして、右手で細剣を抜いた。

キヤメロット16

わたし、ベデイヴィエル卿、藤太さんが武装して、三蔵さんのもとに駆けつけた時にはすでに遅く、スフィックスは腹を見せて仰向けに倒れて目を回していた。

きつとあれが不運にも三蔵さんを襲ってしまったスフィックスなのだ、わたしたち全員が即時理解した。言語化すると、「あ、うん、そうだよね」という感じ。三蔵さん、きつと無我夢中だったんでしようね。

「――」

「リカ、どうかした？」

「三蔵ちゃんはスフィックスからはおいしそうに見える。先輩、覚えました」

「忘れなさい」

「あう……すみません」

「フオフオフオウ、フオーウ、キヤウ！」

とはいえ、三蔵さんがスフィックスというトラブルに突っ込んでいくタチなのはよく理解できた。つまり三蔵さんが気ままに進む方向がスフィックスの徘徊地であり、アトラス院に通じる場所という可能性が高い。

藤太さんもそれに気づいてくださって、三蔵さんに「進みたい方向へ進め」と言った。

それを、道案内を任せられたと受け取った三蔵さんは、意気揚々としていた。

「あ、でもなんか気をつけて。後ろからイヤな気配がばびゅーんって近づいてる気がするの。たぶん荒ぶる大岩か何かだから、転がってきたら受け止めなさいね」

「イヤな気配か。おぬしの勘をもう笑えぬからなあ……これは急いだほうがよさそうだ」

三蔵さんの道案内で、わたしたちはひとときわ高い砂丘を見渡せる位置まで進んだ。

砂丘の向こうには複数のスフィンクスが見える。あの一帯を監視するように周回しているスフィンクスを見るに、目的の遺跡はあそこに違いないのだが。

「問題はスフィンクスですね。一頭ならともかく、あれだけの数を相手にするのは無謀です。他の侵入経路を探すしかありません」

「こういう時こそ、ドクター・ロマンの情報支援があれば……」

「——今回は別の道探しも一時中断だ。馬の足音だ。武装した一団がこちらにやってくる！ この重圧、円卓の騎士と見た！」

「……戦うしかありません。ここは私が切り開きます！」

ベデイヴィエール卿を、席を同じくした円卓の同胞と戦わせる。それはとても残酷な仕打ちに思えた。

わたしは盾を実体化して、リカ（とフォウさん）を背中に庇って身構えた。

「——追いついたか。諸君らと事を構えるのはこれが三度目だ。いずれも反逆者のリーダーと対面することは叶わなかったが、最後でようやく機会を得た」

わたしたちの前に現れた円卓の騎士は——

「円卓、遊撃騎士ランスロット。王の命により、その身柄を拘束する」

あ……………れ？

わたし……………あの人を、よく知っている。だってランスロット卿は「僕」の——

「降伏か抗戦か。諸君らの信念に合わせよう」

「降伏するつもりはありません。ですが、戦いの前に問い質したいことがある。サー・ランスロット。卿はいかなる理由で、今の王に仕えているのか」

「——これは、幻か？ ベデイヴィエール……ベデイヴィエール卿なのか?! 馬鹿な、ありえない！ 貴方がこの場にいるなどあるはずがない……………」

三蔵さんが小声でわたしに囁いてきた。

（ねえ、マシユ。円卓の連中、みんなああだったの？ ベデイヴィエールが円卓から離反したからって、反応が過剰じゃない？）

そ、そう言われると、確かに……

「改めて問う。答えよ、サー・ランスロット。卿ほどの騎士が今の獅子王に仕える理由を」

「――総員、戦闘配置」

「ランスロット!!」

「断じてあれが王の所業などと語れるものかッ!! 私が剣を預けたのは騎士王だ、獅子王ではない!! だが、それと諸君らを捕らえる任務に関係はない!!」

ランスロット卿の怒号が乾いた大気を震わせた。

「申し開きは王の御前でするがいい! アグラヴェインが卿の参列を許せばの話だがな!」

ランスロット卿が宝剣アロンダイトを抜いた。相変わらずものすごい分からず屋だ! と、わたしの中のギャラハッドが地団駄を踏んでいる。

ランスロット卿の号令で粛清騎士たちが襲ってきた。

わたしは盾で。ベディヴィエール卿も三蔵さんも藤太さんもおのの武器で戦い始めた。

とはいえ、大人数vs少数。消耗戦に持ち込まれたら確実に負ける――!

「先輩、ちよつとだけ頑張ってください! あたし、応援連れてきます! 三蔵ちゃんも一緒に来てください!」

「え、あたし!? きゃー、引っ張らないでー!」

応援?

ランスロット卿の言ったように、ここにわたしたちに味方する山の民はいない。

リカの発言に、ランスロット卿と彼の部隊も訝って一時的に進軍をやめている。

膠着状態――

先に動いたのは聖都軍のほうだった。

斬りかかった粛清騎士の剣を、わたしは盾で防いだ。

「援軍とやらが合流する前に叛逆者を拘束しろ! 断じて生かして捕

「らえるのだ！ いいな!？」

『『イエス・サーー!』』

……ドドドドドドツツ!!

何か、砂を派手に蹴って、大型の生き物が何頭も、こちらに向かって来ている気がする。

「やーめーてー! あたし美味しくないわよー! トータ~~~~!!」

顎、外れるかと思いました。

「な——」

「なんですか——!」

リカは三蔵さんを疑似餌にして、スフィンクスの群れを先導して、こちらに走ってきていた。

「せんぱーい!」

そうか。スフィンクスの群れとランスロット卿の部隊をぶつけて、わたしたちは側面離脱。タイミングさえ合わせれば、敵vs敵でこちらは消耗なし。我が後輩ながらナイス計略!

……問題はその側面離脱のタイミングが計れないってことくらいかな。

「ただいま戻りました! 藤太さん、三蔵ちゃんパスです!」

「拙者にパスされてもだな!？」

「よく走ったね。えらいよ」

リカが頑張ったことには違いない。仏式に苦手意識があるのに三蔵さんと一緒に行けたとか、決して運動神経がいいほうではないのにスフィンクスに追いつかれないくらいに走ったとか、花丸をあげたいことはいくつもある。

なので、リカの頭をなでなで。リカの表情は、ほにやつと崩れた。

「でも次からそういう不意打ち作戦は先輩に相談してからすること。いい?」

「はいです」

「よろしい。では皆々様」

リカをよいしょとお姫様抱っこ。そのリカのお腹に、フオウさんが

駆け上ってしがみついた。

「ダツシユでこの戦域を離脱します!! 走れー!!」

「あーん! さっきも死ぬ気で走ったのにまたなのー!」

「泣き言を吐く間があらば足を動かせ!」

「というわけでお暇します、ランスロット! スフィックス退治はよろしくお願いしますね!」

駄目で元々。かわいい後輩が頭をひねった作戦、一個くらいは根性論で叶えてあげたっていいじゃない。

無我夢中で走っていたわたしの、足下が、急に消失した。え、と戸惑う暇もなかった。

落とし穴のトラップに、わたしたち全員が見事に嵌まってしまったのだ。

落とし穴のトラップに見事嵌ったわたしたち。ただ今、絶賛、真っ暗闇の中。

「とりあえず出席をとりましょうか。まずは」

「は、はい。先輩の後輩で一応マスターのリカ、いるのです……その、先輩? あたしが乗ってて、膝、重くないですか……?」

「まさか。こんなに細いんだもの」

「華麗に着地できました。ベディヴィエール、ここに」

「羯諦、羯諦……玄奘三蔵、ちゃんと出席してまーす……」

「ずいぶんと落下したな。それにしても空気があるな?」

「フオウ」

「それは結構。どうやら全員窮地を脱したようだね。では灯りを点けよう。少しばかり目眩がするが、そこはご愛敬だ」

——声が、一人分、多い?

悲鳴を上げるより早く早く灯りが燈って、六人目の正体を詳らかにした。

「やあこんにちは、諸君。そしてようこそ、神秘遙かなりしアトラス院

へ。私はシャーロック・ホームズ。世界最高の探偵にして唯一の顧問探偵。探偵という概念の結晶、キミたちを真相に導く最後の鍵というわけだ！」

「な——」

「な——」

「なんかスゴイ人来ましたー！！！！」

「何でロンドンに来なかつたんですかこの方——！！！！」

はははは、とシャーロック・ホームズを名乗ったサーヴァントは朗らかに笑ってから、わたしたち一人一人を指差し確認し始めた。

「キミがミス・キリエライト。そちらがマスター、リカこと藤丸立香。サーヴァント、玄奘三蔵と俵藤太。そして」

ホームズ探偵は堂に入った紳士の礼を、ベデイヴィエル卿に向けて取った。

「お初にお目にかかる。サー・ベデイヴィエル。同郷の人間として、親近感を覚えずにはいられないね」

「同郷？ 貴方もロンディニウムの系譜の民なのですか？」

「イエス。ですが私自身はsirの称号を得たことはありません。私の活躍の伝達者はその称号を得ていましたけどね」

モニターが生きていけば、ドクター・ロマンも大喜びだったはずだ。わたし自身、感動もひとしおだもの。シャーロック・ホームズは実在したんだから！

「喜んでいただけただけで光栄だが、ミス・キリエライト、私の本質は君が思うものとは些か異なる。それに、私はまだカルデアの依頼は受けられない。依頼された順番がある。私はバベツジ卿の一欠けらの、綺羅星のような理性と引き換えに、この殺人事件の解決を依頼された。この依頼が終わるまで、私はカルデアに縁を結ぶことはできない。だが、私は探偵だ。ただ謎を暴く。それが私の本分なのだから」

小説から想像したホームズ像を裏切らないホームズさんだ。

「つまり、単に先回りしてただけ……」

「まさしくその通り！ 落とし穴を作動させ、諸君を招きはしたがね！」

「この子たちに協力するけど味方にはならない……そういうことではないのかしら？」

「イエス。諸君はこの学院に知識を求めて来た。『全てを知る必要がある』。おそらく山の翁はそう語ったのではないか？」

こくこく。わたしとリカは合わせて首を縦に強く振った。

「であれば諸君はこの学院の中心部を目指すべきだ。そして私も、その中心部に用がある」

ホームズさんによると、その「中心部」はここから500メートル地下にある。そこまでの通路はダンジョンの様相。これは、「入るに容易く出るに難しい」というアトラス院の性質を反映した造りなのだとか。ホームズさんは中心部にわたしたちを案内する代わりに、わたしたちが通路のトラップを道々解除する。

というわけで。

わたしたちはホームズさん先導のもと、アトラス院最深部へ向けて出発した。

「なし崩し的にホームズ殿と行動することになりましたが……これでもいいのでしょうか、マシユ？ ……私はどうもあの手のタイプは苦手です。あの人、マーリンと同じ匂いがします……」

いえ、ベデイヴィエル卿。マーリンと一緒に語るにはシャールロック・ホームズへの侮辱です。あの名探偵はマーリンのようなトラブルメーカーではありませんから。

リカがおおずとおおずとホームズさんに、アトラス院の概要を質問した。ホームズ探偵は的確に、アトラス院という組織の位置づけと性質を説明した。

学院というよりは騙し絵の迷路みたいな道を、下へ、下へ――

さらに進んだところで、ホームズ探偵は魔術王の正体について言及した。実は、わたしもリカもとうにエンカウト済みです、とそろりそろりと申告すると、ホームズさんはわたしとリカに詰め寄って、魔術王の情報を次々と問いかけた。そ、そんなに一気に言われたらわたしもリカも答えに困りますよお……

「よく思い出してほしい。どんな些細なことでもいい。魔術王には、

何かおかしな所はなかっただろうか」

思い出そうにも、魔術王を見た時の姿も声もノイズに埋め尽くされていて思い出せない。

そこでリカが、数日前に百貌さんから届いた文を取り出すと、壁から染み出す水滴を指先につけて、裏面に何やら指を滑らせ始めた。

あつという間にスケッチを完成されたりカは、ホームズさんに無言でそれを差し出した。

「度胸のある少女だ。本来なら魔術王の姿を絵にした時点で呪いを受けてもおかしくないというのに」

「……それについては、一度、身を以て思い知りましたので。アトラス院の中でなら大丈夫かな、って……あの、だめ、でした？」

「いや。重要な手がかりだ。謹んで受け取ろう」

「ありがとうございます」

その後、奥へ進んでいると、防衛機構であるキューブの集合体に二度襲われたものの、わたしだけでなくベデイヴィエル卿や、三蔵さんや藤太さんの助力もあつて、窮地を切り抜けることができた。

「ミス・キリエライト。見た所、キミはまだ宝具を扱えていないね？」

「はい……わたしは、わたしに力を譲渡した英霊がギヤラハッドだと知っています。ですが、『彼』の真価たる宝具の力を引き出せずにいるのです……」

リカが無言で横からわたしの手を両手で包んだ。心配してくれてありがとう、リカ。

「真名はそう大きな問題ではない。キミはただ、踏み出す足を間違えているだけだ。キミの精神はすでに完成している。その恐れは、宝具のあるなしで変わるものではない。仮に宝具が解放されなかったとしても、キミは立ち上がることをやめないだろうか？」

「——はい」

私は最期まで、弱気を押し殺して、勇気を振り絞って戦う。たった一つの信じるもののために。

もうすぐ最深部というところで、アラートがけたたましく鳴り響いて、防衛機構の駆動を伝えた。

わたしたちは各々の得物を構えた。

「目的地に着く前に、私からの忠告、いや宣言だ。私が諸君の前に現れた最大の理由は、ここにはカルデアの目が届かないことにある。事前に言っておくとだね、私はドクター・ロマンを信用していない」

キヤメロツト17

わたしたちは、ついにアトラス院の最下層、トライヘルメスの前に辿り着いた。

そこは、どこかカルデアの中央管制室に似た雰囲気というか、構造というか。カルデアのトリスメギストスが元はここに端を発したからだろうか。

ホームズさんは迷いのない足取りで、聳え立つ蒼の三本柱へ向かって行く。

「本来であればスタッフに声をかけるところだが、ここは無人の廃墟だ。申し訳ないが無断で使用させてもらおう」

「……どうして、誰もいない、ですか？ あたしたちが勝手に入ったから怖がらせちゃった……？」

「ここは2016年、つまりキミたちの時代のアトラス院だからだよ」
思い出した。エルサレムとは違う時代のエジプトの中に、さらに時代の違う異物があるとダ・ヴィンチちゃんが言っていた。初代ハサンさんも「砂漠の中に異界あり」と言っていた。リカの言葉を借りるなら、太極における陽中の陰に当たる場。それがこのアトラス院なんだ。

「だが問題はない。トライヘルメスは正常に稼働している。アトラスの錬金術師でない私たちには手に負えないが、単純なデータだけを知ることができる。数学問題の解答だけを見るようなものだ」

ホームズさんは三本柱のコンソールを、ノートパソコンでも打つように指で叩いた。

「トライヘルメス、冥界を飛ぶ鳥よ！ 私の質問に答えてもらおう！
2004年の日本で起きた聖杯戦争、その顛末を！」

ピピツ、と電子音があり、三本の塔に幾筋もの光が走り始めた。

「キミたちもすでに知っているかもしれないが。カルデア所長、オルガマリー・アニムスファイア嬢の亡き父、マリスベリー・アニムスファイア前所長は、2004年の聖杯戦争の参加者の一人だった」

ピピツ。二度目の電子音がして、蒼の塔に光文字の羅列が浮かん

だ。今まで読んだどんな言語でもない文字だ。

「私の推理通りだったな。……マリスビリーは2004年の聖杯戦争の優勝者。彼は万能の願望器である聖杯を手に入れた、とヘルメスは記録している。そして記録によると、来日したマリスビリーは助手を連れていた。これがDr. ロマンを信用できないと言った理由だ。助手の名は、ロマニ・アーキマン。聖杯戦争の翌年、特例としてカルデアのスタッフとして招かれ、22歳で医療機関のトップに抜擢された。異例の人事と言える」

リカがとても不思議そうに首を傾げた。

「それは……異例、なんですか？ 日本だったら、年功序列の風潮が消えてないから分かりますけど……欧米だとスキップとか当たり前……なんですよ？ ドクターだったら、いきなりトップでも問題ないような気が、します、あたし」

「ミス・藤丸。キミはカルデアに配属されてすぐ48人のマスター適性者の中でナンバー2の成績を叩き出したそうだね。そんなキミからすれば周りの人間もそう映って然りだが、ここで問題視すべきはそこではない。彼は、何かを隠している。それもとびきり真相に近い何かを、だ」

そこで、いい加減黙っているのも疲れたからか、三蔵さんが困ったように話題に参加した。

三蔵さんの疑問点は、マリスビリー氏が聖杯に何を願ったのか。

ホームズさんは答えて曰く、おそらくマリスビリー氏の望みは「富」。カルデアとそこにまつわる多くの技術の確立と開発のため。聖杯戦争は資金繰りに過ぎなかったという可能性が濃いのだという。

人理焼却の起爆ボタンを押したレフ・ライノールがカルデアに赴任したのが1999年だから、その後カルデアに来たドクター・ロマンがレフ教授よりもっと重いトリガーを担っていたとは考えにくい。「実に口にしたくないのだが、ロマニ・アーキマンは、あれだ。『どうして居るのか分からないが、事件とは無関係の、別にいてもいなくてもいい謎の人物』という結論も出てきてしまうわけだ」

なるほど！ そのほうがとても、わたしたちのドクター・ロマンら

しきがある。

「ここでの話を彼に伝えるのは控えてくれ。彼の秘密が明らかになるまで信用はできない。少なくとも彼は2004年の真相を知った上で君たちに黙っているのだから」

わたしはリカやフオウさんと同じ角度で、こつくり、頷いた。

「さて。私の知りたかった事実は以上だ。次は諸君の番だ。獅子王の持つ聖槍ロンゴミニアド。これが何であるか、キミたちは知る必要がある」

いよいよ本題に入る気配を感じて、わたしは気を引き締めた。

ホームズさんは再びトライヘルメスに検索をかけた。検索結果は10秒を数えるまでもなく表示されたようで、なるほど、とホームズさんは厳しい面持ちをして、その真相をわたしたちに聞かせてくれた。

聖槍には二つある、とホームズ探偵は語った。

一つは「最果ての塔」。世界の果てにそびえ、人界を見通し見守っている塔。

もう一つは獅子王が持つ聖槍ロンゴミニアド。

塔は世界の果てに在り続け、槍は塔の管理者が持ち続ける武器。

何故「塔」が地表に立っている、正確には大地に突き立っているかというところ——現代では世界で最も威力がある「物理法則」という敷物を、地表から？がれないように惑星に縫いつけている、いわば待ち針の役目をしているから。

そして、獅子王は聖槍を「塔」として使う気である。

まず獅子王が始めたのは、魂の回収だった。善なるもの、正しきものの、秩序だったもの。

集めた魂は、来たるべき時に聖槍に収納する。ヘルメスの計算によると、最大で500人分の魂を。

カメラロットは聖都としての外観を持っているが、あの街並みこそが聖槍の内側。そこに入った人間は、自ら聖槍に魂を収納したも同然なのだ。

そうだったが最後。聖槍が「塔」に切り替えられた瞬間、聖都入りした民はヒトではなく「要素」となり、「理想の人間」のサンプルケースの出来上がり。

聖槍は発動の瞬間、最果てへの扉を開き、「塔」に含まれないあらゆる天地を抹消する。

「……地上へ戻りましょう、皆さん。もはや一刻の猶予もありません」「あれ？ でもどうしてガイコツの偉い人はみんなに教えてあげなかったのかしら」

「リカがここに来る必要があったのだろう。あるいは、この学院でなく、砂漠そのものにか」

「あたし？」

「人の縁ばかりは力ではどうしようもないだよ、リカ。そなたにはこの地でやるべきことがある。かの御仁の本意はそういうことかもだぞ？」

「あたしなんか、何が——」

わたしは横からリカと手を繋いだ。

この小さな手は、大切な後輩の手で、唯一認めたマスターの手。大丈夫。どんな時でもわたしはリカと一緒にだから。

地上へ出るなり、フォウさんが元気に砂漠を駆け回った。

フォウさんの気持ちはわたしにも分かる。ここまで延々と地下通路だったのだから、太陽の下に出ただけでも気分爽快になる。

幸いなことに砂嵐もやんでいる。アトラス院の真上ということ、オジマンディアス王が砂嵐で閉ざした領地にも入らないということだし。

「——喜んでばかりはいられぬようだぞ。出口で待ち伏せとは、まこと気の長い男よ」

え、と辺りを見回すと同時。

遮蔽物のない砂漠のはずなのに、何故か今まで視界に入らなかった、紫の甲冑の騎士の部隊がわたしたちを包囲していた。

部隊の中心にいるのは、当然ながらランスロット卿である。

「もはや逃げ道はない。大人しく縛に付け。抵抗するのなら、誰であれ容赦なく斬り捨てる」

落とし穴に落ちる前の、まだ幾分かの落ち着きがあったランスロット卿とは違う。殺気と、敵意。

わたしは身震いした。——ランスロット卿、本気だ。

わたしが盾を実体化して構えるより早く、ベディヴィエール卿が声を張り上げた。

「ランスロット、戦う前に一つ尋ねます！ 卿は聖槍の正体、獅子王の目的を知っていますか!？」

「……なに？」

「聖都是最果ての塔。理想の人間を集めて収容する檻であり、それが成った時、この大地は全て消滅するのです！」

「……まさか」

ランスロット卿が宝剣を下ろして——下から上へ。逆袈裟にベディヴィエール卿を斬りつけた。

啞然として、声が出なかった。

ベディヴィエール卿は、アガートラムの右腕でとっさに宝剣を受け流したから、大事には至らなかったけれど。

「まさか卿がそこまで知っているとはな。この者たちも同様というわけか。ますます逃がすわけにはいかなかった」

「聖槍の意味を知ったのに……いいえ、最初から知っていましたね!?! 貴方だけでなく、獅子王側の騎士は！ 皆ッ！ 過ちと知った上で

あの王に傳いたのか！」

「くどい！ 我ら円卓に王への不忠はない、と言ったはずだ！ 全ては獅子王が我ら円卓を召喚した際に真っ先に宣言したこと。我らはその理念に従うと決めた。そのために、この時代全ての人間の敵になると決めたのだ！」

なん、か——わたし、もう——

「話はこのままでだ。異論あらば、首を懸けて王の御前で語るがいい！」
めちやくちや腹が立つ——!!!

「た——あつつつ——」

再びベデイヴィエル卿に揮われた宝剣を、割り込んだわたしは、盾で真つ向から受け止めた。

「なに!？」

「マシユ!？」

「完全に怒り心頭だ！ サー・ランスロット！ 貴方、いい加減にしろ！」

「い、いい加減にしろ……？ まさか、私は叱られているのか!？」

「いや、憤慨しているんだ！ それでも貴方、アーサー王が最も敬愛した騎士なのか!? 王に疑いがあるなら糾す！ 王に間違いがあるならこれと戦う！ それが貴方の騎士道のはず！ それが貴方だけに託された役割だっただろうがッ！」

「待て。待つんだ、待ちなさい！ 親を親とも思わない口ぶり、片目を隠す髪、君はまさか——！」

「ここに至って言葉は不要！ 改めて、卿に決闘を申し込む！」

「先輩っ」

リカの声は驚きでも心配でもなく、明るいもの。よくぞ言った、と快哉を貰った気さえしたし、きつとそれで正しい。

見ているね、リカ。あなたの先輩の勇姿を。

「わたしはマシユ・キリエライト！ 授かりし英霊ギヤラハッドの名と盾に懸けて、わたしが、円卓の不浄を断つ!!」

キヤメロット18

わたしは先手を打ってランスロット卿に力いっぱい盾をぶつけた。ランスロット卿はたたらを踏んだけれどすぐさま立て直して宝剣を構えた。

「この肉体より骨格に響く重撃……！ ギヤラハッドでしかありえない！ こんなことが……!?」

「ありうるんだよ、こんなことも!! ——確かにわたしは『彼』本人ではなく、力でも強さでも『彼』には及びません。ですが！ 今この時だけは、わたしたちの心は一つです！」

ランスロット卿が振り下ろした宝剣を、わたしは盾で受け止めた。そして、接触の瞬間狙いの魔力防御を発動した。防ぐ力を応用して宝剣を弾き飛ばした。

過去のオーダーで戦ってきた剣士ならこの防御で隙を生じるが、そこはさすがサー・ランスロット、宝剣を両腕のバネだけで立て直して再び斬撃をくり出してきた。それも、通常の一撃の時間だけで同時に三撃も。

ランスロット卿は、盾がある限り正面激突は不利と思ってか、わたしの左側面に回り込んだ。

わたしはすぐさま盾を左手に持ち替えて宝剣の斬撃を受けた。そして、競り合いに持ち込まれる前に両手で盾をちゃんと握った。

ランスロット卿はあらゆる角度からヒットアンドアウェイをくり返す。

わたしはその全ての剣戟を的確に盾で防ぐ——防いでいる。

そういうことなら、次で決める——!

猛進してくるランスロット卿に向けて、わたしはあえて大きく一歩踏み出した。

——『いいスペルを考えてあげる』——

——『カルデアはアナタにも意味のある名前でしょう?』——

はい、オルガマリー所長。その通りです。わたしはこの人たちとは違う。わたしが歴史に、この星に遺したいのは、「人類の価値」ではなく「人類そのもの」なのです。

「仮想展開／ロード人理の礎!!」

わたしのありつただけの魔力で展開した守護障壁を、アロンダイトの刀身は破れなかった。ランスロット卿の剣では押し通れなかった。

守護障壁に真っ向からぶつかったランスロット卿は大幅な後退を余儀なくされ、そして、砂の大地に膝を屈した。

「目が覚めた!? これでも分からないなら次は白亜の城をぶつけるからな!」

「そこまで!?!」

そこまでしますとも、ベデイヴィエール卿。いいや、むしろそこまですらせろ、とわたしに融けたギヤラハッドの断片は意気軒昂。

ランスロット卿はというと、ついに宝剣を霊体化させた。自ら武器を手放したのだ。

「……………君の言う通りだ、マシユ。円卓の騎士と戦い、敗れたのだ。もはや私は王の騎士を名乗れまい。私の愚かさが晴れたわけではないが、君たちと戦う理由は、私にはなくなった」

「ようやく素直になったのね。ランスロットってば、どう見ても嫌々戦ってるんだもの。ずばり、本当はそう言いたくてしようがなくて、マシユとの決闘をダシにしたと見たわ!」

「私は全力で剣を揮ったのだが——」

「ダウト。槍ならともかく、剣で本気出されたんなら『僕』じゃ勝てなかった。『僕』は家庭の事情でちゃんとした剣術を修めなかったから。そうだよね、お父さん!?!」

「いや、私はいつでも教える気で……………すまない、その口調と呼び方は心臓に悪い。心の準備ができていないとショック死しかねない」

いつそショック死してしまえ——とまでギヤラハッドは言いたがっているけれど、言わないであげよう。今のランスロット卿はそこまで哀れを催す体たらくだから。

「ふむ。敵意も殺意も綺麗さっぱり消え失せた。ランスロット殿はも

はや敵にあらず、だな。それで、どうする？ マシユ、リカ。捕らえて聖都に入る、あるいは山の民に預ける、という手もあるが？」

リカをふり返った。リカは、微笑んで頷いた。

「先輩のいいように」

ギヤラハッドとランスロット卿が親子であることは、この子も知っている。

親子の問題。だから彼の息子の魂を預かったわたしの好きにしている、と。

わたしは盾を砂に立てて一度離し、左の鞘から剣を抜いてランスロット卿に突きつけた。

「敗北した以上、あなたの命は当方で処断します。サー・ランスロット。これよりは捕虜として我々に従って戦っていただきます」

「いいのか？ 私の生前の異名を知らないはずがない」

「ええ。完璧な騎士道の体現者でありながら、愛のために王と同胞に反旗を翻した『裏切りの騎士』。ですが、それが何か問題ですか？ こちらは猫の手も借りたいぐらい切羽詰まってるんです。あんまりグダグダ言っていると本当にお城をぶつけますよ」

「駄目押し!？」

「……分かった。だがその前に、君たちをある場所に案内させてほしい。私が消えればその場所を知る者はいなくなる。それは何としても避けたい」

真剣なまなざしだった。

いくらギヤラハッドと融合したとはいえ、わたしみたいな小娘には出せない気迫と貫禄に——負けた。

移動に半日費やしたので、「目的地」に到着する頃には空が暮れなずんでいた。

しかし、そんなことは些末事だ。

わたしたちはそこに広がる光景に立ち尽くすしかなかった。

山間に隠れて敷かれた野营地——いいえ、ここまで生活体制が整っているならこれはもう「集落」だ。山の民、砂漠の民、聖地の人々が分け隔てなく、今日を生きるために皆でこの集落を回している。

「ランスロット——貴方、難民をここに匿っていたのですか!？」

「聖抜に選ばれなかった人々をどうするかは私の自由だ。王は処罰しろ、とは命じなかった。それに王命に背いて放浪する騎士たちも少なくなかった。彼らには難民の警備をしてもらっていた。要は私の私設軍隊だ」

言い切った。私設と。しかも軍隊と。詭弁フルコース、立派に反逆罪だ。

「素敵じゃないの！ ほらマシユ！ ヘビーな感想、言っただけで！」

「穀潰し！ 顔に似合わずやればできるじゃないの、お父さん！」

「だから、その口調と呼び方はやめなさいと——」

集落の人々さえ遠巻きに見ていたわたしたちに、ただ一人だけ近づいてきた物好きな美女がい、た——

「やつと到着かい？ いやはやすいぶんと待たされた！」

あたまが、まっしろに、なった。

「ダ・ヴィンチちゃん——？」

「ハアイ、ナイスリアクション！ 万能の人とはこの私、レオナルド・

ダ・ヴィンチ、何日かぶりに登場さ♪ おや、再会のハグはなし？

むー、期待してたんだけどなー？」

「ご、ごめんなさいでした、すぐにっ」

「フオウ！」

リカがあたふたしてからダ・ヴィンチちゃんの胸にぽふんと飛び込んだ。フオウさんもだ。

「まるで私がねだつたみたいで体裁が悪いけど嬉しいからよしよしよー！ でもリカ君は転嫁魔術を発動しないよーに。これでもきちんとして回復に専念して、晴れて床上げしたから」

「す、すいません！ そんなつもりじゃ……」

「うん、分かっている。冗談7、牽制3ってとこ。——顔つきが変わった

ね。見れば分かるよ。私がない間によほどのカルチャーショックがあったのかい？」

「——はい。ショック、でした。今日までであったこと、ぜんぶ」

ようやく我に返ったわたしは、急いでカルデアに通信をオープンした。

ダ・ヴィンチちゃんが生きていた、無事だった！ 早くドクター・ロマンに知らせないと！

「ドクター！ ドクター・ロマン！ 応答願います！ 大至急！」

《わっ、びつくりした。マシユ？ ああ、砂漠地帯から戻ってきたんだね。無事で何よりだ。ダ・ヴィンチちゃんの姿も見えるし。世は全て事もなし——ってなあにいいいいいい！？ ダ・ヴィンチちゃんだとおおおおお!!?》

「やあロマーニ、見苦しいリアクションありがとう！ 帰ったら新技のアストロノーツホームランを試させてくれたまえ！」

《……………まあ、それぐらいは許容範囲。別にレオナルドがいなくなっただって、ボクがものすごく困るだけだしね。別にね》

「男の強がりには可愛くないぞ？」

《強がってないですー。人手が戻ってきて嬉しいだけですー》

ダ・ヴィンチちゃんとドクターの日常的なやりとりを聞いていると、なんだか込み上げるものがあって、わたしもリカとフオウさんに続いてハグの輪に、えいや、と参加した。

《でも真面目な話、どうやって生き延びたんだい？ どう考えても助かるとは思えなかったけど》

「そこは私も予想外の展開だった。まさか、敵の先頭を走っていた騎士が突進してきて、あろうことか私を庇ったなんて話、信じられるかい？」

ランスロット卿がダ・ヴィンチちゃんを助けてくれた？

「いや、遠目に見ても美女だったので、つい」

「それはランスロットらしい。美女であれば見境なしですものね、貴方は」

知ってる。わたしの中のギャラハッドが頭を抱えている。これが

円卓の騎士の日常会話だったんだと。うん、実にスレスレですね。生温かくスルーさせていただきます。

おっと、わたしまで吊られて頭を抱えている場合じゃない。

「ドクター。聖槍の正体が判明しました。今からレポートを送信します」

《了解、すぐに目を通す。その辺が判明したのはやっぱりアトラス院で?》

「はい。調査に当たってホー……ムラン級の当たり情報を引ききました」

ドクターに後ろめたいのが正直なところだけど、カルデアのあれこれを調べたことはホームズさんに頼まれた通り黙っておく。ドクターが「知っていて黙っている」ことが善意からか悪意からか判明するまでは――

「ほう、聖槍の正体! それは面白そうだ。私にも教えてくれるね?」
もちろんですとも。

ダ・ヴィンチちゃんにアトラス院で知ったことを伝えるのはわたしが。カルデアに聖槍についてのレポートをしたためるのはリカが。二人で分担してカルデアのツートップに真相を報告した。

キヤメロット19

「——以上です。お分かりですか？　ダ・ヴィンチちゃん」

「分かったとも。その方法なら魔術王による人理焼却にも耐えられる。それが獅子王の目的だったんだね」

「……そうだ。その理念自体は正しいものであると、我々は思っていた」

ベデイヴィエル卿は口を嚙むばかりだ。気まずそうな表情から、彼が何か言いたいことがあるのは察せられた。そこを、三蔵さんが促した。

「ベデイヴィエルさん、言っているのよ。ランスロットさんは間違ってたって」

「い、いえ。私はそこまで追い打ちをかけられない、というか……」

「優しいのね。そういう人大好き。じゃあ代わりにあたしが言うわ。」

——獅子王の理念は間違ってる。人々から選択の余地を奪うのは良くないことよ。でも円卓の人たちはみんな、それを受け入れるために己を殺している」

リカの琥珀色の両目が悲しみに染まる。

「……皆さん、本当は間違ってるって王様に言いたいのに、我慢して黙って……」

「ええ、リカ。半分は正しい。騎士たちはみんなが我慢してるの。言うことを、でなく、間違いだ、と思いたい気持ちで心の底へ底へと押し殺している。そうまでするのは、”アーサー王”を信じているから。でも今の王様はもう別人よ」

三蔵さんの言うことは的を射ている。あの白亜の都市におわす王は、ベデイヴィエル卿やランスロット卿、誰よりギヤラハッドが信じる騎士王ではない。わたしの胸に痛みを訴えるほどに、ギヤラハッドは強くそれを確信している。

だとしたら、何が、あの高潔な騎士王を獅子王なんて非道の君主に変えてしまったの？

「ふむ。アーサー王がなぜ獅子王になったのか、それは私にも説明が

できる」

「ダ・ヴィンチちゃんにも?」

「フオ?」

ダ・ヴィンチちゃん曰く——属性変化。

もともと地に生きる伝説だったアーサー王は、聖槍を長く持ち過ぎた結果、天に座する伝説になった。

例えば、人の理性であれば、どんな理想都市を目指そうと生活を向上させる理念が含まれる。でも彼女はそれを考えもしなかった。「永遠に残る人間世界」を維持するために、人間らしい幸福を全て否定した。

「彼女は本気でこう考えている。『人間は価値あるものだ』『だが人命に価値はない』と」

——冷徹を通り越した、超越者の視点。

《つまり、その特異点に現れたアーサー王は英霊ではなく神霊、女神のたぐい……》

でも、どうして? 獅子王の最終目的はアーサー王の理想とかけ離れている。アーサー王が今の理念、今の境地に至ったのはどういった経緯でなの?

《その状況はやバ過ぎる! 人理に含まれない人間世界を作るだつて!?! そんなことになれば、ソロモンを斃して人理焼却を無かったことにしても、人類史はメチャクチャになる! 何としても止めないと……!》

ランスロット卿が、自分が獅子王に謁見してその場で反旗を翻すことを提案してくれたが、ダ・ヴィンチちゃんが却下した。ギフトを受けた騎士は獅子王に逆らった瞬間に燃え尽きるだろうからと。

こうなると、ハサンさんたちと合流して、正面から聖都を攻めるしかない。なのに、山の民側の兵力ではどうしても聖都軍と渡り合えない。兵力を結集したところで、獅子王の裁きの光が落ちてきたらそれで終わりだ。

「今のままで戦うのは自爆行為よ。自爆、ダメ、絶対。あたしはともかく、あたしの前でそういうコトすると泣いちゃうから」

「純粋な兵力不足……ですが、もう集められる余力はどこにもない……」

「え？ エジプトのファラオさまたち入れても足りないですか？」

……リカ。今、何て言った？

それって、オジマンディアス王に協力を要請するってこと!?

「ありえません！ あの傲岸不遜王が我々に手を貸すなど！」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさいっ！ 間違えました、てっきり最初から頭数に入ってるって勘違いしてました！ 聞かなかったことにしてください！」

「——いや。盲点だったが、不可能な話ではない」

「ふえ？」

「ランスロット卿？」

「エジプトの王は益のある交渉を無碍にはしない。我々には共闘するに値する価値があると、直接示してやればいい。そうすれば奴を味方に引き入れられる」

「へえ。それはまた単純なファラオだね」

「単純だがシビアとも言える。勝算のあるほうに付くとはそういうことだ」

「……それ、具体的には、あたしたちは何をしたらいいんですか……？」

《そこはそれ、思いつきり強がるんだよ。『こっちに負ける要素はないぞ』と売り込むんだ。諭えると、企業が提携先で『この新商品は必ず大ヒットします！』とプレゼンする要領さ。リカ君ならこの諭えのほうに分かりやすいかな》

不安げだったリカの表情が一瞬にして冴え冴えとしたものに替わった。

「ドクター、ありがとうございます。その理解でいいなら、よく、分かりました」

次のリカの顔は、晴れ晴れとした微笑み。その微笑みを湛えたまま、リカはわたしを見た。

「先輩は、いいですか？」

可愛い後輩のこんな笑顔を見せられてはNOなんて言えっこない。わたしは賛成、と頷いた。

最終的にはベディヴィエール卿も納得してくださった。満場一致である。

——そしていざ、ピラミッドに居を据える太陽王との二度目の謁見。

「して、何用だ、異邦の娘たち。余に首を預けに来たか、あるいは情けを乞いに来たか。どちらでもよいぞ？ 望むままに殺してやろう」

「目的は先触れがすでに伝えた通りです。オジマンディアス王、わたしたちと一緒に、獅子王と戦ってください」

言った。真っ向から。これでもう後戻りはできない。するつもりもない。

「なんと！ あれは本気であつたのか。余ともあろう者が真偽を見抜けぬとは。腹を抱えて笑った挙句焼き捨てたわ！」

大爆笑された。

——もうこのファラオにはお城をぶつけてやったほうが早い気がしてきたぞ。

わたしの不穏な考えを読ん……ではいるまいが、三蔵さんがオジマンディアス王に進言した。

「ちよつと。それはないんじゃない、オジマンディアス王。馬鹿にするのも大概にしなさい。あたしはともかく、マシユもリカも本気なんだから」

オジマンディアス王が玉座からわたしたちを、本当に何の興味もなさげに、見下ろした。おそらく今のオジマンディアス王に映るわたしは、せいぜい砂の一粒に過ぎない。

「この大神殿の空気は聖都と同じ。ここもシエルターになりうるのでしょうか？ 獅子王と戦えば共倒れになるから、ううん、獅子王には勝てないから！ 貴方は自分の国の民たちを神殿に閉じ込めようとし

ている！ 国の人たちの生活を一番に考えながら、一番である民の未来を閉ざそうとしている！ この諦めを捨てる道を彼女たちは示しに来たのに、何で素直に『いいよ』って言えないの！」

「たわけ！ 獅子王を斃したところで何があるろう。人理焼却により世界は燃え尽きる。余は余の権限で余の民を救うまで！ 他のモノなど知ったことではない！」

「それは、半分くらい、嘘です」

震えた声だったけど、明瞭な否定だった。——リカ？ あなた、何を……

「だってあなたは、あたしたちが来なかったら、自分で世界を救おうとしました」

「——」

太陽王、絶句。

歴史的偉業だ。ちよつと、気が動転して、わたしたち全員まで絶句してしまいうくらいには。

未だ言語が復活しないオジマンディアス王に、リカはさらなる追い打ちをかけた。

「あなたは神王と呼ばれたファラオです。なら、あなたはあなたの世を統べるために、あらゆる敵を焼き尽くして、遍く全てを救おうとする。それを、世界を救う戦いと言わないで何と言うのでしょうか」

リカの追及が真実なら、この太陽王は何てめんどくさい性格なのか。支配する前にまず救わないとその世界には君臨しないなんて——めんどくさいくらいに律儀な王様じゃないの。

「ぬかしおる。小娘、余を何者と心得るか」

リカは笑つてとどめを刺した。

「あなたは、あなたですとも」

オジマンディアス王が、玉座を、立った。

「人類最後のマスターよ。余が救世主であるとは、なかなか皮肉が利いた弁舌であった」

階を降りてくるオジマンディアス王の手に、聖杯が顕れる。

「褒美として、それを是として問いを返してやろう。余が世界を救う

ためには、貴様の死が必要だと言ったなら」

「死にます。あたしなんかでいいのなら」

「そうか——そうか。よい！ 特に赦す！ ゆえに試練は一度のみとしてやろう！ 獅子王と戦う資格と、余が肩を並べるに足る勇者であるか否か、この一度で見極めてやろうぞ！」

オジマンディアス王は自身の手を装飾品の突起で傷つけ、流れた血を聖杯に垂らすと、滴る血を口に落として飲み下した。

「聖杯に宿りし魔神の陰よ。魔神アモンなる偽の神、是に、正しき名を与える。我が大神殿にて祀る正しき神が一柱。其の名、大神アモン・ラーである!!」

バキン、バキン、とルービックキューブの色目が合わさっていくように、オジマンディアス王を覆って魔神柱が組み上がっていく。

金属的なデザインをした刺々しい魔神柱が、吼えた。

彼を倒さなければ前には進めない。太陽王はそのためにあの姿になったのだ。

だから彼が一度きりと言ったこのチャンスを掴んでみせる。わたしたちは獅子王を踏破できるだけの、あなたが肩を並べるに相応しい勇者なんだと証明する。

この魔神柱アモン・ラーの撃破を以て！

キヤメロット20

この戦いでわたしたちを苦しめたのは、魔神柱が振り撒く金粉だった。金粉の多い地帯にうっかり踏み込むと、機雷のように爆発を起す。

もう何度盾ごとボディアタックを仕掛けたか分からなくなってきた。

疲労困憊なのはわたしだけではない。ダ・ヴィンチちゃんも、藤太さんも三蔵さんも。この戦いはキリがない。

『メエエリイアメン……い！ ウセルアマトラー……い！』

魔神柱は健在だ。せっかくダメージを与えても瞬く間に修復されてしまう。この大複合神殿が魔神柱に魔力供給を延々と行っているから。

——でも、だから、何よ。

——わたしの後ろにはリカがいる。後輩にかっこわるい先輩の背中なんて見せられない。

未だに慣れないけれど、盾が駄目なら剣で行く。わたしは左腰に帯びた剣を抜いた。

わたしは金粉の機雷の爆発を掻い潜って魔神柱へと駆け、眼球に当たる突起物に斬りかかった。

魔神柱戦で最も厄介なのは邪眼による攻撃。せめて一つでも潰せれば。魔神柱に近づくほどに漂う金粉は濃くなって、爆発に巻かれるリスクも上がるけど……！

「Anfun^{セツ}g^ト」

どこからか吹き上げた風によって、機雷金粉が一斉に魔神柱へと吹き戻って、魔神柱そのものを巻き込んで爆発した。堅強な巨体に亀裂がいくつも生じた。

あの亀裂に剣を合わせて叩き込めば、あるいは！

「おりゃあああああ!!」

剣を全力で振り下ろした。——やった！ 邪眼一つ、破碎成功だ！

……けれど一つ、たかが一つだ。

金粉の爆発を掻い潜ったせいで、剣を納めるための鞘とそれを繋ぐベルトが切れてしまった。わたしは一度剣を盾の収納スペースに押し込んだ。

藤太さんが、魔神柱の破損箇所を狙って矢を射ては、少しずつ魔神柱の表皮に傷を増やしていくけれど、やはり複合大神殿の魔力供給で魔神柱は徐々に回復してしまう。どうすればいいのか――

「――ごめんなさい。謝ります、オジマンディアス王。さっきの、あたしが悪かったです」

三蔵、さん？ 何ゆえそこで反省するのでしょうか。

「だからこそ、本気で行きます。天竺では如来様に『もうやんなよ、やりすぎだから』と怒られて封印した業わざですが。こんな醜いカタチになってまであたしたちを見定めようとする、その気持ちに応えます」
三蔵さんは錫杖を床に突いて鳴らしながら読経を始めた。

――これあれば、かれあり。これ生じれば、かれ生ず。

――これなければ、かれなし。これ滅すれば、かれ滅す。

――試し打つは五行山、鍛えに鍛えた我が法輪、一念回向に縁起善し。

「いぎ揮わん、如来の掌！ まずはおたしが、まるつと世界を救ってあげる！ 五行山・釈迦如来掌!!」

その瞬間だけ、三蔵さんの手はまぎれもなく、釈迦の掌だった。

掌底と蹴りの連打が魔神柱に炸裂し、トドメとばかりに覚者掌底が魔神柱を床から剥がす威力で吹っ飛ばした。

魔神柱は根元から折れて玉座の間の壁にめり込んだ。

「魔神柱撃破！ ですが、これって――」

「しまった、やりすぎちゃった!?! あわわ、オジマンディアス王――！」

「呼んだか?」

……何ですと?」

「あまりいいものではないな。魔神柱化というものは」

「フオーウ！」

「あつさり戻れるもの、なんですね」

「当然である。だがよくぞ戦った。その力、神を気取る獅子王を相手にするに相応しい！」

無事復活したオジマンディアス王は、それはもう堂々と玉座に座り直された。

「さて。何の話をしていたのだったか」

「共同戦線の話です、フアラオ」

「……分かっておる。戦いのあとでは気まづかろうと、余なりの配慮だ。流さぬか。汝らは力を示した。であれば、余も無下には扱えぬ」

オジマンディアス王は無造作に何かを投げた。慌ててキャッチしたそれは、聖杯だった。

「褒美だ。カルデアのマスターにくれてやる。それに足るだけの胸の空く一幕であった」

「切り札である聖杯を手放した。それは、我々の聖都攻略に協力する、という意味でいいのかな？」

「皆まで言わせるな、美しい女よ。すでに外の守護獣どもは引き上げさせた。お前たちには余の神獣兵団を貸し出そう」

「ありがとう、オジマンディアス王！ 本人が来てくれないのは残念だけど！」

「フン。そこは戦場での見せ場を奪われなくて助かった、と喜んでおけ」

「ありがとうございます。これなら初代ハサンさんにもいい報告ができそうです」

すると突然、オジマンディアス王が忌々しげに顔を歪めた。

「初代ハサンと言ったか？ それは死神のごとき姿の剣士のことか？

貴様ら、奴の助言で我が砂漠を訪れたと？」

「そうよ。ガイコツの偉い人が砂漠に行けって。そうすればガウエイン卿の相手をしてくれるって」

「——それは無駄なことをしたな。マシユ、リカ」

ええ？ いまオジマンディアス王、わたしたちを名前で呼んだ？

オジマンディアス王はニタリと笑って語った。

——オジマンディアス王が砂漠を広げて山の民と敵対した直後の話。玉座にいた彼を、初代ハサンさんは背後から襲って彼の首を刎ねた……

ああ、そうだ！ 初めてこの複合神殿にお邪魔した時の、オジマンディアス王の頭が二度ほど首からずり落ちかけたあの一件。それはそういう理由でだったんだわ。

「余の神殿での戦いでなければ、この首、とうに落ちていたわ。それから傷が癒えるまでは余自らが動くことはできなかつた。まったく……奴が協力していると知っていれば、初めから手を貸していた。先に話しておれば、貴様らは余と戦わずとも済んだというわけだ」

「そうね。でも、戦ってよかつたでしよ？」

「それこそ皆まで言わせるな。やつてみなければ分からないこともあるなど、神々の王としては、照れくさいにも程があるう？」

フォウさんを抱っこしていたリカが、頭に果物でも降ってきたようにぼかんと、オジマンディアス王を見上げた。

無事にオジマンディアス王の兵力を借りることができたことで、わたしたちは山の民の東の村——呪腕のハサンさんたちの村への帰路に就いた。

夜の砂漠を越えて、早朝の荒野を越えて、昼の大地を越えて、最短距離で東の村へ到着！ 途中でドクター・ロマンとの通信も回復した。

《ギリギリ決戦前に間に合ったね》

東の村に着いたわたしたちを一番に迎えてくださったのは、先行していたベディヴィエール卿だ。

わたしたちの姿を認めて穏やかに細まった、常盤色の瞳。

「お帰り、お待ちしております。お疲れ様です。マシユ、リカさん。オジマンディアス王への協力要請、万事上手くいったと聞いていま

す。こちらからも良い報告がありますよ」

山の民のほうでも何か動きがあったのだろうか？

その疑問については、東の村に増した活気の原因を含めて、静謐さんが答えてくださった。

「この村には様々な村の代表が集まっていますので。聖都攻略に備えて連携を取っているところです。我々が集めた7000。それに、水面下で立ち上がった聖地の民が2000。連日の忙しさです。まさかこんな人が集まるなんて、思っていなかったのよ」

『私を嘆きの壁で助けてくれた人がいる』『俺たちを聖都で逃がしてくれた人がいる』、果ては『砂漠の入口で人間だと言ってくれた』だどさ」

わたしは絶句した。最後のそれは、わたしがリカに転嫁魔術を使わせないと必死になっていた時期に、打算から助けた人たちのことに違いない。心からの厚意、本心の善意ではなかった。

「その連中がいるから仲間になってもいい、なんて話じゃない。ただ、それで気が変わったのだとか。助ける義理のない異邦人に助けられた者たちは、いつまでも疑問だったのだろう。『なぜあの異邦人は我々を見捨てなかったのか？』とな」

「――、そうか。それは、私にはない発想だ」

モナ・リザの微笑みは普段以上に眩いそれだ。ダ・ヴィンチちゃんはおわたしがあの場で起こした行動の動機を知っているはずなのに。

「では拙者は台所で一仕事してくるか！今夜は特によく龍神様に頼むでしょう」

するとそこで、リカがわたしを見やった。聞けば、藤太さんと一緒に食事の支度をしていいか、とのこと。リカの手料理が食べられなら願ってもない。わたしは二つ返事でOKした。

リカはほっとした顔をして、肩にフォウさんを乗せたまま、藤太さんを追いかけて行った。

――その夜に出来上がった食事はデザート付きだった。

三蔵さんのおにぎり炒飯だけじゃなくて、藤太さんが持ってきた

大鍋にはいっぱい白いプディング——リカ手作りのライスプディングが盛ってあった。

わたしはさっそく実食した。米本来の甘さと、白くまろやかなプディングの下に隠れていた野苺ソースの酸っぱさがちょうどよいバランスで舌に広がった。

——どうしよう、すごく美味しい。独り占めしちやいたいくらいに。

ルシユド君はじめとする子供たちが喜んで集まらなければ、本当に鍋ごと持って逃げたかもしれない。

お米でもデザートが作れちゃうなんて、リカはスイーツ作りが本当に得意なんだなあ。

「ところで藤太さん。リカ本人はどちらに？」

「ん？ ああ、ぷりんが出来上がったから、ランスロット殿に用があると言って出て行ってな。邪魔をするのも野暮であったのでな、快く送り出した。そういうことだから、マシユはこの甘味を味わいながらリカの帰りを待つことを勧めるぞ。あとでリカがきつとおぬしにとつてもっと喜ばしい物を持って戻るだろうからな」

釈然としない。でもリカの手で作られたライスプディングは美味しいから、先輩は大人しく帰りを待っていてあげましょう。

キヤメロット21

「Interlude」

東の山の民の村。その外れに構えた幕営の中。

ダ・ヴェインチは明日の進軍の打合せを終えた所で、別のことに思いを致して溜息をついた。

「いかがされた？ 何か問題点があるようなら指摘していただきたい」

「いいや、戦略は至って現実的で妥当だ。別のことで、ちよつと引つかりがあっただけさ。あ、でもこれ、士気に関わるのかな？ その辺には疎いな私、芸術家だから。サー・ランスロット。もし軍を率いる将が死に急いでいたら、兵としてどう思う？」

「……申し訳ない。もう少し具体的に説明していただけると」

「じゃあ込み入った話をしよう。我々の旗印、リカこと藤丸立香について」

——オジマンディアス王との二度目の謁見。ダ・ヴェインチはリカとオジマンディアス王のやりとりを一部始終、ランスロットに伝えた。

「世界を救えるなら己の死すら厭わない。あのいたいけな少女がそれほど覚悟を裡に秘めていたとは——」

「そこが違和感なんだよね。死んでもいい。笑ってそう言える。実に美しい精神性だ。しかし私は納得が行かない。騙し絵を見せられている気分だ。少なくともあの子の『死んでもいい』は『覚悟』じゃあない、と私は踏んでいる。リカ君は——」

ダ・ヴェインチはそこで言葉を止めた。テントの布が不自然に揺れたからだ。

どうやら何者かがこの幕営に忍び込もうとしているらしい。

ランスロットも気づいたようで、宝剣の柄に手をかけた。

「ぶわっ。こんばんは、ダ・ヴェインチちゃん。ランスロットさん」

「ソフオウ、フオーウっ」

布をめくって現れたのは、リカとフオーウだった。リカはおつかいの赤ずきんよろしくマントを頭から被っている。

「……、——何でそんなところから入って来たのかな？ キミは」

「いえ、その、正面から入ろうとしたんですが、見張りの騎士さんたちに村の子だと勘違いされて、通してもらえなくて……すみません、こっそり回り込みました」

「フオフオウ！」

「……申し訳ない。部下が失礼をしました」

「いえ、まあ。あたしが存在感薄いのが悪いんですから。というわけで、これ、差し入れの焼きおにぎりです。よかったらどうぞ」

リカは笑顔でランチボックスを差し出した。

——夜食を届けるためだけに間諜の真似事をして、下手な誤解を受けたら大変な事態になっていたのに、これっぽっちも危機感を持たない、人類最後のマスター。

“天才のキミには分からないだろうけど、『普通』って時々、『天才』や『特別』よりずっと怖いよ？”

「あの……？」

「かたじけない、レディ。有難く頂きます」

「はいっ。えっと、それと、ランスロットさんにちよつと教えてほしいことがあるんですけど、お時間いいですか？」

「私で答えられることなら喜んで」

リカは表情を輝かせると、マントを脱いだ。

カルデアに帰還したのち、ダ・ヴィンチはロマニに語る。あの発想はなかった。

それはもう豪快にバツサリと。リカの亜麻色の長髪は切り落とされていた。

「髪で剣のベルトを編むやり方、教えてください」

「Interlude out……」

わたしは、ルシュド君を寝かしつけてから、その民家を出て胸に手

を当てた。——ああ、温かい。体温とは違うぬくもりが心地よい。

「ちゃんとお礼を言っておきたくて。あのとき、ボクとお母さんを助けてくれてありがとう」

「お母さんは言った。ボクのことを『私の人生』^{いのち}って。ならボクは長生きしないといけない。だってボクが生きてれば、それだけお母さんの人生は続くんだから」

——子どもとは、命とは、ただ生きているだけで、あんなにも強く、尊い。

特異点では悲しいことばかり起きると思っていたけれど、同じくらい良いこともあるものなのね。

さて。藤太さんに言われたように、あとはリカを待つだけだ。

藤太さんは、わたしにとって喜ばしい物を、と言っていた。何であれ、リカがわたしに贈り物でもこしらえているんなら、それだけでとても胸が弾む。

……と、思ってからすでに1時間が経過した。

さすがに心配になってきた。しかもよくよく思い出せば、リカが訪ねたらしき相手はあのランスロット卿。美女だからつい、という理由でダ・ヴィンチちゃんを助けてしまった節操なしだ——と、10分ほど前から、わたしの中のギャラハッドが力説している。

迎えに行くか、信じて待ち続けるか。

「せんぱいっ!!」

待ってて正解でした、藤太さん。ありがとうございます。

リカが戻ってきた。わたしのために用意した何かしらの品と一緒に。聖都との決戦前夜にこれほどわたしを奮い立たせるものもない。わたしの後輩はよく分かっている。いぎ!

「おかえりなさい、リカ。どうし——」

絶句しかけて、ガッツで踏みとどまった。

「どうしたの、リカ!? その髪!」

無い。腰まで届く亜麻色のベリーロングヘアが、肩までしかない！
え、散髪？ このタイミングで？

「あのっ、あ、あたし、先輩にあげたいもの、が、あつて」
無くなったかと思われた亜麻色の髪は、リカの手の中にあつた。亜麻色の髪で編んだ剣帯となつて。

この時ばかりは、ギャラハットの懐古を自分の回顧であるかのように感じざるをえなかつた。

——デインドランもギャラハットに同じことをした。穢れなき乙女の最も大切な物で編んだ剣帯が必要だと言われて、彼女は逡巡なく自分の金の髪を切り落としたのだ。

わたしはギャラハットじゃないけど、あの子は昔のデインドランと同じように、わたしのために何かしたくて、結果として大切な髪を引き換えにわたしのための贈り物を用意してくれた。

心が弾まないわけがない。

あと5メートル。それでリカとの距離はゼロに。

それなのに——リカが急に足を止めた。

気が逸つてしまつて、わたしはついリカへの呼びかけに急かす色を含めた。

「リカ？ ね、どうしたの？」

リカは亜麻色のベルトを両手で胸に抱いた。どんどん俯いていくから、表情が見えなくなつちやう。どうしてそばに来てくれないの？
ねえ、リカ。どうしてそんなふうに顔を蒼ざめさせていくの？

「ごめんなさい……っ！」

……え？

リカは涙を散らして、勢いよく踵を返して、元来た道を走つて行つてしまつた。

一言。落ち込んだ。

訂正。ものすごく、落ち込んだ。

——ねえリカ、何で？

答えの出ない疑問が、くり返し浮かんでは沈む。

わたしは灯りを避けて、こうして一人、村外れの丘で膝を抱いて蹲っていた。

「フォウ……」

「すみません、フォウさん。今はちよつとだけ、静かにしてほしいかも、です」

心配してすり寄ってくれたフォウさんに対してさえ、この体たらくなのだから――

近づいてくる足音の主に対しては、もつとつっけんどんになるのもしょうがない。

「何さ。今なら傷心に付け込んで仲良くできるとでも思った？ お父さん」

だって、他でもないランスロット卿なのだから。

今さらだが、いくらリカでも剣帯の編み方なんてコアな知識があるとは思いいにくい。十中八九、ランスロット卿の手ほどきだろう。あるいは入れ知恵かもしれない。

「だからその口調と呼び方は……いや、今はいい。君に渡す物があった来たんだ、マシユ」

ランスロット卿はわたしの横にしゃがんで、わたしの手の平に何かを握らせた。

これは……ミサンガ？ 亜麻色の糸で編んである……

「リカ殿が剣帯を編む前に練習で編んだものだ。本人は試作品のつもりだろうが。君に渡すのが一番いいと思ってな」

――あ。

そう、だ。この色はリカの髪の色。リカが持ち去ってしまった剣帯と同じ――

「彼女は剣帯を編みながら、何度も我々に尋ねたよ。『先輩、喜んでくれるでしょうか？』と。拒絶された君の気持ちは痛いほど分かる。だが彼女も、誰より君に、精一杯の気持ちを贈りたかったんだ」

「……分からない。分かりません。だったらどうして、その『精一杯の気持ちを込めた』品を、急に、目の前で持ち去ってしまうんです。ご

めんなさいって泣いて逃げて行っただんです。——欲しかった。わたし、あの子がわたしのための想って作った物なら、どんな物だって欲しかった！　なのに、どうして!」

亜麻色のミサンガを握って胸に押し当てた。

聖都から敗走した日に流し尽くしたと思っていた涙が、また、溢れては頬を伝って落ちた。

「真剣な想いであればこそ、それが反転した時の猜疑心と不安は名状しがたいほど大きくなる。想いの反転には理由がない。ただの弾みで起きるから厄介だ。『嫌がられるかもしれない』『迷惑かもしれない』『気持ち悪がられるかもしれない』——君に剣帯を渡す瞬間、ふと、リカ殿はそんなふう恐ろしくなったのだろう。いや、憶測でしかないが」

「拒絶なんてしない！　リカに貰って迷惑な物なんて一つもない。なののに……っ」

「君はそれを——その気持ちを、リカ殿に一度でも伝えたことがあるか？」

「……あ」

はつきりと言葉にしたこと、あったっけ？

リカはわたしを先輩と呼び慕ってくれて、いつだって後ろを付いて来てくれて。

わたしがふり返れば、あの子はちよつとはにかんだ顔でそこにおいてくれて。

だからわたしの考えていることなんて、伝えるまでもなく、リカは分かってくれていると思っていた。

「——わたしは、馬鹿だ」

言いたいことがあるならまず言え。その通りでした、モードレッド卿。わたしには致命的に言葉が足りてなかった。

「……今さらですが、ランスロット卿はどうして、わたしとリカの問題をここの確に理解できたのですか？」

「強いて言うならば、経験則かな。一度だけ、この身が焼けるほどの恋をした。だからその手の感情の移ろいだけは、確証を持って語るこ

ができる」

そういう言い方を、そんな素敵な笑顔でされたら、何も言い返せないじゃない。

アドバイスありがとうと言うべきなのだろうけど、言うのは癪だから、せめて。

不意を突いてランスロット卿の頬にキスをした。

「……………? ……!!!」

パニックになっているランスロット卿。ざまーみろ、です。いえ、端から見るとご褒美かもしれないけど、このくらいの意趣返しならいいよね、ギヤラハツド?

さあ。リカのもとへ行こう。わたしの可愛い可愛い後輩。たった一人のマイ・マスター。どうか間に合いますように。

キヤメロット22

わたしは村の外に構えた陣營の、将校用の天幕に飛び込んだ。どうしてリカを追った先がここだったか？ 先輩の勘です！

「ダ・ヴィンチちゃん！ リカはいますか!？」

「あちゃー。ランスロット卿め、予想通り足止めにならなかったな。うん、いるとも。リカ君ならその垂れ幕の中」

「あ……う……ごめんなさい、先輩……その、今、着替えてる途中で。服、着てなくて……」

何ですかその大変けしからん状況。

古代ローマで見たリカの、あの古傷だらけの肌が、余さず外気に晒されている。うなじも、背中も、乳房も、腹部も、太腿も、爪先も――

衣擦れの音が一つするたびに、リカが産まれたままの姿になっていつてる。そう思うだけで、よろしくないドキドキが加速する。

「ここまであちこち回って服がボロボロになっていたし、髪型を変えたようだから、思い切って衣替えしようってね。ちなみに型紙から縫製までこの天才が手ずから仕上げたから、クオリティーについては保証しよう！」

ダ・ヴィンチちゃんは典型的な「褒めてくれていいのよ？」ポーズだ。シャランラ、なんて効果音まで聞こえた気がした。

この様子ならリカの古傷を隠す新しい服を、ちゃんとオーダーメイドで仕立ててくれただろう。

やがて、「終わりました」とか細かい一言を置いて、リカが垂れ幕の中から出てきた。

お色直しをしたりリカを見て――言葉を、失った。

パステルピンクで統一した布地に、勲章用のリボンを所々にあしらったコスチューム。薄く化粧を施した顔は綻んだ小さな花のよう。

外見要素ももちろんだけど、一番の変化は、佇まいだ。

溢れんばかりに神聖なのに、それでいてほんのりと憂いを帯びてい

る。

諭えるなら、孵化したての天使。あるいは、外界に初めて出た精霊。
旗印。^{カリスマ}そう、それだ。そう表現するのが一番しっくりくる。この少女のためなら命を賭せると、本気で思わせるほどの存在感。

「なんか、あたしじゃないみたい」

ダ・ヴィンチちゃんが差し出した姿見を見たリカはほろ苦く笑った。それさえも、ティンカーベルが零す金粉のよう。

「そんなこと、ない。今のリカ、すごく綺麗」

やつと声が出せた。

勝てる。

こんな少女が旗を振って勇めと一言言ってくれば、わたしはどんな戦場にだって立てる。

「マシユのお墨付きなら問題ないね。よし、リカ君。その格好で兵士たちの最後の激励に回ろうじゃないか」

「はい。ダ・ヴィンチちゃん」

あ、とわたしが零すより早く、リカはダ・ヴィンチちゃんのもとへ行って、二人仲良くテントを出て行った。

「フォウ……」

あ、フォウさんは残られたんですね。

手を差し出すと、フォウさんはわたしの腕を登って肩に落ち着いて、頬ずり。

ちよつとだけ気持ちがあふわりした。

フォウさんを肩に、わたしはあてどなく夜の散歩に出た。

「ふん〜ふん。ぎや〜てえ〜、ら〜ら〜、は〜ら〜ぎや〜てえ〜」

丘の上から聴こえてきた鼻歌(?)。三蔵さんらしい。わたしは傾斜を登ってみた。

やっぱり、三蔵さんでした。

「あら、マシユ。リカとは別々に散歩？ あたしは日課の書き物よ。今日の出来事を巻物に記しているの。はい、隣ど〜ぞ。ちよつと怖い

けど、ここからの景色、綺麗よ」

では有難く。わたしは三蔵さんの横に腰を下ろした。

「……………」

えーと、三蔵さん？ 百面相しながら無言というのは、さすがにどう対応していいか困るといいますか。

「ああもう何か話しなさい！ 沈黙に耐えられないわ！」

「す、すみません！ では明日の抱負などいかがでしょう!？」

「抱負？ つまりガッツね！ それなら任せて。もうヤル気充実だから！ ——前に話した時はまだ、獅子王のこともオジマンディアス王のことも、よく知らなかった。どっちに味方するのか、どっちが正しいのか、あたしには決められなかった。だからキミたちの味方をすることにした。キミたちは一番分かりやすかったから」

「それでは……今は？」

「味方よ。もちろん。それと、あたしはあたしの信条にかけて獅子王と戦う。聖槍を壊す。——人間はみんな仏様への“道”を持っている。泥の中でも咲く花のように。誰に讃えられなくとも、美しい心を育てる人のように。それを摘み取る生き方を、あたしは認めない。だって、ドジばかりしてるから要らないなんて言われたら、あたし、仏様になれないもの。とっておきの仏罰で、獅子王の目を覚まさせるわ！」

——三蔵さんの言葉の数々を、リカにも聞かせてあげたかった。

仏式恐怖症になるくらいは無体をリカに働いたカルト教団とやらは断じて許さないけれど、やつぱり、みんなが怖いひとじゃない。

それに三蔵さんは仲間だし、好ましい人物だとも感じる。二人が仲良くなれたら、よかったのにな——

「Interlude」

その少女が現れた時、ベデイヴィエールは本気で、アヴァロンから妖精ヴィヴィアンが自分を迎えに現れたと思った。

「ベデイヴィエールさん？ どうかしました？」

少女の声を聴いたことでその認識は正された。

「リカさんでしたか。申し訳ない。あまりに美しくなられたもので、すぐに貴女だと気づけませんでした」

「今のあたしは、そんなに普段と違うのですか？」

「はい。いえ、リカさんは普段も可憐なレディですが、今の装いは可憐さの方向性が違うように見えます」

「そうなんですか」

リカは己の変貌を他人事のように言つて、ベデイヴィエルまでギリギリ届かない位置に腰を下ろして膝を抱えた。

その意図はベデイヴィエルにも伝わった。——そばにいては、手を伸ばして、触れて、傷を転嫁したくなる。治さないで、という約束を破ってしまう。だからリカは近づかない。

「さつき泣いていたのは、義手が痛いからですか？」

「……いえ。痛みではなく、私は、恐怖に涙していたのです。こうして誰にも見つからないよう、一人隠れて」

「先輩にも見られたくありませんか？」

「マシユには、特に。彼女は内なるギャラハッドの代行者ではなく、マシユ・キリエライトとして戦おうと奮闘しています。そんな彼女の妨げになるわけにはいきません。正直に言うと、ここに来たのがリカさんで安堵したくらいです。……ここまで喧騒が届きました。明日出陣する人々を激励して回っているのですね。もしや私にも、そのために？」

「いえ、特には。そもそもあたし、ベデイヴィエルさんがここにいることを知りませんでしたから。でも、結果的に激励するつもりになったので、そのために来たと言つて誤りではないと思います。——ベデイヴィエルさんが怖いと言つたことは、獅子王と対面することですすね？」

「はい……私はここに至つて、獅子王に会うことが恐ろしくなつてしまつた」

「……そう、ですね。あたしも正直、獅子王と対面するのは怖いです。あたしはちゃんとマスターの役目を果たせるのか。ちゃんと、マシユ

先輩のお役に立てるのか。あたし一人がドジって、何もかも台無しにしてしまわないか……」

それは、ベデイヴィエールが思ったものとはジャンルが異なる、等身大の不安だった。

「でもあたしは、あたしの気持ち以上に、あの奇蹟を大切にしたいのです」

「奇蹟——？」

リカが語ったのは、ファーストオーダーという、グランドオーダー最初の特異点に赴く直前の出来事だった。

「大きな爆発でした。瓦礫に潰されて、下半身の感覚が失くなりました。あと2分は保つけれど、その120秒間の激痛が早く終わってほしくて、お願い早くあたしの体、って泣きべそ掻いてました。痛いので、慣れるけど、苦手で。でもマシユ先輩が、あの炎の中で、あたしを助けようとしてくれました。あたしのワガママを聞いてくれて、初めて呼び捨てにしてくれました。あたしの顔をまっすぐ見て、くり返し『リカ』って——あたしだけの名前を」

だから、とりカは胸に両手を当てた。その胸にある宝物を大切に抱くように。

「あたしの命は先輩がくれたものなんです。あたしはいつか、先輩に貰った命を返したい。そのために、痛くても悲しくても戦うのです。あたしは、あたしに初めて優しくしてくれた素晴らしい人のために、こうして生きているのですから」

上げたかんばせには笑み。リカと知り合ってからの数日で見た中で、いちばん暖かな笑顔だった。

「——心からの謝罪を。私はたいへんな侮辱をしてしまった」

「そんなお話だった……でしようか？」

「私の中ではそんな話でした」

「気にしません。そもそもさっきまで知りませんでしたし。これでおしまいにしましょ。ね？」

「ありがとうございます。優しいですね、リカさんは」

リカはベデイヴィエールの言葉に目を丸くして、それから、困った

ように苦笑した。

「Interlude」